

ヴィータちゃんは男友達が少ない

白翼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「自分はヴィータ教導官の場所を聞いて。それで愛の告白をしたいと思っています」

「ふーん、告白ね。……………ふえっ!?!」 あまりにも突然のカミングアウトに、なのはは一瞬地の部分が出てきてしまう。

小さな教官ヴィータちゃんが初めての恋心にあたふたする話になっています。

◆この作品はヴィータちゃんは男友達が少ない18禁版と並行連載です。番号が飛んでいた場合は、18禁のほうを覗いてみてください。
<https://syosetu.org/novel/5616/>

◆お気に入りや評価、感想など大変励みになります！ ありがとうございます!!

◆『海鳴市視察編』完結!!まとめ本をBOOTHにて販売しております。是非是非よろしく願いますー!!

<https://hakyokul23.booth.pm/items/3811958>

◆10月2日 日間ランキング1位本当にありがとうございます!

目次

ヴィータちゃんは男友達が少ない	
告白は突然に	1
気になるあいつ	9
踏み込む勇氣	16
あいつの想い あたしの気持ち	20
二人の別れと……	32
ヴィータちゃんは男友達が少ない 4 貴方を変えた初過去話	
伸び悩み	37
コバルトブルーの女性	41
初めての嘘	46
貴方を変えたあたし	50
ヴィータちゃんは男友達が少ない 5 貴方を変える初プレゼント	
あたしのすべきこと	56
ある女の子の過去	62
返事のない恋人	67
握りこんだ想いの形	70
やっぱりあたしは……	82
ヴィータちゃんは男友達が少ない 8 私を救う 夢の中へ	
生け贄に選ばれし少女	87
俺にしかできないこと	92
夢の中へ	99
理性と本能	104
知らない秘密	112
この世界のルール	118

届いた心

125

届かぬ力

128

クリスマス・イブ

139

夢の守り人

147

交わした約束

153

果たされた想い

162

ヴィータちゃんは男友達が少ない9 眠れぬ夜と初朝ごはん

小さな拒絶

167

今度は二人で

171

ずっと一緒に

178

ヴィータちゃんは男友達が少ない11 堅すぎた絆と初結婚式

俺の前だけ あたしの前だけで

184

いつか貴方と

189

幸せの資格

194

ヴィータちゃんは男友達が少ない12 犯した罪 拭えぬ罰

深く 暗く

201

誰にも言えない

204

砕かれた心

209

次に会うときはきつと

214

十日後のあたし

219

閉められた扉

223

ただ救いたいから

227

謝りたくて

232

彼女の答え

234

彼の答え

242

弱き者

248

長き旅路 前編

254

長き旅路 中編

259

長き旅路 後編

267

その怒り その悲しみ

278

ありがとう

287

ヴィータちゃんは男友達が少ない14 T&Hの初会議

私の！

295

二人のお誘い

301

ゲンナリとゲツソリと

306

どうして俺は？

313

ヴィータちゃんはヴィータであってヴィータさんではない

317

一緒に行きましょう

323

寂しい気持ち 嬉しい気持ち

326

ヴィータちゃんは男友達が少ない15 たとえ貴方が忘れてしまつても

愛してますよ

332

何よりも正しい間違い

339

片翼の想い

345

ずっと貴方を愛してる

350

絶対に許せない

353

駆け抜ける貴方への想い

359

幸せな記憶に抱かれて

363

ヴィータちゃんは男友達が少ないF 二人で歩く 幸せな未来へ

胸に立てた新たな誓い

368

恩返しがしたくて | 372

それでも嫌だ | 376

その答えを我らに | 379

託された絆の証 | 383

二人の帰る場所 | 389

二人で歩く 幸せな未来へ | 392

番外編 シグナムさんは男友達が少ない(※問題なくここからでも読めます)

失格の証明 | 395

型遅れの相棒たち | 399

二人の日常 | 407

戦うことしか知らない私 | 414

あんだだからいいと思つた | 417

ごめん ありがとう | 424

どうしてあなたは | 431

その言葉をまだ彼女は知らない | 433

シグナムさんは男友達が少ない2 心の距離と言葉にできない想い

聞こえる声 見えぬ彼 | 437

触れる肩と二人の距離 | 441

言葉にできないその気持ちを | 448

シグナムさんは男友達が少ない3 いつも隣にいて欲しいから

大切な話 主への挨拶へ | 456

笑顔のリベンジャー | 461

起爆した二つの地雷 | 465

心を持った人形 | 470

それがどちらであろうとも

474

失うものの大きさ

479

今までは でも今は

483

俺、このデータを見終わったら伝えたいことがあるんだ(死)

489

いつも隣で

495

ヴィータちゃんは男友達が少ないEX3 過去への嫉妬

始まり

とこれから先

過去への嫉妬

500

初めても これからもずっと

507

ヴィータちゃんとシグナムさんは男友達少ない 時間+状況||恋心

?

無垢な相談

512

二人の二ヶ月と二人のお誘い

519

長年の夢 二人でしたいこと(この続きは18禁に置いてありま
す)

527

ヴィータちゃんは男友達が少ないEX4 誓う言葉 例えその日が
来ようとも

大変だったこと、辛かったこと、そして……

532

二人なら、二人だけなら

538

変わらぬ答え 見えない式

546

私が消えるその時まで

552

間違えた道の先に

561

世界で一番大切な人

569

夢の形 あの日貴方に出会えたから

(あとがきに今後の予定あ

り) | 573

ヴィータちゃんは男友達が少ない番外編 貴方がいない 一人の部屋で

前篇 | 579

ヴィータちゃんは男友達が少ないEX5 二人の半休と密着映画鑑賞

レンタル期間一ヶ月 | 583

・・・すごかった。 | 589

ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編1 新たな可能性と短すぎるスカート

ねえ、ミニスカート履いてみない? | 594

駄目です、駄目です! | 597

にや、にやにが可愛い行動だ! | 603

ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編2 噛み合わない意見と時空を超えた大出張

変わらない日常とすきま風 | 606

信用ゆえのチグハグ | 610

時空を超えて大出張 | 614

大好きな貴方の隣で | 620

その時まで貴方と一緒に | 625

ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編3 焦る気持ちと空回りしない想い

全くうちの旦那様は | 630

高町恭也 | 634

その時俺に出来ること | 637

ウイータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編4	ここは湯の町海
鳴市リターンズ	
温泉への誘い	643
二人で幸せになる場所	648
ウイータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編5	無垢なる世界
何一つ変わりのない違和感	652
本当に大切な他人	657
ずっと見てきた違う貴方	663
無垢なる世界	667
将来有望株ですから	672
ブレイブデュエル	676
たった一つの居場所	680
ウイータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編6	胸に宿るそれぞ
れの願い	
差異と可能性	683
八神堂へようこそ	688
紅き台風の目	691
彼女の本当に帰りたいかった場所	695
本気の遊び	698
御神の剣	701
ウイータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編7	雪解けの想いと
火花散る覚悟	
外世界の日常	707
信じるべき人	713
あの日のあの場所で	718

純粹なる殺意	723
きつと何も変わらないから	726
ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編8	
意味のある敗北	
最高の前座	732
強くなる時	737
ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編9	
対決	
ヴィータ	
V S ヴィータ	
二人のヴィータ	748
確かな違い	755
ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編	
最終話	
たつ	
た一つの小さな願い	
たとえ	
どこにいたとしても	761
たった一つの小さな願い (海鳴市視察編 完)	768
ボーナスステージ	
力の代償と最後の一日 (前編)	775

ヴィータちゃんは男友達が少ない
告白は突然に

ただ震えていた。——何もできずに。

ただ怖がっていた。——何もできずに。

自分はどうなってしまうのだろうか。周りの人間を見て、不安だけが募った。

誰かこの暗闇から。

僕を、救って欲しかった。

「だあー、めんどくせえなー！」

路地裏を抜けると、その少女は表通りに舞い戻る。

そこにいるのは赤い三つ編みを二つ揺らした、見た目は小学生くらいの小さな女の子。だがその外見とは裏腹に、彼女には鉄槌の騎士という二つ名がついていた。

「あれ？ ヴィータちゃんどうしてそんなところから？」

裏通りから突然現れた同僚に、驚きの表情を見せるロングサイドテールの女性。ヴィータは彼女の顔を見ると、ホッと一息つく。

「な、なのはか。はあ、はあ、驚かせるなよ」

「あはは、驚いたのはこっちのほうだよ。それにしても随分疲れてるみたいだけど、やっぱり教導のほう大変そうかな？」

心配そうに見つめるなのは。そんな彼女を安心させるために、ヴィータは呼吸を整えていく。

「別に大変なんてことはねえよ。教導する奴らはたった五人だし、それに面倒な女達はなのはに受け持ってもらってるしな」

「別に女の子だからって面倒とは限らないよ。ほら、六課時代だって、スバルやティアナ達に教えてたじゃない」

「あいつらは人一倍やる気に満ちてたから別だ。まあ努力し過ぎて一時期空回りしてるやつもいたが。……まあとにかく、何も気にせずスパルタできる男のほうがあたしの性に合ってるんだよ」

だから心配するなど、ニツと笑顔を見せるヴィータ。だがそんな彼女を見ると、なのははさらに疑問符を浮かべる。

「でもだったらどうしてそんなに疲れてたのかな？ 今回の教導メンバーはそれなりに優秀な子達だと思うし。それに何で路地裏からでてきたの？」

「そ、それはだな」

『ヴィータ教導かーん！』

ヴィータの通ってきた路地裏から響く声。それを聞くと、彼女はビクリと体を強ばらせる。

「り、理由は夜にでも話す！ とにかくあたしはあつちに逃げるから、あたしの場所を聞かれたら反対方向を言えよ！ じゃあな！」

「あつ、ちよつと待って、まだ話すこと……が……」

脱兎のごとく走り出すヴィータ。状況が飲み込めず、ぽかんと口を開けてしまうなのは、何も言えずその背中を見続けた。

そしてヴィータの背中が見えなくなると同時に、路地裏から飛び出す一人の青年。白のシャツと青いジャージを着ているということは、訓練メンバーの一人であろう。

青年はなのはの姿を確認すると、その場でビシツと敬礼をした。

「高町教導官初めまして。自分はカイズ二等空士です。今回は名のあるお二方に教導していただき、誠に感謝しています」

カイズを見て、なのはもまた敬礼していく。

黒髪の十八歳前後の青年。身長は百七十五センチほどであろうか。適度に鍛えられた体と、鋭くもありながら優しさを帯びた眼差しは、ふと懐かしい人物を思い出させる。

お兄ちゃんがもう少し愛想良くなったら、こんな感じなのかな。

地球にいる兄の事を思い出すと、ふと笑みがこぼれそうになる。だが教え子の前ということもあり、その表情が緩むことはなかった。

カイズはなのはの目を真っ直ぐ見つめると、次の言葉を放つ。

「すみません。高町教導官にお聞きしたいのですが。……ヴィータ教導官がどこにいるかご存じないでしょうか」

「……………それを聞いてどうするのか?」

カイズの口からヴィータの名前が出たこと。そして先ほど慌てていた彼女を見たからこそ、口調が少しだけキツくなる。

戦闘のレンジは違えど、自分と同等の実力を持つヴィータが嫌がらせを受けているとは思いにくい。だが嫌がらせと言うのは、何も直接的暴力とは限らないのだ。

キツと目線を強めるなのは。だがカイズはその視線を反らすことなく、さらに真剣な眼差しを向ける。

「自分はヴィータ教導官の場所を聞いて。それで愛の告白をしたいと思っています」

「ふーん、告白ね。……………ふえっ!?!」

あまりにも突然のカミングアウトに、一瞬地の部分が出てきてしまう。

「そ、それは冗談で言ってるのかな?」

「いえ、本気です。いや、実を言うと昨日からずっと告白し続けているのですが、まともに聞いてもらえなくて。それでせめてお昼でも一緒に食べて、その時にと思ったのですが。……居場所をご存じないでしょうか?」

あまりにも真面目に言葉が放たれたためだろう。「あ、あつちに行ったよ」と、回らない思考のままヴィータの向かった方向を指さすのは。その答えを聞いて、カイズは再び敬礼をしていく。

「ご指南のほどありがとうございます。それでは失礼します!」

なのはに背を向けると、その場から全力で疾走するカイズ。

なのはは先ほどのように、状況が飲み込めないでいると再びぽかんと口を開ける。そして彼の背中が見えなくなるまで、その場で立ちつくしてしまうのだった。

その日の夜。当てが割られた宿舍で二人は顔を合わせると、ヴィータは開口一番に文句を放った。

「別の方向言えって言ったはずだよな！ あの後あたしがどれだけ大変だったか分かるか？」

「あはは、ごめんごめん。あまりにもいろいろと突然すぎて、頭が回らなくなっちゃって」

両手を合わせると、ペコペコと頭を下げるなのは。彼女は部屋の冷蔵庫を開けると、カップのプリンを一つ手に取りヴィータの前に置く。

「とりあえずこれ。私が残しておいたプリンあげるから機嫌直して、ね」

「はっ。こんな食べもの一つであたしの機嫌が直ると思ってるのか？ ……まあ機嫌は直らねえけど、仕方なく受け取っておいてはやるけどな」

スプーンを手に取ると、教導中にはあまり食べるこのできない甘味だからであろう。一口ごとに笑みが深くなるヴィータを見て、なのははホッと一安心する。

「あっ、それでいろいろと聞きたいんだけど。ヴィータちゃんはその男の子、えっとカイズ君だっけ？ に、どうしてアタックかけられるの？」

カイズという名前を聞くと、ヴィータの顔にピシリとヒビが入る。「……そんなのあたしが知りてえよ。頭のネジがぶっ飛んでるとしか思えねえな」

「それってどういうことかな？」
「あー、そうだな。どっから話したらいいか。いやまあ、話してもよくわからないと思うけどな」

直進的で何でも真っ直ぐに打ち崩すヴィータが言い淀むなど、何とも珍しい。なのはは思わず姿勢を正してしまう。そんな彼女の姿を見ると、ヴィータもまたプリンを机の上に置いた。

「事の始まりは多分教導初日だ。男どもに訓練つけてる時に、何か纏わりつく様な視線を感じたんだ。まっ、正直そんなの気にもしなかつ

たけどな。それにあたしはこんな体型だ。見た目で判断するような男どもには、偶に馬鹿にするような視線を浴びることもあつたからな」

「でもそんな生徒達でも、最後にはヴィータちゃんのこと分かつてくられてたよね」

「まあな。だからまあ視線のことも特に気にしなかったんだけどよ。……今思うとそれがいけなかったのかもしれないな」

ヴィータは一度頭を搔くと、ため息交じりに言葉を放つ。

「その視線は二日目にはさらに強くなってよ。それでも無視し続けた。で、その日の訓練終了後にあの馬鹿があたしのところにやってきたんだ」

「あの馬鹿って。もしかしなくてもカイズ君のことだよな?」
「……………」

彼の名前を聞くと、押し黙ってしまうヴィータ。そして彼女はなのはから視線を外すと、言い淀むように口を開いたり閉じたりする。

「それでヴィータちゃんはカイズ君に何をされたの? もし事と次第によつては、私のほうから……」

「い、いや、別に直接何かされたわけじゃないんだ。体を触られたとか、暴言を吐かれたとかじゃなくてな。いや、そのほうがもつとやりやすかったというか、ごによごによ」

「ん? よく聞こえないよヴィータちゃん」

「えっ、えつとよ。あの馬鹿に、——されたんだ」

「えっ? もう一度言つて」

「だ、だから。あいつに好きだつて告白されたんだよつ!!」

言葉に勢いがつきすぎ、思わず両手で机を叩くヴィータ。頬を赤く染める彼女を見ると、なのはは納得したように頷いていく。

「今日会った時に愛の告白をするつて言つてたけど、やっぱりそうだったんだ」

「やっぱりつて。知つてたなら、聞き直すなよ!」

「でもカイズ君が嘘をついてた可能性もあるわけだし。それに私に話してくれるつてことは、何かしら相談することがあると思つてたか

ら。違ったかな、ヴィータちゃん?」

「そりゃそうだけだよ。だあー、もう。お前は昔からあたしに対して意地悪だな」

「うふふ、どういたしまして」

仕事一筋のメンバーが多いせいであろう。どうにも男つ気の少ない元六課メンバーにとって、こういった話しは大変貴重なものである。しかも今回白羽の矢が立ったのが、今まで男つ気が皆無であったヴィータなのだ。きつとこの場にいたのがなのはでなくとも、首を突っ込みたくなってしまうであろう。

につこりと満面の笑みを浮かべヴィータを安心させながら、心の中ではニヤニヤと口を緩めるなのは。ヴィータはそんな彼女の外見を疑いながらも、伏せ目がちになる。

「そ、それでよ。どうしたらいいか、その全然わからなくて」

「どうしたらいいって。付き合うか、付き合わないかってこと? でもそれはヴィータちゃんの想いであって、私が口を出せることじゃ——」

「いや、そうじゃなくてよ。お、男に、そ、その、告白なんてされたことがないから、どうしていいのか全然わからなくて。付き合う以前に、あいつのことなにも知らないわけだし。でもあいつ真剣そうだったから、駄目だって突っ張り返すのもいたたまれなかったというかと、とにかくこの手の話しにどう反応していいか全然わからねえんだよ!」

再び机を叩きつけると、言葉に出来ないような複雑そうな表情を見せる。ヴィータはきつと感情の整理どころか、それらの感情が何であるかもわかっていないのだろう。

なのはは人差し指を口に当てると「うーん」としばらく言葉を探す。

「やつぱりあの馬鹿を頭からかち割るべきか?」

「それじゃあ何の解決にもならないよ。えっと、そうだ。カイズ君はどうしてヴィータちゃんのことを好きになったの? 告白されたからには、何かしら理由を言われたんだよね」

その言葉を聞くと、ヴィータの顔は一瞬にして素面に戻ってしま

う。また何か地雷を踏んだと察すのは。ヴィータは落ち着いて椅子に座り直す。

「それがわからねんだ」

「分からないって。理由を聞きはぐっちゃったの？」

「そうじゃなくて。あの馬鹿があたしを、そ、その、す、好きになった理由を話してくれないんだ。言うのは好きだ愛してるっていう歯の浮く様な言葉。でもどうしてだっていうと、それは教えられませんって笑顔ではぐらかしやがるんだよ」

ヴィータの言葉が徐々に刺々しくなるのを感じると、なのはは苦笑いを浮かべる。

「あははは。確かにそれじゃあ答えようもないというか、逆に怪しくすら感じちゃうよね」

「そうなんだよ。……ただでさえあたしはそういうこと疎いのによ。そうであってもあいつは休み時間ごとにあたしを追ってくるから、どうしていいかわからないんだよ」

ヴィータは机の上のプリンを取ると、苛立つ自分を抑えるように一気にかきこんでいく。そんな彼女を見て、再び頭を悩ませるのは。しばらくすると、彼女はポンと手を叩いていく。

「うん。そういう場合にはまずゆっくりお話をしてみるといいと思うよ」

「話してみるって。だから告白ばかりで、理由は何も言ってくれないんだぞ」

「それはヴィータちゃんがカイズ君の告白から逃げてるからだよ。だから彼も告白し続けるしかないわけであって、ヴィータちゃんがじっくり話を聞いてあげれば何か話してくれるかもしれないよ」

「うーん、そういうもんかー？」

「絶対そうだって！ 小さい頃のフェイトちゃんやヴィータちゃん達のことを考えてみてよ。こっちが必死に話を聞こうとしてるのに、聞く耳すら持たなかったのに比べれば、まだ話しかけてくれる相手のほうがやりやすいよ」

「い、痛いところついてくるな。でもあの時のあたしやテストタロツサ

にはそれなりの理由があったしよ」

「だからもしかしたら、カイズ君にも好きな理由が言えないわけがあるのかもしれないってこと。それにどっちにしても教導は明日と明日で終わりだしさ。それだったら逃げ回ってるより、そっちのほうがずっと有意義だと思うよ」

「……………まあ、そうだな」

何とも歯切れの悪い言葉遣いだが、それでもヴィータは一応納得したようだ。

なのははそんな恋する少女の後ろに立つと、彼女のことをギューツと抱きしめていく。

「な、何するんだよ！」

「もー、こんなヴィータちゃんが見られるなんて思ってたなくて。でも大丈夫だからね。私はヴィータちゃんの味方だし、もしヴィータちゃんの純情を弄ぶ人だったら、うーんと頭冷やしてあげるから」

「……………おう、ありがとうよ」

「あつ、どこ行くのヴィータちゃん。まだ話は終わってないのに」

「もう充分だよ。じゃああたしはもう寝るぞー」

なのはのエールもありモヤモヤがほんの少しだけ晴れた気がしたヴィータ。それに逃げ続けるのは自分の性に合わないと気持ちを新たにすると、じやれてくるなのはの腕を抜け、ベッドに向かっていくのだった。

気になるあいつ

四日目。午前中の最終訓練は、レイヤー建造物内のターゲットの破壊とゴールまでのタイムを競うものだった。

この試験は陸戦魔導師のBクラスの試験によく似たもので、唯一違うところと言えば最終関門に遠距離狙撃型のターゲットがないことぐらいであろう。

過去にBクラスの試験に挑戦したスバルとティアナを苦しめたこのテスト。もちろん教導メンバーも悪戦苦闘していた。

「……あの馬鹿。すげえじゃねえか」

全体を見通しながらも、瞳の中は懸命にひた走るカイズを映していた。他のメンバーより、頭二つ先行している彼を見ると、ヴィータは額に手を当てる。

「あたしのことを追って、それで訓練が疎かになってくれれば一番よかったんだけどな。だけどあいつはあのメンバーのなかじゃ、一番優秀なんだよな」

いや、優秀だというよりは、優秀になったというほうが正しいだろうか。ヴィータはデバイスを手に取ると、教導メンバーのプロフィールを次々に表示していく。

「あの馬鹿はこのメンバーのなかで決して優秀なほうじゃなかった。せいぜい中の上くらいのあいつが、どうしてここまで動けるんだよ」

理由としては二つ考えられた。そのうちの一つは何かしらの理由で力を隠していたこと。だがそれは考えにくい。隠すような力なら、教導合宿などで見せつける意味がないからだ。

そうなる理由はあと一つしかない。その可能性を考えると、ヴィータの顔がカーッと赤くなっている。

「故意に力を隠してたんじゃない。だったら、何かしらの理由でいつも以上に張り切って、それがそのまま実力に繋がったってことだよな」

しかしカイズという人間をよく知らないヴィータには、その理由へ繋がる選択肢があまりにも少ない。今日は好きな夕飯が出るからか。

それともこの合宿を通して、一気に実力をつけたいからか。

——それとも。

「あ、あたしに、いいところ見せたいからか……」

口に出すと、一気に体温が上がるのがわかる。自分はいったい、何を思いあがったことを言ってるのだろう。

「で、でも、あいつがあたしを好きなことは真実なわけだし。やつぱり、そういうこと。……なのか」

チラリとカイズのほうを見ると、彼はゴール線を切る一歩手前だった。そこで、今日初めて二人の視線が交差していく

——パチンツ。

「な、あいつー!」

ゴール直前に贈られるウインクに、カツと顔が赤くなる。だがそれは恥ずかしさのためではなかった。

「ヴィータ教導かーん。どうでした、ここ最近では一番のタイムですよ」

手を振りながら、黒い前髪を揺らし走ってくるカイズ。褒めて欲しいと見えない尻尾を高速で振るが、そんな彼に対しヴィータは冷ややかな視線を向ける。

「おう、確かにタイムは言うことない。それこそ障害物の避け方。ターゲットの破壊まで、しっかりと予習復習をしたのが感じられる模範的な動きだったぞ。……だけだよ!」

手のひらに包まれたグラーフアイゼンを、ヴィータは戦闘形態にする。ハンマーの上部の棘部分を鼻先に向けられると、カイズの表情から笑みがなくなった。

「最後のウインクはなんだよ」

「え、あ、あれは、その。視線があつたので、ヴィータ教導官にアピールしようかと」

「馬っ鹿にしてるんじゃないよっ!」

力の限りでアイゼンで地面を叩きつけるヴィータ。彼女は小さな手を伸ばすと、カイズの胸倉を掴んだ。

「訓練だからって油断してるんじゃないよ! いや、訓練だからこそ全

力を注ぐべきだろう！実戦には訓練みたいに明確な終了地点なんて存在しねえ。一瞬の油断で命を落とすことだってあるんだよ!!」

「……………はい」

「勝ったと思った時が一番危ない。それを噛みしめておくことが現場での鉄則だ。いいか、これに懲りたら二度とふざけた態度で訓練に取り組むんじゃねえぞ!!」

「りよ、了解しました!」

顔は狼狽しながらも、しっかりと敬礼のポーズをとるカイズ。そんな彼の行動を見て、ヴィータはデバイスを待機モードに戻していく。「全く。だから子供は嫌なんだよ」

「あつ、うつ……………」

呆れたように背を向けるヴィータに、手を伸ばそうとするカイズ。だが自分の非をしつかりと認めているからだろう。その手を下ろすと、そのまま押し黙ってしまった。

だからこそ、ヴィータには彼がしっかりと反省していることが背中越しでも理解できた。彼女は頭を掻くと、後ろを向いたまま空に目を向ける。

「まあお前の集中力が散漫になったのは、話をしっかりと聞いてやれなかったあたしのせいでもある。…………だから昼休みぐらいなら、話し相手になつてやつてもいいぞ」

「……………えっ?ええっ!?そ、それって」

「聞き返すな。いいか、あたしはちゃんと要件は伝えたからな。だからそれまで大人しくしてろ」

ヴィータはそのまま歩き出すと、残りのメンバーに目を向ける。「い、いやったあああああああつ!!」

そんな彼女の後ろで盛大な歓喜の声をあげるカイズ。そんな彼の無邪気に喜ぶ声を聞いていると、こんなことぐらいならさっさと願いを聞いてやるんだった、毒気を抜かれたように息をつくのだった。

午前の訓練後には二時間のお昼休憩が設けられている。それはなぜか。ご飯を食べる時間を一時間確保するためだ。

なら残りの一時間は何をしているか。正解は何もしていない。ヴィータやなのはの教導を受けた生徒は、ほぼ全てが一時間は動くことができなかったからだ。

そう、こいつを除いてな。

お昼ご飯を口に運びながら、チラリとカイズの姿を見る。彼は何が嬉しいのか終始笑顔でいた。

「もしかしてお前、今まで力を隠してたのかよ」

「えっ、何のことですか？」

「トボケるな。お前等クラスがあたし達の教導を受けたら、くたくたで動けなくなるはずだ。だがお前は動けないどころか、走り回る元気すらあったじゃないか」

「いやー、正直体力的には限界を突破してるんですけどね。まあこれも愛がなせる技といえますか」

カイズは食事を終えると、その視線をヴィータに合わせる。パツチりとぶつかり合う視線に、彼女は思わず目を反らしてしまう。

な、何意識してるんだよあたしは。こんなこと、今までなかったはずなのに。

今までなかった。そんな言葉を頭の中で浮かべると、ふと自分は男友達どころか、男の知り合いすら少なかったことに今更気づかされる。

男で一番付き合いが長いと言えば、もちろんザファイラだ。だが彼は男である前に、同じ守護騎士であり、家族でもある。正直あまりにも近すぎるために、性別など気にしたことがない。

そのほかと言えば、クロノかユーノだ。しかしクロノクラスの階級の会話は主にはやてがしている。それに調べごとなどは、シヤマルやほかのメンバーに任せており、自分から進んで無限書庫に足を運ぶことすらなかった。

それに男性にここまで想いを寄せられたことなど一度もないし、そ

んなものは自分には一生縁のないものだどヴィータは思っていた。正直に言えば、お昼に誘ったことすら彼女にとつては大冒険なのだ。これ以上何かアクション起こせというほうが、無理な話であろう。外した視線を再びカイズに向ける。すると先ほどから変わることはない、彼の笑顔を目の当たりにして、体が熱くなるのを感じた。

「な、何がそんなに面白いんだよ」

「面白いというか、幸せなだけですよ」

「何でだよ？」

「憧れだったヴィータ教導官と一緒に食事が出来てるんです。それは笑顔にだってなりますよ」

「——ツ——」

不意打ち過ぎるだろこいつは。

いや、自分に興味があるなら、こういう答えが返ってくることは予測が出来たはずだ。だが未だに目の前の好意を実感できない彼女だからこそ、こんな迂闊な質問をしてしまったのだ。

全くどうしていいかわからない。いつそ何も喋らないことにより、空気が悪くなったほうがどれだけよかつただろうか。

このままでは自分は残りの一時間半、ずっと視姦し続けられる。そんな状態で保つはずがないと、ヴィータは話題を無理矢理変えた。

「それにしても随分と予習復習をしてるみたいだな。今日の訓練も、最後以外は言うことなかったしな」

「好きな人の前ですから。気合いの入り方も違いますよ」

「お、お前な！」

何一つ会話が変わらない。どんなことを言っても、結局そこにたどり着いてしまう。

頬の赤みは、その領土をどんどんと広げ、今では頭の天辺まで到達しかけていた。

「お、お前は どうして そんな恥ずかしいことをポンポン言えるんだ！わ、わかつたぞ。あたしだけじゃなくて、ほかの奴にもそういつて気を引いてるんだろう!!」

「そんなことありません。それに別に好きという言葉は恥ずかしいこ

とだと俺は思いません。一番駄目なのは、なにもいえずに終わってしまふことですしね」

「ま、まあそうだけども……」

でもお前は言い過ぎだと、心の中で叫び声をあげる。

「ああ、もう。お前の気持ちはよくわかったよ！じゃあ聞くけど、どうしてお前はあたしのことがそんなに好きなんだよ！理由もなしじゃ、理解も納得もしようがないんだよ!!」

「……それは言いません。でもヴィータ教導官に対する好意だけは本気だと。それだけは信じてほしいです」

またこれだと、ヴィータは頭を抱える。この質問は一度しているの
で、答えが返ってくることはないとはよくわかっていた。

そしてこれこそが、ヴィータが後にも先にも一歩も踏み出せない理由なのだ。

あの馬鹿の好意には、嘘偽りが無いと思いたい。だけど肝心なことがなにもわからねえんだよ。

しかしその答えはきつと聞き出すことは出来ないのだろう。それは目の前にいる、カイズの表情を見れば考えるまでもない。

だからといって、これ以上好き好き言われることに、ヴィータはもう耐えられなかった。

「あー、じゃあさっきの訓練の復習だ。確かにお前はあのメンバーの中じゃ頭二つ分くらい抜けてた。だけど、まだまだ詰められるところは、いくらでもあるぞ」

「はい。〴〵指導のほどよろしくお願いしますー！」

先ほどの真剣の表情などどこ吹く風。ニコニコと笑顔になると、カイズはヴィータと一緒にデバイスから表示されるモニターを眺めていくのだった。

「ちゃんと話は聞いてたんだな」

午後の訓練が始まると、ヴィータはぼそりとそんなことを口にする

のには意味があった。

それはカイズの動きにある。午前の訓練の復習を終えると、余った時間で二人は午後の予習をした。カイズ自身すっかり予習をこなしていたからか、元から十分に合格点の動きが出来たはずだ。だがその動きの注意点をさらに付け加えると、その動きはCクラス魔術師とは思えないほど完成されたものになっていた。

これならBクラスの試験を受けても、すぐに合格できるであろう。いや、むしろどうしてまだCクラスなのか疑問が沸くほどの成長ぶりである。

「いや、渡された資料じゃ、ありふれたCクラス魔術師なんだけどな」
スバルやティアナのようには、お手製のデバイスを持っているわけでもなく、彼の使っているのはありふれたミッド製の杖。他の訓練生同様、普通の訓練生のはずなのに。

デバイスに映し出された資料のカイズと視線が合う。

「……………どうして資料相手にドキドキしてるんだよ」

視線を訓練上に向けると、今はまさにカイズがゴール線を切るところだった。今度は油断も余裕もなく、前だけを見て訓練を終えていく。

そして一息つくことなく彼はヴィータに向かい手を振ると、そんな彼につられて彼女も手を振ってしまうのだった。

踏み込む勇氣

「はああく」

夕ご飯を終えると、ヴィータは何度目かのため息をついた。

「どうしたのヴィータちゃん。もしかしてカイズ君のことで悩んでるのかな」

「そ、そんなわけ。……………そんなわけ、ないこともないけどよ」

「その様子だと何か変化があったみたいだけど。でもまだ答えは出ないって感じかな？」

「そうだよ。っていうか、ここ数時間頭の中がおかしいんだ」

「おかしいってどんな感じに？」

「なんて言うかな。何するにしても、あいつの顔がずっと頭のなかから離れねえんだ。あれか。こういうのをノイローゼっていうのか？」

「あははは……………」

そんなことを真顔で聞くヴィータに、なのはは苦笑いする。なのはは「ほんと咳払いをすると、質問をぶつけた。

「えっと、ヴィータちゃんはカイズ君の顔がずっと頭に浮かんで、イライラしたり気持ち悪くなったりするかな？」

「別に気持ち悪いことなんてねえけどよ。…………でも変な気分つてのは違いないかもしれない」

「どんなふうに？」

「そうだな。…………あたしは今まではやての家族で、はやて守る騎士で、今はこうやってなのはと教導に勤しむようにもなった。あたしははやてやなのは、それに六課のメンバーにだけ囲まれて、これからもずっと進んでいくって思ってたんだ。はやてや、ま、まあ一応なのはとも一緒にいるのはすげえー居心地がよくて。その居心地の良さを疑う必要もなかった」

「うんうん。でもカイズ君は違うんだよね」

「ああ、そうなんだよ。あいつの気持ちは確かに居心地はいい。でもその居心地の良さに、本当に身を寄せていいのか、わからないのかもしれないな」

ああ、そうだと髪をかきあげるヴィータ。なのはに話すことにより、ようやく自身の疑問が形になったのだ。

「あたしは今ある幸せを広げるのが怖いんだな。はやてが主になってくれてあたしたちは救われた。なのはや六課のメンバーに出会って、たくさん繋がりが出た。夜天の書のプログラムのメンバーとして生まれたあたしにしてみれば、もうこれ以上ないってくらい、救われてきたんだ」

思えば自分はいつも誰かに助けられてきた。はやてに助けられ。六課の存在に救われ。教導官の道もなのはに進められたからこそ進むことが出来たのだ。

「結局自分の足で一歩前に進むのが、あたしは怖いんだな」

自身の弱さを理解すると、ヴィータの腕は突然震え出す。しかしなのははその手を優しく包み込むと、ありつたけの笑顔に向けていった。

「違うよヴィータちゃん。それは怖がってるんじゃないよ、ただ前への進み方を知らないだけなんだよ」

「進み方を、知らない？」

「誰だって初めてのことは不安と戸惑いでいっぱいだよ。でもヴィータちゃんはその感情から逃げようとしなくて、今でもしっかりと考えてるんでしょう。だったら後もう少しだよ。ヴィータちゃんの想いを、そのまま言葉にしてあげればいいんだから」

「あたしの、想い……………」

ヴィータはその場で足を止めると、ジッと考え込んでしまう。なのはそんな彼女を焦らすことなく、その場で一緒に足を止めた。

だが制止し、言葉を止めた二人の耳には容赦なく言葉が囁かれています。くのだった。

「いやー、それにしても明日で教導も終わりかー」

「こんなきついなんて思わなかったからな。もう体中生傷だらけだぜ」

廊下の曲がり角から聞こえるのは二人の話し声。その野太い声は、ヴィータの教導している、メンバーのようだ。

聞こうとは思っていなくても、聞こえるその声に二人は自然と聞き耳を立ててしまう。

「それにしても明日で終わりじゃ、もう賭のほうは駄目かなー？ いやー、カイズの奴ならやってくれると思っただけど、さすがに相手が悪かったか」

「お前は落とせるほうに賭けてたもんな。まっ、今更賭けは無効にならないから言うけどよ。この勝負は初めから落とせない方の勝ちだったんだよ」

賭け。勝負。勝ち。負け。理解出来ない、いや理解し難い単語が次々と二人の耳に届く。そしてその中心には必ず、カイズの名前が存在していた。

ガチガチとヴィータは体を震わせていく。

「何だよ、初めから落とされない方の勝ちって。カイズの奴も賢明に口説き落とそうとしてるじゃないか」

「だからお前はその姿に騙されてるんだよ。俺はあいつとの付き合いが長いから知ってるけどよ。あいつは度がつくほどの、年上好きなんだぜ」

「はっ？マジかよ」

—— やめろ。

「マジもマジだよ。中等部の頃はすぐ高等部の奴を口説き落とそうとしてたし、高等部の頃なんて女教師にアタックしまくってたんだぜ」

—— やめろ。 やめろ。

「まあパツとみ、めちやくちやアタックして見せてはいたけどさ」

—— やめろ。 やめろ。 やめろよ。

「あいつがあんな幼児体型に興味示すわけないって話なんだよ」

—— やめろ。 やめろ。 やめろよおおおおおっ!!

「ぐっ、があああああっ!!」

小さな拳を握り込むと、全力で壁を殴りつけるヴィータ。自分が今苦しんでいるのか。悲しんでいるのか。怒っているのか。憎んでいるのかもわからない。

ただ圧倒的な虚無感が心の中に渦巻くと、ヴィータは狂ったように

走り出してしまった。

「ヴィータちゃん！」

走り出した彼女の手を掴もうとするが、もう遅い。すぐに背中が見えなくなってしまうと、なのはは下唇を強く噛む。

「ふっ、うふふふ」

とにかく今は一人にしてあげよう。そう心を決めるなのは。

そして自分が今するべきことをするために、満面の笑みを作る。

そんな顔とは裏腹に、彼女は背後に死神と阿修羅を乗せると、ゆっくりと角を曲がっていくのだった。

あいつの思い　あたしの気持ち

シャワーが流れる音が室内に木霊する。

ヴィータは壁に両手をつけると、一人シャワーを浴び続けていた。

「ぐっ、ううう……」

今この瞬間、自分が何を考えているからハッキリしない。それは先ほどと同じだ。

裏切られたことに悲しんでいるのか。騙されたことに怒りが沸いているのか。

だが結局ヴィータは何も考えられていないのだろう。思考が停止している。それが彼女を表わす一番の言葉かもしれない。

「は、はは。何泣いてるんだよあたしは。別にあんな奴のこと何とも思っただけじゃやないか。何とも……」

いや、そんなことはない。胸に手を当てる。何も思っていないのなら、こんな思いをするはずがないのだ。

カイズと出会ったのは今日を含めた四日のこと。たったそれだけの間に、自分はこんなにも彼に惹かれてしまったのだ。

「でもそれは全部あいつにとってはお遊びだった。はは、そうだよな。こんなちんちくりんな体型で、いつも男勝りな女に誰かが好意を寄せはるはずねえもん」

むしろそういう関係を望むこと事態がおこがましかったのだ。たまたま闇の書の主がはやてだったために、その優しさに触れ自然と家族になることができた。

必死に自分を説得し、話を聞こうとしてくれたのはがいたからこそ、友達を作ること出来た。

そして自分は何もすることなくその輪は広がった。はやてとなのはの友人と言うだけのことで。

「これは、あたしに対しての罰なのかもな。今まで一步も踏み出すことのできなかつた臆病なあたしへの……」

だがこれが罰だというのなら、ヴィータにはもう迷うことは何一つなかった。

「別に踏み出す必要なんてないんだ。あたしは今の生活が一番幸せで。たかがプログラムがそれ以上を望むことなんてあつちやいけねえんだからな」

だからしつかりと頭を切り替えよう。ヴィータはシャワーを止めると、パシンと頬を叩く。

「どつちにしたって、あいつとは明日の訓練までの付き合いだ。だから、もういいか。……どうでも」

普段の自分なら頭をかち割りにでも行っただろう。だがそんな怒りの発散もどうでもいいほど疲れていた。

ヴィータはシャワー室のドアを開けると、その足で脱衣所に向かう。すると、そのドアは彼女の目の前で開いていった。

「へっ？あ、あれ、ヴィータ教導官？！えーつと確か夕飯後は男子が使う時間のはず、と、とと、そういうことじゃないですよね!!」

目の前に現れたのは、今ヴィータが一番会いたくなかった黒髪の青年。カイズは自身同様タオルも何も巻いていないヴィータを前にすると、弾かれるように後ろを向いていく。

だがそんな態度も今のヴィータにとっては腹立たしい行為でしかなかった。

「おい、入口の前で止まるな。シャワー浴びるならさっさと行っちゃまえよ」

「そ、そ、それはそうですね。ちよ、ちよつと、あまりの事態に頭が混乱状態です。あ、でもそれはやましい気持ちがあるわけでなく、あくまで突然のことですびつくりしたといえますか」

「わかってるよ。そんなこと言われるまでもねえ！」

本人を目の前にしたからか。先ほどまで全く皆無だった怒りが徐々にこみあげると、叫びが強くなる。

「ヴィ、ヴィータ教導官?」

「テメエがあたしの体に興味がないってことはもうわかってるんだよ。おら、どけよ。邪魔だつて言ってるだろう!!」

「え、あ、あの……」

何を怒られているのか分からない。その言葉にカイズは思わず声

を詰まらせてしまおう。

『だー、疲れた、疲れた』

『あー、早くこの汗落としまいでえぜ』

沈黙が広がったその瞬間、それをぶち壊すように男たちの声が聞こえる。

「うわ、やばい。ど、どうしましょう、他の男たちが来ちゃいますよー」

どうしたものかと、あたふたと周りを見るカイズ。だがそんな彼と違い、ヴィータは落ち着いたものだった。

「別にどうにもしねーよ。あたしはこのままですぞ」

「こ、このままですって！それじゃあ裸をあいつらに見られちゃいますよ」

「別にこんな幼児体型を見たって喜ぶ奴はいねえし、見られたって困りはしねえよ」

それよりも今はカイズと一緒にいるほうが辛い。ヴィータは無理矢理彼の横を抜けようとする。

「……待ってください」

それはとても低い声で、誰が放ったか初めはわからなかった。だがその答えの代りにカイズがヴィータの手首をガッチリと掴むと、そのまま歩き出していく。

予想外の行動に、抵抗すらできないヴィータは、転びそうになりながらもカイズを睨みつけた。

「な、何しやがるんだ。あたしは出るって言っただぞー！」

「……出てほしくないですよ」

「どうしてそれをお前が決めるんだ。あたしは見られても困らないって言ってるんだよー！」

「俺が嫌なんですよ！俺が困るんですよ！他の誰かにヴィータ教導官の体を見られるのが!!」

「——なっ」

初めて聞くカイズの怒声に、言葉すら失う。ヴィータはそのまま一番奥のシャワー室に連れ込まれると、壁に背中を叩きつけられる。

カイズは彼女を覆い隠すように壁に両手をつけると、その瞬間脱衣所のドアが開いた。

「かー、やっと汗を流せる。って、お、カイズじゃないか。どうしてそんな奥に居るんだ？」

「い、いや。何か端つこのほうが落ち着いてな」

「ん？そうだったか。まあいいけどな」

そう言っつて、男たちは真ん中辺りのシャワー室に入っていく。個別のシャワー室といっても、所詮は共同のもの。肩のあたりから股の付け根あたりまでしか隠されない敷居では、覗きこまれれば一瞬でヴィータの存在を知らせることになるだろう。

「絶対に動かないください」

「お、おう……」

ここまで来るともう抵抗する気もならなかった。カイズは蛇口を捻ると、息遣いを消すように勢いよくお湯を出していく。

何で。何でこいつは、こんなに必死になってるんだよ……。

自分の体を覆い隠すようにしながらも、体には触れないように。そして顔を赤くしながらも、出来るだけこちらを見ない様になっている姿は、何かを我慢しているようにも見えた。

ただ何を我慢する必要があるんだ？お前は年上好きで、人を賭けの対象にするような最悪なやつなんだろう？

だったらこれ以上優しくしてほしくなかった。もうこれ以上心を掻きまわして欲しくなかった。

ようやく吹っ切れることができたのに。これではまた自分は――

「おーい、そういえばヴィータ教導官様のほうはどうなんだ？」

自分の名前が呼ばれると、ビクリと体が動いてしまう。

よろめきそうになるヴィータを見ると、カイズはワザとらしく大声を出す。

「どうなんだって、何の話だ？」

「いや、あれだけ好き好き言ってるんだからそろそろ落とせたのかっ

て思ってたな。頑張ってくれよー、おりゃーお前に期待してるんだからな」

あつはつはと、盛大に笑う男。すると隣にいたもう一人の男は、くつくつくと含み笑いする。

「何だよ。何がおかしいんだ?」

「いやいや、期待してるってお前は何も知らないんだな」

「何も知らないって、何のことだ?」

「こいつな。学生の頃はすげー年上好きで有名だったんだよ。そうだよなカイズ。お前あの頃は暇さえあれば年上の尻追ってたもんな」

「なっ、くそー!そういうことは、始まる前に言ってくれよ!!」

心底悔しそうに頭を抱える男と、それをあざ笑う男。そんな二人の会話を聞いていると、先ほどまで高鳴っていた心臓が急激に弱くなるのをヴィータは感じる。

「……やっぱり、そういうことじゃねえか」

冷めた視線でカイズを睨みつける。ヴィータは彼の手を力ずくでどかすと、その間から個室から抜け出そうとする。

「でもどうしてあんな子供相手に本気になってるんだ?お前なら高町教導官のほうに行くと思っただけだな」

ヴィータの気など知らずに放たれるかる愚痴。だが彼の声は、この空気全てを打ち壊していった。

「好きだからに決まってるだろ!!」

「——えっ、あつ」

その言葉にヴィータの動きが一瞬止まる。カイズは彼女を行かせないと、その場で死角になるように後ろから強く抱きしめ、さらに告白を続けた。

「俺はヴィータ教導官のことが、好きで、好きで、好きで、好きで堪らないんだ。だから何度無視されても、避けられてもその度に告白し続けたんだ。いいか。これ以上ヴィータ教導官のことを馬鹿にしたら、絶対に許さねえからな!!」

怒り狂った獣のような眼光は、それだけで男たちの言葉を失わせる。

「そ、そんなに怒るなよ……」

「つてか、何でそんなに噛みつくんだ？」

「何か言ったか！」

「だあー、わかった、わかった。すまなかったって」

「ちつ、じゃあ俺達は先にでるからよ」

男たちも普段温厚なカイズから、こんな怒声を浴びると思っていなかったのだろう。そそくさと逃げるように、シャワー室を後にした。

そして残されたシャワー室には、ただ水の落ちる音がこだまし続ける。ヴィータはカイズに後ろから抱きしめられたまま、消えてしまいうようなほど小さく呟いていく。

「いいのよ。仲間にあんなこと言っちゃまって」

「ヴィータ教導官を馬鹿にされたんです。全く後悔してません」

相変わらず真っ直ぐに放たれる言葉に、ヴィータは頬を染め俯いてしまう。

「……なあ、どうしてお前はそんなにあたしのことが好きなんだよ」

「それは。……言えません」

「言えませんじゃねえよ！頼むから言ってくれ。理由を教えて、それであたしを好きなことが本当だって証明してくれよ。それとも賭けだから、本当のことは言えねえっていうのか！」

「……………」

ヴィータの叫びにカイズは言葉を失う。まさかここまで来て、本当は賭けだということなのだろうか。心臓と脈が忙しなく動き続ける。

そんなことはないと早く言って欲しかった。誤解だと弁明して欲しかった。そして、そんなことを想っている自分が、もうどうしようもなくカイズに惹かれているのだと、ヴィータは認めざるを得なかった。

互いの表情を窺うことはできない。だからこそ言葉を待ち続けた。

そして。カイズはようやく重い口を開いていった。

「俺、小さな頃に電車の移動中に落盤事故に巻き込まれたことがあるんです。規模としてはそこまで大きなものではなかったんですけど、

それでもトンネルは完全に塞がれて、誰もどうにもできなくて」

カイズはその時のことを思い出したのか、表情に少しの苦しきが見えた。

「幸い全ての車両が生き埋めになったので、その時点で死者はいなかったですけど。だけどお年寄りや衰弱したり、若い男なんか他人の食料を奪おうとさえしてました」

「……お前は、どうしてたんだよ」

「俺は何もできませんでした。閉じ込められたことにただ怯えて。暴れ出す大人たちに巻き込まれない様にと身を潜めてただけです。そのとき自分はなんて無力なんだと、子供ながらに絶望してました。そしてこのまま死んでしまうのかと思うと、怖くて怖くて仕方がなかったんです」

話を続けるごとに震えを増すカイズの手。ヴィータはそんな彼の手に自身の手を添えると、その震えは少しずつ弱くなっていく。

「でも今みたいに俺の震えを止めてくれた人がいました。土砂をどかすのに普通なら三日がかりだったものを、何発ものハンマーとドリルで僅か半日で救い出してくれたんです」

「ハンマーとドリルって。それって、まさか」

「はい。俺を救ってくれたのは、ヴィータ教導官なんです。その時から、俺はヴィータ教導官のことが好きになったんです」

その言葉と共にカイズの抱きしめる力は強くなる。同時に、ヴィータはその時の事件を完全に思い出していた。

「でもよ。それは恋心じゃねえよ。それはただ、自分の命を救ってくれた人に憧れただけじゃないか……」

なのはに憧れていたスバルのことを思い出せばよくわかる。自らの命を救ってくれた人物だ。想いを寄せないわけがないのだ。

だがそれは違うとカイズは首を横に振る。

「憧れだって。そう言われるのがわかってたから、ヴィータ教導官が好きなのは俺は話そうとしなかったんです。でも信じてください。俺は本当にヴィータ教導官のことが、す、好きなんです」

「でもお前は学生の頃、年上の女ばかり追ってたらしいじゃねえか。

あたしのことをずっと想ってたわりには、随分と軽い思いだったんだな」

「……それは。いえ、確かに俺は軽い男でした。学生の頃はことあれば、年上の女の人ばかり追ってて。でも、全部思い出したら妙に納得できたんです」

「全部思い出した？何の話だ」

「実は俺。高等部の二年生の時まで、あの事件のことを忘れてたんですよ。子供の俺にとってはショックな事故だったことと、単純に幼かったこと。そして親がその事件のことを思い出させないようにと、決して触れなかったの」

「でもお前は思い出した。どうしてだよ」

「それは本当に偶然だったんです。事件のことを思い出す前の俺は、さつきも言ったようにどうしよもなく年上好きで。——ある時雑誌で高町教導官の特集がやってて、それを拝見しようとした時に……その写真の片隅に映ってたヴィータ教導官を見て、全てを思い出したんです。それで、どうして自分がこんなに年上好きなのかようやく理解できたんです」

カイズは一度深呼吸をすると、呼吸を整えていく。そしてギュツと力強く拳を握ると、先ほどと同じように声を張った。

「五歳児だったときの俺を助けてくれた、自分よりも年上のお姉さん。俺はヴィータ教導官がずっと好きだったから。だから自然と年上好きになってたんです。……これで俺に話せることは全てです」

もう全て言い終えたと、腕の力を緩める。あとはヴィータの判断に任せる。そういう意味合いなのだろう。

だからこそ、彼女はすぐにカイズの腕から離れていった。

「あつ、うつ……」

「誤解するな。とりあえずこんな体勢じゃ話しくいつて思っただけだ。それによ」

正面に向き合うと、ちらつとカイズの下半身を見る。

「さ、さつきからずっと押し当てられて気になるんだよ。それに何だかどんどんと、その、お、大きくなってきてるし……」

「えっ、大きくって。って、うわ、すみません!!」

ヴィータの視線の先。天井に向かって反り上がっている自分のモ
ノを見ると、カイズは大慌てでその場にしゃがみ込む。

「こ、これは決してやましい気持ちがあったわけじゃなくて。い、いやで
もその体に魅力がないと言ってるわけじゃなくて、ヴィータ教導官の
裸と肌の感触にムラムラしたのは確かですけど、でもこうなったのは
ヴィータ教導官だからであって、その、あの——」

「わーってるよ。お前はあたしのことが大好きなんだろう」

「ヴィータ教導官、あつ——」

しゃがみ込んだカイズの前に立つと、ヴィータはその顔に自身の顔
を近づけていく。

そしてそれは本当に一瞬の出来事だった。小鳥が餌をついばむか
のようにチョンと二人の唇が触れ合うと、ヴィータは照れ臭そうに頬
を掻いた。

「ヴィ、ヴィータ教導官?」

「そ、そのよ。今までお前の告白を無視し続けて悪かったな。お前は
いつだって真面目で真っ直ぐな奴だってわかってたはずなのに、はぐ
らかすようなことしちまって。……だからよ。そのもう一度言っ
てくれないか」

「もう一度、何を」

「そりゃ決まってるだろ! いちいちあたしの口から言わせるな!!」

フンと頬を染めながらそっぽ向くヴィータ。そんな愛おしくも可
愛い彼女を見ると、カイズはヴィータの肩を掴んでいく。

「ずっと、ずっとヴィータ教導官のことが好きでした。だから俺と付
き合ってください」

「フン、まあお前がどうしてもって言うなら。そ、その、試しに付き
合ってやらないこともないぞ。でも昔みたいにもたまたま忘れるんじやな
いのか」

「俺はもう二度と、愛する人のことは忘れません」

「……………なら仕方ねえから付き合ってやるよ」

「はい、ありがとうございます」

そう言葉を交わすとどちらからともなく、ゆつくりと顔を近づけていく。

そして先ほどよりも、長く、熱いキスを二人は交わしていくのだった。

『とりあえずハッピーエンドみたいでよかったよ』

その声に、二人は弾かれるように離れていく。二人は同時に声の聞こえた脱衣所のほうに目を向けると、曇りガラス越しに揺れる長いサイドテールが映った。

「な、なのは。お前いつからそこにいたんだ！」

『うーん、いつからだろうね。まあ誤解も解けたんだから、万事おっけーってことで』

「そんなわけあるかっ！盗み聞きなんて趣味悪いぞ！」

『そんなつもりはなかったんだけどねー。ただ今日は部屋に帰るのが遅くなるって伝えようと思っただけなんだけどね』

「遅くなるって。何か事件でもあったのか」

『ううん。事件なんて仰々しいものじゃないよ。ただね、人の恋路を賭けごとにするくらい体力の有り余ってる子たちに。……少し、頭を冷やしてもらっただけだよ』

まるでその言葉に魔力がこもっているかのように、シャワー室の空気がズンと重くなる。

曇りガラス越しのおかげで、なのはの顔が見えないことはきつと幸運だったのだろう。あの冷たく、静かな怒りに満ちた目は、見せられたものが一週間は忘れないほど強力なものだからだ。

『それじゃあ私は皆の拷も、じゃなくて訓練に行ってくるねー』

「お、おー、頑張ってくれよー」

『はーはー』

奥のドアが閉まる音が聞こえると、ヴィータは苦笑いを浮かべてい

く。

まあこれで少しは訓練生の身も引き締まるだろう。とにかくこれで一件落着だとヴィータはホッと息をつく。だがそんな彼女とは違い、カイズは何のアクションも見せようとはしなかった。

「……………」

「ん、どうした。黙り込んで」

「……………」

「え、お、おいつ！わっ!!」

それは本当に一瞬。突然力を込められると、為すすべもなくヴィータはタイルに押し倒されてしまう。

そして逃がさないとばかりに覆いかぶさるカイズ。先ほど離れた体が、今までで一番密着していった。

お腹のあたりにカイズのモノをゴリゴリと押し付けられると、その感触にヴィータの顔は一瞬で真っ赤になる。

「ば、馬鹿野郎。いったい何考えてるんだよ！こ、ここはシャワー室だぞ」

「……………フウ」

「やつ、んっ！」

不意打ちとばかりに耳に息を吹きかけられると、身をよじるヴィータ。そして力が抜けたところに、さらに体重がかかっていく。

「じよ、冗談だよな。そりやお前と付き合うって言ったけど、その、いきなりすぎないか？」

困ったように声をあげるが、カイズは何も答えようとしなない。そんな彼の反応を見て、ヴィータは自身の手を力強く握りこんでいく。

「そ、それはまあ、あたしもお前のことは、その好きだけだよ。でもだな。あ、あたしはこういったこと経験ないし、出来れば海に見えるホテルとかそんなロマンチックな場所のほうが……………。あつ、らしくないって笑うなよ。あたしだって、その女の子なんだからな……………」

「……………」

「おい、何とか言えよ。ん？おーい」

何の反応も示さないカイズの背中をぽんぽんと叩いていく。同時に聞き耳を立ててみると、それは聞こえてくるのだった。

「——スウ、スウ」

「つて、え？寝てる……」

「スウ、スウ、スウ……」

規則正しく寝息を立てるカイズは、誰がどう見ても熟睡していた。だがそれも仕方がないことだろ。

普通なら訓練を終え一時間は動けないところを彼はヴィータを追うために動き続けた。そして何度も告白を流された精神的疲労。さらにヴィータにカツコイイ姿を見せるために彼は予習復習を一切欠かさなかった。

そしてつい先ほど自らの思いが相手に通じたのだ。張りつめていた様々な感情の糸が、切れるべくして切れてしまったのだ。

「……………全く、世話の焼ける彼氏ができたもんだな」

ただ全く悪い気はしなかった。どうせシヤワーを使う予定の他の男たちはなのはにしごかれてはいるはずだ。なのでしばらくの間ヴィータは彼の頭を撫で眠りにつかせていくのだった。

二人の別れと……

『ありがとうございました!!』

男女総勢十人は全てのプログラムを終え、二人の教導官に敬礼をする。

女子五人は五日前とは比べものにならないほどたくましく力強い顔つきになった。

そして男子四人は五日前とは比べものにならないほど………目が黒く濁りきっていた。

きつと相当な『訓練』をつまされたのだろう。ご愁傷様とヴァイタは苦笑いをする。

全ての挨拶を終えると、訓練生は各自自室に戻っていく。そんななか、カイズだけは宿舎の裏庭に向かう。

もちろんヴァイタと会うためだ。

「お待たせしましたヴァイタ教導官」

「……別に待ちぢゃいねえよ」

木陰に座っているヴァイタの隣に腰を下ろすカイズ。すると彼はすぐにヴァイタの異変に気づく。

「どうしたんですか。何だか元気がないみたいですけど」

「そんなことねえよ」

「でも。——えっ、泣いてるんですか」

「泣いてなんかねえよ!」

拳を降りあげると、ぽかっとカイズの肩を叩いていく。だが顔を上げたヴァイタの目には、確かに涙が流れていた。

「どうしたんですか。それとも……昨日のこと今になって嫌になりましたか」

「……逆だよ」

「逆?」

「せつかくお前の気持ちがわかって。それであたしの気持ちが分かったっていうのに。でも教導は今日でおしまいで。当分お前と会えないって思ったら、自然と出てきたんだよ」

自身の心を言葉にすると、さらに涙があふれ出す。ヴィータは両手で目頭を押さえると、涙を隠そうと必死になる。

「うっ、ひっく。何でこんなに悲しいんだよ。別にもう会えなくなるわけじゃないのに。でも、でもよ、涙が止まらねえんだ」

「……………ありがとうございます」

「ふわあ」

ヴィータは肩に手を回されると、そのまま抱き寄せられる。気恥ずかしさはもちろんあったが、ヴィータは彼の胸の中で嗚咽を漏らしていった。

「嫌なんだよ。どこにも行くな。よしわかった。もういつそあたしたちの家に来い。それなら離ればなれになることもないぞー」

これは名案だと涙目のまま叫ぶヴィータ。だがカイズは静かに首を横に振る。

「それは出来ませんよ。それじゃあ俺はいつまで経ってもヴィータ教導官に守られたままになってしまいます。俺はいつか貴方を守る男になりたいんです」

この五日間、決して変わることのなかった真つ直ぐな感情。ヴィータは涙を拭くと「ああ、そうだよな」と無理矢理笑顔を作る。

「あ、あたしの彼氏なんだから、それくらいのこととはしてもらわないと釣り合わないよな」

「はい。だから俺、頑張ります」

「そうだよな……………」

もう全てを受け入れたと、ヴィータは彼の肩にコツンと頭を預ける。そして頬をほんのり赤色に染めると、上目遣いにカイズを見つめる。

「なあ。しばらくはもう会えないかもしれないから。その、最後にお願いを聞いてくれよ」

「ヴィータ教導官のお願いなら何でもどうぞ」

「だったらよ。…………その教導官って言うのはやめてくれ。もうあたしはお前の教導官じゃないんだからさ」

そう言つて、ん、と口を突き出すヴィータ。カイズは彼女の髪に優

しく触れると、そつと抱き寄せていく。

「——はい、ヴァータさん」

二人は唇がそつと触れ合う。この時間が永遠に終わってほしくない。そんな祈りを込めて長く長く二人は口づけを交わし続けた。

「ん、んん。ぷはっ」

やがてどちらからともなく唇を離す。だがこれだけでは足りない。二人は見つめ合うと、再び顔を近づけていく。

「あ、あのー。もうそろそろいいかな?」

「なっ、はあっ!」

恍惚の表情が一瞬にして素に戻る。この声に聞き間違いなどありえない。ヴァータはその姿を確認すると、同僚に怒鳴りつけていった。

「なのはっ!またこそそこそと見てやがったのか!!」

「いやー、怒らせないように物陰から見ただけど、まだまだ長くなりそうだから、そろそろいいかなーって思っ」

「そろそろいいって、何がだよ。何かあたしに用でもあつたのか」

「ううん、用があるのはヴァータちゃんの方じゃなくてね」

なのはは人差し指を立てると、真っ直ぐにカイズを指さす。

「お、俺ですか」

「うん、そうだよ。今回男女を通して一番の成績を収めたカイズ君に一つお誘いがあります」

「は、はあ……………」

「いったい何の話だろうかと、驚くよりも呆けてしまうカイズ。なのははゆつくりと歩いてくると、レイジングハートに一つの資料を表示される。

「今回の訓練はね。短期間で鍛え上げるっていうのもあつただけど、もう一つ目的があつたんだ」

「目的って何だよなのは。あたしはなににも聞いてねえぞ」

「それはそうだよ。私は何回か話そうとしたよ。でもヴァータちゃん、ずっとカイズ君に追われているか、カイズ君のこと考えてるかで、話聞いてくれなかつたんだもの」

「うっ、そういえば何か言おうとしてたような」

思えばカイズから逃げているときも、部屋で話している時ものは何かを伝えようとしていた。だが結局はなののは言うとおりのヴィータはそこに回す思考を残していなかったのだ。

なのははにっこりと笑顔を作ると、再びカイズに話しかける。

「その目的がね。教導メンバーの増強のための人為確保。並びに候補生の強化っていうのが狙いなんだ」

「えっ、それってつまり……」

「簡単に言えば引き抜きかな。もしカイズ君がよければ、私たちの元で戦技教導を学んでみないっていうことだよ」

「そ、それじゃあ」

いきなり舞い降りた幸運に、思わず二人は目を合わせる。

「あつ、もちろん強制じゃなくて、カイズ君がよければ——」

「や、やります。やらせてください!!」

「うん。君ならそういつてくれると思ったよ」

なのはは笑顔のままレイジングハートを操作すると、液晶を閉じていく。

「詳しい話はまた後日連絡するね。それじゃあこれ以上二人の邪魔をしちゃ悪いし、私は先に帰ってるねー」

じゃあねーと手を振ると、なのははそのまま裏庭を後にする。カイズはあまりの嬉しさに体を震わせると、そのままヴィータを抱きしめていく。

「やった、やった、やりましたよ!これで俺、ヴィータさんと離れなくてすむんです!」

「お、落ち着けよ。何だよ、さっきまで悟ったようなこと言ってたくせによ」

「それは二人して悲しんでてもしょうがないと思っただからですよ!でも嬉しいことなら二人して喜んでもいいでしょう!!」

ヴィータを抱き上げるとその場で何度も何度も回転する。子供のようにはしゃぎ回るカイズの姿を見て、ヴィータはやれやれと微笑した。やはりなんだかんだいっても、彼は年下で、自分は彼にとってお

姉さんなのだと改めて認識していった。

「まっ、でも確かに落ち着いても損だよな」

自分だってカイズと同じ気持ちなのだ。ヴィータは彼と同じようにこみ上げる歓喜を表情に表す。

そしてはしやぐカイズに抱きしめられたヴィータもまた彼の体を強く抱きしめていく。

快晴の空の下。こうして青年の幼少期からの想いは遂げられた。

そして前に進む勇気の持てなかった少女は、ようやくその一歩を踏み出すことが出来たのだった。

f i n

ヴィータちゃんは男友達が少ない 4 貴方を変えた 初過去話 伸び悩み

一瞬。赤い残像がその場を走り抜ける。

きつと一般人にはその姿を確認することはできないだろう。だがそこにいた男は、彼女の姿をしつかりと確認すると、デバイスを握り直す。

だが彼がこの程度のスピードについてこれることは先刻承知だ。

なにより、この二つの赤いおさげの少女の専売特許は速度ではない。赤いゴスロリふうのバリアジャケットを翻すと、ヴィータはニヤリと口を歪める。

「あたしがビルの角に入るのはしつかり見たよな。だからこそ、お前はそこから動けねえ」

だがそれは当たり前だ。鉄槌の騎士と呼ばれた彼女に接近戦を挑むということは必死を意味するのだから。

「でもそれじゃあ五十点しかやれねえな！」

ヴィータがパチンと指を鳴らすと、それに反応し先ほど仕掛けておいた二つの球体が起動する。

それらは男の背後に向かい、勢いよく突撃を仕掛けた。

「——いつの間に、ぐっ！」

男は背後の魔力を感知すると、すぐにフィールドを展開しそれらを受け止める。元々魔力を込めただけの球体二個だ。今の彼に止められない道理はない。

「だが狙い通りだ。今の攻撃はダメージを与えるもんじゃなくて、一瞬でも動きを封じるものなんだからな」

ヴィータの狙いは、初めから攻撃を受けさせること。それを確認すると、彼女はグラーフアイゼンを力強く振りかぶる。

「このパターン。くるー！」

だが男も読み負けてはいない。そちらから向かってくるならと、デ

バイスを構え短距離砲撃の準備に入る。

狙いはヴィータがビルの角から姿を現した時。そのタイミングを違えたら、自分は負けるであろう。

そう。そう男が思っているからこそ、彼は虚を突かれたのだ。

「教科書通りだ。だが甘いんだよ!!」

ヴィータは叱咤の叫びとともに、目の前の壁を叩き砕く。

——ドガゴツ!!

目の前のビルにヒビが入る。その次の瞬間、それらは破碎され瓦礫となると、雪崩のように男に襲いかかった。

「ぐっ、くそー」

この瓦礫は防壁ではどうにもできない。男は致命傷ラインにある瓦礫に向かい、短距離砲を撃ち放つ。

短時間でチャージされた細長い魔力砲は、狙い通り瓦礫を破壊する。だが残りの瓦礫は彼の足下を傷つけ、見当はずれなものは、男の頭上を越えていく。

足下の痛みに思わず目を閉じそうになる。

「————ッ！まだまだ！……ここで目を離したら」

痛みに耐えながら、決して見失わないとビルの中を覗く。だがそこにはすでに目標の人物がいない。

「もうおせえよー」

「なっ、上ー」

一際大きな瓦礫の上。その陰に隠れていたヴィータは瓦礫に両足を添えると、バネをつけ勢いよく飛び出す。

「まだー」

男はデバイスを構え直すと、すぐにフィールドを展開する。

「あめえ!!」

だがハンマーの進撃を止められたのは、ほんの一瞬だけだ。ハンマーは魔力の火花を散らすと、フィールドを粉々に砕く。

「ぶちぬけええええっ!!」

相手の計算ごと全てを打ち抜く鉄槌の一撃。それは彼の頭部めが

け一気に振り降ろされた。

『勝負あり。演習モードを終了します』

——スチャ。

ヴィータはその音声が流れるのを聞くと、頭部寸前まで迫ったハンマーを止める。

それと同時にあたりのビルは姿を消し、真っ白でなにも存在しない元の部屋の姿に戻った。

男はストレージデバイスを床に置くと、両手をあげる。

「参りましたヴィータさん。まさかここまで手がでないとは。あいててて」

「ほら、しっかりしろよカイズ。とりあえずそれははずしておけよ」

「あ、はい。わかりました」

ヴィータに指示され、カイズは両手足につけたリストバンドを外す。

「しかしこれってすごい機械ですね。後遺症を残さず、本当の痛みを伝える機械なんて。確かインターミルドとかで使われてるものでしたっけ？」

「そんなことどうでもいいんだよ。それよりなんだ今の戦いは。言っただよな。ベルカ式を相手にするときには、とにかく近づかせないこと。距離をとって、弾幕張って、かち合う前にぶっ倒せってよ」

「そ、それはそうなんですけど。……まさか瓦礫に乗じて来るなんて思わなくて」

「お前の動きは教科書通りだからな。ちよつと揺さぶれば、油断が生まれるって思ってたんだよ。ほら、とりあえず立ち上がれよな」

「あ、はい。……ありがとうございます」

ヴィータが手を伸ばすと、カイズはその手を握る。カイズはその場から立ち上がると、申し訳なきように頭を掻いた。

「す、すみません。お手数かけちゃって」

「そう思うならもつと臨機応変になれるように頑張れよな。さつきも言っただけど、カイズは教科書通りというか、基本に忠実すぎるんだよ。そんなんで、二週間後の実技試験大丈夫なのか?」

「……………面目ありません」

見るからに落ち込んでしまうと、ヴィータはそれ以上言葉をかけられなくなる。

彼女はデバイスを待機モードにすると、バリアジャケットから、白と青のジャージに服装を戻す。

「ほら、落ち込んでる暇なんてねえぞ。とにかく試験までは時間みつけて稽古つけてやるから、なっ」

「は、はい……………」

「だああああ、もう!とにかく昼だ、昼。食堂行くぞ」

「いえ、俺はもう少し練習をして」

「休むときは休めって言うてるんだよ!そうでなくても、仕事上がりに毎日練習してるんだからよ。…………このままじゃ体壊しちゃうぞ」

「……………はい。わかりました」

カイズは心にしこりを残しながらも、デバイスを待機モードにする。そして彼もジャージに服装を戻した。

「よし、それじゃあシャワー浴びたらいつもの窓際の席で集合だからな。…………おい、聞いてるのかよ?」

ヴィータはカイズをぐっと見上げると、彼はとっさに笑顔を作る。

「あっ、はい。ヴィータさんとの食事、楽しみにしてますね」

無理をしているのは明らかだ。それがわかっている。いや、わかっているからこそ、何も声をかけることはなかった。

「…………それじゃあたしは先に行ってるぞ」

「……………はい」

上の空のカイズを訓練室に残し、ヴィータはシャワー室に向かうのだった。

コバルトブルーの女性

「やっぱりまだ来てねえか」

食堂の窓際の二人掛けの席。ヴィータはトレイを置くと、ため息をついた。

「二週間前なら、あいつがあたしを待たせることなんて絶対なかったんだけどな」

だがもちろんそのことを責めたりなどはしない。今のカイズの精神状況を考えればなおのことだ。

「仮教導試験。……うまくいけばいいんだけどな」

仮教導試験。それは教導資格を取るために、必ず乗り越えなければいけない講習中間ほどにある試験のことだ。この試験に受からなければ、教導実習に行くこともできず教導官など夢のまた夢である。

「合格率三十パーセント。そこまで狭き門ってわけじゃねえけど。それでも三人に一人受かるか受からないか。……学科はほぼ問題ねえ。カイズは勤勉だし、満点合格だって現実味がある。……だけど」

先ほどの模擬戦を思い出すと、小さくため息をつく。

今のヴィータの悩みは、同時にカイズが抱えるものでもあった。

カイズの弱点。それは勤勉ではあるが、動きが型どおりであるということ。まだ魔導師ランクが低いうちなら、それでもまかり通ることはできる。だがカイズはなまじ優秀であったがゆえに、その基本だけでは許されないとそろそろもうきてしまったのだ。

その弱点はきつと試験官もすぐに気づくだろう。

ヴィータはそこまで考えると、『ガアアア!』と髪をかき乱す。

「でもそれだけじゃねえ。今のあいつはミッド式でいくか、ベルカ式でいくか。そんな基本的なところで悩んでるんだ」

これは彼の魔導師ランクで考えれば致命的なことだ。

カイズは初めこそミッド式を使っていた。だがここ最近成長が著しく止まってしまっていた。

そしたらとベルカ式のデバイスを使ってみたが、根本は変わらなかった。カイズは基本的に動けるため、ミッド式もベルカ式もある程

度使いこなすことができる。

だが裏返せばそれはどちらも使いこなせていないということにもなるのだ。

どちらもある程度使いこなせる。ここ最近カイズの模擬戦につきあっているヴィータも、その言葉が偽りでないことはひしひしと感じていた。

ヴィータは頭を抱えると、おでこを机にぺったりとつけた。

「うー、何かちよつとした方向性が見つかれば一気に伸びると思うんだけど。でもミッド式かベルカ式か。どっちがあいつにあつてるんだよー」

うーん、うーんと頭を悩ませる。

——カチャン。

そんなヴィータの耳に、食器が置かれる音が聞こえる。彼女はピタリと動きを止めると、ゆっくりと顔を上げた。

「おつ、やつとききたのか。カ、え？」

目の前の人物を見ると、頭に疑問符を浮かべる。

「あ、す、すまねえ。その席には先約があるんだけどよ」

いや、先約があるどうこうではなく、席ならいくらでも空いているはずだが。ヴィータは周りを見渡すと、半周して目の前の女性を見る。

その女性は二十代中頃であろうか。コバルトブルーの長髪が綺麗になびいている。白衣を着ていることから、医療関係の人間かと思うが、この施設で彼女を見た記憶がどうにもない。

一度見たら忘れられない。それほど彼女の容姿は美しいものだった。

女性はコーヒーを一口飲むと、ヴィータににこりと微笑む。

「ええ、先約があることは知ってます。ですから、少しだけです」

「お、おお……？」

彼女は向かいの席から動くことなく、体を動かすたびにその大きな胸を揺らす。短いタイトスーツから伸びる足を組み直すと、周りの男が息を飲む音が聞こえるほどだ。

「え、えつと。あたしとあんた。どこかであつてたっけ?」

「いえ、今日が初対面で間違いないですよ。まあ私のほうは貴方のことはかなり前から知っていますけどね。あつ、私の名前はサクヤ・シンドウつて言います。お見知り置きを」

サクヤはコーヒーカップに指をかけると、再びコーヒーを飲む。その一挙動、一挙動は大人の余裕があり、ジャージ姿でいるヴィータは、どこか居心地の悪い気分になった。

そんなヴィータを追いつめるが如く。サクヤは彼女を観察するよ
うな視線を投げかけた。

「お、おい。何かあたしに用があるのか?」

「いえいえ。今日はただ下見に来ただけですから」

「下見つてなんだよ?」

「それはですね。——あつ、どうやら来たみたいですね」

「来たつて?」

『ヴィータさーん。どうもお待たせしましたー』

食堂に響きわたる恥ずかしい叫び声。カイズは食器を持ちながら、二人に近づいてきた。

「今日のお昼は駿を担いでカツカレーにしました。カツを食べて。——

——えっ!!」

カイズは目の前の女性を見ると表情が固まる。そんな彼を見て、サクヤはひらひらと手を振った。

「やつ、カイズ君久しぶり」

「カイズ君つて。えつ、な、何でサクヤがここにいるんだよ!」

「それは仕事で来たからに決まってるだろ。私の就職した製薬会社は多くのコネクションを持つてる。それは君も昔調べたはずだが」

「そ、そりやそうだけど」

サクヤがいたずらっぽく顔をほころばせると、カイズは気恥ずかしそうに頬を掻く。

——チクリ。

何だ。いま何かが刺さったような。

二人のやりとりを見てみると、ヴィータは胸に小さな痛みを覚える。

だがそんな痛みよりも、ヴィータにはショックなことがあった。いまカイズのやつ、シンドウさんのことを下の名前で呼んでたよな。……しかも呼び捨てで。

自分のことは年上だからこそ、ヴィータ『さん』なのだと思っていた。だがカイズは自身より年上の女性に対して、呼び捨てをしたのだ。

——ズキン。ズキン。

なんだ。なんか変だ。……胸がズキズキする。

この胸の痛みは何なのか。彼女は助けを求めるようにカイズを見る。だがカイズはサクヤに目を奪われており、ヴィータの様子に気づくことはなかった。

「しかし憧れのヴィータ教導官と恋仲になったんだな」

「え、ああ、そうだけど……」

「ということは、もうやったのか？」

「お、おいサクヤ!!」

カイズは食器を机に置くと、サクヤに迫る。

「おっと、その反応だとまだなのか。しかし変な感じだな。学生ころのお前といたら、付き合った次の日にはやらせるやらせて口うるさかったはずなのに」

「あ、あの頃のこととはどうだったいいだろ。と、とにかくいまは帰れよ。それとヴィータさんに変なこと吹き込んでないだろうな」

「ああ、今のところはな。——さて、それじゃあこれ以上邪険にされる前に戻るとしようかな。じゃあまたなカイズ君」

「……ああ、またなサクヤ」

大人の余裕の見えるサクヤと対照的に、カイズは口を尖らせると子供っぽく彼女を追い払う。

そんな二人のやりとりを見て、ヴィータはぎゅっと胸元を握りしめた。

「まったく。あ、邪魔者も行ったことですし、さっさとお昼にしましょうかヴィータさん」

ヴィータ『さん』。その言葉が彼女の胸に深く突き刺さる。

「シンドウさんとはどういった関係なんだよ」

「い、いや、大した関係じゃありませんよ。ささ、早くお昼にしちやいましょう」

「……………おう」

流したということとは、追求するなということなのだろう。ヴィータはこれ以上踏み込むことができません。

いや、踏み込むことを恐れサクヤの話に触れないようにしてしまっ

初めての嘘

ヴィータは教導が。カイズは教導の授業を終えるといつもの待ち合わせの場所に集合する。

ヴィータは大きく深呼吸をし、気持ちを落ち着かせると普段通りの表情を作った。

「今日もまた訓練するんだろ？ だったらまたあたしが手伝えるところは手伝うぞ。それにその後」

カイズのうちで夕飯を一緒に食べようぜ。

この二週間可能な限りずっと続いたやりとり。だが今日に限ってカイズの返答は違った。

「い、いえ。今日はちよつと、一人で頑張ってみようと思ひまして。えっと、今日は俺のことは気にしないで帰ってもらって大丈夫です」
「えっ、あつ、そ、そうか……………」

—— チクリ。

再び小さな針がヴィータの胸に突き刺さる。

だがカイズも二週間後の試験に向けて見直したいことはあるはずだ。ここで自分が上から話すよりも、一度自分を見つめ直したいのだろう。

そう自分の中で勝手な回答を導き出すと、ヴィータはぎこちないながらも笑顔を見せた。

「そ、それじゃあ仕方ないな。あんまり無茶して体壊すなよ」

「は、はい……………」

ヴィータと同様にカイズの言葉も歯切れが悪い。カイズは何を急いでいるのか、ペコペコと頭を下げるとすぐに廊下の先に行ってしまうのだった。

ヴィータは普段着の青のジャケットと白いミニスカートに着替え

ると施設の扉を潜る。

久しぶりの一人での帰宅。そんなこと今まで何度もしてきたはずなのに、今日に限ってそれはとても心細かった。

「ここ最近ずっとカイズの演習に付き合ってたからな。こんな早く帰ったら、はやてになんか言われそうだな」

そんないらぬ心配を口にし、視線を上げる。すると、三十メートル先に、見覚えのあるコバルトブルーが目映った。

「ん、あれは……」

その特徴的な容姿は一度見れば忘れることはない。サクヤは仕事を終えたのか、すでに白衣は脱いでおり、赤のジャケットと白のタイトスカートに着替えていた。

ピンク色の口紅が印象的であり、彼女の大人らしさをさらに引き立てている。

「そういえば、カイズの家にあったエッチな本の女ってあんな感じの大人だったよな。なんていうか、気合い入ってるよな」

自分とは違い、ただ帰宅するにしては明らかにフルメイクすぎる。まるでこの後デートにでも行くような装いだった。

「……………デート。シンドウさんが、誰と？」

ズキ、ズキ、ズキ。

あるはずがない。ありえるはずがない。一瞬頭に浮かんだ光景をヴィータは必死に頭から取り払った。

だが食堂で二人はこう話していたのだ。

『じゃあまたな。カイズ君』

『ああ、またな。サクヤ』

また？またとはいったいつのことだろうか。

さよならでは味気ないから口にしただけか。それとも同窓会の予定でもあるのだろうか。

それとも。それとも……。

「まさか。だよ、な……………」

だが一度考えてしまった妄想を振り払うことはできない。ヴィータはサクヤに悪いと思いつつも、彼女の後をつけるのだった。

まだ夕方くらいではあるが、この界限は随分と活気づいていた。

食事や飲み屋が多く連なるこの場所で、大勢の大人に紛れながら頭二つ小さなヴィータは必死にサクヤの背中を追う。

「あたし、なにしてるんだろうな。……そんなことあるはずなのに」
そう自分に言い聞かせながらも、ヴィータは歩みを止めない。そうやって移動し十五分ほど時間が経った。

「ん、止まったみたいだな」

サクヤが足を止めたのを見ると、ヴィータは路地角に身を潜める。そして止まった先の店に目を向けた。

「高級洋食料理店か。さすが大人の女は大人な店に行くってことか」

だがその場で待っているということは、きつと待ち合わせなのだろう。こんな高そうな店に、いったい誰と行くのだろうか。

「そういうえば。カイズがお金を貯めてるから、ここ最近外食なんて行っていないな……」

そんなことを思いヴィータはしばらくの間サクヤを見続ける。

初めは心臓をバクバクと鳴らしながら。そして貧乏ゆすりをしながらサクヤを眺めていた。

だが十分、二十分と経つても彼女の待ち人は来る気配がなかった。

「もうすぐ三十分か。……もうさすがにいいかな」

あと一分。それで帰ろうと思ったその矢先だ。

聞きなれた声がヴィータの耳に届いた。

「はっはっは、ごめんサクヤ。ここらへんの店って久しぶりすぎて、ぜんぜん覚えてなくて」

「でも走ってきてくれたんだろ。それにまだ待ち合わせまで一分ほど時間がある。遅刻しないのはさすがだな、カイズ君」

——ドクンツッ!

一際大きく心臓が高鳴る。

目の前の二人の姿が。二人の会話が。二人の笑顔が。

ヴィータの心の中にぽっかりと穴をあけていった。

「何でだよ。……だってカイズのやつは、今日も居残るって言ったよな?」

なら、いまサクヤの目の前にいる男性は誰だ? そんなこと問いかけるだけ馬鹿けている。

見間違えすら許されない。

だって彼は、ヴィータの恋人なのだから。

「えっ、おっ、おい……………」

どうしてここにいるんだ。訓練はどうしたんだ。そんなことで今度の試験は大丈夫なのかよ。

様々な言葉が頭をよぎる。だがそれらは建前の言葉でしかない。

ヴィータは考えることなく、嘆くように本心を口にする。

「何で。何でシンドウさんと会ってるんだよ。……何で、そんなに笑顔で話しかけてるんだよ」

目の前のカイズの表情はここ最近ずっと見ていなかったもの。安心感と心に余裕がる本心からの笑顔だ。

それらがここ最近ないのは、試験が近いから仕方ないと思っていた。

思っていたからこそ、ヴィータのショックは大きかった。

——ズキ、ズキ、ズキ、ズキ。

「……………いてえ。何で、胸が、胸がいてえんだよ」

胸元を押さえるヴィータなど露知らず。二人はその場から歩きだそうとする。

「——えいっ」

サクヤは子供っぽい笑顔を見せると、カイズの腕に抱きつく。

カイズはそんなサクヤに困ったような顔をしながらも、引きはがすことはなく気恥ずかしそうに歩いていった。

そんな彼を最後まで見続けることができず。

ヴィータはその場に膝から崩れ落ちてしまうのだった。

貴方を変えたあたし

昨日はどうやって家まで帰ったか覚えていない。ただ気がついたら自分のベッドで寝て、そして起きたことだけは覚えている。

ヴィータは午前中の仕事を終えると、まっすぐ食堂に向かう。だがそこにカイズの姿はない。彼は今日課外授業があり、施設にいないのだから当然だ。

食欲のないヴィータは頼んだコーヒーを持ち、いつもの指定席に座る。

「結局、昨日はメールも電話もでなかったな。……いつもなら会えない日は、必ず電話してくるのに」

いや、その答えはわかりきっている。だがもしかしたら間違えという可能性も少なからずあるはずだ。

だがヴィータはその答えを聞くのが怖かったのだ。もしカイズから、思いもしない真実を聞かされたら。

この胸の痛みに殺されてしまう気がしたから。

「ごう、いいでしょうか？」

「えっ、あんた、シンドウさんか」

「見ての通りですけど。しばらくはこの施設に来ると思うので、顔を合わせる機会は多くなると思いますよ」

「……………」

いま二番目に会いたくなく。それでいて全ての真実を知っている彼女が目の前にいる。

ヴィータは昨日のことを聞き出そうと、口を動かす。だが、口をパクパクとするだけで一向に言葉はでてこなかった。

「どうしたんですかヴィータさん？」

「え、いや。……えっと、カイズの奴なら今日はいないぞ」

「ええ、知ってます。今日の朝彼から聞きましたから」

————ドクンッ！

どうして、なぜ、彼女が朝にカイズと会っているのか。いや、もしかしたら夜からずっと彼女たちは一緒にいたのではないだろうか。

多くの不安がヴィータの心をぐるぐるとかき乱す。サクヤはそんなヴィータを見ると、クスリと笑みを浮かべた。

「だけどヴィータさんって、本当に噂通りの人なんですね」

「……どんな噂だよ」

「見た目は少女みたいなのに、教導官の中では一目を置かれる存在。デスクワークもしつかりこなし、厳しいながらも生徒の人望は厚い。でもカイズ君にとっては、そんなこと関係なかったみたいですね」

「……何が言いたいんだ」

「ヴィータさんはカイズ君の命の恩人なんですってね。だから彼は貴方に憧れた」

「——ッ！確かに初めは憧れだったかもしれないねえさ。だがそんなことも全部ひつくるめてあいつはあたしのことを好きだって言ってくれたんだ。それを他人にとやかく言われる筋合いはねえよ！」

コップを力強く叩きつけると、サクヤを睨みつける。だがサクヤは怯む様子を一切見せずヴィータ見下した。

「他人には関係ないですか。ええ、確かに他人だったら人の恋路をとやかくいう権利はないでしょうね。——でももしそれが元恋人だったら、貴方はどう答えますか？」

「もと、恋人」

カイズの元恋人。いや、二人の雰囲気を見ていればすぐに考えつくことだ。

自分の前に恋人がいた。そのことに少しばかりショックを覚える。

だがあくまで目の前の女性は『元』恋人なのだ。

なら、『現』恋人のヴィータが遠慮をする必要はないはずだ。

「それで、その元恋人さんがあたしに何かようか。まさか彼氏を奪われたから復讐に来たとか言わないよな」

「そんなつもりはもちろんありませんよ。いくら付き合っていたとはいえ、所詮学生のおままごとみたいな恋愛でしたし。まあ、いきなり『俺は本当に好きな人を見つけたんだ』って振られたときはある程度ショックでしたけどね」

「あいつ、そんなこと言ってたのか」

自分と出会う前からそこまでカイズは思っていてくれた。それがわかると、ヴィータの心の中がほんの少し温かくなる。

だがサクヤの顔はその瞬間に険しいものとなる。それはここからの話が本番だと伝えていた。

「確かにカイズ君にとって学生時代の恋愛はおままごとだったかもしれない。……ですが、彼が学生時代から持っていた夢は本物だったと思います」

「夢？夢ってなんのことだ」

「やはり聞いてませんか。まあそうですね。貴方の存在があったからこそ、彼は自分の夢を捨ててしまったんですから」

「なっ！」

そんな話聞いたことがない。ヴィータの表情を見て、それが真実だとわかったのだろう。サクヤは呆れたような顔をして、話を続ける。

「知らないようだから教えますけど。カイズ君、貴方のことを思い出す前は、ずっと医者になることを目指してたんですよ」

「い、医者!?何でそんな夢を」

「カイズ君は電車の生き埋め事故のことをずっと忘れていました。でも心のどこかで覚えていたのかもしれないですね。——苦しんでいる人を助けたい。非力な自分が人を助けるにはどうしたらいいか。その答えが彼にとって医者になることでした」

サクヤはスツと目を閉じると、その頃を懐かしむような顔をする。

「カイズ君は年上好きで本当にどうしよもない男の子でした。でもいろんな女の子に声をかけつつも、やっぱり一番に考えていたのは医者になることだった。だからこそそんな懸命な彼に惹かれる女性徒はいっぱいいいたし、逆にどう頑張っても彼の夢に自分は勝てないと離れてく女性もたくさんいました。学生時代最後に付き合っていた私も、彼の夢に押されて気がついたら大手製薬会社で働くほどになりましたしね。……でもそんな他人すら動かしてしまうほどの熱意と想いはある日を境に壊れました。ここまで話せばわかりますよね」

「……………あたしのことを思い出したから」

「ええ、そうです。ずっと忘れていた貴方のことをたまたま思い出してしまったために、彼はいとも簡単に自身の夢を捨ててしまったんです。彼は素行は悪かったけど、勤勉で成績もよかったです。きっと医療系の学校に進んでいれば、今頃多くの人を救う手助けをしていたと思います。——— だけど貴方のことを思い出してから、カイズ君は自分には向かないとわかっていながら、急に体や魔力を鍛え始めました。そして寝る間も惜しんで、倒れるまで努力し続けて。それでギリギリ補欠で管理局の試験に受かることができたんです」

サクヤはコーヒーを口に運ぶと、先ほどのヴィータのように机に叩きつける。ヴィータはその音と彼女の顔を見ると、ビクリと体が震えてしまった。

「正直私は貴方が憎いです。命の恩人というだけで、貴方はカイズ君のそれまでの全てを奪い去った。それに聞くところによると、いま彼は伸び悩んでいるみたいですね。でもそれはそうですよ。だって彼は元々体を酷使用するタイプの人間ではないんですからね！」

「そ、それは……………」

確かにカイズは学科のほうは完璧だ。そして今の話を聞いたからこそ、彼の伸び悩みも納得できる。

カイズにとってミッド式、ベルカ式ということは大きく関係していないのだ。

だって彼は元々戦うべき人間ではないのだから。

「あ、あたし、あたしは……………」

何かを言わなければいけない。そんなはずはないと。あたしが彼の全てを奪ったわけないと、そう叫ばなければいけない。

……………いけないはずなのに。

ヴィータは何も言えず、悔しさのあまり拳を握りしめることしかできなかつた。そんな彼女を見て、サクヤはふんと鼻を鳴らした。

「まあ私としては教導官の試験なんて落ち続けて、さっさとこっちの世界に戻ってきて欲しいんですけどね。——— あっ、それではそろ

そろ会議の時間ですので。また機会があったらお会いしましょうね。ヴィータさん」

サクヤはコーヒークップを机に置くと、席から立ち上がりその場から立ち去る。

ヴィータはその姿を見届けることなく、下唇を噛みしめることしかできなかった。

「あたし、あたしが。……あたしがカイズの全てを奪っちまったっていうのかよ」

たかが命の恩人という理由だけで、彼の将来を奪い去ってしまった。

もしあの時自分と出会わなければ、カイズはもつと自分にあつたしつかりとした将来を歩めたかもしれない。

そしてもつと多くのものを救えたかもしれないのだ。

「う、ううう。うう………」

ヴィータは感情を抑えつけられなくなると、自然と涙をこぼしてしまふ。

一滴、二滴。小さな滴が落ちるのを感じると、もう彼女は涙を止めることができなかつた。

——ブー、ブー、ブー。

その瞬間。マナーモードにしてあるデバイスが震え出す。ヴィータはそれを取り出すと、そこには『カイズ』の名前が表示されていた。

「あ、ああ、ああ……」

彼の声が聞きたい。彼に慰めて欲しい。彼に否定して欲しい。

カイズに対する想いがどんどんとこみ上げる。だがヴィータはその着信を取ることができなかつた。

「……あいつ自身が選んだ道なんだ。あたしが負い目を感じる必要なんて本当はないはずなんだ」

だからこそカイズはヴィータの悩みなど笑い飛ばしてくれるだろう。

それこそそんなことを吹き込んだサクヤを本気で怒ってくれるかもしれない。

その通りだ。カイズがそう自然に思ってしまうほど、彼にとって命の恩人であるヴィータという存在は大きなものなってしまったのだ。

から。

「なあ、カイズ。あたしたちは、出会わないほうが。……よかったのかな」

——ブー、ブー、ブー。

ヴィータはカイズからの着信を取ることができず。

しばらくデバイス振動音がヴィータの空虚な心に鳴り響き続けていくだけだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない5 貴方を変える
初プレゼント

あたしのするべきこと

——トントントン。

金髪のショートヘアの女性は、扉の中の人物を気にしてか控えめにノックをする。

「ヴィータちゃん。夕食の準備ができたんだけど」

「……シヤマルか。……今日はいらねえ」

「そ、そんなこと言わないでよヴィータちゃん。今日ははやてちゃんがヴィータちゃんのためにつて、大好きなハンバーグを——」

「だからいらねえつて言ってるだろ!!」

ヴィータは勢いのままに自室の壁を殴りつける。その音は静まり帰った部屋に大きく反響した。

ヴィータは埋もれていたベッドから顔だけを出すと、小さく言葉を繋げる。

「……頼む。今はちよつと一人にしておいてくれ」

「ヴィータちゃん……」

こんな沈みこんだ彼女の声は聞いたことがない。シヤマルはゴクリと唾を飲み込むと、もう一度手を挙げる。

だがその手はピンク色のポニーテールの女性に握り込まれた。

「やめておけシヤマル」

「シグナム。で、でも今のヴィータちゃんは明らかに」

「だからこそだ。あいつも私たちと同じ時間を過ごし大人になっている。だからこそ踏み込んで欲しくないこともあるはずだ」

「そ、そうかもしれないけど」

「別に突き放せと言っているわけじゃない。——ヴィータ聞こえているだろ。返答は別にしなくてもいい。こちらが勝手に喋っているだけだからな」

シヤマルを横にどかすと、今度はシグナムが扉の前に立つ。

「お前の夕食はいま主がラップをしてくれている。食べたくなったら食べればいい。だが本当に食べたくないのなら、せめて主が食事を用意する前に連絡の一つでも入れておくべきだったな」

「……………すまねえ」

「それと私的感情は仕事に持ち込むな。…………今日の午後の教導が酷かったというのは、こちらの耳にも入ってきているぞ」

「……………ツ！だからすまねえって言ってるだろ!!」

ヴィータはベッドから起きあがると、扉の殴りつける。

だがその音に驚くことなく。シグナムは安心したように目を閉じた。

「ヴィータ、一つだけ覚えておけ。仕事のミスは、謝罪一つですまないこともある。だが私たち家族は別だ。たまにぶつかることもあるだろうが、しっかりと謝罪すれば許すことができる。……………そして助けて欲しいなら私たちはお前に全力で協力するぞ」

「…………シ、シグナム」

「だからヴィータが放っておけというなら、今は放っておこう。…………私達はまだいい。だが主にはあまり心配をかけないでおけよ」

シグナムの厳しい心遣いを感じると、ヴィータは振り上げていた拳を、ゆっくりと降ろす。

そして本当に申し訳ないと、顔を伏せた。

「すまねえシグナム。もう少し頭の中で考えてえんだ」

「それならそれでいいさ。……………いくぞシヤマル」

「え、ええ。ヴィータちゃん、元気出してね！」

それだけを言い残すと、二人の足音がゆっくりと遠ざかる。

ヴィータはおぼつかない足取りでベッドまで戻ると、そのまま倒れるように毛布に体を預けた。

「……………本当に迷惑かけちゃったみたいだな。みんな本当に心配してくれたのにイライラぶつっちゃって。…………でも頭の中がごちゃごちゃで、全然整理がつかねえんだよ」

それでもずっとこのままでいいわけがない。ヴィータは半回転すると、真つ暗な天井を見上げた。

「あたしと出会う前のカイズは医者を目指してた。だから頭はいいけど、身体能力は高くねえ。でもそれでもあいつは管理局で働くことを選んだ。……あたしのためにだ」

かくして、カイズは局員になり見事自分と結ばれた。だが彼にとってはそこが問題だったのだ。

「あたしの存在がカイズの夢を奪った。あいつは自身の目標と引き替えに、夢を手放しちまったんだ」

それはどれだけ大きな決断だったのだろうか。学生の頃のカイズを知らないヴィータには、その痛みをすることはできない。

「だけど決して容易なものじゃなかったはずだ。あいつが事故にあっただけの数年間。人を助けたいと思う無垢な想いはきつと本物だったんだろうから」

それはサクヤの口調や様子を見れば疑いようもない。

それがわかった今。自分はどうするべきなのだろうか。

ヴィータは自分の顔を、両手の平で覆った。

伸び悩んでいるカイズを、このまま教導の道に歩ませ続けるか。それとも今からでも医療の道に導くべきか。

「……………考える必要なんてねえよな。あいつのことを思ったら、道なんて一つしかねえんだ」

なによりもう一度自分に出会うという目標を彼は達しているのだ。なら、今から医療の道に戻ろうとも、彼と自分の間にできた絆が切れるわけでもない。

ただ会える時間が相当削れてしまうだけ。

たったそれだけのはずなのに。

—— チクリ。

カイズとあまり会えなくなる。

そう思うと胸に突き刺さる痛みが強くなる。

カイズを教導していた時に別れを感じた時の比ではない。悲しみ以上の感情に、ヴィータは堪えていた。

「だけど、本当にあいつのことを思うんだったら」

答えなど一つしか存在しない。

だからこそ決意するしかなかったのだ。

「……………喉乾いたな」

空腹は感じない。だがずっと泣いていたからか、乾きだけは異常なほど感じていた。

ヴィータはベッドからそつと起きあがると、部屋のドアを開ける。

だがいざ部屋を出ると、冷蔵庫にたどり着くためには家族と顔を合わせなければいけないことに気づく。

覚悟は決めた。だがまだ顔は合わせずらい。

ヴィータは玄関まで移動すると、静かに玄関のドアを開けていった。

「夜の海つても気持ちいいもんなんだな」

行くあてがあまりないヴィータは、その足を自然と近場の海へと運んでいた。

この海ではザフィーラとともに、地元の子供にシューティングアーツなどの格闘を教えている。

だからこそ体が動くままにこの場所に来てしまったのかもしれない。

「そういえば最近カイズと会ってばかりで、あんまりチビ達の相手してやってねえな」

だが彼が医療関係の道に行けば、必然的に子供達に割く時間も増えるだろう。

——ズキン、ズキン。ドンツ!!

ヴィータは痛みをあげる胸を思い切り殴りつける。

「コホ、コホ。これで少しは黙るだろ」

とにかくいまは喉を潤そう。ヴィータはあたりを見渡すと、自販機を見つめる。

何でもいいから、とにかく水分を取りたい。ヴィータはポケットに手を入れた。

「……って、財布も何も持ってきてねえじゃねえか。……なにやってるんだあたしは」

ないならないうも方がいい。

どうせ一日何も飲まなかったからといって死ぬわけではないんだ。そう自分に言い聞かせると、家に帰ろうときび返した。

——ドゴン。ドゴン。

そんな彼女の尾を引くように、飲料が買われる音が響きわたる。ヴィータは人の気も知らないでと、足を早める。

だが缶を二つ持った人物は、彼女に追いつくためにその場から走り出し、ヴィータに近づく。

そしてキンキンに冷えたジュースを、ヴィータのほつぺたに押し当てた。

「ひゃうーだ、誰だ。こんないたずらするやつは！」

人が落ち込んでいるのだから、そつとしておいて欲しい。

怒りのままにヴィータは目の前の女性を睨みつけた。

そんなヴィータの顔を見て、ブラウン髪の女性は「あははー」と愛嬌のある笑顔を見せた。

「堪忍なヴィータ。そんな驚くとは思わなくてな」

「は、はやて。どうしてここに。い、いや、それよりも今は夕飯の時間じゃ」

「そんなの温めなおせるからいつでもいいんよ。……なあ、ヴィータ。ちよつと私と砂浜でも歩かへんか？」

「え、だけど……」

「ええやんか。最近はずっとカイズ君のことばっかりで、あんまり私に構ってくれへんかったやろ。だからな、いこ、ヴィータ」

はやては言葉を全て言い切ると、返答を聞かずに砂浜に向かう。ヴィータはしばらく考えるようなそぶりを見せる。だがはやてを置

いて帰るなどという選択肢など存在するはずもなく。ヴィータははやての後を追った。

そういえば、最近はやてと一緒にいる時間も減ったよな。

カイズに出会う前は、ラインに負けず劣らずはやてにべったりだったはずなのに。

それが彼氏ができた途端離れている時間が多くなるなど、なんて自分勝手なのだろうか。

「ほら、ヴィータ早くー」

「……うん。わかった」

はやての顔を見ると、ヴィータは心の決意を固める。だからこそ、カイズに伝えようと思った。

あたしの、いまの気持ち。

ある女の子の過去

二人は特に会話を交わすことなく、ただ砂浜を歩き続けた。だがはやてはすぐに足を止めると、ヴィータを見る。

「なあ、ヴィータ。ちよつと座ろうか」

「うん。それにあたし、はやてに言わなくちゃいけないことがあるんだ」

「……………そうみたいやね」

二人は砂浜に腰を下ろす。

無数の星が輝く夜空。静かに押し寄せては返る波をみながらヴィータは小さく言葉を紡ぐ。

その会話の要所所で、乾いた喉を潤しながら。そうであってもハッキリと胸のうちをさらけ出す。

今まで行き場のなかったモヤモヤは全てはやてにぶつけられる。だがそんなヴィータに気分を害することなく。はやては終始優しい目で彼女を見守った。

「だから。だからな。…………あたしはカイズに伝えないといけないんだ。お前の夢を奪ってごめんって。お前はお前に向いている道にいけないってさ」

そこまで言い切ると、ヴィータは顔を俯かせる。だがその心後ろ暗さはない。

それがカイズのためであるというのなら。その覚悟はもうついているのだから。

ヴィータは缶を握りしめると口を付ける。だが知らないうちに中身は空になっていた。

「はい、ヴィータ」

はやては自身のジュースを差し出す。ヴィータはその心遣いに始めこそ躊躇したが、乾きに負けそれを受け取る。

「ヴィータはカイズ君の夢を奪ってしもうたから。だから彼に合っている道に戻れっていうんやな。……………ヴィータはそれが本当にいいと思ってるんやな？」

「あ、当たり前だろ。……あいつは元々戦いに身を置くような人間じゃねえんだ」

「そっか。……なら、そんなヴィータにある女の子の話をしてあげようかな」

「女の子の話？」

突然何を言うのだろうか。ヴィータは問いかけるような顔をする。しかしはやてはそんなヴィータから視線をはずし、夜空を見上げた。「あるところにな。小さな女の子がおったんや。その子は昔から足が悪くてな。自分にできることなんて存在しない。とにかく周りに迷惑をかけないように。それだけを思うて生きてきたんや」

「……はやて？」

「でもその女の子の目の前に、ある日四人の家族が出来たんや。女の子はお金に不自由してなかったけど、家族の温かみというのを知らなかつたんや。だからこそ、四人と出会ってからの時間は本当に幸せな時間やった」

はやてはそつと目を閉じる。そしてその頃を思い出すように、ゆつくりと目を見開いた。

「でもその女の子は足どころか、体も悪くなる一方だな。それを何とかするために、いろんな人に迷惑をかけてるってその子は後になって知ってたな。……その子はものすごく悔しかったんや。そして病気があるから、戦う力がないからって、何もできない自分が本当にいやになつたんや」

はやてはそのときのことを思い出しているのだろう。ヴィータには表情を見せないようにさらに空を見上げる。

だがその次の声は弱気ではなく、凜としたものだった。

「だから女の子は必死に頑張ろうと思ったんや。たとえ足が悪くて助けてくれたみんなのように、困っている人に手を伸ばしてあげられる。……そんな人になりたいとそう思ったんや」

その言葉は、内に抱えながらもはやてが決して皆の前で吐くことになかつた事実だった。

その切なる言葉を聞き、いつも笑顔を振りまいていたはやてがそんなことを思っていたのかと、ヴィータは戸惑いを隠せずにいた。

「ヴィータはカイズ君の夢を変えてしまったって、そう思ってるんやろ」

「うん。……カイズは学生の頃ずっと医者を目指していたらしいから」

「でもいまは管理局で体を動かしている。今まで頭を使い人を治すことを目指していた彼が、体を動かし戦う道を選んだ。確かに彼の目指すべき道は変わったかもしれないよ。——でもそれは本当に悪いことなのかな」

「——えっ!?!」

「人間何がキツカケで道が変わるかわからへん。何も出来ずに殻に籠もっていた私が、管理局や機動六課を作った時点で随分と変わっているやろ。それを考えれば、方法こそ変わっても、人を助けたいっていうことを目標にしているカイズ君は、そんなに道が変わったとは思わへんけどな」

「だ、だけどカイズは実際体を動かすよりも頭を使う方が合ってるんだよ」

「頭を使う方が合ってるねー。だったら逆に言わせてもらおうけどな。そんな理由だけでヴィータはカイズ君に今目指してる夢を諦めろっていうんやな?」

「えっ!!」

「だってそういうことやろ。カイズ君、君の身体能力を考えたら体を使う仕事は向いてない。だから頭を使う仕事をしなさい。いまヴィータが言ってることは、そういうことやで」

はやての言葉がヴィータの心に勢いよく突き刺さる。だがそれは痛みではない。

それは今までヴィータの中に出来ていた穴をすっぽりと埋めると、彼女の苦痛を打ち払ってくれた。

はやてはそんなヴィータにニコリと笑みを見せる。

「結局、足が悪かった私も。普通に暮らしてたのはちゃんも。事故

で救われるまで暴力が嫌いなお嬢だったスバルも。兄の夢を引き継ぐために頑張り抜いたティアナも。そして力が強いためにずっと孤独の淵にいたエリオやキャロだって。みんな、みんな向き不向きでいまの道を選んだわけやあらへん。それでもこの道を正しいと信じ、今でも真っ直ぐに貫いてるんや」

はやてはそこまで話すと、ヴィータの髪の毛に優しく手を添えた。「向き不向きやあらへん。自分のしたいことにどれだけ努力が出来るか。それがその人の今に繋がっていくんや」

「はやて、そしたら。そしたらあたしは……」

「ヴィータのしたいようにしたらいいんよ。その人が苦しんでいる時に助けてあげるのが、家族であり、仲間であり。そして恋人であるヴィータの役目なんやからな」

「あたしのしたいように。……あたしにできること」
ヴィータはその言葉を頭の中でかみ砕くと、思い人を頭に浮かべる。

もし。いや、もしではない。きっとカイズは自分の近くにいたくて。そして人を助ける手助けをするために必死に教導官になろうとしている。

だが現実には彼の成長に伸び悩んでいた。

「そんなカイズにあたしができること。まだミッド式かベルカ式かも決めてないで、動きも教科書どおりにしか。——んっ!!」

そこまで言葉にすると、ヴィータの頭に一つの巧妙が浮かぶ。

ヴィータは必死にその答えたぐり寄せる。

「違う。あいつの特徴をマイナスに捕らえるんじゃない。あいつのしてきた努力は決して無駄なんかじゃないんだ。——あいつはミッド式もベルカ式もある程度のラインまでしつかりと使いこなすことが出来る。そして教科書通りの動きなら完璧にこなすことができるんだ!!」

今まで無数に散らばっていたパズルのピースが、一つ、また一つとはめ込まれる。

そしてカイズというできあがった絵を思い浮かべると、その答えを

見つけることが出来た。

「あいつの力を。あいつの夢を後押しするなら。………あまり時間はねえけど、それでも」

ヴィータはその場から勢いよく立ち上がる。そして今までにないほど、力強い眼差しではやてを見た。

「はやてに手伝って欲しいことがあるんだ。多分リインやアギト、シヤマル。それに可能ならルーラーの奴にも力を借りたいんだ」

「……自分のやるべきことが見つかったんやね」

「おう。そうと決まれば今すぐにでも——」

——くうく。

夜の海に響くかわいらしいお腹の音。ヴィータはカアアと頬を染めると、はやては思わず吹き出してしまう。

「あつはっはっはっは。ま、まあ何をするにしても、まずは夕飯にしようか。今日はヴィータの好きなハンバーグやから楽しみにときく」

そう嬉しそうに歩き出すはやて。その背中にヴィータは頭を下げた。

「ありがとうなはやて」

「お礼なんていらへんよ。だって私らは家族なんやもん」

はやては最後に極上の笑顔を見せる。ヴィータはその笑顔に恥じないように頑張ろうと、強く強く決意とともに拳を握りしめるのだった。

返事のない恋人

食器を持つとカイズはいつもの指定席に座る。だがその対面には指定の人物の姿はなかった。

カイズは食器を置くとともに、大きなため息をついた。

「これでもう十日以上。……ヴィータさんどうしたんだろう」

何度か連絡をして五日前によく一通のメールをもらうことだけはできた。メール内容は『心配するな』の一言だけ。

それに風の噂によると、どうやら八神家全員が長期休暇を取っているらしい。

元々有給を貯めに貯め、働き続けている一家だ。その休暇を特に行楽シーズンでもない今の時期に消化してくれる。それは管理局としては願ってもないことで、簡単に受理されたいらしい。

だが何も聞かされていないカイズは、ハアと大きなため息をついた。

「……………俺、何かしたのかな」

思えばヴィータが自分を避けるようになったのは、嘘をついたあの時からだ。

もしその時彼女を傷つけることや、落胆させることをしていたとしたら。

「でも試験前のくせに嘘ついて出かけたからな。……明日はもう試験なんだよな」

果たしてこんな心境で試験に臨むことが出来るだろうか。そんな弱気な思いがでると、カイズは違う違うと首を振る。

「ヴィータさんを安心させる一番の方法は、きつと俺が試験に合格することだ。やるしかないんだ！」

カイズはバシンと両頬を叩くと、気合いを入れ直す。

その姿を見て、コバルトブルーの女性は少し驚いたように声を上げる。

「随分と考え込んでるみたいだな」

「……………何だサクヤか」

「何だとは随分な物言いだな。そこ、座らせてもらうぞ」

カイズの返事を待つことなく、サクヤは向かいの席に腰を下ろす。

カイズはそんなサクヤに疑いの眼差しを向ける。

「サクヤさ。本当にヴィータさんにおかしなこと吹き込んでないんだろうな」

「何度も聞くな。私はそんな陰湿な女ではないさ。——君のためになることならいざ知らず、ただ悪意を持ってそんなことを口にする女だと思っうか？」

カイズは顎に手を添えると、「んんん」と考え込む。

「……………いや。お前はそんな女じゃないな」

「まっ、そういうことだ。これでも私は献身的ない女だからな」

「お、お前。それを自分で言うか普通」

「出来る女は自分を隠さないものだ。……………それにしても、お前は私と話をしてもいつもヴィータさんのことばかりなんだな。この十日間、何度その単語を聞いたか」

「い、いいだろ別に」

「まあそれはそうだがな。——それでも私のことをほったらかしにするなよ。今更お前にいなくなられたら。……………私は泣いてしまいかもしれないぞ」

俯きがちにサクヤはカイズを見つめる。たまに見る彼女の弱気に、彼は昔から弱かった。

「わ、わかった。わかったって。俺ももう無責任にお前から逃げたりしないからよ。……………あー、とにかく明日は試験だから忙しいんだ。俺はもう食べ終えるから、先に行くぞ」

「ふっ、つれない男だな」

「それだけ真剣なんだよ。……………じゃああなたも、サクヤ」

カイズは残りの食事を無理矢理詰め込むと、逃げるように席から立ち上がる。

よろよると、徐々に遠ざかる背中を見ると、サクヤはフンと馬鹿にするように鼻を鳴らす。

「私はいつでも献身的さ。君のためになることなら、何でもするさ」

サクヤは小さくそれだけ言うと、両手を合わせ食事をとり始めるの
だった。

握りこんだ想いの形

昇る朝日がカーテンに差し込むと、その部屋が明るく照らされる。暗闇から時放たれた部屋の所々には、大量の栄養ドリンクが置かれている。さらにその家では珍しく、インスタント食品の空き容器が散乱していた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

そしてまるで死体現場のように、仰向けうつ伏せで倒れる女性達と一匹。

その中で一際幼い少女は、ようやく完成させたそれを優しく握りしめた。

「で、出来た。ギリギリだったけど何とか間に合ったぞ」

「ぐ、ぐっじよぶやヴィータ」

「はやて。それにみんなありがとうな」

「リ、リイン達はヴィータちゃんのお手伝いをしただけです。本当に頑張ったのはヴィータちゃんですよ」

「そうだぜヴィータの姉御。……だけどちよつともう体が限界なんで寝るな」

アギトの言葉の後に、一人、また一人と意識を失う八神家一同。

ヴィータもまたそのまま眠りにつきたい気持ちでいっぱいだった。

だがそれよりも今はカイズに会いたい。その思いが彼女の眠気を吹き飛ばす。

「時間はまだ午前八時。あいつの受験時間には全然余裕があるな」

ヴィータは前日にはやてが用意してくれた服に着替えると、顔を洗いうーんと背筋を伸ばす。

そして倒れている家族に決意の声をかける。

「よし、それじゃあ行ってくるなみんな！」

実技試験の前に今の自分の気持ちを伝える。

ヴィータはみんなで作り上げたそれを改めて握り直すと、玄関に向かう。

——そう、思っていた時だった。

廊下に慌ただしい足音が響くと、シヤマルが部屋に駆け込む。

「た、大変よヴィータちゃん！バ、バスが渋滞に捕まって動かないらしいの!!」

「な、なんだよそんな息切らして。だったら電車でもいいし、最悪飛行許可とって飛んで向かえばいいだけだし」

「そ、そうじゃないの。その渋滞に今日の教導の試験を受ける団体が乗ってるらしくて。試験の時間の調整上、一人一人で時間がかかる実技が先になっちゃうれしいのよ！確かカイズ君は直接会場入りグループのはずよね！」

「そ、そうだ。確かあいつのアパートから会場が近いから歩いていくって言った。それじゃあ!!」

「正確な時間はわからないけど、それでも下手をすればあと三十分ぐらいでカイズ君の実技試験が始まっちゃうのよ！」

「……………えっ」

カイズの実技試験が始まってしまう。

自分は彼の試験に間に合うことが出来ない。

その事実がヴィータの頭で理解されてしまうと、彼女はその場で膝を突いてしまう。

——ドクン。ドクン。

高鳴る心臓とともに、掛け時計を見る。

時刻は八時五分。それはあと二十五分で試験が始まることを意味していた。

ヴィータの手から、みなで作り上げたそれが滑り落ちる。それは床に落ちると、甲高い金属音をあげる。

だがヴィータはそれを拾おうとはしなかった。

「な、何だよそれ。せっかく、せっかくみんなに協力してもらったのに。——あいつに伝える言葉が見つかったのに。……そんなのってねえよ」

結局カイズの力になれない自分がふがいなくて。ここまで手伝わてくれたみんなに申し訳なくて。

ヴィータは唇をかみしめると、ポツポツと涙を流す。

だがそれは仕方がないことであろう。ここから全力で飛行をしたとしても、到着まではどんなに早くても一時間かかる。

カイズの試験時間がたとえ後のほうになったとしても。

きつともう間に合うことはないのだから。

「……何だよ。こんなものありかよ。やっぱりあたしは」

「弱音を吐くなヴィータ。私も主達もそんな言葉を聞くためにここまで手伝いをしたわけではないぞ」

ピンクのポニーテールを揺らすと、シグナムは部屋に入る。そして泣き崩れているヴィータの前にしゃがみ込むと、床に落ちたそれを優しく彼女に握らせた。

「シグナム。……だけどこのままじゃ間に合わないんだよ」

「そんなピンチを補うために家族がいて、そして仲間がいるのだろ。

——私はその製作にはあまり協力できなかったからな。もしかしたらという時のために、あいつに頼み込んでおいたんだ」

「頼みこんだ……？」

話の流れが見えてこない。そんな啞然としているヴィータの目の前に、今度は長い金髪の女性が姿を見せた。

「テ、テストタロッサ」

「話はもうシグナムから聞いてるよ。確かに今から飛行しても間に合わないかもしれない。だけどね」

フェイトはそこで言葉を切ると、トントンとつま先で床を叩く。そして力強い眼差しでヴィータを勇気づける。

「だからこそ、絶対に間に合うように私が全力で走るから。そしてヴィータを。そしてみんなで作り上げたそれを必ず送り届けるから。……だからヴィータも諦めないで」

フェイトが手を差し伸ばす。ヴィータは再び目に光を宿すと、涙をぬぐい去り彼女の手を強く強く握りしめた。

そんなヴィータを見て、フェイトは言葉を続ける。

「でもね。一っだけ約束してほしいことがあるんだ」

そう言葉にするフェイトの顔は真剣そのものだった。ヴィータはゴクリと唾を飲み込むと、フェイトの言葉にしっかりと耳を傾ける。「これからは食堂で胸の話はしないでね。えっと、ちよっと、ううん。かなり恥ずかしいから」

「————へっ?」

もじもじするフェイトときよんとするヴィータ。

二人は互いに目を合わすと、同時に頬を緩ませた。

「ああ、わかった。それじゃあ頼むぜテストロッサ!」

「うん、行こうヴィータ!」

二人は手を取り合うと、部屋を飛び出す。

二人は外にでると、フェイトはデバイスを起動させ金色の閃光と呼ばれたフォームへと姿を変える。

ヴィータは彼女におぶさると、その金属をしっかりと握りしめた。

「しっかりと捕まってるねヴィータ!」

瞬間。雷鳴の音がその場に響いたと思うと、二人の姿は全ての人間の目から消えていくのだった。

受験者ごとに分けられた控え室。カイズは椅子に腰おろしたまま天井を見上げていた。

「まさか繰り上げで午前中から実技になるなんてな。……どっちにしても時間の問題だったんだけどな」

カイズは自身の震えている手を見ると、乾いた笑いを浮かべる。

結局、カイズはあれから自分にあつたスタイルを見つけたはずだ。できなかつた。もちろんこの二週間弱で基礎体力は上がったはずだ。しかしそれだけだ。

「ベルカ式かミッド式か。……どっちを使えばいいんだ」

机の上に置かれたのは、管理局から支給される一般的な二つのデバ

イス。次に自分が呼ばれた時には、このどちらかを持って試験に挑まなければならないのだ。

そう思うと心が憂鬱になる。だが彼を憂鬱にしているのは、何も試験のことだけではなかった。

「試験前にもう一度くらいヴィータさんに会いたかったな。……いや、弱気になるな。必ず試験に合格する。それで大腕振って会いに行けばいいだけじゃないか」

もうここまでできたらやるしかない。カイズは目を見開くと覚悟を決める。

「カイズ！」

「——はい!!」

いよいよ自分の出番がきたようだ。カイズは椅子から立ち上がると、机の上のデバイスに手を伸ばす。

だがそれよりも早く、目の前の扉は開かれていった。

「カイズ！まだいるよなカイズ!!」

「えっ。……ヴィータさん」

現れるはずがない。そう思っていた彼女の登場に、カイズは目を丸くする。

だが驚きは、ヴィータに会えた嬉しさによりすぐに上書きされた。

「ヴィータさん！ヴィータさん!!ど、どうしてここにいるんですか。随分と息もあがってますし、それにここは試験関係の人以外は入れないんじゃない？」

「一応それなりに名の通った教導官だからな。公私混同ってやつだ。そんなことよりもう時間がねえんだ。だから。————これを持っていってくれ」

ヴィータは大切に大切に握り込んでいた銀色のチェーンをついたネックレスをカイズに手渡す。

カイズはそれを見ると首を傾げる。

だが次の瞬間、目をむき出しにしてヴィータを見た。

「こ、これって、もしかしてデバイスですか！」

小さいながらも、黒く鋭利な棒が二本ついたネックレス。それは八

神家と仲間達が一丸となりこの十日間で作り上げたカイズ専用のデバイスであった。

カイズはデバイスとヴィータを代わる代わる見る。

「ヴィータさん、これは……」

「あたしなりにいろいろ考えてみたんだ。カイズを助けるには、カイズの夢を後押しするにはどうしたらいいかって。それがそのデバイスなんだ。も、もちろんぶっつけ本番になっちまうけど、もしそれでもよかったらその——」

「使います。絶対に使わせてもらいます!!」

その力強い声をあげたのは、果たして先ほどまで沈み込んでいた男と同じであろうか。

もう心配いりませんとデバイスを握り込むと、真っ直ぐにヴィータを見つめる。

『受験番号13番試験会場に来てください』

室内にカイズの受験番号が鳴り響く。今度は間違いなく、彼の試験時間だった。

「それじゃあ行ってきますねヴィータさん!!」

「おう!——いや、ちよつと待て!!」

「はい?」

カイズは勢いよく踏み出した足に急ブレーキをかける。ヴィータは彼の前に回り込むと、その場でトンと飛び上がった。

「——ん」

ヴィータの小さな唇が、カイズの頬に触れる。

その行動にカイズは思わずキョトンとしてしまう。ヴィータはそんな彼を見ると頬を赤く染める。だが目を背けることなく、彼を見つめた。

「し、試験。絶対に合格しろよな」

「——はい!!」

カイズはこの二週間で一番の笑顔を見せると、部屋から飛び出す。

そんな彼の背中を見つめると、ヴィータも試験会場に向かうのだった。

「あ、ヴィータ、ここ、ここ」

試験会場を見下ろすことのできる観覧席。先に場所取りをしていたフェイトが、ヴィータの席をポンポンと叩く。

「どう、しつかり渡せた？」

「おう、テストタロツサのおかげでギリギリ間に合ったぜ」

「よかった。あつ、もう始まるみたいだよ」

「……………おう」

ヴィータは正方形の会場に現れたカイズを見つめる。そして祈るように両手を合わせると、彼の成功を願った。

「受験番号十三番です。今日はよろしくお願いします」

カイズは目の前の人物に頭を下げる。その姿を見て、白いバリアジャケットの女性は、柔和な笑みを浮かべる。

「今回実技の試験官になりました高町なのはです。試験の内容は知つての通り、私との模擬戦になります。もちろん試験にあたって私の魔力は受験生と同じBクラスまで抑えられています。——条件は同じ。あとはどこまで受験生が戦えるかです」

——パチン。

なのはが指を鳴らすと、ただの正方形だった試験会場がその姿を変える。

フィールドは廃墟のビル街。カイズが事前に練習をしていたものとほぼ同じ作りだ。

相手との距離は近からず遠からず。ベルカにとってもミッドにとつても最良であり、また逆ともいえる距離間だ。

「それじゃあ行くよレイジングハート」

小さな赤い宝玉が彼女の声に答えると、その姿を杖に変えた。

「さあ、カイズ君。そつちも準備していいよ」

「——はい」

カイズは握っていた二つの小さく鋭い漆黒を見る。この初めて使うデバイスで自分は戦うことができるだろうか。

果たしてぶつつけ本番でこんなことをしているのだろうか。

そんな不安が頭をよぎる。

「なんてこと、全くないけどなー！セツトアップ!!」

自分の大切な女性が自分のために作り上げてくれたデバイスだ。その何を疑う必要があるだろうか。

カイズは一抹の不安すら見せずに、デバイスを展開させる。

二つの漆黒は彼の左右に固定される。持ち手が銀色の漆黒の刃。その長さは小さくもなく、中くらいでもない。

しかもそれは左右非対象である。片方が鮮麗された刃ならば、もう片方は真ん中の開いた二股刃である

なのははその二つの刃を見ると、懐かしさに思わず声を上げてしまう。

「カイズ君のデバイス、長さがまるでお兄ちゃんとお姉ちゃんが使ってた小太刀みたいだね」

『高町試験官。試験に関係ない私語は慎んでください』

「あ、ご、ごめんなさい」

頭を下げるとペコペコと謝るなのは。カイズはそんな彼女を見ながら、何度も何度も二つのデバイスを握りしめた。

右側の刃のほうは若干重さがある。それとは逆に、二股のほうは些か軽いか。さてこのデバイスがどう働きを見せてくれるか。

……………信じてますよヴィータさん。

迷いなどない。カイズは力強く二つのデバイスを握り込むと、なのはに目を向ける。

「ん、んん。それじゃあこれから試験を始めます。準備はいいかな」

「はいー!」

「ん、それじゃ」

『カウント入ります。5、4、3、2、1初めてください』

アナウンスが場内に響きわたる。

それと同時にカイズは地面を蹴り抜いた。

「ん。ミッド式相手には。特に砲撃の得意な私相手なら接近は常套手段だよ。でもね。この一撃で受験生の半分は落ちてるんだよ」

なのははレイジングハートに魔力を圧縮させる。そしてその砲撃を。——地面に放った。

爆散する魔力が地面をえぐる。そして弾き出された瓦礫が接近するカイズに襲いかかる。

「ぐっ、これは!」

魔力を自身にはなく、地面に向けるなんて。

短距離砲撃なら避けるという選択肢があるが、これでは。

このままでは直撃する。ならどうすればいい。

不意打ちの一撃にカイズの頭は混乱する。とにかくフィールドを張って、防がなければ。

そう思った瞬間だ。右手のデバイスが電子音をあげたのは。

『砲撃魔導使。パターン23です。対処はパターン2でいきます』
「パターン23のパターン2?!」

右手のデバイスはそれだけ言うと、その刃に魔力を込め始める。その魔力は薄く広いもの変わった。

「対処。パターン2って。———そうか!」

カイズはその場で立ち止まることなく、眼前の瓦礫だけを平たい刃で叩き落とす。

「そうだ。瓦礫による攻撃は相当狙わない限り、大きさも狙いもつけることができない。だったら落ち着いて必要なだけ落とせばいいんだ」

『状況終了。通常モードにシフトします』

右手のデバイスは再び黒い刃に姿を戻す。

カイズはその剣を構えると、一気に距離を詰めた。

「うん。これくらいは防いでもらわないとね」

なのはは慌てることなくふわりと後ろに下がる。

「遅い、この速度ならー!」

『砲撃魔導使後退パターン2に該当します。迎撃はパターン1か4をお勧めします』

左手に構えた二股の漆黒がそう声をあげると、了承を得ることなく魔力をチャージし始める。

カイズは一見意味不明なその単語を聞いて、今度こそ確信したように頷いた。

カイズはなのはに接近することをやめると、その場で短距離砲撃を放つ。

その瞬間だ。先ほどまでなのはがいた場所に、突然ピンクの輪が現れると、何かを捕らえるかのように一気に締め付けられていく。

「私のバインド読んだ? んん!!」

冷静に分析してる場合ではない。正確に放たれる短距離砲撃をフィールドで止めると、なのはの表情がこわばる。

「どうだったとしても、私は試験官として戦うだけだよ」

なのはは空いている左手を天に掲げる。その瞬間、先ほど放たれた瓦礫がピンク色の魔力に覆われる。

この流れこそが三分の一の受験者を落とした戦闘パターンであった。

「スターダストフォール!!」

魔力に包まれた瓦礫が宙を舞いカイズを囲みだす。だが彼に迷い

はない。カイズは不意をついた奇策に慌てることなく。電子音の指示に従うまま、三発ほどの魔弾を空中に待機させ右手の刃を構え直す。

そう、これこそがヴィータがカイズのことを思い彼の長所を伸ばすために作られたデバイスなのだ。

カイズは元々勤勉であり、そうであるからこそ教科書通りの動きしかできず。そしてベルカ式もミッド式もある程度しか使いこなすことができなかった。

だがそれは裏を返せば教科書に載っている動きなら全て対応することができ、基本的なことならミッド式もベルカ式もどちらもこなすことができるということだ。

だからこそヴィータはカイズのために、思考が早いインテリジェンスデバイスを作り上げた。

右手のものがベルカ式。左手のものがミッド式だ。

この二つのデバイスにできることはただ一つ。

デバイス上に記録された莫大な戦闘データに基づき戦闘対処を迅速、そして『勝手に』してしまうことだ。

それゆえに、先ほどからカイズの反応よりも早くデバイスは形状を変え、勝手に魔力を圧縮させているのだ。

普通なら何百とあるうちの迎撃パターンを術者の意思に関係なく行使するデバイスが機能するはずがない。

だがカイズは別だ。彼は教科書通りの基本的な動きしかできないのではない。

基本通りの動きなら、その教科書の隅から隅まで全てに対応することができるのだ。

唯一弱点であった虚をつくような攻撃は、デバイスが全て冷静に判断してくれる。

そしてカイズは下される判断を疑うことはない。

これはヴィータの作ってくれたものなのだから、そんなもの初めから存在してはいない。

だからこそ知識をフル活動し、最速のスピードで全てに対応するこ

とができるのだ。

「ウオオオオオオオオオオツ!!」

連続で襲いかかるスターダストフォールを迎撃し、カイズは再び近接を仕掛けていく。

なのは彼の気迫に一瞬飲まれると、今度は全力で後退していくのだった。

やっぱりあたしは……

「まだあいつは来てねえか」

試験から三日後の今日。ヴィータはトレイを手に持つと、いつもの指定席に腰を下ろす。

すると、それに合わせてコバルトブルーの女性が彼女の対面に座った。

「こんにちはヴィータさん。随分と長い休暇だったみたいですけど、お加減いかがですか？」

「シンドウさんか。別に体調が悪くて休んでたわけじゃねえから、なんともねえよ」

「それなら何よりです」

そう言葉を交わすと二人の間に沈黙が生まれる。だが以前のような居心地の悪さはなかった。

それはヴィータ自身が答えを見つけたからだろう。

「カイズはこれからも教導の道を歩むってよ」

「へえ。彼が体を動かすことに向かないってわかってても、それでもその背中を突き落とすっていうんですか」

「……これは受け入りだけだな。結局向く向かねえとかそんなの関係ねえんだよ。もう向かないからって相手の夢を変えさせようとは思わねえ。——そんなことより、相手に寄り添ってその背中を押しやる。それがあいつの恋人であるあたしの役目だって気づいたんだ」

キツパリと言い切るヴィータ。その真っ直ぐな眼差しをみて、サクヤは「ふう」とため息をつく。

「ええ、そうですね。それが彼のためなら例えどんなことだろうと、寄り添ってあげる。それが彼の隣にいるもの出来ることなんです」

「シンドウさん？」

「そういえば彼の試験のためにデバイスを作ってあげたらいいですね。で、そのおかげで試験も好評価だったとか」

「まだ結果はでてねえけどな」

「でもまさかたった十日間で彼にデバイスを作るなんて。——随分と遠回りなことしましたね」

「何だよ。遠回りって」

実際彼の特性を見だし、あのデバイスがなければテストも散々なものだったはずだ。

それはカイズも認めるほどであったがただ一人、サクヤだけはそれは違うと声を出す。

「カイズ君は別に新しいデバイスなんてなくたって試験を合格してましたよ」

「新しいデバイスなしって。ど、どうやってだよ」

「それは簡単ですよ」

サクヤはにこりと笑みをこぼすと、ヴィータを指さす。

「あ、あたし?」

「ええ、そうですよ。そんな回りくどいことしなくても、カイズ君が大好きで大好きで堪らないヴィータさんが『合格したらいっぱいエッチなことしてやるぞ』なーんていえば、死ぬもの狂いで合格したはずですよ」

「——ブツ! な、な、なな!!」

「あら真っ赤になって。本当に可愛い人ですねヴィータさんは。でもその調子だとまだエッチなこととはしてないみたいですね」

「わ、悪いかよ!」

「いえ。……………正直いうと羨ましいですね」

「えっ?」

体を求められていないことのどこが羨ましいのだろうか。ヴィータは頭に疑問符を浮かべると、サクヤは深いため息をつく。

「だってカイズ君。学生の頃は付き合った女の子に次の日にはやろうやろううるさくて。どの子にもそんな対応してるから、本当に自分に興味があるのかって疑心暗鬼になっちゃうほどなんですよ。——そんな彼がまだ手を出してないなんて。ヴィータさんは本当に大切にされてると思いますよ」

「お、おう……………」

何だろう。この前話した時とは違いサクヤの口調には攻撃的な面がみられない

ヴィータは不思議そうにサクヤの顔を覗くと、彼女は小さく頭を下げた。

「でもそんな大切にされなかった元彼女も、別に彼が嫌いってわけじゃなくて。でも戦闘面では彼の力になれないし、何より私が何を言ってもあのときの彼には届かなかったでしょうしね」

「そ、それじゃあこの前あたしにいろいろ言ったのはまさか——」
「いえいえ。ただ私は元カノとしてヴィータさんに因縁をつけただけです。それ以上でもそれ以下でもありません」

「で、でもよ。——あつ、それはそうと十日前にカイズと出かけてたよな。あれはいつたいたいなんだったんだ？」

元はといえば、それこそがヴィータが落ち込む一番の要因になったのだ。

ヴィータは机に両手をおくと、サクヤにグイグイ顔を寄せる。だがサクヤはその言葉に応えることなく。いつの間にか手に持っていた手紙をヴィータの前に出した。

「な、何だこの紙は」

「招待状です。あつ、ちなみにカイズ君つてもものすごくお酒に弱くて酒癖も悪いんですよ。そのせいであの人も家に運ぶのに一苦労してましたからね」

「酒に弱い？あの人？」

何が何だかチンプンカンプンだ。ヴィータは渡された手紙の正体を探ろうとする。

だがそれに合わせるように、後ろから声が聞こえた。

『ヴィータさーん。お待ちせしましたー』

恥も外聞もなく食堂に響くカイズの声。ヴィータは恥ずかしそうに頬を染めると、サクヤは席から立ち上がった。

「それじゃあ指定人物もきたようですよ、私は退散しますね。それで

は後日お会いしましょう」

サクヤはヒラヒラと手を振る。すると、その薬指にはこの前までなかった銀色に輝く指輪が存在していた。

「えっ…その指輪って、え、はあ?」

「おっ、サクヤの奴ちゃんやんと空気読んでくれたみたいですね」

カイズは彼女が去っていった指定席に腰を下ろす。

——そして間髪入れず頭を下げた。

「ヴィータさんすみませんでした!!」

「な、何だよ!さつきからみんな突発的すぎるだろうが!!」

「いえ、でも俺ヴィータさんに謝っておかなくちゃいけないことがあって」

「あ、謝ることって?」

「俺、ヴィータさんに一人で練習するって言った日にサクヤとサクヤの旦那と食事してたんです。なんか友達を代表して、是非とも俺にスピーチをしてほしいらしくて。で、そこで久しぶりに酒を飲んで気がついたら朝になっちゃってて。せつかくヴィータさんから連絡もらってたのに……」

「シンドウさんとシンドウさんの旦那!?えっ、じゃあシンドウさんって」

「あつ、あいつはもう婚約してますよ。でも会社のほうが忙しくて結婚式があげられてなかったみたいで。って、なーんだ。ヴィータさんももう結婚式の招待状もらってるじゃないですか」

あつはっはっはと笑い声をあげるカイズ。そんな彼と招待状を交互に見ると、ヴィータの額に青筋が浮かぶ。

何だよ。結局振り回されたのはあたしだけじゃねえか!

これは久しぶりに相手の頭をかち割ってもいいのではないだろうか。ヴィータは待機モードのグラーフアイゼンを握りしめると、カイズを睨みつける。

「あつ、さつき聞いたんですけど試験のほうは見事合格でした!いやー、これもヴィータさんの応援とこいつのおかげですね」

カイズは首にかけていたそれを外すと、二人の中間にただよわせ

る。

「このデバイスがなかったら絶対合格できませんでしたよ。それに試験間際のほっぺのキス。あれが一番効きましたね〜」

そう語るカイズは本当に無邪気で嬉しそうで。

きっと彼はこの笑顔に辿り着くまで、様々な努力をして、たくさんものを切り捨ててきて。

それでも自分と会いたいと。自分の隣にいたいとここまでできてくれたのだ。

そんな姿を見せつけられてしまったら、もうヴィータには怒る気が失せてしまっていた。

「まあいいか。今回のことでいろんなことに気づかせてもらったしな」

「ん、ヴィータさん。いま何か言いましたか？」

「別になんでもねえよ。……ただな」

ヴィータはそこで言葉を止めると、机に肘をつけその手のひらに頬を乗せる。

そしてしようがないと言わんばかりに、言葉を紡いだ。

「やっぱりあたしはカイズのことが好きなんだなって。……そう思っただけだよ」

「そんなー、俺のことが好きって。……え、ええ!!」

まさかこんな公共場で、ヴィータから愛の告白を聞けるとは思っていなかったのだろう。

カイズは珍しく顔を真っ赤にすると、視線をあちこちに漂わせてしまふ。

あれだけ自分を困らせたのだ。これぐらいの仕返しはいいであろう。

ヴィータの告白に右往左往し、そのせいでさらに周りの目に晒されているカイズをちらりと見る。

そして心の中で『べー』と舌を出すと、ヴィータはゆっくりと目を閉じていくのだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない 8 私を救う 夢
の中へ

生け贄に選ばれし少女

その事件はきつと、誰の落ち度もなかったはずだ。

その世界の文明レベルや犯罪者の個人能力。その他様々なことを視野に入れたとしても、十分に対策がとられていた。

あえて言い訳をするなら、運が悪かった。

そんな一言で片づけるにはあまりにも大きな失策。

その生け贄となったのは、年頃の少女にしか見えない彼女だった。

分かりやすく形容すれば、それはピラミッドが一番近いであろう。石に囲まれた広いその一室で、赤い髪の少女は叫び声をあげる。

「さあ、追いつめたぞ！ 随分と派手にやってくれたじゃねえか！」

紅いゴシッククロリータのバリアジャケットを着た少女は、相棒であるハンマーを構えると男を睨みつける。

そんな彼女を援護するように、管理局の局員が四名ほど後ろで構えた。

「き、貴様等いつたいなんなんだ！ 我々の正当なる儀式を邪魔しようと言うのか！」

追いつめられた男は、痩せていると言うより、やつれているというほうが正しいであろう。腰まで届く長髪は、手入れがされておらず埃まみれである。

さらに目の下にできた大きな隈は、男のうす気味悪さに拍車をかけていた。

男は真つ黒に染まった三十センチほどの卵を慎重にテーブルに置くと、それを守るように両手を構えた。

ヴィータはチツと舌打ちをすると、グラーフアイゼンを握りしめ

る。

「なにが神聖なる儀式だよ。……関係ない人間の命を五百人以上奪つておいて、神聖が呆れるぜ」

「この卵を孵化させるためには、愚かな民衆の命などものの数ではないわ。——あともう少し、もう少しで生まれると言うのに。ああ、おいたわしいや、おいたわしいや」

卵に頬ずりする男の目には光が一切見られない。きつと彼自身もあの卵。管理局で言う『ロストログア』の被害者なのだろう。

だが相手が被害者だろうと、このまま卵を放って置くわけにはいかない。たとえば男を手に掛けようとも、これは押収しなければいけない。

「……悪いがさつさと終わりにさせてもらおうぞ。アイゼン、カートリッジロード！」

ヴィータの叫びとともに、カートリッジが装填される。空薬莖が地面に落ちる音と共に、彼女はそこから飛び出していった。

「だあああああつー！」

「ヒツ、ヒイー！」

ヴィータの放つハンマーに、男はなににも為す術がない。だが当然だ。この世界の文明レベルは、なのは達がいた地球以下である。

どんな形でこの卵が生まれたのか。それとも他の次元から流れ着いたかはわからない。

ただ一つわかることと言えば、男には一切の勝ち目がないということだ。

非殺傷設定で放たれた一撃は、男の体を壁に叩きつける。殺してはいるが、今まで死んでいったもののことを考えれば、これくらいの罰は許されるはずだ。

ヴィータは倒れている男を指さすと、局員に指示を出す。

「その男は確保の後、これまでの経緯を話してもらおう。しっかり捕まえておけよ」

「はい、了解しました」

局員はその場で敬礼すると、すぐに男の確保に入る。

これで今回の事件も終わりだ。ヴィータはアイゼンを待機モードにすると、目標のロストログアに目を向けた。

「全く、やっかいなもの作り上げたもんだな。……こんなもののために、五百人近くが死んだのか。何だか、やるせねえな」

五百人。その言葉を口にした瞬間、ヴィータの中である記録が思い出される。

それはもう思い出すこともできない記憶ではあるが、多くの記録が残っている事件のこと。

今回の事件など非ではない。たくさんの人間の命を奪った後悔しても仕切れない事件だ。

「あたしははやてに出会って。そしてなのはやテストアロツサ、時空管理局のおかげで今こうして過ごすことができてる。……もしあいつらに会わなかったら、きつとお前のことなんて非難できなかったんだろうな」

多くの人間の命を奪った闇の書事件。その最後の記録には、奇跡的に死者が0名だと記載されている。

だがその前までの事件では、多くのものの命を奪っている。記憶にない。システムに支配され仕方なく。

きつとそんなことでは言い訳できないほど、多くの命を……。

『なら、貴様は私と同類だ』

突然聞こえた声に、ヴィータは左右を向く。

「ん、いま誰かなんか言ったか？」

「いえ、特になにも」

局員同士確認を取り合うが、誰も口を開いた人物はいない。男のほうも見てみるが、気絶したままであった。

「……気のせいかな？」

『気のせいなものか。お前は私と同類。いや、それ以上の存在と言ってもいいだろう。そんなお前が私を消そうというのか』

「いや、確かに聞こえる。……この声は、な、なんだよこれは」
ヴィータが振り返ると、卵がドクンドクンと光をあげていることに気づいた。

明らかに危険な兆候に、ヴィータは声を張り上げる。

「お前等、早くこの場から脱出しろ」

「し、しかしロストログアが」

「こいつはあたしが何とかする。——急げ、命令だ！」

「りよ、了解しました」

局員は男を担ぐと、そのまま石壁の一室から走り出す。

ヴィータに対し申し訳ないという思いはあったであろう。だがもしもの時に、自分達がいてはヴィータの足手まといになる。

それだけヴィータを信頼しているからこそ、彼らは一室を後にした。

「よし。——あとはこいつだな」

鬼が出るか蛇が出るか。ヴィータはアイゼンを構え直すと、卵を睨みつける。

『私の復活には、まだ人の死の記憶が足りない。——だからこそ、もらうぞ。貴様の死の記憶を』

「はっ、ふざけるなよ。残念ながら、闇の書の転成前の記憶はないんだよ」

だからこそ自分達は何度も同じ過ちを繰り返してきたのだ。

叩くならいいましかない。ヴィータは再びカートリッジロードをすると、ブースターを噴射させる。

『なら、貴様を殺してからゆっくりと探らせてもらおうでしょう』

「そんな格好であたしがやれると思ってるのか！」

『思っではないいさ。何せ私は攻撃する手段を持っていないからな。』

——だが貴様を殺す手段は持っている』

「やれるもんなら、やってみやがれ！」

ラケーテンハンマー。ブースターの噴射に身を預け、遠心力により強力な一撃を放つ攻撃だ。

並のフィールドなら、それごと術者を粉碎する一撃。その攻撃は例に漏れることなく、その卵を打ち砕いていく。

あまりにも呆気ないその結末。だがそれが結末でなく、過程と気づくのはすぐ後のことだった。

「中身が空っぽじゃねえか。——ツ！　なんだこの黒い靄は!?!」

どこから現れたのか。その黒い靄は一瞬のうちにヴィータを包み込む。まるで、何の抵抗もできない彼女をあざ笑うかのようだ。

『さあ咎人よ。貴様には死んでもらおう』

「ぐっ、やらせるかよ」

『無駄だ。私が殺すのは今の貴様であって、今の貴様ではない。逃れることはできないさ』

「なっ、あ、ああああああっ!!」

ヴィータの中に黒い霧がとけ込んでいく。

彼女は朦朧とした意識のまま、ガクリとその場で膝を突いた。

「なん、なんだよ。……………カイズ」

最後に愛するものの名前を口にする、ヴィータは石の地面に横たわっていく。

これが今回の事件の終幕。

そしてこれから始まる事件の始まりでもあった。

俺にしかできないこと

カイズ君。ヴィータが、ヴィータが。

その言葉は、以前も電話越しで聞いた言葉だ。だがヴィータが幼児退行したときは、明らかに違う血の気の引いた声。

それは今回の連絡の深刻さを、何よりも大きく物語っていた。

管理局のメディカルセンター。カイズはその一番奥の一室につくと、病室のドアを乱暴に開けた。

「はやてさん。ヴィータさんが、ヴィータさんがどうしたんですか!」

「……カ、カイズ君。ヴィータが、ひっく、ヴィータが」

大切な家族の名前を口にする、はやては目に涙を貯める。きつと自分がここにたどり着くまでにも、ずっと泣いていたのだろう。

はやては真つ赤な目のまま、再び涙を流していった。

いったい何があったのか。カイズはゆっくりと視線を降ろすと、ベッドに寝ている少女に目を向ける。

そこにいる少女は、あれだけ盛大に扉を開けたのに、全く気にする様子もなく。

ただ静かにそこに横たわっていた。

血の気が引く。足が震え出す。目の前が真つ暗になる。

様々な絶望がカイズの体に一気に押し寄せると、カイズはその場で崩れ落ちそうになる。だが隣にいたシグナムが、すぐに肩を貸していった。

「ショックなのはわかる。だが今は冷静になってくれ」

「れ、冷静になれって。でもシグナムさん」

「——わかってくれ。私たちだって、ギリギリなんだ」

そう言葉にするシグナムの肩は、小刻みに揺れている。ショックなのは自分だけではない。それがわかると、カイズは心を強く持った。

自分の両頬を力の限り叩く。そして決死の覚悟でヴィータに近づいた。

「ヴィータさん? ヴィータさん? いったいどうしたんですか。何

があつたつていうんですか？」

「……………」

彼氏の問いかけに、その少女は何も答えようとはしない。呼吸はしている。だが生きているだけの彼女に、その機能を働かせることができないのだ。

カイズは再び足下から崩れ落ちそうになりながらも、その場で必死に耐えていった。

「い、いったい何が起こつたつていうんですか。……ヴィータさんは、ヴィータさんはどうなつちやうんですか!!」

自分を奮い立たせるように、必死に声をあげる。

どうなつてしまうのか。その最悪の答えを口にするものはこの場にはいない。

だがどうしたらいいのか。その答えを伝えるために、白衣を着た金髪のショートカットの女性は声を上げた。

「そのためにカイズ君を呼んだんです。……ここではあれだから、隣の部屋に行きましょう」

「シャ、シャマルさん。で、でも……」

「時間がないの。ヴィータちゃんを救いたいんだつたら、しっかりと！」

「——はい。わかりました」

ヴィータを救いたいなら。それはまだ彼女を救う手段があるということだ。

その可能性があるというのなら。今は狼狽している場面ではない。カイズは眠り続けるヴィータを横目に、シャマルと共に病室を後にするのだつた。

巨大な液晶モニターが取り付けられた簡素な部屋。カイズとシャマルは机越しに対面に座る。

シャマルは手元のリモコンを操作すると、モニターに映像を映し

た。

「時間がないから、細かい説明は省きますね。まずこれが今回ヴィータちゃんを回収予定だったロストロギア「デスイーター」です」

「死を食べるもの？ この黒い卵がですか」

「ええ、そうです。このロストロギアが発見されたのは、魔法や科学が全く発展していない未開拓エリアです。これが偶然作り出されたものか、流れ着いたものはか不明。とにかく管理局が気づいた時には、すでに危険な状態でした」

「シャマルは端末を操作すると、554人という数字を表示する。」

「この数字はなんですか？」

「これは。……このロストロギアのために犠牲になった人の数です」

「——ッ」

「このロストロギアは人の死によって羽化するものなの。……いいえ。正確に言えば人の死の記憶が一定に達するとといったほうが正しいかしら」

「人の死の記憶？ その記憶を作りたいためだけに、人を殺し続けたってことなんですか」

「ええ、どうやらそうみたいなの。だけど化学兵器も魔法も存在しない未開拓エリアでは、このロストロギアが羽化するための死の記憶が全然足りなかったのよ。……だけど、そいつは見つけてしまったの。多くの死の記憶を魂に刻み込んでいる人物を」

「……………それが、ヴィータさん」

「ええ。カイズ君も知っているはずですね。——闇の書事件。私たちがはやてちゃんと出会おう前にしてきた数々の虐殺の記録を」

「それは。……はい」

ヴィータのことを思い出した高等部から局員になったばかりの時代。とにかくヴィータに近寄るにはどうしたらいいか。ヴィータのことを何でも知りたいと、調べ回っていたうちに、その記事とは何度もぶつかった。

魔法が発達していない未開拓地。そこで暮らす人間からは地球と

呼ばれている場所で、最後の闇の書事件は起きた。

多くの人や次元を破壊してきた闇の書事件は、今のエースオブエース高町なのはやフェイト執務官。それに闇の書事件に大きな理解を持つクロノ総督やリンデイハラオウンなどにより、犠牲者0という奇跡的な終演を迎えている。

だがそこに行き着くまでの闇の書の暴走は、語るのも苦しいほど悲惨たるものだった。

カイズの顔を見て、シヤマルは全てを語りとったのだろう。闇の書の説明を省くと、話を続ける。

「私たちは闇の書が暴走するたびに記憶がリセットされて。だからこそ、毎回同じ過ちを繰り返してきました。なので今のヴィータちゃん自体には、人を殺した記憶などは存在しません。ですが、記憶になくとも記録には刻み込まれていると思います。……………私たちの心の中に」

「そ、それじゃあ、そのロストログアが大量の人の死の記憶を読みとつたら」

「それは完全に羽化します。そして記憶を荒らされたヴィータちゃん は、全てを喪失するか。……………最悪、さい、あくは」

そこから先を言いたくないのだろう。だがそれはカイズも同じ気持ちだ。カイズは思い切り机を叩くと、シヤマルに詰め寄る。

「ど、どうしたらいいんですか。どうすればヴィータさんを救うことができるんですか」

「……………そのためにカイズ君を呼んだんです。きっとこれはカイズ君にしかできないから」

「俺にしか、できない?」

「ええ。———順を追って説明していくわね。まずはヴィータちゃんを救う方法。管理局の機器とヴィータちゃんと同じ存在であるヴォルケンリッターが架け橋となって、ヴィータちゃんの深層心理に進入できるようにします。ロストログアが魂の記録を奪うためには、今のヴィータちゃん意志を破壊しなければいけないみたいなの。それを破壊される前に、対象者にはロストログアの破壊をしてもらい

ます」

「それが、俺、なんですか……」

「ええ。ちなみにこの術は相手にもものすごい負担をかけます。多分二人以上は、ヴィータちゃん精神が持たないと思うの」

「ま、待ってください！」

「どうしたのカイズ君？」

「どうしたのじゃないですよ。何で、そんな重大な役目に俺が抜擢されたんですか。それに相手はロストログア、俺なんかより、高町さんやはやてさんのほうが適任だと思います」

そう言葉にするカイズは、責任から逃れようとしているわけではない。本当にヴィータが大切だから。だからこそ、たかだかBクラスの自分がいくよりも、AAAからS+までいるメンバーから抜擢するのが最良であると判断したのだ。

そんなカイズの気持ちはもちろんシャマルもわかっていた。わかっているからこそ、その意見を却下した。

「そう、本当ならそうするのが一番です。ですが、深層心理にダイブするためには、条件が二つあります。——その一つが今ロストログアがダイブしている深層心理の記憶に、登場している人物はその世界に入り込めないということ。……ロストログアが死の記憶を求めているなら、きつとロストログアは闇の書事件の記憶に入り込んでいます。だから私たちはもちろん、なのはちゃんやフェイトちゃんも入ることはできないの」

「そ、そうなんですか。……なら、俺が。——いいえ、それでも俺なんか！」

今すぐにもヴィータを助けにいきたい。その想いで、思わず了承しそうになる。だが、彼女を本当に助けたいのなら、それは早算すぎではないだろうか。

カイズは顎に手を添えると、思いついた答えを口にする。

「それなら元機動六課のメンバーに頼んでみるのはいかがでしょうか。あそこならティアナ執務官を筆頭に、優秀なフォワード陣がいるはずですよ」

「私ももちろんそれは考えました。……だけど、もう一つの可能性を考えたら駄目なのよ」

「もう一つの可能性。……はっ、それってもしかしてゆりかご事件のことですか」

「ええ、そうよ。ロストログアが死の記憶を求めらるなら、あつちの記憶に行っている可能性は十分に考えられる。つまりその時点で元六課のメンバーを向かわせるのも、すぐく賭になっちゃうの」

「だったらもう自分でいいのではないだろうか。きつと自分にしかヴィータを救うことはできない。」

「はやる気持ちと、どうしよもない焦りで、カイズは今にも席から立ち上がりそうになる。」

「だがそんな自分を全力で押さえ込むと、さらなる質問をした。」

「……だ、だ、だった、だったら、ヴィータさんに何の関係もない優秀な魔導師が、い、いけ、行けばいいの、では」

「それが一番無理なんです。——ヴィータちゃんの深層心理に入り込むということは、つまりヴィータちゃんの記憶に入り込むということにもなるの。ヴィータちゃんの記憶にいない人は、ロストログアみたいに多くの人の意志を取り込んでいないかぎり、存在し続けることができないの。——逆に闇の書事件やゆりかご事件に何の関わりもなく、そうであっても、ヴィータちゃんの記憶に強く残っている人なら。……ヴィータちゃんの記憶で存在し続けることができます」

「……だからこそ俺が選ばれた」

「そこまで説明されれば、もう自分を押さえ込む必要などない。カイズは爪を立てていた太股から手を離すと、勢いよく立ち上がった。」

「行きます。行かせてください。絶対に、必ず、俺がヴィータさんを救ってきますから」

「——カイズ君。ありがとう」

「こちらこそ、俺を選んでくれてありがとうございます」

「それではすぐにでも準備を始めます。カイズ君は十五分以内にダイブできるように、最低限の身支度を整えてください」

「わかりました！」

カイズとシャマルは弾かれるように外に飛び出すと、それぞれの準備を始めていくのだった。

夢の中へ

時間にして15分。ヴィータの深層心理にダイブする準備は急ピッチで行われた。

その間にカイズはシグナムに渡された黒のジャケットを身につけていた。

管理局の黒衣と違い、腰のまでの通常のジャケットは一見すれば普段着にも見える。

だがシグナム曰く、この服にはヴォルケンリッター達の魔力が込められており、ヴィータの深層心理に入り込みやすくなるらしい。

本当は歴とした管理局のジャケットにほどこすべきだったが、時間が惜しくその場にあつた服に付与したようだ。

最後にカイズは二つのデバイスを握り込む。そしてヴィータの横に設置された簡易ベッドに横になった。

「あとはどうしたら？」

「先ほど管理局で借りてきた機器を取り付けます。少し痛いかもしれませんが、いけど我慢してね」

「わかりました」

自分の了承を得ると、シヤマルが体にいくつもの機械を取り付ける。時々チクリと体が痛んだが、それくらいのものだ。

シヤマルは機器の取り付けを終えると、口を開いた。

「これから私たちとはやてちゃん力で、ヴィータちゃんの深層心理への道を作り出します。でもカイズ君は何もする必要はありません。……そのかわり、その後のことはお願いね」

「はい。……まかせてください」

カイズは覚悟を決めて、ギユツと手を握りしめる。そんな彼の手をはやては優しく包み込んでいった。

「こんな重大な役割を任せてもうて。堪忍なカイズ君」

「謝らないでください。必ず、絶対に、何とかしてきますから」

「ありがとな、カイズ君」

涙を拭いながら、はやてがそつと離れる。その様子を見て、シヤマ

ルは最後にと言葉を述べる。

「カイズ君。これから話すことは絶対に忘れてはいけないことです。だからしっかりと聞いていてください」

「はい。わかりました」

「カイズ君はこれからヴィータちゃんの深層心理に飛び込みます。ですがそこは言ってしまうば夢の中です。そこでカイズ君が死んでも、現実で死ぬということはありません。ですが、夢の中で命が費えるということは、それはすなわち深層心理から追い出されることを意味します」

「要するに、ある程度無茶な戦法はとれる。でも無理をしたらそこまですることですね」

「そうです。あと、ここからが一番大事なことです。——カイズ君。貴方はこれから過去にタイムトラベルするわけでも、転生するわけでもありません。あくまで今のヴィータちゃんが見ている過去の記憶に飛ぶだけです。だから常に強く心を持つことを忘れないでください。ヴィータちゃんのことを想い、ヴィータちゃんに強く想われているカイズ君なら。きっと夢の中で誰よりも強い力を発揮できるはずだから」

「——はいっ！」

「それでは準備をします。すぐに意識が遠くなると思うから、それに身を任せてください」

「よろしくお願いします」

いよいよその時がきた。カイズは緊張のなか、額から汗が流れるのを感じる。だが横で眠りにについているヴィータの姿を見ると、自身を強く戒めた。

絶対に失敗は許されない。——必ず、ヴィータさんを救うんだ。

その決意と共に、眠気がとカイズを襲う。カイズはそれにあらがうことなく、ゆっくりと瞳を閉じていった。



「ハッ！　こ、ここは!?」

暗闇から目覚めた瞬間、カイズは世話もなく辺りを見渡す。大木が並ぶその場所は、どうやら山のようなようだ。月夜に照らされたその頂上で、カイズは眼前の街を見つめた。

「ここが海鳴市、ヴィータさんが昔住んでいた場所か」

資料通りの街並みに、まずはダイブがうまくいったことを安心する。

「さて、まずはどうしたらいいかな。ここら辺の地理とかを知っておきた、うおっ！」

とにかく情報収集。そう思いカイズが辺りを見回すと、海鳴市の先に見えるはずの街並みが、蜃気楼がかかったようにボヤけていることに気づく。

「いったいこの街に何の異変が。そう思うと同時に、シヤマルの言葉を思い出した。」

「そうか。ここはあくまでヴィータさんの記憶の中。ヴィータさんの記憶に曖昧なものは、しっかりと存在できないのか」

隣街がこんな姿では、ヴィータの記憶にないものなど姿を維持することすらできないであろう。

そんな中でも、自分の姿が何の乱れもなく存在している。カイズはそんな自分を誇らしく思いながら、視線を降ろした。

「よく見てみると、地面なんかも結構あやふやだな。山道なのに、ずっと平坦な道が続いてて。きつと山道はこういうもの。そんな記憶で作られてるんだらうな。——んっ?」

自分の言葉に引っかかりを覚える。山道の地面は確かにあやふやなものだ。だが今自分がいる頂上はどうだろうか。木々の配置はしっかりしており、大小もそれなりに分かれている。

さらにこの場所から見える海鳴市の景色だ。街灯などで綺麗に照

らされたそれは、とても想像の域で作られたものなどではない。

「ということは、この場所はヴィータさんにとってしつかり記憶している場所ということ。だけどこの頃のはやてさんは足が悪くて、一緒にこんなところにこれるはずもない。……………それってつまり」

『魔力反応。マスターきます！』

「——ッ！」

虚をついた魔力攻撃に、相棒が先に答えにたどり着く。カイズは横に大きく飛ぶと、転がりながらその攻撃を回避する。

ズンッ！　ズズンッ!!

地面に力強くめり込む二つの鉄球。当たっていれば骨折程度ではすまないだろう一撃。

この攻撃方法は、教導の実技試験の練習中何度も見てきた。カイズはデバイスを戦闘態勢にすると、両手に黒刀を握り込む。

そして夜空に佇む紅い少女を見つめた。

「はっ、おめえがシヤマルの見つけた魔力反応か。管理局にしては変な格好だが。……………まあ関係ねえか」

紅いゴシッククロリータのような服を着た少女は、相棒であるハンマーを肩に乗せると「フン」と鼻を鳴らす。

自分を落盤事故から助けてくれたあのときからずっと変わらない容姿。見間違えるはずもない。見間違えるわけがないのだ。

自分は彼女を救うためにここに来たのだから。

「……………ヴィータさん」

「あん？　何でおめえがあたしの名前を知ってるんだよ。まっ、そんなことどうでもいいか。——あたしは。あたし達は、はやての為に止まってるわけにはいかねえんだからよ！」

ガシヤリと金属音が響くと、空薬莖がはじき出される。

カートリッジロード。その行動を見れば嫌でも理解できる。

ヴィータは本気で自分を倒そうとしているのだ。

「ヴィータさんやめてください！　俺はヴィータさんを救うために——」

「あたしを救うため？　だったらおとなしくリンカーコアをよこしや

「がれ!!」

「ヴィータさんッ!」

「うっせええええええっ! 行くぞアイゼン!!」

グラーフアイゼンにブースターが生成される。ヴィータはその噴射に体を預けると、カイズに襲いかかっていたのだった。

理性と本能

「くそ、いきなりこんなことになるなんて!」

木々の間を走りながら、カイズは苦笑いを浮かべる。

「このちよこまか動きやがって!」

ヴィータは空中に静止したまま、三つの鉄球を放つ。

この軌道は、以前見覚えがあるぞ!

カイズはその場でブレーキをかけると、右へ、そしてそのすぐ後の左斜めにステップを踏む。

軌道がわかって紙一重。カイズは再び木々に紛れると、山道を駆け抜ける。

「ヴィータさんやめてください! 俺です。カイズですよ!」

「戦闘中に自己紹介なんていい度胸してるな。そこだああああっ!」

ヴィータはラケーテンハンマーの体勢に入ると、再度攻撃を仕掛ける。その勢いは木々などが存在しないかの如く、それらを伐採していった。

だがそこに木々は確かに存在している。障害物のためほんの数秒、その数秒遅くなった攻撃をカイズはギリギリのところまで避けていった。

「ぐっ、あぶな!」

「ま、また避けやがった!」

ブースターの勢いのまま距離をとるヴィータ。カイズは息を整えながら、相棒に語りかける。

「説得は通じない。まあこの頃のヴィータさんは俺のことなんて知るはずもないからな」

『さらに八神はやて様を救うという使命を帯びていますしね。実力で何とかしない限り、止まることはないでしょう』

「じゃあその実力の差はどのくらいだ」

『50:1と言ったところでしょうか。この頃のマイクリエイターは、戦法が力押しです。ですが実力はAAA以上あります』

「つたく、ハッキリ言ってくれるな！」

——ズンツ！ ドスンツ！

再び鉄球が後方に抉り込まれる。先ほどよりも距離が近い。あと数分も経てばこちらの動きにも慣れ、直撃も免れないだろう。

「このまま戦い続けたら俺の勝率はどれくらいある」

『マスターが感情的にならなければ。……92パーセントの確率で勝てるでしょう』

「そうか。勝てる可能性は8パーセント。……ん、今なんていった」

『感情的にならなければマスターの勝率は92パーセントです。ほぼ負けないと踏んで間違いありません』

「……そうか。って、ここまで実力差があつてどうしてそんな勝率が高いんだ、よっ！」

さらに精度の上がつた鉄球を、今度はヘッドスライディングで回避する。逃げるだけでも精一杯なのに、ここからどうしたら勝てるというのだろうか。

そんなカイズに対し、デバイスは淡々と言葉を並べる。

『ここにいるのはあくまで過去の記憶のマイクリエイターです。その時の戦闘記録は全て私の中に存在します。そしてこの攻防を通して、そのデータが有効であると判断しました』

「そ、それじゃあ本当に何とかなるのか」

『しかしチャンスは一回です。マイクリエイターがこちらの戦力を把握していないからこそ奇策になります。油断がなくなった瞬間、マスターに勝ち目はありません』

「——わかった。補助を任せるぞ」

『了解しました』

カイズはその場で足を止めると、一気に横道に逸れる。そしてあるうことか、見晴らしのいい広場に飛び出た。

「逃げる場所を間違えたみてえだな！」

どちらにしても遠距離では埒があかない。ヴェイターはハンマーを構えると、カイズに向かい叩きつけた。

「——フッ！」

「な、よけやがった！ この!!」

「——ハッ！」

「こいつ、急に動きが！」

こんな近接で戦っているのに、攻撃が届かない。全てをギリギリのところまで避けられると、ヴィータに焦りが生まれる。

「この、舐めやがって！」

避けられるなら、避けても余波で致命傷を負う一撃を浴びせればいい。ヴィータはその場で飛び跳ねると、ハンマーの側面にドリルを生成する。

「ぶちぬけえええええっ！」

「うおおおおおおおっ！」

カイズは左手を構えフィールドを展開するとヴィータハンマーを受け止めた。

「なっ、こいつ、どんだけ堅い防御してるんだよ！」

「ふっ、ふっふっふっ」

こええええええ！ ちよつとでもズレたら死ぬじゃねえかよ！

この防御はデバイスの指示だ。座標を指定するので、ドリルの先だけに集中してフィールドを展開する。そうすれば、カイズの魔力の半分ほど費やせば、攻撃を止められるはずだと。

攻撃を予測できるのなら、避ければいいのでは。カイズはそんなことを頭に浮かべるが、デバイスを信じ余裕があるように張ったりを見せた。

「ぐううううっ、くそー！」

全ての攻撃を力づくでねじ伏せてきたヴィータは、初めて攻撃を防がれたことに困惑したのだろう。頭で考えるよりも早く、後退を開始する。

「そこ、だっ！」

だがこのまま逃がすわけがない。カイズは右手に持つベルカ式の黒刀を投げつける。高速回転してヴィータに襲いかかる一撃。その攻撃をヴィータは。

「あつたるかよー！」

難なく避けて見せた。

追撃など百も承知だったのだろう。その表情に焦りはない。だからこそ、その後彼女が焦っている顔がハッキリと見て取ることができた。

高速回転する黒刀。それはまるでブーメランのように半円を描くと、再びヴィータに襲いかかる。

「なっ、ぶねっ!!」

このままでは押し負ける。ヴィータは悔しそうに舌打ちをしながら、空に飛び上がった。

「は、初めて通じたな。黒刀二本の特性を生かした攻撃」

『今のマイクリエイターは、この二本の剣が引き合う性質であることを知りませんからね。さて、魔力のチャージはできましたか』

「聞くなよ。勝手にやってるくせによ」

二股の黒刀の周りに魔弾が8つほど生成される。

見た目は派手だが、中身がスカスカの張つたりの攻撃。その中身を知らないヴィータは、自らを囲うようにフィールドを展開させる。

「はっ、だったらお前はあたしのフィールドを突破できるか」

見るからに密度の高いフィールドは、カイズの全力を持ってしても絶対に突き破ることはできないだろう。

それがわかりながら、8つの魔弾を解き放った。

『高町教導官との戦いと同じですね。高町教導官はマイクリエイターのフィールドを、アクセルシューターで削りきりました。ですが、マスターの魔力ではそれはできません』

「わかってるよ。だからこそこうするんだろ。——ブレイク!」

カイズは起動トリガーを口にする。その瞬間。ヴィータのフィールドの直前まで迫った魔弾が全て爆散した。

周りに煙が浮かぶと、ヴィータは目を白黒差せる。

「め、目くらまし。だけどフィールドを張ってる限り、そっちの攻撃はくらわないぞ!」

攻撃と同じく防御にも自信はある。ヴィータはカートリッジをロードすると、さらに防御を固める。

「……………どうした。どこからくるっ？」

息を飲みながら、全包围に意識を向ける。

見えないことと、いつ攻撃がくるかわからない緊張感。そして自身の攻撃を受け止めきれぬ魔力を持つものが、どれほどの攻撃をしているのか。

ジツと待ち続けるヴィータの精神消耗はかなりのものだろう。だがどれだけ待ち続けようと、その瞬間はやってこなかった。

煙が晴れ地上を見下ろす。しかしそこに男の姿はない。

そこまできてヴィータはようやく気づく。

「……逃げた？ くそっ、まだ遠くには行ってないはずだ！」

フィールドを解除すると、すぐに森の中に目を向ける。

そして、そこでもようやく気づかされるのだ。

「——フッ！」

自分が完全に相手の策に乗ってしまったことに。

ドンピシャだ。ヴィータさんの背後を取ったぞ。

自分の魔力のほぼ全てを込めた跳躍。そしてあまりカスをかき集めて刃に乗せた一撃。

だがこの攻撃を持ってしても、ヴィータを倒すことはきつとできないだろう。

だがある程度の致命傷を与えればそれでいいのだ。

その隙に街中に逃げれば、それでヴィータの追撃を振り切ることはできる。

すみません、ヴィータさん。でもこれも全てヴィータさんを救うためなんです。

振り降ろされた黒刀がヴィータの腰に向けられる。

タイミングは完璧。この攻撃は必ず当たる。

奇襲によりやく気づいたのだろう。困惑した顔のヴィータと視線が重なる。

『——カイズ』

その瞬間、ヴィータの笑っている顔が頭に浮かぶ。

自分が大好きで。そして自分のことも好きだと言ってくれた大切

な女性の姿。

ここにいるのはそのことを覚えている彼女ではない。

それに例え彼女を傷つけようとも、ここは夢の中。実際にヴィータが怪我を負うわけではない。

それはカイズもわかっている。わかっていたのだ。

「ぐっ！」

彼女を傷つけないという本能が。

例え夢の中だろうとそんなことをしたくないという理性が。

カイズの動きに全力でブレーキをかける。

「はあ、はあ」

首の皮一枚。振り切るはずだった刃は、彼女のバリアジャケットをほんの少し斬っただけで、完全に止まってしまった。

どんな理由があろうとも、自分にヴィータのことを斬るなどできるはずがなかったのだ。

「はあ、はあ、はあ、——ぐっ！」

瞬間、左わき腹に鈍痛が走る。これがしとめきれなかった代償だ。

容赦のないヴィータの一撃が深く抉り込まれると、元々跳躍していただけのカイズは一気に地面にたたき落とされる。

「ぐっ、がはっ！」

衝突と共に胃の中からこみ上がるそれをそのまま吐き出す。茶色の大地に降り懸かる吐血。その量を見ると、これは参ったと、顔を手のひらで覆ってしまう。

そんな惨状を見て、デバイスが電子音をあげた。

『ちなみに、マスターが感情的になったときの勝率は0パーセントです。すね』

「……言うのが遅いんだよ。でもま、どっちにしる無理だったけどな」
もう一步も動けない。カイズは大の字になって降伏のポーズを取る。そんな彼の姿を見て、ヴィータもまた地上に降りてきた。

終わってみればヴィータの圧勝だ。だがヴィータの顔はどこか優れないものだった。

「……どうして最後の一撃を止めたんだ。お前ぐらいの魔力量だった

ら、あれで決まっていたはずだぞ」

「ああ、無理ですよ。ヴィータさんのハンマーを止めたのは直径一センチほどのピンポイントフィールドで止めただけ。それに全力で斬りかかっても、驚くだけでそこまで大きなダメージにはなりませんから」

「……そうか。まあ理由はどうであれあたしの勝ちだ。お前からリンカーコアはもらう。それでおしまいだ」

「……ですね」

ヴィータの手がカイズの胸元に向かう。

情報ではリンカーコアを奪われると、しばらく魔力行使ができなくなるはずだ。

果たしてロストログアとの戦いまでに、本調子に戻ることはできるのだろうか。

だがどれだけ考えても仕方のないことだ。

もう自分は指一つ動かすことも――。

「貴様が最近の事件の犯人か！ よくも局の仲間達を!!」

森の先から聞こえる声。見覚えのある管理局の黒衣を着たその男は、チャージの終えた長距離射撃砲をヴィータに放つ。

そうだ。この記憶にいる俺はあくまでイレギュラーな存在。この場所で戦った本当の人物がいるのは当たり前じゃないか。

完全に虚を突かれた全力の攻撃に思考が停止するカイズとヴィータ。だからこそ、彼の相棒が叫び声をあげた。

『マスターー!』

「はっ、間に合えー!」

もう指一本も動かなかったはずだ。

もう駄目だと降伏するように倒れていたはずだ。

だけどまだ自分は体を動かすことができる。

それが自分のためではなく、ヴィータのためなら。

カイズはヴィータの前に立つと、その背で彼女を庇った。

「グッ、つつうー!」

背中が焼け付くように熱い。いやもう熱いのか痛いのか区別が使

いほどの感覚に段々と意識が遠くなってしまふ。

「あつ、やばい。これ、もう駄目かも」

ここでどんな痛みを負おうとも死ぬことはない。だが死ぬことはなくても、ヴィータを救うことができなくなってしまふのは確かだ。

カイズは本当に力つきたと、思い切り地面に膝を突く。

「すみません。……ヴィータさん」

「な、何だよ。すみませんって、なんで、なんだよ。何なんだよお前は。

——くそつ、ちつくしよおおお！」

三発目。ヴィータは最後のカートリッジロードをすると、管理局の人間に襲いかかる。

死に体の自分など、あとに放っておいても問題ない。きつとそういうことなんだろう。

でも、それでも。ヴィータさんを守れてよかった。

カイズは張っていた肩肘を降ろすと、痛みのまま地面に崩れ落ちていくのだった。

知らない秘密

——ポツン。

何かが頬に当たる感触がする。
いったい自分はなにをしていたのだろうか。

その答えを知るために、意識が覚醒するままにカイズは目を開いた。

「あれ、ここは……？」

目に映るのは、記憶にない部屋だ。だが部屋の内装をみると、どこか懐かしさがある。そんなデジヤヴユ感にカイズは襲われた。

「……ようやく目覚めたな」

「ヴィータさん？ それにシヤマルさんも、どうしたんですか。あれ、こんな部屋はやてさんちにありましたっけ？ あつ、今日の服はこの前の公園のときみたいですね」

はやてのうちには何度も遊びに行っているが、いまいち記憶にない部屋。だがヴィータの隣にある呪いウサギをみると、カイズは頭に疑問符を浮かべる。

「あれ、ヴィータさん。部屋の模様替えしましたか？」

「模様替えもなにも、お前に部屋を見せるのは初めだよ。……なつ、言った通りだろシヤマル」

「そうみたいね。ヴィータちゃんどころか、私の名前も知ってるみたいだし」

「それは何度かお世話になってますし。シグナムさんとザファイラさんは下ですか？ というか、この部屋随分暗いですね」

「……なつ」

「ええ、そうみたいね」

ヴィータとシヤマルは互いに視線を合わせる。するとシヤマルは右手を天井に掲げた。

その瞬間、カイズの手足は緑の輪で拘束される。

「あ、いててて。なんですすかいきなり」

自分の意志で座ることもできず、カイズはうつ伏せに寝転がる形に

なる。ヴィータはそんな彼を見下すと、ベッドに腰を下ろした。

「おめえには聞きたいことがいろいろあるんだ。全部喋ってもらおうかな。あと嘘を言おうなんて思うなよ」

「貴方が嘘をついたらすぐにクラールヴィントで察知できるようにしてあります。このデバイスが揺れ動かない答えを期待しています」

目の前に見えるクラールヴィントが垂れ落とされる。

そんな状態までくると、カイズはようやく全てを思い出した。

「そ、そうか。今俺はヴィータさんの夢の中にいるんだった」

「おめえは勝手に口を開くな。あたしたちの質問に答えればそれでいいんだよ。あとここから逃げられると思うなよ。外にはシグナムが控えてるし、はやてのところにはザフィーラがいるんだからな。絶対に逃げられないぜ」

「い、いえ。逃げる気も人質を取るきもないんですけど。……それでも一つだけ言わせてください」

「なんだよ？」

「そ、その。……できれば毛布か何かを腰にひいてくれませんか。えっと、さつきからスカートの中がちらちらと」

「はっ？。こんな容姿の女の下着見てなにを興奮するんだよ。変なこと言つて煙に巻こうとしてるんじゃないやねえぞ」

「い、いえ。ほんと、生殺しなんで」

カイズがそう答えると、ヴィータはクラールヴィントを見る。全く微動だにしていないうそれは、嘘をついていないということだ。

「——なっ、なにってるんだよ！」

「いや、だからさつきから、あいたっ」

顔面に枕を叩きつけられると、視界が暗くなる。カイズは首を振ると、それをどかす。

そのほんの一瞬の間で、ヴィータは顔を真っ赤にしながら、スカートに毛布をかぶせていった。

ヴィータはギロリとカイズを見ると、わざとらしくせき込んでいく。

「ん、んん。それじゃあ最初の質問だ。お前は管理局の人間だな」

「はい、そうです。と言つても管理局には入ったばかりで、今はヴィータさんの元で立派な教導官を目指してがんばっています」

「……なんでそこであたしの名前がでてくるんだよ」

「いえ、それが本当のことなんで」

「——（ギロツ！）」

刺すような視線でクラールヴィントを見る。だが微動だにしないそれを見て、シャマルは肩を落とした。

「じゃあ次の質問だ。どうしてあたし達のことを知ってる。管理局はもうあたしたちの存在に気づいてるのか」

「えーっと、前半の質問は、何度も遊びに行ってるからです。後半の質問は。えーっと、この時点ではまだ確信にはたどり着いていないはずです。ですが、前回の闇の書事件の際に事故に巻き込まれてしまった、ハラオウン一家はある程度感づいていると思います」

「な、何だよ。前回の事件って」

「闇の書の暴走の事件です。無限に転生を繰り返す闇の書を封印のために移送していたときの暴走。そこでクロノ提督のお父さんが犠牲になってるんですよ」

「なっ、何言ってるんだ？ お前はなにデタラメなこと言ってるんだよ！」

「……………いえ、これは全部事実です。というか、俺の事情を全て話します。それを聞いた後で、いろいろと判断してください」

「お、おう……………」

あまりにも衝撃的なことが続いたからだろう。ヴィータとシャマルは息を飲むと、カイズの言葉を待つことしかできなかった。

今までの闇の書事件。夜天の書の話。これから起こる事件の結末。そして今ヴィータがどういった状況にあるか。

それら全てを話すのに、三十分ほどを有しただろうか。

微動だにしないクラールヴィントのように、二人は言葉を挟むことができなかった。

「——これが、俺に話せる全部のことです」

「……………はっ。じゃ、じゃああれか？ 今ここにあるのは現実じゃ

なくて、夢の中だっというのかよ。そんなばかばかしい話、だ、誰が信じると思ってるんだよ」

「まあ明晰夢ってなかなかできないみたいですね。それにこれは夢というか、過去の記憶といったほうが近いようですよ」

「とにかくデタラメ言ってるんじゃないやねえよ！ そんな馬鹿みたいな嘘について、誰が信じるって言うんだよ！」

「で、でもクラールヴィントは揺れてませんよね」

「テメエが何か細工してるんだろ！」

「それならどうしたら信じてもらえるんですか！」

「はっ、だったらあたしの秘密の一つでも言ってみろっというんだ。まっ、そんな秘密あたしにはないけどな」

あくまでカイズの話を確認したくないのだろう。秘密がないと公言しておきながら、秘密を言えと無理難題を押しつけられる。

秘密。秘密かー。

カイズはしばらく頭を悩ませる。ヴィータのことならいろいろと知っているが、そのほとんどは付き合い初めてからのことだ。

いまこの場にいるヴィータを納得させる秘密でなければ意味がない。これは困ったと考え込むと、ふと前回の公園でのが思い出された。

「あっ、あー、えーっつと」

「どうだ。何もないだろう」

「いえ、あるにはあるんですけど。とても言いにくいと言いますか。えっと、シャマルさん。クラールヴィントの嘘発見って、声ですか、心拍数とかですか？」

「どちらにも対応してますよ」

「えっつとじゃあ、ヴィータさん。ちよつと耳貸してもらっていいですか」

「な、何だよ。秘密なんて本当はないんだろ」

「いえ、あるんですけど。さすがに大声というのは憚られると言いますか、なんと言いますか」

カイズの困った顔を見ると、ヴィータは仕方なしにと彼に近寄る。

カイズはヴィータの耳元に口を近づけると、本当に小さな声で呟いた。

「えっと、ホクロのある場所を知ってます」

「ホクロなんて、そりやどこにだって」

「ヴィータさん。——のところにホクロがあるはずですよ。多分気づいてないと思いますけど」

「——って。えっ、なっ、はあっ!？」

「いや、だから」

「い、言うな言うな！　ちよつと待ってる。嘘だったらぶつとばしてやるからな!!」

ヴィータは顔をトマトのように真っ赤にすると、部屋から飛び出していく。世話しなく階段を下る音が聞こえると、どこかの部屋の扉が思い切り閉められたようだ。

だが数秒経つと、再び階段を駆け上がる音が家中に響くのがわかる。ヴィータは部屋の扉を壊れそうなくらい思い切り開くと、床に落ちていた枕を手につかんだ。

「——んツ!!」

「い、いた。嘘じゃなかったんだから枕で叩かないでくださいよ。秘密を言えっっていうたのは、ヴィータさんで」

「バカ、アホ、変態！　何であんな場所のホクロを知ってるんだよ！

お前はあたしの何なんだよ！」

「そ、それはですね」

枕で叩かれながらも、カイズはちらりとシヤマルのほうを見る。

今の状態では嘘でお茶を濁すことはできないだろう。どちらにしてもここまで明かしてしまったのだ。最後まで真実を答えよう。

カイズはゴロゴロと床を転がると、枕攻撃から逃げる。そしてヴィータの顔をジツと見つめると、その答えを口にした。

「俺は。——俺はヴィータさんの恋人です」

そう答えると、二人の視線がクラールヴィントに向かう。結局一度も動かなかったそれは、故障でもしているのではないだろうか。

そんな疑惑が部屋を支配し始めると、カイズはダメ出しと声を張り

上げた。

「俺はヴィータさんのことが大嫌いですよー」

——ブンブンブンブン！

このまま飛んでいってしまいそうなほど、クラールヴィントは回転をします。

ヴィータは頬を膨らませると、真っ赤な顔のままカイズを睨みつけた。

「おまえは。黙ってる!!」

渾身の勢いで叩き降ろされる枕。ヴィータはさらに布団や毛布を投げつけると、カイズの口と視界を完全に塞いでいくのだった。

この世界のルール

『ヴィータさーん。高町教導官のプロテクションはめちやくちや堅いですよー』

「うるせえ！ あたしに貫けないもんなんてないんだよ！」

ヴィータはハンマーをなのはを振り降ろす。だがカートリッジシステムを積んだレイジングハートを装備したなのはは、それを難なく受け止める。

『ヴィータさーん。そのアクセルシューターはプロテクションで防いだらじり貧ですよー』

「あんなちっこい魔弾で、あたしのプロテクションを突破できるもんか！」

なのはのアクセルシューターがヴィータに迫る。その攻撃は相手の面でなく点を徐々に削り、ヴィータのそれを狭めていった。

『ヴィータさーん』

「今度はなんだよ！」

『……………愛してますよー』

「ひゃ!? う、うるせええええええつ！」

ヴィータは顔を真っ赤にしながら、再びなのはと接敵していった。

ヴィータと出会ってから数日が経っただろうか。カイズは今までヴィータといたことを思い出しながら、いろいろあつて用意された八神家の一室を開ける。

そのまま引きっぱなしの布団の上に寝転がると、改めて知ったこの世界のルールをまとめていった。

「この世界はあくまでヴィータさんの記憶の中。俺が介入しようと

も、大体のことはその記憶通り進む。もし何かしらの改変を俺がしたとしても、それはなかったこととして記憶も進んでいく。これは確かなことだな」

実際小さなことだが、カイズのしたことはいくつもある。だがその全ては出来事としては起こっているが、結果として後の世界に反映されないのだ。

「だからこそ俺にできることなんてほとんどない。いや、何かしても何かしたという結果が残らないんだよな。しかもそれができる条件っていうのも。……んっ、少しもよおしてきたな」

カイズはブルブルと体が震えると、布団から起きあがる。夢の中でもトイレには行きたくないのだと、部屋から出るとそのままトイレに向かった。

一階に降りると、廊下にはシグナムとシヤマルがいた。カイズは『無駄』だとわかっていても、習慣で二人に頭を下げた。

「お二人とも、今日もお疲れさまでした」

目をくれることもなく、二人はそのままこちらに向かってくる。
「おっと、危ない」

カイズはそんな二人を避けるために、体をくねらせる。だが完全に避けきれず、肩がぶつかりそうになる。

——スカツ。

しかし肩にぶつかることなく、そのまますり抜けていってしまった。こんな不思議な現象が起きながらも、全くこちらを気にしない二人。そんな姿を寂しそうに見ると、トイレに向かいすぐ部屋に戻った。

カイズは再び布団に飛び込むと、ボーツとした眼差しで天井を見つめる。

「何で今回の事件は、過去改変とか過去転生とかじゃないんだろうな。こんな長時間誰にも相手にされない。……さすがに辛いな」

別段二人が不審者である自分を無視しているわけではない。いや、

まだ無視のほうがましだ。

それは意識があるが故に、意識しないようにしているのだから。そう、これがダイブ後に判明したもう一つのルールである。

ここはあくまで記憶の世界。つまりヴィータの記憶にないことは、あくまで今までこういうことがあったから、こうであろうという記憶でしか補われないのだ。

今のようにシグナムとシャマルが一緒に歩いている姿は何度も見たことがある。だがこの記憶の中に、カイズは存在していない。つまり二人はカイズのことを認識できないのだ。

それならこの前の嘘発見はどういうことなのか。

「俺がこの世界に影響を及ぼす方法。それはヴィータさんを介してでしか行えない。一番大変なところだよな」

例として、ヴィータをA カイズをB シャマルをCとしたとしよう。

Aはこの記憶を維持している存在である。つまりAが思ったことがこの世界では反映される。

なのでもちろんAがBやCを攻撃することができる。

次にイレギュラーであるBは、Aの記憶に存在してはいない。だが記憶の対象者であるAを攻撃することにより、Aがこの過去の記憶においてBに攻撃されダメージを受けたと錯覚させ記憶の改変することが可能である。

そしてBはCを攻撃することができない。Aの記憶にあるCはBという存在に攻撃を受けたという記憶が存在しないわけなので、それはAの記憶の中では当たり前だ。

それはCにも言えたことだ。Aの記憶において、CがBを攻撃したという記憶、並びにその存在を認識しているという記憶がないのだから、必然的にCはBの存在を認識できなくなる。

ただ例外は一つだけある。それはBがCを攻撃しているところを、Aが観察しているということだ。

BがCを攻撃した。それはつまりCがダメージを負ったということ。その認識をAがすることにより、この過去の記憶において、Bは

Cを傷つけたという記憶改変が起こるのだ。

そしてその原理を有すれば、CがBに干渉することもできる。以前の嘘発見がそれだ。

AがBを観察し、Bに対してCにしてほしいことを思う。そうすればここはAの記憶の中の話だ。実際にCがそういったスキルがあるにしろないにしろ、Aができると思えばCはその行動を起こすことができる。

だがそういった記憶改変はたとえしたとしても微々たるものだ。実際に過去に起きたことはそう変わることはなく、何事もなかったかのように流れ続ける。

この過去を大きく変革させる。それはロストログアが狙っているように、Aの意識をこの世界で殺すことだろう。

Aがこの世界で自分が死んだと思えば、それはつまり実際に現実の体が生きていようと、心はこの世界で死んでいるという錯覚を起こすことになる。

精神の死。これがロストログアの最大の狙いであり、何が何でもカイズが止めなければいけないことだ。

カイズは大きなため息をつく、ガックシと肩を降ろした。

「これがタイムスリップとか転生だったらな。事件の全容を話して、初めは相手にされないながらもしっかり努力して。いつしかみんなに認めてもらって。それで闇の書事件を最速最短で解決して、最後はみんなで真の敵を。ってなるんだろうけどな」

だが現実はいや、夢の中はそんなに甘いものではない。誰にも相手にされない日々、自分の存在のちっぽけさ。何より闇の書事件の体がわかつているのに、傷つき倒れながらも戦っているヴィータ達を見ていることがどうしよもなく辛かった。

「でもこういった行き違いがあっても、最後には全部うまくいくんだよな。それにここで余計なこととしても、結局は記憶の中の話で。……俺のすべきことは、ロストログアからヴィータさんを守る。それしかないんだよな」

「誰が誰を守るっていうんだよ。あたしより全然弱いくせによ。ほ

ら、夕飯持ってきたぞ」

「ありがとうございますヴィータさん！」

「別に今更だけだよ。……そういえば何ではやて達と一緒に食べないんだよ。確かにおまえのことは信用してないけど、もうそこまでう、疑つてもねえんだぞ」

「そう言ってもらえるのはありがたいですけど。……ま、まあ一家団欒を他人が邪魔するのも悪いかなって思いました」

カイズはヴィータから視線を逸らすと、ありきたりな言葉で取り繕う。

本当は自分だってみんなと食事をとりたい。だが認識という壁のせいで、自分の存在が空気に化し、なお且つ目の前で温かな家族団欒を見せつけられるのに、カイズは耐えられなかったのだ。

一度や二度は同席したことがある。いや、したからこそあの場にいるのなら、一人でいることを選んだのだ。

「ふーん。まあお前がそういうなら別にいいんだけどよー」

「せっかくの申し出なのにすみません」

「べつに。それじゃあ、さっさと机用意しろよ」

「あつ、すみませんでした。いま布団どかしますね」

カイズは布団をどかすと、ヴィータに用意してもらった小さな机を組み立てる。

ヴィータはそこにトレイを置くと、そのまま座り込んだ。

「あれ、どうしたんですかヴィータさん？　というか今日は随分と量が多いですね」

「お前は茶碗二杯分食べる気かよ。——あたしの分もあるんだから、当たり前だろ」

「えっ、だ、だけどせっかくのはやてさんとの団欒が」

「そのはやてが言ってたんだよ。最近お前の様子がおかしいから、一日ぐらい傍にいてやれって。……あたしはお前のことなんてどうでもいいんだけどよ。は、はやてがそう言ったからだからな！」

ヴィータは「ふんっ」とそっぽ向くと、ご飯をかきこみ出す。カイズはそんな彼女の言葉を聞くと、心が温かくなるのを感じた。

この記憶の世界において、はやてがカイズに対し干渉することはない。

だがそれでも傍にいてくれと言ったということは、ヴィータがそう思い、はやてがそう行動するように思ったということだ。

つまりこの改変はどうとろうとも、ヴィータがカイズのことを思ったが故の結果なのだ。

やっぱりヴィータさんは優しいな。

「な、なんだよ。いきなりニヤニヤしやがって」

「いえいえ。あつ、そうだ。明日はどういった予定なんですか？」

「あー、明日は久しぶりにじーちゃん達に顔だしとこうかなって思っ
てよ。さすがにあたしもシグナムもシヤマルもご近所に顔をださな
すぎてるしな」

「そうですか。—— だったら」

ヴィータが茶碗を置いたところを見計らうと、彼女の両手をギュツ
と握り込む。

そして渾身の笑みで言葉を続けた。

「だったら明日俺とデートしましょう」

「あつ？ デート?? デートって、わっ、わわわわっ!？」

聞き慣れない単語の意味を理解し、ヴィータは普段出さないような
困惑の声とともに頬を赤く染める。

「な、何馬鹿なこと言ってるんだよ！」

「馬鹿なことじゃありません。俺はいつでも本気です！」

「ほ、本気って。そ、そういうのは恋人同士が」

「俺とヴィータさんは恋人同士なんで問題なしですよ！」

「そ、それはお前のなかだけでだろうがああああつ！」

「ヴィータさんの中でもそうですっ！」

「わっ、ちよつと、そ、そんなに顔寄せるなよ」

「いやです。ヴィータさんがデートしてくれるっていうまで、俺はこ
の手を離しませんー！」

「ぐっ、このっ！」

「ぐおおおおおおー！」

互いに全力を込めて、手を握り離させようとする。

前に八神家で力比べをしたときは、死ぬ気（カイズを殺す気）のヴィータに一步及ばなかった。だがこのデートに賭ける想いは、自身の生死より重く大きい。

カイズはヴィータの手をひたすらに握り込み続けると、それを自身の胸元まで引き寄せた。

「な、何なんだよお前は。……………はあ、じゃあついてくるだけだからな」

「えっ、今なんて?」

「だから! あたしが外に出ていくのについてくただけだったらいいって言ったんだよ」

「それじゃあデートしてくれるんですね!」

「ちがーう! だからデートじゃなくて、ただお前があたしについていくだけだっ!」

「やったー。ヴィータさんとデートだー」

必死に否定するヴィータを尻目に、両手をあげてカイズは喜びを表す。

「くそっ、たく。何でこいつの前だとこんなに調子が狂うんだよ」

ヴィータは自身でもわからない感情に整理がつけられず、大きなため息と共に先ほどの妥協を後悔していくのだった。

届いた心

ショッピングモール街。カイズはヴィータのほうを向きながら、悔しそうに手を握り込み歩いていた。

「だあー、しっかし惜しかったですね。あともう少しでヴィータさんの勝ちだったのに。最後の玉がこう、ちよんってゴールの杭にぶつかってたら」

「でも当たらなかつたんだからあたしの負けなんだよ。っていうか、どうしてあたしじゃなくて、お前が悔しがってるんだよ」

「だってヴィータさん悔しかったですよね？」

「お、おう」

「だったら俺だって悔しいですよ」

「そ、そうか。………って、だから何でだよ！」

「何がですか？」

「………はあ、なんでもねえよー」

ヴィータが大きなため息をつくとき、カイズは困ったように、あたりを見渡す。すると、目の前にアイス屋があるのがわかった。

「そ、そうだヴィータさん。頑張ったで賞ってことで、アイスでも食べませんか？ 俺、奢るんで」

「何だよいきなり。それにもうすぐクリスマスだぞ。そんな季節にアイスかよ」

「えっ、あつ、そうですね。……すみません」

ヴィータの返答を聞くと、がっくしと肩を落とす。ヴィータはそんな彼をみると、「ふう」と小さくため息をついた。

「まああたしは動いたばかりだからアイスでもいいんだけどよ。お前は寒いんじゃないのか」

「———そ、そんなことないですよ。ヴィータさんと一緒なら、俺の心はどこだってぽっかぽかですよー！」

「ば、馬鹿叫ぶなよ！ どうしてお前はそんなに羞恥心がないんだよー！」

「それはヴィータさんのことがス———」

「ストップ、黙れ。とりあえずお前はあたしにバニラアイスを買う。それだけでいいんだよ！」

「ふ、ふあい」

「つたく」

ヴィータはカイズの口から手を離すと、大きくため息をつく。そんなヴィータをみても、カイズはニコニコと笑顔を浮かべるだけだった。

全くなんなんだよこいつは。

数週間前までは、ただリンカーコアを奪うだけの存在だった。

だがヴェルカの騎士である自分を圧倒し、魔力が強いかと思ったら、そこいらの管理局とそう変わらなくて。

そしたらこの世界が夢の中だとか、わけのわからないことを言い出して。

そうかと思ったらあたしのことを、す、す。……好きとか言い出して。

（本当はこんなところでアイスを買ってもらってる場合じゃねえのに。じいちゃんたちに顔出して、すぐにでも魔力を集めなくちゃいけないのに）

はやての体は日に日に悪くなっていくばかりだ。きつとこのままでは取り返しのつかないことになるかもしれない。

けどどうしてか、目の前の男を放っておくことが自分にはできなかった。

こいつの言ってることが、とても真実だとは信じられない。

だけど、嘘だと切り捨てることができない自分がいて。もう自分の中でも、考えがごちゃごちゃしてしまっていた。

「——さん。ヴィータさん？」

「ん？ どーしたんだよ」

「えっと、アイス買ったんでどうぞ。バニラです」

「ありがとうな。……お前のは？」

「俺のはチョコチップですね。このチップのコリコリした感触が好きだってヴィータさんが言ってたので」

「……………また現実の話ってやつか？」

「えっ、あつ、はい。……………そうです」

遠慮がちに言葉にする。ヴィータはそんなカイズの姿を見ると、降参だと両手をあげた。

「わかった、わかった。だったらお前の話を聞いてやるよ」

「それってどういうことですか？」

「……………お前のことを信じてやるっていうんだよ。ま、まあ、本当に信じるかはお前の話次第だけだよ」

「——ヴィータさん」

ヴィータがカイズのことを初めて肯定すると、彼は救われたように、柔らかな笑みを浮かべる。

この笑みだ。いや、笑みだけではなく、彼が落ち込んでいても苦しんでいても、何かが心の中で引っかかるような気がする。

目をきらきらさせながらこちらを見るカイズからピイツと視線をはずす。ヴィータは「ふん」と鼻を鳴らすと、ゆっくりとバニラアイスを食べ始めるのだった。

届かぬ力

公園のベンチ。トイレに行くヴィータに手を振ると、カイズは残りのアイスを一気に口に含んだ。

「やった。やった。やった。やっとヴィータさんに俺の心が届いたんだ」

この数週間は決して無駄ではなかった。カイズは嬉しそうに小躍りすると、ぐつと両手を握り込む。

「思えば長かったなー。でもこれで一步前進のはずだ。闇の書事件の進行はもう止められないけど、それでもヴィータさんが協力してくれるだけで」

「わ、わわ」

「おっと、危ないよつと」

喜んでいるのもつかの間。カイズは目の前で転びそうになっている男の子にスツと手を伸ばす。五歳くらいの子供だろうか。自分の蹴っているボールに転びそうになっている姿が、何とも愛らしかった。

「ありがとうお兄ちゃん」

「なんのなんの、今度はボールに転びそうにならないように気をつけるんだぞ」

「ボール？ あつ、僕のボールどこいったんだろう」

「それならあつちに転がっていったよ。待ってろ。いまお兄ちゃんが取ってくるから」

「——ありがとう、お兄ちゃん！」

カイズは機嫌よくスキップをしながら、転がっているボールを取りに向かう。

「ヴィータさんには信じてもらえたり、子供も助けられたし。今日は良いこと尽くめだな」

本当に今日はいいい日だ。

そう言葉にした瞬間、何か小さな引つかかりが生まれた。

何かがおかしい。

その引っかかりが、段々と大きくなる。

何かがおかしい。何かがおかしい。

手を伸ばして、男の子を助けた。それだけのはずだ。

何かがおかしい。何かがおかしい。何かがおかしい。

体が危険信号をあげる。だが喉まで出かかっている違和感をまだ吐き出すことができない。

何かがおかしい。何かがおかしい。何かがおかしい。何かがおかしい。

俺は何をした。転びそうになっている男の子の手を『掴ん』で。男の子にお礼を『言われ』た。

何かがおかしい。何かがおかしい。何かがおかしい。何かがおかしい。何かがおかしい。

そんなことがありえるはずがない。俺という人間は、本当はこの世界に存在してはいない。

存在してない俺はヴィータさん抜きでは誰にも干渉できない。だが一つだけ例外がある。

その例外は――。

『マスター！』

「うっ、おおおおおおつ!!」

叫びと共に黒刀を両手に構える。カイズはそれを交差すると、全力でプロテクションを展開する。

その次の瞬間、強烈な衝撃にカイズは足が浮く。目の前のソレは左手を振り放つと、プロテクションにヒビが入る。

「ま、まずい」

カイズは地面を蹴ると、ソレから一気に距離を取る。

『ガガガガガガッ。そうか、貴様が私と同じ存在か。今の今まで気づくことができなかったぞ』

男の子が高笑いを浮かべると、それを合図にしたように体の皮膚が溶け始める。

皮膚がなくなり骨が砕け、そこに残った黒い霧が全く別の形を形成

する。

イビツな二本の大きな角が生えた山羊のような顔。その胴体は黒い毛皮に覆われており、長く巨大な両手両足の三本の爪が、その異質さを際立たせていた。

「お前がロストロギア、デスイーターか」

『ああ、そうだイレギュラーよ。まさかあの女と一緒にいたお前が、イレギュラーだとは。……近すぎる故に私も気づかなかったぞ』

「俺がヴォルケンリッターの一員だとも思ったのか？ だったららんだ遠回りだったな」

『——いや、そうだとは思わなかったさ。があああああつ！』

デスイーターは天に叫び声をあげると、舌をなめずる。その異質な存在に、カイズは一瞬足が竦む。

蹴落とされるな。俺は絶対にヴィータさんを救わなくちやいけないんだ。

むしろ相手のほうから姿を現してくれたのなら、行幸ではないか。カイズは両手の黒刀を構えると、相手の出方を伺う。

『こないか。なら、私からいくぞ！』

「ぐっ、速い！」

デスイーターは地面を踏み抜くと、獣の如き直進を見せる。真つ直ぐ振りおろされる巨大な三本爪。カイズは思い切り横飛びをすると、その攻撃を回避する。

地面を三回転がると、その勢いのまま立ち上がる。デスイーターは再び地面を踏み抜くと、カイズに突撃を仕掛けた。

「おい、何か作戦はないのか相棒」

『……………』

「黙ってちやわからないぞ。ぐっ」

再びの攻撃を、またもカイズはギリギリのところまで回避する。今度は転がるだけでなく、先ほどより距離を取った。

戦闘が始まり約十秒。そこまで来てようやく、カイズの相棒は声をあげた。

『……………あの攻撃に対して、私に助言できることはありません』

「助言できないって、どういうことだよ」

『あのデスイーターは。……真っ直ぐにしか向かってきません』

「だ、だったら、それに対しての戦法で」

『いえ、無理なんです』

「な、何がだよ」

『——来ます！』

相棒の声を聞くと、カイズは真正面を見つめる。またも直進してくるそれを見ると、カイズはその場で跳躍する。

「何が無理だよ。やるしかないんだよ」

カイズは魔弾を三発生成すると、すれ違い様にそれを打ち込む。

だがデスイーターはまるでその攻撃がなかったかのように、再びこちらを見つめる。

そして四度目になる突撃を仕掛けた。

「な、何だ。どうして何のダメージもないんだよ！」

困惑するままに、再び敵の攻撃をかわす。先ほどよりも動きを捕らえたそれに、今度は服に切れ目が入る。

相手にダメージを与えることができない。その理不尽に頭の中が混乱し始める。

デバイスは未だに何も言おうとはしない。そんなデバイスに変わり、目の前の存在は大きな笑い声をあげた。

『あーっはっはっはっはっは、そうか、そうか。デバイスのほうは理解していても、人間のほうが理解していないか。それとも人間、ただ認めたくないだけかな？』

「な、何を言ってるんだ。どうして俺の攻撃が効かないんだ！」

そのカラクリがわからなければ、このロストログアを攻略することができない。カイズの中に焦りが生まれるなか、デスイーターはつまらなそうに声を上げた。

『攻撃が効かない？ それは当たり前だ。お前は这个世界に入り込んで何か勘違いをしたんじゃないのか？』

「勘違い。……俺が？」

『ああ、そうだ。確かにここは夢の世界だ。だが私たちはどうだ。こ

の世界が夢の世界であることを知っているし、ここにいる私たちは現実のものと変わらない。……その意味を、そのデバイスはわかっているのだろ』

言葉を向けられると、カイズの目が黒刀に向かう。デバイスはカイズが答えを望んでいることを感じると、弱々しく光をあげた。

『マスターの魔力ランクはまだ成り立てのBクラスです。しかしあのロストロギアの実力はAAA以上のものがあります。マイクリエーターと同じぐらいの実力があるということですよ』

「それってつまり……」

『……マスターの魔力では、デスイーターの障壁を突破できません。さらにあの者の体は強固です。例え突破できても、ダメージはたかがしれているでしょう』

『そういうことだ。いくぞ人間ツ！』

愚直なまでの一直線の攻撃。だがそれでいいのだ。

始めにヴィータと相対したときのように、カイズにはどう頑張ろうともヴィータを倒すことができなかった。

それと同じだ。絶望的なまでに力量の離れたカイズに対して、デスイーターが何かを考える必要はない。

近づいて殺す。それでお終いだ。

「くっ、くそっ！」

カイズは左側に回避しようとする。だがここにきて左右の賭がはずれてしまう。

一直線に向かってくるデスイーターのラインに入った瞬間、カイズは黒刀を交差しプロテクションを展開する。

『無駄だ！』

強靱な三本爪がカイズのフィールドに突き立てられる。魔力がぶつかり合い強烈な火花があがる。だがそれもほんの少しの間だ。

プロテクションにヒビが入ると、その勢いのまま爪がカイズに迫る。

「ぐっ、このー！」

だがそのまま貫かれるわけにはいかない。ベルカ式の黒刀でその

爪を押しえ込むと、その場でふんばりを効かせた。

絶対に諦めない。そんな懸命に耐えるカイズのを見ると、デスイーターは二タリと顔を歪めた。

『貴様はこの少女の夢に入り込んで、何か勘違いをしていたみたいだな』

「な、なにを」

『貴様は夢物語の主人公にでもなったつもりか？ お前はなー、この少女に強く残る記憶の中で誰よりも弱い。Bランク程度が何を思い違いしていたんだ』

「そ、それでも俺はヴィータさんを助けるんだよ！」

『奇跡を信じてか？ 神に祈ってか？ だがその気持ちもわからないわけではない。弱きものはそうやって、目に見えない何かにすがり付くことしかできないのだからな。フンツ！』

フリーだった左の爪が横風ぎに放たれる。だがこのまま後退したら、右腕に押し負ける。カイズは顔を逸らすと、ギリギリのところまで爪を避ける。しかし完全に回避できなかったそれは、頬にスツと傷を付けていった。

助けて。助けて神様。

その瞬間だ。脳裏には見たことない子供の姿と声が響く。その子供は何かから必死に逃げていた。

だが路地裏に追い込まれると、祈るように両手を合わせ狂ったように叫んだ。

お願いします。どうか助けてくだ——。
グシャ。

何かが潰れる音と共に、子供は声をあげなくなる。路地裏に広がる赤色はいつたいたいなんであろうか。

「はっ！ ぐそー！」

再び放たれる左手を、デバイスで受け止める。すると、次はフリーになった右腕でカイズのわき腹を浅く切り裂いた。

そしてまた。記憶にない光景が脳裏を過ぎった。

大丈夫だよパパ。きつと正義の味方が僕たちを助けてくれるよ。

二人の親子はどこかに隠れているのだろう。狭い場所で身を寄せあっていた。

喋るな。喋るんじゃない。

大丈夫だって。だって僕たち何も悪いことしてないんだもん。

その小さく無垢な目は、自分たちの置かれた状況に微塵の恐怖も抱いていないようだ。

父親はとにかく黙らせようと、ギョツと力強く子供を抱きしめる。だが父親の願いは届かなかった。

木が擦れ合う音と共に、光が射し込む。父親は何人もの男たちに手を引かれると、地面に叩きつけられた。

い、いやだ。助けてくれ。

必死に暴れ回り男はその場から逃げ出そうとする。

グチャ。

また先ほど聞いた何かを潰す音が耳に届く。呆然とした子供の顔に赤い血が降り懸かる。

きつと何が起きたのか理解していないのだろう。もしくは理解したくないのかもしれない。これから自分に襲いかかる理不尽な暴力を。

あ、あ、あああ。

恐怖で叫び声をあげることもできず。

グシャ。

子供はもう声をあげることでできない骸と化していった。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

何だ。何なんだ。この頭をよぎる死の光景は。知らない。わからない。理解したくない。

先ほどから流れ続ける死の映像に、カイズは正気を保てなくなる。

そんな無抵抗なカイズに振りおろされる爪。

ああ、俺死ぬのかな。

先ほどまでと同じだ。この爪が振りおろされたら、子供たちのように頭を潰されて死ぬ。

たったそれだけで人間は終わってしまうのだ。

『フンッ!』

『——プロテクション!』

だが彼が冷静でない分は、相棒が補った。無手のままプロテクションを展開すると、直撃を避ける。

しかし足に踏ん張りが無いぶん、その巨大な力にカイズは吹き飛ばされていった。

木に思い切り叩きつけられると、その衝撃で胃の中から液体がこみ上げる。

体の痛みからか。それとも先ほどから頭をよぎる光景のせいなのか。とにかくこみ上げるものをすべて地面に吐き出すと、目の前の敵を見た。

「な、何なんだ。今の光景は……」

『貴様のようにありもしない希望にすがりついたものの末路だ。滑稽だったろ。泣き叫び何も抵抗できずに死んでいく姿は。……そういう意味ではお前も私の記憶に留めておくに値する人間だな』

「な、に……?」

『私は貴様のように弱く役立たずなもの、すがり付いた希望に裏切られ死んでいく姿が大好きなんだよ。今まで五百以上の死の記憶を喰らってきたが、私の趣向にはこれが一番合っているようだ』

本当に心の底から嬉しそうにデスイーターは天を仰ぐ。そして汚らしい顔で笑い出した。

「この、化け物め……」

「あつはつはつは、んん? ハッ!」

デスイーターはびたりと笑い声を止めると、カイズの足を爪で貫く。ヴィータのラケーテンの比ではない。可能な限り人を苦しめるために放たれた一撃に、カイズは苦悶の声をあげる。

そんな彼を嬉しそうに見ると、デスイーターは講釈を続けた。

『私が化け物なら、あの少女は悪魔か？ 殺した数なら、あの少女のほうの上だぞ』

「お前と一緒にするな。ヴィータさんは望んでそんなことをしてたんじゃない」

『ああ、その通りだ。あの少女は大切な主のために、身を削って死ぬ物狂いで戦っている。本当は戦いたくない。それでも戦って、戦って、戦って、戦って。——その末に誰も救われなかったとしたら。あの少女はどんな顔をしてくれるかな？』

「——お前、まさか！」

『ああ、そのまさかだよ。少女の大量殺戮の記憶は確かに魅力的ではある。だが私が一番欲しい物はそれではない。殺戮兵器でありながら、救われた存在。その存在がもし救われなかったとしたら。そんな絶望に歪んだ記憶を貪ってやりたいんだよ』

「そんなことできると思っているのか。いくらAAAクラスだって言っても、言ってしまうえばそこがお前の限界だ」

たかだかBクラスの自分がここまで生きているのがいい証拠だ。確かにデスイーターは強いかもしれない。だがそれはこの世界のヴィータと同等か、下手をすればそれより下だ。

それにこの世界にはヴォルケンリッターを含め、高町教導官や時空管理局の面々もいる。

その全てを相手にして、この存在が勝てるとはカイズには到底思えなかった。

デスイーターはその言葉に気を悪くしたのか、再び爪を降ろすとカイズの腹部を貫く。

「ぐあああああああつー！」

『はっはっは、そんなこと貴様に言われるまでもない。今まで私がいた未開拓地と比べて、こんな化け物ばかりの世界ではそれは無理だから。だが絶対に失敗しない瞬間がこの世界には存在するんだよ。』

——その時の唯一の癌が貴様だったが。まあ私の取り越し苦労だったようだな』

「があつ、ああつ、がああああつ！」

『おっと、死の記憶を強く刻みすぎたかな。なに、今すぐにも解放してやろう』

ゆっくりと爪が振りあげられる。狙いは脳天。それで人間は死に至る。

「————おい、どこいったんだ！」

「ちつ、あの少女か」

デスイーターは舌打ちをすると、掲げていた腕を降ろす。

『今あの少女に私の存在を認識されるわけにはいかないな。———
だが悩みの種は全て消えた。貴様はせいぜいこの世界の終わりまで眠っているんだな』

デスイーターはその身を黒い霧にすると、一瞬のうちにその場から消える。

カイズは倒れまま立ち上がることもできなかった。

「……………相棒、俺たちは助かったのか」

薄れかけた意識のまま、そう小さくつぶやく。地面に落ちた黒刀は、淡い光をあげるとその質問に答えた。

『いいえ、私たちの存在は。……………歯牙にもかけられなかったよう
です』

「はは、そうだよな。……………そうなんだよな」

俺は弱い。きつとヴィータさんの記憶の中で輝かしく光っている誰よりも弱い存在なのだ。だからこそデスイーターも遊ぶようになり、止めもさささなかった。

「どうして俺なんか助けに来ちゃったんだろうな。Bクラスの俺なんかじゃなくて、賭になっても六課の面々が来てたら。そしたら……………」

『……………』

「何か言ってくれよ相棒。なあ、頼むよ」

「おい、お前どこに行つて。———な、何だよ。どうしたんだよー」
傷だらけの自分の姿を見て、血の気の引いた顔でヴィータはこちらに駆け寄る。

だがそんな彼女の顔を、カイズは直視できなかった。
ごめんなさい、ヴィータさん。俺じや貴方のことを。

その先が言葉になる前に、目の前が一気に暗くなる。意識を失うその間に、ヴィータの叫び声がただむなしく公園に響きわたってくのだった。

クリスマス・イブ

暗い。暗い世界に僕はいた。

このトンネル内に閉じこめられていったい何時間が経っただろうか。僕は何も考えずに、ただ身をちぢこませていた。

「おら、いったい何を隠しやがった！ 早くだしやがれ!!」

数分前から成人男性の動きが活発になっている。このトンネルに閉じこめられて、救助がくる様子もないのだ。

他人など関係ない。自我を丸だしにし、自身が生き残ることを優先し始めたのだろう。

若い男は老人や女性などに詰め寄ると、なけなしの食料を奪っていく。

そんな彼らに楯突くことを誰もしなかった。こんなところで正義感を振りかざしても、痛い目を見るだけだ。

弱い人間はただ搾取されるか。それか僕のように黙っているしかないんだ。

体育座りで、ただじっと待ち続けていた。それでもし救助が間に合わなかったら僕は……………。

その未来を考えると、体が震えだした。

だが仕方がないだろう。生き埋めになったメンバーで僕が一番年下なのだから。

そんなふうに震える過去の自分を、カイズは俯瞰で眺めていた。

そして過去の自分に言っただけでやりたかった。これからすぐにも助けにくる。だから怖がる必要なんてないんだと。

過去の結果を知っているからこそ、安堵している自分がある。

しかしその記憶は脆くも崩れさり始める。

「おい、ガキ。テメエなに隠してるんだよ」

「……………えっ?」

「その腹んなかになにか隠してるんだろ。おら、さっさとだせよ」

「ぼ、僕は何も」

「いいから立てっていうんだよ!」

「ひっ、は、はい」

子供の自分がその場から立ち上がる。すると、その懐からは、大量のパンが落ちていった。

何だこれは。知らない。俺はこんなの知らないぞ。

あの時の自分は食料など持つてはいなかった。そもそも大人に絡まれもしなかったはずだ。

だが目の前の光景は違う。男は落ちたパンを見ると、持っていた鉄パイプで子供の俺を殴りつけた。

「――」

声にならない声をあげると、過去の自分が地面に転がる。頭からはじわじわと血がにじみ出ており、とても軽傷には見えない。

「ガキがふぎげやがって！ おら、残りもだせよ!!」

「持つてない。僕はなにも持つてないよ」

「嘘つくんじゃねえよ。だったらこのパンはなんだよ。ふぎけたこと抜かして、一人だけ生き残ろうってか!!」

「ち、違う。ぼ、僕は……」

必死にパンの存在を僕は否定する。だが無情にも男の大声に引かれて、ほかの大人たちもこちらに集まってきた。

「何だ、このガキが食料持つてるのか？」

「だったらよこしてもらわないとな。こんな子供よりも、俺たちのほうがちゃんとして社会貢献してるんだしな」

「お、おいふぎけるなよ。俺が始めに見つけたんだぞ」

「じゃー、こつからは早いもの勝ちってことでー」

鉄パイプや刃物を構えると、男たちのギラついた視線が全てこちらに集まる。

違う。こんなの違う。こんなわけがない。こんなはずが。

カイズは男たちの間に入るが、彼らに干渉することができない。過去の自分は恐怖で動くことができない。

ただその瞬間に怯えることしかできなかった。

「それじゃー、おつさきー」

我先にと男が鉄パイプを振りかぶる。それに負けじと、ナイフや

バットなどがカイズの頭を――。

「うあああああああああつ、あああああああああ！」

頭が痛い。吐き気がする。何がどうしたのかわからなくなる。

カイズは白い綿布団を取り払うと、頭を抱え叫び続けた。

「あああああああああああ、何だよ。俺は、違う、こんなもの、ヴィータさん。ヴィータさん！」

あの時自分を救ってくれた彼女の名前を口にする。誰かに話を聞いて欲しかった。誰かに今のは悪い夢だと慰めて欲しかった。

だが目の前の現実はいや、目の前の夢は彼に何も答えてはくれなかった。

どうやらここは病院のようだ。白いベッドに、ナース服を着た女性。目の前のベッドには患者もいた。

だがこんなにかき声あげたのに、誰もカイズのことを気にもしない。当たり前だ。この世界ではヴィータがいなければ、自分はただの空気ではないのだから。

「何で俺は、俺が、俺でなかったら。くそ、ちくしょう！」

どうせ叫んでも誰も気にしないのだ。カイズはベッドから起きあがると、全力で壁を殴りつけた。

放った拳は壁にヒビをいれることもできず。そんな弱い自分が、悲しくて辛くて。

ただ無力な自分をいたぶり続けた。

「くそ、くそ、何で俺だったんだ。俺は何を思い上がってたんだ。俺はヴィータさんの恋人だっただけで、それだけでこの話を受け入れた。どうしてもっと考えなかったんだ。なんで、ヴィータさんのことを一番に考えられなかったんだよ!!」

こんなBクラスそこその自分では、あのロストログアには勝つことができない。勝つことができないければヴィータを救うこともでき

ないのだ。

愚かな自分を呪いたかった。舞い上がっていた自分を殴り倒したかった。

カイズは殴り続けていた壁に頭突きを入れる。そして額を当てたまま、ずるずると倒れていった。

「……それに俺は怖がってしまった。絶対にヴィータさんを助けなくちゃいけないのに。それなのに、死の記憶を刻み込まれて足が動かなくなっちゃったんだ」

絶対に助けるが聞いて呆れる。けどももうどうにもならないのだ。

それにこの世界にはヴィータさんの仲間がいる。高町教導官やフェイト執務官、時空管理局の人間たちがいるのだ。だったら自分の出る幕はないではないか。あのロストログアと言えども、それだけの人数を前にして戦えるはずがない。

「……いや、それはただの建前だ。俺は。……俺は死ぬのが怖いんだ」
「死ぬのが怖いのは当たり前ですよ。……私もその気持ちわかりますから」

「——えっ?」

その声はいつたい誰がかけたものだろうか。いや、声をかけられるはずがない。だってこの世界はヴィータの干渉なしでは、自分を認識することすらできないはずだ。

そう思いながらも、カーテン越しの隣のベッドを見つめる。その白いカーテンが開かれると、小さな女の子は温かいまなざしでこちらを見つめた。

「……はやて、さん? でもどうして」

「いやー。ヴィータにはカイズさんが起きたらお願いって言われてましたけど。さすがにいきなりの叫び声は私もびっくりしました」

「ヴィータさんが?」

そういうことなら納得がいく。ヴィータがはやてにその想いを託したのなら、彼女は自分との記憶がなくとも、初めから知っているように自分と接してくれるはずだ。

カイズはすぐにも口を開こうとする。だがはやては右手を前に

出すと、ゆっくりと首を横に振った。

「ここでは話にくいと思うんです。だから屋上にいきませんか。――

――私も聞きたいことがあるんで」

その少女の眼差しはまるで全てを悟っているようで。いや、きっと過去の彼女も何かがおかしいと気づいていたのかもしれない。

だが今の彼女に事情を説明したところで、この記憶は変わらない。しかし変わらないからといって、その真剣な眼差し無視することは自分にはできなかつた。

「――わかりました。全部お話ししますね」

「ありがとうございます」

はやてはそれだけ言うと、ベッドの横にある車いすに移動する。カイズはそれを補助しようとするが、ゆっくりと首を振る彼女を見て、その足を止めた。

「せめて押していきますね」

「おおきに」

カイズははやての車いすを押すと、そのまま病院の屋上に向かっていった。

誰もいない夕暮れの屋上。カイズははやての隣につくと、全てを話した。

いまヴィータ達が何をしているか。はやての体がどうなってしまったのか。これからどんな事件が起きるのか。そしてこの世界が夢であること。現実のヴィータが命の危機にさらされていること。

どうせここで話しても、カイズのお世話をするという役割を終えた瞬間、はやては全てを忘れるはずだ。

その前提を話していても、はやては真摯にカイズの言葉に耳を傾けてくれていた。

カイズは全てを話し終えると、空を見上げ乾いた笑い声をあげる。「あつはつは、でもこんなこと言っても信じられないですよね。ほん

と、ごめんなさい」

「そんなことありません。私は、カイズさんの言葉を信じます」

「信じるってなんで。どうして俺なんかの言葉を信じられるんですか。だってここが現実の世界じゃないって言ってるんですよ」

「うーん、それはそうなんですけど。……でもやっぱり信じます。いえ、信じたいっていうのが私の本心です」

「信じ、たい？」

「ええ、そうです」

はやてはゆつくりと目を閉じると、車いすを前に進める。そして屋上からの町並みを見ると、温かな笑みをカイズに向けた。

「私が家族と幸せに暮らしている。そんな未来を私は否定する気はないんですよ」

「そ、それだけで……」

「むしろそれ以上のことがあるでしょうか。……私は信じます。家族と楽しく過ごせる未来を。この世界が夢だということ。——

そしてカイズさんがヴィータを救ってくれるってことも」

「——ッ！」

その純粋な眼差しが辛かった。せつかくこの少女は温かな未来を信じているのに、自分の力がないために、その現実が打ち壊されようとしているんだ。

だからこそはやてにみんなを説得してほしかった。だがそれが彼女にできないことをカイズは誰よりもわかっていた。

カイズは無力を呪うように下唇を噛む。そんな彼の手をはやては優しく握り込んでいった。

「大丈夫です。きつとカイズさんならその敵にも勝てますよ」

「だ、だけど俺は。何もできなくて。本当に弱い存在で……」

「そんなことありません。ここはヴィータの記憶の世界。そのヴィータの中で、カイズさんは誰よりもヴィータに思われているはずですよ。そして誰よりもヴィータのことを思っているカイズさんが負けるはずありません」

「だけど、俺はデスイーターに死の記憶を刻み込まれて。それだけで

足が動かなくなっちゃって」

「死が怖くない人なんていません。私だって足が動かなくなつて、今は体調も安定しないで入院して。もう自分は長くないって。いったいつまで生きてられるのかなって。そう思ったら、いつも震えてましたよ。あつ、これヴィータ達には言わんといってくださいね。今のところ誰にもバレてないと思うんで」

「……はやてさん」

そう言葉にするはやての体は小さく震えていた。だけど彼女はそんな自分に渴を入れると、両手をギュッと握りしめた。

「もつと自分に自信をもってください。カイズさんは、ヴィータのヒーローなんですから」

「俺が、ヒーロー。……だけど俺は」

果たしてあの化け物に勝つことができるのだろうか。いや、勝つ勝たないの前にあいつには自分の攻撃が通じない。それほど力に格があるのに、どうしたら。

『———そうですか。状況判断がようやく完了しました』
「えっ?」

突然電子音をあげる相棒に、驚きの声をあげる。

カイズはチエーンを握りしめると、相棒を取り出した。

「状況判断が完了したってどういうことだよ」

『そのままの意味です。私は貴方の能力を最大限に生かすために、全ての基本を網羅しています。それはマスターもわかっていますよね』
「それはわかっているけど。……そんなお前だから俺の力ではデスイーターに勝てないって判断したんだろ」

『ええ、そうです。教科書通りの戦力分析ならマスターの勝ち目は0パーセントです。……ですがここは現実の世界ではありません。夢の中です。私はどうやら教科書通りでありすぎたようですね』
「な、何だ。どういうことなんだ?」

『その質問には後でお答えします。再計算に入りますので、しばしお待ちを』

デバイスはそれだけ言うと、何かを計算し始めたようだ。何がなん

だかわからないと、カイズは首を傾げる。

そんな彼のデバイスをはやては、手のひらに乗せていった。

「これがカイズさんのデバイスなんですか。でも私の家族と違って、二本ついとるんですね」

「あ、えつと、一応ベルカとミッドの二刀流なんで」

「へえー、名前はなんていうんですか？」

「名前、えつと、名前はその……」

ぶっつけ本番の試験から付き合いだしたカイズの相棒。今まで試験や勉強、ヴィータとのつきあいなどで、すっかりそれを忘れてしまっていた。

カイズはそう正直に話すと、はやては頬を少し膨らませた。

「それじゃいけませんよ。私が夜天の書にリインフォースって名付けるように、自分の大切なものにはしつかりと名前をつけてあげないと」

「そ、そうですね。えーつと、どういった名前がいいでしょうか」

「それじゃあ一緒に考えようか。まだヴィータやなのはちゃんたちがクリスマスイブのお祝いを持ってきてくれるには時間がありますし。——あつ、ごめんなさい。年上相手にタメ口になってしょうて」

「——いいえ。はやてさんはそれでいいと思いますよ。それじゃあ短い時間ですけど、よろしくお願いします」

カイズはデバイスを持ち上げると、その姿をゆっくりと映し込んでいく。

今日はクリスマスイブ。

全てに決着がつくであろう。決戦のときは、すぐそこまで迫っていた。

夢の守り人

届かせる。白いバリアジャケットを着た少女は、デバイスの先端をその黒い翼の女性に向ける。

「アクセルチャージャー起動。ストライクフレーム。エクセリオンバスターACS——ドライブ！」

砲撃を主軸とした高町なのはの新たな力。なのははピンクの刃を携えると、闇の書に向けて突撃を仕掛けた。

闇の書は左手を構えると、その攻撃を受け止める。削れ火花をあげる互いの攻防。だが二人の魔力量は歴然だった。

「届いてー！」

しかし少女は諦めていない。力が届かないからと。勝ち目がないからと。そんな理由で泣いている子を見放すことなどできなかつた。

「ブレイクシュートー！」

槍の先端が相手のフィールドを貫通する。そのわずかな隙から放たれた一撃は、AAAクラスのそれを遙かに量がする一撃だ。

この攻撃で駄目なら。

少女は全身を疲労に襲われながら、煙の晴れた先を見つめる。そこにはほぼ無傷に近い、闇の書の姿があつた。

『マスター』

「……もう少し頑張らないとね」

折れかけた心を再度立て直す。なのはは再びデバイスを構えると、闇の書に接敵した。

『……さて、それでは目的を達するとするか』

海上から離れたビル群の中。二人の戦いを遠目から見ていた黒い霧は、その姿を形作っていく。デスイーターは口を醜く歪ませると、巨大な爪を構えた。

これがデスイーターの狙いだ。未完成の自分ではヴィータに勝てるかどうかは五分五分だ。それに彼女は常に仲間と繋がっている。ヴォルケンリッターが二人になれば、こちらの勝率は0といっても過言ではない。

だからこそこの瞬間しかないのだ。仮面の者に存在を消されヴィータが闇の書の一部と化したこの瞬間に、高町なのはを殺す。そうすれば闇の書から八神はやてを含めヴォルケンリッターが救出されるチャンスは永遠に失われる。

しかしヴィータの観測なしでは高町なのはに干渉はできないはずだ。だがこの記憶が再現されているのが確かな証拠だ。闇の書と一体化している今の状態であっても、ヴィータは意識的、無意識に関係なく闇の書を通してこの戦闘を観測している。

それはつまり、ヴィータと戦うことなく決着がつくということ。弱りきった今のなのはをこの爪で貫けば、それでヴィータは死を認めざるを得ないのだ。

「まあ、そんなところだよな」

『タイミング的には完璧です。その考えで間違いないようですね』

一人と一つの声がデスイーターの後方から聞こえる。デスイーターはゆっくりと振り返ると、黒いジャケットを着たカイズの姿を見た。



デスイーターと視線が合う。カイズは黒刀を二本構えると、臨戦態勢に入った。

『がっはっは、誰かと思えば勘違い男じゃないか。……邪魔をするなよ。あまり時間がないんだ』

「時間がないね。ああ、そうだな。だからこそ、俺はお前を止めてみせる」

『私を止めるだと。お前があ？ がっはっはっは、Bクラスの貴様程度が私に勝てると思っているのか。——時間の無駄だ。さっさとくたばってもらおうぞー！』

デスイーターが地面を蹴る。コンクリートにヒビが入るほどの跳躍は、一気にカイズとの距離を詰めた。

両手の三本の爪が交互に襲いかかる。カイズはプロテクションを張ることなく、それを二刀の黒刀で捌いていった。

『ほら、逃げ出していいんだぞ。あれだけ死を刻み込まれて、恐れ慄いているんだろ！』

「――！」

『弱い貴様に何ができる？ 自身をヒーローと勘違いしていたお前にはなにもできはしない。さつさと私に殺されてしまおうんだな！』

「――えか？」

『何だとう？ ―――ぐっ！』

カイズは小さく何かをつぶやくと、デスイーターの爪をはじきとばす。その力に一瞬驚きを見せるが、デスイーターは、すぐに気味の悪い笑みで彼を見た。

『虚勢か？ ハツタリか？ お前は何もできない。死という感情の強さの前に、貴様は無力でしかないのだ』

「――それは上か」

『さつきからボソボソと。さつきと潰れるろ！』

もて遊ぶ気などない。一撃で殺すと、全力で振り降ろされる爪。AAクラス以上のその攻撃を、カイズは真正面から受け止める。

フィールドも展開せず受け止めたカイズは、その一撃で膝を突く。そうなるはずだった。もしこれが現実なら、ここまでの力の差は簡単に埋まらない。

だがここはどこだ。この世界での強いということとはなんだ。

カイズと彼の相棒はようやくその答えに気づいた。

だからこそ、もうデスイーターを恐れることはなかった。

前回とは違う。カイズを馬鹿にしていたデスイーターの顔が初めて困惑の色を見せる。

カイズはベルカ式の黒刀をデスイーターに突きつけると、その決意を口にした。

「やっとわかったんだよ。勘違いしているのがお前で、俺は何も勘違

いしてなかったってことにな」

『な、何を言ってる』

「言ったよな。お前は夢物語の主人公に俺がなったつもりかって。ああ、そうだよ。俺はこのヴィータさんの夢の中で主人公になりに来たんだ。眠っているお姫様を助けるのは、ヒーローの役目だろ」

『がっはっは、それが勘違いだと言っているんだ。たかがBクラスの人間になんかでき——』

『できるさ——』

迷いなどない。カイズは声を張り上げると、その願いを叫んでいく。

「この夢の世界では思いが力になる。だからこそ、俺は絶対に負けない」

『はっ、だったら貴様は私には勝てないさ。死より強い思いがこの世界にあるとでも』

「ああ、あるさ——」

『くだらん時間稼ぎだ！』

再度一直線にデスイーターは攻撃を仕掛ける。だがカイズは黒刀を横風ぎに放つと、その攻撃を一蹴した。

「だからその死の思いは上かって聞いているんだよ」

『な、何とだ』

「そんなの決まってるだろ。——俺がヴィータさんを想う気持ちより上かって聞いているんだよ！　いくぞ、イノセントハート!!」

『オーケー、マイマスター——』

ヴィータの想いを絶対に穢させない。

その思いから穢れなき心と名付けられた彼の相棒は、肯定の電子音を高らかにあげる。

どうして今まで忘れていたのだろうか。出発前にシヤマルが言っていたはずだ。このヴィータの記憶の世界では、思いが力になると。ヴィータに強く想われ、ヴィータを強く想う自分なら誰よりも強い力を発揮できると。

その言葉は先ほどの相対で証明された。

ならば後は戦うだけだ。ヴィータの想いを傷つけさせたりはしない。ヴィータの記憶を破壊させたりしないために。

「ウオオオオオオオオッ！」

『グオオオオオオオオッ！』

カイズは刀を。デスイーターは両手の爪を。二人はそれぞれ二本の武器を構えると、互いの刃を交えていくのだった。

白いまばゆい光とともに消えたはずの四人は姿を現す。

「我ら。夜天の主の元に集いし騎士」

「主ある限り。我ら魂尽きることなし」

「この身に命ある限り、我らは御身の元にある」

「我らが主。夜天の王八神はやての名の下に」

闇の書の復活のために犠牲になった四人は、白いベルカの魔法陣を囲むように立つ。

そして四人が守護する夜天の主がその真ん中に姿を現した。

八神はやては白き光に包まれると、バリアジャケットを、そしてデバイスを手に構えた。

今まではやてに黙って魔力の収集をしていたヴォルケンリッター達は、皆顔を伏せてしまう。

だがそんな彼女たちに、はやては優しく微笑みかけた。

「みんな。お帰り」

「はやて。はやてっ！」

話すことはいくらでもある。償わなければいけないこともたくさんある。だが今は再びはやてと出会えたことを素直に喜びたかった。

ヴィータはやての元に駆け寄ると、その胸で涙を流した。

だがその中でも、何か言いようのない違和感を感じていた。

「ヴィータちゃん」

「シグナム」

闇の書との戦いでボロボロになった、なのはとフェイトが彼女たち

の元に近寄る。

それに何度か接敵した薄茶色の髪の毛の少年と、バリアブレイクを使う獣耳の生えた女性。

さらに執務官であるクロノが現れると、今の状況と今後の対策を二パターン提示した。

皆が真剣にクロノの話の聞くなか、ヴィータの違和感は徐々に膨らんでいく。

「な、なあ、はやて。あたし達ってこれで全員だったっけ」

「私の知ってる範囲ではそうだと思うけど。あつ、でもヴィータ達しか知らない人やったら、わからんと思うよ」

「いや、そうじゃなくて。……何だろう。何か大切な人のことを忘れてる気がするんだ。ずっとあたしの側にいたはずなのに。……あたしって、どうして一週間ぐらい前に大泣きしたんだっけ？」

「んん？ ヴィータが私の前で最近泣いたことあったかな。ヴィータはいつも笑顔やったで」

そう言葉にするはやてに嘘偽りは見えない。いや、はやてが自分に嘘をつくメリツトがないのだから、それは当たり前だ。

「そ、そうだよな。それより今はあれを何とかしないと」

闇の書の意志を前に、何をいま考える必要がある。はやて以上に大切な人など、自分にいるはずがない。

それは今も昔も、そしてこの先の未来もきつと変わらないはずだ。

「あたしにとって一番大切なのははやてだ。はやてだけのはずなのに……」

そう口にしても胸のもやもやは晴れない。だが今は余計なことを考えている時間はない。

クロノの作戦と指示を聞くと、ヴィータは皆と共に闇の書の意志に向かっていくのだった。

交わした約束

「ウオオオオオオッ！」

『ゴアアアアアッ！』

デバイスと爪がぶつかるたびに、強烈な火花があがる。

どちらも一歩も引かない一進一退の攻防。ほぼゼロ距離の状態で、カイズとデスイーターは十二回目となる鏖迫り合いをし始めた。

『たかが人間が！ 私の邪魔をするな!!』

「引くわけないだろ。俺は絶対にヴィータさんを救うんだ！」

『調子に乗るな!』

デスイーターの右足の爪がカイズに迫る。カイズは足に傷を負いながらも、大振りの隙をつきデスイーターの肩を斬りつける。

『グオオオオ！』

「はっ、力に頼りすぎなんだ、ぐっ！」

——ドクンッ！

心臓が一度力強く高鳴る。脳裏にはまた名も知らない人間が無惨に殺されていく姿が駆け巡った。

カイズはその場で吐き出してしまいたい気持ちを押しさえ込むと、必死に地に足を着けた。

力はあっちの方が上。技量はこっち。だけど、攻撃が当たるだけどこっちにはデイスアドバンテージか。

『でしたら可能な限り避けて倒すまでです』

「ああ、そうだな」

『それにマイクリエーターを助けない気持ちだが、相手の死の記憶に負けるとは思えませんか?』

「仰るとおりだよ！」

弱気になるな。ここは記憶の世界。想いが力になるなら、弱気になっただけが負ける。

「それに死の記憶の人々はみんな生きてたがってた。そんな人たちの犠牲をなくすためにも。——ここでこいつを倒す」

『その意気です。近接戦闘パターン3でいきます。敵は動きに変化を

つけていますが、まだ荒いです』

「了解！」

カイズは大きく跳躍すると、デスイーターに迫る。

『馬鹿め。上空では動きが。グガッ！』

デスイーターの目が釘付けになった瞬間を狙い、その前に設置しておいた魔弾が直撃する。

「まだだー！」

飛んだ勢いのまま再びデスイーターの体に傷を負わす。だが致命傷を与えるまでに至らなかつた。

『くそ、くそが。たかがBクラスの餓鬼の分際でええええっ!!』

明らかに格下のカイズに追い込まれている事実を受け止め切れないのだろう。デスイーターは両手を震わせると、カイズをにらみつける。

悪魔の形相から放たれるその眼孔とカイズの視線がぶつかりあう。

「ぐっー！」

それは人間の本能と言ってもいいかもしれない。現実の世界なら圧倒的に実力の差があるものからの威圧に、カイズはほんの一瞬足を止めてしまったのだ。

その隙を、死を喰らうものは見逃さなかつた。

『しよせんは餓鬼だな！』

「なっ、くそー！」

踏み込みと共に放たれた爪が、カイズに襲いかかる。なんとか回避行動を、震える足がワンテンポ遅れて後ろに下がる。

だが避けきれない。空を切り裂き放たれたそれは、カイズの右足を大きく傷つけていった。

「グッ————！」

『まだだああああああつー！』

一発、さらに一発とデスイーターの爪がカイズの体に傷を負わす。デバイスが叫びをあげる。じり貧になるからと、今まで極力使用を避けていたプロテクションを展開する。

すると攻撃はカイズに届かなくなる。だがその衝撃を押し殺すこ

とができず、カイズはビルに叩きつけられた。

背面に強烈な痛みが走る。カイズはすぐにその場から立ち上がるが、それと同時に胃の中のを吐き出した。

血と胃液が混ざりあつたそれは、ビルに叩きつけられたダメージだけではなかつた。

死にたくない、死にたくないよ！

助けて、誰か助けてよ。

殺さないで。殺さないでください。

やだよ。お母さん、お母さん！

いや、いやあああああつ！

子供の。大人の。老人の。男の。女の。様々な死の情景で頭の中がパンクしそうになる。

死の情報量に段々と頭の中が朦朧としてくる。今自分がどうしているのかわからない。

立っているのか。倒れているのか。死んでいるのか。生きているのか。

『マスター！ マスター!!』

何かの声が聞こえる。その叫びは果たして誰のものだろうか。いや、自分はいったい誰だつたらうか。

この死んだ人の記憶の中に、自分はいるのだろうか。

いたとしたら、自分はこれ以上頑張る必要なんてないのではないだろうか。

茫然自失のまま、カイズの目の焦点が合わなくなる。 デスイーターはそんな彼を見ると、底気味悪い笑みを浮かべた。

『がっはっはっは、よーやく精神が壊れたか。はっ、何が想いの力だ。結局死の記憶には誰にも抗えはしないんだよ』

一步、また一步とデスイーターはカイズに近寄る。

『マスター、気をしっかりもってください。貴方の想いはこんなもの

だったのですか。こんなところで挫ける想いだったんですか!』

『無駄だ無駄だ。この骸にはもう何も残っていないさ』

デスイーターはカイズの目の前に立つと、巨大な爪を高らかと掲げる。彼の全ての魔力を込めた一撃は、カイズを殺すには十分すぎるほど威力を持つているだろう。

『これでお前もお前の想いも終わりだ』

「……………俺の、想い?」

それはいったい何だったろうか。

死にたくないということだろうか。

助けてほしいといったことだろうか。

神様に祈ったことだろうか。

正義の味方を求めたことだろうか。

娘を救ってほしかったことだろうか。

自分だけでも生きたいと思ったことだろうか。

せめて苦しまないで殺してほしいと思ったことだろうか。

この死の記憶の中にそれはあるだろうか。

それとも。それとも。

「あ、ああ。あああ」

『さあ、死ぬ』

カイズの目には振り降ろされる爪がまるでスローモーションのように見える。

ああ、この一撃で自分は死ぬんだ。それがわかると、頭の中がクリアになる。

この一撃で死ぬ。それはつまり自分がまだ死んでいないということ。なら生きている自分は何のためにここまでできた。自分はどうしてもこの場に立っているんだ。

分からない。全てが分からない。だから俺は、俺は。

「——カイズ!」

その声が耳に届く。ずっと側にいたはずなのに、その単語だけは彼女は口にしてくれなかった。

だから聞き間違えることなど絶対になかった。

自分は、また彼女にそう呼んでもらいたくて。

だからこそ、彼女を救うためにここまでできたのだから。

頭上に振り降ろされる爪。だがカイズは全力で顔を横にそらすと、その一撃を回避する。代償として引きちぎられる右腕。痛みと死の記憶が頭を流れる。

だがもう惑わされることはない。

カイズはもう、大切な想いを取り戻していたから。

「————ヴィータさん！ うっ、あああああああつ!!」

まだ左手は残っている。カイズは二股の黒刀をデスイーターの肩に突き刺す。

「————ブレイク」

そしてはやてとの会話の後からずっと止めようと蓄えられていた魔力がデバイスごと爆発を起こした。

ヴィータの夢の中だからこそ、最後の策としてカイズとイノセントハートが考えていた捨て身の一撃。無茶を通り越した無理のある戦法だ。

上半身がほぼ吹き飛んで行ったデスイーターは、目を血走らせカイズを睨みつける。

『ぐっ、くそ！ くそ！ 私の存在が、こんな、こんな餓鬼の脆い想いなんかに!!』

「愛する想いの強さを知らなすぎたんだよ。はっ、愛を知らないお前のほうがよっほど餓鬼だったみたいだな」

『グゾオオオオオオオオオオオオオオ!!』

それが最後の断末魔だった。デスイーターは体が粉々になると、その姿を黒い霧と化す。だがその霧もその場で四散すると魔力反応が完全に消えていった。

「これで……終わったんだよな」

『ご苦労様ですマスター』

「はっ、ははは」

もう力尽きた。カイズはその場で膝をつくと、そのまま地面に向かって倒れ込む。

「カイズ！ カイズ!!」

ヴィータはグラブファイゼンを投げ捨てると、彼の体を抱きしめる。カイズは久しぶりにヴィータの顔を見て、笑みをこぼした。

「この世界にきて。初めて俺のこと名前で呼んでくれましたね」

「馬鹿、そんなこと言ってる場合かよ！ 待ってるよ、すぐにシヤマルを呼んでくるからよ!!」

すぐにでもヴィータは引き返そうとする。だがカイズは彼女の手を握りしめると、首を横に振った。

「大丈夫ですって。ここはヴィータさんの夢の中で、もうロストロギアも倒してあとは帰るだけですから」

「だけでもしかしたらってことはあるだろ！ お前が言ってるのが本当はただの偽りの記憶で。このまま本当に死んじゃうことだってあるかもしれないじゃないか！」

「いえ、まー、あー、そう言われるとちよつと自信がなくなってきましたけど」

なんと言っても、先ほどまで死の記憶のせいで意識が曖昧だった身の上だ。カイズは少し困ったように頬を掻こうとすると、右腕ないことを今更になって実感した。

「いやいや、すみません。ヴィータさんに変なところみせちゃって。

——あれ？ ヴィータさん？」

「何でそんなにヘラヘラしてるんだよ。うっ、ひっく、このばかあ」

ポタリと頬に涙が落ちる。この感触は以前にも感じていた。それはもしかして、あの時もヴィータが——。

「ヴィータさん。何で、どうして泣いてるんですか」

「し、知るかよ。あたしだってわかんねえよ。だけどお前が傷ついてる姿を見ると、なっ、涙が、ひっく、止まらねえんだよ。お前のことなんて、ついさつきまで忘れてたのに。だけどずっと心の中で何か

が引つかかって。それでカイズのことを思い出したら、また胸が苦しくなったんだ」

ヴィータはポロポロと涙を流しながら、カイズを抱きしめる。そして唇を一度噛みしめると、嘆きを続けた。

「初めて会ったときもそうだ。初めはお前を倒す気でいたけど、お前があたしを庇って倒れた姿を見てあたしは自然と涙を流してた。お前のことなんて全然知らなかったのに。それなのに、好きだって、愛してるって言われて浮かれてる自分がいた。カイズとデートに行つたときはずっとドキドキしてたし、お前が誰かにやられて意識不明になったときは、三日三晩ずっと泣いてた」

「ありがとうございます、ヴィータさん。……でももう大丈夫ですよ。もう、全部終わったんですから」

「それが。——あたしはそれが一番嫌なんだよ！」
「ヴィータさん？」

「カイズのことを思い出して。それでようやく自分の気持ちにも気づけたのに。それなのに、どうしてももうお別れしなくちゃいけないんだよ。それに今のあたしはただの過去の記憶で。お前がいなくなったら、この気持ちも忘れちゃうんだろ。あたしは、あたしは今の気持ちを忘れたくねえんだよ。もっとお前と一緒にいたいんだよ！」

ヴィータは心に溜めていた思いの丈を全て吐き出していく。
だが自分との別れを悲しむヴィータを見て、カイズは今回の事件が記憶の世界であることに初めて感謝した。

会話の途中であっても、肉体的に殺されたカイズの体は容赦なく足下から徐々に崩れ始める。カイズはヴィータの体を一度力強く抱きしめ離すと、すぐに彼女の目をのぞき込んだ。

「大丈夫ですよヴィータさん。一度目を閉じて、そしてゆっくり開けてください。そうすれば、俺はすぐ側にいますから」

「ほ、ほんとうか。ほんとうなのか」
「……はい」

もし今回の事件が過去へのタイムスリップや転生なら、自分はきっとヴィータを長い時間ひとりぼっちにしてしまったかもしれない。

だがここは記憶の世界だ。カイズは絶対にすぐに会いに行く約束すると柔らかい笑みを浮かべた。

カイズの体が半分ほど消える。だがヴィータはもう慌てた様子を見せることなく、小さく声を上げる。

「だ、だったらちよつと目を瞑ってろ」

「えっ、どうしてですか？」

「いいから早く！」

「は、はい！」

ヴィータの剣幕に押されて、カイズは急いで目を閉じる。目の前が暗闇になると、ヴィータの息づかいだけが耳に入る。その音がゆっくりところちらに近づいてきた。

——— チユ。

唇に何かに触れる。カイズは急いで目を開くと、目の前には頬を赤く染めたヴィータの姿があった。

「ヴィ、ヴィータさん、い、いま」

「な、なんでもねーよ。……別に、キスなんてしてないんだからな」
ぷくーつとヴィータは頬を膨らませる。

だが時間はもうそこまで迫っている。ヴィータは再び真っ直ぐカイズの姿を見つめた。

「あたしが目を開けたら、絶対に側にいろよな。……嘘だったら、グラーファイゼンの頑固な汚れになってもらうからな」

「はは、それは怖いですね。———でも大丈夫です。例えここから俺がいなくなっても。俺は必ずヴィータさんの側にいますから」

「絶対に約束だからな！」

「———はい」

カイズの体の胸から下が消える。ヴィータはそんな彼に合わせて、ゆっくりと目を閉じた。

そして心の中で大きく時間を数える。

目の前の暗闇の前に、何があるかは今のヴィータにはわからない。目を開けてもそこにはカイズが消えているだけで、何も変わらない今が続いているのかもしれない。

だけどヴィータは疑わなかった。
カイズが自分を悲しませることをするはずがない。
だからこそゆっくりと目を開けていった。

初めに見えたのは白い天井だ。

いったい自分はどうしたのだろうか。ぼんやりとした意識の中、彼女は隣のベッドをちらりとのぞき込んだ。

そこで横になっっている人はいったい誰だったろうか。

そんな見当はずれなことを思うことはなかった。

だって彼はヴィータの恋人なのだから。

彼女に遅れて、カイズがゆっくりと目を開ける。彼も薄ぼんやりとした意識だったのだろう。だが無意識ながらも引かれ合うように、ヴィータの顔をのぞき込んだ。

「ねっ、嘘じゃなかったですよね」

「えっ？」

柔らかい笑みを浮かべたカイズの言葉の意味はわからなかった。

だが自然と頬を伝う涙が何かを訴えかけてくる。

カイズが自分と何を約束したのかは、ヴィータ自身も覚えていない。いや、記憶に存在してもいないのだ。

だがその言葉が嬉しくて。彼が側にいてくれることが心から幸せで。

ヴィータはただ涙を流し続けると、小さく頷き続けていくのだった。

果たされた想い

それからの三日間はとにかくあつと言う間に流れていった。カイズもヴィータも肉体的に怪我を負ってはいないが、それでも様々な精密検査を受け続けた。

その間に二人は一度も会っていない。

だからこそ、これが久しぶりの再会と言っても過言ではなかった。

夕暮れ時になって、ようやく全ての検査が終わったカイズは、ヴィータの待っている屋上に向かっていた。

「ヴィータさんと会うのは久しぶりだなー。もうあれかな。これはい感じになっちゃうのかな」

何と言っても死ぬもの狂いの救出劇だったのだ。感動的な再会になるに違いない。

ヴィータにいきなり抱きつかれたら、どんな対応をしようか。そんなことを考えながら、屋上の扉を開けた。

「ヴィータさーん。きましたよー」

屋上にでるとあたりを見渡す。すると奥の鉄格子の前に一人の女性の姿が見えた。

いつもの三つ編みではなく、ウェーブのかかったストレートヘア。服装もまたいつもと違い、ふんわりとした長いロングスカートの姿は、いつもよりも大人びて見えた。

「……おーう」

カイズの姿を見ると、ヴィータはどこか元気がない返事をする。カイズは「んん？」と首を傾げると、ヴィータの隣に歩いていった。

「久しぶりですねヴィータさん。どうですか、調子は？」

「まー、おかげ様で大丈夫だぞー」

「おかげさまって。あれ、もしかして過去の記憶の記憶が残ってるんですか」

「べつにー。今回の事件のことはシャマルから聞いたことがほとんどだし。……それでもほんのちよこつとだけ何となく思い出しただけだー」

「そ、そうなんですか……」

あれ何だろう。なんか空気が重い。

先ほどからなぜかヴィータは生返事だ。自分の予想ではヴィータがこのまま抱きついてきて、自分も抱きしめてハッピーエンドのはずだったのだが。

というか、ヴィータさんどこの記憶を覚えてるんだらう。

もしかしたら斬りかかったことを覚えているのかもしれない。

もしかしたら戦闘中に好きだ愛してるだいい続けたのを覚えているのかもしれない。

それとも、尋問されている時にスカートを覗いてしまったのを怒っているのかもしれない。

カイズの額から嫌な汗がだらだらと流れ出す。ヴィータは頬を膨らませながら、そっぽ向いたままであった。

気まずい。非常に気まずい。きつとこちらから口を開かなければ、ヴィータはずっと黙ったままだろう。

覚悟はできた。本当はできてないけど、決めるしかない。カイズはごくりと唾を飲み込むと、唇を震わせながら声をだした。

「え、えっと。ど、どこの記憶を、お、覚えているんでしょうか」
「……………ちよつとそこに座れ」

「へっ?」

「正座!」

「は、はい!」

ヴィータの声を聞くと、反射的にその場に正座する。ヴィータにじと目を向けられると、カイズの背筋に冷たいものが走った。

「……………いいか。絶対に動くなよ」

「は、はい…………」

「よっ」

いったいこれからどんなお仕置きをされるのだろうか。カイズはギョツと目を閉じると、そのときを待った。

ヴィータの息づかいが近づいてくる。頭を殴られるのか。そう思った瞬間だ。カイズの唇に柔らかいものが重ねられた。

(ヴィータさん？ ん、んん、舌が!?)

目を開けるとヴィータの顔が間近に見える。いったい何がどうなってるのか。困惑するカイズを横目に、ヴィータはカイズの唾内に舌をはわせ続ける。

ゆっくりと、そして丁寧にされたそれはいったいどれほど続いただろうか。

口の中が唾液でいっぱいになるころに、ヴィータはようやく口を離してくれた。

「えっ、あつ、はっ、ヴィータさん？」

「——ふんっ！」

ヴィータは再びそっぽ向いてしまう。怒らせたと思ったら、キスをされて、そしたらまた怒らせてしまった。

チンプンカンプンだと、カイズは目を白黒させる。そんな何もわかっていない彼をチラリと見ると、ヴィータはそっぽ向いたまつぶやいた。

「——お前は誰にでも優しくしすぎなんだよ」

「誰にでもって。えっ、ええ?！」

「今のキスでわからないのか?！」

「は、はい……」

いったいディープキスと優しさのどこに繋がりがあるのだろうか。心の底から困り果てるカイズ。そんな彼を見ると、ヴィータは顔を真っ赤にしながらカイズに詰め寄った。

「何で過去のあたしにキスしたんだよ」

「——へっ?！」

「だからどうして過去の記憶のあたしとキスしてるんだって言ってるんだよ！ お前が本当に好きになったのは今のあたしで、過去のあたしじゃねえだろう！」

「で、ですけど、あの時は不意打ちでキスされたわけで」

「それでもキスしたのはしただろ！ ……何だよ。今のあたし以外とキスしてるんじゃないよ。……ばかあ」

いや、正確にはどちらもヴィータさんなんですけど。

そう声をあげたかったが、きつと膨れているヴィータをさらに膨らませるだけだろう。

ここまでの流れを説明するところだ。

ヴィータは過去ヴィータとカイズがキスをしたことに怒っている。だから過去の自分よりももつと激しいキスをしようと、先ほどのディープキスをした。

多分いつもより大人っぽい服装も、過去の自分と対比してのことだろう。

つまりヴィータは、自分自身に嫉妬し、自分自身をライバル視しているのだ。

(俺はヴィータさん一筋だから、嫉妬してるヴィータさんなんて一生見れないと思ってたけど。——つて、今はそんなこと考えてる場合じゃない！)

ちよつとばかし無理だとは思うが、カイズは弁解し始める。

「ヴィータさん。俺が過去でキスしたのはあくまでヴィータさんであつて、ほかのひととキスしたわけでは」

「うっせえ。何だよ、今のあたしのことが好きだつて言つたくせに、結局あたしだったらどんなあたしだつていいんじゃないやねえかよ」

「そ、それはヴィータさんがヴィータさんなわけで、ヴィータさんならどんなヴィータさんでも俺は——」

「ふーん。だったら過去のあたしのところにもいつちまえよなー」
「ヴィータさん。そんない」

何が感動的な再会だ。カイズは数分前の愚かな自分をしばき倒してやりたかつた。

やつぱりヒーローになれるのは夢物語の中だけで、現実の俺は全然まだまだのようだ。

今回のことで少しは成長したかと思つたんだけどな。

(やれやれ。これは説得に時間がかかりそうだな)

夕暮れの屋上。失いかけた日常を取り戻した二人は、犬も食わそうな会話を繰り返していく。

ヴィータの記憶がどうしてその部分だけ残っているかは、結局誰も

分からなかったらしい。

だが今のヴィータを見てカイズは一つの答えに辿り着いた。人の記憶と人の想いとは果たして区切ることができるのだろうか。と。

過去に存在しないカイズがヴィータの記憶であり続けられたこと。それはつまりヴィータの想いが過去の記憶に干渉していることにならぬ。

今回はその逆なのだ。本当はありえなかった過去のヴィータの強い想いが、今のヴィータの記憶に反映している。それが今の状況を作り上げたのだ。

魔法が発達したこの世界でも、未だに人の頭のこととは不確定な部分が多い。

だからこそカイズは今ある奇跡を神に感謝した。

過去のヴィータを悲しませることなく。その想いが消えなかったこの現実には。

確かに今のヴィータを納得させるのは至難の業かもしれない。だがきつとヴィータも心の中では理解しているはずだ。

過去の記憶の中で、自分にはいたらない点は多かつたと思う。

しかしそれでも過去のヴィータとの約束をしつかり守れたと。それが嬉しくて、自然と笑みを浮かべた。

「あー、また過去のあたしのこと考えてるんだろ。ふんっ、もうしらないからな」

「あつ、ちよつとヴィータさん。待ってくださいよー」

思うことはいろいろあるが、実に自分らしい終わり方であろう。

さて、これからどう機嫌をとっていいこうか。

ズンズンと離れていくヴィータの背中に駆け寄りながら、カイズは頭を悩ませていくのだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない9 眠れぬ夜と初朝ごはん

小さな拒絶

「——うっ」

時刻は午前二時。深夜にも関わらず、カイズの目は覚めてしまう。

「うっ、あっ」

何度も自身の頭を触ると、突然ベッドから飛び出す。

そして洗面所に向かうと、鏡の中の自分をのぞき込む。

目の周りにはクマができており、頬も以前よりやせこけている。そんな姿の自分を見て、彼は苦笑いを浮かべた。

「はっ、ははは。……ひっでえ顔してるな。うっ」

そこまで確認した後にくるのは、どうしよもない吐き気だ。カイズは洗面台に顔を近づけると、何度も何度も胃の中のことを吐き出していくのだった。



「ふんふふん♪」

赤い髪の少女は、自身の上機嫌さを示すように二つのおさげを揺らしていく。一週間前まで意識不明だった彼女は、そんな浮かれている自分を鏡で見ると、はっと息をのんだ。

「い、いくら退院してからぶりに会うっていつても浮かれすぎだよな。ん、ん。あたしのほうが年上なんだから、しっかりしないとな」

ヴィータは鏡の前に立ったまま、服装をチェックしていく。スーツはしっかりと着こなしているし、髪の毛はねたりはしてない。

とりあえず一安心すると、先ほどまでのスキップ気分を封印し、普通に歩き始めた。

「今日は一緒にお昼食べて。それで時間が合えば夕飯も行けそうだし

な。あー、ダメだ。やっぱり顔がにやけちまう」

ヴィータは両手で頬をぐいーっと引つ張ると、無理矢理表情を落着かせる。すると食堂に着く前に、見慣れた背中を見つけた。

ヴィータはできるだけだけ気分を落ち着かせると、彼の名前を呼んだ。

「おーい、カイズー」

「……………」

「ん、あれ？ カイズー？」

黒髪の青年に声をかけるが、彼はこちらを振り向かない。一瞬見間違えかと思うが、そんなはずはないとヴィータは彼の横に近づいた。

「おつ、やっぱりカイズじゃねえかよ。何だよ無視して、つて。お、おい。どうしたんだその顔」

「あつ、ヴィータさんこんにちは。俺の顔がどうかしましたか？」

「いやそれをこつちが聞いてるんだよ。何だか随分と疲れてるみたいだけど。……ちゃんと食事とってるのか？」

「それは大丈夫ですよ。局員は体が資本ですからね」

そういつてカイズは笑みを浮かべるが、その表情に精気はあまり見られなかった。

「お、おい、本当にどうしたんだよ」

「……………いえ、何でもありませんよ。ほんと、最近ちよつと夜更かししちゃってるだけなんで」

「で、でもよー」

「大丈夫、大丈夫ですつて」

その言葉だけを述べると、カイズは先に歩きだしてしまう。ヴィータは彼の姿に困惑してしまいが、不安を声に出すことなく、彼の後に続いた。



管理局の食堂。いつもの窓際の席に座ると、ヴィータは口を開く。「そういえばそろそろシンドウさんの結婚式だな。スピーチは考えたのか？」

「……………はい」

「それと教導実習ももうすぐだよな。二週間の間会えなくなると寂しいよな」

「……………はい」

「……………なあ、カイズ」

「……………はい」

「……………あたしのこと嫌いか？」

「……………は、——ん——ん！ そんなはずありませんよ。俺はヴィータさんのこと世界で一番愛してますよ！」

危なかった。それが見て取れるほど、カイズは慌てた様子で取り繕って見せる。

ヴィータは自分で鎌を掛けておきながらも、肯定の言葉がでなかったことに安心する。

だがそんなカイズをみたからこそ、ぐいっと彼に詰め寄った。

「なあ、どうしてさつきからそんなに上の空なんだよ。……何かあったのか？」

「い、いえ。別に何かあったとか、そんな深刻なことじゃありませんよ。ただ、最近ちよっと寝付きが悪いなって。すみません、ヴィータさんのとせつかくのお昼なのに」

「そんなことで謝るなよ。それより寝付きが悪いって、どうしてだよ。夜になんかしてるのか？」

「……………いいえ。そうじゃないんですけど」

「なら、どうして寝付きが悪いんだよ。原因はわかっているのか？」

本当に心配だと、ヴィータはカイズの顔をのぞき込む。だがそんなヴィータと視線が合うと、彼はすぐにそれを横に逸らしていった。

——えっ？

そんな彼の行動に、心にチクリと何か刺さった気がした。

今まで照れ隠しで視線を逸らすことは何度かあった。だがこんな目に見えての拒絶は、多分付き合ってから初めてのことであろう。

今までどんな時にでも、カイズは自分と真っ直ぐ向かい合ってくれ

た。そんな彼の、小さいながらも初めての拒絶にヴィータの心が揺れ動く。

先ほどまでの浮かれ気分など、もう欠片も残っていない。ヴィータは焦るように、さらにカイズに詰め寄った。

「な、なあ。ほんと何でも言ってくれて構わないんだぞ。もしかしたらあたしじや役に立てないことかもしれないけど、それだったら話すだけでも楽になるかもしれないし」

「……いえ。本当にただ寝不足だけなんで」

「で、でもそんなに調子悪そうで」

「ヴィータさん！」

食堂に響くカイズの一声。食堂の空気が一瞬に静まり返るのを感じると、カイズは申し訳なきように頭を下げた。

「ご、ごめんなさい。こんなに大きな声出す気はなくて。でも本当に大丈夫なんです。ほら、ご飯も冷めちゃいますし、早く食べましょう」
「……………お、おう」

ヴィータはこれ以上何も口に出すことができなかった。

ただいつも通りの二人の食事が始まる。

いや、いつも通りにしようと、必死になっているカイズの姿を見ていられなくて。そんな彼の負担にならないようにと、ヴィータもいつも通りを演じ始めていくのだった。

今度は二人で



お昼を終えたあと、ヴィータはどうにも仕事に集中できなかった。今日中に終わらせる予定のデスクワークが、まだ半分以上も残っている。それでも頭の中は疲れきったカイズの顔でいっぱいになっていた。

「……いったいどうしたんだろうなカイズのやつ。勉強が忙しいっていつても、普段から習慣みたいに勉強してるし。それに本人は夜更かししてって言うてるけど。体壊すほど夜更かしするやつじゃないよな」

ならいったい何が彼を苦しめているのか。

結婚式のスピーチが憂鬱なのだろうか。いや、それで体調を崩すくらいなら、初めから受けるはずもないだろう。

なら、教導実習で学生に教えにくいのが嫌なのだろうか。確かに教導官になるなかで、その項目が嫌いだという局員は何人か見てきた。だが普段から明るい彼を見てみると、そんなふうには思えなかった。「いや。そのどっちだってあたしは構わねえんだ。……何で話してくれないか。それが問題なんだよな」

辛いことがあるなら、相談してほしかった。困ったことがあるなら、二人で解決していきたかった。

今まで互いの困難はそうやって解決してきたはずだ。それにカイズは恥ずかしがりながらも、子供に嫉妬したことだって話してくれた。

「それが何だって今回は話してくれないんだよ。……そんなにあたしじゃ信用ねえのかよ」

ヴィータは机に頬を当てると、大きなため息をつく。だが自分とカイズには大きな絆があるはずだ。

彼が大丈夫だと言うのだから、今回はそれを信じよう。ヴィータは釈然としないながらも、仕事を続けていくのだった。



「あー、遅くなっちゃったな」

前半仕事にあまり手がつかなかったのがいけなかったようだ。定時の時間を三十分ほど過ぎると、ようやく今日の業務が終わる。

「でも一時間はかかると思ってたからな。これくらいなら、待っててもらえばよかったかな」

お昼に話し合った結果、今日はカイズの家で一緒に夕飯を食べるところになっていた。

本当は一緒に夕飯の買い出しに行く予定だったが、仕事の遅れを理由に彼には先に帰ってもらっていた。

「まあ疲れてるカイズに夕飯作ってもらうのもあれだし。偶にはピザでも頼んでゆつくりと。——あれ」

ヴィータはそこで言葉を止めると、思わず廊下の角に隠れてしまう。

そんなことをせずに、自然に話しかければよかつたはずだ。だがカイズと白衣を着たシヤマルを見てしまうとそれができなかつた。

な、何でカイズがまだここにいるんだ。それに何でシヤマルと。

ヴィータは廊下の角から、二人をのぞき見る。すると、シヤマルがカイズに何かの袋を渡している姿が見えた。

「二応体に残りにくいものを選んで起きました。でもあんまり調子が悪いようでしたら」

「いいえ。これだけもらえれば大丈夫です。……すみませんでした。急な相談ごつとで」

「ううん、それはいいんだけど。……ヴィータちゃんにはこのこと話したの?」

「……………いえ。その必要はないので」

カイズの口から放たれたその言葉。自分には話す必要がない。そんな否定の言葉に、ヴィータの心臓が大きく鼓動する。

あたしには関係ないって。何でだよ。だってあたしとカイズは恋人同士で。困ったことは何でも相談できるって思ってたのに。それなのに、どうして——?」

自分を蔑ろにする言葉に、ヴィータの足が震える。だがこのまま逃げ出すわけには行かない。きつと何か理由があるはずだ。

ヴィータは震える足に力を込めると、わざと大きく足音を鳴らした。

二人の視線がヴィータに集まる。そしてカイズが罰悪そうな顔を見ると、ヴィータの鼓動はさらに早くなった。

「ど、どうしたんだよ、その紙袋。や、やっぱり、調子悪かったんじゃない、ね、ねえのか？」

声が震える。だが必死に平静を保つと、二人に近づく。ヴィータはその紙袋の中身が知りたくて、それを手につかむ。だが――。

――バシン！

カイズが力づくでヴィータから袋を奪い取る。形振り構っていないかったのだろう。ヴィータは袋の角で手のひらが切れるのを感じると、それを隠すように後ろに回した。

「な、なんだよ。何でそんなに慌てるんだよ。――何であたしに話してくれなくて、シヤマルに話してるんだよ！」

「ヴィータちゃん、これには深いわけがあつてね。カイズ君は――」

「――シヤマルさん！ 黙って!!」

カイズの声が廊下に響きわたる。普段の彼からは考えられない叫び声に、ヴィータとシヤマルは思わず口を閉じてしまう。だが声をあげたカイズは違う。

喋れない二人の代わりに、言葉が続けた。

「ヴィータさんに言わなかったのはその必要がないと思ったからです」

「な、何でだよ。――どうしてだよ！」

「――ヴィータさんには関係ないことだからですよ！」

自分には関係ない。そうハッキリと言葉にされた瞬間、ずっと我慢していた感情が表に出始める。

ヴィータは目に涙を溜めると、それを流さないように必死に我慢す

る。だが駄目だ。このままではカイズの前で泣き出してしまう。

「……………うっ」

ヴィータは二人に背を向けると、そのまま走り出してしまう。動き出した瞬間に、こぼれた涙が廊下に落ちる。

そんな彼女の姿を見て、シャルはカイズに詰め寄った。

「い、いくら何でも今の言い方は」

「……………いいんですよこれで。それと約束どおり、絶対にこのことはヴィータさんには言わないでくださいね」

「……………ふん、わかりました」

シャルは心底呆れたと、そっぽ向くと歩きだしてしまう。二人の女性に置いて行かれたカイズは、手に持った紙袋を地面に投げつける。

そしてコンクリートの壁を力強く殴りつけていくのだった。

◆◆

夕暮れの公園。ヴィータはベンチに座ると、ごしごしと涙をぬぐい去っていた。

「ふん。なんだよカイズ、ふん」

彼に拒絶された悲しみの後にきたのは、途方もない怒りだ。

なにがあたしには関係ないだよ。カイズにとつてあたしはその程度の存在だったのかよ。

どんな理由があろうとも、自分には訳を話してほしかった。確かにシャルのように専門的なアドバイスはできないかもしれないけど、それでもだ。

ヴィータは涙を完全にぬぐい去ると、夕暮れ空を見上げた。

「……………カイズのバカ」

そう口にし怒りがこみ上げた瞬間、ヴィータは自分自身が随分と変わったことに今更になって気づいた。

「あたしって、こんなに怒ったり悲しんだりできたんだな。……………十年くらい前ならともかく、もう結構な大人になったんだけどな」

まだはやてと出会った頃の自分は、どうしよもなく子供だったこと

を覚えている。

はやてにべつたりで、人の話を聞かない。夕飯前にアイスを食べたり、なのはに子供扱いされては随分と拗ねていたはずだ。

最後に大泣きしたのはいつだったろうか。

人の生死が関わらず、ここまで怒ったのはいつ以来のことであろうか。

カイズと付き合うようになって家族と違う。それでも一番近くにいるくれる人ができて、きつと自分は弱くなったのだろう。

そうでなければ、こんなに自分の心が乱されるわけがないのだから。

「ふん、なんだよ。あたしに関係なくたって、話してくれてもいいじゃねえかよ」

がつくりと肩を降ろすと、大きなため息をつく。そんな彼女を見て、その少女は心配そうに声をあげた。

「どーしたのお姉ちゃん？ 何だか元気なさそうだけど」

「えつ、あれ。えつと。……確かこの前公園で泣いてた」

「うん、そうだよ。あの時は本当にありがとうねお姉ちゃん」

二週間ぐらい前であろうか。カイズと公園で待ち合わせしたときに、虐められていた小等部の少女を助けたことがあった。あの時は泣きつきりだった彼女だが、今の笑顔を見ると友達づきあいはいはうまくいっているようだ。

「別に気にしなくていいって。それより、あ後はあの男の子になにもされてねえか？」

「うん。お姉ちゃんがしつかり叱ってくれたし。——それにお姉ちゃんの彼氏さんが、ものすごく怒ってくれたんでしょう。あれ？」

「そういうば今日は彼氏さんいないんですね？」

「えつ、ああ、まあな」

きつと男の子経由でカイズのことを聞いたのだろう。このタイミングでカイズのことを聞かれ、ヴィータは言葉を濁してしまう。

だがそんなヴィータの想いなど知るはずもなく。少女は少し残念そうな表情を見せた。

「お兄ちゃんにもお礼言いたかったんだけどな。それにお兄ちゃんは私のこと庇ってくれたのに、私はそれを必要ないって嘘ついちゃって。だからあの時のこと謝りたくて」

「そ、そうか。……その、今度時間ができたら来るように言っておくな」

「うん、ありがとうお姉ちゃん。——それにしてもお姉ちゃんはいいなー。あんなに優しい彼氏さんがいて」

「……そうかな」

「絶対にそうだよー。だって今までこの公園で私が泣いてることなんて何度もあったんだよ。だけど助けようとしてくれたのはお兄ちゃんが初めてだったんだよ。ほかの大人も子供もみーんな私たちのことなんて見てみないようにして。だからお兄ちゃんには本当に感謝してるんだ」

大人も子供もみんな見てみないふりをしていた。だがそれは確かにそうかもしれない。子供はわざわざ危険には飛び込まないだろうし、大人だって子供同士のやり取りだと軽く見て過ぎ去るのが普通だ。

かく言う自分だって、カイズの話を聞いていなかったらあの場に首を突っ込まなかったかもしれない。

実際に虐められている場面を見たわけでもない。声だけ聞いたなら、子供が親に対してだだをこねている。そう頭の中で片づけていた可能性だってありえたのだ。

だがそれでもカイズはあの場面に首を突っ込んだ。待ち合わせ場所から離れているはずの少女を助けるために。

そんなこと。いったいどれだけの人間ができるであろうか。ヴィータは落としていた肩を少しあげると、小さく笑みをこぼした。

「ああ、そうだよな。……あいつは本当に優しい奴で。——あたしの自慢の恋人だよ」

「いつか私にもそんな人ができるかな」

「きつとできると思うぞ。——ありがとうな」

「ん？ 私なにかお礼を言われるようなことしたかな。——」

あつ、そういえばみんなを待たせたままだった！」

「それじゃあ急いで戻らないとな。引き留めて悪かった。また今度、二人で来るからそのときにゆっくり話そうぜ」

「うん。またねお姉ちゃん！」

少女はベンチから離れると、何度も何度もこちらを振り返り手を振る。ヴィータはその背中が完全になくなるまで、手を振り続けると「よしっ」とベンチから立ち上がった。

「さてつと。イジイジしてるのはあたしらしくないよな。———ま
ずどうするかな」

「———あつ、いたヴィータちゃん！もしかして私が一番かな」

聞き覚えのある声が耳に届く。ヴィータは後ろを振り返ると、サイドテールの同僚がこちらに走ってきているのがわかった。

「ん、なのはか。どうしたんだこんなどころで。それに一番って何のことだ？」

「ああ、それはそうか。ヴィータちゃんが知ってたら意味ないことだもんね」

「んん？」

なのはとの会話がかみ合わない。だがきつと今まで全速力で走り続けていたのだろう。

何度も深呼吸をすると、デバイスを取り出した。

「とりあえずみんなには連絡してつと。———これでよし」

「な、何だよみんなに連絡って。それにどうしてあたしを探してたんだ。何か仕事でミスでもあったのか」

「今日はそういうんじゃないやなくてね。あー、でもとりあえずベンチに座り直そうか。ちよつと走りすぎて疲れちゃって」

「お、おう」

せつかく気合いを入れ直したのに、何とも出鼻を挫かれた気分だ。ヴィータとなのははベンチに座る。そして呼吸が落ち着くと、なのははこれまでの経緯を説明し始めるのだった。

ずっと一緒に



暗い。暗い世界に僕はいた。
何もできなくて。ただ無力で。

僕はその場に座り込むことしかできなかった。

暗闇の中。体育座りで座り込んでいる自分を、カイズは俯瞰で眺めていた。

ああ、またこの夢だ。これでいったい何回目だろうか。

いや、この夢を見ること事態、そんなに憂鬱ではなかったはずだったのだ。

だがこの一週間で、ヴィータと初めて出会ったこの夢は塗り変えられてしまった。

一人の負傷者もなく、奇跡的な救出劇だった落盤事故は、デスイーターとの戦い以降、残虐せいのあるものにすり替わってしまったのだ。

病院にいるときは、この夢を見ることはなかった。だが退院して、部屋に一人でいると、毎晩のようにこの夢にうなされた。

それ以来眠るのが怖かった。眠ってしまったら、また自分は大人の男たちに殺されてしまう。

ナイフで突き刺され、鉄パイプで殴りとばされ。

そして死の記憶にいた人のように、物言わぬ軀とかしてしまっただ。

だからこそシャマルに強力な睡眠薬を用意してもらった。夢は浅い眠りの時に見るもの。そんな言葉を鵜呑みにし、深い眠りにつこうとした。だがどうやら無駄だったようだ。

「違う。僕は、僕は違う」

服の中から、身に覚えのないパンが転がり落ちる。その瞬間に一発。その一発で過去の自分は恐怖で体が動かなくなってしまった。

いつもと変わらない。このまま大人たちがよってきて、そして過去の自分を殴り殺していくんだ。

目を背けようと思っても、俯瞰の自分は目を閉じることもできない。ただ殺されていく自分を眺め続けるだけ。

そして深夜に目が覚めて、胃の中ものを吐き続けていくのだ。泣き叫ぶ過去の自分の周りに、大人たちが集まる。

そんななか、ただ過去の自分は否定をし続けた。

そして殺さないでと叫び続けた。

だがそんなことをしても無駄だ。この世界で自分を助けしてくれる人間だというはずが。

——カイズ。

いるはずがない。そう言葉にしようとした瞬間、誰かの声が聞こえた。だけど誰かが自分の名前を呼ぶはずがないのだ。この過去に自分の知り合いなどいないのだから。

——カイズ。

だがその声はさらにハッキリと耳に届く。その瞬間に、カイズは先ほどの自分の考えを改めた。

ここは過去の記憶の中ではない。様々な記憶の欠片が作り出した夢の世界なのだ。

——カイズ。

だからこそ自分の名前が呼ばれないことなんてない。だってその女性は、いつだって自分のことを救ってくれたのだから。

——カイズ。

その声と共に、暗闇にひとすじの光が射し込んでいく。ナイフと鉄パイプが目の前でピタリと止まる。

差し込む光がさらに大きく。そして死の記憶に捕らわれていた自分を救うように、大きな穴を開けていった。



「……………ヴィータさん。あれ、俺」

目が覚めると、いつも通りまだ深夜のようだ。だが昨日までと違い、吐き気や苦しみはない。

それどころか、体を感じる温かさが気持ちいいくらいだ。

その温もりを逃がしたくなくて、カイズは腕に力を込める。すると、彼の髪の毛はふんわりと優しい手つきで撫でられていった。

「どうした。眠れないのか？」

「えっ。あれ。——ヴィータさん、な、何で」

まだ自分は夢の中にいるのか。寝ぼけ眼をこすろうとする。だがそんなことをする必要はないと、ヴィータは自身の存在を表すように強く彼を抱きしめる。

夢ではない。それがわかると、カイズは素っ頓狂な声をあげた。

「どうしてヴィータさんがここに。い、いえ、そんなことよりも俺、ヴィータさんに酷いこと言ったのに、それなのに……………」

「あー、確かにカイズは酷いこと言ったよ。…………でもそれもあたしに心配させたくなかったからだろう」

「なっ、どうしてそれを。シャマルさんが喋ったんですか！」

「いや、シャマルはあたしには一言も話してねえよ。…………だからあたし以外の知り合いみんなに連絡したんだよ。カイズがいま悪夢を見続けて不眠症で。それがデスイーターとの後遺症だって悟られないようにしてる。っていうのを全部ぶちまけてくれて。シャマルはちゃんとカイズとの約束を守ったぜ」

「そ、それはそうですけど。…………うーん」

それは果たして約束を守ったのだろうか。カイズは納得がいかないと言を捻る。だがそんなこと知ったことかと、ヴィータはさらにカイズを抱きしめた。

「ごめんなカイズ。あたしを助けたときに、死のトラウマを刻み込まれたつて。そんなことあたし全然知らなくて」

「そ、そんなヴィータさんが謝ることじゃないですよ。俺が言わなかったのがそもそもいけないんですし。……それにヴィータさんにはこのことを重荷に思っつてほしくなかつたんですよ」

「それは無理な話だな。あたしは知つちまつたから。だからカイズの身に起こつてゐることを、きつちり重荷に思つぞ」

「……そうですか」

カイズの声に元気がなくなる。きつと自分が苦しむよりも、ヴィータが苦しむほうが何倍も辛いのだろう。

だがその気持ちはヴィータだつて同じだ。ヴィータは彼を抱きしめていた腕の力を弱めると、カイズの顔を真つ直ぐのぞき込んだ。

そして彼女自身の贖罪を口にした。

「あたしはカイズに迷惑をかけたことを重荷に思う。だからその重荷を取り払うために、カイズにきつちりお返しがしたいんだ」

「お返しがしたいつて。お、俺はそんなつもりで」

「そんなのあたしが一番よくわかつてるよ。でもそうだとあつても、あたしがなにかしてやりたいと思つたんだ。だから来るのが少し遅くなつた。———だけどこれからはずつと一緒にいる」

「一緒につて。———えつ、あれ!？」

ヴィータの言葉を聞くと、ようやくその決意の意味がわかつたのだろう。カイズはベッドに寝転がりながらも、見覚えのない荷物が増えていることに今更になつて気づく。

赤いドラムバックと旅行鞆は、ヴィータの部屋で何度か見たことがあるものだつた。

ヴィータはカイズが自分の言葉の意味を理解したことがわかつると、彼の首に手を回す。

そして優しく唇を交わすと、お日様のように微笑んで見せた。

「カイズが一人でいるのが怖いなら、あたしがずつと一緒にいる。夜の闇が怖いんだつたら、隣でずつと手を握つてゐる。だからよ。もう一人で全部背負い込むなよ。あたしがずつと傍にいるから。……頼む

からあたしにだけは迷惑かけてくれよな」

「……ヴィータさん。でも、だけど」

「もうはやてにも話はつけてあるんだ。そしたらヴィータの心残りが
ないようにしろって言うてくれたんだ。……それとも、あたしが傍に
いたら迷惑か？」

「そ、そんなことありません。ヴィータさんが傍にいてくれて、そのお
かげで今日は悪夢も見なかったし。それに」

「それに？」

「家に帰ってくれば毎日ヴィータさんに会えるって思ったら。……そ
れだけで悪夢を見るようになって、よかったなって思えます」

「はは、その言い方。ほんと、お前らしいな」

カイズの自分を気遣った想いと本心が交わった答えを聞くと、
ヴィータは再び彼を胸元に抱き寄せた。

彼女の体から聞こえる、トクン、トクンと鳴る心臓の音が心地よく
て。

不安の中にいた自分を優しく抱きしめてくれる温もりが嬉しくて。

カイズの瞼は徐々に重くなっていった。

「ヴィータさん。あの、俺」

「おう、おやすみ。……大丈夫、あたしはここにいるからな」

「……………はい」

カイズはヴィータの手をしっかりと握りしめると、そのまま目を閉じ
ていく。

目の前は黒い闇に包まれていくが、カイズはもうそれを恐れること
はなかった。

規則正しく、幸せそうな表情のカイズを見ると、ヴィータは彼の頭
を優しく撫でていくのだった。



「ん、んんー。かぁー、よく寝たな」

こんなにくつすり寝れたのはいつぶりだろうか。カイズはゆつくりと目を覚ますと、ベッドの中を覗き見る。

「ヴィータさん？ あれ、ヴィータさん」

昨晚隣にいたはずのヴィータがどこにもいない。カイズは迷子になった子供のようには右往左往すると、がっくりと肩を落とした。

「そ、そりやそうだよな。そんなうまい話があるわけ」

「ちよつと待ってるよ。いまガス使ってて手が放せないんだー」

「——あつー！」

ドア越しにその声は聞こえた。カイズは急いでベッドから飛び出ると、キッチンにいる彼女に目を向けた。

昔自分が買ってきたピンク色のパジャマの上に、エプロンをしているヴィータは、何か料理を作ってるようだ。

温かいスープの匂いに、昨日まで食欲のなかったお腹がぐーつと鳴る。

「お腹空いてるのか。もうちよつと待ってる。すぐに準備するからな。だ、だけど味は保証しないぞ。……料理はあんまり得意じゃないからよ」

そんな彼女を見ると、ようやく昨晚のことが夢でないと実感できた。カイズはいま目の前にある現実を。そしてこれからのことを思うと、正直な想いを言葉に乗せた。

「ヴィータさん、楽しみにしてますね！」

「だ、だから料理は苦手だって言ってるだろ。あんまりプレッシャーかけるんじゃないよ」

しかし料理に悪戦苦闘しているヴィータには、彼の言葉の真意などわかるはずもなく。

そんな彼女の後ろ姿を、カイズは満面の笑みで見つめていくのだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない11 堅すぎた絆
と初結婚式

俺の前だけ あたしの前だけで

「ん、んー。あれ、カイズがない」

早朝七時。ヴィータは瞼を擦ると、彼氏の姿を探す。

今日は自分が朝食当番のはずだ。トイレにでも行っているのだから。ヴィータは左右に目を向けると、そこに見慣れた光景があることに驚いた。

「……あれ、どうして自分の部屋にいるんだろ。だってあたしはカイズと同棲し始めたはずじゃ」

「ヴィータ、そんな寝ぼけてたら遅刻してしまうよー」

開かれた扉から、はやてが顔を出す。ヴィータは一度目をぱちくりすると、ハンガーに掛かっている服を見る。

足下まで届く紅いドレス。その存在を見て、ヴィータはようやく頭が覚醒し始めた。

「……そうか、さすがにドレスはカイズの家を持って行ってなくて、それで一度家に戻ったんだっけ」

「もう朝食の用意はできてるから、みんなで食べようなー」

「うん、ありがとうはやてー」

年下の彼氏の前では見せられないだらけきった顔を見ると、ヴィータはベッドから起きあがる。

はやてが扉を閉めると、ヴィータは改めて紅いドレスを見る。そして自分に言い聞かせるように、今日の出来事を口にした。

「今日はシンドウさんの結婚式か。そういえば結婚式の参列って初めてだな」

今日は晴れてよかった。窓から見える光景を見ると、ヴィータは大きく欠伸をするのだった。

◆
車の運転席。はやては車を止めると、隣にいるヴィータに声をかけた。

「本当にここでいいんか。あれなら、もうちよつと中にいけるけど」
「大丈夫だって。電車で来てる人だっているわけだし、このくらいの距離なら問題ないから」

「慌ててドレスの裾踏まんようにな」

「それも大丈夫だって。普段はこれくらいの丈の服で、教導してるんだし」

初めての結婚式に、ヴィータではなく、はやてのほうがあたふたしてしまう。ヴィータは赤色の小さい鞆を持つと、助手席のドアを開けた。

「それじゃあ行ってくるなはやて。また何かあったら連絡するから」
「気をつけてなー。あと、カイズ君によろしく言つといてな」

窓越しに手を振ると、はやての車がゆっくりと走り出す。ヴィータは履きなれないヒールの高い靴に悪戦苦闘しながら、ゆっくりと待ち合わせ場所に向かう。

繁華街の真ん中にある巨大な噴水広場。待ち合わせ場所として有名なこの場所で、ヴィータは自身の待ち人を探す。すると、黒いスーツを着た黒髪の青年が、嬉しそうに大腕を振っているのが見えた。
「ヴィータさーん、ここですよー。じゃなくて、今行くんで待つててくださいーい」

あまりにも大きな声に、広場にいた人々の視線がカイズとヴィータに集まる。

「ば、馬鹿、声がでけえよ」

「だって久しぶりにヴィータさんと会うから俺、嬉しくて！」

「久しぶりって、たった一晩だけじゃねえか。ああもう、ほんと恥ずかしい奴だな」

そう文句を垂れながらも、カイズの姿を見るとヴィータもまた自然と顔をほころばせていた。

ほんと、たった一晩だけなんだけどな。

だが彼ほどではないにしても、ヴィータもカイズと会えたのが嬉しくて、慣れない靴で小走りに彼の元に近づく。

カイズはヴィータのドレス姿を見ると、グツと拳を握りしめた。「やっぱりヴィータさんには紅色が似合いますね。大丈夫ですかー、そんなに可愛いと今日の主役を食っちゃうんじゃないんですか」

「そんなふうと思うのはお前だけだよ。でもまあ……ありがとな」

「いえいえ、本心ですから。それにしても結構攻めたドレスですね。足下はまだしも、肩がでてるなんて」

「ああ、これははやての趣味で。せっかく結婚式に出るんだから、これくらい派手なほうがいいって」

「へえー、そうなんですか。………ちなみに、上着はあるんですか？」

「ん、いや特に持ってきてないけど。ど、どうした？　なんか変な顔してるけど」

先ほどの上機嫌とは打って変わって、カイズの顔に険しさが走る。何か彼を不機嫌にすることを言ってしまっただろうか。ヴィータは少しおろおろとしてしまうと、カイズは突然スーツの上着を脱ぎだした。

「………とりあえず会場につくまでは、これを羽織ってください」

「これって、え、別に寒くはないぞ」

「そ、そうじゃなくて。その。……嫌なんですよ」

「嫌ってなにが？」

「そ、それはその……」

カイズは少し困ったように頬を掻く。だが観念したように息を吐くと、ヴィータの耳元に口を寄せた。

「ヴィータさんの肩の露出をほかの男に見られるのが嫌なんです。

………すみません。器の小さい男で」

「肩の露出って。……ぷっ、ははは」

「わ、笑わないでくださいよ。お、俺は本当に嫌なんですから」

「だ、だってよ。さすがに気にし過ぎだって。……まっ、カイズがそうしたいなら、あたしはそれで構わないけどよー」

どれだけ独占欲が強いのだろうか。だがそんなカイズの気持ち
グイータには心地よく、思わず声が弾んでしまう。

しかしそんな声色が、カイズからしては馬鹿にされていると思っ
てしまったのだろう。

むつと頬を膨らませる彼を見て、グイータは「悪い悪い」と彼の腕
に抱きついた。

「それじゃああたしも一つだけ言っておくぞ」

「……なんでしょうか」

「あんまりほかの女の前で上着脱いだり、ネクタイ緩めたりするん
じゃねえぞ。カイズのリラックスしてる姿、ほかの女に見られたくね
えからよ」

「ネクタイ緩めてる姿って。……別に俺の首もと見たって喜ぶ人なん
ていませんよ」

「さーって、どうだろうな。あたしの肩同様、案外わかんねえかもしれ
ねえぞ」

実際、少し前の夜。お酒を飲む前に、ネクタイを緩め鎖骨が見えた
とき、自分はドキリとってしまった。

だがそれはさすがに恥ずかしくて言えない。グイータは「えへ
へー」といかにも誤魔化しに見えそうな本心の笑みを見せると、ぐい
ぐいとカイズの腕を引っ張った。

「ほらあんまりぶーたれるなよ。そんなんじゃ友人代表のスピーチな
んか務まんねえぞー」

「そうだスピーチだ！ グイータさん、俺のスピーチ見ててくださいい
ね。グイータさんのために俺、一生懸命やるんで！」

「あたしのためにやってどうするんだよ」

「別にサクヤなんてどうでもいいんですよ。俺はグイータさんに一番
よく見られたいんですから！」

カイズがあまりにも真面目に言うものだから、グイータは困ったよ
うな笑みを浮かべると、「あははは」と乾いた笑い声をあげる。

「そ、それじゃああたしのために頑張ってくれよな」

「——はいッー」

実際自分のために頑張らなくてもいいのだが、それが巡り巡ってサ
クヤのためになるならそれでいい。

とにかくこのままここで話して、遅刻しては元もこもない。ヴィー
タはコツコツとヒールを鳴らすと、目的地である式場に向かっていく
のだった。

いつか貴方と

招待状に記された場所につくと、ヴィータはまず驚きの声を上げる。それは結婚式場が豪快だからではない。少しシツクな雰囲気ではあるが、どうみても飲食店には見えぬ店だからだ。

本当にここで結婚式をやるのだろうか。そう訴えかけるヴィータの顔を見ると、カイズはそうですよと口を開いた。

「俺も初めて見たときはヴィータさんと同じ感想でしたね。でもこの店は。——まあ口で説明するより、なかを見た方が早いですね。とにかく行きましょうか」

カイズに引かれるままに店内に入る。内装は外から見えるよりは、広々としていた。だがそれだけでは未だにヴィータの不安は拭えない。

そんなヴィータをよそに、カイズは店の奥を指さした。

「このレストランってサクヤの旦那さんの友達がやってるらしいんですよ。で、その旦那さんの趣味も兼ねてるのか、この地下がすごいんです」

「地下？ この下にも店があるのか?？」

「そうなんですよね。とりあえず下りましょうか」

カイズに手を引かれると、ヴィータは一步一步落ちて着いて階段を下りる。そして下りきった場所の光景を見て、思わず声を上げた。

「す、すげえな。一階の敷地の三倍は広いんじゃないか!」

「そうなんですよね。普段は上の階でレストランをやつて。で、予約入ったら宴会とかパーティーが開けるように地下を広げて。それから結婚式を開けるわけですから、もちろんあれだってあるんですよ」

「あれって。……お、おおー」

ヴィータは視線の先に見える巨大な十字架を見ると、思わず小走りに向かってしまう。

どういう構造なのか、太陽の光が通るステンドグラス。こじんまりとしながらも、来客が座る横広の椅子。そしてその真ん中に通るのは、今までテレビなどでしか見たことのない真っ赤なヴァージンロー

ドだ。

何もかも初めての式場を見て、目を輝かせるヴィータ。そんな彼女に今日の主役である彼女が声をかけてきた。

「旦那の友達は神父の資格も持つてるらしいんですよ。だけどレストランも開きたくて、どうしよーって考えたら、結局どっちもやってしまったみたいですね」

「あつ、シンドウさん。きよ、今日はお日柄もよく——」

「そんな堅苦しい挨拶は大丈夫ですよ。それに今日から私はシンドウではなくなるので、気軽にサクヤって呼んでください」

「あつ、そうか。……ん、でも式はあげてなくても、婚約はしてたんだよな」

「あー、それは独身ってことにしたほうがいろいろと商談が進むことが多くて。……まあこの結婚式を期に、私もすっかりしようかなって思いました」

「あ、あははは」

自分よりも見た目も心も大人のサクヤのことだ。きつといろいろと思うところがあつたのだろう。ヴィータは「ん、ん」と一度喉の調子を整えると、改めてその名前を口にした。

「それじゃあ改めて。えつと、サクヤさん。今日は改めてあたしなんかを誘ってくれてありがとうな」

「いえいえ。私もヴィータさんには是非とも来てほしかったので嬉しいです。——それとカイズ君。しっかりとスピーチの準備はできてるわよね」

「あつたりまえだろ。ここ最近いろいろあつたけど、そこは抜かりねえよ」

「そう、それはよかつたわ。——それじゃあ今日はヴィータさんにいいところ見せるために、しっかりとスピーチしなさいよね」

「ふえつ！ サ、サクヤさ——」

「あつたりまえだ！ ヴィータさんの見てる前でかつこ悪いところ見せられるかよ!!」

「えつ、カ、カイズ！」

「——うん。それでよし」

サクヤは満足そうに頷く。カイズもまたビシッと親指を立てると自信満々であった。

いや、なんて言うか。サクヤさんカイズの舵取りのしかたうますぎだろ。

先ほどヴィータが思ったことを、サクヤはもつと前から考えついていたようだ。

互いの利害が一致している姿を見ると、ヴィータは何とも言えない気持ちになる。

そんな置いてきぼりなヴィータを見ると、サクヤはこほんと一度流れを区切った。

「それでは私はこれから準備がありますので。もうちらほら私と旦那の親族や友達がくると思いますので、今しばらく待っていてくださいね」

そう言葉にすると、サクヤは二人に背を向ける。そんな彼女の姿を見て、ヴィータは思い出したように声を上げた。

「……えっと、なんかタイミング逃しちゃったけど。改めて今日はおめでとうなサクヤさん」

「——ええ、ありがとうございます。ヴィータさん」

そう言つて振り返るサクヤの顔は、今まで見た彼女のなかで一番幸せそうな顔をしていた。



式は何の問題もなく滞りなく進む。

神父の前で結婚を誓ったサクヤと旦那さんはとても幸せそうで。普段から綺麗なサクヤのウェディングドレス姿は、こういう言葉があっているかわからないが圧巻の一言だった。

二人は神父の前に誓いの口づけを交わすと、それで第一部は終了する。

二人はお色直しのために、それぞれの控え室に移動する。親族や友

達、そしてヴィータ達もまた用意されたテーブルに移動していった。ウエイターから受け取ったグラスを手に持つ。だがヴィータはそれに口をつけることなく、「ふっ」と息をもらした。

「サクヤさん。すっげえ綺麗だったな」

「そうですかー？　って、まあそういうジョークをこの会場で言うべきじゃないって俺もわかってますよ。——悔しいけどそれについては同感です」

「なんて言うんだろうな。普段の大人びてるキツチリした綺麗さとは違ってるっていうか。大人の抱擁力みたいな、温かさがある綺麗さだったな」

「結婚ってそれだけで人を変えるもんなんですね。俺も少し、あいつのことを大人に感じましたしね」

「——ふうー」

サクヤのウエディングドレス姿が、ヴィータに与えた想いはそれだけでない。

彼女は隣にいるカイズをチラリと見ると、頬をうつすらと赤色に染めた。

結婚か。……いつかあたしもするんだよな。

きつと半年前には結婚のけの字も考えることはなかっただろう。

だが今の自分には大切な人がいて。そしてそんな自分を好きでいてくれる人がいる。

ヴィータは純白のウエディングドレスを着て、みんなに祝福されている自身の姿を想い描くと、はにかむような笑みをこぼした。

「ふふふ」

「何だかご機嫌みたいですけど。どうしたんですかヴィータさん？」

「んー、なんでもねえよー」

もう一度笑みをこぼすと、ヴィータはようやくグラスに口を付けた。

「あれ？　これただのリンゴジュースだ。カイズのは？」

「俺のは赤ワインですけど。——あのウエイター、間違えたんですかね」

「まあ別に構わないけどよ。——あつ、カイズはあんまり酒飲み過ぎるなよ。つてかもう飲むな、そこに置け！」

「えっ、な、何ですか」

「何でもだよ。ほら、もうすぐスピーチやるわけだし、酔っぱらったらしょうがないだろ」

「そ、そうですね」

ヴィータのあまりの剣幕に、カイズは有無言わずグラスをテーブルに置く。すると、そのタイミングを見計らったかのように、一人のウェイターが彼の元に近づいた。

「カイズ様でございましょうか」

「あ、はい。そうですね」

「このあとのスピーチのスケジュールを親族様と打ち合わせしたいので、来てもらってよろしいでしょうか？」

「えっと、あの」

カイズはちらつとヴィータの方を見る。きつと知らない人だらけの場所に、自分を置いていくのが心苦しいのだろう。だが小さな子供ではないのだ。ヴィータはカイズに向かい、小さく手を振る。

「ほら行ってこいよ。あたしは別に大丈夫だからよ」

「そ、それじゃあ。——お、俺、ヴィータさんのために」

「だからそれはわかってるって。ほら、ウェイターさんも困ってるだろ」

「わ、わかりました。それじゃあ行ってきますね」

「おう、行ってらっしゃい」

カイズは大げさに手を振ると、ウェイターと共にその場を離れていく。ヴィータはやれやれと肩を落とすと、リンゴジュースに口を付けた。

幸せの資格

「……………ジュースの件はなんとか誤魔化せたかな」

カイズに酒を飲むなど言ったこと。それはもちろんサクヤの結婚式をめちやくちやにしないためもある。

だが自分が子供扱いをされ、カイズに嫌な思いをしてもらいたくない。そんな想いがあつたからこそ、まくし立てるように言葉を放つたのだ。

別にあたし自身もう慣れっこなんだけどなー。

この容姿で困ったことや、嫌な想いをしたことは確かに何度もある。だがそれでもヴィータは変身魔法などで、年相応の外見にしようとは思わなかった。

別に知らない誰かによく見られようとは思わない。それに本当に自分をわかってくれる人は、外見など気にすることなく対等に自分と接してくれる。

それに自分の見た目が成長しなかったからこそ、カイズは自分を思い出すことができ、再び出会うことができたのだ。

この外見に感謝こそすれば、非難しようとはヴィータは絶対に思わなかった。

それにリンゴジュースだっておいしいしなー。

心の底からそれを楽しむと、ゆっくりと肩を下ろす。

そうやって落ち着いたからだろうか。先ほどまで聞こえていなかった、離れた席の声が耳に届いた。

「うわぁー、ろくな男いないじゃん。ってか、どうしてこんな狭い店で結婚式なんて挙げるんだらう」

「ちよつと声大きいよ。シンドウ先輩に無理言つて参加させてもらったのは、あんたのほうじゃない」

「だってあのシンドウ先輩だよー。絶対にレベルの高い男友達がくると思つたのに。これだつたら二次会からでもよかつたよー」

「ちよ、ちよつとー」

多分無理を言つて参加させてもらったのだらう。そうでなくとも

何という口の聞き方なのだろうか。だがそんな女性一人のために会場の空気を壊すわけにはいかないというのが総意なのだろう。

親族やこの会場にいる若い人たちなどは、彼女たちのことを完全に無視していた。

見てないが、机の上に頬杖をついている姿が目には浮かぶ。いったい誰のための結婚式なのか。ヴィータは小さくため息をつくとき、再びグラスに口を付ける。

「あー、でもさっきの人はかつこよかったな。えつと友人代表で挨拶する予定の人」

「うーん、確かにあの人はかつこよかったけど。でも隣にずっと彼女みたいな人いたよ?」

「彼女みたいな人? あはは、あの赤い髪の子のことだよー。ないない、あの子が彼女なわけじゃないじゃん」

二人の会話が耳に届くと、ヴィータは馬鹿にしたように息を吐く。もうこういう会話は慣れっこだ。自分は好きでこの姿でいるわけだし、年だつてカイズよりも上だ。

自分が見た目通りの年齢なら、確かに犯罪の臭いしかない。だが自分達はこれでうまくいっているのだ。

堅い絆があるからこそ、どんなことを言われてもヴィータは大丈夫だった。

だからこそその会話を聞き続けてしまったのだ。

「そ、そうだよーね。さすがにあんな小さい子が彼女じゃ、犯罪だしね」「いやいや、そうじゃなくてねー。えつと、あの子のこと知らない?」

たまに管理局の情報誌とかに乗ってる敏腕教導官らしいよ。多分私たちより年上だろうし」

「えつ、そうなの! でもそれじゃあなんで彼女つてのがあるりえないの? 十分にその可能性があるように思えるけど」

(はっ、どーせこんな子供姿の女がそういう対象に見られねえっていうんだらうな。もうそんな落ちは聞き飽きたぞー)

余裕しやくしやくでグラスを煽る。

そんな余裕があつたからこそ。

その一言は不意を狙い心に突き刺さった。

「だってあの赤い子、『人間じゃないん』だよ」

——ドクンッ!

その言葉に心臓の大きく跳ね上がる。

全身の血の気が引く。

唇が震え出す。

「えっ、人間じゃないってどういうこと?」

「なんか昔のロストログリア事件の首謀者らしくてね。実際は自覚症状がなくて、無罪放免だったらしいよ。でもそうだとしても多くの犠牲者だしておいて、それで今は人間のフリして男とイチャイチャして幸せですよーって。正直ありえないくない?」

「ちよ、ちよつと声大きいよ。それにさつきから飲み過ぎだつて」

「いいじゃない。もうこれくらいしか楽しみないんだからー。それにもし、もしだよ。自分に子供ができてある日に、『お母さんこの人が僕の彼女です』って人間じゃないものを紹介してきたら私だつたらショックで倒れ込んだじゃうなー。あつはつはつは」

相当できあがってしまっているのだろう。ポリウムを抑えない声に辺りがざわめき出す。

だが今席を立つわけにはいかない。今立ってしまったては、彼女たちの会話がこちらに届いていたことを肯定してしまう。

まだ駄目だ。まだ、まだだ。

ヴィータは震える手でグラスを掴む。

中に入っている赤い液体は、まるで地震に揺らされるように左右に揺れる。

落ち着け。落ち着いて喉を潤して。う、あ……。

口の中に広がるアルコールの臭いが、ヴィータの気分をさらに悪くする。ヴィータはカイズのグラスを手にとっていたことにも気づかず、それを飲んでしまったのだ。

落ち着けよ。大丈夫だよ。だから収まれよ。静まれよあたしの体。

ただ気丈であるように振る舞って。そんな悪口言われ慣れてますよと大人の余裕を見せて。ヴィータは下唇を噛むと、約三分間その場

で堪え忍んでいった。

そしてゆつくり席から立ち上がると、地下の式場の扉を開ける。もうすぐ披露宴が始まるからか、受付の人以外廊下には誰もいなかった。

——コツ、コツ。

初めは静かに。今の気持ちを人に気取られないように、歩き出す。

——コツ、コツ、コツ、コツ。

地面を踏む感覚がさらに早くなる。

——コツツ！ コツツ！ コツツ！ コツツ！

周りに誰もいなくなると、廊下の奥に向かってヴィータは走り出した。喫煙所や公衆電話のスペースを越え、廊下の奥に走り進む。

「う、あう、ああ……………」

だが声をあげてはいけない。ここで叫び声をあげてしまつては、せつかくの結婚式が台無しになってしまう。

「——あつー！」

だが声を抑えることに必死になっていたためか、慣れないヒールのせいで体勢を崩してしまう。

ヴィータはそのまま廊下に倒れこむと、立ち上がることはなく。自分の口元を手で押さえ込み、目をギュツと閉じた。

声をあげないように。涙を流さないように。

自分是我慢しなければいけない。

それは何もサクヤの結婚式だからだけではない。

「だ、だってあたしはいろんな人や世界を壊してきたんだから。だから誰かに不平不満を言われるのはあ、当たり前前、当たり前前なんだから。」

——う、ああ、あ……………」

別段、今日出会った彼女たちと面識があるわけではない。だからこそその言葉は、ヴィータの心を深くえぐり込んだ。

何も知らない。何の被害もない人たちが、自分のことをそう非難するのだ。

なら実際に被害にあった人が今の自分を見たらどう思うだろうか。人ならざる物が人に混じり。そして自身の起こした罪を忘れ幸せに過ごしている。

きっとその時間は、誰にでも平等に与えられた時間のはずだ。

だが自分は、『どうにもできなかった』と罪に罪を擦り付けるだけで何か償いをしようとしただろうか。

忘れていたわけではない。だが思い出すことが少なくなっていた。

自分は。多くの人の不幸の上に乗るの幸せを勝ち取っているということを。

「あ、あたし。……あたしは幸せになっていい資格が、ほ、本当に。本当にあるのかな」

そしてカイズと付き合うことを、カイズの周りの人間は祝福してくれるのだろうか。

自分は歴史に残る大事件を起こした張本人だ。

それに自分は人間ではない。カイズのことを愛し、カイズに愛されようとも、自分はカイズにその結晶を残してはあげられない。

「だってあたしは人間じゃないから。人並みの幸せすら、二人で作って、生みだしてやることすらできないんだ」

カイズと付き合うようになって、自分は様々な出来事と直面してきた。

初めての恋にあたふたして。遊園地やカイズの家ではドキドキしっぱなしだった。

サクヤと浮気していると勘違いしたり、教導試験のためにデバイスも作ったりもした。

それと自分を救うために、過去の記憶に入り込みカイズはその全てを見てきたはずだ。

そしてその事件を見てもなお、カイズは自分のことを愛し受け入れてくれた。

切っ掛けはあまりいいものではないがカイズと同棲を始めて。

本当に。本当に幸せな毎日を過ごしていた。
もう彼の愛を疑うことはない。

だがそのまま優しさに溺れてしまつて本当にいいのか。
心の底にいるもう一人の自分が背後からヴィータを抱きしめた。

「……………カイズ」

ヴィータはその場で膝を抱えると、そこから動かなくなつてしま
う。

今はまだ何もしたくない。誰の声も聞きたくない。
それだけを思うと、ゆつくりと目を閉じてしまった。



「ど、どうでした俺のスピーチ！ って、あれ。ヴィータさん？」
スピーチを終えテーブルに戻ると、そこにはヴィータの姿がなかつ
た。

いったいどういうことだろうか。あれだけヴィータのためにス
ピーチしたのに、まさか見てくれなかったのだろうか。

迷子の子供のようにカイズは右往左往する。もしかしたら調子が
悪くなったのかもしれない。

急激な不安に襲われると、カイズは式場の扉を開けた。

「——うおっとー！」

「わっー！」

小さい影にぶつかる、カイズは倒れそうになる彼女を反射的に抱
きしめる。

「ご、ごめんなさいヴィータさん。でも今までどこに？」

「おー、ごめんなー。間違えてカイズのグラスに口付けて、ちよつと気
持ち悪くなつちまつてよ。その、スピーチ聞けなかつたんだ」

「いえ、それはそれでもういいんですけど。…………どうしたんですか、そ
の顔色があまり」

「だからさつきも言っただろ。お酒飲んだらちよつと気持ち悪くなつ

ちまったって。ほら、まだ披露宴は続いてるんだから、早く戻ろうぜ」
「えっ、あつ、はい」

何かが釈然としない。そう感じ取ることができても、カイズにはその答えにまでたどり着くことができなかった。

……本当に体調が悪いのなら、あまりしつこいのも失礼だしな。

それに自分とヴィータは堅い絆で結ばれている。本当に困ったことがあったら、すぐに話してくれるだろう。

カイズが思うその絆は、互いが疑う隙もないほど強固なものであった。

だがその絆が強固であるからこそ、口にできないことがある。

ヴィータのことを心の底から愛しているカイズは、そのことに気づくことができなかった。

あとになって思えばそれは前兆のようなものだったのかもしれない。
い。

ヴィータが自分の罪と存在を改めて刻みつけられた結婚式。

それはあの事件が起こる五日前の出来事だったのだから。

ヴィータちゃんは男友達が少ない12 犯した罪
拭えぬ罰

深く 暗く

初めの頃。俺はきつと復讐心で心が黒く染まっていたと思う。

奴らが許せなくて。自分の非力が悔しくて。

ただ泣き続けた。ただ嘆き続けた。

だからこそ力をつけた。無理矢理換算されたこの体を利用して。

全ては奴らを殺すために。

そんなことを繰り返しているうちに、俺は様々な世界を渡った。

雲に届きそうなビルが建ち並ぶ世界。未だに穴蔵に住んでいるような旧世界などその数はもう覚えていない。

ただ力をつけるため。そのためだけに、その世界において『絶望』と言われる数々の難敵を俺は倒してきた。

圧倒的実力の差があるときもあれば、死にかけてことも何度もある。

だがそのおかげで、俺は強くなった。しかし強くなる中で、俺の心の闇は少しずつ薄らいでいった。

『ありがとう』

老若男女様々な人間から、その言葉をもらった。

俺はただ自身のために剣を振るっていただけなのに。それでも結果として世界の驚異を倒した俺に、人々は感謝の言葉を述べたのだ。

それから何百年世界の驚異と戦い続けただろうか。

気がつく俺は強くなることよりも、人々の笑顔と平穏のために剣を振るっていた。

俺が普通の人間であったとき。その時に味わった絶望を何も忘れてわけではない。

だが忘れなくとも、これでいいのかもしれないと思いはじめてきたのだ。

憎しみは、復讐は、何も生まない。

こんなことをしても、エレナはもう戻ってこないのだから。そう思い始めてまた数百年。そしてここ数ヶ月の間にその噂が耳に届いた。

「どうやら俺の知らないところで、あの事件の全ては終わりを告げたようだ。」

「ならもう俺の出る幕ではない。自ら手を下さなくても、奴らがしっかりと罪を受けてくれれば。」

「そう、それでよかったのだ。」

「それからしばらく、俺はその事件の結末を調べ続けていた。この結末をみれば、俺の長い時間は終わる。」

「——そのはずだった。」

「保護観察処分？………死刑の執行もなければ、懲役もないだ」と
「啞然とした。奴らに下された処分に、頭の中が真っ白になってしまった。」

「こんなことがあるわけがない。どうして奴らが許されなければいけないんだ。」

「だって奴らは多くの人を、世界を、そしてエレナのことを——
さらに奴らのことを調べていると、一枚の特集ページが見つかる。」

『機動六課の仕立て人。強固な絆で結ばれた家族』

「その写真には五人の女性と一匹の狼が映っていた。その全ての女性のみな笑顔で。」

「真ん中のミドルヘアの女性に慕う彼女達の姿はみな幸せに満ち溢れていた。」

「その瞬間。俺の中で薄れかけていた想いが、深く暗く心の中に広がった。」

「俺から全てを奪った奴らが、家族と共に笑顔で暮らしている。その姿は奴らが罰せられなかったことを知ったときよりも、何倍も衝撃的なことだった。」

「……エレナ。俺は」

「今までの人生で一番力強く剣を握りしめる。」

「管理局が奴らを許すというのなら。」

世界が奴らの幸せを望むなら。

俺のすることは決まっている。

俺はずっと、そのために生きてきたのだから。

手に持っていた本を握りつぶすと、俺は別時空へと転移魔法を展開させるのだった。

誰にも言えない

「ん、んん。あふわあく。もう朝か」

今日は自分が朝ご飯の担当のはずだ。カイズは両手を伸ばすと、ベッドから起きあがる。

「さて、ヴィータさんを起こさないように。って、あれ、ヴィータさんがいない？」

隣にいるはずのヴィータがなぜかいない。カイズは困惑したような顔をするが、部屋に漂う匂いにすぐ気づいた。

「あれ、今日は俺の当番でしたよね」

「おー、そうなんだけどよ。……まあいいじゃねえか」

「いや、別に悪いとはいってなんですけど。でもせつかく役割決めたわけですし」

「いいだろ！ サボってるんじゃないよ、家事をやってるぶんにわよ！

——あつ、ごめん。そんな怒ることじゃないよな。ほんと……」

「いやいや、気にしてませんよ。それに俺、ヴィータさんのご飯大好きですしね」

動揺を顔に出さないようにし、キッチンのヴィータの元に歩く。そういうえば、ここ最近エッチなことどころか、キスすらご無沙汰だ。

カイズはヴィータが包丁を持ってないタイミングを見ると、彼女の肩を抱きしめた。

「ヴィータさーん。朝のキスしてもいいですかー」

してもいいですかと聞くのは、ヴィータに肯定の言葉をもらうためだ。『えっ、キ、キスって。……おう、いいぞ』と恥ずかしがりながらも、唇を伸ばすヴィータはいつ見ても可愛かった。

今日もその顔が見られると思っていた。

だがヴィータは困惑したような顔を見せると、小さく首を横に振る。

「……………ちよつと今はそういう気分じゃねえんだ」

「——えっ?」

「ごめんなカイズ」

もうそれ以上ヴィータは何も言わない。強く拒絶するわけでもなく、肩に置かれた手を払うと再び背を向けてしまった。

「……ヴィータさん?」

「……………」

拒絶されたことよりも、無言の返答のほうが何倍も辛かった。カイズは再び手を伸ばそうとするが、その手がヴィータを捕らえることはなく。

そのまま何も言うことなく、テーブルに戻っていくのだった。



あの結婚式以来、あたしは明らかに挙動不審になってしまった。

料理を食べてもおいしいと感じないし、人と話していても上の空。何よりカイズと一緒にいることが辛くてしかたなかった。

カイズのことは好きだ。だから一緒にいて苦痛であるわけではない。彼といられるだけで、自分は幸せで。そんな当たり前の幸せを今までどれだけ奪ってきたのか。

それを考えると、胸が苦しくてしかたなかった。

闇の書事件を介して、自分ははやと出会った。いろんなことがあつたけど、死者を一人も出すことなく事件は幕を閉じた。

それからは今までの贖罪のために、自分たちは管理局に務め様々な事件を解決してきた。

J S 事件を筆頭に、大小関係なく様々な事件に取り組んだ。そのなかで何百、何千という人を助けることはできたかもしれない。

だけど。何千という人を救ったからといって、何千という人を殺した罪が消える訳じゃない。

償っても償いきれない罪をおかした自分は、どうしていま幸せに包

まれているのだろうか。

あたしは。……あたしは幸せになる資格があるのだろうか。

「——ちゃん。ヴィータちゃん」

「……………」

「ヴィータちゃんってば！」

「えっ！ あ、おお。……どうしたんだなのは」

「どうしたんだじゃないよ。大丈夫？ ご飯はぜんぜん手をつけてないし、私が話しかけても上の空だし」

「……すまねえ。ちよつと考えごととして。それで何の話だったっけ？」

「——ふう。ヴィータちゃん最近なんだかおかしいよ。何か相談ごとがあれば、私でよければ乗るけど」

「い、いや、相談ってほどのことじゃねえんだ。それよりも急ぎの話なんだろ。そっちのことを話してくれよ」

「まあ急ぎは急ぎだけど。……本当に、何かあったら相談してよね」

管理局の食堂。二人掛けのテーブルの向かいに座っているのは、ヴィータの態度に少し疑問を思いながらもテーブルに資料を広げる。

ホッチキスで止めてある一枚一枚の資料は薄いが、その膨大な量にヴィータは目を丸くした。

「これはなんの資料なんだ？」

「……何でも何百年も前から続いているものらしくてね。この資料に書かれてる次元の世界って、どこも一度は世界の危機に瀕したことがあるの」

「んん？ 瀕したことがあるってことは、世界自体は無事だったってことなのか」

「それがこの事件のみそなところだね。この資料の全ての世界が崩壊の危機に陥りはしたの。……だけどある一人の男性によって全てが救われてるってのが、……ここ最近わかってきたの」

「ある一人の男って。だけど資料を見るように、もう何百年も前から続いていることっぽいよな。さすがに同一人物ってのはないんじゃないかな」

いのか？」

「そう。管理局もそうだと思っただから、これらのことはただの偶然。または様々な人物による模倣だと思っただの。……だけどここ最近、また様々な世界が大がかりに救われることが多発したの。その際に残った様々な痕跡と過去の資料を照らし合わせた結果、これまでのことが同一だってわかったみたいなんだ」

「でもそれがわかったところでなんなんだ。別に世界を救ってるんだから、何の問題もないんじゃないのか？」

「今まではそうだったんだけどね。だけど、ここ最近のこの人の動きが活発すぎるというか。……形振り構わずいろんな世界を救いすぎちゃってるの」

なのははテーブルに広げた資料を片づけると、ここ最近のものをデバイスに表示させた。

「昔、私たちがいた地球と同じような世界。魔法の存在が公になっていない世界において、その人は魔法の力を行使して世界を救ってしまっただ」

つまりその男は、その世界に魔法という存在しない爪痕を残してしまっただ。

魔法がない世界で、魔法の存在が知れ渡ってしまうこと。それはその世界の理屈を根底から覆ってしまう立派な事件だ。

形振り構わず救えばいいわけではない。存在しない力をちらつかせることは、その世界の人間を恐怖に陥れることになってなるかもしれない。

それはヴィータにもわかっている。わかっているのだが。

ヴィータは額に手のひらを当てると、俯いたまま唸るように声を上げる。

「……なあ、それって本当に悪いことなのか」

「悪いことって。それはいいことだとは思うけど、それだとその世界自体の均衡も——」

「均衡とかそんなことどうでもいいじゃねえか！ 誰だって死にたくなんてねえ。それを救うことが本当に悪いことかって聞いてるんだ

よ！」

「ヴィ、ヴィータちゃん……」

激情のままに大きな声を出してしまった。ヴィータは苛つくように椅子に座り直すと、なのはから視線を外す。

「……すまねえ。あたしだってわかってるんだ。わかってるんだけどよ」

「……………ねえ、本当にどうしたのヴィータちゃん。ちよつと前から何か変だよ。それともあたしには話せないことかな。でもだったら、はやてちゃんかカイズ君には——」

「……二人には話せねえよ。特にはやてとカイズの二人にはぜってえに話せないことだ。……それはお前もだ。ごめんななのは」

「ヴィータちゃん。私は謝って欲しいんじゃないよ、ちよつとヴィータちゃん！」

席から立ち上がるヴィータにはは声をあげる。だがヴィータは何も答えることはなく、一口も食べていないトレイを持つとそのまま歩いていってしまうのだった。

砕かれた心

仕事を終えても、ヴィータはカイズの家に真っ直ぐ帰ることができなかつた。

何のあてもなく町外れにでると、一面に緑の広がった草原まで足を延ばしていた。

都会の喧噪から遠く離れたこの場所は、一人で悩むにはちょうどいい。

ヴィータは夕暮れの空を見上げると、重く目を閉じた。

「誰にも話せるわけねえよ。きつとあたしの悩みを話したら、カイズもはやても一緒になって悩んじゃう。……でもだったとしても、あたしのことを優しく迎えてくれるはずだ。……闇の書の意志のせいで、どうにも出来なかつたから。償いの為に今まで走り続けたことをしってるから」

だがそれはあくまで自分を受け入れ、近くにいた人たちだからいえることだ。

「……あたしのことを知らない人からしたら、あたしは世界を滅ぼし続けた重罪人。人の形をしたただの魔力の結晶体に過ぎないんだ」

親しいものと無関係のもの。それらの人たちが自分のことをどう思っているかは、この数日でよくわかつた。

だからもし。もしそんな人物がハラオウン一家以外に現れたらと、そんなことをここ最近思うようになってしまった。

ヴィータは閉じていた目を開けると、顔を俯かせた。

「あたしたちに大切なものを奪われた人いて。その人がもし今のあたしたちのことを知ったら。……どう思うんだろうな。——わっ！」

突然の突風が草原を走る。ヴィータは反射的に目を閉じると、苦笑いをした。

「はっ、ははは。……やっぱり世界はあたしのこと許さないって言ってるのかな」

「いや、世界はお前のことを許しているさ。だからこそお前はここに

いる。幸せな顔をしてな」

「——えっ！」

不意に聞こえる声に、ヴィータは目を丸くする。手で覆っていた視界を開くと、目の前には一人の男が立っていた。

ガタいのいい筋肉質な男。その白い髪は染めたものではなく全てが白髪。口で語ることがなくとも男の苦難を象徴していた。

背に携えている大剣は板のように平べったく。それでいて百八十センチほどの大きな得物だった。

黒いマントを羽織ったその姿は、まさに旅人といった風貌である。

そこまでゆつくり男を観察すると、ヴィータは待機状態のデバイスに手を伸ばした。

「いったいお前は誰だ」

「お前は誰か？ 俺はシスンだ。……覚えてないか？」

「お前みたいな男は知らねえよ」

「そうか。……なら、エレナという名前は覚えているか？」

「だから知らねえって言ってるだろ！ ——いや、お前の顔見覚えがあるぞ。今いろんな世界を形振り構わず救ってるやつだな！」

途中で切り上げてしまったが、資料に映っているその顔に見覚えがあった。

きつとなのはは、この男が次はこの世界に来るかもしれないから、注意するように伝えようとしたのだろう。

だが目の前にでてきたのなら手間が省ける。こつちとしては、ここ最近悩むことが多すぎてイライラしていたところだ。

ヴィータはデバイスを機動させると、紅いバリアジャケットをセツトアップした。

男もまた大剣に手をかけると、ヴィータを睨みつける。

「あの頃と違って、随分と可愛らしいバリアジャケットだな。

……それだけ今が幸せだということか」

「はっ！ お前にあたしのなにがわかるっていうんだよ。お前の身柄は確保させてもらうぞ！」

「……………」

シスは大剣を持つと、その場でズツシリと構える。ヴィータはカートリッジロードをすると、グラーファイゼンのブーストを全開にする。

「うおらあああああつー！」

ラケーテンハンマーによる先制攻撃。たとえ相手がどんな手段を使おうとも、真つ向から力で叩き潰す。

この数年間。鍛えに鍛えた必殺の一撃だ。

「……………あの頃よりも速いな。——だが！」

男は身の丈ほどの剣を軽々と振り回す。ぶつかり合う大剣とハンマーから火花が散る。お互いの力が拮抗し、完全に動きが止まる。

そう、ヴィータから仕掛けたにも関わらず、大剣を構えただけのシスを押し切ることができなかったのだ。

「なっ、くそっ!!」

「最後の転生後から、随分と磨きをかけたみたいだな。——だが俺はその何百倍もの時間を歩き続けた。たった一つの想いを胸に、ただ斬り結んできた!!」

シスの両腕に血管が浮かび上がる。一步、ゆっくりと一步シスが地面を踏み込むと、ヴィータの体が押され始めた。

「さっきから訳わからねえことをゴチャゴチャと！ いったいお前は何者なんだよ!!」

「……………どうしても思い出せないか。だったら教えてやる!!」

「うっ、あつ!!」

男の叫びとともに、ヴィータは完全に押し切られる。受け身をとることも出来ずに、吹き飛ばされると地面に何度も叩きつけられた。

ちっ、何てパワーなんだよ。

ヴィータは空いている左手で地面を叩くと、何とか体勢を整える。だが追撃を注意したヴィータとは違い、シスは彼女に斬りかかることはなかった。

だがヴィータを見るその瞳は剣で斬りつけるよりも凶刃であり、その怨念のこもった視線にヴィータの胸は自然と締め付けられた。

男は地面に剣を突き刺すと、抑え続けた激情を言葉にして放った。
「俺はお前たち闇の書に、世界を、友達を、家族を。そして愛する人を奪われた男だ」

「——えっ」

「お前達は俺から全てを奪った。ただ平穩に生きてたかっただけなのに。そんなありふれた幸せを望んだエレナの命をお前達が奪っていったんだ!!」

「——」

パクパクと声にならない声が、ヴィータの口から漏れる。目の前の男が何を言っているのかがわからない。いや、わからないわけではない。

わかることを心が拒絶してしまったのだ。

だってそれを今のヴィータが理解してしまったら。きっとこの小さな少女の心は耐えきることができないから。

「……あつ、ああ」

「やはり何も覚えてないか。ああ、そうだろうな。もしエレナや俺のことを覚えてるのだったら、新しい家族に囲まれて笑顔なんて見せるはずないからな!!」

シスは何百年もため続けた憤激をヴィータにぶつける。だがそれだけで収まるはずがない。

彼は大剣を引き抜くと、それを大きく振りかぶった。

「たとえ管理局がお前達を許そうとも。たとえ世界がお前達の幸せを望もうとも。俺は絶対に許しはしない。お前達闇の書に殺された者達の怒りを、ここで晴らさせてもらおうぞ!!」

「うっ、あ、ああ、あああああ」

シスはその体つきからでは考えられないほどの速度で、ヴィータに攻めよる。

振り下ろされる一撃は、直撃すればヴィータの体を粉々にするだろう。

だがすでにその必要はなかった。

そんなことをしなくとも、ヴィータの心はすでに砕かれてしまった

のだから。

「あ、あ、あたしは、違う、あたしは、あたしはあああああああつ!!」

グイータの叫びが草原の中を走り抜ける。

そんな彼女に憤怒の念に駆られた一撃は、殺された者への慈悲を込め、無慈悲に振り下ろされていくのだった。

次に会うときはきつと

こんな日がいつか来るかもしれない。

思わなかったわけではない。考えなかったわけではない。

あたしはたくさんの人間を不幸にしてきた張本人だ。だから今が罰を受けるべき時なのかもしれない。

振り下ろされる大剣をヴィータは他人事のように眺めていた。

死ぬ。死ぬとはいったいどういうことなのだろうか。

闇の書の意志に消されたことはあっても、それは次の転生までのインターバルにしか過ぎなかった。

だが今の自分に次の命はない。

このまま剣を受ければ、あたしは――。

『ヴィータさん』

『ヴィーター』

『ヴィータちゃん』

「うあつー！」

頭の中で三人の人間が声をあげる。

直接話されたわけでも、念話でもない。

それは頭が作り上げたただの妄想にしか過ぎないはずだ。

だが三人の悲しみに満ちた顔を見た瞬間。ヴィータは足に力を込めていた。

「う、うああああああつー！」

形振りなど構っていられない。無様でも不格好でも構わないと、ヴィータは後方に倒れ込むように動く。

その次の瞬間、シスンの大剣が彼女のいた空気ごと斬り裂いていく。

シスンは体勢を崩し、倒れ込んでいるヴィータを見ると、吐き捨てるように声を出す。

「はっ、やはり死にたくないか。あれだけ人の幸せを奪っておきながら、自分の幸せは奪われたくないんだな！」

「ち、違う。あたしは、あたしは………」

「違うというなら、ここで俺に裁かれる。貴様一人の命では釣り合うはずもないが、そうでなければ誰も浮かべられることもない!!」

もうヴィータの意志など関係ない。もとより抵抗されることを前提にシスは力をつけてきたのだ。

彼は再び脚に力を込めると、ヴィータを睨みつける。

まずい。早く体勢を整えないと。

ヴィータの中にある戦闘本能がそう叫び声をあげる。シスの踏み込みはシグナムのそれよりも早い。

だが同時にもう一人の自分が声を上げる。

このまま殺されればきつと楽になれるよ。もう罪悪感に捕らわれることもない。だってあくまであたしは『殺されて』しまうのだから。死んだあたしを誰も非難できない。

二つの相反する声に、ヴィータは未だに立ち上がることにすら出来なかった。

「…………う、ああ」

「今度こそ覚悟を決めたか？ いや、覚悟を決めようがどうしようが関係ないことだ!」

シスは脚に力を込めると、再び接近戦を仕掛けようとする。だがその瞬間、二人の間をピンク色の砲撃が割って入った。

「大丈夫ヴィータちゃん! それにこの人は私の資料にいた。——
——とにかく今は!」

空中にいるエクシードモードのなのはは、再びデバイスを構えるとシスに狙いをつける。非殺傷設定なら殺すことはない。

圧縮した魔力をレイジングハートの先端に集中すると、二発目の砲撃を打ち放つ。

「……………ふん、ヴォルケンリッターの奴らでも来てくれたら手間が省けたのだがな。ハアツ!!」

シスは構えていた大剣で、デイバインバスターと真っ向から立ち向かう。いや、それは立ち向かうという言葉を使うには、あまりにも淡々とした作業だった。

今までなのはのピンチを何度も救ってきた、信用の置ける一撃。だ

がその信用をあざ笑うかのように、シスンはたった一振りで、その砲撃をかき消した。

「そ、そんな……」

「おい、その管理局の女。——悪人以外は殺したくない。だから、全力で防げ」

「——えっ」

シスンはその場で中腰に構えると、大剣を腰のあたりに構える。刃に集中される魔力。その強大さに大気が震え、なのは達の肌にはビリビリと威圧が襲いかかる。

「この魔力量は。——ヴィータちゃん!!」

なのはは叫び声をあげると、半ば墜落するように全力で降下する。呆然としているヴィータはまだこの状況に気づいていない。なのはは彼女の前に立つと、プロテクションを何重にも展開させる。

「——消えろ」

シスンの静かな声とともに、突然の突風が吹き荒れる。草原を揺らす強風。だがその風すら、この攻撃の前には嵐の前の静けさに過ぎなかった。

吹き荒れる嵐がシスンの刃に集結する。そして——

——ヒュン。

何かが放たれる音が、二人の耳に届く。だが届いた時には、全てが終わっていた。

「うっ、くう」

なのはがその場で膝を突く。そしてそれを合図にするかのように、何重にも張ったプロテクションはガラスが割れるような音を立て、全て砕かれていった。

「……な、なのは？ お、おい、なのはっ！」

「だ、大丈夫だよヴィータちゃん。ちよつと肩にカスつちやつただけだから」

確かになのはの言っていることは真実だ。だがそうだとしても、それだけではない。

管理局でもこと防御面においては、なのははトップクラスに位置し

ている。

そのなのはの全力の守りを抜けて、傷を負わせてきた。

シスンの一撃は、それだけで彼の力量を示すのに十分だったのだ。

このままではまずい。このままでは自分の過去になのはを巻き込んでしまう。

ヴィータの顔が青ざめる。シスンはそんなヴィータを見ると、念話を送る。

『先ほども言ったように、俺は悪人以外を手に掛けたくない。――』

―だが忘れるな。近いうちに貴様等は必ず全員殺す。周りを巻き込みたくないのだったら、身の振り方を考えておくんだな』

返事を待つことなく、一方的に念話を切られる。シスンは再び刃に魔力を集中すると、それを地面に突き刺した。

またあの攻撃が来るのか。なのはは、先ほどよりも強固なプロテクションを展開する。

だがシスンのそれは砂塵を巻き上げるだけで、何の攻撃性もない。そして彼の狙い通りに完全に視界を封じられると、目を開いたときには彼の姿はなくなっていた。

なのはは逃げられてしまったため息と、引いてくれたという安堵の息を同時につく。

「ヴィータちゃん。今のつて、私がさつき見せた資料の人だったよね。

……でもどうしてヴィータちゃんが襲われてたの」

「そ、それは……………」

それはあたしがシスンの全てを奪ってしまったから。

自然とそう口にしようとした。だがなのはがそう質問するということは、まだ管理局がシスンと闇の書の関連性を知らないことも意味していた。

ここでなのはにこの顛末を話せば、きっとこの事件は解決されるはずだ。

いくらシスンが強くとも、局が動けばいくらでも包囲網を張ることができる。

そして彼に狙われている張本人である自分達の安全も約束される

であろう。

だから。だからこそヴィータは――。

「……………さっきなのはの資料を見てよ。それっぽいのがいたから後をつけたんだ。そしたら尾行がバレたみたいで。ちよつとしくつちまったよ」

「もう、ひとりで捕まえようとしたら駄目だよ。…………でも並の犯人なら、ヴィータちゃんひとりで十分だろうけど。あの人、相当強かったね」

「おう。…………だけど次に会うときはきつと」

きつとどうするのだろうか。全力を持って彼を捕まえるのだろうか。それとも今度こそ彼に――。

「うん。今度こそ捕まえて見せようね！」

意気込むなのはとは逆に、ヴィータの心はドンドン沈み込んでいく。

結局、ヴィータはシスンのことについて何も話すことはなく。そのままなのはと別れてしまうのだった。

十日後のあたし

『どういうことだヴィータ！』

デバイス越しの会話。納得がいかないと声をあげているシグナムに、ヴィータはもう一度同じ説明をする。

「だからさっき言ったとおりだ。ヴォルケンリッター並びに、リインやアギトは絶対単独で行動しないでくれ。それと必ず一人ははやてと行動するようにしてほしい。そう言ったんだ」

『言っていることはわかっている。私が聞いているのは、どうしてそんな伝言をよこすかだ』

「……………とにかく伝えたからな。絶対にはやての側を離れるんじやねえぞ」

『ヴィータ！ だから説明を——』

シグナムの言葉を遮ると、そのまま全ての着信を拒否する。ヴィータは家主のいない部屋で、ただ呆然と天井を眺めていた。

「……………これではやては大丈夫だな。あとは」

カイズのことはどうするべきであろうか。少し調べれば、闇の書とはやてが関係があることはすぐにわかることだ。

だが自分とカイズの関係はどうであろうか。身内にはもちろん知れ渡っているが、それでも何かの形として外部から漏れる心配はないはずだ。

「……………だけど、このまま近くにいるのは危険だよな」

やはりこのカイズからは距離を取ったほうがいい。そうと決まれば早く荷物をまとめてしまおう。

そうヴィータが決心した時、部屋の鍵が開く音がする。

「ヴィータさーん。ただいま戻りましたー」

いつもと変わらない笑顔でカイズが帰宅する。

ここ数日を含めこれ以上不振な姿を見せたら、カイズは完全に自分の異変に気づくだろう。

ヴィータはざわつく気持ちを抑えると、笑顔で彼を迎える。

「おー、お帰りー。今日はどうだった？」

「いやー、もうそろそろ仮教導実習が始まるからか、結構みんなピリピリしてますね」

「そうか、そんな時期だもんな。……あのな、カイ」

「そ・れ・よ・り。ヴィータさーん」

カイズはニヤニヤと企みを含めた笑みを見せる。いつたいどうしたのだろうか。ヴィータは首を傾げると、カイズは二つのチケットを出した。

「十日後って確かオフだって言っていましたよね」

「えっ、おお、確かにそうだけど。そういえば、ここ最近何度か同じこと聞いてきてたけど。どうしたんだ？」

「ふっふっふっふ、いよいよ。いよいよ貯まったんですよ。そして今日予約してきました!!」

カイズは手に持っている二つのチケットを見せる。そして満面の笑みで話を続けた。

「不肖カイズ、このたびよーやく給料を目標金額まで貯められました。

——だからヴィータさん、十日後に俺と一緒に海に見えるホテルに旅行に行ってください!」

目標金額。海に見えるホテル。旅行。

そして目の前にある二つのチケット。ヴィータはそれらの情報を提示されると、嬉しそうに顔をほころばせた。

「そ、それじゃあ本当に貯まったんだな!」

「もちろん本当ですよー。いやー、長かったですね。いや、それもこれも俺が教導の勉強をしながらだったのが一番の理由なんですけど。だ、だから、十日後は是非ともよろしくお願いします!」

ズイっとだされる一枚のチケット。ヴィータはそれを受け取ると、カイズを抱きしめた。

「よく頑張ったなカイズ。すごいぞ、偉いぞー」

「ヴィータさんのためなら、何だって頑張れますよ。———それじゃあとりあえず夕飯の準備しちやいますね。今日は朝やってもらったんで、俺が夕飯作りますねー」

「おー、ありがとうなー」

カイズは上着を脱ぎ、ネクタイを外すとエプロンをつけ台所に向かう。ヴィータは手に握ったチケツトを見ると、ベッドの上に寝転がり、恥ずかしそうにばた足をした。

(いよいよ、いよいよこの日がきたんだな)

カイズと旅行に行くということ。それはヴィータと彼が始めて結ばれる日を意味する。

今まで何度かエッチなことを経験してきたが、その日のために本番行為だけはしてこなかった。

全てはヴィータの願いを叶えるため。全ては十日後のその日のために。

「十日後、十日後かー」

両指折りで数えられる未来の予定。それを口にした瞬間、あの声がヴィータのなかで蘇った。

『お前等は必ず全員殺す。周りを巻き込みたくなかったら、身の振り方を考えておくんだな』

重く、深く、シスンの放った言葉がヴィータの心を蝕む。嬉しさのあまり、瞬間頭の中から消えていた声は、喜色のヴィータの顔を青ざめさせるには十分だった。

「……なに笑ってるんだよあたしは。近くにいたらカイズを巻き込みまうじゃねえか。……それに十日後にはあたしがどうなっているかだってわからねえのに」

嬉しさがあつたからこそ、目の前にある絶望が色をより濃くする。ヴィータはベッドに体を預けると、深く強く目を閉じた。

嬉しさと苦しさが心を支配する。ヴィータは一度も笑顔を見せることなく夕食を終え、先にシャワーを浴びていた。

顔に当てられる温水は、体の汚れを落としても、心の憂いまでは落としてくれない。

もうヴィータにはどうしていいのかがわからなかった。

今ある幸せを手放したくない。だがそのまま幸せに溺れてしまってもいいのだろうか。

シスンの言葉には嘘偽りはないと思う。

きつと自分は彼の全てを奪ってしまい、彼をあのような復讐鬼に変えてしまったのだろうか。

それを抜きにしても、シスンは強い。なのはのフィールドを突破し、その力はまだまだ上がある気がする。

こちらが生きたいと思っても、彼の前ではどうにもならないかもしれない。それほど、彼の力量は底知れぬものだった。

「十日後。……あたしは生きてるのかな」

自らが望もうが、望まなかろうが、明日には自分は死んでいるかもしれない。

だけど仲間達に助けを求めることができない自分もいた。

もしこのまま自分が死んでしまうとしたら。

もしこのまま自分が殺されてしまうとしたら。

その両方の可能性が頭に浮かぶと。

ヴェータはシャワーを止め、浴室から出ていった。

閉められた扉

「ヴィータさん喜んでくれてたなー。よかった、よかった。何だか最近思い悩んでたみたいだったし」

食器を片づけ終わると、カイズはカーペットの上で一休みしていた。

ここ最近ヴィータが何か思い悩んでいるのは、何となくだがわかっている。

だがその理由を話したくないということは、そういうことなのだろう。

だったらその悩みが吹き飛ぶくらいのサプライズを贈ればいい。カイズは十日後のことを思うと、自然と頬を緩めていた。

——ガチャ。

浴室のドアを開く音が、カイズの耳に届く。入浴時間が随分早いなと思いつつ、カイズはヴィータのほうに目を向ける。

「今日はシャワーだけだったんです、えっ、ちよつとヴィータさん。パ、パジャマ忘れちゃったんですか!？」

あまりに事態にカイズは思わず目を逸らしてしまう。だがそれも仕方のないことだろう。

目の前にいるヴィータは、パジャマはおろか下着すらつけていない生まれたままの姿だ。

髪の毛も解いており、体も拭いていないのだろう。体から落ちる水滴が床を濡らしていた。

焦るカイズ。だがそんなカイズの質問に、ヴィータはなにも答えなかった。その代わりに、背を向けている彼に近づくと、そのまま背中に抱きついていく。

小さな胸と塗れた体がカイズの体に押し当てられる。水滴がジワリとカイズの服に染み込んでいくと、彼はごくりと喉を鳴らした。

「ど、ど、ど、ど、ど、ど、どうしたんですかヴィータさん。あ、で、でもエッチなことは最近してませんでしたし、お、俺としても、その嬉しかなと」

心臓をバクバクさせ、カイズは挙動不審になってしまった。だがそんな彼とは違い、ヴィータは落ち着いた冷静な声で一言口にした。

「……………しょよ」

「えっ!？」

「今ここで、あたしをカイズのものにしてつて。……………そう言ってるんだ」

「へっ!!」

いったいこれはどういうことだろうか。いや、ヴィータが何を言っているかわからないというほど、自分は鈍感な男ではない。だがしかしだ。その日が十日後に来ると先ほど言ったのに、このタイミングでヴィータが迫ってくる意味がカイズにはわからなかった。

「で、でもそれは十日後に海の見えるホテルでつて。そのためにこれまで我慢して、いろいろ頑張ったわけですし」

「いいじゃねえか。十日後なんてもう我慢できないし。……………お願い、なっ」

今までに聞いたことのない艶のある声に、カイズの男の部分が反応する。

まあ言われてみればそうなのだ。これまで本番行為がなかったにしても、何度もエッチなことはしてきている。

そしてその集大成が十日後になるか、今日になるか。実際にはその違いしかないのだ。

別に今エッチなことをしても、たった十日間でしなれるわけではない。十日後は十日後で、海の見えるホテルでロマンチックにすればそれでいいのではないのか。

そうでなくても、今まで寸止めのことが多かったのだ。カイズはもう一度喉を鳴らすと、ギチギチとゆっくりヴィータの顔を見る。

「ヴィ、ヴィータさん。そ、それなら、お、俺……………」

互いの息づかいを感じるほどの距離。カイズはヴィータの目をのぞき込むと、彼女の両肩に手を置く。

そしてそのまま彼女をベッドに押し倒した。

「……………ヴィータさん」

「……カイズ」

ヴィータは全てに観念したようにギュツと目を閉じる。

その姿を見て、カイズは自身の欲望を口にした。

「ヴィータさん。………何があつたんですか。おかしいですよ」

「——えっ！」

カイズの言葉を聞くと、ヴィータは思わず目を丸くしてしまう。カイズはヴィータと視線を合わせると、彼女のことを知りたいという欲望のままに言葉を続けた。

「……最近、ずっと何か変だと思つてました。だけど本当に困ったことなら、俺に相談してくれる。そう思ったからこそ、俺はずっと待つてました。————だけど、俺なんかには相談できない悩み事だったんですね」

「——ちっ、違う！ カイズだからじゃない、これは誰にも相談してな、あっ！」

カイズに嫌われたくない。カイズに誤解されたくない。その思いが、反射的に言い訳をしてしまう。

しまったと口を抑えるヴィータ。カイズはその姿を見て、さらに言葉をかける。

「困つてることがあるなら教えてください。俺なんかじゃ役に立てないかもしれないけど。それでもヴィータさんの力になりたいんです！」

「……だ、だけど。このことは」

「——ヴィータさん！」

カイズは心の底から声を張り上げる。

どこまでも真っ直ぐな思いは出会った頃から変わることはない。だからヴィータは自身の悩みを口にすることができなかった。

だからこそ、眩くようにその言葉を漏らしてしまった。

「なあ、カイズ。……もし、もしあたしと一緒に死んでくれって言ったら。カイズはどうする？」

「——えっ」

それは何の脈絡もない言葉。だがきつとヴィータからすれば、様々

な想いが積み重なったが故の言葉なのだろう。

だからこそカイズは即答できなかった。いや、できるはずがないのだ。

だってその回答しだいで、自分とヴィータは――

思い悩んでいるカイズの表情を見て、ヴィータは苦笑いを浮かべる。そして、ほんの少し寂しそうな顔を見ると、カイズの体をズイッと押しやった。

「ははは、ごめんな。冗談だよ、冗談。本当にそんなこと言うわけないだろ。そりゃカイズも困っちゃうよな」

「――違う、ヴィータさん俺は！」

「だからそんなマジな顔するなって。それじゃあちやつちやと着替えてくるな。あつ、それと明日は仕事でちよつと早くなるから先に寝とくなー」

「――ヴィータさん！ ヴィータさん!!」

「じゃあな、カイズ」

ヴィータは再び浴室に向かうと扉を閉める。

その扉は鍵をかけられたわけじゃない。

その扉は魔力的防御が張られているわけでもない。

だがカイズはその扉を開けることができなかった。

「――くそっ！」

カイズは後悔のあまり、髪の毛をかきむしる。

そのあと、カイズとヴィータは言葉を交わすことはなかった。

そして、その数分後のことだ。

ヴィータと入れ替わりでシャワーを浴びたカイズが部屋に戻ってくると。

最低限の荷物を持ち。

ヴィータはカイズの部屋から姿を消してしまったのだった。

ただ救いたいから

(くそ、くそ、くそ、くそっ！)

カイズは頭の中で悪態をつきながら、人ゴミを進んでいく。時刻は午前8時半。

予定通りヴィータが動いていれば、あと三十分で仕事が始まるはずだ。

(デバイスに連絡しても反応なし。心当たりは全部行ってみただけ、全部空振りだ)

この調子では予定通り仕事をしているとは考えられない。だが一縷の望みを託して、カイズは駅に向かう。

(即答するべきだったのか。ヴィータさんとなら一緒に死ぬますって。………ただと言えるわけじゃないじゃないか。少なくとも、俺が絶対口にできる言葉じゃない)

カイズはほかの誰よりも死の苦しみを体験している。

デスイーターに死の記憶を刻み込まれ。様々な人の死を疑似的に体験してきた。

そこにいる人間は誰もが生を望んでいて。そんな彼らの思いを知っているからこそ、『死ぬ』と言えなかった。

(このまま電車に乗れば間に合うな。——急ごう)

カイズは競歩で人混みを走り抜けると、駅に向かう。ある程度金額をチャージしてあるデバイスを取り出す。

だが階段を三段登ったところで、視界が捕らえた違和感に気づいてしまう。

いま誰かがいたような。

カイズは後ろを振り向く。すると、階段の前で困ったように視線を動かしている少女が見えた。

高等部くらいの車椅子に乗った女の子を見ると、カイズはさらに視線を奥にやる。

エレベーターが故障中してるのか。

さらにエスカレーターがないこの駅で、本当に駅員を呼んでしまっ

てもいいのだろうか、躊躇しているのだろう。

確かに車椅子と女の子を両方運ぶのは相当の労力だ。

だけど今の自分に彼女を助けている時間などなかった。少しでもヴィータに会える可能性があるのなら。

『ばーか、なに悩んでるんだよ。そんなの全然お前らしくねえぞー』

「——あつ」

愚かな考えをした自分を叱咤するように、ヴィータの声が頭の中に響く。

今の声を自身が生み出したただの幻聴だろう。

だがヴィータならきつとそう言うはずだ。先ほどよりも気持ち少しだけ軽くなると、カイズは車椅子の女の子に近づいた。

「あ、あの大丈夫ですか?」「困っているようだな。その少女よ」

カイズと同時にもう一人の男の声があがる。女の子は二人に目を向けると、『は、はい』と上擦った声をあげ言葉を続ける。

「それがその。エレベーターが壊れてしまつて。そ、その、どうしようかと」

「だったら俺が手伝いますよ」「なら俺がそこまで運ぼう」

またしても二人の言葉が重なる。カイズとその男性は互いに顔を合わせると、「はははは」と苦笑いを浮かべた。

見た目はちよつとおつかないけど、いい人そうだな。

随分と鍛えているのだろう。筋肉質な体と染めてない白髪が特徴的な人だ。どこかの世界から観光に来ているのだろうか、この地区では見慣れない黒のマントが彼の風格をさらに際立たせていた。

つて、あまりジロジロ見ても悪いな。

「俺はカイズって言います。それじゃ俺が車椅子を持っていくんで、えつと、その」

「ああ、俺の名前はシスンだ。見ての通り旅の者でな。だが怪しいものではない。と言つても説得力はないだろうけどな」

「いやいや、そんなことないですよ。えつと、そしたらシスンさん。そつちの女の子をお願いできますか?」

「それは断る」

「へっ？」

あんまりな即答に、カイズは気の抜けた声をあげてしまう。そんな彼の顔を見て、シスは「あっはっは」と大笑いした。

「断ると言ったのは、少女を運ぶと言った方だ。こんな風貌の男が運んでは、通報されかねないからな。それにその車椅子は最新式だ。多分重量は百五十キロはあるはずだ。——それともあれか？ 君はそのこの女の子の体重がそれ以上にあると言いたいのかな」

「ぶっ！ そ、そんなこと言っていないですよ！」

「だったら決まりだ。こんな体を優位に生かせることはあまり多くない。ほら、彼女をおぶってやれ」

それだけ言うと、シスは両腕を組んでしまう。どうやら、その役目を絶対に譲らないようだ。

だが彼の言うとおり、女の子の車椅子は最新式のような。果たして傷を一つもつけずに、この階段を上れるか。

一抹の不安がないかと言われれば嘘になる。

カイズは少し納得できないと表情に見せるが、小さく肩を落としたり。

「それじゃあすみません。もしよかったら乗ってもらっていいですか」

「は、はい。こちらこそよろしくお願いします」

少女はおずおずとしながらも、ゆっくりカイズの背中におぶさっていく。その姿を見届けると、シスは彼女の車椅子に手を置く。

「で、ですけどその車椅子は本当に重た、ひゃっ！」

「ん、どうかしたか」

信じられないと少女は目をパチパチさせる。だがそれはカイズも同じだ。

ま、まさか。あんなに軽々と持ち上げるとは。この人ただけ体鍛えてるんだ。

きつとカイズが女の子に声をかけなければ、シスは彼女ごと車椅子を持ち上げるつもりだったのだろう。

底の見えない力強さに、上には上がいるものだと思改めて認識させら

れた。

「ほら、何をぼけつとしてる。彼女にも君にも用事があるんだろう」

「用事。——あつ」

時計を見上げると、すでに予定の電車はでている時間だった。カイズはしまったと思いつながらも、まあ仕方ないかとほんの少しだけ肩をおろした。

「いえ。今日は非番なんで特に問題ないです。さつ、それじゃあ行きましようか」

「ああ、行くとしよう」

カイズは少女を、シスは車椅子をそれぞれ運ぶ。

次の電車が来るまで、少女は二人にずつとお礼を言い続ける。そして電車に乗り手を振る姿を見て、二人は顔をほころばせていくのだった。



さすがに世は平日だからか、人の数はあまり多くなかった。大の男二人はベンチに座ると、互いのコーヒー缶をぶつけ合う。

「しかしカイズ君のような若者がこのミッドにもいるとはな」

「いえ、俺はたまたま気づいただけで。それに歳のことを言ったら、シスンさんもそんなに大きく変わりませんよね」

髪の毛は白髪だが、歳は二十代後半か三十代前半くらいであろう。カイズは見たままの率直な感想を述べる。その言葉を聞いて、シスは『あつはつはつ』と気持ちのいい笑い声をあげた。

「そんなに大きく変わらなないか。だが俺はこう見えても大層なおじいちゃんだな。きつと歳を聞いたら君も驚くぞ」

「またまたー、変な冗談を言いますね」

カイズも負けず劣らず、気持ちのいい笑みを浮かべる。

一瞬、シスンが少し寂しそうな顔をしたような気がした。だがシス

ンはコーヒを口につけると、すぐに素面に戻る。

「さて、それで君はいつたい何を悩んでいるんだ」

「——えっ、そ、それはどういう意味ですか」

「何か悩みがあるから、そんな辛そうな顔をしてるんだろ。正直、初めは車椅子の少女と君とどちらに声をかけようか悩んだほどだ」

「……………そんな顔にでてましたかね」

「そりやもう見たままにな。……………どうにも性分なんだろうな。困っている人を見ると放っておけなくてな。まあ会ったばかりの俺に話せと言うのはなかなか難しいかもしれない。さらにそれに対して俺が答えをあげられるかもわからない。だが吐くだけでも軽くなる悩みもある。もしよかったら話してくれないか」

そう自分を見つめる瞳は一切の濁りも見えなかった。野次馬根性でも、興味本位でもない。この人は純粹に自分の力になりたいのだから。

どうして人のためにそこまで懸命になれるのか。

いや、それは先ほどの彼を見ていれば考えるまでもない。ただ救いたい。それだけなのだろう。

先ほど問い合わしたら、やはりヴィータは仕事先に出向いていなかった。どちらにしても、八方塞がりだとわかると、カイズは自然と悩みを口にし始めた。

謝りたくて

「……………仕事、サボっちゃったな」

仕事をサボるなど、いったいいつ以来であろうか。きつと片手で数えられるほどだったと思う。

ヴィータは私服のまま人混みの中を歩いていた。ここならそう簡単に知り合いに会うことはない。

まあどちらにしても、普通ならみんな仕事だ。今は誰にも会いたくない。ヴィータは顔を俯かせたまま、流れに身を任せた。

このまま、またあの草原に行ってみるかな。

あそこに行けばまたシスンに会えるかもしれない。そうすれば自分はどうな形であれ命を懸けなければならぬ。

こんな宙ぶらりんな気持ちでい続けるくらいなら、いつそ決断を促さなければならぬように――

そんな自殺めいた考えが頭に浮かぶ。

ヴィータはその場で足を止めると、あの草原の場所に目を向ける。

「――ヴィータさん、ヴィータさんですよ」

立ち止まったヴィータに、女性の声が届く。その声の主はコバルトブルーの髪をなびかせると、ヴィータの元に駆け寄ってきた。

「サクヤ……………さん……………」

まさか平日の繁華街で知り合いに会うとは。読みが甘かったと下唇を噛む。

だったらこのまま人混みを駆け抜けてしまおう。ヴィータの体つきと運動神経なら簡単なことだ。

つま先に力を込める。だがヴィータの行動よりも、サクヤの言葉は早かった。

「ヴィータさん。――すみません！ すみませんでした!! まさかあんな失礼があったなんて知らなくて。本当に申し訳ありません!!」

額が膝につくほどに、サクヤは深々と頭を下げる。

予想だになかった、突然の謝罪に逃げようと思っていたヴィータ

の思考は停止してしまふ。

「えつ、サ、サクヤさん？」

「本当に、何度謝っても謝りきれないことだとは思いますが。でも本当にすみませんでした！」

「ちよ、ちよつと落ち着けよ。なつ、とりあえず頭をあげて」

「上げられるわけありません。今の私にその資格はありません！」

今にも土下座をしまいそうなほどの勢い。そんな二人の様子は、当然ながら人々の興味を誘った。

傍目からすれば、大の大人が子供に謝り倒しているのだ。不思議に思わないほうが少ないだろう。

このままではただの注目の的だ。だからといって、ここから逃げ出してしまつたら、サクヤは何をしだすかわからない。

ヴィータは彼女の両肩に手をおくと、彼女の顔を無理矢理上げていった。

「と、とにかくここ以外のところでは話をしような！ ほら、近くに喫茶店とかあるし、とにかくここから離れよ！」

「……すみません。私なんかのために」

「そうと決まつたらとにかく行くぞ。ほら、道をあげてくださいーい」

サクヤの手を握ると、ヴィータは人混みをかき分けていく。こんな注目されたままでは店にも入れない。

ヴィータはしばらく繁華街を歩き続けると、適当な店へと入店していった。

彼女の答え

今のサクヤの様子を考えたら、この店は意外に正解かもしれない。木造作りのシックな喫茶店に入ると、ヴィータとサクヤは奥の個室へと案内される。

ヴィータはサクヤの対面に座ると、とりあえずと安堵の息をついた。

ホットコーヒーが二つ運ばれる頃にはサクヤも落ち着いたようだ。何度か深呼吸をすると、小さく頭を下げた。

「さつきは取り乱してすみませんでした。……だけど申し訳なかったという気持ちに変わりはありません」

「えっと、まずは何でサクヤさんが謝ってくるかがわからないんだけど。……何かしたっけ？」

「厳密に言えば、私自身は何もしてないんですけど。……その、私の後輩がかなり失礼なことをヴィータさんに言ったようで。————すみません。その話を聞いたのが、本当につきさつきのことで。私が無理矢理誘った結婚式で、ご迷惑をかけてしまったなんて」

「そ、それは別にサクヤさんが謝ることじゃねえよ」

「いえ、後輩に結婚式の出席を押し切られた私の責任です。……あの子にはここ数ヶ月、過去の病気について調べるように無限図書館出張してもらってたんです。ですが、過去の病気を調べるなかで、相当仕事をサボっていたらしく。そのときに、ヴィータさん達の事件を知ってしまったらしいんです」

「……………そうか」

「だ、ただどあの時の彼女は相当酔ってたし、あの子の言葉を鵜呑みにした人は誰もいないと思います。あと晴れて彼女のサボり魔っぷりは判明したので、遠くに飛んでもらいましたから」

「……………その口振りだと、サクヤさんも知ってたんだな。あたしが闇の書に関連してたってこと」

「そ、それは。……………いえ、はぐらかしてもしょうがないですね。その通りです。ヴィータさんと会う前からヴィータさんのことはある

程度調べてました」

「そうか。……そうなのか」

サクヤは自分の過去を知っている。それがわかると、ヴィータはコーヒーを一口飲む。

そして落ち着いた口調で、言葉を放つ。

「あたしは昔に大事件を起こした張本人だ。なあ、サクヤさん。そんなあたしが全てを忘れて、カイズと幸せになってもいいのかな」

ヴィータの言葉に、サクヤの顔が少しだけ曇る。ヴィータが冗談で言っているわけではない。空気でそう感じ取ったのだろう。

だが質問をしたヴィータは、つまらないことを言ってしまったと後悔する。きつとこの質問をしたことで、サクヤは思い悩んでしまうだろう。

ヴィータは申し訳ないと頭を抱える。だが放った言葉は消すことはできない。そんなヴィータの様子を見ると、サクヤは頬に手をあて、その回答を口にした。

「んー、別にヴィータさんの自由でいいんじゃないんですか？ カイズ君といちやいちやしたければそれでいいし、過去のことには耐えきれなくなったら死んじゃうのもありだと思いますよ」

あつけらかなと放たれた言葉は、ヴィータにはあまりにも衝撃的だった。

きつとはやてに話したら、重苦しい空気が場を支配しただろう。

なのははその言葉を聞いて、自分が今まで一生懸命頑張ってきたことを説いたはずだ。

規模は違えど、事件を起こしたことがあるテストタロツサは今の自身に重ね合わせ、『ヴィータは幸せになってもいいんだよ』と優しい言葉をかけてくれるかもしれない。

そういった返答をすること。それは程度は違えど、ヴィータに関わってきた人たち全ては言えたことだ。

だがサクヤは違った。幸せを促すわけでも、不幸に落ちろともいうのではなく、『ヴィータ自身』に答えを持ちかけたのだ。

だがその答えを出すことができないから、ヴィータは思い悩んでい

るのだ。

「だけどあたしはたくさんの人を殺してきたんだ。闇の書の意志で、その時の主の意志で。もちろんあたしはカイズのことを愛してる。それにカイズもあたしのが好きだと思う。………だけど、そんな幸せを周りの人は認めてくれるのになって」

「周りに認められなくちゃ駄目なんですか？ お互いが好きで幸せなら、それでいいと思いますけどね」

「——真面目に話し聞いてたのかよ。そんな簡単に割り切れることじゃねえんだよ！」

「その感情は割り切らなくちゃいけないんですか？ 一生抱えたままでもいいじゃないですか。それでカイズ君とも幸せになる。それで解決ですよ」

「………サクヤさん」

「って、これだけ言っても、今のヴィータさんに届くわけありませんよね。………だったら、私はどうですか。今の私は旦那さんとこのまま幸せになつていい資格がありますか？」

「な、なに言ってるんだよ。そんなの当たり前——」

「私が数年前に作り出した新薬。その製造過程で、工場のミスがありましたね。これでようやく不治の病から救われる。そう思っていた病人を私は何人も殺してきました」

「——」
その言葉は何の冗談であろうか。ヴィータは驚きのままに目を白黒させる。

サクヤはそれ以上何も言葉を付け足したりはしない。ヴィータは何度か口をばくばくさせながらも、言葉を絞り出した。

「だ、だけど、それはサクヤさんのせいじゃないんだろ。あくまで工場のミスで」

「だけど私が新薬を発案しなければ。または少しの行程ミスで激薬となる配分をしなければ。多くの人の命が奪われるということにはならなかったと思いますよ」

「そうだとしても、それはサクヤさんの意志で殺したわけじゃ」

「ええ、そうです。それはヴィータさんも同じはずですよ。殺したくて殺したわけじゃない。その時の主の命令で。または闇の書の暴走で人の命を奪ってきたかもしれない。……ですが、それはヴィータさんの意志ではなかったはずですよ」

「そ、それはそうだけだよ。だけどあたしは実際に人をこの手にかけてたこともあったはずだ。記憶はリセットされちまつてるけど、戦乱のベルカの時代に誰も殺さないなんてありえないはずだ。その点サクヤさんは、自分の手じゃ誰も——」

「実は今私が持っているコーヒーカップは核爆弾の発射スイッチと連動しています。それを押すつもりはありませんが押してしまい多くの人が死にました。——確かに私はこの手で誰かを殺してません。ですが、私のしたことはそういうことです。これでも私の手が汚れていないといえますか？」

「……………」

サクヤの言葉にヴィータは反論できなかつた。今ヴィータが悩んでいることは、サクヤが数年前に通つた道なのだろう。

きつとどんな言葉を並べようとも、サクヤはその全てを論破してくるはずだ。

だがそれでもヴィータは自身の幸せを認めることができなかつた。ヴィータは膝の上で両手をギュツト握りしめると、絞り出すように声を出した。

「……………でも、だけだよ。あたしは人間じゃねえんだ」

「……………ヴィータさん」

「どれだけあいつのことを愛しても、あいつに愛されても。それでもなんもあいつに残してやれねえんだよ。そんな奴と結婚することを、本当にあいつの周りは、あいつの両親は喜んでくれるのかっ！」

心の奥底でずっと思い悩んでいた思いが、初めて言葉として口から放たれる。

自分はサクヤとは違う。自分は人間ではないのだ。

女々しい言い分だと言うことはわかっている。

だが、ただ人間でないと言うこと。

それがどれだけ辛いことか。どれだけ寂しいことかサクヤにわかるはずがない。

ヴィータの溜まりに溜まった心の闇が全てサクヤにぶつけられる。だがサクヤは理不尽なヴィータ怒ることも、呆れることもなく。

何かを納得したように、優しい笑みを浮かべていった。

「だったらヴィータさんの心構え次第でなんの問題もありませんよ。私がそうなんですから」

「私がそうって、サクヤさんの何があたしと一緒になんだよ！」

「一緒に一緒。だって、だってですよ。——私も産めないんです。赤ちゃん」

「——えっ」

サクヤの一言に、ヴィータの体温が一気に奪われる。だがそれはおかしい。だってサクヤは自分とは違い人間のはずだ。

そう質問を投げかけようとしたが、衝撃のあまりにヴィータは声をあげられなかった。

サクヤはコーヒを一口飲むと、どこか遠くを見るような目で語り始めた。

「さつき新薬の事故のことを話しましたよね。私は多くの人を殺してしまった。そのせいで何度か自殺を考えたこともありました。けど、そうであっても多くの人を救いたい。その気持ちに偽りはないと、取り付かれたように研究に没頭しました。——いま思うとそれがいけなかったんですよね。自分の体調管理もできずに、人の体を治そうと踏ん張っちゃって。……………気がついた時には、私の体はロボロでした。何とか一命は取り留めましたが、その時の手術で私は一生子供の産めない体になってしまいました」

「そ、そんな」

「私は研究チームからはずされて、営業に回されました。私、見た目はいい方ですし薬の知識も豊富だからか、適材適所だったのかもしれないね。——ですが、そのあとの私は随分荒れましてね。一生を賭けた研究者人生を奪われて。女としての尊厳も奪われて。もう私には何も残っていない。私は生きている意味があるのかなって、毎晩

飲んだくれてたんですよ」

その時のことを思い出しているのだろう。サクヤは照れたような笑みを見せると言葉を続ける。

「そんな時に出会ったのが、今の旦那なんです。私も酔っていたこともあって、毎晩毎晩旦那の店で愚痴ばっかり話して、飲んで飲んで。そうしているうちに私のほうがベタ惚れになってしまっただけ。ある日酔ってる振りして、旦那に襲いかかっちゃったんですよね」

あの頃は若かったと、恥ずかしそうに頬を掻く。だが表情の奥底は幸せに包まれているのが、ヴィータにはわかった。

「それじゃあ、その後には旦那さんとの結婚を決意をしたのか？」

「ふふっ、そうだったら楽だったんですけどね。でもいざ結婚って単語が頭に浮かぶと、急に怖くなってしまっただけですよ。多くの人に迷惑をかけた私が。この人のために子供を産んであげられない私が。本当に近くにいってもいいのになって」

「そ、それって……………」

「ええ、今のヴィータさんと全く同じ状態です。だからこれから話すことは、近いうちにヴィータさんが気づくはずだったことだと思いません。だけど、先回りしてヴィータさんに教えちゃいますね」

サクヤはゆっくりと目を閉じると、何かを思い浮かべたのだろう。いつも大人びている彼女からは考えられないほど、頬を真っ赤にして口にした。

「人に迷惑をかけたこととか、赤ちゃんが産めないこととか。そんな否定的なことばかり考えていました。——— だけど、旦那には私よりもふさわしい人がいるんじゃないかって。そういうことだけは絶対に思わなかったんですよ」

「……………自分より、ふさわしい人がいない」

「自分はこの人に心底惚れてて。そしてこの人を本当に幸せにできるのはきっと自分しかいないんだろうって。それがわかった瞬間、私の覚悟は全て決まりました。……………新薬のせいで奪ってしまった命がある。愛する人のために何も残してあげることができない。だけどこの人は誰にも渡したくない。だからこそ、私は全てを抱えて『幸せ』に

なる覚悟を決めました。きっと自分が幸せであることを疑問に思う自分が常に存在すると思います。多くの人の命を奪ってにおいて。お前は何も残せないくせに。そんなふうになんか非難中傷してくる人もいるかもしれない。それでも私は幸せになりたい。———結局それが私の本心だったんですよ」

「……………サクヤさん」

「だからヴィータさんも考えてみてください。それこそ一生悩み続けたっていいんです。だけど自分が心の底で一番望んでいること。それだけは絶対に間違えないうでください。……………そして、その言葉を大切な人に伝えて上げてください」

「……………あたしが本当に望んでいること。あたしの伝えなくちゃいけない、こと、ば」

サクヤの言葉を聞いて、ヴィータは自身の心の奥底に問いかけた。

あたしが本当に望んでいることは。

『多くの命を奪ってにおいて、幸せになる気が』

あたしが心の奥底から願っていること。

『人間の形をした魔力の結晶体のくせに』

違う。それは全部悩みから、覚悟から逃げるための口実だ。

『だったらあたしは本当は何を望んでいるんだ』

結婚式の時、ヴィータを背後から抱きしめたもう一人の自分が目の前に現れる。

あの時のヴィータは、もう一人の自分に引き込まれるままに心の奥底に沈んでいった。

だが今のヴィータは違う。

後悔も、悲しみも、憂いも、苦しみも。

その全てを受け止めて、一人の男性の姿を心に浮かべた。

『ヴィータさん』

自分よりも背の高い年下の男の子。

どこまでも真つ直ぐで、どこまでも真剣に自分を愛してくれた大切な恋人。

その幸せに手を伸ばすことは、許されないことかもしれない。自分

の大罪に彼のことも巻き込んでしまいかもしれない。

だが、そうだとしても。

ヴィータはその幸せを掴みたいと望んだ。

それがヴィータ自身の真実の想いだっただ。

閉じていた瞼を開くと、サクヤと向かい合う。彼女はヴィータの顔を見ると、安心したと笑みを浮かべた。

「答えは。決まりましたか」

「……………ああ、ありがとうございます」

「いえいえ。まあ遅かれ早かれ、ヴィータさんも気づいたことだと思いますし。というか、後輩の件がなければ、もっとゆっくり考えられたことでしたしね。だからお互い様ですよ」

「ああ、お互い様だな」

ヴィータはコーヒーカーップを手に取ると、それを一気に流し込む。そしてポケットか、財布を取りだそうとする。だがそんなヴィータをサクヤは手を出して制した。

「今は財布を出してる時間ももつたいないですよ。早くカイズ君の元に行つてあげてください」

「———ありがとうございます。このお礼は、必ず、必ずしにくるからな！」

「はい、楽しみにしてますね」

あれほどヴィータは生死について悩んでいた。そんな彼女はサクヤとの『再会』を約束をする。それは数時間前のヴィータには考えられないことだった。

「ごめん。本当にごめんなカイズ」

ヴィータは今まで迷惑をかけてきたカイズの姿を思い浮かべると、デバイスを手に取る。

そして喫茶店から出ると同時に、彼に着信を入れていった。

彼の答え

自分でも随分と気持ち悪く吐き出していると思う。

カイズはそう自覚しながらも、シスンに相談を続けていた。最近ヴィータがおかしかったこと。急に死について語りだしたこと。

さすがにヴィータとの初体験のことは、初めての旅行ということで言葉を濁したが、きっとシスンも気づいているだろう。

カイズは全てを話し終えると、大きなため息とともに頭を抱えた。

「——それで彼女に、もし一緒に死んでくれって言ったら死んでくれるかって言われちゃって。俺、それに答えられなくて。どうして即答してやれなかったのかなって、今は後悔してます」

「……………ふむ、なるほど。それで君の彼女は出て行ってしまったと」「そうなんです。すみません、会ったばかりの人に、いきなりこんな重い相談しちゃって」

「なんのなんの。相談に乗りたいたったのは俺だ。——そしてそれに対して俺の言えることは、まあ一つだな」

シスは缶の中身を全部飲み干すと、それを横に置く。そしてカイズから視線をはずすと言葉を続けた。

「即答できなくて当たり前だ。それだけ彼女のことを考えて、彼女のためにと思ったのだろう」

「だけど俺が即答できなかったから、ヴィ——」

「彼女自身も愚かな質問をしてしまったと後悔してるんじゃないのか。だけど今自分が君の側にいたらきつと、また同じようなことを口走ってしまう。だから今はあえて距離を置いていると俺は思うぞ。それにだ。君と一緒に死んでやることをよしとしなかったんだろ。ならあと君がとれた道は、即答で彼女を拒絶することだけだ。…………それが正しいとはもちろん思っていないんだろ」

「それは……………はい……………」

カイズもまた缶の中身を全部飲みきると、それを横に置く。そしてシスンに習うように、前を見て話を続けた。

「俺は、まあもちろん死んだことはありません。でも死ぬかもしれないな

いと思つたこともあつたし、死という想いをいつも受け止めたことがあるんです。だからこそわかるんです。死ぬつてことは本当に何もなくなつちやつて、ものすごく怖いものだつて。——だから、そんな思いを絶対にしてほしくないんです」

「してほしくない？　したくないじゃなくてか」

「ええ、そうです。……俺は彼女にあんな苦しい思いをしてほしくない。もしも彼女が俺を殺そうとしたり、死んでくれと言つたら。そして俺は間違ひなく『わかりました』つて言つちやいそうなんですよね。彼女が何の考えもなしにそんなこと言うはずない。だからきつと俺が死ななくちやいけない複雑な理由があると思うんですよ。だけど俺の身がたとえどうなつたとしても、俺は彼女だけには絶対に死んでほしくないんです。——はっ、はは、ちよつと、いや、かなり歪んでますよね」

「ああ、そうだな。君は人間としてかなり歪んだ心を持っているようだな」

「で、ですよ。ちよつと自分でも気持ち悪いかなつて思つてます」

「だがそんな自分が間違つていないと思つてるんだろ」

「えっ、そ、それは」

「口調だけでもわかるさ。口では歪んでいると言つていながらも、君の言葉はどこまでも真つ直ぐだ。普通の人間は自分の中の中途半端な歪みに困惑し、常にその想いが正しいかどうか自問自答しながら生きていく。……この俺もそうだ。長い年月を歩きながらも、歪みは渦巻くばかりでな。……だが俺はどうしても許せないんだ」

「シスンさん。——その、シスンさんの歪みつて言うのはどういったことなんですか。許せない人がいるつて、いま言つてましたけど」

その口調に、先ほどまでの気さくなシスンの様子は見られない。それに人助けをもつとうとしている彼が、誰かをそこまで深く恨むとはとても思えなかつた。

カイズは困惑の表情を見せると、シスンはハツとしたように表情を戻した。

「……あまり聞いても楽しい話じゃないさ。それより君のことだ。彼女のために死ぬると言ったが、もしそうになったらそれが本当に正しいと思うのか」

「い、いや、それは。まあ正しいとは言えないかもしれませんが」

「だったら軽々しく死んでやると言うな。もしお前が死んだら、その彼女は知らない男とくつついて、結婚するかもしれないんだぞ」

「……俺の知らない男。結婚」

ウエディングドレス姿のヴィータが、どこの誰かもわからない男とヴァージンロードを歩いている姿を想像する。

するとカイズは目を大きく見開き、額にピクピクと青筋を立てた。

「……………それは、絶対に許せませんね」

「そうだろ、そうだろ。だから簡単に死んでやるなんて、絶対に口にするなよ。お前の好きな女を盗られたくなかったらな」

「……………はいっ」

心のこもりまくった肯定の返事をする。

シスはふうと肩を卸すと、カイズもまた彼と同じように肩を卸した。

「随分とうまく乗せてくれましたね。でもどんな説得よりも心にきました」

「そうだろ、そうだろ。愛して止まない女がいるやつには、こういった言葉が一番きくからな」

「経験がおありで？」

「ああ、くそ生意気な子供に昔言われてな」

くそ生意気と言葉自体は汚かったが、その声色はどこか楽しそうであった。

きつとその子供に昔言われたことを思い出しているのだろう。彼らしい子供っぽい笑みに、カイズも自然と笑顔になった。

だがシスと話して心うちは決まった。

とにかくヴィータを探そう。そしてたとえ力になれなくても、彼女の側に寄り添ってその背中を少しでも支えてあげたい。

それがヴィータを好きな自分にできる。いや、自分がしたいこと

だ。

——ピピピツ、ピピピツ！

突然、カイズの胸ポケットに入っている連絡端末が鳴る。今日は一番なので、仕事関係ではないと思うが。

カイズは端末を手に取ると、ディスプレイに表示された名前を見て、気持ちが悪くなるのがわかった。

「——シ、シスンさん」

「言ったとおりだろ。ほら、早く出てやれよ」

「は、はい！」

カイズは端末を耳に当てると、緊張しながらも声を出す。

「あ、あの、あの、ヴィ——」

『カイズ、ごめん。本当にごめんな。昨日のことを考えたら謝っても、謝りきれねえとは思っただけだよ。だけどあたしがどうしたいか、やっとわかったんだ』

「お、俺もなんです。——一人じゃ答えが見つからなかったかもしれないけど。その、いろいろと相談に乗ってくれた人がいて」

『あたしもそうなんだよ。繁華街にいたら、サクヤさんと会って。それでいろいろと相談に乗ってもらって』

「あつ、あつはっは。何だか似たもの同士ですね、俺たち」

『全く。………本当にそうだよな』

ヴィータの落ち着いた声を聞くと、本当に彼女の悩みは解決したことがわかる。

よかった。本当によかったと胸をなで下ろす。

そうなれば今すぐにでも彼女に会いたいと、カイズは言葉を投げかける。

「そういえば今どこにいるんですか。すぐにでも会いたいですけど！」

『そ、それなんだけどよ。その今は会えないんだ。——いろいろと訳があつてよ。端的にいうと、今あたしは、いや、ヴォルケンリッターはある人間から命を狙われてるんだ。だから外じゃ会わない方がいいと思うんだ』

「い、命を狙われてるって、どういうこと何ですか『ヴィータ』さんっ！」

命を狙われているなんてただごとではない。

だが通信越しに伝わる声で、ことの重大さは嫌でも理解できた。

せつかく誤解と問題が解けたのだ。その上でヴィータがそういうのだから、きつとそれが冷静に下した判断なのだろう。

了解しました。カイズがそう言葉を放とうとした瞬間、手に持っていた端末が奪われる。

いったい誰がこんなことを。だがこの場にいる人間など一人しかない。シスンのことは子供っぽいとは思っていたが、この行動はあまりにも子供っぽすぎた。

カイズは怒りの声をあげようとする。

だがシスンの憤怒にわななく表情をみた瞬間、カイズはその激変のあまりに声をだせなくなっていた。

「シ、シスンさん？」

『シスン！ シスンって、おいカイズ!?!』

「……………どうやら、神は絶対にお前等のことを殺させたいらしいな。運命というものは、本当に面白いものだ」

『テ、テメエ、何でそこに』

「そんなことはどうでもいい。——一時間後、昨日と同じ場所だ。管理局には声をかけるな。その時は、お前の大事な男がどうなるか保証できないぞ」

『ふ、ふぎけるなよ！ もしカイズに何かあつたら——』
ブツツ。

一方的に連絡を打ち切ると、シスは端末をカイズに渡す。まだ状況を理解できない。

だがそれでも無理矢理納得するとすれば。

「…………シスンさん。貴方は」

「一緒についてこい。もし断るなら、ここらいつたいの人間の無事は保証しかねるぞ」

あまりにも単純な脅し。だがそれだけで十分なのだ。

彼の見せる威圧はその言葉が脅しでなく、さらに実行できると物語っていた。

ここで彼を止めるか。

その考えが頭に浮かぶが、人が少ないとはいえ公園の人々を巻き込まないとは限らない。

さらに、現実世界においてBクラスの自分に、目の前の彼を止められるとはとても思わなかった。

なら今は誘いに乗るしかない。カイズは一度だけ首を縦に降ろすと、シスンの横につく。

そして彼に促されるままに、公園から離れていくのだった。

弱き者

夕暮れの草原、カイズは平べったい岩の上に腰を落ち着けていた。彼の目の前にいるシスンは無防備な背をこちらに向け、仁王立ちしている。

このタイミングなら。

この人をヴィータと会わせてはいけない。

そんなことを何度も思うが、カイズは一步も動けなかった。

公園でのシスンとは明らかに違う。背を向けていようとも。デバイスを展開していなかりうとも。この人には絶対に勝てない。

それほどの実力の差を、シスンは行動に起こすことなく魔力量だけで示していた。

端から見ているだけでも、その実力はヴィータ以上。これが本気になっただら……。

「シスンさんが許せない相手って。……ヴィータさんといったい何があつたんですか」

「口を開くな」

「貴方は理由なく誰かを傷つける人じゃない。それは駅前でのやりとりで十分にわかつてるつもりです。だから、俺が納得できる理由を話してください。……そうでないと俺は」

「あの女のために戦うか？ ——ふっ、それはあまりしたくないな。俺にとっても短い時間であつたが、君のことはそれなりに気に入ってしまったからな」

シスンは大きなため息をつくとき、こちらに振り返る。その寂しそうな眼差しに、思わず胸が苦しくなる。

「……俺の家族や世界、そして愛する人は闇の書によって殺されたんだ」

「——えっ」

「もう何百年も前になるかな。エレナと俺の元に突然あの忌々しい魔導書が現れてな。エレナの願いを叶えるとか、エレナを助けるとか。そんな甘言に乗せられて、俺はあの魔導書の完成を黙認してしまっ

た」

「何百年も前って。でもシスンさんはどう見ても」

「いったろ、俺は大層なおじいちゃんだな。だが闇の書に関わりながら生き残ってしまった俺は、歳を取ることがなくなってしまった。唯一心労とともに、髪の毛が白くなつたくらいかな。———だがどれだけ心労を積もうとも、俺は絶対に許せなかった。だからここまで歩んできた」

「それは違う！ ヴィータさんは、ヴォルケンリッターの皆さんは殺したくて殺したわけじゃ」

「だが実際に人は死んだ。俺の大切な人達はみんな殺されたんだ！

殺す気がなかった？ 闇の書の意志で仕方なく？ それは大量殺戮が許される理由になるのか!!」

「だけどヴィータさん達はしつかりと罪の意識を持っています。だから管理局でもその贖罪のために様々な事件を解決しているんです！」

「俺はその管理局が一番気に食わないんだ。あれだけの事件を起こした闇の書の一部が、観察処分という名の無罪放免だと。あいつらがしつかりと罪を償うなら、俺もまだ割り切ることができたかもしれない。しかしあいつらは何の罰も負うことなく。全てを忘れて家族と笑顔でいるんだぞ！ 俺から家族を、愛する人を奪ったあいつらが幸せでいることに俺は耐えられなかった!!」

「そ、それは……………」

それは自分が易々と口出しできることではなかった。もし自分が大切な家族を奪われ、愛する人を殺されたらどう思うだろうか。

ヴィータのためなら死ぬことができる。そう思っている自分だからこそ、その後のことは考えるのが怖かった。

だからシスンの怒りももつともなこともかもしれない。彼の元の性格を考えれば、応援すらしたくなつたかもしれない。

だがしかし。正直自分でも現金な人間だと思う。

だとしても、今その矛先は明らかにヴィータに向いているのだ。だったら、自分のすることは。

(イノセントハート、ここから逃げきれる確率は?)

(極めて低いですね。あの男の口振りを考えると、少なくともヴォルケンリッター全員を相手取っても戦えるぐらいの力量はあるはずで
す。武器はあの大剣一つのようなようですが、それがどのような効力を持つ
ているかは不明です)

(それはわかっている。俺が聞いてるのはその数値だ)

(……………12パーセントと言ったところででしょうか。しかしそれも
街中まで追ってこない計算の元です。もし彼が手段を選ばなければ、
街一つ崩壊するでしょうね)

12パーセント。それは一見すれば絶望的な数字に見える。だが
今の状態でも十回に一回は逃げれるということだ。

それがさらにヴィータが来た瞬間ならどうであろうか。

彼女の実力を考えれば、その確率はさらにあがるはずだ。

(今一番駄目なことは、俺がシスンさんに人質に取られることだ。だ
からヴィータさんの到着とともに、戦線から離脱する)

ヴィータを置いて逃げるのは心苦しい。だが本気のヴィータの前
には、自分は足手まといでしかない。

ならいち早くこの場から離脱して、ヴィータが時間を稼いでいる間
に、管理局に応援要請を送る。

いくらシスンが強くとも、局単位で動けばなんとかなるはずだ。

(……………シスンさんには悪いと思うけど。だけどヴィータさんがやられ
るのを、ただ見てるわけにはいかないんだ)

覚悟は決まった。あとはタイミングを見計らうだけだ。

カイズは待機中のデバイスを握りしめると、耳を澄ました。風が草
原を撫でる音が、吹き抜けては落ち着く。

その音を何度聞いただろうか。その魔力が近づいて来るのを、二人
の男は同時に気づいた。

「……………来たか」

赤いバリアジャケットを着た少女は、デバイスを構えこちらに飛ん
でくる。

あとはタイミングを見計らうだけだ。ヴィータが降り立ち、シスン
が隙を見せた瞬間に。

「——何を考えているかわかっているさ。弱き者の気持ちは俺が一番よくわかってるからな」

「——えっ」

背後から聞こえる言葉に、思わず気の抜けた声をあげてしまう。

だつて今まで彼は自分の目の前にいたはずだ。なのにどうして、背後にいるんだ。

『マスター!!』

カイズよりも早く異変に気づいたイノセントハートがバリアジャケットを装着させる。

管理局のそれとは違う、黒いバリアジャケットを身にまとうカイズ。だがその程度の防御力は、シスンには関係なかった。

「君は眠っていればいい。なあに、目覚めた時には人間でない魔力の結晶体が数体消えた世界になつてただけだ」

「そんな、ゴハッー」

わき腹にメリメリと拳がめり込む。重くあまりにも深いその一撃は、きつと加減されたものなのだろう。

そうでなければ、カイズがこの一撃に耐えられるはずないのだから。

痛みに意識が薄れる。だがカイズは倒れることなく、シスンの肩を掴むと彼をにら見つけた。

「ヴィータさん達は魔力の結晶体なんかじゃない。今を生きてるれっきとした人なんだぞ」

「……いいや、奴らはただの結晶体だ。だから世界から消えようと関係ないさ」

「ふっ、ふざけるなよ」

「ふざけてなどいないさ。だからこれで君ともお別れだ」

シスはカイズの手を振り払う。カイズは受け身を取ることもできずに、ただ彼を見上げることしかできなかった。

シスはまたあの悲しげな表情をカイズに見せる。その時だ。まるで何かが霧散したかのように、シスの肩の一部が消えていくのが見えた。

「シ、シスンさん……?」

「人ならざる魔力の結晶体。俺も闇の書の一部も生きているべき存在ではないんだ。……さようならだカイズ君。最後に話せたのが君で本当によかった」

「そん、な。——っ!」

言いたいことはいくらでもあった。聞きたいこともいくらでもあった。

この二人が戦っていいわけがない。だが彼を止めるには、自分はおまりにも弱く、彼のことを何も知らな過ぎた。

本当にこのまま終わってしまうのか。

ヴィータのことを。シスンのことを救ってやることはできないのか。

カイズの中で様々な後悔が交差する。

だがそこまでだ。

カイズは痛みには耐えきれず目を閉じると、そこで意識が途切れてしまったのだった。



「テメエエエエエ! カイズに何してやがる!!」

彼が倒れた瞬間、ヴィータの中に冷静さは完全になくなっていた。やっと答えが見つかったのに。やっと彼と向き合えると思っただのに。それなのに、彼を失うことなどもう考えられなかった。

急降下の勢いとともに、ヴィータはグラーファイゼンを構える。さらにブースターで速度を増したそれは、真っ直ぐにシスンを捉えた。「フンツ!!」

だがその一撃からシスは逃げることをしない。

真っ直ぐに大剣を構えると、それを真っ向から受け止めた。

「安心しろ。この男には人質になってもらってるだけだ。——殺してしまつては、貴様が逃げ帰るかもしれないからな」

「ふっぎけるなよ！ 生きてたつて死んでたつて、あたしがカイズのことを見捨てて逃げるわけねえだろうがっ！」

「どうだか。殺しの機械の言葉など信用ならないからな。だからこそ俺もエレナもあんな甘言に乗せられてしまった」

「——ああ、そうかもしれないねえよ。だけどそうだとしても、あたしはもう逃げねえって決めたんだ！ 罪は償う。だけどそれは死ぬことじゃねえってな！」

「——あれだけの事件を起こしておいて、まだ生きたいと宣うか。それを俺が許すと思ってるのか！」

「テメエの許しなんていらねえよ！」

「——むっ！」

昨日のそれとは違う。ヴィータの速度と威力、そして想いを乗せた攻撃はシスンの大剣を徐々に押し込む。

ギイン！ このままでは押し切られると、シスンは大剣を傾けヴィータ一撃を捌く。

ヴィータは弾かれた衝撃を生かし、シスンから距離を取る。全力で戦っては、近くにいるカイズを巻き込んでしまう。

ヴィータのその意志をシスンも感じ取ったのだろう。

ヴィータに悟られることなく、あえて誘われたふりをすると、ヴィータに向かい接近を試みるのだった。

長き旅路 前編

「!?」

意識を失った瞬間、突然意識が目覚めるのをカイズは感じる。この不思議な感じは、どこかで体験したことがあるきがした。

「俺は確か、シスンさんにやられて。……………どこだここは？」

倒れていたカイズは、あたりを見渡す。そこは先ほどまでカイズがいた場所よりも、何倍も広大な草原だ。

何かがおかしい。カイズは漠然とした不安に襲われると、自らの体を見て息をのむ。

「か、体が。消えかかっている」

まるで擦り切れた映像作品のように、カイズの体は所々が現れたり消えたりしている。

『どうやら、マイクリエイターの時と同じようですね』

「イノセントハート？ ヴィータさんと時と一緒に……まさかっ！」

カイズはその場から立ち上がると、急いで辺りを見渡す。するとそこに一人の女性がいることに気づいた。

その女性は二十代前半くらいであろう。水色の肩にかかるミドルヘアが特徴的な人だった。

そして彼女は足が悪いのだろう。膝に食料などを乗せ、両手で車いすを動かしていた。

あの女性には記憶がない。だがもしこの現象がヴィータと同じなら。それなら、自分の存在感がこんなにも曖昧なものも領ける。

なにより彼は、言ったのだ。自身のことをヴィータと同じだと。

「……………いた」

車いすの少女を捜していたのだろう。現在よりも筋肉質な体ではなく。さらに自分と同じ黒髪の男性は、額に汗をかきながら彼女に駆け寄っていった。



「エレナッ！」

青年は大きく手を振ると車いすの少女に向かって駆け寄る。彼女はそんな彼を見ると、小さく手を振った。

「シスン？ どうしたこんなところで」

「どうしたもこうしたもないだろう。何で一人で出かけたんだ。荷物があるなら、俺が行くって言っただろ」

シスはエレナの横に立つと、乱していた呼吸を整える。だがそんな彼を見て、エレナは頬を膨らませた。

「だーかーら、過保護は駄目だって言ったでしょう。これくらいの荷物なら私だけで運べるって。それにシスンだって村の護衛で疲れてるんでしよう。ここ最近魔物が多いって、私も聞いてるよ」

「そ、それはそうだが。だけど、なあ」

最近魔物の出現が多い。それはエレナの言ったとおりである。でもだからといって、生まれつき体の悪いエレナに無理はしてほしくなかった。

それが顔にでてしまったのだろう。エレナは小さく肩を落とすと、言葉を続ける。

「シスンはこの村の自衛団の隊長なんだよ。隊長が真っ先に疲れちゃったら、ほかの人に示しがないんだからね」

「それはわかってるんだがな」

エレナの言うとおり、それは重々承知している。

元々人の少ない小さなこの村。若い男もあまり多くない。自然が豊かと言う名の、自衛防壁がなにも存在していない村なのだ。

だがこんな小さな村で、城壁を作り上げることなどもちろんできない。それに伴い、自分を中心とした8人の自衛団は常にパトロールに回るようになっていた。

「この二ヶ月だな。どうしてこんなに魔物が活発になったんやら」

「ほんとにねー。新婚してまだ半年、もーちよつと一緒になりたいんだけどねー」

エレナはシスンの腕を取ると、筋肉質な腕に頬をすり寄せる。不意に腕に広がるむずがゆさに、シスンはパツと腕を外してしまった。「ほーんと、シスンはこういうのに弱いよねー。外では魔物相手に、いっぱいいっぱい傷ついてるのに」

「いや、傷の痛みとこういうのは全然違うだろう。……とにかく車椅子押すから早く帰るぞ」

「だーかーら、自分のことは自分でするって言ってるでしょう」

「……………たいんだ」

「えっ？ 今なんていった?？」

体の大きさからでは考えられないほど、ボソボソとした言葉にエレナは耳を傾ける。

シスンは耳まで真っ赤になると、今度は聞こえるように言葉を放つ。

「は、早く家に帰って。エレナと一緒にいたいんだ。た、ただでさえ短い時間なんだ。だから一時も無駄にしたくないって言ったんだ!」

「……………あー、あはは。ごめん、なんだかんだ言ってたけど、そういう理由だったんだね」

「……………女々しいか」

「んーんー」

エレナはそこで言葉を止めると、チョイチョイと手を動かす。人に聞かれたくないことでもあるのだろうか。シスンは困惑したように、顔を近づける。

「シスンのそういう子供っぽくて真っ直ぐなところ。——私、大好きだよ」

彼の両頬に手を添えると、エレナはそつと彼の唇に口づけをする。結婚してから。いや、結婚する前から数えてこれで何度目のキスだろうか。

未だにそれになれないのか、シスンは顔を真っ赤にすると飛び上がるようにエレナから離れる。

そんな彼を見て、エレナは幸せそうに笑みをこぼした。

「もー、夜はもつとがつついてるのに、こーいうのにシスンは弱い

ねー」

「ぶっふ！　そ、それは言うなよ。仕方ないだろ、わ、若いんだから」
「そのせいで私の初めては大変激痛でしたけどねー」

「だ、だからそれはすまなかつたって何度も謝ってるだろ」

初めてとはいえ、確かにあれはがつつきすぎた。シスンはシユンと肩を落とす。そんな彼をみてエレナは「えへへ」とちろつと舌を出した。

「まあ落ち込まない落ち込まない。そんなことしてたら、もっと私といる時間が少なくなっちゃうよー」

「そ、そうだ。こんなところで時間を潰してる場合じゃないな！」

「そうと決まれば今日は仕方ないか。——それじゃあ、ゴー、シスン号」

「よっし、任せておけ。荷物を落とすなよ！」

「おーう」

シスンは車椅子の後ろに回り込むと、二つのアームを握り込む。エレナは荷物をギュツと抱え込むと、車椅子が動き出すのを感じた。

「うおおおおおっ！」

「あはは、はやいはやーい」

エレナは遊具で遊ぶ子供用に、無邪気な笑みを浮かべる。そんな嬉しそうな彼女を見て、シスンもまた車椅子を押す力を強めていくのだった。



それは本当に突然のことだった。いつも通り二人で草原に出かけていた時だ。

エレナが持っていた本が白い光をあげると、不思議な形の魔法陣を作り上げる。

そして真っ白な光が消えると、エレナとシスンの取り囲むように、三人の女性と一人の男がひざまずいていた。

「闇の書の起動を確認しました……」

「我ら、闇の書の収集を行い、主を守る、守護騎士めでございます」
「夜天の主の下に集いし組……」

「ヴォルケンリッター……何なりと命令を」

これはいつたいたいどういうことであろうか。突如現れた人物を前に、シスンは立ち上がりエレナを守るように両手を広げる。

エレナもまた状況についていけないのだろう。目をぱちくりさせると、四人の姿を見た。

「え、えっと一つ聞きたいことがあるんだけど」

「はい。何なりとお聞きください」

エレナの言葉にピンク色の髪の女性が答える。

「主ってというのは私のことかな？ それでいま主を守るって言ったたよね」

「はい、確かにそう申し上げました」

エレナの質問にどういった意図があったのだろうか。ものすごく目を輝かせているエレナを見ると、シスンは心配そうな顔をする。

だがエレナは違う。確固たる確証を得ると、その言葉を口にした。

「……それじゃあ、四人はずっと私と一緒にいてくれるってことだよね」

「ええ。闇の書のページ収集が完成し、主が夜天の王となるま——」

「だったら、その闇の書が完成しなければみんなはずっと一緒に。私と家族でいてくれるんだよね!!」

「か、家族？ い、いえ、私たちはあくまで主に仕えるものとして」

「あー、もう。そんな堅苦しいのはいいんだよ。やった、やったよシスン。家族が一気に四人も増えちゃったよ!」

こんなシリアスな場面であるにも関わらずエレナはハシヤギ回る。そんな彼女の様子に、シスンもまた肩の力を抜く。

だが彼女のことを知っているシスンとは違い、四人はあっけに取られたまましばらく動けなくなってしまったのだった。

長き旅路 中編



「はあああつー！」

シグナムの剣が、人の三倍はあろう魔物を一刀両断する。ここまでくると、嫉妬すらする気になれない。

シスンは賞賛の拍手を送ると、シグナムの隣につく。

「いやいや、本当にすごいな。やっぱり修練のたまものってやつなんだよな」

「修練というよりは、場数の違いだな。私の剣には師もなく流派もない。だがここまで力を昇華できたのは、多くの戦場に身を置いていたからだ。ふつ、あまり誇れる強さではないさ」

「まあ昔はそうだったかもしれないけどよ。それでも今はエレナやこの村のためになってるんだから、俺は誇ってもいいと思うけどな」

「そういつてもらえると、こちらも少しは救われる」

そう言うシグナムは、笑顔をこそ見せないが穏やかな表情を浮かべていた。自分もエレナも闇の書についてももちろん深く知らない。だがこれまでの彼女たちの行動や言動をみていると、それまでの人生がどれだけ激情に置かれていたか理解はできた。

シスンはシグナムの肩に手をポンと置き、白い歯を見せ笑顔を作る。

「……ああ、本当に助かってるぞ。いつもありがとうな」

「——あああつー」

村人やエレナからではない。シスン自身の言葉で、心からの感謝の言葉をかけると、シグナムは小さく笑みをこぼす。

きつと彼女たちは戦うことが義務。殺すことが当たり前の戦場に身を置き続けたのだろう。

戦乱のベルカ、それがどのような戦場かは自分にはわからない。だが人並みはずれた彼女たちがいて、戦争が早期終了しないこと。それがその戦乱の苛烈さを色濃く物語っていた。

さて、今日のところは帰ろう。シスンがそう思うと、シャマルがこ

ちららに近づいてきた。

「シスンさん、右手の甲に傷が入ってますよ」

「あれ？ いつやられたかな」

「もおー、怪我があるなら私にいつてくださいね。怪我をして帰ったらエレナが心配しますよ」

「確かにそうだな。じゃあ、すまない頼むな」

「はいっ」

シスンは右手を出すと、シャマルが両手を添える。緑の魔力光が傷口を包み込む。すると、ものの数秒でシスンの傷は完全に塞がった。「いつみても大したものだな。魔法自体はこの世界にあるけど、ここまで見事な治癒ができるのはそうはいないと思うぞ」

「お褒めに与り光栄です。でも傷が治せるからって、あまり無茶はしないでくださいね」

「ああ、そうするよ」

『むっ、そういえば旦那殿。ヴィータはどうしたのでしょうか』

足下から、低く野太い男の声が聞こえる。狼姿のザフィーラは、今更なことをいうと辺りを見渡す。

まあ実際村の警備は、ヴォルケンリッター一人でも十分なほどである。

だからこそヴィータはだいたいこの場にはいない。そしてここにはいないと言うことは、答えは一つであろう。

「……あいつ、新婚の俺よりも長い時間一緒にいるんじゃないのか」

『ということは、やはり主と共に？ 少し前から思っていましたか、どうして主はヴィータを人一倍気にかけているのでしょうか』

「んーあー、それはな。………まあいいか。もうお前達も俺とエレナの立派な家族だし。それに案外エレナもヴィータには話してるかもしれないしな」

どこから話したもののか。シスンは家路へ歩き始めると、三人にそのことを話した。



「なあー、エレナー。本当にいいのか？」

夕飯の買い物帰り。手にいくつかの野菜や肉を持ちながら、ヴィータは何度目かになる質問を口にしようとする。

「んー、今ヴィータに車椅子押してもらってないこと？ いいのいいの、私は自分のことはできるだけ自分でやりたいし」

「いや、そうじゃなくて。いや、まあそれもあるんだけどさ。……エレナは闇の書を手に入れて、本当にこのまま平和に暮らすだけでいいのかなって」

エレナの元にやってきて早二ヶ月が経つ。もしこれが今までの主であれば、その二ヶ月の間にどんなに少なくとも何百という人間を手に掛けていたはずだ。

だが今はどうであろうか。この村を襲う魔物を撃退したことは何度かある。だがそれ以外に自分がしたことといえば、エレナの買い物に付き合ったり、エレナと一緒に風呂に入ったり。そういうえばこの前は自分専用にと服だつて仕立ててもらった。

こんな温もりをもらうことは初めてで。初めこそは裏に何かがあるのではないかと疑ったほどだ。

だがエレナには裏の顔など存在しなかった。

ヴィータはピタリと足を止めると、エレナもそれに習って車椅子を止める。

今日は風が気持ちいい日だった。ヴィータは草原に座り込むと、エレナはその隣に着いた。

「あたしたちの力のすごさはわかってるだろ。この世界ならその気になれば、国だつて相手取つて戦える。それに闇の書が完成すれば、どんな願いだつて叶えることができるんだぞ。……なのはどうしてエレナはそんなに無欲でいられるんだ」

「んー、私はヴィータが思っているほど無欲な人間じゃないよー」

「だけど今までの主はみんな力や富や名声を求めてやまなかった。あたしたちはそんな主をサポートするためのものであり、戦うことが存在意義だと思つてた。……だけどエレナはどうしてこんなにも違う

んだ」

戦わないこと。人に優しくしてもらえること。その全てが初めての体験であり、ヴィータは戸惑っていたのだ。だからこそエレナの元に現れて二ヶ月、彼女はずっと願いの有無を聞き続けてきた。

幸せであること。突然自らに訪れたこの状況を、彼女はまだ信じられずにいたのだ。

他のヴォルケンリッターのメンバーよりも、ヴィータの心は幼くそして繊細なのだろう。

エレナは青空を見上げると、本当に小さく肩を落とした。

「ヴィータがそう思うのも無理ないよね。でもやっぱり私は欲深い人間だよ。だって毎日願いを叶えてもらってるんだもの」

「エレナが毎日願いを？　だ、だけどそんなことはなにも」

「実はそんなことあるんだよねー。だって、シスンが。シグナムがシャマルがザフィーラが闇の書が、そしてね。——ヴィータがここにいてくれるんだもの」

「あたしが、ここにいる？」

「うん、そうだよ。私ってね、実は捨て子だったんだよね。十数年前にこの村の入り口に、闇の書と一緒に捨てられてたらしいんだ」

「——えっ」

エレナが捨て子だった。この二ヶ月で初めて聞かされる過去に、ヴィータは言葉を失う。

だがそれは当然のことだろう。普段の彼女は気さくで明るく、そんな暗い過去を持つている様子など一切みられなかった。

だがそれが重い過去を払拭するための明るさだとしたら。ヴィータはそれを思うと、顔を俯かせてしまう。

そんな彼女をみて、エレナは「あー、ごめん、ごめん」とヴィータの頭を撫でた。

「そういうつもりで言ったんじゃないんだよ。別に私を捨てた両親の顔を知りたいとは思わないし、シスンとも出会えて結婚して。今の私は十分に幸せなんだから。……でも、だけどね。それでも本当に不幸だって、そう思うことが一つだけあったんだ」

「……………足のことか？」

「ううん。足のこととはもう生まれつきだから、全然気にしてないよ。それが当たり前で生きてきたわけだし。でも足だけじゃなくて、私は体のあちこちが悪いみたいでね。……私ね、子供が産めない体みたいなの」

「そ、それって」

「だからうちは狭いんだよね。もとより増える予定がないから、それなりの大ききでいいやって私が言ったんだ。でも子供が産めないって、当時知ったときは愕然としたんだ。天涯孤独の私には家族を作ることまでできないのかって。この時ばかりは、ショックで立ち直れそうになかったよ。……でもそのとき私を支えてくれたのがシスンなの。きつとシスンがいなかったら、私はもつと前に命を絶つてたと思うな」

冗談混じりの口調で言うが、きつとその当時はヴィータの想像を絶するものだったのだろう。

エレナのことを思うと、ヴィータは言葉を出せなくなる。だがエレナの言葉はそこで終わらなかつた。

「でもね、そんな私の願いを闇の書は叶えてくれたんだよ」

「叶えてくれたって、あたしたちはなにもしてないぞ」

「ううん。してくれたじゃない。だって、ヴィータやみんなは天涯孤独だった私の家族になってくれた。……………それにね。こういったらヴィータが怒るかもしれないけど。子供を産むことのできない私の前に、ヴィータは現れてくれた。子供とお出かけして。子供と一緒に夕食の支度をして。二人でオシヤレして休日に出かけたりってね。

——私が自分の子供としたかったこと、ヴィータは全部、ぜんぶ叶えてくれたんだよ」

「……………エレナ」

「あ、あははは、ごめんねヴィータ。ヴィータだって子供の代わりみたいな扱い嫌だよ。でも、だけどね、私はヴィータのこともヴィータとして、わっ、わわ」

驚きのあまりエレナの言葉は途中で切れてしまう。だがは溢れ出

す思いを押さえることはできなかった。

「ご、ごめんなエレナ。そんなことも知らないで、あたしズカズカと踏み込んで」

どうして自分はシグナムやシャマルと違い、こんなに子供なのだろうか。ヴィータは目に涙をためると、エレナの胸元から顔を上げられずにいた。

そんな彼女を慈しむように、エレナは大切な宝物を扱うようにヴィータの髪を撫でていった。

「ヴィータが謝ることなんてなにもないよ。……ありがとうねヴィータ。私の元に現れてくれて。私と一緒にあってくれて」

「うん。……うん」

「あともしヴィータがよかつたら、私のことお母さんって呼んでほしいかなー」

「……………それはちよつと恥ずかしいから無理」

「ありやりや。それは残念」

泣いているヴィータのために、エレナは冗談混じりの口調でその声を上げる。

そしてヴィータが落ち着くまで、エレナはずっと彼女の頭を撫で続けていった。

その日からヴィータは目の前にある幸せな日常をようやく受け入れることができた。

そしてその日を境に、ヴォルケンリッターの面々は少しずつだが笑顔を見せるようになっていった。



「おい、ヴィータ。お前新婚の俺よりもエレナと一緒にいすぎだぞー！」「へーん、エレナはあたしと一緒にいたほうが嬉しいんだよー」

小さな机を大人五人と一匹で囲む夕食時。数日前からエレナにべつたりのヴィータに、シスは冗談混じりに抗議をした。

ヴィータは主の旦那というシスンの立場を気にすることなく。べーつと舌を出して答える。

「エレナは今日もあたしとお風呂に入るんだぞー」

「く、くそう。俺の楽しみの一つがどんどんとヴィータに奪われていく」

「へん、本当は毎晩エレナと寝たいところを我慢してるんだからありがたく思えよなー」

「そこまで奪われたら大変なことになるぞー」

「別にシスンがおかしくなるぶんには問題ねえしー」

「いや、違う。……溜まりに溜まった俺の欲望でエレナが、あいてっー！」

「も、もう夕飯時になに話してるのよシスは！ ほらみんな呆れちやつてるでしょう」

エレナに怒られて、改めてシスは周りを見る。シグナムとシャマルは恥ずかしそうに視線を逸らし、ザフィーラは我関せずと沈黙を決め込んでしまった。

何とも微妙な空気が流れる食卓。そんななか、唯一意味を理解していないヴィータが、キョトンとした顔で質問する。

「なあー、そういえばどうしてベッドが二つあるのに、わざわざ大人二人で寝てるんだ。……あと隣の部屋で寝てる時に、たまにエレナの変な声が聞こえてくるんだけど。『あっ』とか『やっ』とか」

「~~~~~」

ヴィータの質問を聞くと、エレナはトマトのように顔を真っ赤にする。そしてその羞恥は真っ直ぐシスンに向けられた。

「もおー、シスンのバカバカ！ 絶対にシスンのせいだからねっ!!」

「いや、でも声をあげてるのはエレナだぞ。それにそれは声が押し殺せないほど気持ちいい——」

「それ以上言うなバカー！」

両手ともげんこつを作ると、シスンの頭をポコポコと叩いていく。そんな二人の仲むつまじい様子を、二人と一匹は心底恥ずかしそうに。

そしてなにもわからないヴィータは、どうしたのかと首を傾げて
いった。

長き旅路 後編

「……………どうだ。エレナの様子は」

村のパトロールを終えると、シスンは家の前にいるシャマルに声をかける。彼女は本当に申し訳ないと顔を伏せると、弱々しい声で答えた。

「私の回復魔法も全く効果がありませんでした。一応街のお医者さんにも見てもらいましたが、原因は不明みたいです」

「……………そうか」

エレナの容態が悪化したのは、ここ一週間のことだ。初めはただの貧血だと思っていたが、一向に容態がよくなることはなく。今では左手まで麻痺してしまっている。

このままいったら右手。そして最後には心臓と脳のどちらかが先に麻痺で止まってしまおうというのが、シャマルの下した判断だ。

もってあと三ヶ月。それがエレナの余命だ。

シスンは唇を噛みしめると、背中の剣を思い切り地面に突き刺した。

「どうしてだ。どうしてエレナがこんなことにならなければいけないんだ！ あいつは元々体が丈夫なほうじゃなかった。だけど、それでも一生懸命がんばって。それでようやく人並みの幸せを得られたのに……………それなのに」

「……………シスンさん」

シャマルの魔法でも、医学でもどうにもできない。

二人の間に暗い空気が漂う。そんな二人に活を入れるように、その赤い少女は声をあげた。

「……………完成させればいいんだよ」

「ヴィータ？ 今までどこ——それはっ！」

シスンはヴィータの持っている黒い魔導書を見て、信じられないと声を上げる。

だがヴィータは違う。確かな確信を持って、その言葉を口にした。「だったらこの闇の書を完成させればいいんだよ。そして願えばいい

んだ。エレナを助けてくれて」

「だ、だがもう残りの時間が」

「時間がなくなつてやるんだよ！ あと三ヶ月しかない？ 三ヶ月もあるんだろ！ あたしはやるぞ。絶対に、絶対にエレナを死なせたりなんかはしねえ!!」

「ヴィータちゃん。……ええ、そうね」

ヴィータの決意にほだされたのだろう。シャマルもまた決意を決めると、クラールヴィントを取り出す。

「シスンさん。私たちは愛する主のためにその使命を全うしたいと思います。しばらく家をあけるかもしれませんがお許しください」

「それは。……断る」

「おい、シスン。お前はエレナのことを助けたくねえのかよ！」

シスンの答えにヴィータが食つてかかる。だがそれは見当はずれな言い分だ。

シスンは一度大きく深呼吸をすると、全ての覚悟を決めた。

「俺もエレナを助けたい。……だから俺にも手伝わせてくれ。俺自身が弱いことはわかつてる。だけど時間がないはずだ。どんなに些細なことでも、俺も力になりたいんだ」

「……シスン。——よっし、やるぞ。あたしたちでエレナを絶対に助けるんだ!!」

「——ああっ」

エレナの余命を前にして、ヴォルケンリッターとシスンの覚悟は決まる。

この日から、守護騎士と一人の男の戦いが始まった。



「おい、タコ！ なに無茶してるんだよ!!」

「無理も無茶も承知の上だ。これもエレナを助けるためだからな」

戦い初めて一ヶ月。今日の魔物はかなり強敵だった。正直何度か

死んだかもしれないと覚悟したほどだ。

だがそれでもやり遂げた。そんな充実感に満たされたシスンに、ヴィータは怒りの声をあげたのだった。

「いいだろ。これで随分とページは進んだはずだ」

「ページが進んだってお前が死んだら意味ねえだろ！」

「それでも。俺はエレナを助けられるなら」

死んでも構わない。言葉にはしなかったが、その決意を瞳に宿す。そんな分からず屋なシスンを見て、ヴィータは馬鹿にしたような声を上げた。

「へえー、それじゃあエレナが生きてたら何だっていいっていうんだ。

——— だったら、だったらだぞ。もしエレナが健康になって、お前が死んで。それで新しい男を作って結婚したらどう思う？ 幸せそうな顔して、一緒にお風呂はいつて。それで夜は一緒に寝るんだぞ」

「……………エレナが。俺以外のやつと」

まだ見ぬ。というか、見たくない男の姿が頭に浮かぶ。幸せそうにその男と歩き、衣食住を共にし。そして夜は、その男と。

そこまで考えると、シスンは額に青筋を立てた。

「……………それは。許せないな」

「そうだろ！ だから絶対に死ぬなんて思うなよ。エレナにとって、お前の代わりはいないんだからなっ！」

ヴィータは頬を膨らませると、ズンズンと先に行ってしまう。ヴィータのその言葉は、命がけと考えていた自分の心に深く突き刺さった。きつとただの綺麗ごとでは今の自分は抑止できなかったはずだから。

だがそれでも一つだけ訂正がある。シスンは駆け足でヴィータの隣に着くと、彼女の頭をクシャクシャと撫でた。

「な、なにするんだよ」

「いや、ありがとうなって思ってたな。だけど俺からも一つ言わせてもらうぞ。——— ヴィータ、お前だってエレナにとって代わりのないかけがえのない存在なんだ。だからお前も絶対に死ぬなよ。俺たち誰も欠けることなく、絶対にエレナを救ってみせるんだ」

「——あつたりめえだよ！ 今更言われるまでもねえ!!」
ヴィータはギュツと手を握りしめる。シスはそんな彼女と拳を合わせる、新たに決意を固めていった。



「お帰りシスン。……最近、忙しいみたいだね」

「ああ、すまないな。ここ最近魔物の勢いが増してるみたいでな。………エレナには迷惑をかけるな」

「ううん。迷惑なんてことないよ。………ごめんね、みんなが頑張ってるのに、ご飯の用意もできなくて」

「それは言わない約束だろ。大丈夫だ。ここ最近シャマルの料理もそれなりに食べられるようになってきたし。それに近所のみんなもお裾分けしてくれるしな」

「だけど、それでも、うっ、こほっ、こほっ」

話の途中でエレナはせき込んでしまう。ここ最近はずっとそうだ。少し長く会話を続けようとすると、喉の方がもたないのだろう。

日に日にエレナの体は弱くなっていく。だがそんな弱々しくなったエレナを、シスは力強く抱きしめていった。

「……シスン。ごめんね。あはは、どーして私ってこうなのかな。……多くを望んだことなんてないのに。ただ普通に生きたいだけなのに。それすらも神様は許してくれないのかな」

「——エレナ」

「ねえ、シスン。私、私死にたくないよ。シスンと結婚して、たくさん家族ができて。ようやく、ようやく孤独じゃない幸せな時間が過ごせるって思ったのに。……やだよ。やだよ」

その言葉は、結婚してからエレナが初めてこぼした本音だった。今までエレナは多くの不幸に見舞われてきた。

それはシスンと出会ったときもそうだ。だがそれでもエレナは死にたくないとは今まで言わなかった。

自分はいつ死んでしまっても構わない。それが出会った頃のエレナの本音だった。

だがエレナは幸せを知ってしまった。自分と結婚し、ヴィータたちと出会いその温かさを知ってしまったのだ。

シスンは泣き崩れるエレナをさらに深く抱きしめる。そして力強い声で誓いを口にした。

「大丈夫だ。絶対に俺が。——俺たちがエレナのことを助けてみせる。だから俺たちを信じて待っていてくれ」

「シスン。——うん、信じるよ。私、シスンのこと、みんなのこと信じてるから」

シスンの言葉には何の説得力も理屈もなかったはずだ。だが彼女の愛する旦那が。そして彼女の愛する家族が、自身を救おうとしてくれている。

それがわかると、エレナの顔にあの頃のような笑みが宿る。この笑顔を絶対に失いたくない。

シスンは抱きしめる腕の力を緩めることなく。

死力を尽くすことを改めて誓っていった。



これで全て元通りになる。やっとエレナが救われる。その想いは、ザフィーラ、シグナム、シャマルの悲鳴により打ち砕かれていった。

「ぬああああああっ！」

「うあああああああ！」

「きやあああああっ！」

何が起こっているのかわからなかった。確かに闇の書は完成したはずだ。

なのに、なのにどうして彼女たちが消えなければいけない。どうして、どうして。

「く、くそ、なんだよこれは！」

闇の書からいくつもの触手が伸びる。ヴィータはグラーフアイゼンで抵抗していくが、それもささやかなものだった。

「何でだよ。どうしてだよ。これじゃあエレナは。エレナは！ くっそおおおおおっ!!」

ヴィータはカートリッジをロードすると、闇の書に向かいに特攻を仕掛ける。だがその想いは届きはしない。

グサリ、グサリと鋭利な触手がヴィータの体を貫く。ヴィータは口から大量の血を吐き出すと、目に涙をためシスンを見た。

「ご、ごめんなシスン。……………ごめん、エレナ」

それが断末魔だった。ヴィータの体は先ほどのシグナムたちのように霧散すると、文字通り跡形もなく消えていってしまう。

その光景をエレナは声一つあげることなく見上げていた。これまでの課程の何一つも知らない彼女は現状を理解できない、いや、したくないのだろう。

放心状態で座り込んでしまったエレナに、闇の書が迫る。シスは剣を構えると、闇の書に向かいそれを振りおろした。

だが止められるはずがない。ヴォルケンリッターの誰もが叶わなかったそれに、弱き自分がかなうはずがないのだ。触手に腹部を貫かれると、それだけで彼はもう動けなくなってしまった。

「ぐぞ、ぢぐじよおおおおおっ!」

どうして俺はこんなにも弱いのか。どうして俺は何も守ることができないのか。

「やめろよ。やめてくれよ。俺は約束したんだ。必ずエレナのことを救ってやるって。何でだよ。どうして当たり前前の幸せすら望んじやいけないんだよ!」

絶対に助ける。助けなくちゃいけないんだ。

シスは息も絶え絶えにエレナに手を伸ばす。エレナもまたシスンに手を伸ばした。

だがその手は届きはしない。エレナは闇の書に体を吸収されると、最後の叫び声をあげた。

「シスン。———!」

最後の想いは言葉にはならなかった。

だが届かなくてもわかる。エレナは助けてと叫んだんだ。

「くっそおおおおおおお!!」

だがシスンは叫び声をあげることしかできなかった。

瞬間、世界が闇に包まれる。そしてシスンの意識は途切れていった。



どうして自分だけ生き残ってしまったのだろうか。

ここ数年はずっとそのことだけを考えていた。

気がついたら自分は、全く知らない次元に飛ばされていた。どんなふうにかが働いたのかはわからない。だがどんな力が働いたかは理解できた。

「……俺は。あいつらと同じ存在になったのか」

何年経っても老いることのない体。それはヴォルケンリッターたちと同じ、人ならざる体であった。

「どうして俺も死なせてくれなかったんだ。エレナがいない世界など、生きている価値なんてないのに」

だがそう思っている、死ぬことはできなかった。

エレナは生をあれだけ求めていた。そして闇の書事件において、一人だけ生き残ってしまったという負い目が自分を死なせてはくれなかったのだ。

「なら俺はどうして生き残ってしまったんだ。……………俺は、何のために」

答えは何も見つからない。だからこそ人として死にながらも、彼は生き続けていった。



闇の書の真実にたどり着いたのは、何百年か経ってからだ。人の願いを叶えるといつて、その最後には宿主ごと世界を滅ぼす悪魔の書。それが闇の書だ。

しかもそれだけではない。闇の書は宿主の生命力を奪い、体の機能を奪っていくという例もあったらしい。

だったらエレナの足が不自由だったのは。

エレナが子供を産めない体だったのは。

そしてエレナの体調がどんどん悪化していったのは。

「……………全部、あいつらのせいだっていうのか」

心の中に残っていた幸せな記憶にヒビが入る。

エレナが人並みの幸せを過ごせなかったのも。

エレナが死ななければいけなかったのも。

全て、全て闇の書『等』のせいだったのだ。

何が家族だ。何が子供の代わりだ。

その全てはあいつらが奪ったものなのに、あいつらは善人面して、ずっとエレナから奪い続けていたのだ。

そう思った瞬間、ヴィータの最後の時の顔が頭に浮かぶ。あの悲しみはきつと嘘偽りないものであっただろう。

だがそれでも関係ない。俺にはエレナが全てだった。

エレナさえいてくれれば、それでよかったのだ。

「……………わかった。俺が生き残った理由が」

シスは剣を深く、強く握りしめる。

絶対にあいつ等のことは逃がさない。転成し続けて多くを殺し続けるというのなら、俺が絶対に止めてみせる。

シスは白髪交じりの頭を掻く。

そして眼孔からは暖かい光がうっすらと消えていってしまった。



ただ強くなりたかった。

復讐のためには力がある。シグナムにも負けない剣技。ザフィーラの防御を越え、シャマルの回復も追いつかないほどの、ヴェータ以上の攻撃力。

あの闇の書たちに勝つには、それがスタートラインだ。

だからこそ、シスは戦い続けた。

様々な世界を巡り、様々な強敵を斬り結んだ。

何度も何度も死ぬような目にあった。もう二度と剣が握れないと思うほどの、怪我を負ったこともあった。

だがシスは折れなかった。闇の書を滅ぼすまで折れるはずがないのだ。

今日もまた世界の驚異と言われるものをシスは倒した。

あとはさつさとこの世界から姿を消し、この世界の人間の手柄にしてもらえばいいだけだ。

転移魔法を展開しようとした時、ふと視線を感じる。

まだ敵が残っていたのか。そう思い目を向けると、そこには五歳ほどの小さな子供が立っていた。

見られてしまった。闇の書を滅ぼすまで、痕跡を残すことはあまりしたくはない。シスはどうしたものかと、子供を睨みつける。

彼の形相を見て、子供は一瞬泣き出しそうになっってしまう。だが勇気を振り絞り彼の元にやってくると、手に持っていた一輪の花を彼に差し出した。

「僕たちを助けてくれて。ありがとうお兄ちゃん」

「……………違う。俺は俺のためにこいつを倒しただけだ」

「それでも。それでもありがとう。僕たちを助けてくれてありがとう」

その穢れない言葉が、真つ直ぐな感情が、どれだけシスの心を動かしただろうか。

何百年ぶりにかけられた感謝の言葉に、シスの目に涙が溜まる。だがここで止まっているわけにはいかない。

シスは多くの兵隊が迫ってくる音を聞くと、転移魔法を展開す

る。

「ありがとうお兄ちゃん。僕、お兄ちゃんのこと絶対に忘れないから」

「っ！」

シスンは転移魔法に乗ると、次元を跨ぐ。

まだ見ぬ強敵と戦うために、全ては復讐のために。



『ありがとう』

『ありがとうごさいます』

『ありがとうね』

世界を救うたび、悪を倒すたび、シスンはその言葉を受け続けた。違う。俺はただ強くなりたいから。俺はお前達を利用しただけなのに。

だが本当にそうなのだろうか。

俺は、本当は救いたかったのではないだろうか。あの日救えなかったエレナの代わりに。抗えない暴力に打ちひしがれる人のために。

決意が折れることはない。だが少しずつ、少しずつその想いは横へズレていった。

『ありがとう』

その言葉を聞かされた時に、俺の心の闇は少しずつ打ち払われていった。

もし闇の書の事件で自分が生き残ったことに意味があったとしたなら。

もしその意味が今の自分の誓いと違っているとすればなら。

復讐は。憎しみは。何も生まない。

エレナが本当に望んでいたこと。それは――

『シスン！――』

全てを受け止めようとした瞬間、闇の書に飲まれる寸前のエレナの姿が脳裏をかすめる。

きつとエレナは助けてと言ったはずだ。

だがもしその言葉が違うものだとしたら。

何百年とただ戦い続けた自分は、ようやくその可能性に気づくことができた。

その時だった。

闇の書事件が、もう終わりを迎えていると知ったときは。

その怒り その悲しみ

ここで彼の記憶は途切れた。

そしてここまでできて、カイズはようやく今の状況のおかしさに気づいた。

確かに自分は少し前にヴィータの記憶に入ったことがある。

だがそれは今着ているジャケットとヴォルケンリッターたちの協力があつたからだ。

ならどうして今自分はシスンの記憶を覗き見ることができたのか。

カイズはその答えがほしかった。だって、その答え次第では――

『あの人のこと。お願いします』

ふとその言葉が耳に届く。カイズは声のほうに振り向くと、そこには水色のミドルヘアーの女性が立っていた。

ああ、やっぱりそういうことなのだ。

だからこそ、自分は彼の記憶を体験することができたのだろう。

心は決まった。自分が何をすべきか、何をしなければならないのか。

「……………ありがとうございます」

カイズは目の前の女性にお礼をいうと、スツと目を閉じる。彼女はそんなカイズを見ると、ゆっくりとその姿を消していくのだった。



ギイン！

鉄がぶつかり合う音が草原に響きわたる。

ヴィータは攻撃の直撃を何とか回避する。だが吹き飛ばされると、受け身をとることができなかった。

一回、二回、三回と地面に叩きつけられると、ようやく勢いが弱くなる。

「まだ、まだだっ！」

ヴィータはアイゼンを構えると、すぐにでも立ち上がろうとした。だが膝に力が入らない。ヴィータは下唇を噛むと、息一つ乱れていないシスンを見る。

「ちっ、強いにしてもほどがあるだろう」

「貴様等を滅ぼすために力をつけてきたからな。当たり前のことだ。

——よくもったほうだが、これでおしまいだ」

シスンは大剣を握りしめると、それを腰の辺りに構える。

あれはなのはのフィールド突破したやつか。……こりや本当にやばいかもしんねえな。

足も動かず、防ぐことも困難な状況。だがヴィータはまだ生きることを諦めてはいなかった。

自分の贖罪は彼に殺されることではない。全てを背負って生きて幸せになると決めたのだ。

だから決して弱音は吐かない。ヴィータはフィールドを展開すると、シスンの一撃に備える。

「……………どんなに足掻こうが俺は絶対に許したりはしない。これで終わりにしよう」

シスンの魔力に大気が揺れる。あの時の一撃が。いや、あの時以上の一撃が今まさに放たれようとしていた。

だがその技よりも早く、その声は言葉となって放たれていった。「……………そうですよねシスンさん。許せるはずがなかったんだ」

「んっ!」

戦闘の被害が及ばないシスンの後方。カイズは倒れたまま目を見開くと、同じことを口にする。



体が痛い。アバラが何本か折れているのだ。それは仕方のないことだろう。

だがそれでも立ち上がらなければいけない。

カイズは痛みには堪えながら、ゆっくりとその場に立つ。

「許せるはずがない。……ああ、そうでしょうね。でも、それでも」

カイズはイノセントハートを展開する。両手に二刀のデバイスを握りしめると、真っ直ぐにシスンを見る。

「眠っているカイズ君。こちらはもう終わる」

「終わらせるわけにはいかないですよ。………いいんです。貴方はもう許しても」

「許すだと？ この闇の書に全てを奪われた俺がこいつらを許すわけないだろう！」

「はあ、はあ、ぐっ！ ……いいんです。もう許してあげてください」

「——何も知らない若造が！ いいだろう。邪魔をするというなら、闇の書よりも先に送ってやろう！」

シスは溜めていた魔力を解放すると、カイズに向かい接近を仕掛ける。

だがカイズは慌てることなく。いや、慌てたところで結果は変わらないのだ。だからこそ相棒に対して、一つの命令を下した。

「イノセントハート。……戦闘は全部お前に任せる。一秒でも長く頼んだぞ」

『——了解。マスターも御武運を』

「一秒でも長く？ 一秒もかからんさー！」

シスは自らの攻撃領域にカイズを入れる。そこから放たれるのは、闇の書を滅ぼすと誓い鍛え続けた必滅の一撃だ。

フオン！

空気ごと抉り取るような一撃が放たれる。だがそれは空気を斬り裂いただけで、カイズの体には当たらない。

だが紙一重だ。カイズはバリアジャケットが斬り裂かれるのを感じる。

しかしそれで決意は決まったと、シスンの目を真っ直ぐに見つめた。

「シスンさんが聞いてくれないなら、俺は何度だっていいいます。もう、

もういいんです。シスンさんはもう許してもいいんですよ！」

「それはこの女が君の彼女だからだろ。もしくは君が管理局に属するからか？ 俺の怒り、俺の悔しさを何も知らない者が俺の何を語る！」

怒声と共に剣戟が放たれる。左足を切り落とすために放たれた一撃。だがカイズは足をあげると、その攻撃をまたもや紙一重で避ける。

「確かに俺は客観的にしか貴方の怒りを見ていません。でもそれでもわかつたんです。起きあがった瞬間の貴方を見て、それは確信に変わった」

「何を。……君は何を言ってるんだ？」

三撃目。四撃目。普通の魔導師なら、攻撃がきたと理解できないほどの速度の連撃。だがそのどれもがカイズに直撃しなかった。

「俺が目覚めたとき。少なくとも時間は五分は経っていたはずですよ。それなのにどうしてヴィータさんは生きていますか。どうして貴方はあんな小手先の技でトドメをさそうとしたんですか！」

「何を言ってる。あ、あれは俺が闇の書を倒すために編み出した——」

「修練と言うよりも場数の違いでしょうね。シスンさんの剣には師はいません。だけどその鍛え抜いた力の全てを持って攻撃すれば……それだけでヴィータさんを倒せるはずですよ。わざわざ使い慣れない魔法なんて使わなくても。でもその技をトドメに持っていった。それは自らの手で斬り裂きたくないからだ！」

「——ッ！ なぜ、それを。しかもその言葉は俺がシグナムに言われた。き、君は何を見てきた！」

「全て。とはもちろん言えません。でもシスンさんが本当に許せないうって。そう思うだけの記憶は見させてもらいました」

「——」 だったら君にもわかるはずだ。あの闇の書は俺から全てを奪っていった。俺はエレナや村人、あの世界の人たちのために絶対に闇の書を滅ぼさなければいけないんだ!!」

上段から大剣が振り下ろされる。だがその攻撃もまた紙一重でか

わす。

その瞬間、イノセントハートは持てる機能の全てをもって演算を始める。

一度や二度の戦闘を見ただけでは、攻撃予測などという神技めいたことはもちろんできない。

だがイノセントハートはカイズと共に見てきたのだ。

それは一瞬で消え去るような、走馬燈のような記憶の奔流だったかもしれない。

しかしこの何百年にも及ぶシスンの戦闘を。シスンの戦いの癖を。シスンの感情の起伏によってどの位置からどう攻撃してくるかを。

教科書通りのデータは全てデリートした。

そして今のイノセントハートはシスン専用の教科書と中身を変えたのだ。

だがそうだとしても一人と一つには限界がある。

カイズの身体能力。イノセントハートの演算能力。その全てをフル活用して、ようやく紙一重で避けることができるのだ。

紙二重では次の攻撃は避けられない。そしてどれだけ攻撃を避けようとも攻撃に転じることはできないだろう。

だがそれでいいのだ。カイズは彼に言葉をぶつけることさえできれば。

カイズは再び攻撃を紙一重で回避する。そして彼の叫びに答えた。

「だからもういいって言ってるんですよ！ シスンさん。貴方は、貴方はもう許していいんだ！」

「許せるはずがない！」

「それでも許すんだ！——貴方はもう『自分自身』を許してもいいんですよ！」

カイズの言葉に、あの嵐のような攻撃が止まる。

カイズはその姿を見ると、さらに言葉を投げかけた。

「やっぱりそうだったんですね。……貴方は俺の前で二度言いました。許せない奴がいるって。でも貴方はその名前を口にしませんで

した。ヴィータさんを恨む仕草や行動で初めはヴィータさんたちヴォルケンリッターを恨んでいると思つてました。だけど違った。貴方が本当に許せなかったのは自分自身だったんだ」

「ち、違う。……俺は、俺は。俺から全てを奪った闇の書が憎くて。闇の書の犠牲になつた力ない人たちのために——」

「確かにその想いもあつたかもしれないかもしれません。だけど本当に許せなかったのは、力がなかった自分自身だ。もしあの時自分に力があれば全てを救えたはずだと。エレナさんを。両親を。村の人を。世界を。そして——」

「それ以上口にするな!!」

怒号と共に放たれる突きがカイズのわき腹に突き刺さる。カイズの身体能力とイノセントハートの演算能力を超えた一撃に激痛が走る。

だがまだ口は動く。だからこそカイズはその言葉を放った。

「……そして。そして自分の家族を救えたはずだと。それはシスンさんの両親じゃない。エレナさんと結婚してからできた大切な家族。……貴方は闇の書を恨みながらもずっと後悔していた。力なく助けることができなかったヴォルケンリッターの皆さんのことを」

「ぐうううっ!」

やっぱり。やっぱりそういうことだった。

正直、シスンの記憶を見ただけではその答えにはたどり着かなかつたかもしれない。

だが予想が確信に変わったのは、公園での会話を思い出したときだ。

『昔こそ生意気な子供に言われてな』

その言葉を口にしたときのシスンの顔は幸せに満ちていた。そしてそれを言った人物がヴィータとわかつたとき、全てに納得がいった。

シスンはずっと許せなかったのだ。弱く誰も救えなかった自分自身身が。

「もう、もういいんですよ。シスンさんは十分に傷ついた。それでも

多くの人を救ってきたじゃないですか。貴方は、貴方自身をもう許していいんです！」

「——— だったら。だったらどうしたらいいんだ！」

シスは剣を引き抜くと、それを振り下ろす。だがその攻撃には先ほどのような鋭利さは存在しない。

子供が駄々をこねるように、その剣はめちやくちやに放たれていった。

「だったらどうしたらいい。俺だってわかっている。復讐は何も生まない。闇の書を滅ぼしたところで、エレナは喜んでくれないと。———

——— シグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータ。あいつらは俺の、俺たちの本当の家族だった。短い期間だったけど、みんなで過ごした数ヶ月は本当に幸せだった！」

「それがわかっていているなら、どうしてまだ剣を振るんですか！」

「駄目なんだ。頭では全部理解しているつもりなんだ。だが心の奥底が叫び声をあげるんだ。お前の勝手で闇の書の許すのか。闇の書の被害で唯一生き残ったお前には奴らを殺す義務があると。——— 何度も、何度も俺は自らの命を絶とうとした。だが駄目だった。その声が。唯一生き残ってしまったという強迫観念が。決して俺を眠らせてくれなかった！」

「そんな声に負けないでください！ 貴方は誰でもない貴方自身です。他の人の声に流される必要なんてないんです!!」

「だったら俺はどうしたらいいんだ！ 闇の書を討てと。みんなの仇をとれと。そう駆り立てるこの怒りを。愛する者を救えなかった悲しみを。闇の書を殺す以外に何にぶつけなければいいんだ!!」

「だったら!!」

カイズは両手のデバイスを投げ捨てると、両腕を広げる。

そして導かれるように、シスの刃はカイズの肩から斜めに向けて彼を斬り裂く。

避けることなどたやすかったはずだ。

だがその一撃をあえてその身に受ける。

カイズのバリアジャケットが出血により赤黒く変色する。だがそ

の出血をものともせず、彼はシスンの両肩にがっしりと手を置いた。「だったら。だったら俺が全部受け止めます。貴方の怒りも、貴方の悲しみも。だからもう自分自身を許してください。貴方はもう、戦わなくても、いいん……です……」

カイズはその言葉を言い終わると、崩れるように膝をつく。だが崩れ落ちたのはカイズだけではない。

ガランガラン。

シスンは握っていた大剣を手から離すと、両手で自らの顔を覆い隠した。

「俺は。俺は、いいのか。だって俺はそのために、全て、守れなかった。だから復讐を、だけどやっぱ俺はあいつらのことを、家族だと。エレナ、俺は」

「カイズ！ カイズ!!」

「……はっ」

ヴィータの涙混じりの声に、シスンは顔をあげる。彼女は足を引きずりながらも、こちらに近づいていた。

「カイズ。おい、嘘だよな。だってやつとあたしの答えが決まったのに。そんなのってないよな。なあ、カイズ、カイズ」

最愛の人の声にカイズは何も答えることができなかつた。倒れているカイズは、その腹部からの出血で徐々に緑の草原を赤く染めていく。

このままではいけない。シスンは彼に手を伸ばすと、ヴィータはその手を弾き飛ばした。

「これ以上カイズに何しようって言うんだよ！ お前が殺したいのはあたしで、カイズは関係ないだろ!!」

「……せないでくれ」

「な、何だよ！」

「頼む。頼むからこれ以上、俺の目の前で大切な人の命を失わせないでくれ。………お願いだ」

「……………お前」

先ほどのカイズとシスンの会話は断片的にしかヴィータには聞こ

えなかった。

だがあれほど冷酷だった男が、いまは涙を流して自分に懇願をしている。

それほどまでにカイズを助けたいと。その言葉が偽りであるとは、ヴィータには思えなかった。

「俺の速度ならまだ間に合う。彼をどこに運べばいい」

「——っ！ いったい何なんだよお前は」

どちらにしても傷ついた自分にはカイズを運ぶ力はない。ヴィータは納得できないと頭をガサガサと搔くと、シヤマルが常勤している病院の地図を表示するのだった。

ありがとう

「ん、んん……」

病院の一室、ベッドの横で座り続けていたヴィータはその声を聞くと顔を上げる。

「カイズ、大丈夫なのかカイズ！」

草原の時とは違う。ヴィータのその声を聞くと、カイズはゆっくりと目を開けた。

「あれ、ヴィータさん？ 俺、いったいどうなって……」

「お前はあの男に斬られて、それでよくわからないけどあの男がここまで運んできたんだ。もうどういふことだか、あたしにはわけがわからなくて。というか、過去がどうこうっていつてたけど、カイズとあいつは昔会ってるのか」

ヴィータがそう質問をすると、カイズはほんの少しだけ寂しそうな表情でヴィータの顔を見る。

自分は何かおかしなことを言っただろうか。だがあの復讐者について、ヴィータは何も知らない。

それ故にあの時のカイズの言葉の意味も、今の表情のわけもヴィータには届かなかった。

「でもよかったな。出血の割には傷は大したことないみたいだぞ」

「そうですね。そもそもシスンさんは俺を殺すつもりなんてなかったんですから。……それはヴィータさんのことも多分同じですよ」

「殺す気がなかったって。カイズがあと一歩遅かったら、あたしはなのはのプロテクションを貫通したあの技をくらってたかもしれねえんだぞ」

「……ええ、それはそうなんですけどね」

全てが終わったはずなのに、未だにカイズの口調は優れなかった。カイズは病室を見渡すと、さらに質問をした。

「そういえばシスンさんはどうしたんですか？ 姿が見えないんですけど」

「ん？ あいつならお前を病院に連れていったらさっさと姿をくらま

しちまったぞ。まあ、世界を救ってたつていつても管理局からすれば犯罪者だし、また逃げ回るんじゃないのか」

「……いえ、あの人もうそんな時間はないはずですよ」

「そうなのか？ でもお前にはすまなかつたつて言つてたぞ。なあー、どうやってあいつのことを説得したんだ。あんなに闇の書のことを恨んでたのに、正直あたしにはチンプンカンプンですよ」

「それはですね。ヴィータさんの時と同じで、あの人の記憶を――

――ッ！」

あの人の記憶。そう言つた瞬間に、カイズは自らの頭を抱え込む。そして大きく目を見開くと、ヴィータに詰め寄つた。

「ヴィータさん、シスンさんがどこにいったか知りませんか！」

「だ、だからしらねえつて。もとよりあいつとは話すことはないし、あいつも話しかけてこなかつたしよ」

「そ、んな……。それじゃあ駄目なんだ。そうだよ、どうして俺は今まで気づかなかつたんだ。いや、シスンさんの過去の記憶を見た時点で気づくべきだつたんだ」

「カ、カイズ？ 何言つてるんだよ」

「俺は今までシスンさんの記憶を見ていたと思つてたんです。でも違う。もしあの記憶がシスンさんだけのものなら、エレナさんとヴィータさんが二人で話してる記憶が存在するはずがないんです。――
――とにかく早く探さないと、ぐっ！」

「お、おい無理するなよ。浅かつたつていつても、怪我をしてることに変わりないんだぞ」

「ヴィータさんお願いします！ 俺をあの草原に連れていつてくださ
い。この街で一番自然に溢れている場所はあそこです。いるなら
やっぱりあの草原しかないんです！」

「ど、どうして今更あの男に会わなくちやいけないんだよ」

ヴィータにはカイズの言っていることがわからなかつた。やつと闇の書事件に対する答えが見つかつて、それでようやく今回の事件が
終わったのに。

それなのにカイズは再び事件に首を突つ込もうとしている。今は

安静にしている。普通ならそう突っぱねるのが正解のはずだ。

だが鬼気迫るカイズの顔を見ると、その言葉は出せなかった。

「お願いしますヴィータさん！ このままシスンさんと別れてしまつたら。きつと、きつと、俺もヴィータさんも後悔することになります！」

「あたしが、後悔する？」

「今はその意味がわからなくていいです。だからお願いします。一緒にあの草原に行ってください！」

「お、おう……………」

カイズの言動は理解も納得もできない。だがそれで彼が納得するなら。ただそれだけを思うと、ヴィータはデバイスを展開していくのだった。



夕暮れの草原。シスンは肌に気持ちのいい風を受けると、空を眺めていた。

「思えば、随分と長い時間を歩んできたんだな」

エレナと結婚して。家族ができて。全てを奪われて。そして多くの人を救ってきた。

管理局からすれば自分のしていることはただの自己満足。ただの犯罪行為かもしれない。だがそれでもよかった。

『ありがとう』

その言葉を受け取るたび、自分は間違っていない。自分は正しかったと。せめて自分自身だけはそう認めてやりたかった。

「カイズ君。まさかあんな若い子に教えてもらえるとはな。それだけでも長く過ごしてきた甲斐があった」

心の中ではわかっていた。だが闇の書に殺された人々。エレナのため。世界のため。そんな御託を並べて、自分自身の強迫観念を

ヴィータたちにぶつけようとしてしまった。

大層なおじいちゃんが聞いて呆れる。

自分はあの時からずっと成長などしていなかったのだ。

「……………そろそろ時間か」

シスは自らの体が徐々に霧散していく姿を、まるで他人事のように見ていた。

だがこれで終われる。シスは自分自身を許すことができたのだから。

「シスさん!!」

その時だ。草原の奥から、あの声が聞こえてきた。

カイズはわき腹を押さえながら、こちらに近づく。そんな彼を守るように、ヴィータはこちらを睨みつけていた。

「カイズ君。……………どうして」

「まだ、まだなんです。俺にはまだ伝えなくちゃいけないことがあったんです!」

「……………心配は無用だ。君に諭されて、俺はもう自身を許すことができた」

「そうじゃないんです。貴方に届けなくちゃいけない言葉があるんです。でもそれを言うのは俺じゃない。でも彼女は今その言葉を言うほど力がないんです!」

「……………それはどういうことだ」

「もう時間がないはずですよ。でも今しかありません。貴方という存在が崩れ落ち始めたこのとき。その時にだけ、彼女は貴方の中からでてこれ、ぐっ、ごほっ、ごほっ!」

「これ以上喋るなカイズ君! 傷に障るぞ!!」

「それがどうしたっていうんですか! 俺のことはどうでもいい。だから思い浮かべてください。願ってください。俺を貴方の中に導いてくれた、貴方の中にずっといた大切な人の姿を!」

「俺の、大切な人の姿」

その姿は忘れるはずがない。

自分は何百年と様々な世界と時を渡り歩いてきた。

だがその姿が色あせることは一度だつてなかった。

シスはその場で目を閉じる。

そして水色のミドルヘアの女性を。

自分が愛したたった一人の女性を心に浮かべた。

『——シスン』

「——えっ」

その時だ。彼女の声が聞こえた。

だがそんなわけではない。そんなはずがない。

だがそれでもシスは目を開いた。その瞬間、彼女は楽しそうに笑みを浮かべた。

『やっど。やっど気づいてくれたんだねシスン』

「あ、ああ。エレナ、どうして」

『どうしてなんて私にもわからないよ。でも私はあの事件からずっとシスの心の中にいたんだよ。シスは気づいてくれなかったけどね』

エレナは頬を膨らますと、子供っぽく拗ねてみせる。だがシスはその姿を見て、視線を逸らしてしまう。

「だが俺はエレナを助けることができなかった。俺は——」

『ありがとう』

「——えっ」

『闇の書に取り込まれる瞬間、私が言いたかった言葉だよ。確かに短い間だったかもしれない。でも私はシスと結婚できて幸せだった。私を愛してくれて、本当にありがとうねシスン』

「エレナ。俺は、俺は」

『ほら、大の男が泣かないの。そんな暇があるんだったら、私にも言うてほしいな』

エレナにそう言われると、シスは涙をぬぐい去る。今度は視線を逸らしはしない。シスは真っ直ぐエレナを見ると、彼女の言葉に応えた。

「俺も。……俺もエレナと結婚できて。君を愛することができて。本当に、本当に幸せだった」

『うん。それでよし』

エレナは満足そうに頷くとスツと目を閉じる。

エレナの体は。シスンの体は。こうしている間にも徐々に消えていっていた。

だが二人は涙を流すことなく。笑顔のままに口づけを交わした。

これでもう思い残すことはない。

そう二人が思った瞬間だ。

その声が放たれたのは。

◆◆◆

あたしは。あたしはその姿を知っていた。

青いミドルヘアの女性は、ヴィータの記憶にはなかった。だが心に刻まれた想いが必死になって訴えかけていた。

『ヴォルケンリッター……何なりと命令を』

『ご、ごめんなエレナ。そんなことも知らないで、あたしズカズカと踏み込んで』

『へーん、エレナはあたしと一緒にいたほうが嬉しいんだよ』

『だったらこの闇の書を完成させればいいんだよ。そして願えばいいんだ。エレナを助けてくれて』

『ご、ごめんなシスン。……ごめん、エレナ』

——スウ

走馬燈のように数々の記憶が、心の奥底から吹き上げてくる。どうして忘れていたのだろうか。どうして思い出せなかったのだろうか。だって彼女と自分は家族で、そして——。

「エレナッ！ エレナッ!!」

シスンが言っていたからではない。自身の思い出から、彼女の名前を口にする。

ヴィータのその叫びを聞くと、エレナは柔らかい笑みで彼女を見る。

『ヴィータにも辛い思いさせちゃってごめんね』

「違う、エレナは何も悪くない。あたしが、あたしたちのせいで」

『ヴィータたちのせいじゃないよ。あれは誰かが悪いわけじゃない。だから誰も責任を負うことなんてないんだよ』

「だけど、あたしは……」

悔しそうにヴィータは目を閉じる。そんな彼女の前にエレナとシスは近づく。エレナは泣いている子供をあやすように、優しく頭を撫でていった。

『私は幸せだったよ。だから泣かないで、ヴィータが泣いてると私も悲しくなっちゃうから』

「エ、エレナ……」

ヴィータは流した涙を止めることはできなかった。

だが涙を流したまま最高の笑顔を作ると、初めてその言葉を口にした。

「あたしも。あたしもみんなと過ごさせて幸せだった。ありがとう——

——お母さん、お父さん」

『うん』

ずっと、ずっと気恥ずかしくて出すことのできなかった言葉をヴィータはようやく口にする。

ヴィータのその言葉を聞いて、エレナとシスは安心したと満たされた笑みを浮かべた。

『ヴィータはこれからもっと、もっと。私たちみんなの分までいっぱい幸せになってね』

「うん。うん」

「カイズ君。君には随分と迷惑をかけてしまったな。ヴィータを、娘をよろしく頼む」

「——はい」

互いが互いの相手に言葉を述べる。

だがさよならとは決して言わなかった。

だからこそ、四人の最後の言葉は同じものだった。

自分と出会ってくれて。

温かさを教えてくれて。

自分を許してくれて。

その言葉を受け止めてくれて。

『ありがとう』

四人はそう声を揃えると、笑みを浮かべていく。

その言葉を最後に、エレナとシスンの体は完全に消えていつてしまった。

だがそれでも寂しくはなかった。

エレナの想いは。シスンの想いは。

二人の中に生き続けているからだから。

だから、だから。でも、だとしても……………。

「…………ごめん、カイズ」

二人の姿が消えると、ヴィータは彼の胸に顔を埋める。

エレナは笑顔を望んでいた。だがそうだとしても、ヴィータは迫りくる悲しみを抑えることができなかった。

「ごめん、ごめんなカイズ。でも、しばらくこのままで」

「大丈夫ですよヴィータさん。もう、大丈夫ですから」

「うっ、うう。……………うああ」

できるだけ声を押し殺して、エレナとシスンがしっかりと旅立てるようにと、ヴィータはカイズの胸で涙を流し続けた。

そんなヴィータを抱きしめると、カイズはその背中に何度も、何度も優しく手を置いていくのだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない14 T & Hの初
会議

私の！

管理局の長きに渡る廊下。

茶色みがかったミドルヘアーの女性は、目に大粒の涙を貯めて一心不乱に走っていた。

「うわああああああん」

「ん、えっ!?!」

そしてこの出会いがいけなかったのだろう。

もしこの時八神はやてがぶつかったのが、サイドテールの女性、高町なのはでなければ今回のことは起きなかったのかもしれない。

なのはは倒れそうになりながらも、足に全力を込めると何とかはやてを受け止める。

「ど、どうしたのははやてちゃん。——泣いてるの?」

「うっ、うっ、なのはちゃん。ううっ」

「落ち着いて。ゆっくりでいいから状況の説明、できるかな?」

「(コクコク)」

よっぽどショックなことがあったのだろう。未だうまく喋れる様子でないはやてを見て、なのはの中に怒りが渦巻く。

はやては管理局に入ってから涙を見せないようになった。それは上に立つ者が弱音を吐いてはいけないと、常に気を張っていたからだ。

だが今はどうであろうか。ここ数年、彼女のこんな弱っている姿などなのはの記憶にはなかった。

自分の大切な親友に誰がこんなことを。これは少し頭を冷やしてもらっただけではすまないと怒りがにじみ出る。

はやては何度かしゃっくりをすると、途切れ途切れに言葉を述べ
る。

「わ、私の」

「はやてちゃんの?」

「うっ、ひつく、私の、私のヴィータがああつ」

「お、落ち着いてはやてちゃん。——私のヴィータちゃんがどうかしたの!?!」

「……………なのはちゃんも少し落ち着こか」

なのはの反応を見て、はやては少し落ち着きを取り戻したようだ。何度か呼吸を整えると、その時の出来事を話し出した。



時刻は今より十分くらい前のことだ。

早めに仕事が終わったヴィータは、誰もいない昼休み前の廊下を歩いていた。

「~~~~~♪」

あのダブル初体験以来、ヴィータはずっとこの調子だった。その異常な陽気さに、彼女を知るものは皆疑問を覚える。だが教導の時はしつかりとしているし、休み時間に浮かれている分には、誰も文句の言いようもない。

「ふーん、ふふーん。——ふふふふっ♪」

ヴィータは左手を掲げると、薬指に輝くそれを見て頬を緩める。何度見ても見飽きない、その金色の輝きは彼の想いの証だった。

「全く、給料そんなにもらってないのに、こんなに奮発しなくてもいいのによー。んふふふー」

口ではそういつていながらも、彼の給料の三ヶ月が込められたそれは、ヴィータにとってなにも変えられない宝物だった。

だがいつまでも見ていては危ないと視線をはずす。すると、目の前にいる黒髪の男性を見て胸を躍らせた。

「あれ、カイズ。どうしてここにいるんだ」

「早めに授業が終わったんで、ヴィータさんのこと待っていようと思っ
いまして。でも今日はヴィータさんも早かったんですね」

「おーう。昨日までに謹慎中に貯めてた仕事は全部終わらせたから

な」

「あつ、そうだったんですか。だったら普通に食堂集合でも問題なかったですかね」

「ううん、そんなことないぞ」

ヴィータの仕事が貯まっていたため、最近はお昼に出遅れていた。だが今日は昼休み前に廊下で会うことができた。

ヴィータは廊下を見渡すと、顔を赤く染める。そして両手を胸に当てると、恥ずかしそうに声をあげた。

「なあ、カイズ。……………チューしょ」

「そうですねー。……………ん、え、今なんて」

「だからチューしようって言ったんだよー。いいだろう。もう昼休みだし、廊下には誰もいないしさー」

「い、いや、それは俺もしたいですけど。というか、ヴィータさんはいんですか?」

「いいから言ってるんだよ。なつ、昼休み始まる前によー」

ヴィータは目を閉じると、「んー」と唇を突き出す。

いったいここにいる少女は誰だろうか。それはヴィータ自身が一番思っていることだ。

だがここ最近カイズに対する好意をうまく押さえ込むことができなくなってしまったのだ。

カイズと付き合い初めて、確かに彼のことは好きになり、段階踏んで大好きになっていた。

だがシスンの事件を越え、初体験とプロポーズを同時に通過したヴィータは、彼のことが好きになりすぎてどうしよもなくなってしまうのだ。

ヴィータは頬を染めたまま目を開けようとしなない。

そしてヴィータが仕事場でもOKということならと我慢する必要などない。

カイズも目を閉じるとその唇を重ねていった。

「んー、んっ、んっ、んー」

さすがに舌はいれないが、それでも何度も何度も唇を重ね合う。

ヴィータはそつと唇を離すと、頬を真っ赤にする。だがそれでいて嬉しそうに笑みを浮かべた。

「えへへー、なんだかこういうの恥ずかしいなー」

「……俺はもう午後の授業が頭に入らないかもしれないかもしれません」

「それは駄目だぞー。カイズは早く一人前になるんだからなー」

「———そうですね！」

ヴィータのその言葉を聞いて、カイズは握り拳を作る。せつかくプロポーズはOKをもらったのだ。あとは可能な限り早く一人前になって。それでヴィータと結婚するんだ。

その想いと共に、目に炎を宿していく。

そんな彼を見て、ヴィータはさらに頬を緩めていった。



そして舞台ははやてとなのはに戻る。

はやては目に涙を浮かべながら、その経緯を話し終えた。

「私の、私のヴィータが。ど、どんどん大人になってもうて。———」

ヴィータの母親代わりとして。同じ女性としてなんか、いろいろとこみ上げてしもうてな。………なのはちゃん？」

「……………」

泣いている自分とは違い、なのはは笑顔のまま固まってしまった。

やはり同じ『ヴィーターランク』が高いものには、衝撃的過ぎる洗礼であったようだ。

はやては恐る恐るなのはの肩を揺らす。

「……………はっ！ は、はやてちゃん、いま私になが」

「シヨックのあまり気絶してたよ。でもなのはちゃんも私のシヨックをわかってくれるんやね」

「も、もちろんだよはやてちゃん！ とうか、一大事過ぎるよ。———」

———私のヴィータちゃんがまさかそんなことになってたなんて！」

「私のやけどね!!」

二人は互いにヴィータに対する愛情を張り合う。

だが同時に肩を沈めると、大きなため息をついた。

「私の守護騎士はずっと見た目が変わらないからか。ヴィータのことはずつと子供としてみてたのかもなー」

「でも私たち同様成長してて、今はもう結婚を前提とした彼氏持ちだもんねー」

「ん、なのはちゃん。結婚を前提ってどういうことや?」

「あれ、もしかしてはやてちゃんはまだ見てないの? ヴィータちゃんの薬指の指輪」

「!!」

薬指の指輪。それはまさか。

そういえば謹慎開けから、ヴィータには会っていないかった。特にシスの事件の全容を聞いて、あれだけ盛大に怒ってしまったのだ。何となく顔を合わせ辛かったというのが、この場合正しいであろう。

はやては口をパクパクさせながら、先ほどの光景を思い出す。自分が見たのはキスをする直前だ。

そこまで思い出すとどうだろうか。確かに胸に置いていた手には、金色の何かがあった気がする。

ツウツとはやての額から汗が流れる。

そんな心痛の面もちのはやてを見て、なのはは彼女の肩をガツシリと掴んだ。

「どうやら私たちは真実と向かい合わなくちゃいけない時がきたのかもね」

「……………なのはちゃん。でも私、心の準備が」

「いつまでも逃げてちゃ駄目だよ。ヴィータちゃんの今の状況を聞いて、それを受け止めないと」

「……………そうやね。それが私らヴィーターランカーの使命やよね」

「——うんっ! はやてちゃん!!」

「なのはちゃん!!」

二人はお互いを強く抱きしめると、その覚悟を決める。

そんな彼女たちの様子を、廊下の影で金髪女性が見ていた。

「……………ごめん、ヴィータ」

フェイトは二人の会話に混ざることなく、その場を後にする。本当ならあの二人を慰めるなり、なだめるなりをしたかもしれない。

だが前回二人のフォローに回り飲みに行った際に行われた、大ヴィータ祭の洗礼をフェイトはまだ忘れられずにいたのだ。

繰り返されるヴィータ自慢。終わることのない過去話。そして盛り上がる二人に取り残される孤独感。

フェイトは心の中で何度もヴィータに謝る。そしてはやとなのはに『ごめん、ちよつと仕事を立て込んでしまった』とお昼に会えない旨のメールを送る。

その送信が完了したのを見ると、彼女は雷速でこの施設から離れていくのだった。

二人のお誘い

定時に仕事を終えると、ヴィータはデバイスを取り出す。

「今日は早く帰れそうだって連絡しねえとなく」

今日の夕飯はどうしようか。また自分が作ってもいいし、ようやく海の見えるホテルのことが解消したのだ。たまにパアーツと贅沢をしてもいいだろう。

まあどこで食べてもカイズと一緒になら楽しいに違いない。ヴィータはディスプレイにカイズの名前を表示すると。——突然後ろから羽交い締めにされた。

「なっ、なんだ!?!」

「うふふー、ヴィータちゃん。遊びましょー」

「な、なのは? どうしたんだよいきなり」

「それはなー。私らがヴィータと遊びたくてうずうずしてるからだよー」

「は、はやて? ……えっ、何で二人ともそんな笑顔なんだ」

いや、実際に表情は笑顔である。だがその後ろには黒いオーラのようなものが見えていた。

何か二人を怒らせるようなことをしてしまったのだろうか。ヴィータは冷や汗をかくと、両手をジタバタと動かす。

「わ、悪いんだけどこれからカイズに連絡しなくちゃならねえんだ」

「それなら私らがしといたから大丈夫よヴィータ。今日は私らと飲み会って伝えているからなー」

「えっ? 飲み会ってそんな約束——」

「もおー、ヴィータちゃん。私たち二人そんな約束なんてい・ら・ない・よ・ね♪」

なのはは後ろから羽交い締めにながら、器用にほっぺたをつついてくる。

何か言いようなない不気味さは感じていた。だがここ数週間は、一秒でも長くカイズといたくてずっと直帰していたのも事実だ。

はやてとは家族であり、なのはとは直属の同僚だ。たまにはこんな

日もあつてもいいのだろう。

二人とも、ずっと自分の側にいてくれた大切な人たちなのだから。

「そうだな。それじゃあたまには一緒に飲みにいこうか」

「さつすがヴィータちゃん、話がわかる」

「私の子は物わかりがよくてええわ〜」

ヴィータから手を離すと、二人は終始笑みのままヴィータの頭を撫でていく。

そのときヴィータが感じたのは小さな違和感だ。

（あれ、何だかいつもより撫で具合が強いような）

だがそれも些細なことであろう。せつかくの飲み会なのだ。余計なことは考えずにたつぷりと楽しもう。

無垢なヴィータは誰よりも一緒にいた家族と誰よりも一緒に仕事をした同僚を疑うことなく。

二人に案内されるままに、外食に出かけるのだった。



「ほ、本当にこんなところでいいのよ」

ヴィータは案内された個室につくと、落ち着きなくあたりを見渡す。

いや落ち着きがなかったのは、この店の外観を見てからだ。建物全体が白に統一されており、白スーツの執事とメイド姿の女性に『ご利用誠にありがとうございます』と頭を下げられたときには、思わず声をあげそうになってしまった。

室内には赤の絨毯が引かれており、仕事帰りの私服で入るのは些か、いやかなり危ぶまれた。

そんななか、はやては一枚の金色のカードを取り出すとあれよあれよとこの部屋に案内されたのだ。

人が十人いても余裕のあるスペース。横に長いテーブルには、折り目が一切ないクロスが敷かれており、天井のステンドグラスの眩しさは目を覆うばかりだ。

仕事帰りにちよつと飲みに行く。そんな言葉からは想像できない現状に、ヴィータは目を見開いていた。

「ほらほら、ヴィータはここに座ってな」

「あ、ありがとうはやて」

勧められるままに、椅子に座る。するとこんな広いスペースであるに関わらず、なのはとはやてはその隣に座り込む。

その行動はまるで、ヴィータをこの場から逃がさないと。そんな意志すら伝わってきた。

「それでなーヴィーター、最近どんな感じなのかなーってな」

「どんな感じって。一応貯まった仕事は片づいたし、体のほうも何ともないけど」

「ヴィータちゃん、私たちはそういうことを聞きたいんじゃないからねー。えーつとね、その薬指が気になるんだよねー」

「薬指って。——あつ」

ヴィータは左手の指輪を見ると、ほんのり頬を染め軽く俯いてしまう。

明らかに恥ずかしがっている。ずっとなのはとはやてのなかではヤンチャな子供ポジションだったあのヴィータがだ。

はやてはデバイスに手をかけると、カメラモードを起動しようとする。だがその手なのはに押しえつけられる。

なのはは歯を食いしばりながら、首を横に振り念話を送る。

（はやてちゃん、気持ちはわかる。わかるけど、今日は我慢だよ）

（せやかてなのはちゃん。こ、こんな可愛いヴィータここ最近はスツカリご無沙汰でな）

（私も耐えるから。だから今日は、今日は）

互いにアイコンタクトを向けると、はやてはデバイスをポケットに戻す。

はやてはワザトらしくせき込むと、自らの心を落ち着かせた。

「それでなヴィータ、うちも今日なのはちゃんに言われて気づいたんやけど。……その指輪はカイズ君からの贈り物なんか？」

「——うん」

「随分と高そうに見えるけど。……………えつと、どういう意味での贈り物なのかな」

はやてとなのはの言葉にヴィータは口をつぐんでしまう。だが二人の真剣な顔立ちを見ると、ギユツと手を握り込む。

どちらにしても、この二人には一番に聞いてもらわなければいけないことだ。特に二人にはカイズとの馴れ初めでいろいろと助けもらってきたのだ。このまま黙っていいわけがないのだ。

「あ、あのな。この指輪は」

——トントン。

ヴィータが口を開いた瞬間、突然扉が叩かれる。

「失礼します。ご予約されてましたコースの前菜をお持ちしました。あとこちらは頼まれていたカクテルになっています」

「それじゃあ、こちらにお願いします」

「かしこまりました」

長いテーブルにギュウギュウ詰めに座った三人を見ても動じないのはさすがプロといったところだろう。

執事とメイドは黙々と料理を並べていくと、なのはとはやての前に白のカクテルを。ヴィータの前に赤いカクテルを置いて部屋を後にした。

すっかりタイミングを逃してしまつたヴィータは、ポカンと口をあけてしまう。

はやては「あはははー」と頬を搔くと、グラスを手取る。

「まずは乾杯しようかー。ほら、ヴィータもなのはちゃんも」

(は、はやてちゃん。それよりも真相を聞く方が先じゃ！)

「大丈夫や。そのためにヴィータには特別なカクテルを用意したんやからな」それじゃあ二人ともかんぱーい」

「か、乾杯」

「乾杯」

はやての言葉の意味は分からないままに、グラスをぶつけ合う。ヴィータは用意されたカクテルを一口飲むと、「ん？」と口元を抑えた。

「これ、すごくおいしい。なーなー、はやて。これ何て言うカクテルなんだー」

「ふふ、これはヴィータのために特注で作ってもらったんやでー。気に入ったんなら、どんどん飲んでなー」

「おう、ありがとうなはやてー」

本当にその味が気に入ったのだろう。ヴィータはあつと言う間にグラスを空にすると、すぐにおかわりを要求していった。

そんなヴィータの様子を見て、はやてはにやりと口元を歪めていくのだった。

ゲンナリとゲツソリと

「えっと、ここでいいのか。っていうか、随分とすごい店だな。ちゃんとした服って管理局の制服しかなかったけどいいのかな」

目の前の高級な作りの店を見て、カイズは思わず尻込みしてしま
う。

カイズがはやてから初めにメールを受け取ったのは、かれこれ三時
間ほど前のことだ。

『今日のうちとなのはちゃんと飲みに行こうと思ってるんやけどいい
かな?』

もちろん駄目だと断るわけもなく、カイズはその用件を了承した。
最近はずっと自分と一緒にいるし、何より今はうちで暮らしているの
だ。久しぶりに家族や同僚との触れあいはあるべきだ。

そしてこのメールが来たのが三十分ぐらい前のことだ。

「……………助けてカイズ君って。いったい何があったんだ」

AAA+からSクラスが三人揃っているのだ。当然戦闘的な何か
ではないはずだ。いや、仮にそんなピンチだとしたら自分ではなく
フェイトやシグナムにまず連絡がいくはずである。

「だけど冗談で送ってるようにも見えないんだよな。とにかく中
入ってみるか。えっと、すみませーん」

カイズは入り口の執事に声をかけると、そのまま店内へと案内され
た。

赤い絨毯を歩き、一つの部屋の前にたつ。執事はその場で一礼する
と、その場から離れていく。

カイズは少し戸惑いながらも、その扉をノックした。

「えっと、カイズです。いまつきましたけどー」

そう声をあげるが、中からは何の反応もない。どうしたのだろう
と、カイズは扉に耳を傾ける。

すると、防音された扉を越えて小さいながらも声が聞こえてきた。

『あはははは、でよーでよー、それですごいでー』

「この声はヴィータさん。…………でもすごいテンションが高いような」

だが彼女の声を聞き間違えるわけがない。きつと話に華が咲きこちらの声が届かないのだろう。

「しつれいしまーす」

カイズは扉を開けると、そつと中をのぞき込む。

そこで彼がみたのは、顔を真っ赤に染めながらグラスを片手にご機嫌なヴィータの姿。そしてゲンナリと、そしてゲツソリとした顔なのはとはやての姿だった。

ヴィータはグラスの中身を飲み干すと、大口を開けなのはの肩を叩いた。

「それでよー、それでよー。すげー反応が可愛いんだぜ。先つちよのほうをチュってすると、うって我慢するような顔してよー」

「そ、そうなんだねー」

「それにはやて知ってるかー。もう初めての時ってすごく痛くてよー。でも手を握ってもらえると、何だか頑張れたんだー」

「う、うん。……ヴィータ、その会話もう三回目やで」

「あはははー、そうだっけー」

親代わりのはやてや、一応直属の上司であるなのはに気を使うことなく、大笑いをしながら二人の背中をバンバンと叩く。

「いったいこれはどういうことなのだろうか。カイズは未だに部屋に入っつていいのか、どうなのか悩んでいると、虚ろな目をしたはやてと目があつた。

「カ、カイズくん、き、来てくれたんだ」

「い、いったいこれはどういう状況なんですか。何だかヴィータさんが暴れてるみたいですけど」

「確かにヴィータは暴れてるけど、呆れたり怒らないであげてなー。

元は言えば全部私らのせいやから。……だからこの状況もうちらの罰なんやけど。——さすがに生娘にはこれ以上辛くてな」

「えっ、最後のほう何て言いました」

「な、何でもないよー。と、とにかくヴィータを回収してもらえるとありがた」

「あー、カイズだー。うふふー」

ヴィータは太陽のような笑みを浮かべると、両腕を広げトコトコとこちらにやってくる。

そしてなのはやはやてが見ていることなどお構いなしに、そのまま抱きしめてきた。

「えへへー」

「ヴィ、ヴィータさん。二人、二人とも見てますよ」

「別にいいじゃんかよー。あたしは今抱きつきたいからだからよー。……それともカイズはあたしと抱き合うのが嫌なのか」

「そ、そんなわけありませんよー！」

「だったら、どうしてギューつとしないんだよー」

なー、なーと言いながら、ヴィータは体を擦り寄せてくる。無邪気な子悪魔の攻撃に、カイズの理性が悲鳴を上げる。だがこのまま抱きしめられるわけがない。

今この場には彼女の同僚。そして言ってしまうえば彼女の親が目の前にいるのだ。

カイズが困ったように二人に視線を向ける。すると二人はフィツと彼から視線を逸らしていった。

(抱きしめろってことですか！)

私たちは何も見てません。二人はその態度を見せると、完全に逃げ場がなくなってしまう。

「そ、それじゃあ……………」

これは本能に負けたのではない。あくまで、こうするしかなくて仕方なく抱きしめたのだ。

カイズは勝手に自分の中で言い訳を述べる。

「あつ、ふわっ」

「ど、どうしたんですかヴィータさん」

「んーんー、やっぱりカイズに抱きしめられると大好きだなーって。そう思っただけー」

「!!」

何だ、今この目の前にいる可愛い生き物はいったい誰なんだ。

いや、ヴィータさんは元々究極完全体グレート可愛いとしてもだ。

この様子は明らかに常軌を逸している。

ヴィータを抱きしめながらも、カイズは再び二人に視線を送る。だが二人は両手をあわせ、ただ頭を下げるだけだった。

ただ直接の原因はヴィータから漂うアルコールの匂いで何となくわかった。そして二人が謝っているということは、ここまでヴィータを酔わせたのは二人なのだろう。

だけど二人がギブアップするほど、ヴィータさんが何をしたんだ？ 酔っぱらって背中を叩くにしても、それは大した威力ではないだろう。そうなる、二人が虚ろな目になりながら助けを呼ぶ理由がよくわからなかった。

「……………」

「……………」

そういえばなぜか二人は先ほどから、自分の下の方ばかりを見ている気がする。それも顔を真っ赤にしなから。

この行動に答えがあるのだろうか。とにかくこれからどうすればいいのか。困り果てた三人は互いに視線を向かい合わせる。

するとなのはやてを見ている姿を見て、ヴィータは「むうー」と頬を膨らませた。

「なあー、カイズ。どうして二人のことばかり見てるだよー」

「い、いえ、この行動には特に深い意味はなくてですね」

「ぶー、だったらいいよーだ。こっちはこっちで勝手にやってるからよー」

ヴィータはカイズを抱きしめていた手を離すと、そのまま腰のベルトを掴んだ。ガチャガチャと手慣れた手つきでそれをはずすと、カイズは慌てたようにその両手を止める。

「な、なにしようとしてるんですかヴィータさんっ!!」

「なにつて、カイズの大好きなやつだよー。ごめんなー、まだあたしが痛がつて次ができなくて。で、でもカイズのためにできることは一生懸命頑張るからな!」

「いや、こんなところで頑張らないでくださいよ!!」

流されるにしてもあまりにも時も場所も駄目すぎる。最悪店側か

ら訴えられてもおかしくない状況だ。

「なのはさん、はやてさーん、つて、二人とも逃げようとしなくてくださいよー!」

「あ、あはははー」

そろりそろりと、逃げだそうとしていた二人を引き留める。そんなカイズの姿を見ると、ヴィータは再び頬を膨らませた。

「また二人のことばかり。もう本当に勝手にするからなー」

「だから勝手にしたらいろいろというか、完全に駄目ですつてー!」

カイズは降ろされそうになるズボンを何とか押さえつける。

「ヴィーター、とにかく一回落ち着こうな」

「私たちが悪かったからね、ヴィータちゃん」

二人はあの手この手で、ヴィータをなだめていく。

かくして真実を知らないまま問題の渦に巻き込まれたカイズは、その流れに逆らいあらがい続けいくのだった。



「いや、だからこじやまずいですつて! はっ、あ、朝か……」

窓から差し込む朝日に、いま見ていたことが夢だとわかる。だが昨日の夜に起きてたことは紛れもない事実だ。

あのあとは大変だった。とにかく全力でヴィータを宥めて、ご機嫌をとって。ヴィーターランキングTOP3がこぞいにこぞつて、何とか眠りにつくまであやすことに成功したのだ。

力の限り周りに迷惑をかけたヴィータだが、彼女が寝たあとも、カイズが家に帰ったあとも『ヴィータちゃんは悪くないの。調子に乗ってお酒を勧めすぎた私たちのせいなの』となのはやはやてからメールが届いていた。

やはり二人としては、こんなことでヴィータの評価を落として欲しくないと思っっているのだろう。

「まあもちろんそんなことないんだけどな」

なんと言ってもヴィータのことが大好きな三人なのだ。彼女のことを好きになることはあっても、嫌いになることなどあるわけがなかった。

「ん、んにゅー」

「あつ、ヴィータさん起こしちゃいましたか」

今日は休日なので、自然と起きるまでは待つていようと思つていた。こういつたとき、同じベッドに寝ていると不便だと感じる。

「んんー、ふわあー」

ヴィータは大きな欠伸をすると、寝ぼけ眼であたりを見る。そしてカイズの顔を見ると、ペアッと明るい笑みを見せた。

「おはようー、お兄ちゃん」

「はい、おはようございませすヴィータさ、んん？」

何だろう。今ものすごい違和感を感じたような。

カイズは大きく目を見開くと、口を半開きにしながら質問する。

「え、えつと。……………ヴィータさん、寝ぼけてます？ それとも二日酔いとか」

「うん？ 酔うつてなーに？？ あー、あと前にも言ったけど、ヴィータはヴィータさんじゃないよー」

ふざけている様子はない。そしてこの状態には覚えある。

カイズは口をひくひくさせながら、今度はこう質問した。

「そ、それじゃあヴィータちゃんは何歳かな」

「ヴィータは八歳です。えへへー、ヴィータ自分の歳ちゃんと言えるんだよー」

あの時から三歳ほど年齢が増えたようだ。

ほめてほめてーと頭を近づけるヴィータ。

そんな彼女の頭を優しく撫でながら、カイズは思ったのだった。

これは、大変なことになったぞ。

次回へ続きます

どうして俺は？

「ねえーおにーちゃん、まだできないのー」

「まだ今作り始めたばかりだからね」

「ねえー、ヴィータもお兄ちゃんと一緒にお料理したいよー」

「火を使ってるから駄目だよ。すぐにできるから待っててね。ヴィータちゃんはいいい子だから待ってられるよね」

「うんっ！ ヴィータいい子だから待ってられるよ!!」

カイズはキッチンで料理をしながら、ホッと一息つく。普段のヴィータになら料理を手伝ってもらうことはある。

だが今のヴィータを火の元の近くに立たせるわけにはいかない。

「何ていつても、今はヴィータさんじゃなくて、ヴィータちゃんなんだもんな」

いったいどういった理由で人格が入れ替わったのかはわからない。シヤマルには少し前に連絡を入れておいたが、返信はしばらくあとになるだろう。

「よっと、これでいいかな」

カイズは卵焼きときつね色に焦がしたパンをお皿に置く。いつもの朝ご飯だが、これで今のヴィータは喜んでくれるだろうか。

カイズはお皿を三枚持つと、そのまま部屋に戻る。

「ヴィータちゃんお待たせ、って、えええ！ な、何してるの。というかどうして服着てないの!?!」

カイズが部屋に戻ると、そこにはピンク色の下着以外何もつけていないヴィータの姿があった。

カイズは視線のさまよわせながら、テーブルにお皿を置く。そしてヴィータの体にバスタオルをかけた。

「ま、前にも言ったよね。そうやって男の人の前で肌を露出しちゃだめだって!」

「だっておにーちゃん。ヴィータの着てた服すごくピタットしてて、すごく動き辛かったんだよー」

「ああ、そうか。昨日は管理局制服のまま寝ちゃったから。――――

「つてそういうことじゃなくてね。俺が言いたいのは」

——ピンポン。

カイズの説教を遮るように、玄関のチャイムが鳴る。ヴィータはその音を聞くと、目を輝かせ立ち上がる。

「はいはい、今行きますよー」

「行かないで、それは本当にやめて!!」

カイズはヴィータを抱き上げると、そのままベッドの上へと降ろしていく。カイズはすぐに走り出すと、居間と玄関のドアをロックする。

『荷物のお届けに参りましたー』

「はいはい、すぐにいきまーす」

配達員はやはり男の人だった。例え何があろうとも、ヴィータの裸は見せるわけにはいかない。

カイズはすぐにサインをすませると、荷物を受け取った。

「はあ、こんな朝から誰だろう。——あれ、はやてさんからだ」

超Speed便で送られたそれは、随分と大きなものだった。箱の大きさにいえば、それこそヴィータ一人ぐらいなら潜り込めるほどだ。

カイズはドアのロックをはずすと、その荷物を居間に置く。

「わあー、はやてからだー。中身は何だろうね」

「おかしいな。連絡したのはシャマルさんのはずなんだけど」

それにはやてさんは今日も仕事のはずだ。だがもしかしたらシャマルさんに話を聞いて、急いで解決策を持ってきてくれたのかもしれない。

カイズは箱に同封されていた手紙を手にとると、その中身を読んだ。

『拝啓 カイズ君。昨日は多大なご迷惑をかけてしまつてごめんな。二人の関係の深さは昨日これでもかというほど聞かせてもらいました。これは私となのはちゃんからのささやかな謝罪です。何かの時に使ってください 敬具』

そこで手紙は終わっている。どうやらこの荷物は昨日飲み会が終わったあとすぐに送られたものらしい。

ヴィータは箱の中身を見ると、キヤキヤと声を上げる。

「お兄ちゃんすごいよー。中にバッグとか帽子が入ってるー」

「何だか余計な気を使わせちゃったみたいだな。あとでお礼を言っておかないと」

「ねえーねえー、どうこのバッグと帽子。ヴィータに似合うかなー」

「ヴィータちゃんはその前にまずは服を、ブッフ!!」

目の前のヴィータを見た瞬間、その姿に思わず吹き出してしまっただがそれは仕方ないだろう。ヴィータは先ほどから下着以外何もつけていない。

そんな彼女は、赤い頑丈そうなバッグを背負っており、頭には全面にツバのついた黄色い帽子をかぶっていた。

「どうお兄ちゃん。ヴィータに似合うかなー」

送られてきた赤いバッグを自慢するように背中を向ける。だがバッグを見せると同時に、彼女の小さなお尻も見せつけられる形になり、思わず目を逸らしてしまう。

(な、何だろう。このバッグと帽子には全く見覚えがないんだけど。……ものすごくいけないことをしている気がする)

知識ではなく本能でそう感じる。というか、あの二人はこれを何の時に使えっというのだろう。

昨日ヴィータが二人に何を話したか詳しい内容は知らない。けど次に会うときは、きっと何とも言えない空気が漂うのだろうと確信する。

「ねえーねえー、お兄ちゃん。ヴィータ可愛い、可愛い?」

「と、とにかくまず服を着よう、服を。ほら、えーつと、できるだけ着心地のいい服、服はと」

カイズはクローゼットの中を探ると、ビニールがかけられた一着の服を見つける。そのドレスのようにひらひらのついた服は、ヴィータが一度だけ着たものだ。

(そういうえば、病院の屋上以来こういった服着てないよな)

ヴィータの夢の中に入り、再会した時のことだ。過去の自分よりも大人びた服を着ようとして、これは用意したものらしい。

普段から仕事詰めであり、なおかつ動きやすい服装を好むヴィータのなかでは数少ないかわいい系の服。カイズはそれを取り出すと、ヴィータに差し出した。

「と、とにかくこれを着て。あとその格好のままでご飯食べ始めないでええええ!!」

裸ランドセルでご飯を食べる姿は、もう何と言っていいかわからない背徳感があった。

カイズはヴィータをその場に立たせると、一から順に洋服を着せていくのだった。

ヴィータは着せてもらった服の感触を楽しむと、ワツとカイズに抱きついてきた。

「ねえー、お兄ちゃんちゅーしよー、ちゅー」

「ヴィ、ヴィータちゃん。いきなりどうしたの!？」

「どうもしないよー。ヴィータはお兄ちゃんちゅーがしたいからしよーと思ってるだけだよー」

ヴィータはその場で背伸びをすると、んつと唇を突き出す。だがカイズはそんな彼女の両肩を押さえると、いったん彼女を落ち着かせた。

「と、とにかくまずはご飯食べようか」

「ぶーっ、ちゅーしたいのに」

「それはまた今度でね」

やんわりとヴィータのキスを断ると、二人はテーブルの前に座る。だが御飯を食べようとした瞬間、カイズは何ともいえない違和感に襲われた。

(あれ、いま俺どうして……?)

そう思ってしまうが、あまりにも自然としたことなので理由が見つからない。きつと特に深い意味はないのだろうと、カイズは御飯を食べ始めるのだった。

ヴィータちゃんにはヴィータであってヴィータさんではない

朝ご飯を食べ終わると、二人は外出をすることになった。本当はヴィータがこんな状態だ。外にでるなどもつてのほかだとは思いますが、外に行くとヴィータが駄々をこねたのだ。

「だって映画のチケット今日まででしょう。早く行こうよー」

確かに今日のはじめからヴィータと映画にでかける予定だった。だがどうしてヴィータちゃんがそれを知っているのか。いや、元々ヴィータもヴィータちゃんも同じ一人の存在なのだ。情報を共有していても不思議はないだろう。

「……………きつと今度は誤魔化しきれないよな」

前回ヴィータちゃんがでてきたときは、八神家の機転と行動で何とか命を繋ぐことができた。

だが今回はその助けも望めそうにない。そしてすでに彼女が発狂するだけの行動は起こったあとなのだ。

「せめて命があるといいな」

カイズがそんなことを思っている間、左腕に抱きついたヴィータは嬉しそうに頬を擦り寄せていた。

「えへへー、えへへー」

「なんだかすごいご機嫌だね」

「だってー、初めてお兄ちゃんと一緒にお出かけできたんだもん。楽しいに決まってるよー。お兄ちゃんは嬉しくないの〜」

「い、いや、そんなことはないけど。……ないんだけど」

ないのだがこの気持ちは何なのだろうか。ヴィータと一緒にいられて、楽しい休日のはずなのに、どうにも乗り気になれていない自分がいる。

(それって、やっぱりこの視線のせいなのだろうか)

繁華街を歩く中、自分たちに向けられた好機の視線はとてつもないものである。何人もの戸惑いと好機の視線。そして極一部の羨望の

まなざしは、あまり居心地のいいものではなかった。

(でも、それだけなのか。……なんか、変な感じだな)

自分でもその違和感の理由がわからない。

ヴィータはカイズの顔を見上げると、にこりと笑みを浮かべる。カイズもそんなヴィータを見ると、小さく笑いかけるのだった。



公園のベンチで二人は肩を並べる。ヴィータは缶ジュースから口を離すと、勢いよく話し出した。

「映画すごかったね。ロボットがガアーってでてきて、怪獣がグアーって襲いかかってきてー」

「前評判はあまりよくなかったけど。うん、あれはいい意味で王道な話だったね」

「でも最後は二人とも無事でよかったねー」

ヴィータは先ほどから映画の感想をしきりに話している。映画はどの年齢層にもあいそうなものであり、逆に今のヴィータには好感がよかったようだ。

だがカイズはどこか遠くを見るような顔をしていた。なぜだろう。映画の内容は悪くなかった。ヴィータちゃんもご機嫌だ。なのにどうしてこんなにも気が晴れないのだろうか。

きっとこのヴィータちゃんの人格も、心配をするほどのものではないと思う。この人格がだからといって、脳に深刻な影響があるとか、そういう心配をしているわけではない。

だがどうしてか気持ちが落ち着かなかった。

「……………どうしたのにおにーちゃん?」

心配そうにヴィータが顔をのぞき込んでくる。カイズはそんな彼女を心配させないように、笑みを見せるがそれはどこか元気がなかった。

そんな二人の前に、青い制服の男性がやってきた。

「おほん。そこのお二人さん、今日は平日のはずだが、こんな昼間から公園でどうしたのかな」

「えっ、あ、これは……………」

いよいよ来たか。いや、いままでヴィータと一緒にいて、職質にあわなかったこと事態が奇跡に近いのだ。

ちらちらとカイズとヴィータを見る職員。カイズは管理局局員の証明書を出すと、そのまま言葉を続けた。

「ちよっといういろいろありまして、この子を預かってるんです。管理局の高町なのはさんか八神はやてさんに問い合わせてもらえばわかると思います」

何度もシミュレートしてきたことだ。カイズは教科書を読むようにすらすらと言葉を述べる。そんな彼を見て、制服の男も理解してくれたようだ。

だが隣にいるヴィータは違った。彼女は不機嫌そうに頬を膨らませる。

「ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんにとって、ヴィータって何なのかな」
「ヴィータちゃんはヴィータちゃんだと思うけど？」

「……………そういうことじゃなくてね。海の時みたいに言ってくれないの。ヴィータはお兄ちゃんの恋人だって」

「……………えっ?」

それは数ヶ月前のことだ。八神家の面々と海に出かけたときに、ヴィータは男性二人に絡まれたことがあった。

その二人に自分は親か親戚かと言われた。だがそのときに周りの目を気にすることなく『俺はヴィータさんの恋人だ!』と公言したのは記憶にも新しい。

だがいまはあの時と状況が違う。この見回りの人の前で、そんなことを公言したらそれこそお縄になりかねない。——いや、だがそれだと話が矛盾してしまう。

ヴィータが子供ではなく大人だということは、他の人間が証明してくれるのだ。なら、どうして彼女を子供として扱わなければいけなかったのか。

その瞬間、朝からずっとモヤモヤしていたものが少しずつ晴れていくのを感じた。

カイズは困ったように視線を漂わせる。ヴィータは俯きながら、弱々しい声をあげた。

「……ヴィータはお兄ちゃんの恋人だよね？」

その言葉には言葉の長さ以上の思いが込められている気がした。だが八歳時のいうことだ。適当に誤魔化すなり、その場で合わせるなりをすればいいはずだ。

いいはずなのだが。

カイズは一瞬、ありきたりな言葉で場を濁そうと思った。だがヴィータの真摯な瞳を見て、その心を改めた。

「……ごめん、ヴィータちゃんは俺の恋人じゃない」

「——！　だってヴィータはヴィータだよ」

「でもヴィータちゃんは言ったよね。ヴィータはヴィータさんじゃないって。多分、いや、つまりそういうことなんだと思うんだ」

そう言葉にした瞬間、ずっと胸の中であつて何かをとれたような気がした。

確かにいまのヴィータのことは放っておけない。だけど自分が会いたいののは、ここにいるヴィータちゃんではなく、ずっと自分の隣にいたヴィータさんなのだ。

「……ごめん、ヴィータちゃん」

「……うん。ちよつと残念だけど、でも安心したよ」

ヴィータがそう口にした瞬間、あたりの景色が突然真っ白になる。そこにはもう公園も制服姿の男性もいない。

本当になにもない空間に、カイズとヴィータは二人きりになってしまったのだ。

「これは、どういう……？」

「これはお兄ちゃんの夢の中なんだよ。って、突然言われても困っちゃうよね」

「夢の中って。えっ、ど、どういうことか全然わからないんだけど……」

「ヴィータもどういった理由かは全然わからないんだー。でもお兄ちゃんの夢への架け橋ができたから。だから最後にお兄ちゃんに会

いに行こうって思ったんだ」

「最後って、それってどういうこと？」

「……元々ヴィータは存在しないはずの人格なんだよ。だけどある日、元のヴィータが変な薬を飲んでね。その薬には自分の願望を形にする力があつたの。だからね、ヴィータが生まれただよ」

「願望を形につて。でもヴィータさんは何を望んだの」

まさか子供に戻りたいとは思わないだろう。ヴィータもまたカイズが何を言いたいのかわかったのだろう。

首を横に振ると、続きを口にした。

「元のヴィータは心の底ではこう願ってたんだよ。もっと素直に甘えたい。もっとお兄ちゃんと一緒にいたいってね。だからこそヴィータの人格はできあがったの。でもね、もうヴィータの人格は必要なくなっちゃったんだよ。だってもうヴィータは、ヴィータの力がなくてもお兄ちゃんに甘えられるんだもん」

「それは、確かに……………」

今朝のことを考えてもそうだ。今までずっと恥ずかしがっていたヴィータは、ここ最近かなり積極的になっている。

「で、でもだからってヴィータちゃんが消えることなんて」

「ううん、元々時間が早かったか遅かったかの問題だったんだよ。だから最後にお兄ちゃんに会いに来る決心もできた。——だからこそもうヴィータは安心できたんだよ」

「安心できたって、何が…………？」

自分がしたことといえば、ヴィータのためにヴィータちゃんを拒絶したことぐらいだ。それも彼女はこれから消えるのだ。これ以上酷い仕打ちなど存在しないだろう。

だがそんなカイズの手をヴィータはギュツと握ると、小さく首を横に振った。

「だってお兄ちゃんは誰よりもヴィータのことを愛してくれてるんだもの。ということとは、ヴィータが消えてもお兄ちゃんはずっとヴィータのそばにいてくれるってことだよ。ヴィータはそれが嬉しいんだよ」

「でも、だって、ヴィータちゃんの意識は消えちゃうんだよね」

「それでもお兄ちゃんやんはヴィータの側から絶対に離れないってわかったから。それだけで十分なんだよ」

「そん、な……………でも、だけど」

「だったら一つ約束して」

ヴィータはカイズの元に近づくと、その場でジャンプする。そして朝には届かなかった唇を彼のそれに押し当てると、ニコリと笑みを浮かべた。

「絶対ヴィータと幸せになつてね。そうしてくれないとヴィータ怒っちゃうからね」

それが最後の言葉のようだ。ヴィータは子供らしい笑みを浮かべると、その場からゆつくりと姿を消していく。

カイズは弾かれるように彼女に手を伸ばした。

一緒に行きましよう

「ヴィータちゃんっ!!」

そう手を伸ばした瞬間、突然見慣れた天井が目に映った。カイズは慌てたように辺りを見渡す。

「だ、大丈夫かカイズ？　っていうか、どんな夢を見てたんだ」

ベッドの横にはヴィータが座っていた。いったいいつの間に家に帰ってきたのだろうか。それよりもだ。

「ヴィ、ヴィータさんですよ。ここにるのはヴィータさんですよ」

「当たり前だろ。大丈夫か、何だかうなされてたみたいだけど」

「と、とりあえず大丈夫です。……えっと、どうして俺は家にいるんでしょうか？」

さつきまでのことが夢だとすると、昨日の夜からの記憶がすっぽり抜けてしまっていることになる。

ヴィータにその答えを求めると、彼女もまた困ったように頬を掻いた。

「それがあたしもよく覚えてねえんだよ。確かなのはとはやてと一緒に飲みに行ったはずだけど、そこからの記憶がなくて。……なんだか、二人とも随分と謝ってたみたいだけど、どうしたんだろう。記憶がないあたしたちが何かしたならわかるけど、二人ともほぼ素面だったよな」

「それはまあ。……いろいろあったんでしようね」

記憶にないのなら、ヴィータの暴走をわざわざ思い出させることはないだろう。

(やつぱりさつきまでのことは夢だったんだな)

ヴィータに言われたとおりだと理解する。だがそれと同時に、カイズは自分のすべきことを思い出すのだった。

「そういえばカイズ、今日は映画に行くんだよな。もうそろそろ出ないと間に合わ——」

「ヴィータさん！　俺はヴィータさんのことを愛しています!!」

「は、はひ!? い、いきなりどうしたんだよカイズ」

「ヴィータさん！ ヴィータさんは俺のこと好きですか？ 愛してま
すか？」

「そ、そんなこと今更聞くなよ。……カイズのことは大好きだよ。そ
の、愛してる……」

頬を赤く染めながらも、ハッキリとそう言葉にする。

カイズはその答えを聞くと、ヴィータの両手を力強く握りしめた。
「俺もです。俺もヴィータさんのことが大好きです。すぐにでも結婚
したいくらい、ほんとーに大好きです！ —— だからそのときが
来たらすぐに結婚式ができるように今のうち頑張つて起きたいんで
す!!」

「お、おう、それはいいんだけど。……それで今日はどうするんだ？」
先ほどからストレートな感情をぶつけるばかりで、いまいち具体例
が出てこない。

カイズはヴィータの手を離すとクローゼットの中身に手を伸ばす。
そして私服の中でも一番キチンとした服を選ぶと、再びヴィータの方
を見た。

「これからはやてさんちに行きます。それでキチンと伝えたいと思
います。おたくの娘さんを僕にくださいって」

「あー、なるほどなー。……ええっ!？」

あまりの衝撃に思わず流してしまいそうになる。きつと冗談か何
かだろうとヴィータは思う。いや、本当はそう思ったのだが、
カイズの目があまりにも本気すぎてそう言葉を出すこともできな
かった。

「休日を潰してしまつてすみません。いま出来ることはいましておき
たくて」

「そ、それはそうだけど。……でも早すぎないか」

プロポーズをされてまだ一週間も経たないのだ。はやてへの報告
はもう少し先でもいいとヴィータは思っていた。

だが薬指に輝く指輪を見て、その考えを思い直す。

「あー、でも元はと言えばあたしが指輪をつけてたから余計な心配か

けちゃったんだよな。何かしらあたしが言っていれば、昨日も記憶がなくなるようなことにならなかったわけだし」

「ヴィータさんは悪くありませんよ！」

「いや、悪い悪くないっていったらもうどっちも悪くないとは思うけど。……でもそうだな。カイズも一週間後には教導実習に行っちゃもうし。それが終わったら卒業試験を受けて、晴れて教官だしな。——よしっ！」

ヴィータはクローゼットの中から自身の洋服を漁る。そして病院の上で一度きり着た洋服を取り出すと、それに着替え始めた。

「だったら連絡してすぐに行こうぜ」

「……今更ですけど、いいんですか。こんな突然のことで」

ヴィータに断られても引く気はなかった。だがヴィータも思うところがあってもいいはずだ。

カイズがそう心配そうにヴィータを見るが、彼女はニツと白い歯を見せると明るい口調でこういった。

「あつたりまえだろ。あたしだってカイズと早く結婚したいんだ。だから早めに挨拶済ましちまおうぜ」

「——はいっ！」

カイズはそう元気に返事をする、洋服を着替え終える。

そして朝ご飯の準備をすると、キッチンに向かうのだった。

寂しい気持ち 嬉しい気持ち

いったいどうしてこんなことになったのだろうか。

八神はやては机を挟んで座っている二人を見て、そんなことを思っていた。

昨日と言えばヴィータにお酒を勧めて、酔った勢いで様々な話を聞いた。

それがすぎてしまい、いろいろと精神的ショックを負うことはあつた。だが今日はそんなショックも吹っ飛ばすほどの、出来事とが繰り広げられようとしている。

大切な話がある。その連絡がきたのは、つい一時間ほど前のことだ。

そして目の前に現れた二人は、ものすごい正装をしている。部屋着姿でいる自分が失礼なほどにだ。

(えっ、昨日の飲み会がキツカケでどうしたらこんなことになるんや) それとも元からそのつもりだったのだろうか。いや、確か今日は二人で映画に行く予定のはずだ。

それがどこをどうしたら、こんなことに。

先ほどからどうして、どうしてと考えが二重三重する。

「……………はやてさん。菓子折りです。受け取ってください」

高級そうな包みで装飾されたそれを、机の上に置かれる。はやては戸惑いながらも、それを受け取った。

ドツ、ドツ、ドツ、ドツ!!

いつかは、やがていつかはこんな日が来るのではないかと思っていた。だがそれが今日であると誰が思うだろうか。

「——それではやてさん！ 今日大切な話がありましたここまできました!!」

「は、はいっ!!」

えっ、えっ、もう言うの。よくドラマとかでいうあの台詞を言うってしまうの。

あたふたあたふたと、困ったように後ろを見るはやて。そんな彼女

に視線を向けられると、扉越しに見ていた八神家面々はスツと視線を逸らす。

カイズはその場で深々と頭を下げると、お腹の底から声を上げた。「先日僕はヴィータさんにプロポーズをしました。それに浮かれて報告が遅くなってしまいました。まだまだ僕は至らない点が多いと思います。ですがヴィータさんを思う心に偽りはありません」

「えっ、あ、うん。えっと、カイズ君？」

「だから今日はお許しを得に来ました。ヴィータさんを、お宅の娘さんを僕にください！」

カイズの告白の瞬間、蚊帳の外から様子を見ていた面々から「おおお」と声があがる。

頭を下げるカイズは真剣そのもの。それを固唾を飲んで見ているヴィータもまた、今まで見たことないほど真剣な眼差しだった。

だからこそ、はやては完全に置いてきぼりをくらってしまった。

(ま、まあカイズ君には世話になってるし、ヴィータもカイズ君のこと好きやから問題あらへんよな。だ、だけど、あんだだけドンちゃん騒ぎした翌日にこれって。……えっ、もしかしてこっちの弱みにつけ込んで今日来たってこと？ いやいや、さすがにカイズ君の性格的にそんなことはないと思うし。そうじゃなくて、今はこの状況をどうするかや)

ここまでの思考、わずかに一秒のことである。

(いいって言うべきやよね。いや、元から断る理由なんてあらへんけど、ちよ、ちよつと誰か助けてや)

顔では平静を装いながら、頭の中で悲鳴を上げる。

そんな主の姿を見て、ピンク色のポニーテールの女性が立ち上がる。彼女は三人の間に入ると、『コホン』とわざとらしくせき込んだ。「主も突然のことではか戸惑っているようだ。それにだ。こんな大事な話を予定の打ち合わせもなしにしてくるものどうかと思うぞ」

シグナムのその言葉にカイズはハツと顔を上げる。そして額からダラダラと汗が流れるのを見ると、相当テンパっているようだ。

見ている可哀想になるほど狼狽しているカイズを見て、はやてはと

りあえずとポンつと両手を叩いていった。

「と、とりあえずヴィータと少し話をさせてもらえないやろうか。近況もいろいろと聞きたいと思うし。なつ、カイズ君」

「……………は、はい。よろしくお願いします」

はやては『あととはよろしく』と守護騎士に念話を送る。そしてヴィータの手を握ると、そそくさと外に向かっていくのだった。



海岸につくと、石の階段に座っているヴィータの隣に座る。そして持っている飲み物を彼女に渡すと、苦笑いを浮かべた。

「ごめんなーヴィータ。なんや、いきなりでこつちの気持ちも整わなく。それにしてもどうして今日やったんや?」

「……………あたしにもわかんねえ。ただ夢見が悪かったのか、寝ているとき随分と苦しそうで。で、朝起きたらはやてに挨拶しにくってきかなくてよ」

「そ、そうなんやー。……………えつと、ヴィータ。もしかして機嫌悪い?」
「……………うーうん、べつにー」

そう否定するヴィータは、明らかに機嫌が悪そうだった。買っていた飲み物がよくなかったのだろうか。いや、ヴィータの好みは完全に把握しているのでそれはないだろう。

肩を並べての無言が重い。はやては困ったように右往左往してしまつと、ヴィータのほうが先に口を開いた。

「なあー、はやて。……………どうしてカイズのことすぐに許してくんないんだよ」

「……………えつ? でもそれはちよつと突然すぎてなんていうか」

「確かにいきなりだったかもしれないけどよ。だけどカイズはしっかりと考えて真剣な気持ちで今日ここに来たんだぞ。……………カイズの気持ちも少しわかってくれよな」

ヴィータは不機嫌そうに言うつと、渡された飲み物を飲んでいく。だがそんな彼女とは違い、はやては今のヴィータを見て、驚いたように

目を見開いていた。

思えばヴィータとは長いつき合いだ。闇の書事件の際に家族となり、誰よりも自分と一緒の時間を過ごした。

病院の送り向かえ。お風呂。寝るときなども一緒のベッドで寝ることが多かった。

そんな生活は管理局に入り少しは変化した。だがヴィータは誰よりも自分のことを慕っており、人の目は気にするようになったが甘える姿は昔のままだった。

そのヴィータが自分の行動に対し、不満を述べている。思えばそれは人生で初めての経験かもしれない。

そういえばとはやてはヴィータの姿を見た。ヴィータは昔から可愛らしい格好が嫌いだった。動きやすさを優先していると言っていたが、心のどこかでそんな服は自分には似合わないと思っていたのだろう。

だが今はどうだろうか。膝下のドレスのような服。髪の毛は三つ編みではなく、ストレートにしている。

自分の知らないヴィータの姿を見て、はやてはほんの少し気落ちする。自分の出せなかったヴィータが目の前にいるからだ。

だがそれ以上にはやては感謝していた。自分が出せなかったヴィータが目の前にいるからだ。

きっと親の寂しさとはこういうことを言うのだろう。

だが自分が寂しいと思うよりも、彼女にはもつといっぱい幸せになつてほしい。

その想いに偽りなどあるはずがなかった。

はやては缶コーヒを一気に飲み干す。そしてコトンと缶を階段に置くと柔らかい声でヴィータに訪ねた。

「ねっ、ヴィータ。ヴィータはいま幸せかな」

「……………うん。いや、今までの時間だってあたしは十分に幸せだったよ。みんなとワイワイ楽しんで、どこに行くにも寂しさを感じる時なんてなかった。それだけでもあたしは十二分に幸せだと思ってた」
「だけど今はちよつと違うんやね」

「……うん。はやてやなのはといるのはもちろん楽しいし、嬉しい。けどあいつは。カイズだけは何かが違うんだ。何だろう、うまく言葉にできないけど。それでもあたしにとって本当に特別な存在で、それで、だから」

「大丈夫やー。ヴィータの気持ちは、もうしっかり届いてるから」

はやてが両腕を広げると、ヴィータはその手にギュツと包まれていく。はやてはヴィータとのこれまでを思い出しながら、彼女の髪の毛を撫でていった。

「ヴィータ。しっかりと幸せになるんやで」

「………うん」

二人はしばらくそのまま動くことはなかった。

だが今の二人には言葉も行動も必要ない。ただ温かな時間が過ぎるのを、二人は感じ続けていくのだった。



「というわけで、カイズ君。うちの。うちの娘をどうぞよろしゅうお願いします」

そう頭を下げるはやては、一切ふざけてはいなかった。

様々な覚悟を決めたその姿勢に、カイズもまた頭を下げていった。

「絶対に、絶対に幸せにしますー！」

長い間二人は頭を下げると、同時に面を上げる。カイズは上体を起こすと、そのまま尻餅をついていった。

「ど、どうしたんだカイズ」

「い、いや。シグナムさんに怒られて、もしかして、もしかしてって考えてたらずつと緊張がほぐれなくて。——しよーじき、待ってある間生きた心地がしませんでした」

「全く、どこまでも真面目な奴だよなおまえは」

だがそんな彼こそが、ヴィータが好きになったカイズという男なのだ。

はやてはそんな仲むつましい二人の姿を見ると、安心したように肩の荷を降ろしていった。

「それじゃあ今日は一緒に御飯を食べようかー。それでみんなと一緒に考えていこうか。ヴィータとカイズ君の結婚式やその他もろもろについて」

「はい、よろしくお願いしますはやてさん」

「はやてありがとうなー」

二人は顔を見合わせると、笑みをこぼす。

(安心してな。必ず最高の結婚式にしてみせるからなー)

はやては、そして八神家のみなは声に出さなくとも、念話を交わすことなくとも、皆そう決心していった。

カイズ君が教導官になるまであと少し。これは忙しくなりそうやね。

忙しくなりそうといいながらも、未来のことを思うと心は元気だ。

まあまずは、二人においしい料理を作ってあげよう。

はやてはそう思うと、袖を捲りキッチンに向かつていくのだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない15 たとえ貴方が忘れてしまっても
愛してますよ

「ふふーん、ふんふふーん♪」

赤い三つ編みの、どこからどうみても小学生くらいの少女は、鼻歌を口ずさみながら局の廊下を歩いている。

なのはは彼女の三つ編みが嬉しそうに上下してる姿を見つけると、後ろから声をかける。

「どうしたのヴィータちゃん？ 何だかご機嫌みたいだけど」

「おっ、なのはか。えへへ、そんなに嬉しそうに見えるか」

「う、うん。それはもうかなり見えるけど」

「そうかー、そうだよなー」

ヴィータは両頬に手を添えると、嬉しそうにハニカむ。未だかつて見たことないヴィータの様子に、なのは「うーん」と顎に手を添えた。

「……熱があるわけじゃないよね」

「そんなわけねえだろ。今日だってすっかり教導こなしてきたんだからよ」

「ああ。それじゃあカイズ君関連のことかな」

「なっ!? 何でそれがわかったんだ!!」

「あ、あははは……」

それ以外にここまで浮かれることもないだろうに。なのはは苦笑いしたまま、ヴィータの隣に歩み寄る。そして少し先の自販機を指さした。

「じゃあちよっと座ろうか」

「お、おう」

ヴィータはどうしてなのはに自分の考えがバレたのか未だ思い悩んでいる。なのははそんな彼女に呆れることなく、うまくいつているようによりだと彼女の分のココアも購入した。

「おっ、さんきゆうな。えっと、金は」

「ああ、いいってこれくらい。それでこれからカイズ君と何かあるの？ それとも何かあったの?？」

「そ、それがよ。その、えっと、あのよ」

ヴィータは紙コップを股の間に挟むと、恥ずかしそうに兩人差し指を突つつき合う。そして頬を赤くすると、上目づかいでなのはを見る。

「い、いよいよもうすぐなんだよ」

「ん、なにが?」

「そ、その。——カイズの最終教導試験の結果がもう少しででるんだ」

ヴィータはそう言うと、ギューツと目を閉じる。なのははそんなヴィータの様子を見て、頭に『?』を浮かべた。

「う、うん。それは嬉しいと思うけど。……どうしてそんなに恥ずかしがってるの」

「そ、それはそうなんだよけどよ……」

「んん?」

何がなんだかわからないとなのはは、二つ三つと『?』を追加する。しかしわかるわけがないのだ。カイズが教導官になるということはつまり。

ヴィータは紙コップを手にとると、ココアを一口の飲む。そしてそれを椅子に置くと、なのはの耳元に小さな唇を近づけた。

「こ、これはまだはやて達が内密に準備してるだけだな。万が一落ちてるなんてことがあるとあれだし」

「う、うん。それで」

「……それがよ」

ごによごによごによと決して周りに聞こえないように、小さな声でなのはに話す。

その言葉を聞き続けると、なのはは徐々に目を見開いていった。

「ヴィ、ヴィータちゃん。それってつまり、カイズ君が教導官になったら、けっ——」

「でかい、声がでかいぞなのは!」

「えっ、あつ、うん。……すーはー、すーはー」

何度も何度も深呼吸をすると、気持ちを落ち着かせる。なのはは周りに誰もいないことを確認すると、小さな声でヴィータに話しかける。

「そ、それでそんなに嬉しそうだったんだね」

「べ、別にそれだけじゃねえぞ。あいつが教導官になるのは純粋に嬉しいしな」

「あつ、そういえば教導試験のほうはどうなの？」

「おお、ほぼ合格間違いなだと思う。まあ年が若いからか、実習とかは随分苦労してたみたいだけど、勉強の面ではかなり努力してたからな」

「発表は明後日だっけ」

「おう。それで合格してたらそのまま結婚式の準備をする予定なんだ」

「ふーん、結婚か。いいなーヴィータちゃん。すごく幸せそうで」

「……………あたし自身が一番驚いているけどな」

ヴィータの頬から赤みが抜ける。彼女はココアに口を付けると、伏せ目がちになった。

「ただの一介のプログラマーだったあたしがこうして普通に生活して。大切な仲間もたくさんできて。こんなちんちくりんな体なのに、好きになってくれる奴がいて。幸せすぎてどうかしちまいそうだ」

「それはヴィータちゃんが一生懸命全部頑張ったからだよ。闇の書事件もそう、六課時代の時も、その後のあの事件の時だつて……。それを考えたらこうしてられるだけで私も十分幸せなんだけどね」

なのはは胸ポケットにしまっている紅いデバイスを取り出す。彼女の相棒である赤いデバイスとは違うそれは、もう二度と動くことはない。だがなのははお守りのようにそれをずっと持ち歩いてきた。

「そういうえば最近顔見てねえけど、子供は元気なのか」

「うん。何の問題もなく、すくすく成長してるよ。もうヴィータちゃんの背に追いついちゃうかな」

「それじゃあお姉さんでできるまでに一度会いにいかねえとなー」

「大丈夫だよ。私の子供は背で人を判断したりしないからねー」
「素晴らしいながら、あたしの髪の毛ぐりぐりするなよ！」

なのははいつまで経っても自分のことを子供扱いする。だが今日のそれは緊張している自分を解してくれているのだと、甘んじて受けることにした。



二日後の午後。ヴィータは教導の資料をまとめながら、何度も机に置いたデバイスを見ていた。

ううー、もうそろそろ発表の時間だよな。

カイズのことだ。きつと発表時間ぴったりに行っているに違いはない。ヴィータは今か今かとそわそわとデバイスを見つめる。

『ブー、ブー』

「———！」

マナーモードのデバイスが震える。ヴィータはすぐに手に取ると、早歩きで廊下にでた。

「もしもしー！」

『ヴィ、ヴィータさん。ヴィータさんですよね！』

「あたしのデバイスなんだから、あたしに決まってるだろ。そ、それで結果はどうだったんだカイズ」

きつと合格に違いない。実技の様子とテストの手応えからそれは間違いないと、ヴィータは確信している。

だがそれでも結果が出るまでは何が起こるかわからない。ヴィータはゴクリと唾を飲み込むと、カイズの言葉を待つ。

『や、やってしまいました』

「やっちまったってなにをだよー！」

『不詳な自分ですが。……見事に合格してしまいました!!』

「お、脅かすんじゃないやねえよおおおお！———あ、な、何でもありません」

事務室の視線が一斉に集まるのを感じると、ヴィータは深々と頭を

下げる。ヴィータはさらに廊下の奥に向かうと、デバイスを持ち直した。

『ど、どうしたんですかヴィータさん』

「お前があんまりため込むからだろ！」

『だ、だってまだ合格できた実感が湧かなくて。な、何かの間違いかもしれないって』

「そんなことねえよ。カイズはちゃんと合格してる。あたしが言うんだから間違いねえよ」

『———そ、そうですね。そうですね！』

ヴィータに太鼓判を押ししてもらい、ようやくカイズの声に喜びの色が見える。

カイズはどうにも自分を小さく見る傾向がある。確かに一時期は実技に手を焼いていたが、それもヴィータお手製のデバイスである程度解決ができた。そしてこと筆記試験に置いては、何も心配がないほどだ。

とりあえずよかった。ヴィータはほっと胸をなで下ろす。

「改めて、おめでとうなカイズ」

『ありがとうございます。それもこれもヴィータさんに一生懸命指導してもらったおかげです』

「別にお世辞なんていらねえよ。ここまで頑張ったのはお前が頑張ったからだよ」

『だったら頑張れたのはヴィータさんがいてくれたからです。だから全部ヴィータさんのおかげなんですよ』

「お、おう。まあ、ありがとうございます。……って逆だろ逆。ああああ、とにかく今日は盛大にお祝いするぞ！」

『そうですね。これで心おきなく結婚式の買い物もできますしね』

「けっ、結婚か。そ、そうだな……」

『えっ、あっ！………はい』

結婚という単語。互いにそれを意識してしまうと、何とも言えない空気が流れる。

「と、とにかくまずは昼食べてからだな。カイズはまだ食べてねえよ

な」

『合格発表見るまで食欲なくて。そうすると集合場所はどうしまし
うか』

「試験会場の途中に繁華街があったよな。そこらへんでいいんじゃない
か。今日は平日だしそこまでこんでねえだろうし」

『そうですね。それじゃあ繁華街の真ん中の辺りに噴水があるんで、
そこで集合にしましょうか』

「おう、わかった。まだ仕事が終わってねえから、少し遅くなるからあ
れだったら先に店に入ってて——」

『大丈夫ですよ。何時になってもずっと待ってますから』「お、おう」
電話越しにでも感じる事ができるカイズの真っ直ぐな好意に、

ヴィータはむずがゆい気持ちになる。

ヴィータは「こほん」と心を落ち着かせると、年上としての威厳を
何とか保とうとする。

「そ、それじゃあまた後でな」

『はい。あつ、そうだヴィータさん』

「ん？」

『——愛してますよ』

「ひゃっ!? お、お前いきなりなにを」

『それじゃあまたあとで。近くに來たらまた連絡ください』

一方的に愛の告白をされると、電話が切られる。ヴィータは震える
手でデバイスを何とか握りしめると、力が抜けたように壁に背を預け
た。

「な、なんだよ。なんだよあいつ、自分が言いたいことだけ言って、
さっさと切りやがって。……くそ」

ヴィータはデバイスを握りしめると、カイズの写真を表示する。そ
して何も言わないそれに向かって、小さく、本当に小さくつぶやいた。
「……………あたしだって愛してるよ」

そう言った瞬間、ヴィータはものすごい勢いで左右を見渡す。今の
会話を聞いていたものは誰もいない。それだけわかると、気合いを入
れ直した。

「ぎーって、それじゃあちやっちやと仕事終わらせて会いに行くとするかー」

ヴェータは心の中で「おー」と手を挙げると、事務室に戻る。

幸せを疑うことのなかったこのときこの瞬間。

それはこの後の事件が起こる一時間前のことであった。

何よりも正しい間違い

「さて、まあ思った以上に時間ができたな」

カイズは噴水前につくと、腕時計を見る。どんなに早くてもヴィータが着くまであと三十分以上ある。

「まあヴィータさんのことを考えてれば三十分なんてあつと言う間か。……それにしてもこの半年、本当にいろいろあつたよな」

カイズはデバイスを起動させると、ヴィータの写真を表示する。そして写真の彼女に柔らかい笑みを向けた。

高等部時代にヴィータさんのこと思い出して。ずっと勉強ばかりだったくせに、死ぬ気で体鍛えて。

何とか補欠で管理局に受かつて。それで何の運命かヴィータさんの教導を受けられて、それで恋人同士にもなった。

「ヴィータさんにはデバイスを作ってもらったり、教導の勉強なんかも付きつきりで見てもらったりしてたよな。……ほんと、昔の俺じゃ考えられないよな」

昔の自分を卑下するわけではない。あの頃はあの頃で目指している道はあつたし、その信念は本物だった。

ただまあ女癖は直つてよかつたとは思う。

「一年ちよつと前の俺が見たらきつと信じられないんだろうな」

こんな一人の女性を愛することがあるなど、あの頃の自分は思っていないかつた。医者になる夢が一番優先だったというのも要因ではあるが、女性とはずつと上つ面で付き合っていたと今なら思えるほどだ。

「頭でつかちな俺が、体を酷使して今やひよっこ教導員か。……んー、早くヴィータさんに会いたいな」

今が幸せすぎるからか、心に渦巻く漠然とした不安が少し嫌な気分だった。

だがヴィータの顔を見ればそんな気持ちも一発で晴れるはずだ。そんな現金な自分の未来を想いながら、カイズはゆつくりと目を閉じた。

——ヒュ、ゴゴツ！

だがその瞬間に耳元に届く衝撃音に、すぐに目を見開く。カイズはその場からすぐに離れると、今まで彼のいた場所に、噴水の残骸が滑り落ちてきた。

「き、きやあああああああつー！」

女性の叫び声とともに、恐怖が繁華街を支配する。いったい何が起きたのか、カイズはデバイスを臨戦態勢にすると、両手に二振りの刀を握りしめた。

「な、なんだ。何があつたんだ！」

残骸の煙が徐々に薄くなる。カイズはしっかりと目を凝らすと、そこには見たことのある見慣れない姿の女性が立っていた。

『……………』

無言のまま立ちすくんでいる全身紫のボディースーツの女性。両手には三本ずつ鋭く長い爪がついており、こちらを見つめる瞳に、光は宿っていないかった。

まさかあの姿は。カイズがそう思うと同時に、イノセントハートは目の前の人物の情報を表示した。

『識別ナンバーは不明。しかし容姿から、スカリエツテイ作のナンバーズである可能性が大了』

「やっぱりそうだよな。俺も資料で見たことがある」

ナンバーズと言えば、ヴィータやなのはが決心想いで戦い抜いた敵である。単機でも強力な力を有しており、六課で鍛え上げられたフォワード陣と渡り合えるほどだ。

軽く見積もってAAクラス。下手をすればAAAクラスほどの力量を持つ敵がいったいどうして。

『マスター、バリアジャケットの生成を』

「わっ、わかった！」

突然のことに頭が混乱しているカイズを相棒が落ち着かせる。カイズは局員特有の魔導師ジャケットとは違う特注のそれで身を包むと、両手の剣を握りしめる。

目の前の戦闘機人はまるでそれを待っていたように、にやりと口元

をゆるめた。

『私は示さなければいけない。戦える。私は誰よりも戦えるとスカリエッティ様に証明する』

「何を言ってるんだ。スカリエッティはもう牢屋の中だ。もうゆりかご事件は終わったんだよ」

『証明、証明する！』

カイズの言葉など届いていない。戦闘機人は噴水の瓦礫を踏み抜くと、一気に接近を仕掛ける。

『正当防衛です。近接パターン4、5を想定して仕掛けてください』
「了解！」

カイズは二股のデバイスを前方に構えると、小型の魔弾を二発放つ。避けようが弾こうが構わない。とにかく隙を作るために放たれた攻撃だ。——だが。

「くっ、冗談だろ。そのまま受けやがった」

『……………！』

戦闘機人は避けることも弾くこともせず、攻撃をその身に受ける。しかも速度は落ちることなく、ダメージの素振りも見せなかった。

——ブンッ！

空気を裂きながら、爪がカイズの首を狙い降ろされる。だが魔弾により、ほんのコンマ数秒の遅れにより文字通り首の皮一枚でそれを避ける。

あと半歩踏み込まれていたら。あとほんの少し反応が遅れていたら。きっと自分はもうこの世にはいなかった。

今まで感じることのなかった圧倒的死の予感に、足が震え出す。教導とは違う。夢の中のデスイーターとも、元から殺すつもりなどなかったシスンとも決定的に違う。

一つでも間違ったら次の瞬間にはこの世にいない。

これがカイズの感じたことのない実戦の空気であった。

「ど、どうすればいいんだよ。こんなどうしようもない敵……………」

『力の差は歴然です。今の攻防だけでマスターの勝率は0.6パーセントだと判断されました』

「はは。百回やっても一回も勝てないかもってことか」

『その通りです』

淡々と確率と計算を述べる愛機にカイズは感謝する。ここで下手な希望を出されでもして、犬死にしてもしようがない。

自分にできることを見謝らない。勇気と無謀は違うのだ。

「この場から逃げれる可能性は」

『マスターと私の技能をフルに生かせば76パーセント可能です。その間に管理局の助けもくるでしょう』

「よし、なら」

カイズは辺りを見渡すと、脱出ルートを探る。だがすぐに視界に映る人々を見て、考えを改めた。

「その場合、繁華街の被害はどうなる」

『敵は強者を求めています。こちらが武装をするまで微動だにしないのがその証拠でしょう。私の計算では84パーセントの確率で被害は最小で済むはずですよ』

84パーセント。一見してその数字は高く感じる。だがこれは計算の問題ではなく、人の生死がかかっているのだ。

「84パーセント。つまり16パーセントの確率で人が大怪我を負う可能性があるってことだよな」

『……………肯定です』

「そうか。……………そうだよな」

カイズは思い切り背筋を伸ばすと、大きく深呼吸をする。そして新しい式を愛機に投げかけた。

「……………俺がこのまま時間を稼ぐとしたら。どのくらいだ」

『倒す気でいかなければ、約32パーセントの確率で5分ほど稼げる予定です。しかし敵がナンバーズというなら、何かしらの固有スキルが存在するはずですよ。それが攻撃的ものなら、そのパーセントは12まで落ちます』

「五分稼ぐのに12パーセントか。……………くっくっく、はっはっはっは」

その確率はまさしく犬死にだ。普通に考えれば、今すぐ逃げ出すべ

きだ。

——だがカイズは両手の刀を力強く握り直す。

そして空に向かって叫び声をあげた。

「市民の皆様、これはイベントや撮影ではありません。歴とした事件です。今すぐ、この場から逃げてください！」

カイズの叫びが静まり返っていた空気に響きわたる。そして今起きていている現実を、周りの人間がようやく飲み込むと、その顔は完全に青ざめていった。

「う、うわああああああっ！」

「ギャアアアアアアアッ！」

男女様々の悲鳴が繁華街に響きわたる。休日を過ごしていたもの、店で働いていたもの、路上でパフォーマンスをしていたもの。誰一人関係なく、皆我先にと噴水から走り出していった。

カイズはその姿を見ると、目の前の戦闘機人をにら見つける。

「五分あれば人が逃げ出すには十分だ。……俺の選択は間違っているか相棒」

『間違っていると思います』

「はは、きつついな」

『……ですが何よりも正しいとも私は思います』

「そう言ってもらえてなによりだ。……いくぞイノセントハート！」
『了解しました。とにかく時間を稼ぎます。距離をとりつつ、パターンを同時に1、6、11、14、22を想定してください』

カイズは頭の中にある教科書を一気にめくり、戦術を頭にたたき込む。

するといつの間にか震えていた足はぴたりと止まっていた。

「ああ、そうだな。確かにヴィータさんの姿を追って、俺は管理局に入った。だけど決してそれだけじゃない。——俺が、あの時の俺を助けてくれたヴィータさんみたいに、助けを求めてる人を守りたいんだ！」

『——証明してみせる』

戦闘機人は両手の爪を構えると、カイズに再び接近を仕掛けていっ

た。

片翼の想い

管理局局員専属の病棟。その廊下をヴィータは全速力で走っていた。

「何だよ、何だよ、何でこんなことになったんだよ！」

息を切らしながら、不安で足を震わせながら。そして正体不明の敵との戦いで重体の怪我を負ったカイズの身を案じながら、ヴィータは一つの病室の扉を開けた。

「カイズッ！」

ヴィータは痛々しいほどの叫び声をあげる。すると頭に包帯を巻いた男性は、外を見ていた視線を彼女に向けた。

「あ、どもっす」

「あ、どもっすって。——カイズお前な——」

重体の怪我を負っていたが、命に別状がないことは電話で聞いていた。初めこそ本人が無事である姿を見るまでは安心できなかったが、その姿を見てようやくヴィータは一息つくことができた。

ヴィータは目に涙を浮かべながら、ベッドに近づく。

「お前無茶してるんじゃないやねえよ。こっちは心臓が止まるかと思ったんだぞ」

「ん、無茶って何のことだ？」

「そんなの決まって。……まあいいよ、とりあえず無事だったんだから」

「い、いや、そうじゃなくて。……ていうか、どうして俺こんなところで寝てるんだ？ それとお嬢ちゃんだれ？」

「——えっ？」

カイズの放った言葉に思わず耳を疑う。ヴィータははつと顔を上げると、カイズは訳が分からないと首を捻る。

「なに、言ってるんだよ。あ、あたしのこと、わからないのか？」

「えっと、クラスの誰かの妹だっけ。あー、そういえばエリナの家に行ったときに妹がいたような。いや、ユキ先輩の妹さんだっけ」

「な、はっ……」

「まあそれはどうでもいいか。とりあえずお嬢ちゃん、どうして俺がこんな大怪我負ってるか教えて欲しいんだけど」

「じよ、冗談だよな。あ、あたしが遅刻したから怒ってるだけだよな」
「遅刻ってなんの？」

イタズラで言っているわけではない。本当にわからないとカイズは言葉を述べる。ヴィータはガクガクと足が崩れ落ちそうなのを必死に我慢して、唇を震わせながら声をだす。

「デートだよ。だ、だって今日は結婚式の買い物行くなって約束じゃないか」

「結婚？俺とお嬢ちゃんが。——ぷっ、あっはっはっは、そりやないって。それじゃ俺、犯罪者じゃないか。それに嬢ちゃんには悪いけど俺は年上好みなんだよ。あと十年したらもう一度来てくれ」

本当に面白い冗談だと、カイズはずっと笑い声を上げ続ける。悪意なき悪意の言葉にヴィータはその場で膝をつく。そして必死に押さえ込んでいた涙が、先ほどとは違う意味でこぼれ落ちていった。

「あ、ああ、うわ、ああ」

「ヴィータちゃん！」

悲しみの悲鳴をあげようとしたその瞬間、なのはは病室に入るとヴィータを力強く抱きしめる。

「ヴィータちゃん、落ち着いて。お願いだから落ち着いて」

「な、なのは、あ、あたし……」

「ちゃんと理由があるの。だから、お願い」

「(コク、コク)」

ヴィータはこれ以上声をあげることができず、ただ頷くことしかできなかった。カイズは突然入ってきたなのはの姿を見ると、大きく目を見開いた。

「え、ええ、ええっ！ ま、ま、まさか高町なのはさんですか。ど、どうしてこんなところに。お、お、マジかよ。俺高町さんのめっちゃめっちゃファンで——」

「カイズ君」

「は、はい」

自身の名前を呼ばれて上半身だけ起立の姿勢になる。なのははそんな彼を見ると、射抜くような鋭い眼光で彼を睨みつけた。

「あなたの今の状態はよくわかってる。——でも少し黙ってて」

「……は、はい。す、すみません、俺何か怒らせるようなことでもしましたか」

「黙ってて!!」

「わ、わかりました!」

そうピシヤリと言い放つと、なのははヴィータを抱きしめたまま病室を出る。ヴィータなのはの腕の中からカイズを見る。だが彼が見ているのは自分ではない。恍惚の顔でなのはを見ているのがわかると、ヴィータはギョツと目を閉じた。



病室から離れた待合室のソファアに二人は座る。そして彼女はなのはの言葉を重複した。

「記憶喪失?」

「うん。正確には全部の記憶を失ってるわけじゃなくて、部分的な記憶を失ってるだけなんだけど。……今のカイズ君は、高等部の二年生までの記憶しか残ってないの。つまりまだヴィータちゃんのことを思い出す前の記憶しかないらしくて」

「ど、どうして、どうしてそんなことになったんだよ!」

「繁華街で戦闘機人が暴れたことは知ってるよね。……カイズ君は市民を逃がすために一人で立ち向かって。それでそのときに頭に大けがをしたらしいの」

「そ、そんな。な、何でだよ。何でカイズがそんなめに、それにどうして戦闘機人がまだ残ってるんだよ」

「……それについてはスカリエッティが話してくれた。ううん、正確には思い出してくれたっていうほうが正しいかな」

なのははデバイスの液晶を表示すると、繁華街で暴れていた戦闘機人のデータを映し出す。

「この戦闘機人は正確にはナンバーズじゃないの。ノーナンバーズ、つまりナンバーズの出来損ない扱いらしいんだ」

「ノーナンバーズって。そんなデータスカリエッティの研究所にはなかったはずだよな」

「だからこそ彼も忘れていたみたいね。……スカリエッティの意向で戦闘機人は限りなく人間に近い感情を持つように作られた。でもこの戦闘機人は一切の感情を持っていない。……いや、持っていないからこそ一っだけ感情を持つようになったの」

なのははデバイスに触れると、次のデータを表示する。

「このノーナンバーズは破棄される直前、意志を持って研究所から逃げ出した。ノーナンバーズの持った意志はただ一つ、自分たちが有用であることを証明すること。その証明のために今も戦い続けている」

とりあえず今わかることはここまでだと、デバイスを閉じる。ヴィータは俯いたまま呟くように声を出す。

「……それで今そいつはどこにいるんだ」

「それは今搜索中みたい。でもそんなに遠くに行つてないはず。つて、ヴィータちゃん。まさか」

「……そんなんじゃないよ。ただもう一度カイズの顔を見ようと思つてな」

「でも今のカイズ君は。あつ、そうだカイズ君と言えばこれ」

なのははその存在を思い出すと、ポケットにしまっていた黒い二股の小さな刀をヴィータに渡す。

それはヴィータがカイズにプレゼントしたデバイスの片割れだった。

「これは？」

「カイズ君が意識失う前に、これをヴィータちゃんに渡してくれつて被害者の子に言つたらしいの。本当は今すぐメンテナンスしたほうがいいんだけど、カイズ君が必死に頼み込んだみたいで」

「……そうか。ありがとな」

ヴィータはデバイスの片割れを胸ポケットに仕舞うと、ゆつくりと

立ち上がる。そして足取りがおぼつかないままに、ふらふらと廊下を歩いていた。

ずっと貴方を愛してる

だけど今のあいつに会ってあたしはどうしたいんだ。

カイズの病室に近づくにつれて、ヴィータの動悸はどんどんと早くなる。

悪気の一つもなく、自分自身に全く興味を示さない彼の態度。今まで好きだ、愛しているだと言われていたことがこんなにも幸せだとは思ってもいなかった。

いや。正確にはヴィータはそれを幸せだと理解はしていた。だがこんな形で奪われるなど、このときまで思ってもみなかったのだ。「もう一度カイズに会って。またあんなふうに言われたらあたしは……」

きつと涙を抑えることはできないだろう。ヴィータは病室の前で手を構えたまま、結局ノックをすることができなかった。

「——ちゃん。ヴィータお姉ちゃん」
「ん？」

誰かの呼ぶ声にヴィータは左右を見る。すると、ヴィータの姿を見て『お姉ちゃん』と呼ぶ小さな女の子がいた。

白い病衣をきた少女服の裾を引っ張ると、今にも泣きそうな顔でヴィータを見つめていた。

その子には見覚えがある。彼女は公園で男の子にちよっかいを出されていたミズホという少女だった。

「どうしたんだ。なんで病院なんか」

「ごめんなさい。ごめんなさい。お兄ちゃんにも、お姉ちゃんにも私いっぱいいっぱい助けてもらったのに。——私が、私がいたら。」

「——えっ？」

「だからお願い、お兄ちゃんを怒らないで。怒るんなら私を怒って。うっ、ぐすっ」

「お、おいおい、とりあえずここじゃなんだ。とにかくどつかいこうか」

「う、うん……」

ミズホの涙を見ていたら、いつの間にかヴィータの涙は引っ込んでいた。少女の手を取り移動してる間にも、彼女はただ「ごめんなさい」と謝り続けていた。



病室はとにかく静かだった。カイズはベッドに背を預けると、やることもなく天井を見上げていた。

「しっかし勉強道具ぐらい用意しておくべきだったな。受験まであと一年ぐらいしかないって言うのに、怪我なんてしてる場合じゃないんだけどな。……それにしてもまあ、静かな病室だな」

学生一人には不釣り合いなほど大きな個室は、どうにも自分にはあわなかった。

「しっかし、誰か一人ぐらい知り合いが見舞いにきてもいいとは思っけどな。それにサクヤの奴もこねえし。全く薄情な奴だな」

恋人すらこない状況にカイズは深くため息をつく。

そう思っていた時だ。病室の扉がノックされたのは。

「はいはい、いますよー」

「……わりい、入るぞ」

「あれ？ 君はさっきいた高町なのはさんの知り合いの人だよな！」

い、今高町さんはどうしてるかな」

「さーな。多分今頃対策会議でも開いてるじゃねえか」

「対策会議？ なんのかな」

「……まあいいじゃねえか。それにあたしもちよつと時間がなくてよ。最後にちよつと挨拶にきただけなんだ。ていっても、お前はなにも覚えてねえみたいだけどな」

「覚えてない？ ん、どういうこと?？」

言っていることがわからないとカイズは首を傾げる。ヴィータは少し寂しそうな顔を見ると、そのまま話を続けた。

「やっぱりお前はすごいやつだよ。まだBクラスの魔導師なのに、戦

闘機人に立ち向かって市民を逃がしてくれた。それにあの女の子から聞いたぞ。瓦礫が落ちてきたところをお前が助けて。それでやられたんだってな。………ほんと、いい彼氏を持ったもんだぜ」

「彼氏？ 俺が君の？」

「ああ、そうだよ」

「あつはつはつは、まさか俺が子供と」

とカイズは軽口を叩く気でいた。あまり小さい子に変な気を持たせるのは可哀想だ。

それは彼なりの優しさだった。だがその口は重く閉ざされたままであった。

カイズの返事がないのを見ると、ヴィータはカイズに一步、また一步と近づいていった。

「こんなに魔法が発展してるミッドチルダでも、脳のことについては研究が進んでないらしくてな。お前の記憶がこれからどうなるかは、誰にもわからない。だから今は忘れたままでもいい。だけどこれだけは覚えておいてくれ」

「——えっ？」

驚いているカイズの目の前にヴィータは顔を寄せる。そして目を見開いたままそつと唇を交わした。

その時間は一秒にも満たない短い時間だ。ヴィータはぽかんと口を開けたカイズを見ると、名残惜しそうに言葉を残した。

「あたしはずつとカイズのこと愛してるから。……だからちよつと行ってくるな」

「——ッ！ あ、あれ、えつと。あつ！」

離れるヴィータの姿を見て、カイズは叫び声をあげようとする。だがなんて声をかければいいのか。その答えは喉元まで上ってきている気がするのに、結局しぼりだすことはできなかつた。

静かに閉められる扉。視界から消える小さな背中。

カイズは結局何も言うことができずに、視線を降ろすことしかできなかつた。

絶対に許せない

ヴィータは病院を飛び出すと、バリアジャケットを装着する。手にはグラーフアイゼンを構えると、そのまま空へ飛ぶ。

『お兄ちゃんは怖くて動けなかった私をかばって。それで、それで……』

先ほどの少女の言葉が頭のなかでリフレインする。

『私があのとときちゃんと走れたら。そしたらお兄ちゃんは』

十歳にも満たない小さな子だ。逃げられなかったのはしかたがない。そしてその子供を守ったカイズも決して悪くはない。むしろカイズという人間が救いを求めている人を見殺しにするはずがないのだ。

『だからお願いします。お兄ちゃんを怒らないで、お願いします』

こんな状況を誰が作り出した。そんなの決まっている。決まっているからこそヴィータのやることなど一つしかなかった。

ヴィータは待ち合わせ場所だった繁華街の上を飛ぶ。そして思い切り息を吸い込むと、出せるだけの叫び声をあげた。

「テメエエエエ、強い奴と戦いたいんだろ！ だったらでてきやがれ。時空管理局空戦魔導使AAA+、ヴォルケンリッター鉄槌の騎士はここにいるぞおおおっ!!」

心にたまった憂いや悲しみを全てぶつけるように、ヴィータは叫び続ける。

カイズの記憶を。少女の笑顔を。そして自分の幸せを全て奪って。いって戦闘機人を許す気はない。

ヴィータの行動は作戦と呼ぶにはあまりにもお粗末なものだろう。だが被害を最小に抑えるという点では、最も迅速な手段であった。

相手強者を求めているなら、自分の存在を放っておくはずがない。そうでなくても、スカリエツティの作り出したものなら、ほかの戦闘機人同様六課のメンバーのデータが入っていてもおかしくはない。

「おら、でてきやがれえええええええっ！ あたしはここにいるぞおおおおおっ!!」

怒り。悲しみ。喪失。様々な感情がごちゃ混ぜになりながら、ただヴィータは叫んで叫んで叫び続けた。

するとヴィータの思っていたよりも早く、その存在はコンタクトを取ってきた。

「——魔力反応？ あっちか！」

一瞬魔力が大きく膨れ上がったほうに向かいヴィータは直進する。すると、またそのすぐ後に遠くから魔力反応がした。

「誘い込むつもりか？ はっ、上等だよ！」

どちらにしても、自分の居場所は管理局に感知できるようになっている。敵の元にたどり着けば、あとは時間の問題だ。

「だけどその前に必ず一発ぶち込んでやるからな」

ヴィータは敵の誘いに乗ると、市街地から一気に離れていった。

それからどれだけの距離を飛行しただろうか。雪のふりつもる山岳地帯につくと、ヴィータはその場で停止する。

「魔力反応が消えた。……いや、これは魔力が感知できないのか」

体にまとわりつく嫌な感覚。人為的に作られたAMFとは違い、この雪山は天然の魔力妨害エリアのようだ。

無論AMFのように魔力を打ち消すほどの力はない。だが隠れ蓑にするには、最適な場所であった。

「まずいな。飛んでる状態じゃねらい打ち、ちっ!!」

ヴィータが言葉を言い終わる前に、一つの魔弾が下方から放たれる。ヴィータは身を振ると、何とかそれを回避する。

「さすがにインパクトの瞬間は魔力反応がでるが。——ちっ、また居場所がわからなくなった」

広大な雪山に、魔力遮断エリア。それに加え、繁華街では戦闘機人が『突然』現れたという報告を得ている。

この戦闘機人がガジェットⅢ型のように、ステルス迷彩を使えるとしたら、これ以上やっかいなことはない。

「くっ、またか！」

先ほどとは違い、かなり離れた場所から魔弾が放たれる。今度は落ち着いて回避するが、反撃をする隙がない。

「ちっ、何発も何発もうざってえな！」

だがこの程度の魔弾なら、大したダメージはない。ヴィータは生身で回避することをやめ、あえて前方にフィールドを展開させる。

その瞬間ピタリと砲撃は止まる。そしてしばらく経つと、後方から魔力反応がする。

「高速移動タイプか。射撃場所を特定させないきだな」

このままではじり貧だ。ヴィータは悔しさのままデバイスを握り込む。

しかしじり貧なのはヴィータではなく、相手のほうであった。

「このまま時間を稼いでれば、いずれ局からの増援がくるはずだ。そうすればあいつもおしまいだ」

だからヴィータは時間を稼ぐだけでいいのだ。しかしだからこそヴィータは焦っていた。

ヴィータはカイズとあの少女の姿を思い出すと、下唇を強く噛む。「……ぜってえにあいつには一発叩き込んでやる。そうしねえと腹の虫が治まらねえんだ」

ならどうする。ヴィータはわかりきった問いかけを自身にすると、

その高度を一気に低くした。

「……………」

目を閉じ両腕から力を抜く。もちろん防御系のフィールド、シールドは一切張っていない。

完全に無防備な姿をさらけ出すと、ヴィータはただそのときを待ち続けた。

ただ静かに雪が舞い、ヴィータの体に降り注ぐ。

段々と体が冷えるのを感じながらも、ヴィータはただ意識を集中し続けていた。

——トス。

何かが雪を踏み抜く音が聞こえる。

ヴィータはカツと目を見開く。するとその音とは正反対の場所か

ら、魔弾が放たれた。

「逆!? 関係あるかあああああつ!」

どんなトリックかはわからない。だが音ではなく魔力を感じたほうにヴィータは一直線に飛び出す。

何発かの魔弾がヴィータの体に直撃する。だが同僚の砲撃に比べたら大したものではない。

「ぐっ、あああああああつ! ラケーテン——」

グラーフアイゼンから小型のドリルと四本のブースターが形作られる。その噴射に体を預け、ヴィータは体を回転させる。

敵を黙視できるまだ近接する。ヴィータは勢いを殺すことなく、ハンマーを天に掲げた。

「——ハンマアアアアアツ!」

『!』

ヴィータのハンマーが戦闘機人の体に向かう。戦闘機人は直撃コースにフィールドを張る。だが関係ない。その一撃は、ヴィータと戦闘機人の実力の差を見せつけるように粉碎した。

「ぶちぬけええええつ!」

フィールドを貫通し、ドリルが体に突き刺さる。ドリルは高速回転すると、その体をあっさりと貫通していった。

これが歴戦の勇士との力の差であった。

「がっ、はっ、はっ、はっ。………はあ、やりすぎちゃったかな」

ヴィータは呼吸を整えると、粉碎された戦闘機人を見下ろす。

蓋を開けてしまえばこの結果であろう。確かに六課時代に、戦闘機人の存在には随分と翻弄された。

だがそれは奇襲が主だったからだ。

ヴィータ、なのは、フェイト、シグナムクラスになれば、戦闘機人の一体相手などさしたる困難ではない。

——そう。

「とりあえずどうやって残骸を運ぶかな。それとも連絡が先か、ガハッ!」

——相手が一体ならの話だ。

「な、あつ？」

ヴィータの腹部を紅い爪が貫く。ヴィータは何があつたと、背後を見る。するとそこには両手に三本の爪を持った戦闘機人がいた。

「そ、そんな。じゃあこいつは……」

地面に転がっている戦闘機人を見る。そこにいるのは、片手が砲芯になっている報告とは違う存在だった。

「こいつは違うノーマンバズなのか。……ちつ、ノーマンバズなんだからそれはそうか」

どうしてすぐに気づくことができなかつたのだろうか。逃げ出した戦闘機人が一体ならノーマンバーのはずだ。わざわざ複数系『ズ』がついているということは、この戦闘機人が複数ということにほかならない答えであつた。

腹部の出血がジワジワと広がる中、ヴィータの頭の中が段々と真っ白になっていく。

『私は、証明します』

「……はは、いったい何を証明するっていうんだよ」

『私は強い。私は必要であると証明するのです』

「ああ、そうかよ。でもだったら残念だな」

『――！』

戦闘機人が爪を引き抜こうとすると、それがびくともしないことに気づく。

ヴィータは腹部に力を入れ爪を押しさえつけると、視線だけを戦闘機人に向けた。

「デメエはこれから負けるんだよ。複数できて。不意うちして。そして満身創痍のあたしに負けるんだ」

ヴィータはグラーファイゼンを投げ捨てると、両手の指にありつたけの鉄球を構える。

『脅しはきかない。この距離ならあなたも』

「だったらくらってみろよー」

ヴィータは八つの鉄球を投げ放つ。その全てが戦闘機人に叩き込まれると、次の瞬間その全てが爆散した。

後先などどうでもいい。それが見てわかるほど強烈な爆発が二人に襲いかかる。戦闘機人は光のない目で空を見上げると、そのまま地面に崩れ落ちた。

『証明。……しようめ、い』

「お前が弱いつて証明されたみたいだな。あつ、うつ……」

戦闘機人を機能停止にする一撃は、ヴィータの体にも十二分なほどの余波を残していった。

そうでなくても、腹部の出血が酷い。早く救援を呼ばなければ、命そのものが危なかった。

だがそんな彼女をあざ笑うかのように、第三の驚異がヴィータに襲いかかる。

「や、やべえ。さすがにやりすぎちまったか」

ヴィータはその場に倒れながら、雪山が騒がしくなる姿を見る。先ほどの爆散の音に誘発され、雪崩が起き始めたのだ。

襲いかかる雪の大波をヴィータはじつと見ていることしかできなかった。

「……………ごめんなカイズ。結婚式は、無理かもしれないねえ」

大きな白の波が、小さな紅い少女を一瞬のうちに飲み込む。そして雪山は何事もなかったかのように、その世界を再び白だけに染めていった。

駆け抜ける貴方への想い

「んー、今日はすごい日だな」

病室にいたカイズは今までのことを思い出すと、声を弾ませた。

「高町さんに、テストロッサさん、それに八神さんにまで会えるなんて。もう一生分の運を使ったんじゃないのか」

テレビの向こう側の人と何人も会えるなんて、なんて自分は幸せなのだろうか。そう自分に言い聞かせて鏡を見る。だがそこにいるのは、声のトーンとは違い、沈みきった顔の自分がいるだけだった。

「何だよ。今日は最高の日じゃないか。……………何でこんな顔してるんだよ俺は」

その理由は理解していた。先ほどあつた紅い髪の子の女のことを気にしているからだ。

だが理由が納得できなかった。自分は年上好きのはずだ。どうしてあんな年端も行かない少女のことをこんなにかけているのか、自分自身にもわからないのだ。

ドンツ!!

その瞬間、病室のドアが乱暴に開けられる。

コバルトブルーの髪の毛の女性は、鼻息を荒くしながらカイズに近づいていった。

「おつ、やっと来たなサクヤ。ってか、なんか少し老けたか」

「はあ？ あたしが老けたならあんたは腑抜けたんじゃない。何してるのよあんたは。ふっぎけるんじゃないわよ!!」

「な、なにそんなに怒ってるんだよ。恋人がこんな大怪我したっていうのに」

「あんたとの恋人生活なんて、とつくの昔に終わってるのよ。それを終わらせたのはあんたよ。あんなにあつさり私のこと振っておいて、あんたは何が一番大切なこと忘れてるのよ!!」

「俺がおまえを振る？ え、いったいなんで……………」

学生生活で自分は何人も女性とつきあってきた。だがサクヤほど自分のことを理解し、波長が合う人間はどこにもいなかった。

いったい、自分の知らない中で何が起こっているのか。カイズは困ったようにベッドの中で後ずさる。

——ピピピピピ!

「おっ、うわ、なんだ。……なんだこの端末は」

驚くままにベッドの脇に置かれた見覚えのない通信機を手取る。初めは切れるまで待とうと思ったが、それが鳴りやまないことがわかると、しぶしぶとボタンを押す。

『対策局員全てに連絡します。独断で戦闘機人を追跡していたヴィータ二等空尉に魔力反応、並びに連絡が完全に途絶えました。現在救護班が向かっています。魔力磁場の強い場所のため所在をつかむことができません。手の空いてる局員はすぐに救出に向かってください。繰り返します——』

「ヴィータ二等空尉。あれ、ヴィータ。………ヴィータ」

その名前を聞いた瞬間、胸の奥がズキリと痛くなる。何か大切なことを忘れていたような気がしていた。

「俺、俺は。誰だ。ヴィータ、ヴィータさん？」

「ヴィータお姉ちゃんはお兄ちゃんの恋人だよ！」

「——えっ、君は？」

サクヤの後ろにいたため気づかなかったが、そこには一人の少女がいた。誰だろう。こんな子供に自分は覚えはない。だが心の奥底が何かを訴えかけていた。

「私はお兄ちゃんに何度も、何度も助けてもらった。だからお願い、私のおときみたいにヴィータお姉ちゃんも助けてあげて」

「俺が、助ける。俺は、俺は………」

カイズは突然の頭痛に襲われると、両手で頭を押さえつける。同時に、紅い髪の毛の少女との思い出が、どんどんと頭の中を走り抜けていった。

『フン、まあお前がどうしてもって言うなら。そ、その、試しに付き合ってやらないこともないぞ。でも昔みたいになんかまた忘れるんじゃないぞ。』

いのか』

『やっぱりあたしはカイズのことが好きなんだなって。……そう思っただけだよ』

『あたしが目を開けたら、絶対に側にいろよな。……嘘だったら、グラーファイゼンの頑固な汚れになってもらうからな』

『カイズが一人でいるのが怖いなら、あたしがずっと一緒にいる。夜の闇が怖いんだったら、隣でずっと手を握ってる。だからよ。もう一人で全部背負い込むなよ。あたしがずっと傍にいるから。……頼むからあたしにだけは迷惑かけてくれよな』

『ありがとうカイズ。……大好き』

フラッシュバックのように次々と少女との思い出が蘇る。

カイズは頭を抱えると、ずっと引つかかっていた何かを拾い上げようとした。

「ヴィータ……ヴィータさん」

『なお、ヴィータ二等空尉は雪山で生き埋めになったようであり』

『生き埋め。……それって、それって』

「お兄ちゃん！」

「——あつ」

生き埋めという単語が。少女の叫びが。カイズの中の一番深い記憶を呼び起こす。

電車の落盤事故に巻き込まれ、絶望の淵にいた自分を助けてくれた一人の女の子の姿を。

あのとき自分を助けてくれたお姉さんのようになりたくて。だからこそ俺は、俺は。

「ヴィータさん。——ヴィータさん！」

カイズは机に置かれた小さな黒い刀のデバイスを掴み取る。すぐにバリアジャケットを生成すると、泣き出しそうな少女の頭を優しくなでてやった。

「思い出させてくれてありがとうな。それじゃあお兄ちゃんちよつと行ってくるな」

「——うんっ！」

「サクヤもありがとうな。ってか、そんな激しい一面もあつたんだな」

「おかげさまでな。ほら、早く行つてこい」

「おうっ」

カイズは病室のドアを開けると、迷うことなくその場から飛び出していく。

それと同時に病室のドアが開かれた。

「カイズ君、ヴィータちゃんが、ヴィータちゃんが。……あれ、カイズ君は」

病室にカイズがいない状況に、なのはは面食らってしまう。だがそんななのはに、少女はその答えを口にした。

「お兄ちゃんは、お姉ちゃんを助けに行つたよ」

そう笑顔で答える少女の顔は、安心の色に包まれていた。

幸せな記憶に抱かれて

身動きがとれない。

体がどんどん冷たくなっていく。

ここはどこだ？ そう口を開こうとするが、全身を圧迫されそれすらも許されなかった。

あたし、どうなったんだっけ？

自らに問いかけるが、答えは目の前に存在していた。

そうか。ノーナンバースを倒して。それで雪崩に巻き込まれて。

……やべえ、体に力が入らねえ。

止血もしないで血を流しすぎたのだろう。むしろこのまま凍死せず起きることができたのが奇跡なぐらいだ。

だがその奇跡も長くは続かなかった。

やべえな。……あたし、死ぬのか？

思えば死ぬというのは初めてのことだった。今まで闇の書を通して、数々の主に仕えてきた。

だがその全ては突然の消滅であり、自分が死ぬという感覚はなかった。

でもよ。上出来じゃねえか。闇の書事件で様々な人間を苦しめてきたあたしが、家族に囲まれて、仲間にも囲まれて。そして短い間だけど彼氏だつてできたんだ。……これ以上のことはねえよな。

だったらもういいではないか。自分の人生は本当に幸せなものだった。だからもう。

はやての顔が。なのはの顔が。そしてヴォルケンリッターや六課のメンバーの顔が次々と思い出される。

走馬燈つていうのはこういうのを言うんだな。最後まで幸せな夢をありがとうな。

ヴィータは幸せな夢を見ながら、ゆっくりと目を閉じる。

『ずっと、ずっとヴィータ教導官のことが好きでした。だから俺と付き合ってください』

『だ、だけど待っててくださいヴィータさん。俺、頑張ってお金貯めて。一生の思い出に残るような綺麗なホテル探すんで!!』
『じ、自分でも心が狭いって思ってますよ。で、でも仕方がないじゃないですか。そ、その、ヴィータさんが迫られてる姿を見たら、なんか頭の中がカーッとしちやって。……それで』
『——俺と結婚してください。必ず、必ずヴィータさんのことを幸せにしますから』

誰かの言葉が浮かび上がる。

それは大切な。本当に大切な人の言葉だった。

まだ自分は彼との約束を果たしていない。後悔なんてないと思っていた。だが心の底から沸き上がる思いに、ヴィータは自然と涙を流していた。

「やだ。……やだよ。まだ、死にたくねえよ」

様々な思い出が。そしてこれから来るはずだった暖かな未来を思うと、心の奥底にしまっていた本音が飛び出す。

確かに闇の書の一部として、自分は出来すぎなくらい幸せを掴むことができた。

だけどそれだけではだめだった。自分をもっと幸せになりたい。大切な家族と。頼れる仲間たちと。

そして。そして。

「……………カイズ、助けてくれよ」

ヴィータは愛する人の名前を、今にも消え入りそうな声で叫んだ。

「——ヴィータさん!」

「——えっ」

「そこにいるんですね。すぐに助けますからね!」

それは幻聴なのだろうか。愛するものの声が小さいながらもハッキリと耳に届く。

だが幻聴だろうと関係ない。彼が助けると言ったのだ。だからこそそれを信じて、ヴィータはもう一度声を上げた。

「——カイズ、助けてくれ！」

まるでヴィータの想いが放たれたかのように、目の前の闇が取り払われていく。雪がどけられると、夕暮れの光が目が届く。

「ヴィータさん！　ヴィータさん！」

目が光りに慣れると、ぼんやりとしていた輪郭が徐々に鮮明になる。見間違えるはずもない。ヴィータは愛するものを目の前にすると、大粒の涙を流した。

「カイズ。あ、あたしのこと……」

「ごめんなさいヴィータさん。俺、またヴィータさんのこと忘れちゃって。告白したときにもう二度と忘れないって言ったのに、俺……」

「……………別にいいよ。あたしのこと忘れたってよ。だつてさ」

ヴィータは一度言葉を止めると、カイズの首に両手を回す。カイズはそんな彼女に応えるように、優しくヴィータを抱きしめた。

「カイズは何度だってあたしのこと思い出してくれるだから。だからいいんだよ。——でもどうやってあたしの場所がわかったんだ。ここら辺は魔力磁場が」

「魔力感知できなくても、機械のほうは関係なかったみたいですね。ほら、ヴィータさんが俺の片方のデバイス持つてるでしょう。で、片割れのデバイスを使って追跡してきたんです。どこにいても飛んでいけるように、渡してもらってよかったですよ」

このデバイスは互いが互いを引き合うようにできている。この機能を使ったのは、ヴィータの夢の中に入ったとき一回だけであった。だが彼女の作ったものだ。その性能を疑うことなどカイズにはなかった。

カイズの意味しているところがわかると、ヴィータは困ったような笑みを見せる。

「……………そっか。あたしが暴走するのもお見通しってわけだったのか」「いや、そんなことないですよ。でもどんな状況でもすぐにヴィータさん会えるようになって、ぼんやりした頭で考えたらこれしかないかなって」

「そうだったのか。……カイズ、ありがとうな」

「いえいえ、どういたしまして」

「——ううっ」

ヴィータはそこまで言うと、小さなうめき声をあげる。だがその表情に苦しさは見られず、安堵したように気を失っていった。

一気に緊張の糸が切れたのだろう。カイズはにこやかな笑みを浮かべると、唐突にヴィータから顔を背けた。

「ぐっ、っほ、っほっ！……まだだ。もう少しだから耐えろよ」

カイズは吐血で雪を赤く染める。だがしつかりとヴィータを抱きあげるとゆっくりと立ち上がった。

記憶喪失ばかりに気を取られていたが、カイズも立派な重体人なのだ。普通なら絶対安静が義務付けられた身である。

「でもヴィータさんの体を寒い雪に置きっぱなしってわけにもいかな
いもんな」

カイズは全身を襲う強烈な痛みに耐えながら、一秒でも早くと救護班の元に向かい歩き始めていくのだった。



意識が段々と明瞭になる。

ああ、もうすぐ自分は目覚めるのだとヴィータは直感で気づいた。

だが彼女は目覚めることを恐れていた。今まで見ていたのは都合のいいただの夢。目を開いた瞬間に、何もかも失ってしまったら。

そう思うと、本当に怖かったのだ。

……でも、あたしは信じてるんだよな。

カイズのことを思い出すと、それだけで信じてることが出来た。あいつがあたしを助けてくれた。それは絶対に嘘ではない。ヴィータは確かな想いを信じると、ゆっくりと目を開けた。

目の前に映るのは真っ白な世界だ。だがそれは冷たい雪の白では

ない。病室の天井だった。

「……………ここは、どこだ。——んっ」

ごしごしと目を擦ろうとするが、腕が動かないことに違和感を覚える。ヴィータは右手の行方を見る。すると彼の姿を見て、柔らかい笑みを浮かべた。

「……………すう」

「こいつ寝ながらあたしの手をずっと握ってたのか。……………ありがとう。こんなにもあたしのこと愛してくれて。——あっ」

ヴィータはふと視線をあげると、そこにいる人達の姿を見た。そこには彼女を大切に思っている数々の人達が眠りについていていた。

「はやてにシグナム。シャマル、ザフィーラ、リインもアギトも。なのは、テストロツサ、みんな、みんな」

広い病室でありながら、ギツシリと詰めあう仲間たち。カイズだけではない。自分はこんなにも多くの人に愛されているのだと。それがわかると、ヴィータは目に涙を貯めた。そんな彼女を見て、唯一起きていたミスホは心配そうに声をかけた。

「どうしたのお姉ちゃん。どこか痛いのか？」

「……………違うんだ。嬉しくて、本当に嬉しくてお姉ちゃん泣いてるんだ」「そうなんだ。……………でもお姉ちゃんは笑顔のほうが好きとみんな喜ぶと思うよ」

「……………ああ、そうだな。そうだよな」

ヴィータは嬉し涙を拭くと、少女に向かい満面の笑みを見せた。その顔を見て少女もまた満面の笑みになると、両手を口元に添えた。

「みんなー、ヴィータお姉ちゃんが起きたよー」

少女の声にゆっくりと目覚めるヴィータの大切な人達。

ヴィータは白い歯を見せると、まるでお日様のように明るく微笑んだ。

「みんな、ありがとうな」

ヴィータちゃんは男友達が少ないF 二人で歩く
幸せな未来へ

胸に立てた新たな誓い

週末の午前中の八神家。はやてはスケジュール表を見ながら、みんなに指示を送る。

「結婚式の招待状はどうやりイン」

「大丈夫ですはやてちゃん。何名かを除いて、全部送り終わってるです」

「料理のほうはちゃんと話は通つとるんやろなシグナム。こっちだけそう思ってたじゃ話にならないで」

「そちらも大丈夫です主はやて。連絡は何度もとってますし、料理の全般はサクヤの夫に手を回してもらってます」

「シヤマル、当日の休憩所や子供預かり所の手配は」

「そっちは知り合いの子に何人か声をかけてるから大丈夫です。手配した式場も用件に完全に合致してます」

「よし、大丈夫やな。みんな、本番まで時間はいくらあってもたらへん。けどや。うちの大切な家族の一世一代の晴れ舞台や。絶対に完璧に、いや、完璧以上のものに仕上げるよ！」

「「「おおっ!!」」」

はやての鼓舞に皆が拳を掲げる。

こういう多くの人を動かすことに関して、はやての右にでるものはいない。彼女は的確に適材適所に人員を配置すると、急ピッチで披露宴の準備を進めていく。

元々みな仕事の急がし身だ。全員揃うことは休日以外にはあまりなく、今日という日に彼女たち家族は全力を注いでいた。

普通の結婚式ならここまで忙しい進行にはならないだろう。だがカイズやヴィータの願いを優先し、可能な限り最短で最速に結婚式を行うためこのようなことになっている。

さらにこの結婚式にはものすごい人数を招待する予定になってい

る。元々浪費癖が少ない八神一家に、なのは、フェイトを筆頭に元軌道六課の面々、さらに多くの知り合いが今回の結婚式に出資している。

もう軽いプロジェクトといっても過言ではないほど、今回の結婚式にかける皆の思いは大変なものになっていった。

「主、ギル・グレアムが今回の結婚式に出資したいと」

「いしよしゃああ、もういくらでもきいやあああつ!!」

ザフィーラか電話を受け取ると、懐かしい声に反応することなく、すぐに結婚式についての話に入るのだった。



時間はちようどお昼休みになったところだ。ヴィータは管理局の食堂につくと、食事をしているのはの前に座った。彼女は先ほどまで教導をしていたようで、額に少し汗をかいていた。

「わりいな。忙しいときにきちまってる」

「そんなことないよ。たまたま今日が休日出勤ただけだし、午後は二時間ぐらいで終わりだしね。——体のほうはもう大丈夫なの?」

「おかげさまで、カイズもあたしももう全快だ。——それじゃあさっそくであれなんだけだよ。これ、招待状な」

ヴィータは小脇に抱えていた鞆から白い招待状を取り出す。なのははそれを両手で丁寧に受け取ると、申し訳なさそうな顔をした。

「うちに郵送でもよかったのに」

「別に全員にそうしてるわけじゃねえよ。なのはにはほんと、その、世話になったからよ。……多分、あの教導の時になのはがいなかったら、あたしはカイズからずっと逃げてるだけだった。本当に感謝してるんだ」

ヴィータは小さく頭を下げると、なのはは慌てたように声を上げる。

「そ、そんな改まらないですよ。それにカイズ君だったら、私が何か言わ

なくても、ヴィータちゃんが折れるまでずっとグイグイ行つてたつて。だからね、顔上げてヴィータちゃん」

「……………おう」

ヴィータは顔を上げると、なのはと目を合わせる。ヴィータは口元をゆるめると、白い歯を見せた。

「でもだけだよ。ありがとうな、なのは」

「うん、どういたしましてだよヴィータちゃん」

「こういうお礼なら望むところだ。二人は笑みを見せあう。ヴィータは鞆からもう一つの招待状を取り出した。

「こっちはテストタロツサの分だ。あいつにも仮教導試験の時にめっちゃくちや世話になったからよ。…………胸のことでも相談に乗ってもらつたしな」

「ん、最後のほう何か言った?」

「な、なんでもねえよ」

「んん?」

顔を真っ赤にしているヴィータを見て、なのはは首を傾げる。ヴィータはこぼんと一度せき込む。そんな彼女を見て、なのはは微笑ましい笑みを浮かべた。

「でもヴィータちゃんが結婚かー。何だか未だに信じられないな」

「それはあたしが一番思ってるよ」

「結婚式は楽しみにしててねー。元スターズチームでもものすごい余興をやる予定だから。元ライトニングチームの女性陣とどっちがすごかったか、投票もする予定だからね」

「お、おお。何だかいろいろ決まってきたるんだな」

正直結婚式については、ヴィータもカイズもほぼノータッチである。それはサプライズにサプライズを重ねて、ヴィータを喜ばせたいという、招待客みんなの合意であった。

この調子では結婚式当日は、さらにすごいことになっていそうだな。ヴィータは楽しみでもあり、少し不安に思うと苦笑いを浮かべた。

「…………さて、それじゃあたしはそろそろ行くな」

「これから他の人にも渡しに行くんだね」

「おう、今日を逃したら次に休みがあるかわからないからな」

ヴィータは椅子から離れるとなのはに手を振る。そんな彼女を見て、なのはは最後に声をかけた。

「ヴィータちゃん」

「どうした？」

「——お幸せにね」

「——おうっ」

なのはの声に、ヴィータは笑みで答える。

なのはは彼女の背中を見送る。そして本番は頑張ろうと胸に新たな誓いを立てるのだった。

恩返しがしたくて

時を同じくして、一人でカイズは公園を歩いていった。

「あれー、確かだいたいはこちらにいるはずなんだけど。——あつ、いたいた」

カイズはベンチに一人座っているミズホを見つめる。だがカイズが笑みを浮かべるのとは違い、ミズホは彼の顔を見ると俯いてしまう。

「こんにちわ。よかった、住所がわからないから今日会えなかったらどうしようかと思ったよ」

「…………お兄ちゃん」

「ど、どうしたの暗い顔してるけど？ お腹でも痛いのかな?」

カイズは彼女の隣に座る。だがミズホはその場から立ち上がると、突然頭を下げた。

「ご、ごめんなさいお兄ちゃん！」

「へっ、えっ、ど、どうしたの急に」

「だって私お兄ちゃんに迷惑かけてばかりで。私が男の子に虐められてた時も無視したし、こ、この前の時だって。わ、私が逃げられなかったから、だから、お、お兄ちゃんは…………」

きつと心の中でずつと不安が渦巻いていたのだろう。いつも自分は彼に迷惑をかけている。子供ながらに合わせる顔がないと感じていたのだろう。

ミズホは張りつめていた想いを打ち明けると、目に大粒の涙を浮かべる。カイズはそんな彼女をみると、おろおろと狼狽えてしまう。

「そ、そのことは大丈夫だって。俺もヴィータさんもこうしてもう元気なわけだし。それに君が悲しんでると、俺も悲しんだよね」

「…………どうして」

「だってだよ。俺がそれこそ命を賭けて助けたのに、その助けた子が泣いてるんじや、あまりにも俺が報われないじゃないか。俺は君に泣いてほしくて助けたわけじゃない。——君に笑ってほしいから体を張ったんだから」

「でも、だけど。……………私は」

カイズの言葉にミズホは納得できない。いや、出来るはずないのだ。そんな言葉で納得できるほど、ヴィータとカイズの傷は浅いものではない。さらに彼が記憶喪失になったせいで、ヴィータには相当辛い思いをさせたのだ。

言葉で許すと言われても、はいそうですと許される気はミズホにはなかった。カイズは「んー」と頬を掻く。

「それだったらなー。えーっと、一つとっても大変な仕事があるんだけど。…………それを手伝ってもらってもいいかな」

「それって本当に大変なことなんですか」

「うん。しかもかなり重要で、絶対に失敗できないこ——」

「やります。やらせてください！ 私、少しでもお兄ちゃんとお姉ちゃんに恩返ししたいんです」

カイズが言葉を終える前に、ミズホは了承する。二人が管理局に所属していることは、前回の事件で知っている。

その仕事に危険が伴っていることは、子供のミズホでもわかっていました。

だがそれでも構わなかった。二人に報いることができるのなら、どんな危険なことにも協力する。

気まぐれではない。ミズホは確かな覚悟を持って、そう答えたのだ。

「そうか、それならよかった。……………もう今更できませんって言うても聞かないからね」

「だ、大丈夫です」

「ん、だったらこれね」

カイズはバッグから招待状を取り出す。それはヴィータがなのはに渡したものと同じものだ。

ミズホはその手紙を受け取ると、頭に疑問符を浮かべる。だがその中身を確認すると、困ったような表情を浮かべた。

「こ、これって」

「俺とヴィータさんの結婚式の招待状。君の友達もみんな連れてきて

くれるとにぎやかになって嬉しいかな」

「こ、こんなことじゃ恩返しにならないよ！ 私はお兄ちゃん達に本当に迷惑をかけたって思ってる。だから」

「おっと、話はここで終わりじゃないよ。ここからが重要なんだから」カイズはデバイスを取り出すと、ある画像を表示させる。その画像には純白のウエディングドレスを着た花嫁の姿があった。

だがカイズが見せたかったのは花嫁ではない。画像を拡大すると、カイズは一人の子供を映し出した。その子供はウエディングドレスが擦れないように、裾をしつかりと握っている。

「俗に言うベールガールって奴だね。君には本番にヴィータさんのドレスを持ってほしいんだ」

「もってほしいって。——えっ、ええっ!?!」

全く思ってもみなかった言葉に、ミズホは目を丸くしてしまう。そして自身の顔の前で世話しなく手を振る。

「だ、だめだめ。む、無理だよそんなこと!」

「おっと、今更無理は聞かないって言ったよね。これは重要な仕事だよ。たくさんの人がみんな見てるし、絶対にミスなんてできないからね」

「ど、どうして私なの。だって、私、二人には迷惑かけてばかりで」

「これは俺とヴィータさんと決めたことなんだ。きつと心優しい君は後悔してるだろうって。だから思い切り重要な役を押しつけて、しっかり発散させてやれってね」

「だ、だけどー」

「だけでもなにもないよ。これはもう決定、本番はよろしくね」

カイズはミズホにしつかりと招待状を握らせる。そして有無言わせない笑みを見せると、ミズホは諦めたような、困ったような顔をした。

「……………本当に私でいいのかな」

「君がいいんだよ。俺もヴィータさんも」

「——うんっ！ 私頑張るね!!」

カイズとヴィータに選んでもらったこと。そして自分を助けてく

れた二人に少しで恩返しをしたい。

二人が笑顔になってくれるなら。そのことを胸に秘めると、ミズホは力強く頷く。

「その招待状があれば、親御さんも入場できるからね。それじゃあ本当に大変だろうけど、本番はよろしくね」

「うん！」

ミズホの言葉を聞くと、カイズは再び笑みを浮かべる。

やはりミズホには笑顔が似合う。カイズはそう思うと、ベンチから立ち上がる。

そして次の場所へと向かうのだった。

それでも嫌だ

「あつ、ヴィータさんこちらですよー」

何度か訪れたことがある個人経営の飲食店。その主人の妻であるコバルトブルーの髪の毛の女性は大きく手を振る。

ヴィータは彼女の対面に座った。

「ごめんなさいねヴィータさん。すっかりお昼時をはずした時間になつてしまいました」

「気にしてねえよ。それにお昼時は混んでるだろうし、あたしもなのはのところに行つてたしな」

「あれ、それでしたらお昼の方は？」

「ご馳走になるのに食べてはこねえよ」

「そうですね。——ヴィータさんが来たから、料理よろしくねー」

サクヤがそう声をあげると、厨房から『おう』と声が聞こえてくる。

サクヤはこちらに向き直ると、ニヤニヤと口元を緩ませる。

「それにしても早かったですね。でもカイズ君がもうプロポーズしてるなんて、正直考えてもいなかったの」

「どうしてだ？」

「……………だつてヴィータさんも見ましたよね。あの高等部時代の最低の男っぷり。正直、あんな姿のカイズ君しか知らない私は、彼が真面目にプロポーズしている姿が想像できなくて」

「まあ、確かにあのカイズにはびっくりしたな」

カイズが高等部時代随分とヤンチャな性格だったのは、サクヤから何度も聞かされていた。だが実際にあそこまで人が違うとは、その時になるまで思いもしなかった。

ヴィータとサクヤは先に用意された前菜に口を付ける。野菜を一口食べると、サクヤは少し肩を落とした。

「今回カイズ君は立派だったと思います。市民のために各上相手に戦いを挑んで。そのおかげで人命的被害はゼロですみました。——」

「だけどその分怖いという思いもあります。きっと誰かを助けるためなら、カイズ君はどんな無茶でもしちゃうんじゃないかって」

「んー、その点は何とも言えねえな。それが正しいとも間違っているともあたしは言えない。それにきつとあたしが同じ立場でも困っている人は放つて置かないと思うしな」

「……ヴィータさんは不安じゃないんですか？」

「それはもちろん不安だ。でもまあ教導官なったことで、普通の局員より前線にでることは減っただろうし。それに局員が総出勤の時には、そんなことを考えてる場合じゃないと思うしなー」

「……………大人なんですね、ヴィータさんは」

「そういうんじゃないよ。きつとそんな時がきたらあたしは大泣きすると思うぞ。それこそそんな目に遭わせた相手を絶対に許さないと思うしな。っていうか、実際にこの前のあたしがそうだったしな」

今になって思えば、あの時の自分は心が荒れに荒れていたと思う。だがそんな体験をしたからこそ、ヴィータは確信することができたのだ。

「あたしが愛したのは今のカイズなんだ。真っ直ぐで困ってる人を放つておけなくて。だから、だから、あつ——」

そのあとの言葉が口からでてこない。どんな道になろうとも、彼には後悔しない道を歩いてほしい。そう続けるつもりだった。だがその言葉がでる代わりに、ヴィータの頬には涙が流れ落ちる。

「あ、あれ、おかしいな。えつと、あ、あははは」

「ご、ごめんなさいヴィータさん。これから結婚するって人にこんな話するべきじゃなかったですよね」

「サクヤさんはなにも悪くねえよ。だ、だけどこの前のことを思い出したら、その……………」

後悔はしてほしくない。だがカイズがもし死んでしまったら、もしカイズが自分の隣からいなくなってしまったら。

そんなことが頭をかけ巡ると、ヴィータはさらに涙を流し続けた。「で、でも、でもやっぱりカイズには、ひつく、し、死んでほしくない、な。ご、ごめんな、偉そうな、こ、ことばっかり言ってたくせに。そ

れなのに……」

「大丈夫、大丈夫ですから。それにヴィータさんのことが大好きなあいつが、ヴィータさんをおいてどっかに行くわけありませんよ」

「そ、そうかな」

「絶対にそうですよ！」

涙を流すヴィータを、サクヤは必死に落ち着かせていく。こんな公共の場で、大の大人が泣き出してしまうなど、ヴィータ自身が一番思っていないかった。

ヴィータはしやくりあげながら、必死に時間をかけ自身の心を落ち着かせていくのだった。

その答えを我らに

街の賑わいから外れた静かな場所にある墓地地帯。カイズは花束を抱えると、一つの場所に向かっていった。

シスンの事件が終わったあと、二人のお墓を立ててあげたいと自分とヴィータは思っていた。

そこで紹介されたのが、この場所だ。はやてに教えてもらったこの場所は、元々ティアナから聞いた場所らしい。ここには訳があつて、存在を消されたもの、名を残すことが許されないものが多く存在する。

ティアナが誰のためにこの場所を使用したかは、実のところはやても知らないらしい。だが数年前に、間接的ながらなのはを救った恩人のためにと、彼女が懇願したようだ。

「まあ深く追求することもないよな。シスンさんのことだって、内密な訳だし」

彼はいくつかのお墓を通り過ぎると、その二つの前に立つ。『シスン』と『エレナ』もちろんその中身はからであるが、二人のためにと作られたものだ。

カイズは花束を置くと、その場で膝を突いた。

「近日にヴィータさんと結婚することになりました。ご報告が遅くなってすみません。これはその招待状です」

カイズは二人に用意した招待状をそれぞれの墓に添える。もちろんこんなことをしても無意味だということは、やっている本人が一番よくわかっていた。

これはきつとただの自己満足行為だろう。だがそれでも構わなかった。これは自分が本当にしたいと思つたことなのだから。

「正直教導官にはなれましたけど、俺はまだまだ半人前です。きつとこれからもヴィータさんに迷惑をかけるだろうし、またこの前みたいに無茶をするとは思いません。……でもヴィータさんのことは絶対に幸せにしてみせます。それはこの胸に誓つて必ずです」

カイズは自身の胸に手を添えると、二人の墓に頭を下げる。

ゴーン、ゴーン。

夕暮れを伝える鐘が墓地に鳴り響く。カイズはその場から立ち上がる。

「また、墓参りにきますね」

カイズはそつと二人の墓に背を向けた。

『ヴィータを、幸せにしてあげてくださいね』

「——えっ」

その声にカイズは勢いよく振り返る。だがそこに誰かがいるはずもなく、カイズは大きく深呼吸をする。

「……はい、必ず」

カイズは最後にその言葉を伝えようと、その場から歩き出す。今の言葉が幻聴でも空耳でもそれはどちらでもよかった。

ただもし二人があの場合にいたのなら、きつとそう言ってくれる気がした。そう思えただけで、カイズには十分だった。

墓地地帯を抜けると、ちょうど鐘が鳴り終わる。

これで今日のすべきことは全て終わった。あとはヴィータとの結婚式を待つだけだ。

カイズ自身も、そして今はここにいないヴィータもきつとそう思っていただろう。

だからこそ、その出会いに彼は驚いた。どうして目の前に彼女たちがいるのかに。

「はやてさん？ それに他のみなさんも。……どうしてここに?！」

「んー、ようやく結婚式の準備が全部終わってな。だから最後の仕上げにきたんよ」

「最後の仕上げ？ 急ぎの打ち合わせって何かありましたっけ……」

今のところ結婚式の段取りは順調に進んでいる。それにはやて一人ならいざ知らず、ここにはヴィータを除いた全てのメンバーがいた。

はやてにシヤマル、シグナムにザフィーラ、年相応の背格好をした

リインやアギトもだ。

しかもこのメンバーの瞳には何か、大きな決意のようなものが見て取れた。カイズは唾を飲み込むと、次の言葉を待った。

「とりあえずカイズ君、ここじゃ狭いから少し移動しようか。もう少し歩いた場所に開けた場所があるさかい」

「……………わかりました」

歩きだした八神家のあとに続き、カイズも歩き出す。その間の会話は一切存在しない。それだけ大切な話があるのだろうと、カイズもまた黙って後についた。

やがて彼女の言葉通り開けた場所になる。草木が生えていない天然の茶色の地面の周りには、障害物は何一つない。

そこまでたどり着くと、はやてはその場から一步下がる。そして彼女たちを代表して、シグナムが彼の前に立った。

「——セットアップ！」

その言葉に反応して、待機状態のレヴァンティンがその姿を剣に変える。シグナムはその剣を横風に払うと、そのままバリアジャケットが生成された。

シグナムは切っ先をカイズに向ける。

「カイズ、お前もデバイスを構えろ。…………一本勝負だ」

「構えろって。いったいどういうことですか」

「その返事は全てが終わった後に主から告げられる。——だからこそ今はただ構えろ。そしてお前の答えを我らに示せ」

「俺の、答え……………」

その質問が意味するところがカイズにはわからない。わからないが、それでもこれには大きな意味があるのだろう。

どちらにしても避けて通るといふ道など存在しない。彼女たちのその目を見て、そんな考えができるはずがないのだ。

「……………わかりました。いくぞ、イノセントハート」

カイズはメンテナンスから帰ってきた相棒を取り出すと、バリアジャケットを生成する。二つの黒刀を構えると、シグナムに目を向けた。

「もちろんお互い非殺傷設定だ。合図は主が出す」

「はいっ」

近すぎず離れすぎず。互いにとって公平な距離が作られると、はやては右手を天に構える。

「それでは。——始め!!」

合図とともに右手が振り下ろされる。

瞬間弾かれたように接近するシグナムに対しカイズは、二又の黒刀で段幕を張っていくのだった。

託された絆の証

全ての人に挨拶を終えて、家路につく途中。ヴィータは夕暮れ空を眺めながら、ため息をついた。

「あーあ、何だか情けない姿を見せちまったな」

サクヤの旦那の店を後にし、ヴィータはそのことについてずっと落ち込んでいた。

自分はカイズのことを誰よりもわかっているつもりだった。きつと彼は困っている人がいれば助けに行くし、自らの身の危険も省みない。

だからこそ彼と結ばれるということは、常に別れと隣り合わせだということにはわかっていた。

いや、それはなにもカイズだけではない。手に負えない事件があれば、きつと元軌道六課の面々はすぐに集結をかけられるだろう。それに自分の性格を考えれば、呼ばれなくともきつと頭を突っ込んでしまいうはずだ。

誰かのために身を粉にする。それは今に始まったことではない。多くを救えるのなら、そのためなら一歩も引かない想いはその心にあつた。

『ヴィータさん』

瞬間、あの優しい声が自らの中に響きわたる。そうだ。自分は何かを成し遂げて死ぬのなら、ずっと怖くないと思っていた。

だがあの雪に埋もれたときに、自分は死というものに本当に恐怖を感じたのだ。

絶対になくしたくない。絶対に離れたくない人と出会ってしまった。

そのせいで、自分は本当に弱くなってしまったのだ。

「あたしは弱く。……いや、違う。この想いは」

ヴィータは自らの心に答えを浮かべる。これが本当に正しいのかはヴィータにはわからない。だけど絶対に間違つてはいないと。そう確信することはできた。

「カイズが帰ってきたら。ちゃんと伝えねえとな」

その答えにたどり着いたヴィータには、もう不安はなかった。彼女はギユツと手を握りしめると、二人が暮らすアパートに帰っていくのだった。



鏢迫り合いになろうとした瞬間、カイズはその刃を反らすと攻撃を回避する。

(勝てるとは思ってない。だけどこの差は)

ベルカの騎士、特にシグナムと戦うときはとにかく距離を作らなければいけない。それは頭ではわかっている。

だが試合開始と共にあつと言う間に距離を詰められ、次の瞬間勝負が決まったもおかしい状況ではなかった。

それでも何とか堪え忍んでいるのは、シグナムのデータがイノセントハートに多く取り込まれているからだ。

デスイーターやノーナンバースより強く、非殺傷設定とはいえシステムよりも思い切りよく打ち込んでくるシグナム。逆に言えば、ここまで耐えている方が奇跡であった。

「どうした、防戦一方であるのがお前の答えなのか！」

「そうは言っても。——ぐっ！」

避けきれなかった剣撃で、ミッド側の黒刀がたたき落とされる。これでもう距離をあげることにできない。

カイズは二股の黒刀の防衛システムを解除すると、そのシステムを完全に演算のみに回した。

どうする。どうする。どうする。

この回避ももう長くは続かない。すでに呼吸は乱れているし、体力も限界に近づいている。

正直、シグナムがこの戦いでなにを求めているのかはわからない。だがこのまま何も示さないで終わることだけは、あつてはならないはずだ。

だがこのままでは。

カイズの顔に焦りの色が見え始める。シグナムはそんな彼を見ると、剣撃を止める。

その瞬間、カイズは彼女から距離をとる。シグナムはそれを追撃することなく、一呼吸おいた。

「——次で終わりだ。答えを出してもらおうぞ」

上段にレヴァンティンを構えた瞬間、あたりの空気が凍り付くのがわかる。手加減など初めからなかった。だからこそわかる。この一撃を受ければ、自分はしとめられると。

だがこれは逆にチャンスだ。このまま持久戦に持ち込めば勝てる相手に、彼女はわざわざ一撃粉碎の体勢に持ってきてくれたのだから。

チャンスは一瞬だ。カイズはデバイスと自らの知識を重ね合わせ、シグナムがどの角度で打ち込むかを必死に演算する。

そしてその一撃よりも早くカウンターを放つ。カイズの一撃ではシグナムの斬撃は止められないだろう。だがうまくいけば引き分けには持つていける計算だ。

「——行くぞ」

シグナムが上段の剣の角度を変える。その角度に剣が構えられるのはカイズとイノセントハートの総意と一致していた。

絶対にタイミングは外せない。ここで決める。

ベルカ式の黒刀を握りしめると、真っ直ぐにシグナムを見る。

「ハアアアアアアアッ!!」

大気を震わせるほどの叫びと共に、シグナムが突撃を仕掛ける。もう少し、もう少し距離を詰めれば。

その瞬間を見謝らないように。カイズは踏み込む足に力を込める。

『——カイズ』

「えっ」

刹那、大切な人が自分の名前を呼ぶ声が聞こえる。だがここに彼女はいない。しかし確かにその声は彼の心に響いたのだ。

「ぐっ、あああああああつ!!」

叫びと共に、踏みしめる足に力を込める。迫りくる刃、それをカイ

ズは。

——ドスンッ!!

真っ直ぐに刃が振り下ろされる。だがその一撃はカイズを捕らえていない。しかしそれはシグナムも同じことだ。捨て身と共に放たれると思っていた攻撃は、シグナムの体には届いていない。当たり前だ。カイズは地面を踏み抜くと、そのまま遙か後方まで下がっていたのだから。

カイズは木に背を預け、目を見開いたまま荒く呼吸をしている。対して全く呼吸を乱していないシグナムは、その切っ先をカイズに向ける。

「どうして最後の―撃を避けた。相打ち覚悟なら私を倒せたかもしれないぞ」

怒りの色を見せながら放たれた言葉。だがカイズは視線を空に向けながら、独り言のように声を上げる。

「こゝ、声が聞こえたんです」

「声?」

「ヴィータさんの声が。ここにいないのは俺もわかってます。念話でももちろんありません。でも相打ち覚悟を思った時に、確かに聞こえたんです。……ヴィータさんが悲しそうな顔で自分の名前を呼ぶ声」

反射的に戦いから逃げてしまった。だが落ち着いた今ならわかる。どうして自分が相打ちの覚悟をやめてしまったのか。

何度も何度も深呼吸をすると、明後日の方向を見ていた目がシグナムに戻る。シグナムは彼を睨みつけた。

「さて、続きを始めるか」

「……いえ、俺はもうシグナムさんと戦いません。Bクラスの俺ではどうあってもシグナムさんには勝てません。どんなによくてもワザと隙を見せてもらったの相打ちがせいぜいです。だからこれ以上は続きません。もし続けるなら、俺とイノセントハートは全力を持ってこの場から逃げます」

「二度受けた騎士の決闘から逃げるといふのか」

「はい」

カイズは何の迷いもなく肯定の言葉をあげる。そして困ったように声を上げた。

「だってここで俺が大怪我をしたら、ヴィータさんが悲しむと思うんです。きっと自分自身が怪我をするよりも、ずっと深く大きく。だから俺は一か八かに賭ける気はありません。……もう、俺のことで彼女を苦しませたくないから。——これが、俺の答えです」

カイズの答えに、シグナムはフンと鼻を鳴らす。だが彼女に怒った様子はない。レヴァンティンを一振りすると、そのまま待機モードに戻していった。

「だ、そうです。主はやて」

シグナムはバリアジャケットを解除すると、カイズもまたそれを解除する。シグナムは二歩後ろに下がると、その代わりにはやてはカイズの前に立った。

「それが、カイズ君の答えなんやね」

「はい。……すみません、皆さんの期待に応えられなくて」

「そんなことあらへんよ。それが私らの望んだ一番の答えなんやから」

はやてはその手に夜天の書を出す。彼女は魔力でそのページをめくると、ある一ページでそれを止める。

地面に白いベルカ魔法陣が浮かび上がると、はやては柔らかい笑みを浮かべた。

「複雑な術式の過程はもう終わらせてあるんや。だから、あとはそれを発動するだけ」

「はやてさん?」

「夜天の書の主、八神はやてが命じる。その管理者権限を持ち、鉄槌の騎士ヴィータの管理者権限を目の前の人物へと移行をする」

「——はやてさんっ! それは、駄目です!!」

「いいんよ。カイズ君が私らの求めた答えを示してくれたから。だから私らもそれに応えたいんよ」

はやては人差し指を、トンとカイズの胸に置く。その瞬間、カイズ

の胸には小さな魔法陣が生成された。

カイズはその魔法陣に手を当てながら、首を横に振る。

「駄目です。駄目ですよ。……だってこれははやてさんとヴィータさんを繋ぐ大切なものじゃないですか」

「ううん。私たちにとつて、管理者権限なんて『こんなもの』なんよ。こんなものがなくても、私たちヴィータは心と心が繋がってる。だって私たちは家族なんやから」

「あ、ああ……」

胸の魔法陣が収縮される。黙視することはできない。だが胸の奥に確かに刻まれたのだ。何十年とはやてとヴィータを繋いでいた絆が。

瞬間、体が少し重くなるのを感じる。カイズはその場でよろけそうになるが、そんな彼をシグナムが支えた。

はやては夜天の書をしまうと、物憂げな顔をカイズに向ける。

「初めは少し魔力負荷が大きいかもしれへん。だけどしっかり受け止めてやってな。——その重みがこそが、これからカイズ君が共に歩く道なんやからな」

「はやてさん。……俺、俺」

「ほら、大の男の子が泣かないの。——改めて、結婚おめでとう。

ヴィータのこと、よろしくね」

はやての言葉を皮切りに、終始無言だった八神家が面々が次々と祝福の声をかけていく。

大切な、大きな、そして絶対に落とすてはいけないバトンを受け取ったカイズはしばらく声をあげることができなかつた。

だが涙を流しながら、それでも、そうであっても、その一言一言をしっかりと心に刻みつけていくのだった。

二人の帰る場所

自宅の扉前。カイズは両頬を叩くと、気を張りなおした。

「ただいまヴィータさん」

カイズの言葉に返答はない。だがこちらに向かう足音が聞こえると共にヴィータはすぐに出迎えてくれた。

「お帰りカイズ、つて、どうしてそんなに汚れてるんだ！　またなんか無茶してたのか」

「あー、これはちよつと盛大に転んじやつて。でもそれだけですよ、怪我は一切してませんし」

ヴィータがそう言うからには、まだ管理者権限の話は彼女には話されていないのだろう。まあ当然だ。もし自分があそこで相打ち覚悟をしていたのなら、はやては決してその権限を譲ろうとはしなかったのだから。

ヴィータはカイズの体を触っていくと、本当に怪我がないことを確認する。そして一安心だと、ほつと一息ついた。

「もうあんまり心配させるんじゃないやねえ。……………いや、そうじゃないんだよな。やつとわかったんだ。だから早くそれを伝えたかった」

ヴィータは汚れていることなど気にせずカイズを抱きしめる。そしてその答えを口にした。

「あたしたちは管理局に属してる。いや、そうじゃなくてもあたしもお前も困っている人を放っておけない性分だ。……………だからこの前みたいに大怪我を負うのも、もしかしたら、もしかしたらそれ以上の可能性も。……………ありえることだと考えてた」

「……………ヴィータさん」

「だけど無茶をするなんて言えなかった。カイズはたくさんの人を救いたいという思いを邪魔したくないし、それはあたしにも言えたことだからな。……………だけど、あたしは今からワガママを言うぞ。それでカイズが困ることになっても、絶対これだけは守ってもらわなければならない」

ヴィータは抱きしめていた腕の力を弱めると、上目で彼を見つめ

る。そしてその言葉の続きを口にした。

「人を助けるためなら。困っている人を救うためなら。どんな無茶をしてもいい。許す。だけど絶対に死ぬんじゃねえ。どんな怪我を負ってもいい、それでまたあたしを忘れたつていい。それでも……。それでも絶対に帰つてこい。絶対、絶対なんだから」

そう口にするヴィータの体は小さく震えている。

きつと彼女自身、子供じみたことを言っているとわかっているのだろう。この言葉が今後カイズの意志を縛ってしまうかもしれない。ヴィータはカイズの重りにも束縛にもなりたくはなかった。

だからこそ、自身のワガママを彼がどう受け取るかが怖かったのだ。

言葉にされなくてカイズにはヴィータの気持ちがあわかった。カイズもシグナムとのあの戦いで、全く同じことを思っていたのだから。

今度はカイズがヴィータの体を強く、強く抱きしめていった。

「だったら俺とも約束してください。ヴィータさんもどんな無茶無理をしても構いません。だけど絶対に俺の元に帰ってきてください。ヴィータさんがいなくなったら、きつと俺、ものすごい泣くと思うんで」

「……………絶対にあたしのほうがいっぱい泣くぞ」

「いえ、俺の方が泣き散らしますって」

「いいや、あたしのほうが」

「俺が」

お互いがお互い自分の方が悲しむと声を上げる。そのなかでヴィータはカイズを抱きしめる手に再び力を込める。

そして二人はお互いに目を合わせていった。

「だったら絶対に帰つてこないといけませんね。———約束します。俺、何があつても必ずヴィータさんの元に帰ってきます」

「ならあたしもここで誓うな。どんな困難があつても絶対にあたしはカイズの元に帰ってくる。———ここが、あたしの帰る場所だからな」

お互いに抱きしめる力を緩めることなく。深く、強く互いの体温を確かめあう。

もう俺は絶対に彼女を悲しませない。

もうあたしは絶対に彼を苦しませない。

その約束に明確なものは存在しない。

だが絶対に消えることない想いであると二人は確信しあっていた。

二人で歩く 幸せな未来へ

目の前には木製の大きな扉がある。

純白のウエディングドレスに身を包んだヴィータ。髪の毛を下ろし、普段はしない化粧や口紅を塗った彼女は、ただ真つ直ぐにその扉を見つめていた。

この扉の向こうにどのような光景が待っているか彼女は知らない。だがこの先にある未来を彼女は確かに確信していた。

「行こう、ヴィータお姉ちゃん」

「行こうか、ヴィータ」

ベールガールのミズホとヴィータの付き添いであるはやてがその声を上げる。ヴィータは小さく頷くと、目の前の扉がゆっくりと開かれていった。

バーজনロードに一步足を踏み入れる。そしてヴィータは周りの光景に目を向けた。

親族であること。親友であること。そんなことは関係ない。

聖王教会直属のこの広大な式場には、ヴィータ、そしてカイズに關わりのあるものが全員揃っていた。

はやての腕に手を絡め、少女にベールガールをしてもらい、ヴィータは一步、また一步と赤い絨毯の上を歩いていく。

教会内は静まり返っていた。だがそんなことを忘れるほど、皆の笑顔がその場を盛り上げてくれていた。

ずっと一緒にいてくれた家族。

ずっと歩んできた仲間。

もし自分が違う歩みをしていたら出会わなかったかもしれない新たな友達。

みんな、みんな、ヴィータの幸せをただ祝福していたのだ。

はやてと少女の足が所定の位置で止まる。自分達が行けるのはここまでだ。そう目で語りかけてもらおうと、ヴィータは一人で歩き進んだ。

純白とは正反対の黒のタキシードに身を包んだカイズ。彼の隣に

つくと、お互い柔らかい笑みを見せあつた。

そんな二人の前に一人の金髪の女性が立つ。今回はやてと共に、式場探しに協力してくれた聖王教会所属のカリム・グラシアだ。

彼女は持っていた本を開くと、まずカイズに問いかけた。

「カイズさん、あなたはヴィータさんを妻とすることを望みますか」

「はい、望みます」

「順境にあつても逆境にあつても、病気のときも健康のときも、夫として生涯、愛と忠実を尽くすことを誓いますか」

「はい、誓います」

カイズの望み、そして誓いが約束される。カリムはヴィータのほうを向くと、再び問いかける。

「ヴィータさん、あなたはカイズさんを夫とすることを望みますか」

「はい、望みます」

「順境にあつても逆境にあつても、病気のときも健康のときも、妻として生涯、愛と忠実を尽くすことを誓いますか」

「はい、誓います」

「わたしは、お二人の結婚が成立したことを宣言いたします。お二人が今わたしたち一同の前でかわされた誓約を神が固めてくださり、祝福で満たしてくださいますように。——それでは誓いの口づけを」

カリムの言葉に従い、ヴィータとカイズはお互いを見つめ合う。

ずっと夢見ていたこの瞬間。

数々の困難に見舞われ、来ないかもと何度も頭を過つたこの瞬間。

ヴィータの頭には、これまでのカイズとの出来事が次から次へと浮かび上がってくる。

だがそんな考えに彼女は心で首を振った。

今は過去を懐かしんでいる時間だつて勿体ない。

だつてこれから先、ヴィータとカイズには今まで以上の幸せが待っている。

過去を振り返らなくても、二人の幸福は約束されているのだから。

カイズはヴィータのベールを上げると、その顔を覗き込む。

「ヴィータさん、俺、絶対に——」

「なあ、あたしたちもう夫婦になるんだぞ。だから、さっ」

ヴィータが何を言いたかったのかすぐにわかったのだろう。カイズは大きく息を吸い込むと、緊張の面持ちのまま再び声を上げる。

「絶対に幸せに。……いや、これからも二人で一緒に幸せになつていこう。ヴィータ」

「うん。二人で一緒に幸せになろうね。カイズ」

カイズはヴィータの腰に手を回すと、そのまま彼女を抱きかかえる。

そして二人は幸せな未来を確信したまま、ゆつくりと口づけを交わしていった。

二人の祝福するように教会の鐘が鳴り響く。

そして二人のために集まった人たちは、みなその場で拍手をすると次々に祝福の声をかけていった。

短く、それでいて深い口づけを終えると、ヴィータはお日様のような笑顔を浮かべた。

「カイズ、大好き」

各式も様式も関係ない。二人は互いの目を覗き込むともう一度口づけを交わす。

そんな二人を祝福する声は止むことなく。

まるで二人の永遠の幸せを指し示しているかのように、ずっとずっと続いていくのだった。

番外編 シグナムさんは男友達が少ない（※問題なくここからでも読めます）

失格の証明

薄茶色のタイトスーツに身を包んだ一人の女性。彼女は苛立つようにヒールを鳴らし、腰まで届くピンク色のポニーテールを揺らしながら扉の前に立つ。

ここは管理局のヘリ整備室だ。

「こちら貴様等！ また人を賭の対象にしていたようだな！」

「やっべ、逃げろ!!」

すす汚れた作業着姿の男たちは、その女性を見るやいなや蜘蛛の子を散らすように走り去る。

大の大人が三十人集まり、なぜ女性一人に逃げ出さなければいけないのか。それは教導の模擬戦の勝敗を賭事にしていた後ろめたさもそれなりにあったのだろう。

だがその理由はほんの些細なことだ。

烈火の将と呼ばれた彼女は、自慢のデバイスを展開すると首謀者を一喝する。

「ヴァイス、また貴様か！ 前回のことで懲りてないみたいだな！」

「いやいや、こう平和が続くとヘリの整備もすぐにおわっちゃうって。これくらい目を瞑ってくらさいよシグナムの姐さん」

「……それが貴様の最後の言葉でいいんだな」

シグナムはレヴァンティンを構えると、その切っ先をヴァイスに向ける。彼は「あははは」冷や汗を掻くと、脱兎のごとく走り出した。た。

「……ふう、全く」

シグナムはレヴァンティンを肩に置く。小さくため息をつく、がらんとしたヘリ整備室の天井を見上げた。

「平和なのはいいことだが、こうも怠け癖がつくのはどうかと思うな」
いや実際に彼らは怠けているわけではない。六課時代と違い、今は

四六時中へりを使っているわけではない。

へりの使用頻度が減れば、その分修理や点検にさく時間も少なくなり、結果彼らは仕事を完璧にこなしつつ怠け癖がついてしまっているのだ。

「あれでも六課時代の顔見知りも多い。緊急の時は動いてくれると思うが。……不安の種ではあるな」

まあ今回のことではしばらくは落ち着きを取り戻すだろう。シグナムは天井に向けていた視線を下ろすと、そのまま引き返そうとする。

その時だ。誰もいなくなっただけだと思っていたその部屋で、一人の男を見つけたのは。

「……………」

まるで今までの騒ぎが聞こえていなかったように、木箱を机にノートパソコンをブラインドタッチしている男。

シグナムはその背中に声をかける。

「おい貴様。私から逃げないといい度胸をしているな」

「……………」

無視をするのはいい度胸だ。いや、単純にこの賭事に関係していないのかもしれない。だが整備員が全員関わっているのに、そんなことがあるだろうか。

シグナムは彼のパソコンをのぞき込むと、その考えが杞憂であることがわかる。

よく言えば古風、悪く言えばかなりボロボロのノートパソコンには高町なのはを筆頭とした、様々な人間の名前が羅列されている。それは今回賭の対象になった人物のもので間違いない。

シグナムは額に青筋を立てると、男の肩を掴み大きく揺らす。

「おい、貴様。これだけ堂々とやっておいて、まだシラを切る気か！」

ぐわんぐわんと男の体が揺れる。だが彼はパソコンの画面から目を離すことなく、シグナムのことなどまるで意に介していなかった。

「き、貴様っ！」

男の態度に、シグナムの怒りはさらに増す。

元機動六課のシグナムと言えば、管理局では名を知らないものがないほどだ。また彼女を怒らせればどうなるか、それを知らないものもない。それゆえに、ヴァイスを含めたヘリの整備士は皆この場から逃げ出したのだから。

シグナムは肩から手を離すと、彼の目の前に移動する。そして右手をめいっぱい広げると、それを振り下ろした。

「……っ！」

パソコンの画面が閉じられるのに気がつくのと、男はさつと両手を離す。その瞬間、画面越しだった二人の視線がようやく重なった。

男の歳は二十代後半くらいであろうか。手入れをする気がないボサボサの髪の毛と無精ひげはあまりみていて気持ちのいいものではない。

いつも清潔している誰かさんの旦那とは大違いだ。

だが不快に思ったのは男も同じのようだ。男は閉じられたノートパソコンをそつと撫でると、シグナムを睨みつけた。

「……何のようだ」

「それは先ほどから何度も言っているはずだ。貴様、いくら遊び半分とはいえ、仲間を賭事の対象にして恥ずかしいと思わないのか！」

「賭事の対象って。……ほかの奴らは知らないが、俺はその賭には一切関与してないぞ」

「ほう、今更シラを切る気か？　だが残念だな。さきほど貴様が賭事のデータを表示しているのを私は見ている」

それが動かぬ証拠だとシグナムは詰問する。彼女のその眼力は、返答次第では容赦はしないとも言っていた。

いくら平和が続いているからと言って、最近気が緩みすぎている。ここらへんで、誰かにしらしめる必要も彼女は少し前から考慮していた。

今のシグナムにはそれだけのすごみがあった。大体のものならすぐにその場から逃げ出すか、それとも土下座して謝るだけのプレッシャーは放っていたのだ。

だがその男はそんなシグナムから視線を外さなかった。

「……………はっ、俺が整備士失格ね。まあ配属されて日が浅い。それは認めようじゃないか。だがな、そんなこと言ったらあんただって前線にでる局員失格なんじゃないのか？」

「い、言うに事欠いて!!」

前線にでる局員失格。つまり戦士として失格だと彼は言ったのだ。ベルカの騎士の将であり、管理局でも輝かしい戦果を出しているシグナムには一生縁がないと思われた言葉。彼女は思わず声がうわずってしまう。

「わ、私の何が失格だと言うんだ！」

「そんなの決まってるだろ」

男は右手をあげるとそのままシグナムの方に持っていく。――

―そして、そのまま彼女のたわわな胸を握りしめていった。

「ふっ、ふあ？」

突然の出来事に思考が停止する。いま何が起こっている。この男は何をしているんだ。

思わず変な声をあげてしまったことなど、気づく間もなく。男はシグナムの胸を手のひらの上で弾ませると、無表情のまま言葉を続ける。

「ごーんなでかい胸してよ。戦闘中絶対じゃまだよな」

「あっ、なっ、なっ。――何をするんだああああああああっ!!」

――バシインツ!!

シグナムらしからぬ悲鳴に似た声と共に、頬を叩く音が整備室に響きわたる。

賭事の注意から始まった頬へのビンタ。これがシグナムと彼女の初めての出会いであった。

型遅れの相棒たち

鬼の形相。今の彼女を一言で表すなら、それが一番正しいであろう。この三日間、家族の前以外では常に怒りを露わにしていたシグナムは、目的の人物を見つけるとその場から走り出した。

「げっ、姐さん！」

ヴァイスは彼女の表情を見ると、その場から逃げ出そうとする。いや、実際にはそのつもりだった。だがあまりの形相に体が萎縮してしまい、彼はそろりそろりと後ずさることしかできずにいた。

そのまま誘導されるように壁際に追い込まれると、ヴァイスは降参だと手を挙げた。

「逃げ回って悪かったですよ。この前の賭のことはほんとーに反省していますんで！」

だ、だからそんな怖い顔しないでくださいよ」

「貴様が心の底から反省しているならもうそれはそれでいい。――

――今日の用件はそれとは別だ。貴様に聞きたいことがある」

「な、なんでございましょうか」

「整備班のなかに、二世代ほど前の旧型のノートパソコンを持っている男がいるな」

「二世代前の旧型ノートって言ったら。……えっとコウキのことですか。こう、髪の毛がぼさぼさーってしてて無精髭があつて」

「そいつだ。そいつについて知っていることを教えろ！」

「そ、その前にレヴァンティンを首もとから離してもらえると、あ、いや、何でもないです。話させていただきます」

今はシグナムの言うとおりにしたほうがいい。本能で悟ったヴァイスは両手をあげたまま言葉を続けた。

「といっても、俺もコウキのことはあまり詳しくないんですよ。あいつがこつちに配属されたのは三ヶ月前のことですし。えっと、その前にはデータ管理をしてたはずですけど」

「ソフト部門からハード部門に移ってきたということか？ 何でだ」

「いやー、本当に詳しくはわからないんですよ姐さん。あいつあんま

り人と話さないし、気がつくとも型式の古いノートパソコンいじってるんで」

本当です。信じてくださいとヴァイスは懇願の眼差しを向ける。シグナムは睨みつける目はそのままに、レヴァンティンを待機状態に戻した。

「どうせ前の部署で何か問題を起こしたのだろう。全くあんなふざけた奴が管理局にいたとはな」

「ふざけたやつ？ コウキのやつがですか??」

「あいつ以外に誰がいる。この前の賭もお前とあいつが主体になってやってたんだろう!」

シグナムの怒号にヴァイスは再び萎縮してしまう。だがそれでも申し訳なさそうな顔をした。

「いや、あいつは何も関係ないですよ」

「関係ないわけないだろう。あいつのパソコンには賭のことが事細かに書かれていたぞ」

「えっ、あー、いや。……………あれは俺が頼んでプログラム組んでもらっただけですよ。初めは転属祝いを含めて、一緒に賭事をやるキツカケにと思って。でもさすがもとプログラマーですよ。あんな旧式使ってるのに、市販のソフトなんて目じやないソフトを作って」

「そ、それじゃあ本当にあいつはあの賭に関係してないのか」

「へ、へい」

その真実を告げられると、怒髪天だったシグナムの怒りが七分目ほどに下がる。

そ、それじゃあ私の勘違いだったのか。

そう頭をよぎるが、次の瞬間にあの時の出来事が思い出された。

そうだとしても、あいつは何も言い訳をしなかった。何より、あいつは私の胸を、わ、鷲掴みに……………。

あの時のことを思い出すと、再び怒りがこみ上げてくる。だがヴァイスの言葉はまだ終わっていないかった。

「それにコウキは俺たちの中では一番真面目なやつですよ。酒はやらない、タバコはやらない、賭事もやらない。俺たちからしたらちよっ

と堅物すぎる気がしますけどね」

「だが女癖は悪いんじゃないのか」

そうでなければ、いきなり女性の胸に触れるはずがない。シグナムはそういうが、ヴァイスは笑い声とともに大きく手を振る。

「いやいや、それが一番ないですよ。さつきも言ったように、あいつほとんど人付き合っていないですし。もちろん外ではどうか知らないですけど、女つ気があるようには見えませんけどね」

「だ、だったらどうしてあんなことを……」

「姐さんが何をされたか知らないですけど、あいつはそんな感情的な奴じゃ。……あー、えーつと、もしかしてですけど。——あいつのパソコンに何かしましたか？」

「——えっ」

パソコンに何かしたか。シグナムは三日前に思い切り彼のパソコンを閉じたのを思い出す。シグナムの顔を見て、ヴァイスもわかったのだろう。申し訳なさそうに言葉を続けた。

「いや、あいつは滅多なことじゃ感情を出さないんですけど、あの旧型のパソコンだけは別なんですよ。ほんと、詳しいことがわからないばかりで申し訳ないんですけど、何でもあのパソコンは——」

ヴァイスの言葉を聞くと、ずっと真つ赤だったシグナムの顔が段々と青くなっていく。

彼女はワナワナと口を開くと、脱兎のごとくその場から走り出していくのだった。



この場所に来るのはもちろん三日ぶりだ。シグナムは整備室の扉を開けると、ズンズンと中に進む。

「や、やべえぞー！」

彼女の襲来に休憩をしていた整備員は蜘蛛の子を散らすようにその場から走り出す。皆前回の賭のことで怒らえると思っただろう。そうでなくてもこの三日間彼女が怒りを露わにしているのは、局中の

噂になっている。

整備員は我先にと整備室から逃げ出していく。そしてやはりその場に残ったのは、一人だけだった。

「……………」

周りの人間など気にすることなく、あの時のようにコウキは一人黙々とノートパソコンに向かい合っている。シグナムは彼に近づくと、後ろから声をかけた。

「お、おい、そこのお前……………」

「(ピクツ)……………」

シグナムの声のコウキの体が一瞬反応する。だがこちらに振り返ろうとはしない。三日前とは違う。彼は故意にシグナムを無視しているのだ。

シグナムはそれがわかると、一瞬後ずさりそうになる。だが意を決すると、そのまま彼の前に回り込む。

そしてそのまま、深々と頭を下げていった。

「お前のことはヴァイスに聞いた。——本当にすまなかつた」

彼女はそのまま床に膝を突くと、その額床に向ける。そこまで彼女が行動すると、コウキは初めて慌てたような声を上げた。

「お、おい、何してるんだよ!」

「謝つても謝りきれることじゃない。だがまずは見えるように謝罪の気持ち」

「だからって女が土下座することなんてないだろう。とりあえず落ちつけて」

コウキは彼女の両肩を押さえると、何とか頭を下げさせないようにと踏ん張る。シグナムはそれに負けじと、力を込めた。

「お前が賭事に関わってないことは聞いた。悪いのは一方的に勘違いをしていた私だ」

「そんなことないだろう。俺はあんたの、その、む……胸を揉んだわけだし。先に手を出したのは俺の方だ」

「違う! 先に手を出したのは私の方だ。——そのパソコンおじの形見だったんだろう」

シグナムの言葉にコウキは一瞬苦い顔をする。だが手の力は弱めることなく、彼女を押さえ続けた。

「悪いと思ってるなら俺の言うことを聞いてくれ。と、とにかく土下座はなしだ」

「……………お前がそういうんだったら、それに従おう」

シグナムは床に正座をすると、真っ直ぐにコウキを見る。彼はその視線から目を外すと、あぐらに置いていたノートパソコンをゆっくりと横に置いた。

「ヴァイス班長から聞いたのか。……………ああ、そういえば二ヶ月前に一度暴れちまったからな」

「それもおじ上のパソコンがらみでか？」

「……………ああ、そうだよ。こんな型遅れのパソコン使ってないで、最新型のデバイスなりパソコンなり買えばいいのにつて足蹴にされて。ついカツとなつてな」

彼自身そのときを後悔しているのだろう。額に手をおくと、うなだれるように下を向いた。

「まあほかの奴には伝わり辛いよな。こんな型遅れのパソコンを使ってる方がおかしいわけだし」

「おかしいなんてことはない！」

シグナムはそう力強く言い放つと、コウキは目を丸くする。そこで初めて、本当の意味で彼女と彼の目が向き合った気がした。

「長年連れ添ってきた相方だからこそ可能なことがある。新しいもの新しいものとすぐに流されるよりも、私はずっと共感を持てるぞ」

「だ、だけど、このパソコンはじいちゃん世代に流行ってた型遅れ品だし」

「ふんつ、そんなことを言ったら私のレヴァンティンは戦乱のベルカ時代からあるものだぞ。—————だが私は自らの剣を変えることなく、今もこうして戦っている」

シグナムは待機状況のレヴァンティンを展開させる。自らの鍛錬とともに、手入れを怠っていない刀身を見せると、彼女はその大きな

胸を張って見せた。

「カートリッジシステムや細々とした部品はいくつか交換されている。今の技術なら、これと同じものを量産することも可能だろう。だがそれはあくまでレヴァンティンであって、レヴァンティンではない。長年連れ添ったからこそわかる戦闘のやりとり、ずっと握り自らの手にフィットする持ち手。何より私のレヴァンティンはこれのほかに存在しない。決して換えのきかないものなんだ。お前のそのパソコンもそうなんだろう」

「……………ああ」

それは二文字であったが、シグナムが語った言葉と同じくらい愛機に対する重みがこもっていた。落ち着いた今ならわかる。型遅れでありながら、劣化で生じる汚れ以外存在しないボディ。キーボードに残る塗装の剥げ具合は、それだけ彼がこのパソコンを使っていることをそのまま意味していた。

これだけ物を大切にする者に悪いやつはいない。シグナムはレヴァンティンを待機モードにすると、再び両手を床に着けた。

「お前の大切なものに先に手を出したのは私だ。しかし卑怯と言われるかもしれないが、レヴァンティンを殴りつけるとは口が裂けても言うことはできない」

「いいよもう。あんたが悪い奴じゃないってのはわかったし」

「それでは私の気が済まない！——だから一回は一回だ。思い切りやってくれ」

シグナムは両目を閉じると、覚悟を決める。

「い、いやできるわけないだろう」

「それでは私の気がすまないと言ったはずだ。覚悟はできている。さあ早くしろ」

あえて歯を食いしばることなく、そのままを受け入れようと体の力を抜く。いまコウキがどんな顔をしているかはわからない。だがその場にちゃんといえることは空気で理解できた。

「……………ほ、本当にやらなくちゃいけないのか」

「私のためだと思ってくれ」

「えー、あー、うー。……そ、それじゃあ。ほ、本気ですか？」
「早くしろ！」

なぜ殴られる側がこんなにも強気なのか。シグナム自身おかし
いと思いつつ、口調を強くする。

「……………わ、わかった。それじゃあ」

「思い切り頼むぞ」

「……………おお」

コウキが大きく深呼吸するのが聞こえる。どうやら覚悟を決めて
くれたようだ。シグナムはその時がいつきてもいいように、体の力を
全て抜く。そしてコウキはその手を伸ばした。

——ふにゆ。

擬音にしたら、きつとこんな音が流れていただろ。シグナムは三日
前と同じ感触を受けると目を見開いた。

「いやー、それにしてもすごい胸してるよな。まあ女の胸なんて全然
触ったことないから比べようはないけど」

「なつ、なつ、なつ」

——ふにゆ、ふにゆ、ふにゆ。

何度も何度も感触を確かめるように手が動かされていく。コウキ
は一度手を離すと、シグナムの胸を揉む位置を変えていく。瞬間、彼
の人差し指が彼女の突起にぶつかった。

——コリッ。

「あつ、やつ!？」

シグナムはあげたことのない声とともに、感じたことのない小さな
痺れに襲われた。

きつとコウキは何も気づいていないのだろう。その位置で胸を揉
まれるたびに、小さな電流は徐々に大きなものになっていく。

な、なんだ。何なんだこの感じは。

胸をイジられたことは何も初めてのことではない。いや、八神家に
とって主に胸をイジられるのは日常茶飯事といってもいいかもしれ
ない。

慣れているはずの行為、その行為が全く別のものに感じシグナムは

とにかく困惑してしまつたのだ。

コウキはそのあと二度ほどその手を動かすと、手を離していった。「それじゃあ、これで貸し借りは。……………あれ、どうしたんだ？」

顔を真っ赤にし俯いているシグナムを見ると、今度は彼が困惑してしまう。シグナムは恥ずかしさのあまり、目に少し涙を浮かべると、ギョツと右手を握りしめた。

「……………」

「いつ？」

「いやああああああああつ!!」

普段絶対に叫ばない黄色い悲鳴と共に放たれた右ストレートが、綺麗にコウキの右頬をぶち抜いていく。

彼は空中で三回転すると、そのまま壁まで吹き飛ばされていく。シグナムはその顛末を見ることがなく、整備室から逃げるように去っていくのだった。

二人の日常

ここ最近の日課とも言おうか。シグナムは昼休みになると、毎日のように整備室にやってきていた。

いつものように部屋の隅っこでパソコンとにらめっこしているコウキの横に座ると、シグナムは頭を下げる。

「あの時はすまなかつたと思ってる」

「それはもう何度も聞いた」

「だ、だけどお前も悪いんだぞ。私は殴られるつもりでいたのに、その胸を、(ご)によごによ)」

「俺は女を殴るつもりなんてさらさらないんだよ。無理矢理俺に殴らせて、お前はすつきりするかもしれない。だけど殴った俺からしたら後味が悪いなんてレベルじゃないぞ」

「じゃ、じゃあどうケジメをつけたらいいんだ。その、前回殴ってしまった分を」

「だから何もしなくていいって言ってるだろ。全く本当に融通がきかないんだな」

コウキは画面から目を外すと、シグナムを見る。彼女の真剣な眼差しを見ると、困ったように頭を掻いた。

「そもそもこんなところに毎日来ていいのか」

「仕事のほうは問題ない。それに昼休みをどこでとろうがそれは個人の勝手だと思うが」

「いや、そういうことじゃなくてさ」

コウキはチラチラと辺りを見る。そして少し居心地の悪い顔をしながら、仕方なくとビニールからパンを取り出した。

その隣でシグナムははやお手製の弁当箱を取り出す。彼女のパーソナルカラーのピンク色のそれは、女性のものにしてはなかなかの大きさだった。

「またパンが二つか。それでは栄養バランスが悪いんじゃないか」

「お前が食べ過ぎなんだよ。……まあ前線の人間はカロリー消費がものすごいわってよく聞くけど」

「ああ、そうだな。体を動かしていればこれぐらいの食事量など微々たるものだ」

「微々たるものって。……まあそんだけ栄養が行き渡ってれば問題ないのか」

「……うん？ どういうことだ??」

「なんでもねえよ。いただきます」

「おっと、いただきます」

二人して手を合わせると、それぞれの食事を食べる。コウキは片手でマウスを操作しながら、総菜パンを口に含む。そんな彼を見て、シグナムは自らのお弁当をみた。

「もしよかったら少し食べるか？ 主のお手製だ。味は満足のいくものだと思うぞ」

「いや、さすがに人様の弁当は。……いや、やっぱりもらおうかな」

「そうか、お前にしては素直だな。——だがそれでケジメをつけたとは私は思わないからな」

「——ちっ」

コウキはイタズラっぽく舌打ちすると、パンを一個食べ終える。だが整備のために黒く汚れた手を見ると、首を横に振った。

「袋に入ってるパンならあれだけど、さすがに手づかみじゃ無理そうだからやめとくわ」

「別に手を使う必要はないだろうだ。ほら、卵焼きでいいか？」

そういうと、シグナムは卵焼きを箸で摘む。そしてごく自然にそれをコウキの口元に持っていった。

目と鼻の先まで卵焼きがくると、コウキは「うっ」と顔を赤くする。

「い、いや、さすがにそれは……」

「まさか主はやての料理の腕を疑っているのか？ それは聞き捨てならないな。ほら、早く食べてみる」

「そ、そうじゃなくてよ。……あんたは平気なのかこんな状況で」

「こんな状況？」

コウキの視線があちこちにいるのを見て、シグナムもそれに

習う。するといつの間に集まったのだろうか。ヴァイスを含めた整備兵達が、にやにやとした顔をつきでこちらを見ていた。

何人かはなぜか悔しそうに涙を流していたが、だいたいは同じ反応だ。

コウキの反応と周りの様子、そして今自分がしていることを改めて考えると、シグナムはカーッと顔を赤くした。

「……………うつ」

「うつ？」

「うわあああああつ!!」

「ちよ、おい、んぐふっ!!」

叫びと共に宙をさまよっていた卵焼きが、無理矢理コウキの口に押し込められる。箸が喉の奥に突き刺さるのを彼は気持ち悪く感じながらも、「う、うつ」と卵焼きを飲み込んでいく。

手探りでお茶をたぐり寄せると、しばらくせき込み続ける。そんな彼を見て、シグナムの顔をは真っ青になってしまう。

「す、すまないっ!!」

シグナムは頭を下げながらも、お弁当箱をしまう。自身の失態と好奇の視線に耐えられずその場から走り出してしまった。

廊下にでると、シグナムは自らの失態を思い出しトマトのように顔を真っ赤にしてしまう。

「私は何をしてるんだ」

これでは借りを返すどころか、どんどん借りが増えていくばかりだ。

こんなことで明日どんな顔をしていけばいいのか。

そう思うシグナムは気づいていなかったのだろう。

彼に会いに行くということが、自身の中ですでに自然なことになっていることに。



「とっころでよくやってるそれはなんなんだ？」

お弁当事件から三日後、何とかわだかまりがとれたところで、シグナムはノートパソコンの画面を指さした。

コウキは画面に目を向けながら、その質問に答える。

「いろんな呼ばれかたがあるけど、簡単に言えば地雷ゲームっていったところだな」

「それはどういうゲームなんだ？　なんだかひたすらクリックをしていくようにしか見えないが」

画面に表示されたブロックをクリックしては、数字が現れる。その数字は1であったり、2であったり、4であったりと様々だ。時折考えるように旗のようなマークをたてている気がした。

「どういうゲームか。……うーん、一言でいうなら。——人生かな」

「ほう、人生とは大きくでたな」

「この手のゲームはハマる奴はめっちゃめっちゃハマるからな。逆にハマれない奴は、すぐに飽きると思うけど。——やってみるか？」

「私にもできるのか？」

「クリックするだけだからな。それじゃあ初級に設定を戻してつと」

先ほどコウキが挑戦していたものの、五分の一ほどの大きさのものが表示される。

「さつきも見ての通り、何も書かれてないブロックをクリックすると、数字が表示される。その数字の数だけ、その周りには爆弾が仕掛けられてるんだ。プレイヤーはその爆弾を踏むことなく、爆弾だと思われる場所に旗を立てながら全てのブロックをあけるようにするんだ」

「本当に単純なんだな」

「ルールが単純で面白いってことは、それだけ完成されたゲームってことだよ。ほら、やってみるよ」

「う、うむ」

マウスを渡されると、コウキはシグナムにパソコンの正面を譲るとにかくこの状況では何もヒントがない。彼女はとりあえずブロックを一つクリックすると、そこには『1』という数字が表示された。

これでこの周りには一つ爆弾が仕掛けられていることになる。シ

グナムは探る探るほかの場所をクリックすると、次の瞬間一気に多くのブロックが開いた。

「こ、これはどういうことなんだ」

「初級は爆弾の数も少ないからな。こうやって一気に開けることもある」

「なるほどな。どうやら思った以上に単純で簡単なゲームのようだな」

「———そうだといいがな」

含みのある言葉をコウキは放つが、すでに半分以上開いているならゴールは近いはずだ。

シグナムは意気揚々とほかのブロックをクリックしていった。

「ここで、これで……ああ、また爆弾か」

「そ、そうか『3』の表示がここにあるから、この場所には確実に爆弾があるはずじゃないか！」

「あと一本、一本旗が多ければ。………なら、こっちだ!! あっ、うっ」

シグナムがゲームを始めてかれこれ二十分は立っただろう。ルールもわかりはじめて、画面上ではあと一歩までたどり着くことができている。

だが最後の最後になると、どうしても爆弾を踏んでしまうのだ。

「どうだ。完成されたゲームだろう」

「こ、こんなのただの運試しゲームではないか！」

「そう思ってるうちはまだ経験が足りなんだよ。ほら、貸してみろよ」
シグナムからマウスを受け取ると、パソコンの画面を自身に向ける。

「初級なんて久しぶりだな。———さて」

カチリとブロックを開けると、数字が表示される。そこから先は、流れるような動きだった。

まるで何がどこにあるか理解しているように、躊躇なくブロックを

開け、旗を立てていく。

(す、すごい。いつさいの迷いがいいな)

気がつくときグナムは食い入るように画面を見つめていた。華麗といつていいほどに、迷いなく全てのブロックが開かれる。

一回目は九秒。二回目は七秒。三回目は八秒。四回目は六秒。

コウキはそれから十回連続で初級編を成功させる。さらに彼は初級の五倍はあるものを表示させると、それも淡々とクリアして見せた。

彼は「ふうー」と一息つくとき、グナムの方をみた。

「なっ、運ゲーじゃないだろう」

「そ、そのようだな」

確かにこのゲームは数字を表示させることにより、ある程度の予測が可能になる。それは彼の動きから理解できた。だが驚くのはコウキの頭の回転の速さだ。

ほぼノータイムで地雷を処理していく姿は、まさに美しいの一言に尽きた。

「ふむ、本当に奥深いゲームのようだな」

「えっと、まあわかってくれたのは嬉しいけど。……もうそろそろ離れないか」

「何から離れるんだ？」

「いや、その。……俺の腕にな。あのよ」

「腕に。——ツウ！」

コウキの地雷処理にのめり込みすぎてしまったのだろう。出来るだけよく画面が見えるようにと、自然に体を動かしていたグナムは、気がつくとき彼に体を押し当てていた。

彼の言う腕には、グナムの豊満な胸の形が変わるほど押しつけられていた。

グナムは正座のまま器用にバツとその場から飛び離れる。両手で胸を隠すように包むと、赤面しながら声を上げた。

「わ、わざとではない。そ、それに急に慌ててみせるな。……女の胸なんていくらでも揉んでいるんだろう」

「ブツ、そ、そんなわけないだろう！ あの時は頭に血が上ってて、つい勢いのままにやったただけだ。元々人付き合いが苦手で、そんな経験なんてないんだよ!!」

「そ、そんな経験って……………」

シグナムはそう復唱すると、頬を染めながら兩人差し指をぐるぐる動かす。そんな彼女を見て、コウキもまた右手で口元を押さえシグナムから視線を外した。

「ち、違うからな。今のはセクハラとかそういうんじゃないでな」

「し、心配するな。そ、それ、それくらい私もわかっている」

わかっている。わかっていると頭では理解しているのに、どうしても落ち着くことができなかった。

結局二人はそのあと顔を合わせることが出来ず、その時間だけ地雷ゲームのタイマーは時を刻んでいくのだった。

戦うことしか知らない私

管理局の廊下。シグナムは見慣れたすす汚れた銀髪を見ると、その背中に声をかけた。

「廊下で会うのは初めてだな。整備のほうはどうしたんだ？」

お昼が入っているであろうビニール袋と、片手に型遅れのパソコンを持ったコウキは、その声を聞くと振り返る。

「もう全部終わっちゃったよ。まあ最近ずっと平和が続いてるからな。もう整備室の端から端まで整備し尽くしまったよ」

「奇遇だな。私も今日の業務は先ほど全部終わったところだ」

「そっか。……じゃあ今日は外にでも行くか。いい天気だしよ」

そう何気ない、自然な言葉をかけられる。別に普段から約束をしているわけではなく、シグナムが勝手に押し掛けている関係だと彼女は思っていた。

だからこそ、コウキのほうから食事に誘われたことにシグナムは心に温かみを感じるのだった。

「で、では、そうするか」

「弁当は？」

「途中でロッカーに寄ってもらえるとありがたい」

「おう、それじゃあそうするか。案内頼むな」

シグナムのロッカーの場所を知らないコウキは、彼女の隣に着くと歩幅を合わせる。

男の人と一緒に歩いている。そう意識すると、シグナムは心にむずがゆいものを感じた。

(そういうえば、男と関わることなんて私にはほとんどなかったからな) 常に戦いに身を置いてきた。仲間に男は何人かはいるが、それでも女性の戦友のほうが遙かに数が多い。

無言のまま互いの靴の音だけが廊下に響く。こういうとき何を話しているのか、シグナムは頭をぐるぐるさせた。

(得意なレンジは？ 得意な武器はあるか？ ……いやいや、何を考えてるんだ。もとよりあいつは整備士だぞ)

なら好きな陣型は？ フェイントは何度入れるか？ 空中戦はこなせるか？

さまざまな考えが浮かぶが、全てが戦闘に対することだとわかると、彼女は心の中で頭を抱えた。

（わ、私には戦闘のことしか話題がないのか……………）

いつだろうか、ヴィータに『戦闘狂』だと言われたことがある。だが当時は、自分と接戦できる相手ができたことがただ嬉しかった。そう思っていた。

（テストアロツサも特に付き合うことに不満は持ってなかった。だからそれが普通だと思っていたが）

ヴィータの言葉が何度も何度も頭の中で反芻していく。何か、何か話題はないのかと必死に頭の中を絞り込んでいく。

「……………なあ、好きな武装は、ぶつ、どうしたんだいきなり止まって」
考え抜いた末の質問は彼の肩にぶつかることにより遮られる。

ロツカーはまだ先なのだが、シグナムがそう口を開こうとすると、それよりも先に目の前の男が口を開いた。

「あれ、もと先輩。こんなところで何をしてるんですか」

コウキよりも年下であろう、二十代前半の男がそこにはいた。赤く清潔感が漂う髪の毛に、きちつと着こなされた制服。まるでコウキとは真逆だった。

コウキはぼつの悪い顔をしたまま、口を開こうとはしない。

「ここはあんたみたいに責任を放り投げるような男の来る場所じゃないんですよ。いや、それにしても油まみれの作業着が本当にお似合いですね。あまりにもびったりすぎて、大きなゴミかと思っちゃいましたよ」

その男は包み隠すことなく、コウキを挑発する。だが彼は何も口にしない。ただすまなそうに、頭を垂れるだけだった。

そんな彼の態度が気に入らないのだろう。男はシグナムをちらりと見ると、さらに言葉を続ける。

「女連れでいいご身分ですね。まあ整備士なんて俺たちプロジェクト

チームと違って暇で暇でしようがないんでしょね。あーあ、こっちは誰かさんが抜けたせいで、休んでる暇なんて全然ありませんよ」

「……………そんな忙しいことになってるのか」

「はっ、今のあんたには関係ないことですよ」
ただただ挑発する行動に、シグナムの中でいらいらが増す。この二人の関係は彼女にはわからない。だが短い間ではあるが、コウキと一緒にいたシグナムにはわかる。

彼はこんなふうに責められる人間では決してない。

「おい、貴様——」

シグナムは一步前にしようとする。だがビニール袋を持った手が、彼女の行動を抑制した。

言い訳何もない。ただ力なく首を振るコウキを見ると、シグナムはそれ以上前にできることができなかった。

挑発に乗らず、何も言わない二人を見て男は「チツ！」と舌打ちする。

「それじゃあ忙しいので僕はこれで。せいぜい、大好きな機械と遊んでいてくださいね」

男は二人の横を過ぎ去ると、もう一度大きく舌打ちする。

「お、おい、言われるだけ言われて、それでいいのか」

そうシグナムは避難の声をあげるが、男の背中が見えなくなるまで。いや、見えなくなってもしばらくの間、コウキは一切口を開くことはなかった。

あんだだからいいと思った

管理局の中庭のベンチ。シグナムは眉間にしわを寄せながら、イライラと座っていた。

コウキは紙コップを二つ持って帰ってくると、その一つを彼女に渡す。

「まあこれでも飲んで落ち着いてくれ」

「私は落ち着いている。それよりもお前が落ち着きすぎなんだ。どうしてあそこまで言われて黙っていられるんだ！」

「あいつも。ユウキも悪い奴じゃないんだ。……悪いのは俺のほうなんだから。ほら、とりあえず受け取ってくれ」

「あ、ああ」

仕方なく紙コップを受け取ると、コウキはシグナムの隣に座る。彼はパソコンを膝の上に乗つけると、けだるそうに空を見上げた。

そして小さくぽつりと語りだした。

「俺つてさ、初等部のころちよつとした虐めにあつてたんだ。まあいま思えば大したものじゃなかったんだけど、その当時には本当に辛くて辛くてな」

「……どういうことだ？ それが何か関係があるのか」

「まあそういうことだ。——理由としても大したことのない、どこにでもありそうなどこにでもある虐め。俺は昔っから人とのつきあいがどうにも苦手で、周りには味方なんて誰一人いなかった。それは家庭でもほとんど同じだ」

コウキは紙コップのコーヒーを一口飲むと、空に視線を向けたまま言葉を続けた。

「周りのみんなは言うんだ。虐めに負けるな。ここで逃げたら一生後悔することになる。だから戦えって。……今になつたらわかる。それはきつと一般的に正しい答えで、そこで逃げないことはきつとその将来にも繋がるんだろうって。でもその時は怖くてしようがなかったんだ。もつと虐めが酷くなつたら、もとより自分にはそんな強さはないってただ逃げることばかり考えてた。——その時なんだよ。」

田舎から遊びに来たじいちゃんが、こいつをくれたのは」

コウキは視線を下げると、膝の上のパソコンを見る。そして夢いものでも触るように、何度も優しく撫でていった。

「じいちゃんは言ったんだ。逃げることの何が悪い。人間の友達なんていなくても、今はいくらでも娯楽があるんだぞって。ははっ、おかしなじいちゃんだろう。普通自分の孫にそんなこと絶対に言わないのによ。———。だけどその言葉でどれだけ俺は救われたか。戦え、戦えと後ろから尽き落としてくる声から、初めて解放されたんだ」

「いい、おじいさまを持ったんだな」

「世間一般的にはどうかはわからないけどな。だけどじいちゃんはすぐに付け加えたんだ。お前は弱いままでもいい。だが弱くあっても、強くあれ。殻にこもったままでも、自分磨くことだけは忘れるなって。」

———。それから俺とこいつとのつき合いが始まった。俺は周りの声を聞かずに、いつもこいつと向き合っただけで。古くさいゲームを何度も何度も繰り返し。新しいゲームはもうこのパソコンには対応してなくて、自分でプログラミングしたりもした。そうやっている間にも、俺はじいちゃんの言葉を忘れなかった。俺は殻にこもったままただプログラマーとしての腕を磨き続けた」

そこまで言葉を紡ぐと、コウキは小さく肩を落とす。

「現役で管理局に入隊。毎日大好きな画面と向き合っただけで、仕事も好調、一年前にはプロジェクトリーダーを任せられるようになった」

「ならどうして今は整備をしてるんだ。何か問題でもあったのか」

「問題ね。いや、問題は何もなかった。怖いくらい仕事はうまく進んで、それなりの役職をもらえた俺は、常に新しいハードやソフトと向き合っただけ。———。そう、そこにはお前のいう愛着なんてものは存在しない。人間と機械とのやり取りしか存在しなかったんだ」

「どういうことだ？」

「えっと、そうだな。もしあなたが『貴方のお使いのデバイスよりも、高性能なものが完成しました。今度からはこちらを使って戦ってください』なんて言われたら、どうする？」

「断固拒否する」

その言葉はほぼ反射的にでたものだった。だがそれは当然だ。長年連れ添ってきた相方ほど信用できるものなどないし、何よりただ性能がいいということだけで強くなれるとは到底思えなかった。

コウキはシグナムの反応を見ると、嬉しそうに顔をほころばせた。「あんなならさういうだろうな。そしてそれだけの結果を残してるんだろうな。だけど俺には無理だった。いくらプログラム技術をつけようとも、専門知識をつけようとも、パソコンに関してはスペックがそのまま力になるんだ。——時空管理局っていうのは、様々な次元を管理している。だからこそ常に最新最良のものを用意するのは当たり前だ。何度も、何度も古いパソコンが取り替えられ、機密データが復元されないようにと処分されていくのを俺は何度も見た。そのたびに、胸がズキズキしたんだ。まだこいつらは動ける。働けるよって声が聞こえてくるんだ」

コウキはもう一度紙コップに口をつけると、残りのコーヒーを全て飲み干す。そして手のひらでそれをくしやりとつぶした。

「そこで気づいたんだ。俺は確かにプログラムやゲームをすることが好きだ。だけどまず何よりも機械が好きなんだって、それに気づいたらあとは早かった。——前期のプロジェクトが終わると共に、俺は転属願いを出した。いろんな人間から引き留められたが、あれ以上あの場にいたら頭がおかしくなりそうだった。——俺は逃げたんだ。パソコン達を救ってやれない辛さから目を背け、機械を直す仕事へと」

これで全部だと、コウキは大きなため息をつく。そしてすまなそうに、シグナムを見た。

「こんなつまらない話をして悪かったな」

「つまらないなんてそんなことはない。だがそれだけの理由があるのなら、どうしてさっきの男はあんな悪態を」

「そりゃ話してないからだ。これはただの言い訳だし、弁明できる内容でもない。だからだーれにも話す気なんてない。——いや、今となってはなかったのが正しいか」

「——！　そ、そうだ。どうしてそんな大切な話を私なんか」

「庇ってくれたのとか、怒ってくれたのとか。それも多少はあるけど、やっぱり嬉しかったんだらうな」

「嬉しかった？ なにがだ??」

あれだけ迷惑をかけているのに、何か自分は彼を喜ばすことをしただろうか。シグナムは顎に手を添え首を傾げる。コウキはそんな彼女を見ると、まるで少年のような無邪気な笑みを見せた。

「俺がこのパソコンを使ってるっていったとき、あんたはすぐに俺を肯定してくれた。ただの上っ面じゃない。あんたは真面目な顔して心の底から俺の思いをわかるって言うってくれたんだ。——そんなこと生まれて初めてだった。だから、あんたになら話していいかなって。そう思ったんだ」

よし、これで話はおしまいだ。そう言わんばかりに、コウキはビニール袋からパンを取り出す。

だがシグナムはすぐに頭を切り替えることができなかった。今の彼に何か言葉をかけてあげたい。そう思い脳をフル回転しているが、なにも言葉がでないのだ。

(どうして気の利いた言葉の一つもでないんだ。……こういうとき、なんて言葉をかけたらいんだ)

シグナムは家族や仲間には多く恵まれている。だがこと、こういう相談ごとには慣れていなかった。

生まれてこの方戦いの中に身を置き、剣を振り続けてきた。せつかく彼が心内を話してくれたのに、何もいえない自分が腹立たしく、そして情けなかった。

(私は、情けない女だな……)

結局言葉がでてくることはなく、自身のお弁当に手を伸ばす。その時だ。

——ビービービーツ!!

「何だ、この音は!!」

管理局の内部から、強烈な警戒音が聞こえる。次の瞬間、管理局の電気は次々と消えだし、何かの機械が動き出す音が聞こえる。

「侵入者か!? だが何だこの音は、今まで聞いたことのないタイプだ」

スカリエツテイ事件以来、規模は小さくとも管理局に何かが入ることはあった。だがそれまで聞いたことのない警告音に、シグナムは顔をしかめる。

だが隣にいたコウキは違った。大きく目を見開くと、管理局の中心部に目を向ける。

「……この音は、何者かが管理局のネットワークに侵入したときに流れるものだ。しかもアラームが鳴ったってことは、もうかなり内部まで侵入されてるってことだぞ」

「そんな、いったい誰がそんな」

——ビービービツ!!

その時、二人のポケットに入っていた管理局専用の携帯端末が電子音をあげる。二人は携帯デバイスを取り出すと、その画面は強制的に表示された。

『管理局のみなさま、どうも初めまして。私の名前はサイと申します。以後お見知り置きを』

サイと名乗るものはその顔にドクロの覆面をつけており、声質も変化させているようだ。性別も年齢も予想のつかない画面越しの人物は、そのまま音声を流し続ける。

『時空を管理するみなさまは、ここ最近平和のあまりずっとお暇をしていたことでしょう。こんなことでは、いざ何かがあったときに慌ててしまう。そんなことにならないように、私が抜き打ちテストをしたと思います』

画面が変わるとそこには拳二つ分ほどの、銀色の寄生虫のようなデバイスが表示される。サイは楽しそうに声を荒げていく。

『これは私の開発しました自律デバイス「バグ」です。これは自らの実体をデータと変換し、どんなネットワークにでも入ることができません。しかしここまで小さなデバイス、出来ることなど大したことはありません』

バグと呼ばれたデバイスの画面が消えると、画面上に玩具の爆弾が表示される。その導火線に火がつくと、ゆっくりと時間をかけてそれは大爆発をした。

『このデバイスはそのデータの細心部に入り、そこで実体化して爆発する。なに、実際に被害が起きれば大惨事ですけど、時空管理局とあろう人たちがこの程度のウイルスに負けるはずがありませんよね。――高度なワクチンに守られてあぐらをかいているプログラマー諸君、せいぜいウイルスというものの恐怖を味わってくれたまえ。それでは失敬』

プツンと画面が消えると、次の瞬間黒いモニターが表示される。そこには『1800』という数字が表示されており、『1799』『1798』とどんどん減っていった。

シグナムは画面の表示を変えようとするが、その画面は変わることはなかった。

「い、いったいどういうことなんだ。ウイルス？ それは何だ??」

「コンピュータウイルス。人間に例えるなら病原菌みたいなものだ。これが入り込むと、コンピュータは調子が悪くなって、最後にはあいつの言ったように全てが壊される」

「な、何だと！ いったい管理局の人間は何をしてたんだ」

「何をしてたんだ。……いや、何もできなかったんだろうな。サイって奴が言ったように、管理局は最新最高のコンピュータを常備している。さらにその機密が奪われないように、高度なセキュリティソフトも一日ごとに更新されているぐらいだ」

「なら、どうして侵入なんてされたんだ」

「……単純な話だ。相手のウイルスがこっちのワクチンより高度だったってことだよ」

コウキは携帯端末を様々な方向で動かしてみる。だが画面は変わることはなかった。

「強制終了も受け付けけない。どうやら管理局のネットワークは完全に乗っ取られたみたいだな」

「乗っ取られたって、それではどうしたらいいんだ!？」

シグナムにパソコンの詳しいことはわからない。だが今管理局が危機に追い込まれているのはわかっているつもりだ。コウキは携帯端末をポケットにしまうと、肩を落とした。

「このタイマーは多分あのバグと呼ばれるものがデータの細心部に乗り込むまでの時間だろう。馬鹿にしてやがる。時間までキツチリ計れるほど、綿密な計画しているらしいぜ」

「何か止める方法はないのか！」

「無理だろうな。携帯端末を見る限り、管理局のネットワークが通つてるデバイスは全て使用が出来ないはずだ。多分、あんたのデバイスも今は動かないはずだ」

「そ、そんな……………」

レヴァンティンを掴んでみるが、デバイスは何の反応も示さない。コウキはその姿を見ると、やっぱりなと頭を掻いた。

「今の時代ネットワークを通わせてないデバイスは存在しない。パソコンが動かなければ、ウィルスの駆除はしようがない」

「だったらこのまま指をくわえて見ているしかないのか……」

事件現場のすぐそばにいなながら、何も出来ない自分が恥ずかしかった。無力な自分に拳を握りしめる。

だがコウキは違った。悔しがるシグナムの頭をぽんぽんと叩くと、よっ、とノートパソコンを抱える。

「まあそれが『今時の』パソコンだったらって話だがな。———これから管理室に向かう。だが多分防衛システムが作動しているはずだ。……だからお前の力を貸してくれ」

「私の力を……、いったいどうするつもりなんだ」

シグナムがそう答えると、コウキの顔を見る。そして彼の顔を見て、一瞬体が硬直してしまった。

コウキは自らの怒りを隠すことなく、こう答えた。

「ここにある機械達を壊されてたまるかっていうんだ」

ごめん ありがとう

「ハアアアアアッ!!」

魔力を込めたシグナムの拳が、分厚い鋼鉄の壁をまた一つ砕いていく。扉が砕けた瞬間、防衛システムがシグナムに襲いかかる。彼女は空中で身を捻ると、それを避ける。そして流れるように、次々と防衛システムを突破していった。

「さすが、俺のことを毎度ぶっ飛ばしているだけあるな」

「そ、それは言ってくれるな」

シグナムは恥ずかしがりながらも、立ち向かう機械を全て破壊した。

機械を何よりも愛するコウキの前で、次々とそれを破壊することかなりの抵抗があった。

だがここで躊躇してしまつては、全てのコンピューターが壊れることになる。それはコウキもわかつていた。

コウキに危害が加わらないように慎重に進むのにはそれなりの時間を有した。

「——だがこれで最後だ!!」

渾身の力を込めると、中央管理室の扉を吹き飛ばす。その爆音に全ての視線が集まる。その中にはあの赤い髪の男、ユウキもいた。

「い、いったいあんたたちは何を」

「それよりもユウキ、今の状況を教えろ!」

「ふ、ふざけるな。あんたはもうこの人間じゃ——」

「今はそんなこと言ってる場合か。簡潔に状況を説明しろ!!」

コウキの言葉に非難の空気が止まる。一人の女性が立ち上がると、二人に向かい悲鳴のように声を上げた。

「い、今の状況は非常に深刻です。侵入と同時に管理局のネットワークが全て切断。この中央管理室のコンピューターも五分前には乗っ取られてしまいました」

「ウイルスの感染のパターンは」

「まるでこちらを挑発するように、外堀を埋めながら少しずつ、一部の

際もなくシステムを破壊しています。このままではカウント400以内に中心部のデータが破壊されてしまいます」

「それでお前たちは何をしてるんだ」

「……………中心部データに対しての破壊システムの機動最中です」

女性がそう歯を噛みしめながら答えると、コウキは何を馬鹿なと声を上げる。

「そんなことをしたら、管理局のネットワークを通じたものは何かしらのバグを持つ可能性があるんだぞ。どれだけの被害になるか、わからないお前たちじゃないだろう！」

その言葉に誰も答えようとしなない。だが赤髪の彼は違った。コウキは怒りのままに立ち上がると、怒号を放つ。

「上からそう指令が下つたんだよ！ 管理局のネットワークに問題が残るよりも、世間にネットワークの中心部に入り込まれたってことを絶対に隠蔽しろってな！」

「何を馬鹿な。どちらの被害が大きいか、考えればわかることじゃないか！」

「わかったからこそ、そう命令が下されたんだ。…………中央管理室の不手際。今回のことは、『俺たち』の不手際ってことで全て片づけられるだろうさ」

コウキがそう口にするると、管理室の人間はみな俯いてしまう。

正義を示すために、正しい事実がねじ曲げられる。その理不尽に少なくともシグナムは何度か遭遇してきたことだ。

それは一介の局員である彼女がいくら叫んだところで、どうにもならない事実だ。

たまたま今回はウイルスをばらまかれ、この中央管理室の人間が『加害者』にさせられただけの話。

いつ自らに降り懸かるかもしれない災厄。それを目の前にして、ただ押し黙ることしかできない自分が悔しかった。歯がゆかった。

それはここにいる人間も同じだ。無実であるにも関わらず、それでも自らを有罪にしようとする行為をする。それがどれだけ苦痛なものであろうか。

そうしている間にもカウンターは時を刻む。

「——なにに俯いてるんだよ。だったらそのウイルスをさっさとおっぱらえばいいんだろ。それだけの話だ。おい、有線のケーブル一本借りるぞ」

勝手知ったる人の家と言わんばかりに、コウキはケーブルのある場所に移動する。そして小脇に抱えていたパソコンを起動するとケーブルを接続した。

「おい、あんたなにやってるんだよ！ あんたはもうここに人間じゃないんだぞ!!」

「ああ、そうだ。これはあくまで俺が独断でやってることだ。何せ一介の整備士が勝手に管理室に入って、こんなことをしてるんだからな。——何か大きな不手際があつてもおかしくないかもな」

コウキの言葉に管理室の全ての人間が息をのむ。ユウキは握りしめた拳を震わせると、叫ぶように大声を上げる。

「何でそんな簡単に言うんだよ！ そんなに機械が大事なのか!! どうしてそんなことで自分を投げ捨てられるんだよ!!」

それはここにいる誰しもが思ったことだろう。そんなことがどうしてできるかわからない。

だが一人だけは違った。シグナムはいち早くそれに気づくと、管理室中に響くように声を張り上げた。

「——仲間だと思ってるからだろう!」

「なっ、なにを言ってるんだ。こいつは俺たちを捨てて機械に逃げたんだぞ!」

「一度逃げたらもう助けはいけないのか？ もう二度と手を伸ばしてはいけないのか？ 違うだろう。確かにこいつは機械馬鹿で、人付き合いも悪いかもしれない。だけど誰よりも優しい心を持った男だ。それは私なんかよりも、長い時間を過ごしたお前たちのほうがわかってるんじゃないのか!」

シグナムの言葉に、ユウキは「うっ」とたじろいでしまう。シグナムはふんと鼻を鳴らすと、コウキの隣に座り込んだ。

「私にも何かできることがあるか」

「……ああ、とっておきで重要な役割がある。だがそこまでいけるかはこつち次第だな」

パソコンが起動すると、コウキはブラインドタッチを始める。そのスピードは地雷ゲームのときのように、一切の迷いもなく目で追えないほどの早さだ。

「まずは中央管理室を取り返さないとな。さて、久しぶりだがいちよやってみるか」

舌で唇をなめると、キーボードを叩く速度がさらに上がる。画面上には見たこともない数字と文字の羅列が次々と表示される。

もうこうなつては自分から出来ることはない。シグナムはそつと目を閉じると、先ほどの女性が声を上げた。

「コウキ先輩、私に、私に何かできることはありませんか!」

その言葉に管理室はざわつく。だが女性の目に迷いはない。

「だったら今からでもデータの細心部にワクチンをばらまいておいてくれ。五秒と持たなくていい。少しでも時間を稼いでくれ」

「——わかりました!」

女性は彼の言葉をもらうと、すぐに電子パネルを叩き始める。どうしてわざわざ損を覚悟でこんなことをするのか。全てをコウキのせいにすれば、楽に済むのに。

普通ならそう思うであろう。だがそこにいるものは違った。みな覚悟は決まつたと目の色が変わる。

「コウキさん、俺は何を」

「何か俺に出来ることはありませんか」

次々と声が拳がると、コウキはそれぞれに役割を与えていく。皆が座りそれぞれ作業にはいると、コウキは最後に背中越しに赤髪の男に声をかけた。

「お前のやることはわかつてるよな、ユウキ。俺のサポート頼むぞ」

「——ぐっ、ちつくしよう! なにかツコつけてるんだよ!! くそっ、くそっ!!」

ユウキは歯を食いしばりながら、席に座る。そして何度も首を振ると、電子パネルに手を構える。

「半年のブランクは長いと思いますよ！」

「ブランク？ 俺はいつだってこいつらと触れてるんだよ!!」

コウキの動きは周りでも頭二つ抜けている。だがそれすら遅く感じるほど、コウキの動きは早かった。

カウントが残り200を切る。

『どうやら無駄な抵抗を始めたようだね。でも今更何ができるかなー。ほら、このワクチンももう学習したよ』

自律稼働デバイスが、一つ、また一つと障壁を突破する。学んで成長するウイルスは、局員が作り出したワクチンを次々取り込んでいった。

カウント100。

「先輩どうするんだよ！ どんなワクチンをやっても効かないぞ!!」

「まだまだ、もう少しかかる。くそっ、時間が足りない」

『ほらほら、カウント50だよ。もう諦めなよ。君たちは相手が悪かっただけ。強固なワクチンに守られてるだけじゃ駄目だって。管理局のプロテクトはこんなに手薄ですよーって、全次元に証明してもらおうよ』

時間は無慈悲に進んでいく。コウキは先ほどから何かをしようとしているが、まだそれが完成する様子はない。

20、19、18、17、16。

「先輩、頼むよ。俺たちを助けてくれよ！」

15、14、13、12、11。

「駄目です。最終防衛ライン突破されました」

10、9、8、7、6、5。

コウキは決して手を止めない。ただ全力でキーボードを叩き続ける。だがそれでも。

『4、3、2、1』

「ウイルスが、ウイルスが現れました！」

『ゼロ、ははっ、残念でした。何か企んでみたいんだけど間に合わないでやんの。あ、おかしくって腹いたいわ』

サイの声が中央管理室に響きわたる。管理局の人間は皆絶望する

ようにうなだれた。

コウキはまるで降参のポーズのように両手をあげる。

「ああ、確かに間に合わなかった。——俺、一人だったらな！」
伸ばした手がまっすぐ振り下ろされる。その瞬間だ。サイの作ったウイルス『バグ』の前に『8』という数字が立ちはだかった。

『何だこの数字は、いや、どうしてタイマーがゼロになったのにデータが壊れない?!』

「お前の計画通りにいってたら全てがおじやندったさ。だけど俺の仲間がワクチンをばらまいて、たった数秒であつても時間を稼いでくれた。実際にお前のウイルスがたどり着いたのはタイマーのあとだったってことだ。——それとまあこの数字の意味なんて今の奴にはわからないよな。『8』の周りは全て爆弾だぞ」

『なに? くつ?!』

データの細心部、『8』の数字の周りが急激に爆発する。バグはその爆発から逃れるように後退した。

『ば、ばかな。自らプログラムを傷つけようというのか!』

「バーカ、このシステムはお前のシステムだけを破壊するように作った俺のウイルスだ。どれだけ爆発しても傷つけるのはお前だけだよ。さして、反撃開始といこうか」

コウキがキーボードを叩くと、バグの周りに『2』『4』という文字が表示される。

『ぐっ、くそ、こんなもので!!』

中枢への侵入を諦め、バグが撤退を始める。きつと映像を切断する時間も惜しいのだろう。サイが世話しなくキーボードを叩く姿が見て取れた。

「おらおら、どんどんいくぞ!」

『——なるほど、こんなゲームが昔にあったのは聞いたことがあるぞ。理屈が分かれば!!』

地雷ゲームにサイも気がついたのだろう。表示される数字を計算し、次々と爆弾を回避していく。

二人のキーボードを叩く音が管理室にひたすら響きわたる。だが

それとは別に、何か焦げ臭いにおいがし始める。

「お、お前、パソコンが……」

シグナムが目を向けると、コウキのパソコンが煙をあげているのがわかる。だがそれは当然のことかもしれない。元々二世代も昔のパソコンを、ひたすらチューニングして使い続けてきたのだ。ましてや、相手は管理局にハッキングできるほどの使い手のマシンだ。性能の差は比べるまでもないだろう。

コウキはずっと一緒に歩んでいた分身といえるパソコンに柔らかいまなざしを向ける。そして絞り出すように、その言葉を口にした。「ごめんな。……あと、今までありがとうよ」

「——コウキッ!!」

悲鳴にも似たシグナムの声が放たれる。だがコウキは迷わない。最後にエンターキーを押すとともに、最後の指令がくだされる。

そして彼の思いを受け取るとともに、彼の分身の画面はブラックアウトしていく。

目に見えるほど煙を上げ、ヒビの入った画面を見れば初心者シグナムでもその状況は理解できた。

だがまだ悲しんでいる場合ではない。相棒の犠牲を無駄にしないために、コウキは力の限り声を上げる。

「頼む。——シグナムッ!!」

どうしてあんたは

『はは、まさか管理局にあんな奴がいるなんてねー。ここ一ヶ月のデータにはいなかったはずなんだけどなー』

サイは画面共有を解除すると、バグを安全なルートへと移動させる。さすがにあの時間では全体に爆弾を置く時間はなかったようだ。

『口惜しさは残るけど、今日は管理局のサーバーにハッキングできたという事実だけで十分だ。これを餌に他の団体にウイルスを買ってもらうかな。おっと、また「1」か、どうやらもう種切れみたいだね』サイは設置された爆弾をさらりと避けると、安全なルートからバグを逃がす。バグは地上にでると、データ上に行っていた体を、デバイス上に戻す。そしてその場で翼をはためかせた。

『今日のところは引き分けだね。だけど次は』

チカツ！ ドガツ！！

——ザアアアアアアアアア。

一瞬、何か光があがった気がした。だがそう認識するまえに、画面が砂嵐一色になる。

『なっ、はっああああ？ ……バグの反応が消えた。地雷の包囲網は抜けたはずだ。どこからでてくるかわからない小さなバグをどうやってねらい打てるんだよ！！』



「……………と、そう思っているのかもしれないな」

管理局の屋上、シユツルムファルケンを放ち終えたシグナムは目標の破壊を確認すると、ほっと一息ついた。

コウキは当初の予定通り、地雷によりバグを追い返すことに成功した。だが同時に、地雷だけではバグを破壊しきれないこともわかってきた。

だからこそ時間内でできる最前を尽くした。彼は可能な限り地雷

の位置を『わかりやすく』設置し、バグの逃げる道を誘導していったのだ。

バグがサーバーから抜け出し、デバイスの復帰とともにシグナムはコウキに指定された位置からシユツルムを構える。あとは、見ての通りの結果だ。

彼女はデバイスを待機状態に戻すと、中央管理室に戻る。そこではコウキが周りの局員に囲まれている姿があった。

「さすがコウキさんですよ」

「コウキ先輩のおかげで、本当に、本当に助かりました」

みな心の底から賞賛と感謝の意を述べる。シグナムもその輪に加わろうとしたとき、赤髪の男、ユウキは怒鳴り声をあげた。

「おいあんた、いったいどういうつもりなんだよっ!!」

「ユ、ユウキ君。コウキさんは私たちのために」

「はっ、そんなこと理由になんてならねんだよ! どうしてこんなことをしたかって聞いてるんだよ!!」

ユウキはズカズカとコウキに近づくと、その胸ぐらを掴む。そして一度思い切り彼を睨みつけると、――大粒の涙を浮かべていった。

「な、なにやってるんだよ。そ、それは先輩の大切なものだったんじゃないのかよ。どうして、どうして俺たちなんかの為に。何でだよ」

「みんなを守れたんだ。それでいいじゃないか」

「全然よくねえよー。……どうして。どうして出ていく時に俺にも声をかけてくれなかったんですか。俺、先輩とだったらどこへだつて行っただのに」

「そういうわけにもいかないだろ。……だけど、すまなかった」

ユウキはおいおいとコウキの胸で涙を流す。そんな彼の姿をシグナムは呆気にとられながら見ていると、コウキは両肩をあげた。

なっ、悪い奴じゃないだろう。

口にすることなく、シグナムにはそう言っているのが理解できた。

その言葉をまだ彼女は知らない

優秀な『管理局中央情報室』のおかげで未然にテロを防ぐことができた。そのニュースが流れてから、早三日が経つ。

防衛システムを破壊はしたが、データの流出を防いだシグナムもまた表彰ものの功績を称えられた。

これにて今回のバグ事件は一件落着。そう思えなかったのは、表彰されたシグナムと情報室の面々だけであろう。

コウキに謹慎処分がでたのは、事件の次の日のことだ。整備士が勝手に情報室に入り、作業の妨害をした。そんなありえない罪に問われ、彼は五日間の謹慎処分を受けている。表面的には上層部の計らいによりそれだけの罰で済んだということになっているらしい。

その言葉を他のものから聞いたとき、シグナムは怒りを隠せなかった。

だが当のコウキが騒ぎ立ててほしくない。みんなが無事だったんだからそれでいいと頭を下げたため、誰も口に出すことはなかった。

「はっ、はっ、はっ、はっ」

もうすぐ夕暮れになるであろう。シグナムはバグ事件の表彰のために溜まってしまった仕事を全て終わらせると、ピンク色のポニーテールを揺らし小走りで目的地に向かっていった。

「確かコウキの話ではここらへんに。——いたっ」

公園の一番隅のベンチ。コウキは魂の抜けたような顔で、ぼーっと茜色の空を眺めていた。

シグナムは息を整えると、ゆっくりと彼に近づく。

「こんなところで、き、奇遇だな。謹慎中なのに、こんなところにいるのか?」

「ん、あつ、あんたか。……あー、まあよくはないのよなー」

「……隣いいか?」

「あー」

カラ返事もいいところだ。だが彼がこうなってしまうのも仕方が

ない。コウキはあのバグとの戦いで、大切な半身を失ってしまったのだから。

「ぼーっと空を見上げるコウキに、シグナムは何か声をかけようとする。だが何と言っているのか、彼女にはわからなかった。」

「生半可な想いが今の彼に届くはずがない。どうして自分はこんなにも口ベタなのか。」

「どうして彼がこんなにも沈んでいるときに、何もしてあげられないのか。」

「シグナムはそんな自分を恥ずかしく思いながら、待機状態のレヴァンティンを手のひらに乗せる。」

「自分は戦うことでしか役に立つことができない。そう戒めるかのようであった。」

「あんたのデバイス。———そうか、もうそれくらいやったほうがいいよな!!」

「なっ、なんだいきなり!」

「いやー、ずっと考えてたんだ。ノート型でどうやって馬力を持たそうかって。そうか、いつそ外付けでカートリッジシステムをつけるのもありだな。あー、そうなるかと放熱のほうをさらに強化しないと熱暴走起こしちゃうか」

「先ほどから何を言ってるんだ?」

「何を言ってるって、新しい俺のノートパソコンの話だよ。どっちにしる市販品を買う気はないし、自作をしようって思ってたな。あんたが来てくれたおかげで、いい案が浮かんだ」

「はっ、はあ……。お前は悲しんでいたんじゃないのか」

「いやー、この二日間はさんざんっばら悲しんださ。胸にぽっかり穴があいちまって、何してても身が入らなかった。だけどじいちゃんは言ってたんだ。例え弱くても強くなれって。今だってあのパソコンのことを思うと苦しい。だけどそんな悲しさを持ったままでも、前に進もうって。じいちゃんの言葉に答えられるようにがんばろうって思ってたんだ」

「そう言葉にするコウキの顔にはやはり暗い陰があった。だがそれ

でも前に進もうとするなら、シグナムはそれを否定したりはしない。どう声をかけようかと思っていたシグナムは、肩の力が抜けてしまおうとベンチの背を預けた。

「外装はじいちゃんのパソコンを使うとして、中身は全部ショップを回らないとな。———謹慎期間もあと二日あるし、明日にリストアップして、明後日はいつちよパーツや巡りでもするかな」

コウキはその場から立ち上がると、ぐっと拳を握り込む。そんな彼を見ると、シグナムは慌ててその場から立ち上がる。

彼の背中を見ると、シグナムは右手を伸ばしては、引つ込め、また伸ばす。そんなことを何度も繰り返すと、やっとのことで、コウキの袖をチョンと握り込んだ。

「じ、実を言うと私も明後日は休日なんだ。だ、だからその、一緒に、だな……」

「一緒についてパーツ屋巡りなんてつまらないぞ」

「そ、それはそうかもしれないが、その、えっと……」

しどろもどろになりながら、シグナムは考える。何か機転を効かせよう。だけど、どうすれば———!!

「か、借りだ。そ、そうだ私にはお前に借りがある!!」

数日前、胸を揉まれてシグナムは思い切り彼を殴りとばしてしまった。そうでなくても、無理矢理卵焼きをつっこんだり、借りはドンと重なるばかりだ。

「ここらへんで借りを返しておきたい。だ、だから私も買い物につきあうぞー!」

「あー、確かに荷物は多くなるけど。でも本当に面白くな———」
「面白い面白くないは関係ない! いいか、一緒に行くと言ったら絶対に行く。ベルカの騎士に二言はないからな!!」

そう言い放つと、シグナムは通勤鞆からメモ用紙を取り出す。そこに自身の番号を書き込むと、そのまま彼の胸に押しつけた。

「明後日は絶対に行くんだからな! だ、だからちゃんと連絡を入れるんだぞ。待ってるからな。コ、コウキ……」

管理室で言葉にして以来、初めて彼の名前を口にする。シグナムは

今まで感じたことのない胸の動悸を感じながら、ぎこちなく彼に背を向ける。

そんなガチガチな彼女をみて、コウキは笑みを浮かべ声を上げた。「じゃあ今日の夜にでも連絡する。また明後日な、シグナム」

「——あ、ああ」

シグナムはそう返事をする、その場から走り出してしまう。

こんな約束をして、いきなり走り出してコウキは自分をおかしく思いかもしれない。

だがそれでも今の顔を見られるよりずっとマシだった。

「わ、私はいったいどうしたと言うんだ。顔の緩みがお、治まらない」いくら頬を引き締めようとしても、緩んだそれは戻る様子がない。それに先ほどから体調がおかしかった。

心臓はドクンドクンと高鳴り、頬の熱はいつこうに取れる気配がない。

この気持ちをどう言葉に表していいかシグナムはまだ知らない。しかしひとつのことだけは確かにわかっていた。

「シグナム。シグナムか、ふふ」

コウキに呼ばれた自分の名前を何度もリフレインさせていく。

シグナムは人に顔を見られないようにと、下を向いたまま家路へと向かっていくのだった。

シグナムさんは男友達が少ない2 心の距離と言葉にできない想い

聞こえる声 見えぬ彼

情報管理室での事件が終わり、公園での約束から二日後。いよいよ今日は約束の日であった。

——ちら。

(また見られているな。……やはりいつもの服でくるべきだったか)

駅前の公園。噴水の前のベンチで座っているシグナムは、今日何度目かの視線に心の中でため息をつく。

だがそれには心当たりがある。特徴的な腰まで届くポニーテールはいつものままだが、その服装に問題があるのだろう。

(しかし管理局の制服で来るわけにはいかないし。……やはりジャージとジーンズでよかったのかもしれないな)

ここ何年かは、休日になると浜辺で子供たちにシューティングアーツを教えることが多かった。

そのためか、服装は比較的動きやすいものになり、こういった外出着をあまり所持しなくなってしまった。

(確かにヴィータやサクヤに急遽服選びを頼んだかもしれない。だけど私がこんな服を着て似合うはずがないんだ)

シグナムは改めて自分の服装を見る。上はノースリーブの厚手の紫のシャツ。襟から胸のあたりにかけて装飾されたリボンが特徴的だ。

下は白のロングスカートだ。スネまで隠れるものなど、何年ぶりに履いただろうか。

普段よりもむしろ露出が減っているにも関わらず、上品な服装に恥ずかしさがこみ上げた。

——ちら。

再び道歩く男性に好奇の視線を向けられる。シグナムはとうとう視線に耐えられなくなると、ベンチから立ち上がった。

「だ、駄目だ。やはり今からでも着替えに帰ろう！」

「えっ、もう帰るのか。いきなりだな」

聞き覚えのある声にシグナムの体がビクリと固まる。彼女は噴水の時計を見ると、まだ待ち合わせに十五分はあること理解する。

ギチギチとさび付いた機械のように、後ろに振り返る。だがそこにはその声の主がいなかった。

「うん？　今あいつの声が聞こえたような」

だがいくら見渡しても、彼の姿が見えない。視線に入るのは、緑のミリタリージャケットにジーンズ姿のこぎれいな男だけだ。

「まあまだ集合時間まで時間がある。あいつが早めに来るわけもないか」

「あいつ？　あいつって、ほかに誰か来るのか??」

「ほかに来るもなにもまだコウキは。——なっ!？」

視線の先の男性から聞き覚えのある声が聞こえた。いったいどこから声を出しているのか。完全に気配が消えている。どこに隠れているのだ。

シグナムは騎士の誇りにかけて、あたりを索敵する。そんな彼女を見て、目の前の男はちよんちよんと彼女の肩を叩いた。

「いや、それは何かのギャグなのか。別に無理に一緒に出かけなくてもいいんだぞ」

「いや、だから私はコウキと出かける約束を。……んん」

肩を叩いた男と目と目が合う。彼は呆れたような顔をしている。シグナムは声の出どころ、男の顔を何度も何度も往復させると、驚いたように声をあげた。

「コ、コウキ！　お前がコウキなのか!？」

「いや、お前がもなにも俺が俺でなくて誰になるだよ。ほら、このノートパソコン」

目の前の男はバッグのなかの型遅れのノートパソコンを見せる。ところどころに焼け焦げたあとが見えるのは、確かに彼のパソコンだと物語っていた。

「ど、ということだ。わ、私の知ってるコウキは、髪の毛も髭も伸ばし

放題で、いつも汚れた作業着を着ているはずだぞ」

「そりゃ仕事だから作業着を着てるだろう。髪の毛は昨日床屋に行ってきた。ついでに髭も剃ってもらった。ああ、この服は結構前にユウキの奴が見繕ってくれたやつだ。『上に立つ人間なんだから、休日であってもあまりみずぼらしい格好をしないでください』とか何とか言つて。まあそれが今や下っ端整備士だから笑つちやうよな」

「あ、あああ、そ、そうだな」

「んっ？ どうしたんだ変な顔をして。それに少し顔が赤くないか??」

「そ、そんなことないぞ。私はいたって冷静だ！」

シグナムはそれだけ言うと、バツと背を向けてしまう。そして両頬に手をあてると、必死になつて心を落ち着かせた。

(こ、これは。……不意打ちだ)

あのズボラなユウキのことだ。休日に出かけるとしても、きつと上下ジャージで髪の毛解かしていないとばかり思っていた。

だからこそヴィータやサクヤに選んでもらったからといつても、こんな気合いの入った服ではと思つてしまったのだ。

(よ、よかった。二人に服選びを手伝ってもらつて)

もしジャージにジーンズで来ていたら、それこそ自分は家に帰つてしまつただろう。

シグナムは両頬を何度か叩くと、心を落ち着かせた。

「ん、んん。それで今日はどこに行くんだ」

「えっ、ああ。とりあえず駅まで移動する。それでパーツ探した。それより。……なんか俺が来る前にいいことでもあつたのか？」

「——ど、どうしてだ!!」

「だって顔がにやついてるからよ。随分とご機嫌だなと思つて」

「——ッ!!」

シグナムは再び背を向けると、両頬を強く引つ張る。

二日前、ユウキと別れてからしばらく頬の緩みが治らなかつたのは確かだ。

あまりにも治らないせいで、夕ご飯を家族と一緒に食べられなかつ

たほどである。

(いったいどうしてここまで平常心を乱す。落ち着け、落ち着くんた) ぐいーつと頬を最後に引っ張ると、シグナムはギリつと引き締まった顔をして見せた。

「……ん、んんっ！ 待たせてしまったようだな」

「いや、別にいいんだけど。ほっぺたが真っ赤だぞ」

「それはどうでもいいことだ。ほら、とりあえず駅まで行くのだろう。早く行くぞ」

「お、おお」

近場の駅なら、場所はわかる。シグナムはできるだけコウキの顔を見ないように歩き出すと、彼もその後が続いていった。

触れる肩と二人の距離

電車での移動中。シグナムは手すりに掴まりながら、ちらちらとコウキの横顔を覗き見ていた。

目が隠れるほどの前髪は切られており、無精ひげもしつかりと剃られている。

そしてプログラム関係の人間だったコウキも、整備士として鍛え上げられたのだろう。目立ちすぎない筋肉質な体と、ミリタリージャケットは彼に非常に似合っていた。

「……………んっ?」

「……………」

彼がこちらを向くと、勢いよく視線を逸らしてしまう。

どうしてこんなことをしているのだろうか。おかしい、明らかにおかしいとシグナムは頭を悩ませる。

(な、何をおどおどしてるんだ私は)

そう心の中で訴えるが、どうしても彼と目を合わせることができなかった。

シグナムにとってこんなことは一度たりともなかったことだ。

相手の階級が上だろうが、いくら人数がいようが、それこそ凶悪犯罪者の男にだって彼女は一步も引いたことはない。

いつも堂々としており、男よりも凛々しい存在。そういう立ち位置にいると彼女自身思っていた。

(い、いったい私はどうしたというんだ。ついこの間まで肩を並べて昼食を食べたり、パソコンのゲームで遊んでいたというのに……………それなのに)

「……………あつ」

電車が揺れると、二人の肩が自然に触れあう。すると、まるでそこだけが高熱を帯びたかのように熱くなるのを感じた。

「す、す、す、すまない」

「いや、ただちよつとぶつかっただけじゃねえか」

「そそそ、そうだな。ああ、そうだと」

「まあ、そうだな。大丈夫か、調子が悪いんだったら、今から戻っても――」
「大丈夫だ！ 私は至って健康だ。何も問題はないっ!!」
うわずったまま思わず大きな声になってしまう。乗客はシグナムの大声にひそひそと奇異の目を向ける。
シグナムはかあーっと顔を真っ赤にすると、目的地の駅まで俯いたままになってしまおうのだった。

目的地の駅は、ミッドでも有名が大都市の一つだ。
魔法文明が進むこの世界。ここはデバイスなどのパーツなどを始め、比較的機械関連のものが多く集まっている。

シグナムは心と表情筋をガチガチに縛り上げると、コウキの顔を見た。

「確かにここならパソコンのパーツが揃いそうだな。部品などはもう決まっているのか?」

「だいたいはな。ただまあ一個だけちよつと難しいのがあるかもしれないけど、まあブラブラしてるうちに見つかることを祈るさ」

「そうか。それじゃあ行くでしょう」

シグナムが大通りに向かい歩きだそうとする。すると、そうはさせないと肩がガツシリ掴まれた。

「ひゃっ! ……ん、んん、どうしたんだ」

「どうしたって、どこにいくつもりなんだ」

「どこって電気屋に行くのだろう。ああ、会員カードか何かがある店に行くのか」

機械関連はそれこそ値段が高い。お気に入りの店があってもおかしくはないだろう。

シグナムがそう無垢な質問を向けると、コウキは大きくため息をついた。

「お前さあ、俺が二日前に言ったこと忘れちゃったのか?」

「二日前。……二日前」

正直あのと看のことは鮮明には覚えていない。覚えているといえ
ばただ二日後にコウキと出かけること。そして自分の表情筋がいう
ことをきかなかつたことぐらいいだ。

シグナムは困つたようにあたふたとしてしまう。コウキは少し肩
をおろすと、もう一度説明してくれた。

「俺は自作でノートパソコンを作るんだ。だから完成品しか置いてな
い大型店には何の用もない。それに中身は最新にしても、外装は型遅
れのを使うんだ。それなりにちゃんと選ばないといけないんだ」

「なるほど。だがそれならどこで買ひ物をするというんだ」

「そりゃ、あそこらへんだ」

コウキは親指を立てると、それを後方に向ける。

そこに見えるのは暗い通路は、まるで都市伝説への入り口のような
細い場所だつた。

明かりはついていようだが、とにかく薄気味悪い。それがシグナ
ムの正直な感想だつた。

「ほ、本当にあそこなのか」

「ああいうジャンク屋じゃないと、パーツは売つてないんだよ。……
まあ女じゃ確かに入りづらいい感じだよな。なあ、もしあれだつたら俺
のことは気にしないで——」

「な、何てことはないぞ！ ほら、早く行くぞ!!」

コウキの言葉にかぶせ気味にいうと、シグナムは回れ右をする。ズ
ンズンと進んでいく彼女をみると、コウキは『うくん』と頭を搔くの
だつた。

その通路内は外観以上に不気味な空間が広がつた。

一歩外にできれば、あんなに明るいスペースが広がつているのに、ど
うしてここの人たちはこんな暗い場所であざあざ店を開いているの
だろうか。

いや、一概に店というよりも、露店と言つた方が正しいだろうか。
どの店も長机に布を引き、雑多に物が置かれている。青いプラスチック

クのケースに乱雑に入った部品など、本当に売り物かどうかかわからないほどだ。

シグナムの表情が少し引き気味になる。コウキはそんな彼女の隣を抜けると、一つの店に顔を出した。

「おーす。アカノじさんいますかー」

「その声は、おつ、コウちゃんじゃないか。いやいや、久しぶりだねー」
「社会人になってからご無沙汰だったからな。アカノじいちゃんも元気そうでよかったよ」

「なになに。お前のじいさんよりも、わしは長生きするぞい」

毛糸の帽子をかぶったシワだらけのおじいさんは、まるで孫の顔でも見たかのように嬉しそうに笑みを見せる。

（コウキのおじいさまの知り合いのようだな。それにしても。……嬉しそうだな）

その言葉が当てはまるのはアカノと言われたお年寄りだけではない。コウキは今までに見せたことのない明るい顔で談笑をしていた。

「コウちゃんはすっかり社会人できてるのかい？」

「そりやまあそれなりにはな」

「ここらへんの奴らはみんな心配してたぞ。あの人見知りのコウちゃんがまさか管理局に入るなんてなって。まあわしはコウちゃんが努力していたことをしつつおるし、当然だとは思っていたがな」

「いやー、でもいろいろとあつてさ。実は転職してるんだ。まあそこからへんの話はまた今度しようや。……実はさ。今日はこれのことできたんだ」

コウキは申し訳なさそうな顔を見ると、バッグの中のそれを取り出す。焼け焦げたあとのあるノートパソコンをみると、アカノは目を見開いた。

「これはまた。……随分派手にやったようだのう」

「いやー、俺の扱い方が乱暴でさ。ほんと、じいちゃんには顔向けできないよ」

——それは管理局の危機を守るために仕方なくだ。

シグナムはそう口を挟もうとするが、あの事件自体黙秘にしなければ

ばいけないこと。コウキの名誉のためとは言え、軽々しく口にしていいものではない。

だが不服そうなシグナムを見て。いやきつと見るまでもなくアカノにはわかつていたようだ。

「ふんっ、そんなすぐバレる嘘などつくもんじゃないぞ。コウちゃんがあいつのパソコンをどれだけ大切にしているかは、ここにいるみんなが知っておる」

アカノがそういうと、ずつと話を聞いていたのだろう。ほかの店の人たちは「うん、うん」と頷き出す。

コウキは少し照れくさそうに、頬を掻く。そんな彼を見て、アカノはドンと胸を叩いた。

「まかせとけい。ここにいるやつらで、規格の合うパーツを選んでやる。あいつのパソコンなら、ネジの型番の一つだって忘れておらんさ。おい、みんな！」

『おお、まかせとけー！』

言葉は違えど、みなそういうニュアンスの声をあげる。みんながみな、コウキのために動き始めたその時だ。

アカノはわざとらしく、せき込んで見せた。

「と、ところでコウちゃん。……そこのめんこい子は誰なんだい？」

「(キョロキョロ) ……わ、私のことかっ！」

シグナムは何度も何度もあたりを見渡す。だがこの場に女性は彼女一人しかいなかった。

アカノ以外にもこの商店街のものはずつとシグナムのことが気になっていたのである。ようやくキツカケができると、皆シグナムに視線を向けた。

「いやー、ずつとパソコンと向かい合ってるコウちゃんがまさかまさかとは思っておったけど。お嬢さんお名前は？」

「えっ、あっ、シグナムです。管理局に所属しております、縁ありまして彼とは知り合いになりました」

シグナムは戸惑いながらも、背筋を伸ばすと綺麗にお辞儀している。そんな彼を見て、アカノは嬉しそうに笑みをこぼした。

「いやいや、まさかコウちゃんにこんな綺麗な彼女ができるなんて。やっぱり長生きはするもんじやの、かつかつか」

「か、彼女——！——えっ、えっと、私はその、あの」

聞き慣れない単語に、シグナムの体温が急激に高くなる。

（い、いや、私とコウキはそういう関係では。だ、だが一緒に出かけているということは、一応これはデートというものなのかもしれない。だ、だがコウキにそういうつもりがあるかはわからないし。それに、それに）

言い訳をしなければいけないのに、どう言い訳をしていいのかと、頭の中がぐるぐるする。

そんな彼女を露天商のメンバーはにやにやしながら見ている。だがそんな場の空気を読むことなく、コウキは平然と声を上げた。

「おいおい、あんまり変な冗談を言わないでくれよ。こいつ怒らせたらめちやくちやすごいんだぜ。——シグナムとは全然そういうんじゃないって。たまたまこいつが俺に借りがあるだけで、今日だってその借りを全部返すんだって、荷物持ちに来てるだけだし」

——ピシリ。

コウキのその言葉に彼以外の全ての空気が凍り付く。

それはシグナムも例外ではなく、その表情を固まらせていた。そんな空気など読む気もなく。コウキはさらに口を開く。ベラベラと「そんなわけがない」「シグナムに失礼だ」と口にするると最後に。

「それにあんまり変なこと言われると、俺がぶっ殺されちゃうからよ。まあそんな感じだよなシグナム」

と同意を求められた。シグナムは上気していた思いが一気に下り出すのがわかる。彼女は青い顔をする弱々しく答えた。

「……………ああ」

それ以上はなにも言えない。多分、彼の言ったとおりなのだから。

（私は、なにを一人で浮かれていたんだろうな）

この二日間、ずっと温めていた気持ちがゆっくりと冷めていくのが自分でもわかる。

だが彼の言うことには何一つ間違いはないのだ。

シグナムがコウキのパソコンを傷つけて。恩返しをしていくうちにドンドンと借りが増えてしまい。

そして彼の言ったように、今日その借りを返すという理由で彼についてきたのだ。

(わかってている。わかっているのだが。……………だけど)

シグナムはギョツと拳を握ると、そのまま俯いてしまう。アカノ達老人グループは、申し訳なさそうな顔をしながらも、パーツ探しを始めるのだった。

言葉にできないその気持ちを

パーツ候補を集めるには二時間ばかり時間がかかる。そういわれた二人は表通りに向かっていた。

コウキは始め、自分のパソコンパーツなのだから残ろうと言っていたが、アカノ達の決死の説得によりシグナムと共に外にでていた。たった数十分。あの暗く細い道を抜ける間に、彼女のテンションは百八十度変わってしまった。

無言のままフラフラとするシグナム。そんな彼女を見て、コウキは心配そうに声を上げた。

「大丈夫かシグナム？ 調子悪かったら、本当に帰っても大丈夫なんだぞ」

「……………いや」

思わず「ならそうさせてもらおう」と言いそうになり、何とか声を絞り出す。

ここで帰ってしまったのは、借りを返すことができない。だが借りを返し終わったら、きっと自分達の関係は終わってしまうのだろう。

(いや、終わるもなにもまだ何一つ始まっているわけではない……………ただ日常に戻るだけなのだ)

そう考えると、少しだけ気持ちが悪くなった気がした。

そう、元に戻るだけ。お昼休みにわざわざ整備室に行くことも、入ることをはばかられそうな細道に行くこともない。たったそれだけのことだ。

だがそうだとしても、一言言いたいことがある。シグナムは一度心を落ち着かせると、それでも弱々しく声を上げた。

「それにしても……………殺されるは言い過ぎではないか」

確かに自分は腕っ節が強く、戦闘狂である自覚もある。コウキのことも何度か殴りとばしたこともあった。

だがこれでも自分もまた乙女だ。真実だとしても、冗談混じりだとしてもそういったことは言ってほしくないのが本当の気持ちである。

だがコウキは違う。あつけらかなとした顔で、ぶんぶん手を動か

した。

「いやいや、絶対に殺されるって。間違いないって」

あくまで真剣に鬼気迫る顔で言われると、シグナムはそれ以上にも言えなくなってしまう。

（私は、そんなに凶暴な女に見えるのか。………そうだな。そんな女に、何かを想うわけないか）

ズキリと心が痛むと、シグナムは思わずその場で立ち止まってしまふ。コウキの背中が少しずつ、少しずつ小さくなる。もしこのまま止まり続けたら、彼は自分を置いてどこかに行ってしまうのだろうか。

いや、置いて行くもなにも。もともと私はコウキのどこにもいなかったんだな。

ならこれ以上はいいではないか。コウキに嫌々つきあわせているのなら、私は――。

「わかってないな。お前、自分がどれだけ人気者か知らないのか」
「――えっ!？」

あまりにも予想外の言葉に、思わず素っ頓狂な声を上げてしまふ。コウキはゆつくりとこちらに振り返ると、「はあ」と肩を落とす。

「知らないみたいだから言うけどよ。お前って整備士のなかではかなり人気あるんだぜ」

「に、人気がある？ そんなの初耳だぞ」

「そりゃ内々で騒いでるだけだからな。一介の整備士が、管理局のエンジニア様になんて言えるわけないだろう」

「そ、そんなわけない。私はいつもあいつらを怒鳴りつけているだけで。その、暴力的な女ではないか」

「まあ、ヴァイスさんは違うと思うけど、以外にも多いんだぜ。――

――賭事やって騒いでれば、シグナムが叱りに整備室に来てくれるかもってやつ」

「は、はあ?」

それこそわけがわからない理屈だ。どうして好意があるにも関わらず、わざわざこちらを怒らせようとするのか。

きつとそういつた整備士の気持ちは、管理局の英雄と呼ばれるまで

のシグナムにはわからないのだろう。コウキは彼女の元に歩み寄ると、説明を続ける。

「俺とシグナムが弁当食べてたとき、よくハンカチで涙拭いてる奴らがいただろう。いやー、あの時は大変だったんだぜ。シグナムとどういう関係だつて。お前新人のくせに調子乗ってるんじゃないって、もうものすごい勢いでな。ほんと、あの時は殺されるかと思った」

「——あつ」

殺される。その単語がでた瞬間、先ほどの彼の言葉が自分の中でストンと落ちていった。

殺されるというのは、なにも自分に向けられた言葉ではない。嫉妬に狂った整備士から言われた言葉なのだ。

きっとシグナムが整備室に来るたびに、コウキは随分と追いつめられのだろう。

「そ、それはすまなかった。……私の知らないところで随分と迷惑をかけてしまったみたいで」

「……いや、まあそれに関してはいいいんだけどな。俺は、その、楽しかったし」

「い、今なんて」

「だから俺はシグナムといられて、その、結構楽しかったって言ってるんだよ。迷惑だったら、元から追い返してるって言うんだ！」

ぶつきらぼうにそういうと、コウキは背を向けてしまう。だがそうしてもらえて本当によかったとシグナムは思っている。

もし今の顔を見られたら、自分は恥ずかしくて死んでしまうと思うたからだ。

（コウキが私という楽しかったって。わ、私は邪魔ではなかったんだな）

先ほどまでのテンションが嘘のように、鼓動が早くなる。だがならどうしてという思いが、彼女の中に浮かぶ。その疑問の取っ掛かりは、コウキのほうから投げかけられた。

その疑問は、彼の言葉で具体的なものとなった。

「だから今日は悪かった。……借りがあったからって、無理矢理来て

もらって。本当に悪かったと思ってるんだ」

「なっ、なにを言ってるんだ」

「だって本当は嫌だったろ。借りがあるからって、俺と一緒に出かけるの」

その言葉でシグナムの頭が真っ白になる。

そんなことはない。自分はコウキと出かけると決めた日から、ずっとドキドキしていた。

緊張もしたし心配もしたけど、それでもその日が早く来て欲しいと思っていた。

シグナムはぱくぱくと声を出せずに、口を開けたり閉じたりする。コウキはそんな彼女を見ると、少し投げやりにこう口にした。

「だってお前そっぽ向いてばかりで、ずっと不機嫌そうだったじゃないか。……気合い入れてきた自分が馬鹿みたいだよ」

今度こそ声がでなかった。だがそれでも回らない頭で、シグナムは今日のことを思い出していた。

コウキと公園で待ち合わせして自分はなにをしたか。

電車での移動中。街に着いていたから。

果たして今日自分は何度彼の顔を見ただろうか。

そして何度彼の視線から顔を背けてしまったのだろうか。

いつも、いつもそうであった。勝手に自分で勘違いして、でもやっぱり始めに彼を傷つけているのは自分の方で。

シグナムは歩き始めた彼に手を伸ばそうとする。だがその肩をつかむことができなかった。

きつと今彼を振り向かせても、うまく言葉にできない。それは当たり前だ。まだ彼女自身、この思いを理解しきれていないのだから。

「あっ、うっ……」

だからこそシグナムは走り出した。

言葉にはできない。文字にも表せない。

彼女にできることはいつだって体を張ることだ。だからこそ、彼女は今の気持ちをそのまま行動に移した。

「えっ、お、おい、どうしたんだよ！」

「~~~~~!!」

シグナムは勢いよく彼の腕をとると、そのまま体全体で抱きしめていく。突然の包容にコウキのおどおどしたように、あたりを見渡す。

先ほどまでのやりとりを聞いていた通行人も多いのだろう。二人の存在は注目の的であった。

「と、とりあえず人も見てるし、その」

「……………いい。周りなんてどうでもいいんだ」

シグナムは頭の前まで真つ赤になりながらも、それでも抱きしめた腕を放さなかった。

「ご、誤解させてすまなかった。だ、だけど、これ、これだけは勘違いしないでほしい。——私もコウキと一緒にいて楽しかった。今日だって、ずっと、その、楽しみにしてたんだ」

プシューと蒸気のががるような音が聞こえそうなほど、シグナムは恥ずかしさにもだえる。

そんな彼女の言葉を聞いて、コウキもまた顔を真つ赤にした。

「と、と、と、と、とにかくどっか飯でも食べに行くか」

「そ、そそ、そうだな。そうするとしよう」

二人はゆっくりゆっくりと歩き出す。ガチガチに緊張した二人は、何とも歩き辛そうだった。

だがどちらからも離れることはなく。二人は表通りを歩いてくのだった。

電気街へ出かけて数日後のことだ。

シグナムは整備室に向かうと、懐かしい姿をコウキを見た。彼女は壁に寄りかかってあぐらをかいている彼の隣に腰を下ろす。

「パソコンの自作、終わったんだな」

「まあ自作っつていっても、用意してもらったパーツを組み上げるだけだからな。時間さえできれば、あとはパパツとな」

「今はなにをしてるんだ？」

「また地雷ゲームだ。今までのデータが消えたから、改めて記録作りだな」

カチカチとマウスを動かすと、次々とマスを開けていく。無邪気にゲームをしているコウキの横顔をシグナムは微笑ましく見る。

そんな彼とふと目が合う。どうやら爆弾を踏んでしまったようだ。

「そういえばその、ありがとうな」

「ん、なにがだ」

「いや、ヴァイスさんから聞いちゃったんだけど、シグナムが説明してくれたんだろう。謹慎は不当なもので俺は悪くないって」

「あ、あの馬鹿。……………だがまあ、その。余計なことをしてしまったな」

「謝るなよ。こっちは感謝してもしきれないくらいだ。なんせ俺は整備士としては、まだまだ下っ端だしみんなの信用もないしな。……事情が事情だし、言い訳もできないし、俺は人付き合い悪いからなに言われるかっておどおどしてたんだ。本当に感謝してる」

パソコンを下におろすと、コウキは深々と頭を下げる。シグナムは慌てたように手を振ると、彼に顔をあげさせた。

「き、気にするな。もとより不当な処罰だったんだ。それでも力になれたなら、その、よかった」

「ああ、本当に助かったと思ってる。——昼飯、食べるか」

「……………ふふ、そうだな」

最後には二人とも笑みを浮かべると、コウキはパンを。シグナムは弁当箱を取り出す。

コウキとはご飯を食べている間は、あまり会話がな。辺りが静かになると、シグナムはそうだと思いきョロキョロとあたりを見た。

「何だ。やはり嘘ではないか」

「なにがだ？」

「整備室に私目当ての作業員がいるということだ。今日は誰も私たち

のことは見ていないぞ」

電気街でコウキに言われたときは、言われてみればという気持ちがあった。だが改めて見てみれば、こちらを見ている人など誰もいなかった。

やはりこんな凶暴な女に興味を示す人などいない。シグナムがそう自己完結しそうになると、コウキは呆れたような顔をした。

「そりゃまあ。……俺の謹慎中にシグナムがヴァイスさんを説得して。必死に説得したのが俺ためだってわかれば、もう誰も近づかないと思うぞ」

「うん？ それはどういうことだ？——全く殺されるなんて、誇張もいいところだったな」

「誇張なんかじゃないって。本当にすごかったんだからな」

「だが証拠がないじゃないか」

実際に見ている人間がいらないのなら、それはコウキの被害妄想にすぎない。シグナムは「フフン」と鼻を高くすると、コウキはその反応にすぐ反論した。

「いや、証拠もなにもないと思うぞ。——だってお前すげえ可愛いじゃん」

「はっ!? ……………今なんて言った」

「いや、だから。あー、可愛いってよりは美人のほうがあつてるか。いや、でもこの前の私服は可愛かったよな。まあとにかく顔もプロポーシオンも完璧なシグナムにファンができないわけないって」

「美人？ 可愛い?? 私が??——なっ、なっ、なっ、なあああああ!!」

シグナムはボンッと顔を真っ赤にする。そんな彼女の構えを見て、コウキはスツと冷や汗を流した。

「えっと、シグナムさん。その構えた拳は何なんでしょう、オグフツ!!」

右ストレートが綺麗に腹にめり込まれる。床で悶絶するコウキを見ると、彼女はハツとしたように自らの拳を見た。

「す、すす、すまない!」

シグナムはそれだけ言うと、弁当箱を畳んでそのまま走り出してしまふ。

整備室のドアを勢いよく開けると、顔を真っ赤にしながら廊下を駆け抜けていった。

「や、やってしまった。私はどうしてこう学習をしないんだ」

頭には先ほどのことに対しての後悔がよぎり続けている。だがそんな思いと違い、彼女の顔は引き締められないほどゆるんでいた。

「綺麗、か、可愛いなど。……異性にそんなことを言われたのは初めてだ。ほ、本当にそうなのだろうか」

時空管理局に入隊してから、シグナムは仕事上何度も男性と話す機会があった。

だが彼女の強さ、整った容姿、そして階級の高さのせいで、まさに『高嶺の花』状態だったのだ。

そんな彼女に声をかけられる異性などいるはずもなく。まずなにより、彼女を誉められる異性自体存在していなかったのだ。

だがこの際他人の評価などどうでもいいのかもしれない。

コウキがそう思ってくれている。その間違いのような言葉にシグナムは胸を躍らせる。

「それにしてもまた私は手を出してしまって。——まだまだ借りは返し終わらないみたいだな」

コウキには本当に悪いと思っている。だがパソコンの完成も見届け、次に会うキツカケを失っていたのも確かだ。

次はなにをしてあげようか。いや、まずは先ほどのことを謝ろう。

彼女は通信用のデバイスを取り出すと、一度大きく深呼吸をする。そして震えた指でコールボタンを押していくのだった。

シグナムさんは男友達が少ない3　いつも隣にいて欲しいから

大切な話　主への挨拶へ

「それではお昼ご飯を食べるか、コウキ」

「いま帰るかコウキ？　そこまで一緒に行こうか」

「今度の休日はその、空いているかコウキ？」

最近、よく言葉にする名前が出来た。

知り合ったのは、自分が彼の大切なパソコンを傷つけてしまったから。

それから償いをしたいと押し掛けるようになり、一つの事件を越え、彼と一度出かけて。

それからもなだらかに二人の時は進んでいた。

休日の公園。何かと縁があるその場所に、シグナムは再び呼ばれていた。

「だ、大事な話があるというのは、どういう意味なのだろうか」

昨日の仕事帰り。いつものように、駅までの道のりを二人で歩いていたときのことだ。

コウキが真剣な眼差しで先ほどの言葉を口にしたのだ。

その顔は今までに見たことのないほどの意気込みがあり、シグナムはただコクコクと首を縦に振ることしか出来なかった。

「あんな顔のコウキを見たのは初めてだし。……まさか。い、いや、それはないか」

シグナムは一瞬頭の中をよぎった妄想をフルフルと振り払う。そう思いながらも、白いワンピースにゴミなどがついていないように手で払っていった。

「さて、以前と同じ場所のはずだが。——ん、あれはコウキか？」

集合場所にはコウキがいた。シグナムと同じように、前の外出と同じミリタリージャケットを羽織った彼は、ベンチに座っていた。

シグナムは一瞬慌てたように時間を確認する。だが集合時間まで

まだ二十分ほどある。

今までシグナムから会いに行くことが多く、仕事帰りもだいたいは彼女が彼を待っているというのがほとんどだった。

そんな彼が自分よりも早く到着している。しかも思い悩んだように、俯いている姿はどういった意味でも意識せざるを得なかった。

「い、いや、そ、そんなはずあるわけがない。——んんっ、コウキッ！」

自分に活を入れることも含めて、大きな声で彼の名前を呼ぶ。その声には彼はハツとすると、大きく息を飲み込んでいるように見える。

「お、おう……」

ぎこちなく手を振ってくると、シグナムもまたぎこちなく手を振り返す。

シグナムはそそくさと歩くと、彼の座っているベンチに腰掛ける。いざ対面すると、何を喋っていいかわからなくなってしまふ。

い、いや。元々今日はいいつが私に話があると聞いたんだ。……私が慌てる必要はない。

そう心でつぶやき続けるが、心臓の高鳴りは収まる様子がない。シグナムはギョツと下唇を噛みながら、そのときを待った。

「……………シグナムに大切な話があるんだ」

「は、はいっ！」

反射的に背筋が伸びると、思わず声が裏返ってしまう。

シグナムは恐る恐るコウキに目を向けると、真っ直ぐな彼の視線とぶつかった。

「そ、それで。大切な話とは何なんだ」

内心大混乱になりながらも、何とか表面だけは自然に見せる。

コウキは何度か深呼吸をすると、意を決したように声を出した。

「——八神はやてさんに、挨拶しに言ってもいいか」

「主…? ——それはっ」

八神はやてと言えば、自分が命に代えても守ると誓っている何にも代えられないシグナムの主だ。

自分の家族でもあり、ヴォルケンリッターの親でもある彼女に挨拶

をしたい。それはどうしてか。

「……っ!?!」

シグナムはあの時のことを思い出すと、思わず両手で口を押さえてしまう。

緊張の面もちで、男性がはやてに挨拶する。その光景をシグナムは一度見たことがあったのだ。

それは三ヶ月ほど前の話。元祖ヴォルケンリッターの中では一番末っ子だったヴィータの彼氏が来たときだ。

彼は真っ直ぐなまなざしのままはやてに頭を下げこう言った。『お宅の娘さんを僕にください!』と。

まさかと思っていたことの、二歩も三歩の先のことを言われたことに、彼女の顔がボンッと赤くなった。

「そ、そそ、それはまだ早いんじゃないのか。その、まだ出会って一ヶ月も経ってないんだぞ」

「それはもちろん承知の上だ。俺も突然で、かなり失礼なことはわかってる。……でも、一日でも早く一緒にしておきたいんだ」

「い、一緒にとは。ほ、本気なのか……」

「本気じゃなきゃ、こんなこと言わねえよ!」

シグナムの肩にコウキはガシツと両手を置く。彼よりも何倍もシグナムは腕力を持っている。だがそれでも彼の手を振り払うことができなかった。

それは何も力強いかではない。彼の手が。——細かく震えていたからだ。

きつとこの言葉を口にすることは、彼にとってそれだけ重要なことなのだろう。それがわかるからこそ、シグナムはその言葉を流すことも、はぐらかすこともできなかった。

先ほどから心臓は今にも飛び出しそうなほど高鳴り続けている。シグナムは頬を赤くしながら、コウキからほんの少しだけ視線を逸らした。

「そ、そこまで本気だったのか。正直、わ、私だけかと思っていた」「そんなの本気に決まってるだろう! 確かに始まりはあまりいいも

のじゃなかったかもしれないけど。それでも出会ったんだ。だからこそ俺だつて全力を尽くしたいと思つてる!!」

「そ、そうか。……それで、その、いつ挨拶に行くんだ」

「八神はやてさんの都合がよければ、今すぐにも」

「な、なるほどな」

コウキの気持ちはテコでも動かないようだ。こうなつたらあとは自分の気持ち次第であろう。

だがその前にだ。大切な挨拶をすませる前に、シグナムには聞いておかなければいけないことがあつた。

「そ、それで、その。……どこが気に入つたんだ」

「どこがつて全部に決まつてるだろ」

「全部と言うのは、その、中身も含めてと言うことなのか」

「はあ? そんなの当たり前だろう。—— 外装はもちろん昔のものを使つてる。でも中身に関して言えば、あの路地裏のみんなが仕事の時間を押してまで必死になつて選んでくれたものだ。みんなあんな旧式のものに合うのを探すのは大変なのに、それでも頑張つてくれたんだ」

「そうか。……う、ん? コウキ、何を言つてるんだ」

途中から何か話が脱線した気がする。シグナムは目を大きく見開くと、コウキの顔をのぞき込む。

コウキはシグナムの肩に置いていた手を離すと、隣に置いていたバッグから四角いパソコンを取り出す。

外装をそのままに、一から組み直したそれが数日前に出来上がったのは話に聞いていた。

コウキはそれを両手で掲げると、興奮気味に口調を早めた。

「いやー、さすがはじいちゃんやんの友達だよ。俺も整備士になつて少しは機械イジリについてわかつてきたけど。いや、わかつてきたからこそこのパソコンのすごさがわかるっていうかさ。ほんと、理想通りのパーツを用意してくれたんだ」

目を輝かせるコウキとは逆に、シグナムはどんよりとした目で低い声をだす。

「……………今までのことはパソコンの話だったのか。ではどうして主に挨拶をしたいと」

「前にこの公園で会ったときに言ったよな。いつそのことカートリッジシステムでもつけちゃうかなって。で、さすがにカートリッジシステムは武器にも使われてるものだし、アカノのじいさんも用意できなくてよ。それで前にシグナムの家族が、家族の誰かの彼氏さんにデバイスを作ったって話をしてたからさ。だったらいつそ一から自作してみようかなって。……………えっと、何でそんな怖い顔をしてるんでしょうか、シグナムさん」

「……………何でもない」

明らかに何でもなくないふてくされた顔をする。コウキはそんなシグナムを見ると、「えっ、ええっ」っと挙動不審になってしまう。

だがそんな表情とは逆に、内面では羞恥心で押しつぶされそうになっていた。

——つうう！ 私は、私は。

話が飛躍し過ぎていると思っていた。思ってはいたのだが。

「す、すまない。ちよつと頭を冷やしてくる」

「お、おう？」

シグナムは居ても立ってもいられず、その場から駆けだしてしまふ。

そんな彼女の背中を、コウキはポカンと口を開けながらただ見送ることしかできなかつた。

笑顔のリベンジヤー

ピンク色のポニーテールが左右に揺れる。

そんな彼女の後ろ姿が視界から消えると、コウキは「はああ」と脱力した。

「やっぱりいきなり家庭に踏み込もうなんて、常識はずれだったかな。でもカートリッジシステムは俺だけじゃどうにもならないし。それにしても……………はあ」

コウキは熱くなった頬に手で風を送る。気候は快適であったが、この火照った顔の熱は当分とれそうになかった。

「シグナムのやつ。ここ最近あややって、急に可愛い顔するんだよな。もしかして……………いい、いやいや。それはさすがに自意識過剰すぎるだろう。それにあいつは管理局の高嶺の花なわけだし」

ここ最近、お昼を一緒に食べたり、たまに外に出かけたりすることもある。だがそれはあくまで『借りを返す』ためだ。

「まあことあるごとくに、借りを返す、借りを返すって言ってるもんな。ほんと、いや、そうなん。……………だよな」

実際にほぼ毎日言われ続けている言葉だ。しかも借りを返したと思ったら、自分の腹部や頬を殴るなどしてどんどん借りは増えるばかり。もうどの程度返したかさえわからなくなっているだろう。

だが借りとは別に、二人の距離が段々と近くなっているのは果たして錯覚なのだろうか。

「……………いや、少なくともパソコンの部品を見に行ったときは違ったよな」

気合い入れてきた自分が馬鹿みたいだよ。

それは考えをまとめることなく、自然と口からでてしまった言葉だ。今だっただけでどうしてあんな子供じみたことを言ってしまったのかわからない。

その後、シグナムに腕を抱きしめられ、恥ずかしさのあまり約束の時間までは互いに俯いたままであった。

「ああっ、くそ。全然まとまらねえ。……………こんな事今まで一度だっ

なかったのに」

だがそれもそのはずだ。自分は人とのしがらみから離れ、ただパソコンに逃げてきたのだから。

「弱くても、強くなれ。その言葉があったから、俺はここまでやってこれた。その思いに恥じることはないけど、人付き合いにはそりや適してないよな」

じいちゃん。こういう時はどうしたらいいんだろうか。

青空をぼおつと眺める。だがそんなところに答えが転がっているわけもなく。コウキはパソコンを膝に置くと、すぐに起動した。

「はああああ、こうやって逃げちゃうから駄目なんだよな。でもまあ、今は落ち着いておきたいしな」

小型のマウスを接続すると、ショートカットのアイコンをクリックする。こういった短い時間には、やはり地雷ゲームが一番だ。

コウキは一般の中級をクリックすると、画面にのめり込む。

「うーん、あんまり開きがよくないな。というか、ランダムとはいえ、今回複雑すぎないか？」

おかしい。いつもならもつとサクサク進むはずなのに、今日に限って進みが遅すぎる。

それは単純に配置が難しかったからか。

……………それとも。

「うわっ！ おじさんしつぱいパソコン使ってるね。ってか、実体のある液晶モニターって、それデバイスでいいじゃん!!」

「はっ?」

突然あがる若い張りのある声に、思わず呆気にとられてしまう。いったいいつのまに隣に座っていたのだろうか。

高等学校の制服を着た十五、六の少女。髪は肩にかかるほどの長さで、綺麗な銀髪をしていた。彼女は興味が引かれるまま、短いスカートベンチで引きずりながらこちらに近づく。

「な、何なんだよお前は」

「うわっ、うわわ。何この外装、ってか昔のパソコンってこんなでかかったの。これじゃあノートとして外に持ち運ぶ意味ないじゃん」

「……………いいだろ別に」

もつとほかに言いようがあったかもしれない。だが人付き合いが悪く口べたな自分には、それ以上気の利いた台詞が浮かばなかった。

少女は膝に置いたノートパソコンを自分の方に向ける。そしてマウスを奪うと、カチカチと操作をし始める。

「おい、あんまり乱暴に扱うなよ!」

「大丈夫だって。これおじさんにとって、すつごく大切なものなんですよ」

「ど、どうしてわかるんだ」

「そんなのこれだけ大切に使われてれば、遠くからみただけでわかるって」

「そ、そうか」

やはり分かる人には分かるのだろうか。少女は勢いこそあるが、丁寧にマウスを動かす。

だがなぜか自分の太ももをパットにしており、動く度にむずがゆいのは耐えることにした。

「……………私さ。最近たーいせつに作り上げた機械が壊されちゃったんだ。全く酷いよね。私がどれだけの時間を込めてあれを作り上げたか。そこんとこ理解できたら、絶対に壊したりなんてできないのに」

「それは。…………愁傷様だな」

「ほんと、そうですよ。あー、もう思い出しただけでも腹が立つ」

少女はうがあああつと髪をかき乱す。コウキはそんな少女に対してどうしていいか内心慌ててしまう。

だがその動きがピタつと止まると、少女はニヤツと口元緩めた。

「だから仕返ししようと思うんです。もう相手が立ち直れないくらい完膚なきまでに」

「完膚なきまでについて、お前は何を——」

「さーって、それじゃあそろそろ私は行きますね。どうやら実力は私の方が上みたいですし、なかなかいいパソコン使ってるみたいですけど、それくらいスペックなら私の敵じゃないので。はいっ、クリア」

少女が最後にクリックする。画面を覗くと地雷ゲームが完璧にクリアーされていた。それを見ると少女は満足そうにベンチから立ち上がった。

「あれから、ちよつと地雷ゲームをかじったんですよね。でもやってみたら案外単純でした。——それではまた近いうちにく」

少女は手をひらひらと振ると、ベンチから立ち上がる。

「えっ、お、おい」

何か言葉をかけようとしたが、何を言っているのか浮かばなかった。伸ばした手は何もつかむ意志を持たず。ただ宙を舞うだけだった。

「いったいなんだったんだ」

「——それは私が聞きたいのだがな」

「ヒイツ!?!」

逆方向から聞こえる声に、思わず飛び上がってしまう。

コウキはギチギチとゆっくり後ろを振り返ると、そこには笑顔のシグナムがいた。

どうやら気を使ってくれたようで、両手には紙コップが握られている。

「シ、シグナム。いつからそこに?」

「ちようどコウキが高等部らしき女子と楽しく語らっているあたりからだな」

「そ、そうか」

笑顔のシグナムと対面しながら、コウキはどうして彼女が烈火の将と呼ばれているか初めて分かった気がした。

こ、怖い。笑顔の後ろに見える灼熱の炎がものすごく怖い。

これはもう人付き合いが苦手とかそういう問題ではない。

コウキは頭をフル回転させると、早口に言い訳を始めるのだった。

起爆した二つの地雷

「つまり、突然知らない少女がなれなれしくパソコンに触ってきたと」「いや、本当にそうなんだって」

「……まあそのようだな。コウキのパソコンのことも知らなかったようだな」

コウキの知り合いであるなら、彼が型遅れのパソコンを使っていることを知らないわけがない。

シグナムはズイツと無言で飲み物を押しつけると、どっしりとベンチに座り込んだ。

コウキは紙コップの中身をのぞき込むと、恐る恐る声を上げる。

「だ、だけどよ。初めから見てたなら、止めに入ってくれたって」

「——何か言ったか」

「い、いえ、何も」

シグナムに一喝されると、コウキは見る見ると身を縮こませていく。そうやって、落ち込んでいたからだろう。シグナムもまた落ち込んでいることに、彼は気づかなかった。

（入り込めるわけじゃないじゃないか。あんなに親しそうに話しかけられていたのに。……それに、私にはわからなかった）

わからなかった。それはこの型遅れのパソコンをコウキがどれだけ大切にしていたかということだ。

それがわからずシグナムは彼のパソコンをぞんざいにあっかつた。

だがあの少女はそれを一目で見抜いたのだ。自分に見抜けなかったことを、たった一目で。

それを認めてしまうと、何故か心の中がもやもやした。そうしているうちに入り込むタイミングを失い、結局少女が離れるまで待つ羽目になってしまったのだ。

シグナムは唇を尖らせると、紙コップの中身を口に運ぶ。そしてコウキの膝の上をちらりと見た。

「そういえば、先ほどは何をしてたんだ」

「え、ああ。いつもの地雷ゲームだ。中級者向けのを起動してたんだ

けど、なんか調子がよくなくて。そしたら、あの女の子がパッとクリアーしちゃってさ。そういえば、その時に気になること——」

「——私もやるぞ」

「……んっ?」

「だから私もその中級をやると言ってるんだ。確かデスクトップにショートカットがあったはずだな」

シグナムはコウキの了解を取ることなく、マウスを手に取る。そして膝上のパソコンをこちら側に寄せると、地雷ゲームをダブルクリックした。

「ど、どうしたんだよいきなり」

「どうしたもこうしたもない。ただ地雷ゲームがやりたくなっただけだ。あの少女にもやらせたのだから、問題はないだろう」

「い、いや、別に問題はないけど。とりあえず俺の膝の上からパソコンを」

「あの少女もこの体勢でやっていただろ。なら、問題はないはずだ」

コウキの声など聞く耳も持たず、シグナムは地雷ゲームの中級を起動させた。

「あっ、くくっ、だから太股の上でマウスはくすぐったいって」

「先ほどは耐えてたのだから、今も耐えろ!」

「っていうか、何をさつきから怒ってるんだ」

「知らん!」

そう一刀両断すると、シグナムは地雷ゲームを始める。

コウキの股の上でカチカチとマウスを動かす中、シグナムは先ほどの自分の言葉を訂正した。

（知らん。ではないな。……わからない。それが私の本音だ）

とにかくムシヤクシヤクしていた。何がどうと言われるとわからないが、もしかしたら全てに対してかもしれない。

だからこそ、先ほど二人が行っていたことを全てなぞっただけだ。思った。そうすれば、この胸のモヤモヤの確信にたどり着けると思っただけだ。

「うっ、ぷぷっ」

マウスが太股をなぞるたびに、コウキの押し殺した声が聞こえる。シグナムはそれを完全に無視すると、画面を眺める。

地雷ゲームの初級は、ここ最近何度かクリアーできるようになっていた。だが中級に入ると、そのマスの多さはざっと倍。さらにマスに書かれた数字も、『4』『5』など大きいものが増えていた。

とりあえず角から開けていこう。シグナムはスツとマウスを移動させると、同時にコウキの声が漏れる。

「うあつ、おつ」

「コウキ、しばらく動かないでくれ」

「いや、動かないでくれて。シグナムこそ一回落ち着け」

「私は落ち着いている。……どうだ。半分は空いたぞ」

「おひよっ!?!」

そんなにくすぐったいのだろうか。シグナムが上下左右の角にマウスを持っていく度に、コウキは素っ頓狂な声をあげる。

「いや、マジ無理。ほんと勘弁してくれ」

「あと少しだ。我慢しろ」

地雷ゲームも後半戦に入ると、いよいよ旗の数が足りなくなってくる。だが初めての中級にしては、なかなかどうしていいところまで来ているのではないだろうか。

「次はこっちか、それともこっちか」

右へ左へとマウスがさまよう。果たしてどちらが正解か。

やはりここは奥を狙うとしよう!

覚悟は決めた。シグナムは下部分をクリックするためにと、マウスを奥へと動かす。

——コツツ。

「うん? マウスが先に行かないぞ」

コードの長さは十二分にある。いや、コードというよりは、何かに引っかかってマウスは先に進まなかった。

さらにぐいぐいと何度か動かすが、マウスは力強い何かに押し返されるばかりだ。

「ん、んん、マウスの故障か? コウキ??」

また彼の私物を傷つけてしまったのだろうか。シグナムは恐る恐るコウキの顔に目を向ける。

だがコウキはシグナムと顔を合わせないかのように、両手で顔を覆っている。

手で覆いきれない耳などは真つ赤に染まつており、小さな声で「俺のせいじゃない。俺のせいじゃない」と呟いているのも聞こえた。

「何を言ってるんだ。何がコウキのせいじゃ、————ンンツ!?」
シグナムの視線がマウスパッドとして使っていた彼の体へと向けられる。

初めこそシグナムは彼の太股を使っていたはずだ。

だがそれはゲームが白熱し、コウキとあの少女のことを悩んでいる間に、マウスが動かしやすい平たい方へ移動してしまっていたようだ。

いや、そこは平たかった場所というべきだろうか。

シグナムは彼のズボンのチャック付近で何度も何度もマウスを動かした。そうして刺激を与え続けた結果、マウスは彼の突起物に引っかけりその動きを阻まれてしまったのだ。

その正体は確認するまでもない。不意に堅くなる下半身部分といえば、それは。

「す、すすす、すまない、コウキ! そ、そそ、そんなつもりで私は!!」
「と、とりあえずマウス放してくれ。これ以上されたら。……………お嫁にいけなくなる」

それ言うならお婿だろう。そう突っ込みたくなるが、きつと今の彼の気分的にはそういう気持ちなのだろう。

シグナムはマウスから手を離す。すると、手から離れたマウスがコウキの猛にコツンとぶつかる。

それすらも刺激になったのだろうか。彼の意味とは関係なく、それはビクツとシグナムの前ではねて見せた。

「あ、あわわ、わわわ」

おおよそシグナムの人生であげたことのない声が垂れ流される。

目を白黒させながら、シグナムはトマトのように顔を真つ赤にす

る。そして初めて対面するズボンの膨らみにちらちらと視線を向けた。

「痛くないのか？ さすった方がいいのか?」

「……………いや、しばらく放っておいてくれ」

どうして少し悩んだのかはわからないが、コウキはベンチから降りるとその場で前かがみに座り込んでしまう。

（コウキはやめろと言っていたのに。それなのに私は、私はあああああつ）

ポカポカと自身の頭を叩き続ける。そんな端から見たら意味の分からない二人組が落ち着くには、それから十五分の時間を有している。

パソコンの画面には気がつくとも全体が爆弾だらけになっており、どうやらこちらの地雷も踏んでしまったようだった。

心を持った人形

ベンチに座ったまま二人はもじもじと体を縮こませている。先ほどから会話がない。シグナムはどうしたものかと、思ったまま声を出す。

「も、もう大丈夫なのか。っと、わ、私は何を言ってるんだ。違う。今のはなかったことにしてくれ」

これではセクハラどころか、パワハラレベルではないか。シグナムは困ったように、おろおろする。

コウキはパソコンを鞆にしまうと、少しは落ち着いたのでだろう。何度か深呼吸をし口を開いた。

「ま、まあちよつと危なかったけど、その、大丈夫だ。ん、んん、おほん。それじゃあ今日の本題の話なんだけど。その、八神はやてさんっていつ頃暇だったりするかな。可能な限り、休日は合わせたいと思うんだが」

「主なら来週は普段通りの休みだったと思うぞ。今日の夜にでも訪ねてみるが」

「シグナムの休みは？」

「私か？ 私は主とは一日違いだ。それがどうかしたのか??」

「どうかしたじやないだろう。シグナムが隣にいないくちや、どうにもならないだろうが」

「どういうことだ？ 残念ながら私は腕っ節ばかりでデバイス作りでは何も力になれないぞ」

そんな自分がいても邪魔になるだけではないのか。シグナムはさも当たり前のようにそう言うと、コウキはブンブンと首を横に振った。

「いやいやいやいや、そんな初対面の人と一緒になんて絶対無理だって。それに八神はやてさんって女性だろ。こんなむさ苦しい男と一緒になんて、絶対耐えられないって」

「そんなことはないぞ。主は見かけで人を判断したりはしない」

「ああ、それだったら言い訳しない。女性と二人きりなんて、俺の精神

が持ちそうにないんだ。いや、ほんと無理。人付き合いがからつきし
だった俺が悪いんだけど、絶対に会話が持たないと思うんだ」

「それで私がいると助かると?」

「おう。シグナムと一緒にいてくれれば空気も重くならなくて済むと
思うし」

「……………そうか」

ようやく話が通じたと、コウキは一安心する。だがそんなコウキと
は違い、シグナムはどこか複雑な顔をしていた。

安心感があると言われたこと。それは自分のことを信頼してくれ
ているということだろう。

だが同時に自分が女性だと言われてない気もしてしまったのだ。
女性と二人では空気が持たない。自分だっただけの女性だと
言うのに。

「……………それとも、コウキは知っているのか」

「ん、何か言ったか?」

「い、いや、何でもない。……………何でもないんだ」

自分でいうのもあれだとは思っている。だが体は鍛えており、タル
んでいる部分はない。胸なども些か大きすぎる気はするが、小さいこ
とは決してない。

少なくとも、自分が女性として見られないということは今までない
と思っていた。

だがもし、コウキが自分の過去を知っていたとしたら。

女性として見ることでなくても、『女の人』と見ることができないと
知っているとしたら。

その可能性がふと頭をよぎると、背筋に冷たいものが走る。

それは今まで考えたことすらなかったことだ。戦うことしかでき
なかった自分が、異性に対して特別な感情を抱くとは思っていなかった。
た。

だからこそ忘れていた。自分は人間ではない。『人と同じ形』をし
ているだけということ。

誰しもがヴィータの旦那のような考えをしているわけではない。

自分は周りに恵まれているだけで、そういつたことに嫌悪を覚えるものもあるだろう。

(いや、まだ人間でないということが知られているだけならいい。……もし私の過去のことをコウキが知ったとしたら)

シグナムはちらりとコウキの横顔を見る。誰に対しても、どこかおどおどしているコウキ。そんな彼がもし自分が過去、大きな事件を起こしていると知ったらどう思うだろうか。

自分は過去に取り返しをつかない罪を起こした。

それを償うために罰を受ける覚悟もある。

自分は愛する家族に囲まれて。頼れる仲間にも恵まれて。これ以上何かを望むのは失礼とさえ思っていた。だけど。

——ドツクン、ドツクン。

心臓がゆっくりと鼓動をあげる。まるで幸せの淵にいるシグナムを試すように、その音は消えることはなかった。

「ど、どうしたんだシグナム。なんだか顔色が悪いみたいだけど」

「……いや、何でもない」

「何でもなくないだろう、そんなに顔色悪くして。なあ、頼むから言ってくれよ。俺、人付き合い悪いし、口べただから、ちゃんとやってくれないとわからないんだ」

そんなに今の自分は余裕のない顔をしているのだろう。コウキは静かに声を荒げた。

そんな彼に心配をかけたくない。だからこそ今の思いを口にしたかった。何も隠すことなくコウキと接したかった。

「……あつ、ああ」

だが声に出せるはずがなかった。この言葉を告げてしまったら。

下手をしたらもう二度とこの時間は——。

「とりあえず移動するぞ。あつちに屋根つきの休憩スペースがあったはずだ」

「だ、大丈夫だ。私はここで——」

「そんな顔して信じられるかよ！　つていうか、歩けるか。歩けるならいくぞ」

「……………すまない」

コウキに無理矢理手を捕まされると、その場から歩き出す。シグナムはその手を握りしめよとする。

しかしその手に力が入ることではなく。ただ引かれるがままに、歩いていくだけだった。

それがどちらであらうとも

木製の屋根に覆われた、公園の休憩スペース。木製の机と長いすが置かれた場所に、二人は腰を落ち着ける。

だが落ち着いたのは体ばかりだ。二人の間にはいいようなない空気が流れており、お互い何も喋ることができなかった。

コウキは見るからに落ち込んでいるシグナムを見ると、眉をひそめた。

（何だ。俺か、俺が悪いのか。そんなに俺は変なこと言ったか。……ただシグナムと一緒にいてくれたほうが、安心できるっていただけだぞ）

実際それは本心だ。本心であるが、それ以上の意味も持っていた。

どうしてこう、気持ちが空回りしてしまうのだろうか。ただ自分は、シグナムに近くについてほしいだけなのに。

「——あつ」

自然と心の声があがると、隣にいる彼女を見る。

そこにはいつの間にか、隣にすることが当たり前になっていた女性がいた。何か、何かが小骨のように喉に引っかかったような気がする。

だけどその言葉が喉の奥から出てこない。自分は、自分は。

——ピロン！ ピロン！

手繰り寄せた答えをつかもうとした瞬間、メールの着信音が静寂に響く。

だがそれはおかしかった。このパソコンはネット接続をしていないはずだ。

——ピロン！ ピロン！

しかもその着信音は止まることなく。コウキはシグナムを横目に、パソコンを開いた。

「添付メール？ 中身は動画か」

一応ウイルススチエックをしておくが、このメール自体に悪意はないようだ。あるとすれば、これを送れる状況にした人物であろう。

このまま無視し続ければ、きつとこのメールは止めどなく送られてくるだろう。コウキは動画ファイルをダブルクリックすると、フル画面でそれが表示された。

そして、その姿に二人は目を見開いた。

『やつと開いてくれたね。お久しぶりです。こういった形で話すのは二度目ですね』

白いドクロの仮面をかぶった人物が、画面いっぱいに表示される。だがその声はあの時とは違い、どこか若々しいものだった。

「お前、サイか！ あの時管理局のサーバーをめちやくちやにしようとしたやつだな!!」

コウキがその声をあげるが、画面越しのサイは何も答えない。動画ファイルだ。それは当たり前であった。

『いやー、この前は随分こっぴどくやってくれましたね。せつかくの商品紹介だったのに、オーディエンスはカンカンでしたよ。あっ、ちなみに今日の観客は貴方たちだけなので、砕けた喋りですみませんね』

すみませんといいながらも、その声に謝っている様子は見られない。動画はさらに流れ続けた。

『さて、よくよく調べてみましたら、私の邪魔をしてくれたのは、主に貴方たち二人のようです。コウキさんが私のプログラムを妨害して、シグナムさん物理的に破壊した。その連携もさることながら、どうやら二人は最近仲がよろしいようで』

「ど、どうしてそんなことを知ってるんだ」

『なんて、思ってるでしょうね。ですが、私は管理局の中枢部まで潜り込めたんですよ。一管理局員の情報など造作もなく手に入ります。で、ここ最近シグナムさんのことを調べていたらおもしろいことがわかりましたね』

その言葉にシグナムの体がビクリと動く。

まさかシグナムに限って、汚職や裏金などの問題に関わっているとはい考えられない。

だがそれでもここまで深刻な表情をする思いあたりがあるのだら

う。その顔色は先ほどよりも青かった。

きつとその反応もサイのねらい通りなのだろう。サイは仮面のままであるが、その奥の顔は笑みを浮かべているように見えた。

『さて、そういうことで優位は圧倒的にこちらにあります。そしてここからが本題です』

サイはまるでピアノを弾くように、キーボードをタッチする。そして画面には見覚えのあるマス目が表示された。

「これは。……地雷ゲームか？」

『コウキさんはこれが得意なですよ。私はこんなゲームがあること事態知りませんでした。で、このまま負けっぱなしはしゃくなので、これで私と勝負してください。そしてこの勝負で勝っても負けても貴方にはシグナムさんの情報を送ろうと思います』

「……………どういうことだ」

『私が負ければその情報はどうぞ、すぐにでも消去してください。ですが、私が勝ったそのときは。——その情報を開いてもらいます。貴方と彼女、二人で一緒にね』

「———そ、それは駄目だ！ 駄目だ、駄目だ!!」

シグナムはドンつと机に拳を叩きつける。だがその悲痛な思いが動画に影響を起こすわけもなく。

それすらもわかっていて、動画にしたのだろう。サイは旅行の思い出でも語るように、楽しい声色で言い放った。

『ちなみに勝負を断ったら、その時点で管理局中にその情報を流させてもらいます。そこのおところはお忘れなく』

「…………お前は、何がしたいんだ」

『絶対に逃げないてくださいよ。私は貴方たちを跪かせたいんじゃない。いち、プログラマーとして戦って実力で屈服させたいだけなので。さて、詳しいことはメモ帳のリードミーを読んでくださいね。それでは十分後にまた』

動画が途切れると、ファイルごとなくなっていく。試しにゴミ箱を開いてみるが、どうやら完全に消去されたようだ。

「…………こそ、やっかいな奴に目を付けられたな」

コウキはメモ帳を開くと、内容を確認する。そうしながらも、シグナムに声をかけた。

「だ、だけだよ。別にシグナムは何も悪いことしてないんだろ。だったら、ファイルが送られてこようがこなかるうが。シグナム？ …… お、おい、シグナム!？」

コウキが声をかけるが、彼女は返事を返さない。だがまるで、それに答えるかのように体を震わせていた。

まるで極寒の地に置き去りにされたかのように。そしてデパートで迷子になった子供のようになり、その顔には不安がにじみ出ていた。

「ま、まさか、何かやっかいごとに足を突っ込んでるのか？」

「違う。そうではない！ このことは私の古くからの友には周知の事実だ!!」

「そ、そうか。それじゃ最悪、負けて俺が知ってもそんなに問題はないんだよ……な……?？」

「……………」

シグナムは力なく首を振る。

その否定はその時のことを思い、自分は悪くないと否定しているのか。それとも仕方がなかったと悔い改めているのか。どちらにもとれてしまった。

だがそんなことはどうでもいい。何よりコウキの心に引つかかったことは、『周知の事実』を自分には話してもらえことにあった。

「なあ、何があったんだよ。 ……他のやつに言っても、それは俺には言えないことなのか」

「……………」

弱々しいながらも、きつぱりと肯定される。コウキはそんな彼女の反応に、頭が真っ白になるのを感じた。

この数週間。期間こそ短かったかもしれない。

だがその間に何度も喋り、ゲームをして、ご飯を食べて。一つの事件を乗り越えて、一緒に出かけて。

その感情をどう表現していいかはわからない。だがそうだとしても、確かなものが二人の間には存在していると思っていた。

だからこそ話してほしかった。周りの仲間や友が知っていることなら、自分だつて共有する資格があると思つていた。

だからこそ思い知らされた。それは単なる自分の思い上がりだつたということ。

「……………そうか。やっぱりそんなもんだつたんだな俺は」

「ち、違うコウキ！」

「何が違うんだよ！ だったらちゃんと理由を話してくれよ!!」

「それは。…………それは」

「……………ああっ、くそっ!!」

こんなことが言いたかつたわけではない。だが感情は止まることなく表にでてしまった。

もうどつちでも構わない。いや、どつちだろうと、自分が勝ちさえすればそれで全て済むのだ。

だがきつとそこで二人の関係は終わりだろう。だったら、せめて後腐れのないように決着をつけよう。

コウキは改めてメモ帳に目を向ける。そんな彼に対し、シグナムはただ押し黙っていることしかできなかつた。

失うものの大きさ

ルールは至って簡単、基本的に地雷ゲームと違いはない。リードミーと画像を照らし合わせながら、コウキはルールを確認していた。

（唯一というか、このゲームのミソは圧倒的マス目の多さか。三十分という時間を考えたら、ほぼ無限と考えていいな）

説明書に書いてあるマスの数を見て、一瞬くらっつとしてしまった。この数を全部開けられるはずがなく、勝負は三十分でどれだけミスなく開けられるかということだろう。

（旗の数はそんなに多いわけじゃない。これはかなり運の要素も絡んでくるな）

さらにこのゲームは地雷が爆発した時点で、マスを開けた数がゼロ扱いになるらしい。

マス目次第では止まるのも一つの選択肢だろう。

「……………あとは、互いのマシンの性能か」

用意された回線は、どこにでもあるローカルネットだ。ネット環境が同じなら、あとは互いの頭脳とマシンスペックの差が勝負を分かっはずだ。

「だが相手はあのサイだ。きつと管理局中央情報室並のスペックは用意してあるんだろうな」

『と思いますよね。でもそこは安心してください。こちらもここ最近自作したノートパソコンを使います。まあこちらは画面が電子画面の分、スペックが上でしょうけどね』

スピーカーから軽快な声が流れる。どうやら指定されたローカル回線から、こちらの了承もなく音声を繋げたようだ。

それにしてもどうしてこちらのパソコンのことをこんなにも知っているのだろうか。

情報が漏れていることに不安を覚える。だが内容こそわからないが、シグナムのことも徹底して調べているのだ。自分のことぐらいは、調べればすぐなのかもしれない。

「…………ノートパソコンね。その言葉を信じろと？ それに地雷ゲームもそつちが用意したものだよな」

『あつ、別に信じなくていいですよ。そうすれば、負けたときの言い訳もしやすいですね。……まあ必ず勝てる試合をするくらいなら、わざわざ勝負の必要もないですけどね。私はいちプログラマーとして、借りを返したいだけですの』

「…………まつ、そうだよな」

『それじゃあ残り一分です。準備はもう大丈夫ですか？』

「ああ、いつでも大丈夫だ」

マウスパットも設置し、上着も脱いでいる。戦いの準備自体は五分前には終わっていた。——だが。

ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。

どうしても先ほどから鼓動が収まらない。

何を緊張する必要があるのだろうか。前回の事件と違い、サイとの勝負に負けても大きなリスクはないはずだ。

中央管理室の失墜。ユウキ達、二元同僚の責任問題。各次元からの管理局への圧力。

最悪、中央管理室にいた自分は職すら失っていたかもしれない。

なのに今の緊張はあの時の比ではない。いや、きつと緊張だけではないのだろう。

様々な思いがぐちゃぐちゃと混ざりあつて、もう自分でも何がどうなのかわからなかった。

ちらりとシグナムの方を見る。彼女は今にも泣き出しそうな顔で、ただ俯いているだけだ。

そんな顔になったとしても、彼女は話そうとはしてくれない。友と認め仲間と認めたものに話していることを。

(どうして、何でなんだよ。……………くそつ)

そんなに自分は頼りないのだろうか。

そんなに自分は信用がないのだろうか。

マウスに添えた手が震えているのがわかるが、それを誤魔化すように力を込めて握り直した。

どちらにしても負けられない。負けなければ問題ないんだ。

『それでは残り十秒。……………五、四、三』

こちらの気持ちなどつゆ知らず。サイは軽い口調のままカウントダウンをする。

頭のなかは未だにぐちゃぐちゃだ。

(俺はいったい。……………どうしたいんだ)

そう問いかけるが答えがでてこない。コウキは決意などつける暇もなく、一つ目のマスク目をクリックするのだった。



画面越しの勝負が始まる。いったい今コウキは何を思っただけに挑んでいるのだろうか。

シグナムにはもちろん彼の心を読むことはできない。だがその険しい顔つきから、前向きな思いでないことは見て取れた。

シグナムの犯した罪。それは主であるはやてを筆頭に、知っている人間も数多い。皆、戦乱のベルカのこともある程度理解しており、それをしっかりと受け止めてくれている。

だけど目の前の男性はどう思うだろうか。自分の汚れた過去を聞いて。自分が、人間でないと聞いて。……………果たして、それでも自分を受け入れてくれるだろうか。

誰しもがなのはやフェイトのように強い心を持っているわけではない。

ハラオウン家のように、被害者でありながら全てを許す器があるわけでもない。

そしてヴェータの旦那であるカイズのように、彼女を愛し全てを受け入れようという間柄でも断じてなかった。

借りを返すという、ふわふわした約束ごとから始まった関係。二人の間にはまだ、何もありません。

元から壊れる関係などない。なにもないと心では叫んでいる。だけど、自分の心を誤魔化しきれなかった。それくらい自分ももう彼に引かれていたのだ。

自分には戦うことしかできない。
自分には女らしい服は似合わない。

手先が器用ではない。機械いじりはできないはできないからサ
ポートに。

主の食事がおいしいから。自分は料理が苦手だから。

いつからだろうか。『戦いしかできない』ことを言い訳に使うよう
になったのは。

戦うことしかできない自分には、他に何もできない。

そうやって、いつまで逃げ続けるのだろうか。

今すぐ胸の内を彼に伝えたかった。だけどそう思う度に唇が震え
た。

だがそこまできてようやく自分は気づくことができた。

彼を怒らせて。彼に呆れられて。そこまでされてようやく気づけ
たのだ。

こんな感情は初めてで、だからこそ言葉にすることができなかつ
た。でも今なら、今だからこそハッキリわかった。

「——あつ」

パソコンの画面を見ると、思わず声をあげてしまう。

コウキはぐしやぐしやと乱暴に髪の毛を搔くと、その画面は爆弾で
埋め尽くされていた。

今までは でも今は

「——くっ」

クリックをした瞬間、思わず声が漏れてしまう。

コウキは爆弾で埋め尽くされた画面を見ると、リセットボタンを押す。

(開始から7分。………追いつけるか?)

画面の端には、サイの開けたマス目の数が表示されている。その数はコウキが爆弾を踏まなくとも、1・3倍ほど差が付いた。彼はそれを見ると、強く下唇を噛んだ。

早い。つい数週間前まで、地雷ゲームの存在を知らなかったとは思えないほどのスピードだ。

このゲームは推測も大事だが、もちろん運も必要である。だが結局のところ、それを為すのは決断力だ。

サイは自分の決断に余念がなく、その速度がそのまま差にでたのだろう。

「……いや、それだけじゃないよな」

操作側の差もあるが、実際にパソコンの性能も大きいのは事実だ。きつとこの勝負のために最新のものを組んだのだろう。

同じローカルネットワークを使いながらも、あちらのほうがラグが少ない。

対してこちらは、わざわざ古いジャンク品のかき集めだ。もちろん市販のものには負けないスペックがあるが、相手が勝負のために組んだものなら、話は変わってくる。

(………だけど。何なんだ。俺って。………こんなに頭が回らなかったか)

先ほどの爆弾はいわば凡ミスの一種に等しい。一か八かの決断ではないそれで、自分は地雷を踏んでしまったのだ。

先ほど、ベンチでやったときも違和感があった。だが今のそれは先ほどの比ではない。目の前の画面越しに勝負をしているはずなのに、どうしてもそちらに集中できなかった。

(どうしてだよ。今までこんなことなんて一度もなかった。他のゲームならともかく、地雷ゲームだぞこれは)

このゲームとの出会いは本当にたまたまだ。

じいちゃんにもらった古いノートパソコンに初めから入っていたいくつかのゲーム。

そのなかで、たまたまこのゲームを始めにやっただけのこと。

だが出会いは偶然でも、このゲームとの付き合いは長い。小等部の頃、クラスに馴染めなかった自分は、このゲームばかりやっていた。中等部になると、部活でパソコンをいじるようになった。だけど部の課題をこなしては、暇な時間はこのゲームに費やしていた。

高等部も大学部も、ずっとずっと、自分は一人でこのゲームと。

「あっ」

過去を思い出し、昔の自分と対面して。そして自分はようやく気づいた。

いつも自分はこのパソコンと共にいた。だけどいつも一人だった。誰かと寄り添うわけでなく。誰と笑いあうわけでなく。誰かと渡り合うわけでなく。

ただ目の前のプログラムと戦い続けていたのだ。

だが今はどうだ。自分の相手はプログラムではない。サイと呼ばれた凄腕のプログラマーだ。

そして自分は何の為に戦っている？

これは暇つぶしでも、自分の限界を見極めるために戦っているわけでもない。

ずっと画面に向かい合っておらず。

そうであっても自分は隣の彼女と向かい合ってすらいなかった。

隣にいる彼女は、ただ力なく俯いている。何をそんなに怯えているのか。いつも彼女は凜としていた。そんな彼女がどうしてこんな顔をしなければいけないのか。

(……………違う。全部俺だ。俺がシグナムにこんな顔をさせてるんだ)

シグナムは自分には絶対に言えない秘密があるようだ。それを教

えてもらえないから、だから自分はあんな態度をとってしまった。
まるつきり子供の発想だ。ずっと人と関わってこなかったツケが
ここで一気に返ってきた気がした。

誰にだって人に言えないことの一つや二つはある。それに自分は
男だ。男に話せないデリケートな話だって、きつとあるはずなのに。
(それなのに。俺は。……………俺は)

コウキはマウスから手を離すと、一度目を閉じる。そして大きく深
呼吸をした。そんな彼を見て、シグナムは小さく彼を呼ぶ。

「……………コウキ」

その声は戸惑いか。それとも彼の行動に対しての失意の声か。だ
がコウキの行動はそのどちらでもない。

彼は両手を口に添えると、ぶつぶつと声を上げる。

「まずは追いつく。でも現実的には不可能だ。足りない。時間が。い
や。それよりも。———。だけど相手には数だけが見える。なら。
いや、少し間に合わない。勢いが欲しい。もう少し、あと少し性能が

———!!」

コウキはカツと目を見開くと、シグナムのほうに振り返る。彼はシ
グナムの手を両手でギュツと握る。そんな行動にビクリと彼女は体
を震わせた。

「ど、どうしたんだコウキ」

「……………今更許してくれなんて言わない。俺はシグナムを傷つけた。そ
れに変わらない。だけど、それでも今は俺を信じて欲しい」

「信じる? 何を……………」

こうしている間にも時間は進んでいく。だがそれでもこの言葉を
片手間でしてはいけない。それがわかるからこそ、コウキは彼女から
目を離さなかった。

この言葉を言ったら彼女を怒らすかもしれない。自分が逆の立場
だったら、あまりいい顔をしないかもしれない。

それでも勝つためには。そのためには———!!

「今のままじゃあいつには届かない。だからシグナムの力を貸して欲
し」

「私の力……?」

「頼む。お前のレヴァンティンを——俺に貸してくれ!!」



コウキ達二人がいる休憩スペースから、少し離れたところ。同じ木造作りの休憩スペースで、銀髪の少女は鼻歌交じりにマウスを動かしていた。

「あれ、急に動かなくなっちゃった。……でもまあそれも仕方ないか。もうここからの巻き返しなんてできないもんね」

銀髪の少女はマウスから手を離すと、残念そうに肩を落とした。

「回線条件も同じ、立地も同じ。パソコンの性能は、まあ私の方がいいみたいだね。まっ、あんな旧式使ってる人に負ける気なんてしないけどねー」

わざわざ招待状を動画で送った理由はこれだ。彼女はプログラマーとして、正々堂々同じ条件でコウキに勝ちたかった。だからこそ、仮面の姿の動画を送り、この場に残ったのだ。

彼女は「うーん」と背筋を伸ばすと、リラックスモードに入る。

「このゲームって、下手に頑張りすぎて地雷踏んだら意味なくなるし。ここらへんかな。……でも、何だかあつけなかったな」

あちらの番面はこちらからは見えない。だがその数を見るに、今の自分の画面のように緻密にときつちり開けられていないはずだ。

「もしかして違う人だったのかな? あー、でもそういえば管理室にコウキって人もいたような。どっちも名前が似てるし、音も似てるからなー。もしかしたら間違ったのかもしれない」

もしコウキが自分を追いつめた人間なら、こんな不甲斐ない戦いはしないはずだ。

名前や性別、年齢ではない。この地雷ゲームの戦い方に、少女は彼を感じなかったのだ。

「でも私のマシーンを壊したのはシグナムさんなわけだし。それだけは間違いな、なあっ!?!」

言葉の途中、少女は驚愕の声をあげる。いったい自分はどれだけの時間画面から目を離していたのだろうか。いや、ほんの数秒。あるかないかのはずだ。

「えっ、う、嘘。何でどうしてこんな急に巻き返してるの!？」

画面の端に表示されているマスの開封数が見る見るうちに増えていく。おかしい、何かがおかしい。こんなスピードでマス目が開くはずがない。

もし何かの理由があり、彼が本調子に戻ったとしよう。だとしても、このローカル回線において彼のマシーンでは。

「そういえば、あの側面の正体不明のコネクタ。————ブーストかっ!!」

何を使つてブーストしているかはわからない。だがそれならこの速度にも納得がいく。

「この開き速度、単純計算で。……まずい、追いつかれる!」

あの時、中級で手こずっていた人間の速度ではない。少女はマウスを握り直すと、画面に目を向ける。

「でも大丈夫。まだ私が優位なことには変わらない。ここから時間いっぱいまで開け続ければ」

そう言つて彼女は番面を見る。それは先ほど彼女が途中棄権を決めた、究極の二択だ。

この数週間。このゲームをやってきてわかったことが一つある。それは計算だけでは全てのコマを開けられないことだ。

「だけど先に進まなくちゃ追いつかれる。………二つに一つか」

ちらりと画面の端を見ると、先ほどと同じ勢いでマス目が開けられているのがわかる。

わかるからこそ、少女は覚悟を決めた。

「———ここだっ!」

どちらにしても二つに一つ。なら覚悟は早くつけておくことに越したことはない。

だが強き決断が必ずしも幸を運ぶわけではないのだ。

「……………あっちゃー」

画面中が爆弾だらけになるのを見ると、少女はため息混じりに空に目を向けるのだった。

俺、このデータを見終わったら伝えたいことがあるんだ（死）

——ガシャン、ガシャン。

日常の公園には似つかわしくない、猛々しい機械音が響きわたる。パソコンから延びるコードに接続されたレヴァンティンは、その刃を鞘に納めている。

だがそうであっても内部の機械はフル稼働していた。

——ガシャン！ プシュー。

四度目のカートリッジロードをすると、パソコンとレヴァンティンが同時に放熱をする。なま暖かい風を感じながら、シグナムは残りの時間を見る。

「残り三十秒。……もうこれでは追いつきようがないな」

「ああ、そうだな。かああああ、一か八かだったけど、本当に同じ条件でやってくれたみたいだな。正直心臓がばくばく言ってるぜ」

コウキはマウスから手を離すと、「かああー」と両手を広げる。シグナムはまだおどおどしていたが、それでもコウキに声をかけた。

「何が一か八かだったんだ？ 私としては最終的にコウキの圧勝に見えるが」

「ああ、数だけ見たらそうだよな。でもまあ俺もサイも地雷ゲームのルールに捕らわれすぎてたんだよ。って、それじゃあわからないか。

——なあ、シグナム。普通の地雷ゲームのルールってなんだったっけ」

「……決められたマスを開け、限られた旗を使って埋めることだ」

「ああ、そうなんだよ。俺はそのルールでずっとこのゲームをやってきた。そしてサイもそうやってこのゲームに臨んだ。だからこそ、初めは難易度の高くなつた地雷ゲームだと思つたんだ。旗の数も違うしな。だけど一度地雷を踏んで、それで気づいたんだ。……これはもう知恵比べや、計算のし合いじゃないってな」

コウキはそういうと今までに開けたマス目を見せる。それは、今ま

での彼の画面で見たことある緻密なものとは違っていた。

大ざっぱに、画面の端から端のところどころがクリックされたそれは、確かに計算して開けたようには見られなかった。

「シグナムも知ってるだろう。このゲームはある一カ所をクリックすると、たまに一気にマス目があくことがある。——もしこのゲームを計算された旗の数で全部開けろっていうなら、そりや相当な難易度だ。だけどマスの数で勝負するなら、もう適当でいいんだよ。だってこのゲームに求められてるのはただの運なんだからな」

だからこそコウキはとにかくめちやくちやにクリックし続けたのだ。それで多くのマスが開くことがあったら、また違う番面へ、それが終わったら次の番面へ。そう繰り返しているうちに、あつと言う間にマスの数を増やしていったのだ。

「いやー、でもレヴァンティンを借りられてよかったぜ。やつぱりローカル回線を使ってるからか、読み込みが遅くて遅くて。あの怒濤の勢いがなかったら、サイも慌てずに同じ答えに行き着いてたかもしれないしな」

そう語るコウキの顔には先ほどまでのイライラとした様子はなかった。いつも地雷ゲームと向き合っているような真っ直ぐな無垢な笑顔。そんな彼を見て、シグナムは強迫観念が少しずつ和らいでいくのを感じた。

(……大丈夫。コウキならきつと)

コードを外されたレヴァンティンがシグナムの手元に戻る。彼女はそれを待機モードに戻そうとするが、それより早くメール音が鳴り響いた。

ファイル名は『私の負けです』。きつとここにシグナムの過去のデータが記録されているのであろう。

コウキはそのファイルを見ると、困ったように頭を掻いた。「えーつとな。さつきは悪かった。誰だつて言いたくないことの一つや二つあるよな。……それを無理に聞こうなんてもう思わないからさ。だから」

「いや、いいんだ。コウキには知っておいて欲しい。いや、コウキだけ

「……聞こえて欲しいと思えるようになったんだ」

「……シグナム？」

この心の変化を彼が知るはずもない。だけど、自分は彼の隣にずっといたいと思った。だからこそ、いま彼に打ち明けようと決心できたのだ。

——ドツクン。ドツクン。

心臓は世話しなくなり続ける。だが先ほどに比べたら、その音はかなり落ち着いたものになっていた。

覚悟はできた。だからこそシグナムは自分自身という存在を彼に伝えた。

「私は。——私は人間ではないんだ」

「ほう、それで、それで」

「えっ、なっ。今のを聞いてたのかコウキ。私はお前とは違う。人間じゃないと言っているんだぞ」

「お、おおう？ それは聞いたけど、えっ、それがどうかしたのか?」
ポカンとコウキは首を傾げる。どうやら茶化しているわけではない。本当に疑問に思っているようだ。

「わ、私は人間じゃないんだぞ！ おかしいとか、嫌悪感を抱いたりはしないのか!!」

「いや、別に。………ところでだ。お前は人間の知り合いは多いか？」

「それはもちろんだ。主はやてに、高町やテストタロツサ。その他にも機動六課の面々や、最近ではシューティングアーツを教えている子供達など多くの人に囲まれている」

「はああ？ それだけの人に囲まれて、なに今更人間かそうでないかとかうじうじしてるんだよ。そんなこと言ったら、パソコンとジャンクショップのじいちゃんたちしか知り合いがない俺はどうなるよ？ 自慢じゃないけど、学生時代はいつも一人。お昼も放課後も休日もずーっとパソコンと一緒に。そんな俺よりもシグナムのほうがずっと人間らしいじゃねえかよ」

「そ、それは。………そうなのか？」

「そうに決まってるだろう。で、それだけじゃないんだろう。まだ言いたいことはあるんだよな」

まさか人間でないことを、『それだけ』ですまされるとは思っていなかった。だがそれはシグナムの気を使って言っているのではない。

彼の本心であることが、言葉からでも態度からでもわかるからこそ彼女は嬉しかったのだ。

シグナムは決意とともに、パソコンの画面を指さした。

「たぶんそこに私の過去についてのデータがあると思う。これからそれを一緒に見てくれないか」

「おう、まかしとけよ。……………それと、そのデータを見たらちよつと言いたいことがある。だから絶対に途中で逃げ出さないでくれよ」

「うん？ ああ、わかった」

何か重要なことを伝えようとしているのだろう。息を飲むのが、こちら側でもわかるほどだ。

だがまずは自分の過去を知ってもらわなければ始まらない。シグナムは自らマウスを手にとると、そのファイルをクリックした。

そこには先ほどのように一つの動画がある。まさか戦乱のベルカ時代の映像が残っているというのだろうか。

疑問は残るが、彼女はそれを再生した。

——ガ、ガガガ、ウイーン。

何かの飛行音が入ると、画面が映し出される。

そこに見えるのは、人通りの多い繁華街のようだ。

「……………こんなきらびやかな場所。戦乱のベルカ時代にはないはずだが？」

いや、それどころかこの道には思い当たる節がある。

ぴたりとカメラが固定されると、映像がズームアップされる。その場所には、色とりどりの女性向けの服が並べられていた。

そこにいるのは、赤い二つの三つ編みをした少女と、コバルトブルーの髪色をした女性。そして見覚えのあるピンクのポニーテールをした者の姿だった。

ピンクのポニーテールの女性は、真っ白なワンピースを自分の体に

重ねると、真っ赤な顔で二人に言う。

『こ、こんな可愛い服。やはり私には、に、似合わない』

『だから似合うって言ってるだろうシグナム。おめえは女らしい服らしくに持ってねえんだから、これくらい買っとけよ!!』

『そうですよシグナムさん。それにシグナムさん見たいな凛々しい女性が可愛い服を着る。特別な姿を自分にだけ見せてくれる。そんなギャップを見せつけられたら、男なんて一発ですって』

二人の女性に押しに押されると、ピンクのポニーテールの女性は顔を真っ赤にする。そして本当に呟くように口にした。

『こ、この服を着れば。……コウキは可愛いと言ってくれるだろうか』

「……………何だこれはあああああああつ!!」

画面上でない烈火の将が吠える。

画面の女性が持っているものと同じ服を着た彼女は、木製の椅子から立ち上がると、バンバンと机を叩き出した。

「な、何だこの映像は。しかも音声まで!!」

「え、えつと。……シグナム?」

「ち、違うぞ、これは。いや、違うということはないが、とにかく私はそういうわけではなく、その、あのだな」

「と、とにかく落ち着け。落ち着いてくれないと、その、オチが見える!!」

「わ、私は落ち着いている!!」

『ほ、他の人の反応はどうでもいいんだ。ただコウキが似合っていると言ってくれればそれで——』

「——うううう!!」

自身の声がパソコンから聞こえると、シグナムはうるつと涙目を浮かべる。

この時コウキは思った。どうしてメールがくるタイミングがあと

数秒遅くなかったのだろうか。

それならば、いつも通り鉄拳ですんだはずだ。

シグナムは頭の先まで真っ赤になると、涙目でレヴァンティンを構える。それは綺麗に頭上に掲げられると、ピタリと止まった。

「眠れええええええええええっ!!」

「それは永遠に、オゴブフツハツ!!」

鞆に納められたレヴァンティンがコウキの頭上に降りおろされる。

コウキは摩訶不思議なうめき声をあげながら、目の前が真っ暗になるのを感じるのだった。

いつも隣で

お昼を少し過ぎたくらいであろうか。

シグナムはベンチで横たわっているコウキに膝枕をしながら、深いため息をついた。

「……………はあ、どうして私はいつも暴力でしか解決できないんだ」
自分が好戦的だということとは重々承知している。だがそれでもコウキのことになると、つい言葉より先に手がでてしまう。

それは彼がそんな自分でも受け入れてくれるからかだろうか。

「いや、違うな。私はお前のことになると、頭が回らなくなるんだ。その理由は、多分。……………もうわかってる」

彼の前髪をそつとかき分ける。時間が経ち痛みが引いたのだろうか。安心したように眠る彼を見て、シグナムはくすりと笑みをこぼした。

「そういうえばコウキも言っていたな。自分だけが気合いを入れて馬鹿みたいだと。……………あの時は言えなかつたけど、私だってそうだったんだ。ああ、そうだと」

不思議なものだった。自分は精神年齢的にも大人であり、ヴォルケンリッターの将でもある。

皆が慌てる状態であれど、自分だけは冷静でいなければ。ずっとそう心がけてきたし、そう行動できていたとも思う。

だが彼といるときは違った。彼の一挙動に心が揺れ、彼の一言にいつも心が高鳴っていた。

「現金なものだな。あれだけ気落ちしていたというのに。なのにサイとの戦いの時、私の力が必要だと言われたら。それだけで心のモヤモヤが全て吹き飛んでしまった」

そして今、自分の失態を見られ気絶させてしまつて。それに対して、コウキが自分に愛想を尽かさなにか。この一時間ほど、ずっとそればかり気にしていた。

ここまでくればもうこの気持ちに悩む必要はないだろう。自分は今もうこの想いの言葉をしっかりと理解できているのだから。

「なあ、早く起きてくれコウキ。私は、お前に言わなければいけないこ

とがあるんだ」

「……………いや、だったらそれは俺が先だ。言ったよな。言いたいことがあるって」

「コ、コウキ、起きてたのか」

「いや、今日覚めたばかりだ。——イチチチ」

コウキは頭のコブに触れると、シグナムの膝から頭を起こす。彼は手を挙げると「カアア」と背筋を伸ばしていった。

「コ、コウキ、先ほどはすまなかった」

「ああ、それは大丈夫だ。というか、正直いろいろ考えてたんだけど、さっきので全部吹っ飛んだ。だからもうそのまま言うな」

コウキはそれだけ言うと、なぜか何度も深呼吸をし始める。そして「あ、あのな」と声をあげようとするが、そのたびに口を閉じてしまう。そしてまた何度も深呼吸をした。

「あ、あのな。さっきの話なんだけど、その」

「あ、ああ」

コウキが妙に緊張しているからか、その緊張がこちらにも伝わってしまう。この流れはもしかして。そうシグナムが思うと、コウキは言いよどんでいたその言葉を口にする。

「えっと。……………さっきカートリッジシステム作るの、はやてさんを紹介してくれていったけど、やっぱりあれはいいわ」

「へっ? ………………ん、ん。ああ、そうか」

思わず肩すかしをくらってしまう。どうして今そのことを話す必要があるのか。

いや、事件が終わったからということとはわかるが、それなら余計にどうしてという疑問があがった。

「だが先ほどはそのシステムのおかげで難を逃れたと私は思うが」

「ああ、確かにそうだ。やっぱりいざというときに、管理局のシステム外のパソコンがあるのはいと思うんだ。カートリッジシステムを経由すれば、ローカルネットでも十分に戦えるしな」

「なら、どうして主を紹介しなくていいのだ?」

それは当然の疑問だ。シグナムがそう口にすると、コウキは再び言

いよどみそうになる。だが両頬をパシンと叩くと何か覚悟を決めたようだった。

コウキはキリツとした目をしながらも、少し視線をはずすとその答えを口にする。

「え、えつとだ。とりあえずカートリッジシステムはどんな型番でもいいんだ。コネクタを合わせればいいだけだし。それにカートリッジシステムって結構重いだろ」

「いや、待機モードにすればそれほどは」

「あ、ああ、えつと、そういうことじゃなくだな。……俺がカートリッジシステムを使うような時がきたらな。その時はシグナムがいてくれたら大丈夫だと思うんだ」

「私がいってくれたら……？　だが私がないときもあるはずだ」

「だから、だな。——いつも隣にいてほしいんだ。シグナムが隣にいるといつも楽しいし、ピンチの時もものすごい励みになる。だから、その、もしシグナムが俺の隣にいてくれるなら。カートリッジシステムを作る必要はないかな。………なんて」

コウキはそういうと、強く下唇を噛む。きつとそう遠回しに言うだけでも、人付き合いをほとんどしてこなかった彼にはいっばいっばいだったのだろう。

だがそれは彼女も同じだ。巡り巡ってその言葉の意味を理解すると、くしやりと顔をほころばせた。

「だ、だが私は暴力的な女だぞ」

「そりや会ったときからわかってるって」

「戦いばかりで女性らしいところも皆無だ」

「それなのに俺のために頑張って服を選んでくれたんだろ」

「パソコンのこともよくわからないし」

「別に覚えたかったら教えるし、わからなくなったら隣にいてくれるだけでもいいんだ」

「それに、それに私は人間でない。……過去に大きな罪も犯している」「それでも今は管理局として正義を貫こうとしてるんだろ。だったらそんなお前を俺も応援したいと思ってる」

「だったら、だったら」

シグナムはおどおどしながらも、自分の短所を次々と口にする。だがそんなことはもうコウキには関係なかった。

彼は震えていた手をギュッと握ると、今までで一番強く言葉を放った。

「ずっと人付き合いから逃げてきた。だからこの感情の答えがずっとわからなかったんだ。でもついさっきわかった。だから声に出して言えるんだ。——俺はシグナムが好きなんだ。だから俺の隣で笑ったり、怒ったり、恥ずかしがったり、ずっとそうやってほしいと思ってる」

好きだ。そうハッキリ口にされると、シグナムの言い訳がぴたりと止まる。

その代わりに、彼女は泣き出しそうな顔をしながら自身の胸の内を言葉した。

「わ、私もそうだ。ずっと戦いばかりで、そういうことにはとことん疎くて。だからずっと考えていた。ずっと悩んでいた。この胸の想いの答えを」

シグナムはベンチに置かれたコウキの握り拳を見る。彼は相当な力を持って握りしめているのだろう。

だがそれはそれだけの力を込めなければ、震えて手が解けてしまうからだ。

シグナムはそんな彼の手に、自分の手を添える。そうすると、彼の震えは嘘のように収まっていった。

「わ、わわ、私、私も、お前のことが………コウキのことが好きだ。だ、大好きだっ!!」

難しい言葉などわからない。シグナムは勢いそのまま思いを声にした。

(コ、コウキもこんな気持ちだったのか)

好きだ。その三文字を声にした瞬間に、体中が震え出すのがわかる。だがそんな彼女の手を、今度は彼の手が包み込んでいった。

自分よりも大きな手。指のタコの付き方も違うその手に包まれる

と、彼と同様にシグナムの震えもゆつくりと収まっていった。

だがコウキもまだ緊張がほぐれないのだろう。唇を震わせていた。

「こ、ここ、これからも、よ、よよよよ、よろしく頼むな」

「あ、ああ、あああ、こちらこそ、た、たた、頼む」

お互いに深々と頭を下げると、『ドゴンッ!!』とかわいげの皆無な衝突音があがる。

コウキはちようどコブのあたりにぶつかっただろう。痛みで顔をしかめる。だがそんな状態が本当に面白かったのだろう。

コブを撫でながらも、盛大に笑いだした。

そんな彼を見ると、シグナムもまた口元を緩める。自分のせいで負った怪我だ。笑ってはいけない。

「ふっ、ふふふ。あっはっはっは」

そうは思いながらも、やはり耐えることができず、彼女もまた笑い声を漏らした。

二人の笑い声はしばらくの間終わることはなく。そうでありながらも、握りあつたその手を離すことはなく。

固く、固く結びあつていくのだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ないEX3 過去への嫉妬 始まりとこれから先 過去への嫉妬

「ふんふん♪ ふふふん♪」

休日の午後のこと。ヴィータは掃除機を片手に、鼻歌交じりで部屋の掃除をしていた。

いつもよりも念入りに、特にぐーたらしていた痕跡が残らないように隅々まで掃除をすることを二時間に綺麗になった部屋を見ると、ヴィータはよしと額の汗をぬぐった。

「これだけ掃除すればもう大丈夫だよな。……でも二週間かー。初めは短いと思ったけど、本当に長かったよな」

二週間というのは、カイズが教導合宿に言ってからこの期間である。管理局員候補に教導をする都合上、カイズはその間寮暮らしをしていた。その間、必然的にヴィータは一人で待つことになり、随分と寂しい思いをしていたのだ。

彼女自身思うところもあり、はやての家に戻ることもなく。ようやく迎えた今日であった。

ヴィータは掃除機を片づけると、冷蔵庫から牛乳を取り出す。それを一気にあおつていくと、「はああく」とため息をついた。

「いや、まあ少し時間が空いてよかったんだけどな。電話越しとはいえ、あんなことして。……ちよつと顔合わせ辛かったし」

一週間前、カイズから電話がかかってきた時のことを思い出すと、恥ずかしさのあまり頬が熱くなる。カイズは特に気にしていなかったが、改めて思い出すとやはり恥ずかしいものは恥ずかしかった。

「でもようやく帰ってくるんだな。あー。……寂しかったな」

カイズが目の前にはいないからか、思わず素面の状態で本音が零れてしまう。そして一度彼のことを思い出すと、ドンドンと寂しさがこみ上げて来てしまった。

「でも紛らわすっていつでも、特に何も無いしな。——あつ、そう

「いえ、これは見てもいいんだよな」

ヴィータは本棚に近づくと、いくつかの背表紙を見る。そこに置かれているのは、主にカイズの教導官になるための教則本だ。

だがそれとは違う、色鮮やかな分厚い本をヴィータは引き抜いた。「そういえば、何だかんだカイズの昔話って聞かせてもらえないんだよな。……別にいいんだよな。普通に置いてあるわけだし」

特に誰かがいるわけではないが、一応言い訳をしておく。ヴィータはカイズのアルバムを胸に抱えると、そのままベッドに腰を下ろした。

「おー、これは中等部の頃の写真か。やっぱり今と比べると、どこか幼い感じがするな。……それに、カイズのお父さん。息子の入学式でもやっぱり怖い目をしてるんだな」

カイズの隣にいるガタイのいい男性は、息子の入学式だというのに眉間にシワを寄せていた。

ヴィータは初めてカイズの父親にあつたとき、その顔のせいで相当緊張をしたものだ。

初対面なのに、自分はこうしてこんなに嫌われているのだろうか、と、右往左往もしていた。

「嫌われてるか。……まあ半分当たりだったんだから、間違いではないんだらうけどな」

いや、そのことを今思い出しても仕方がないだらう。ヴィータは次のページをめくると、カイズの姿を目で追った。

「これは修学旅行か。つてか、どうして男って木刀とか好きなんだろうな」

カイズのグループはなぜか五人とも木刀を構えており、見えない何かと戦っているかのようなポーズをとっていた。

次のページ、また次のページとめくると文化祭や音楽祭、運動会など様々な写真がアルバムいっぱい敷き詰められている。

そんな彼のゆったりとした成長を見ていると、ヴィータの中で少し寂しい気持ちが生まれた。

今の人生が悪いわけではない。むしろ愛する家族と愛する人を見

つけられたのだ。これ以上の人生はないだろう。

だがもし自分が普通の人間として生まれてきたら。そうしたら、彼と一緒に輝かしい青春を送れたのかもしれない。

彼の時間に自分がないのが、ヴィータには少し寂しかったのだ。「まあだからこそ、今はこうやってずっと一緒にいるんだけどな。……まあそれはいいんだ。あたしだって、はやての傍にいられて幸せだったし。でも、だけどなー」

ヴィータは眉をひそめると、次のページ、また次のページへとアルバムをめくっていく。そして。そうしているうちに、段々とイライラが溜まっていった。

「——ガアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

最後には奇声をあげると、バシンツ！ とアルバムを閉じていくのだった。



「終わった、終わった、終わった、終わったああああああつ！」

もうすぐ夕が暮れるという時間帯。カイズは自宅への帰り道を全力で走っていた。

正直慣れない教導で体も心も疲労に満ちている。だがヴィータがどれだけ寂しい想いをしているかは、すでに一週間前に彼女の口から聞いていた。

それに彼自身も、ヴィータに会えなくてすでにどうにかしそうであった。

「これは帰ったらすぐにハグしてもらわないと。……俺のヴィータさん分が、0になりかけてる」

このままヴィータ分が0になれば、自分に待っているのは『死』だ。それほど熱烈に早くヴィータに会いたかった。

カイズは自分のマンションに帰ってくると、急いで鍵を取り出す。ガチャガチャとキーを回している時間すら、長く感じる。カイズは扉を開けると、駆け込むように中に入っていた。

「ヴィータさん！ ただいま帰りました!!」

靴を乱暴に脱ぎ捨てると、すぐに居間に滑り込んでいく。

カイズはパアアとした笑顔をヴィータに向ける。――だが、当の本人はどこか不満げな顔をしていた。

「んー、お帰りー」

「えっ、ヴィータさん？」

「どうしたんだー」

「い、いや、えっと。……あれ？」

一週間前のことを考えたら、すぐにでも抱きしめてくれると思っていた。だが当の本人にその気はなく。なぜか不満たらたらな顔で、こちらを見下していた。

「とりあえず上着脱げよ。シワになっちゃうだろうし」

「あっ、はい」

カイズは指定された通り、ハンガーに上着をかける。

何か、何かがおかしかった。この空回り感、デスライターを倒し、病院の屋上で落ちあった時と同じ匂いがした。

だが今回自分は何をしてしまったのだろうか。確かに教導中は女性にも教えることがあったが、そんなことで怒るとは到底思えない。

だとしたら、一体何が。

カイズはヴィータに気付かれないように、恐る恐る辺りを見渡してみ。

だがいかがわしい本や映像などは彼女が家に来るようになってから、全て処分したはずだ。なら、何が彼女を。

しかしいくら思い返そうとも、見当がつくこともなく。

カイズはベッドに置かれたアルバムを見ると、わざとらしく弾んだ声をあげた。

「あっ、俺のアルバム見てたんですね。いやー、恥ずかしいな。あの頃は馬鹿丸出しだったんで」

「ふーん。別にそんなことないと思うけどなー」

「でも随分とやんちゃな写真がありましたでしょう。皆で木刀持ったり、海の中飛び込んでいったり」

「別にいいんじゃないかー。それくらい学生らしいやんちゃだと思う

ぞー」

「あつ、はは。そ、そうですねー」

何だろう。お茶を濁そうと思つて話題を振つたが、なぜかもつと不機嫌になつた気がする。今の会話のどこに不備があつたのだろうか。

カイズは額から冷や汗を流す。

ヴィータはそんな彼には目もくれず。ベッドの上で、体育座りをすると自分の膝に顎を乗つけた。

「まあよー。知ってるつもりではいたけど。……………お前は相当いろんな女と付き合つてたんだな」

「ブウウツ！ えつ、な、なんですか、それ」

「……………このアルバム。ページをめくるたびに違う女と写つててよー。ほんととつかえひつかえだつたんだなーつて、感心してたんだよ」

いや、その言い方は絶対に感心はしていないだろう。むしろ副音声で「心底軽蔑したんだよ」と聞こえてしまうほどだ。

カイズ自身が一人暮らしを始めたころ。やはり人と会えないことが寂しかったこともあり、何冊ものアルバムを家から持ってきていた。

その後、奇跡的にヴィータと出会える機会があり、ましてや恋人となり一緒に暮らすことになるとは、当時は夢にも思つていなかった。

そして彼女と出会つてからはイベント続きの毎日で、さすがにアルバムの中身までを気にしている余裕などカイズにはなかったのだ。

「あ、あのですね。確かにいろんな女子とは映ってますけど、みんな結構交際期間は短かつたんですよ」

「まあカイズは随分とモテたみたいだなー」

「い、いえ、そう言うわけじゃなくて。というか、ヴィータさんだつて知ってるでしょう。俺はあの頃本気で医者を目指してて、その、そこまで女性を本気で相手にしてなかったつて」

「まあなー」

ヴィータはツーンと口を尖らせると、明後日の方向を向いてしま

う。

まずい。これはまずい。正直、アルバムにどれだけ女子と一緒にいた写真があるのかは、本気で覚えていない。

だがこれだけヴィータが拗ねてしまっているのだ。その量はとんでもなかったのだろう。

カイズは背中に冷や汗をダラダラと流し続けると、次の言葉が切り出せないでいた。

「あ、あの、あのですね、ヴィータさん」

「ごめん。ちよつと掃除して汚れたから、着替えてくるな」

「あ、あー、ヴィータさーん」

伸ばした手が虚しく空を掴む。ヴィータは奥の部屋に移動してしまふと、サツとカーテンを引いていった。

「……………やばい。まずったぞ。いや、でもさすがにアルバムは処分できなかったし。でも実家に置いてくるぐらいしておいたほうがよかったのか。でも、しかし、思い出がそれだけじゃないのも事実で。だけどヴィータさんは怒ってる訳だし」

いかがわしい本の時とは違い、どう対処していいのか若干わからなかった。

カイズはヴィータが置いていったアルバムを、パラパラとめくる。そして女子と写っている写真を何枚も見ると、「ハアアア」とため息をついた。

「どれもこれもそんなにいい顔してなんだけどなー。…………正直、本当の意味で初恋はヴィータさんだったわけだし」

しかしそうは思っていないも、彼女には届いていなかったのだろう。さて、どうしてもものかとカイズは頭を悩ませる。すると、カーテン越しにヴィータが声をかけた。

「正直言うと、ちよつと嫉妬してた。……………ごめん」

「こ、こちらこそすみません。その、聞かすつもりで言ったわけじゃないくて、自然と声に出たといえますか」

「それもわかってる。だけど少し悔しかったんだ。———どうやって、カイズと学生時代を送れるわけじゃないし。でもそれがわ

かってるから、イライラがどうにもできなくなっちゃってよ」

「いや、誰だって恋人が異性と一緒にいる姿を見たら嫌な気持ちになりますって。俺だってヴィータさんが他の男と一緒にいたら、その………腸煮えくりかえりますね」

そんなことはないはずだが、その状態を考えると自身の体温がサアツと引いていくのを感じた。思っているだけでこれなのだ。

実際に体験したヴィータは、その比ではなかったのだろう。

ヴィータは彼の声色から、状態を察したのだろう。慌てるように言葉が続けた。

「でも過去に戻れるわけでも、戻りたいとも思わねえしよ。だから、その………ちよつとなのはに借りたんだ」

「えっ、何を借りたんですか？」

どうしてここで、高町なのはの名前が出てくるのだろうか。ヴィータはその答えを見せるように、カーテンを開いていった。

初めても これからもずっと

一言で言うなら、白であろう。

脛まで隠れる長いスカートに、ところどころに黒のライン。そして胸につけられた赤いリボンが何とも特徴的な服だった。

ヴィータはもじもじと自身の指を絡ませると、カイズの前に立つ。

「ほ、本当は中学生の時の制服がよかったんだけど、それじゃあ大きくてよ。だ、だから、あいつが小学生の時の服を借りたんだ。……や、やっぱり子供っぽいよな、ごめん、やっぱりなし、着替えてくる！」
自分でもどうかしていると思ってしまったのだろう。ヴィータはそのままカーテンの奥に逃げようとする。

だがカイズはそれよりも早く、ヴィータの手首を握ると、ぐつと自分の方へと近づけていった。

「そんなことないですよ。ヴィータさんはいつだって可愛いし、俺にとっては年上の女性です」

「だ、だけど、小学生の制服だぞ」

「まあそれはそうかもしれないですけど。といえますか、ヴィータさんは制服を着て何がしたかったんですか？」

何となく、学生時代のアルバムに対抗しているのは分かる。だがそれだけで制服に着替えるだろうか。

首をかしげるカイズの隣に、ヴィータはちょこんと座る。

「そ、それはそのだな。えっと、えーっと」

何か言い辛いことなのだろうか。スカートをギュツと握りしめると、困ったように下を向いてしまう。

だが視線を何度も右往左往させると、いきなり彼女は飛びついて来た。

——— チュ。

首に両手を回すと、そのままの勢いでカイズの頬にキスをする。

触れるか、触れないかのそのキスを終わると、ヴィータはプシューと頭から湯気を上げた。

「ヴィータさん？」

カイズは頬に残った僅かな感触に戸惑の声をあげる。そんな彼にわかるように、ヴィータはアルバムのとあるページを開いた。

「……………このページ。これ頬にキスさせてるだろ」

「は、はい」

「だ、だから、だからよ」

ヴィータはそこで一度言葉を止めると、プイツと視線を外す。そして呟くように口にした。

「カイズが他の女にキスされてるのが悔しいから。…………だから同じところにキスしようと思ったんだ」

「……………えっ。それじゃあ、わざわざ制服に着替えたのは」

「……………ただキスするだけじゃ、何だか負けた気がして」

そうヴィータは消え入りそうな声で言うと、ギュつと目を閉じてしまう。そして照れ顔を隠すように、ベッドに顔を埋めてしまった。

行動を起こして、言葉にして、ようやく自分がどれだけ支離滅裂なことを言っているか理解してしまったのだろう。

ヴィータは自分の馬鹿らしさに顔を合わせられないと、顔をうずめたまままだ。

だがそんな彼女の両肩をカイズは掴むと、そのまま彼女を抱き起こした。

「カ、カイズ？」

「ヴィータさんがそう思うんだったら、どんどんキスしてください」

「だ、だけど馬鹿みたいだろあたし……………」

「そんなことないですよ。というか、そんなふうに嫉妬してくれて俺、実はめちゃくちゃ嬉しかったりします」

「そ、そうなのか？」

「まあ、それは置いといて。…………キスしてくださいよヴィータさん」

カイズはそう名言すると、じつとヴィータの瞳を覗き込む。これだけしつかりと見られると、今までなかった気恥かしさが一気にこみ上げてきた。

思えばキスをされることのほうが、圧倒的に多かった。しかも流れ

ではなく、意識させられてするのは初めてのこともかもしれない。

ヴィータはチラリとベッドの上のアルバムを見る。それは閉じられており、中の写真は見えない。だが中身は覚えている。

ヴィータは少しムツとした表情をすると、目を閉じゆっくりと唇を近づけた。

—— チュ。

先ほどのように、唇が彼へと触れる。

「ヴィータさん。そこは唇じゃないですよー」

「えっ、あれ？」

ヴィータは一度目を開けると、カイズの顔を見る。彼女はカイズの口に狙いをつけると、再び両目を閉じた。

—— チュ、チュ。

今度は二回彼に口づけをする。だが唇特有の凹凸感がどうにもない。

ヴィータは再び目を開けると、カイズと目を合わせた。

「またまた外れです。じゃあ、今度はこっちからしますね」

「お、おう」

それではあまり意味がないのだが。そうヴィータは思うが、二回外しているからか、あっさり彼の行動を了承する。

ヴィータは唇を少し前に出すと、再びギュツと目を閉じた。

「……………」

だがいくら待っても唇の感触がこなかった。自分のように外しているわけでもない。何も感じなかったのだ。

いったいどうしたのだろうか。ヴィータは目を開けると、その瞬間鼻がくっつくほどに近い彼と目を合わせた。

「えっ!? あっ、ん、んん——!!」

わざと焦らした唇が、ヴィータの唇に覆いかぶさる。カイズは唇を重ねては離し、重ねては離し。何度も何度もキスをしていった。

「カ、カイズ、ずるい。っていうか、さっきわざと外させただろう」

「あれ、ばれちゃいましたか。いやー、ヴィータさんがあまりにも可愛すぎて、ついイタズラ心が」

「そ、そんなにあたしをからかって面白いかよ」

「いえいえ、面白くななんてないですよ。——— だけど、何よりも愛おしいと思います」

「愛おしいって、あ、んん、あむっ」

先ほどの重ねるだけの口づけとは違う。カイズは深く、深く唇を重ねていくと、そのまま想いを伝えた。

「そうやって嫉妬してくれる姿も。俺のために何かしてくれようとしてくれる姿も。全部、全部本当に愛おしく思ってます。——— 確かに俺は昔いろいろな女性と付き合っていました。だけど、これだけは信じてください」

カイズは一度唇を離すと、ヴィータと真っ直ぐ視線を合わせる。そして嘘偽りのない思いのまま、その言葉を口にした。

「俺が本当に初めて好きになったのはヴィータさんです。そして、これからずっと愛し続けるのもヴィータさんだけです。だから、その……… 過去(アルバム)の俺じゃなくて、今の俺を見てくれると、その……… ありがたいです」

最後の方は自信がなかったのだろう。少し口調が弱くなっていた。ヴィータはそんな彼の姿を見ると、胸につかえていたものがスツと取れていくのを感じた。彼にここまで口にしてもらって。彼にここまで愛してもらって。

そこまでされて何を不安に思うことがあるだろうか。

少し恥ずかしかったが、ヴィータは目を開けたままそっと唇を近づける。そして「んっ」と彼の唇に触れると、照れたように笑みを浮かべた。

「ごめんな、カイズ」

「ヴィータさん」

「それとな。あたしが初めて好きになったのも、これからずっと愛し続けるのもカイズだけだ。だからそんな顔するなよ」

「…………… ヴィータさん」

そう彼女を呼ぶ声は、どこか感極まっていた。ヴィータはそんな彼の代わりに、再び口づけをしていく。

—— チュ、チュ、チュ。

何度も、何度も二人は口づけを交わしていくと、そのたびに幸せを感じ。

二人の営みはそれから一時間以上、終わることはなかった。

ヴィータちゃんとしぐナムさんは男友達少ない 時間十状況Ⅱ恋心？

無垢な相談

相談があるんだ。

そう切り出されたのは、ヴィータの仕事が終わった直後のことだ。教導も滞りなく終わり、今日は早めの帰宅ができると思っただけの出来事。

ヴィータは顎に手を添えると、「ん？」と小首を傾げる。そしてピンク色のポニーテールが特徴の彼女に話しかけた。

「あれ。そういえばしぐナムは今日休みだったんじゃないのか？ 確か電話ではやてが言ってた気がしたけど……」

「ああ、そうだ。今日は休日だったのだが、どうしてもヴィータに相談したいことがあってな。……ここで待たせてもらった」

「待たせてもらったって、何時からここにいたんだよ」

「かれこれ、三時間ほど前だが」

よく見ると、しぐナムの額からほんのり汗がでてるのがわかる。

まさかこの時間までずっと外で待っていたのだろうか。

「だったら連絡でも何でもすればよかっただろう」

「それはそうなのだが。……その、ギリギリまで本当に相談するか悩んでいてな。実を言うと、入り口から離れたり近づいていたりを繰り返していたんだ」

だから汗をかいていたのか。ヴィータはそれを納得すると、「うーん」と後頭部を掻いた。

「それで相談って何なんだ。ってか、どうしてあたしに相談なんだ？」

「そ、それはそのだな。……どこか場所を移さないか」

しぐナムはどこかきこちなくさういうと、あたりをキョロキョロと見渡す。それは誰かに見つからないようにそうしているのか。いや、どちらかと言えば見つかりたくない誰かを捜しているように見えた。

そんなしぐナムらしくない行動を見ると、ヴィータにはすぐに思い

当たる節ができてしまう。

分かってしまえば、断る理由などヴィータにはなかった。

(あたしだって、随分いろんな人に助けられてきたからな)

ヴィータはデバイスを取り出すと、愛しの旦那に通話を繋げた。

「あつ、カイズかー。ちよつと用事ができちまってよ。今日は外で夕飯食べてくるなー」

「？———！！」

「いやいや、浮気じゃねえって。シグナムの奴が相談があるらしくてよ。それで夕飯食べがてらってことで」

「？———！！」

「大丈夫だって。こっちはオーバーAクラスが二人いるんだぞ。それこそロストログアクラスじゃなくちゃ、どうにもならねえって」

「！！———！！」

「わかってるって。あたしも、えつと」

ヴィータはちらりとシグナムのほうを見ると、少し居心地の悪い顔をする。そんな少しの間があくと、デバイス越しのカイズは大声をあげた。

「！！———！！」

「だから違うって。………あたしも愛してるよ」

ちゆ。つと唇をならずと、ヴィータは持っていたデバイスをスーツにしまう。あつけにとられているシグナムと目が合うと、ヴィータはプイッと視線を逸らしてしまった。

「わ、悪かったな。変なところ見せちまって」

「いや、こちらこそ悪かったな。せつかくの早帰りだったのに。………その、仲がいいんだな」

「そりや何だかんだでもう夫婦で新婚だからな。さすがに外だと恥ずかしいけど、恥ずかしいって思うくらいには慣れたというか。……シグナムの相談もそんなところなんだろ」

「———！ あ、ああ」

ヴィータがそう指摘すると、シグナムの顔がボツと赤くなる。ヴィータ自身体験はしているが、やはり『恋』というものは、人を大

きく変えるものだ。

あの男よりも男らしく、騎士道精神の固まりのようなシグナムのこんな顔を見る日が来ようとは。

ヴィータは「あつ」と声を上げると、もう一度デバイスを取り出す。そしてサクヤの旦那さんの番号を表示すると、席の空き具合を訪ねるのだった。



食べながら話もどうかと思ひ、軽いコース料理を堪能する。最後のコーヒーが出されると、ヴィータのほうから切り出すのだった。

「それであたしにどんな相談なんだ。経験はカイズしかないから、そんなに答えてはやれねえかもしれないけど」

「——なっ!? ど、どうしてコウキのことだとわかったんだ!!」
「……………あー、あたしも周りから見たらこんな感じだったのかな。まあ周りのことは盲目になるよな。うん」

「何を一人で納得してるんだヴィーター!」

「いや、こつちの話だよ。ほら、それよりもコウキさんのことで話があるんだろ。ちゃんと聞くから、話してくれよ」

「ん、んん。……そ、そうだな」

ヴィータの指摘に明らかな動揺を隠せずに行った。シグナムはコーヒーを一口運ぶと、わざとらしく何度かせき込んだ。

「まずはヴィータに伝えなければいけないことがあるんだ。そ、そのだな。す、少し前になるのだが、コ、ココ、コウキと出かけた時にだな。その、こ、告白をされたんだ」

「それで両想いになったんだな」

「——なぜ結果を知ってるんだ! まだ私は何も言っていないぞ!!」

「あ、あははは」

ヴィータは後頭部が痒くなるのを感じると、昔の自分にふつつつと

羞恥心が沸いてきた。

「まあそれならあたしとサクヤさんで服を選びに行つたかいがあつたつてもんだな。ん、だけど両想いになつてそれで何の相談があるんだ？」

「そ、それはだな。……………もうすぐ付き合つて一ヶ月になる。コウキと出会つた頃から数えると、二ヶ月ほどの時間が経つんだ」

「それで、それで」

「それで。それでだな」

シグナムはそこで押し黙つてしまうと、唇をギュツと閉じてしまう。きつと次に言うべき言葉を、どう伝えていいか考えているのだろう。

だがその気持ちはヴィータには痛いほどわかつた。いや、自分たちがそこに行くまでには随分と遠回りをしたものだが、二ヶ月。普通のカップルはそんなものかもしれない。

ヴィータは焦らすことなく、ゆつくりとシグナムの言葉を待つ。彼女は何度も何度も深呼吸を繰り返すと、消え入りそうな声で話してくれた。

「付き合つてしばらく経つのだが。……………キ、キ、キキ」

「き??」

「……………キスはどのくらいのタイミングでしたらいいんだ」

「ブツツフウウウウツ!!」

「だ、大丈夫かヴィータ。すまない、いきなりこんな話をしてしまつて」

「い、いや、違う。そうじゃなくて。えっ、お、おお。すまねえシグナム。もう一度言ってくれねえか」

「う、うう。だ、だからな……………」

シグナムは太股に置いている手をギュツと握りしめる。そして絞り出すように、再び口にした。

「付き合つて一ヶ月でキスをしたいと思うのは、その、破廉恥なことなのだろうか」

「は、はあああつ!!」

店のなかと言うことを忘れて、ヴィータは思わず大きな声をあげてしまう。

シグナムはそれを咎められていると思ったのだろう。申し訳ないような顔をしながらも、言葉を続けた。

「ここ最近はず日も休日もコウキと会うようにしているんだ。と言っても、特別なにかをするわけでもなくてだな。一緒にパソコンのゲームをしたり、電気街に出かけたりとそんな感じなんだ」

「お、おお」

「そ、それでだな。たまたま距離が近くなると、そ、その、こ、コウキの唇を見ることが多くなって。……だがもしことに及んで、節操のない女だと思われるわけにはいなくてな。……その、ヴィータはどのくらい経ってから、キスをしたんだ。ヴィータ、おいヴィータ」

「——はっ!? お、おお、えっと、そうだな。キス、はは、キスの話。だよ、な……」

ヴィータは突然挙動不審になると、視線が定まらなくなってしまう。そしてそこまできて、ようやく『なのは』は本当に口が固い人間なのだ改めて認識することができた。

そうになると、その真実を知るのはヴィータ、カイズ、なのはの三人だけと言うことになる。

「ヴィータが始めてキスをしたときは、どのくらい経ってからだったんだ。それと、もしよかったらどんな状態だったかも聞きたいのだが」

「えー、あー、あははははー」

ヴィータは遠い空を見るような目を見ると、苦笑いを浮かべる。

（あたしとカイズは出会って四日で付き合っ。その勢いですぐにキスしましたー。どういう状況だ？ シャワー室でお互い裸で抱き合っ）

「って、言えるかああああああああああああつ!!」

思わず席から立ち上がると、思い切り吼えてしまう。付き合っ二ヶ月で、いつキスをしたらいいか困っている。そんなシグナムに、自分のことなど話せるはずがないのだ。

「す、すまない。そうだな。いくらなんでも不躰な質問だったな。………配慮が足らなかった」

「い、いや、そういうんじゃないでな。えーつとな。そういうのは場の空気とかもあるわけだし、明確にいつとかそういうのはないというか」

「だがあまり早すぎたら、相手に失礼じゃないだろうか。一緒に出かけたのもまだ四度ほどしかないわけだし」

——グサツ!!

(あたしは一度目のデート中に、観覧車でえらいことしたぞ!!) そう叫びそうになって、何とか口の中で押しとどめる。

ヴィータは椅子に座り直すと、落ち着いた顔でコーヒーを飲む。だが腰から下は戸惑いでガタガタに震えていた。

(あ、あれ。あたし、あたしがおかしいのか。で、でもキスはカイズからしてくれたし、あたしだって嬉しかったし。で、でも観覧車でのことはあたしからしたわけで。けどカイズは嫌な顔しなかったし、だけど、よく考えたらあんな場所ですることじゃないわけで。えっ、えええっ)

ヴィータはコトンとコーヒーを受け皿に戻す。そして全てを悟ったような顔で、こう口にした。

「……………お互い好きになって結ばれたんだろう。だったらどっちが先とか、どのくらいでとか関係ないんだよ。シグナムがキスをしたいと思っただらしてやればきつと相手だって喜んでくれるはずだよ」「そ、そうなのだろうか」

「あたりめえだろ。いいかも一度言うぞ。『出会ってからの日』とか『どういう状況』とか付き合っている二人の間には些細なことなんだよ。……………ってか、そうじゃないとあたしが困る」

「ん、最後のほうが聞こえなかったのだが」「い、いや、なんでもねえよ。とにかくもっと自信を持てよ。大丈夫、シグナムならできる、ガッツだ!!」

ヴィータはシグナムの両肩にガツと両手をおくと、気合いを込める。人妻として何ともの外れなエールではあるが、初々しすぎる二人

にヴィータが送れる言葉はなかった。

「そ、そうか。……………そうだな。わかった！」

だがバトルマニアのシグナムには逆にこういった形のほうが気合が入ったようだ。

グツと拳を握りしめるシグナムを見ると、ヴィータは心の中でため息をつくのだった。

二人の二ヶ月と二人のお誘い

「状況など関係ないか。……やはりそういうものなのだな」

食事を終えヴィータと別れると、シグナムは何気なしに夜の公園を歩いていた。

もとよりはやてには遅くなると伝えてはあるので、連絡の心配はいらない。ただ夜風に吹かれ、少し考えたかったのだ。

「そういう空気になったらか。……だがそういう空気とはどういうものなのだろうな」

コウキと一緒にいたときのことを思い出す。だいたいの昼休みは可能な限り彼と取るようにしている。

ここ最近、整備室では好奇眼差しが強く、中庭や食堂をよく利用しているがその時はどうであろうか。

「いや、さすがに一般大衆の前ではないな。そう思わないのか、そう思わないようにしているのかはわからないが」

なら自分が意識するようになったのはいつからであろうか。シグナムは顎に手を添えると、その時のことを思い描く。

「あれは確か三回目のデートの時だな。特に出かける予定もなくて、二人でベンチに座ってゲームをしていたときだ」

シグナムは公園のベンチに座る。そしているはずのない、彼の姿を見た。

「普段のお昼休みのおきのようにコウキが隣にいて。子供みたいに無邪気にゲームをするその姿を見てたら、急に私の顔が熱くなって。それで、それで……」

気がついたらずっと彼の唇を眺めていた。果たして彼は自分の視線に気づいていたのだろうか。もし気づいているとしたら、どういう気持ちでいたのだろうか。

「……………コウキ」

「おっ、何だ気づいてたのか。やっぱり前線の人間は勘の良さが違うんだな」

「——コ、コウキッ!?!」

彼の声が聞こえると、勢いよく起立してしまう。コウキは「お、お」と答えると困ったように頬を掻いた。

「あれ、気づいて俺のこと呼んだんじゃないのか」

「そ、それよりもいつからそこにいたんだ!」

「いつからって、ほんと今だよ。何か知ってる後ろ姿が公園の中に入っていくなーって思ってた」

「そ、そうか……………」

平然と答える姿は、それが真実だと示していた。今の言葉を聞いて、彼が平静を装えるとは思っていなかったからだ。

シグナムはホツとしたような、少し残念なような気持ちになると慌てていた気持ちを落ち着けた。

「そ、それで何か私に用なのか」

「用ってほどのことはないんだけどよ。ただまあ夜の公園だから、ちよつとなって思ってた」

「ん、公園が夜だとなにかあるのか?」

「いや、まあ気にする必要もなかったのかなって思ったけど。その何となくな」

コウキは「うーん」と再び頬を掻く。そんな彼の行動にシグナムは疑問符を浮かべた。

「どうしたんだコウキ?」

「えつとな。夜の公園って変質者がでたりとか、酔っぱらいがいたりするだろ。だからシグナムが絡まれたりしたら嫌な思いするかなって。——ははっ、いやそんな心配しなくてもシグナムにかかればちよちよいのちよいだよな。余計なお世話だったよな」

コウキはそういうと、恥ずかしそうに頭を掻く。

実際にコウキとシグナムの実力には天と地ほど差が存在するだろう。それに武器を持った変質者が現れたとしても、並大抵ならシグナムの拳一つで片が付くはずだ。

それはシグナムにもよくわかっていた。それだけの修練を積み、それだけの戦いを経験しているのだ。

だが、だとしても。

シグナムは頬が緩むのを感じると、バツと顔を逸らしてしまう。そして口元を押さえると、言葉が出せずにいた。

何だ、どうしたんだ私は。———どうしてこんなにコウキの言葉が嬉しいんだ。

思えば自分はいつも誰かを守る側だった。腕っ節が強く、皆に信頼と信用をされていた。

身の安全を心配されたことなど、それこそロストログiakラスの大事件ぐらいだろう。それくらい彼女には絶対の安心感が存在してた。

だからこんなふうに守られる対象として見られたことはなかった。だからこそ、彼の素直な気持ちシグナムには嬉しかったのだ。

「そんな口元抑えて笑うことないだろう。わ、悪かったな。生意気言って」

「そ、そうではないんだ。そうではなくてだな」

「だけど心配だったんだよ。お前は可愛いし、美人だし、そんな奴らに絡まれるのだけでも嫌だなんて思って」

「~~~~~!?!」

シグナムはもう駄目だと、その場でしゃがみ込んでしまう。普段はあまり言葉にすることはないが、偶に不意打ちのように自分のことを誉めてくることがある。

そういう空気があれば構えることもできるが、こうもいきなりでは表情筋をこわばらせることもできない。

「だ、だから笑うなって言っただろう」

「だからそうではないと言ってるだろう。……そのだな。私はコウキにそう言ってもらえて素直に」

嬉しかった。そう言葉にしようとした瞬間、突然彼は空を見上げた。

コウキの視線に誘われて、シグナムも空を見上げる。すると、それを合図にしたように、ポツリポツリと雨が降り始めてきた。

「うお、やばいなこりゃ」

「どこかで雨宿りをするか？」

「いや、この感じだと当分止みそうにないぞ。と言つても、明日も仕事だし。……あー、えつと、シグナム」

コウキの言葉にシグナムは首を傾げる。そんな無垢な彼女を見ると、彼は少し申し訳なさそうに言葉を続けた。

「俺の家つて、こっから近いんだけど。……もしよかったら来るか」

それは思いがけない誘いだつた。

だがそれと同時に、自宅への初めての招待であつた。



「おつ、雨か。ギリギリセーフだつたな。これもヴィータさんが世界で一番可愛いおかげだな」

カイズは雨が降り始めるギリギリのところ、マンションに足を踏み入れる。今日はヴィータが早帰りだったので、どこかで夕飯を食べる予定だつた（自分の中で）。

しかしヴィータがシグナムの相談に乗るといふことで、仕方なく一人食事を終え帰宅をしたところだ。

「積もる話もあるだろうし、さすがにまだ。あれ、玄関が光ってるな。……確かにあのうどん屋は少し混んでたけど、そこまで時間かかったっけな？」

ドアを開け、玄関を確認する。すると、やはりヴィータの靴がそこにはあり、それは彼女の帰宅を示していた。

「ヴィータさん、もう帰って来てたんですね！ それだったら、何か買ってきて家で夕飯でも。って、ヴィータさんどうして部屋の隅でうずくまってるんですか!!」

カイズが部屋に入ると、まず見えたのはヴィータの後ろ姿だ。どんよりとした空気が流れる中、彼女は部屋の壁に向かって体育座りをしていた。

カイズはヴィータに駆け寄ると、すぐその肩を掴み揺らした。

「ど、どど、どどどしたんですかヴィータさん！ 何があつたんです

か」

「……………カイズウ〜」

ヴィータは半分涙目になりながら、カイズの胸に顔を埋める。

(こんな弱々しいヴィータさんは、あのとき以来だぞ！)

あの時というのは、シスンの事件があつた後のこと。はやてに事情を話し、こつぴどく怒られたあとの時と今の彼女はよく似ていた。

こういうときは、心に何か大きなダメージを負ったときと相場は決まっている。カイズは状況を把握すると、優しく言葉を選択した。

「ヴィータさん、何か疲れてるみたいですけど、シグナムさんと何かあつたんですか？」

落ち込んでいると直接聞くべきでないだろう。カイズがそう言うのと、胸の中のヴィータは「うううー」と声を漏らした。

「別にシグナムと何かあつたんじゃないやねえんだよ。ただ、ちよつと相談を受けて。それで自信がなくなつたつて言うか。恥ずかしくなくなつたつて言うか……………」

「えつ、そんなすごい話しになつたんですか」

あのシグナムから赤裸々にとんでもない爆弾を投げつけられたんだろうか。カイズは少し信じられないものを見るような顔を見ると、ヴィータはぱくぱくと言葉を放つ。

「……………な、なあカイズ。やつぱりあたしつて、えつと。…………エツチだつたのかな」

「いや、確かにヴィータさんは世界で一番魅力的な女性です。ですが、そんなことはないと思いますよ。というか、このやり取りつてもう三度目くらいですよね」

「あたしだつてそれはわかつてるんだけどよ。だけど今日シグナムの話聞いたら、その……………自信がなくなつて」

「いったい何を話したんですか？」

カイズがそう訪ねると、胸に埋めていた顔を少し上げる。ヴィータは上目遣いになると、言葉を続けた。

「付き合つて二ヶ月になるんだけど、どのタイミングでキスしたらいいかつて」

「えっ？ 別に期間は関係ないと言いますか、その場の空気みたいなもんじゃないですかね」

「それはあたしもわかってるんだ。わかってるんだけど」

「あー、えっと、確かに俺達は付き合い初めてすぐにしちやいましたけど、その場の勢いとかってありますし。それに俺のほうからしたわけですし」

だからヴィータ自身は何も悩む必要はない。カイズはそのつもりで口にしたが、彼女の言葉には続きがあった。

「……だけどシグナムはもう四度もデートに行ってるんだぞ。それなのにキスもまだって。……いや、キスがどうのこうのって話じゃなくて、その、あたしの行動が相当異常だったんだなって。それを今日実感しちゃってよ」

「相当異常って。……あつ。あー、」

ヴィータの言葉でカイズもその時のことを思い出したのだろう。少し考えるように、言葉を濁した。

「や、やっぱりおかしかったんだよな。その、一回目のデートで、しかも外で、その、な……舐めるのって」

いやおかしくないわけがないのだ。ヴィータは自身の行動を恥じるように、再び身を縮こませてしまう。

カイズはそんな彼女を後ろから包み込むと、彼女の耳元に口を近づけた。

「まあ確かに一回目のデートでって考えると、あまり例をみないかもしれませんね」

「じゃ、じゃあやっぱりあたしって、その」

「でも俺は嬉しかったですよ。あの頃は告白したてで、ヴィータさんとき合えたのだったって、本当は夢じゃないかって何度も思ってた。……だけど、そのヴィータさんが俺のことを思ってくれて、俺のためにしてくれたことですから。……そうでなくても、俺は一回目のデートがそれでよかったと思ってます」

「……気持ちよかったからか？」

ヴィータは「むう」と少し不服そうにカイズを見る。鼻と鼻が

くつつきそうな距離で顔を合わせると、カイズは小さく首を振った。「それはもちろんそうですけど、そうじゃなくてですね。もし俺とヴィータさんが付き合って、二ヶ月経ってもキスすらしてなかったらって考えると、少しぞつとするんですよ」

「……どうしてだ？」

その理由がヴィータにはわからなかった。カイズもヴィータもお互い一緒にいられるだけで幸せだった。だからこそ、そこに性的行動が関与しているとは思いたくはなかったのだ。

ヴィータが何を思っているのか、カイズもわかったのだろう。彼は満面の笑みを見せると、その疑問に答えた。

「だってそんなにゆっくりした交際だったら、まだ俺とヴィータさんが結婚してなかったかもしれないからね。単純計算で、二ヶ月は遅れた可能性があるわけ。——俺、今がすごい幸せなんで、その

幸せが二ヶ月先延ばしにされたかと思うと、正直ぞつとしますね」

「……カ、カイズ」

「ヴィータさんはどうですか。俺と結婚するの、二ヶ月先延ばしでもよかったですか」

カイズは柔らかい声で、そう訪ねるとヴィータの頬に軽くキスをすする。そんな彼に応えるように、ヴィータも彼の頬にキスをした。

きつと恥ずかしがり屋の自分では、結婚でもしなければここまで触れあうことはできなかっただろう。

カイズに抱きしめられ、カイズに触れて。今が幸せだからこそ、その幸せが遠退くことをヴィータもまた考えたくはなかった。

「……ううん。二ヶ月先延ばしなんて絶対に嫌だ。あたしも早くカイズとこうなりたかったから」

「じゃあそれでよかったですよ。人は人、俺たちは俺たち。恋愛の形なんて人それぞれなんですから」

「ん、そうだよな」

ヴィータがくつと唇を突き出すと、カイズは自身の唇を重ねる。どうやらヴィータの気分も戻ったようだ、彼はほつと息をついた。

(結局エツチなっことはうやむやになったけど。……まあいいよ

な。ヴィータさんも納得してくれまし

唇を離すと、トロンとした眼差しのヴィータと視線が合う。カイズは彼女の体を離すと、にっこりと笑みを浮かべた。

「ヴィータさん。今日は久しぶりに一緒に風呂入りましょうか」

長年の夢 二人でしたいこと（この続きは18禁に置いてあります）

ドキ、ドキ、ドキ。

ずぶ濡れの体をシャワーで温め、先にお風呂をいただいたシグナムは、交代でお風呂に向かったコウキのことを待っていた。

換えの服などはもちろん持っているわけもなく、今は彼の真っ白なYシャツと紺色のハーフパンツを着ている。

肩幅的大きさ的にはなにも問題はない。ただ胸のあたりが少しだけキツいくらいだ。

「……なんだか熱いな」

だがそれは部屋の温度が高いからではない。初めてやってきた彼の部屋に緊張が解れない故だ。

コウキの家は、小さな一軒家だった。玄関や台所、寝室は存在するが二階が存在していない。

まるで初めから一人暮らしが前提で建てられたような。そうであつても、築年数の長さが家のそこから感じられる。

「……コウキが暮らすために建てられた家じゃないんだな。そ、それにしても、私は本当についてきてよかったのだろうか」

案内された部屋をみると、それはお世辞にも綺麗と言えるものではない。CMなどでみたことのあるようなゲーム機がいくつも乱雑に置かれており、その何倍ものディスクがまるで塔のように積み重なっている。

唯一、ノートパソコンの置かれている机の上だけは異常なほど綺麗にされており、いかにもコウキらしいとシグナムは笑みを浮かべた。「……………あと、こういうものはどこかに仕舞っておくべきだろう」

家捜しするまでもない。部屋に置かれた本棚の上には裸の女性が映っているいかにもといったディスクケースの背表紙が重ねられている。

きつと元よりシグナムを呼ぶ予定などなかったのだろう。今日の

出来事が改めて偶然だとわかると、彼女はほっと一息ついた。

「本当にただの善意だったのだろうな。……そうか、緊張する必要なんてなかったんだな」

ようやく少し落ち着けたと、後ろにあるベッドに背を預ける。シグナムは彼のぐちゃぐちゃになってる布団に気づくと、その場から立ち上がった。

「全く、布団も畳まないいわな。……し、仕方のない、か、彼氏だ」

未だに彼氏という言葉が口にするのは、抵抗があった。だがコウキ自身がないところで、口にできるのは彼女なりの進歩であろう。

シグナムはベッドの布団を取り去るとシーツに手をかける。ピシッとそれを整えると、次に布団を大きく広げた。

「……この布団で、いつもコウキは寝ているんだな」

そう思うと、少しだけこそばゆくなっていく。シグナムは布団に顔を埋めると、小さく深呼吸をした。

「ん、んん。……これがコウキの匂いなのか」

キスどころか、抱き合ったことすらない二人組だ。近くにいるときも、匂いなどは気にしたことはない。だからこそ、一度意識してしまふと変な気分になってきた。

「こ、これでは変な女ではないか。ん、んんっ！」

最後にもう一度「スウー」と鼻を動かすと、持っていた布団をきつちりと敷く。それと同時に、浴室のドアが開く音が聞こえた。

「くあー、しかし随分と降られたよな。あんなびしょ濡れになると思ってたかったぜ」

「そ、そうだな。——ンンッ!？」

部屋の扉が開くと、シグナムは思わずびくりと体を震わせてしまう。だがそれもそのはずだ。あまり大きくない部屋の中で、上半身裸のコウキが立っているのだから。

シグナムはバツと視線をはずすと、困ったように声をあげる。

「ど、どうして服を着てないんだ」

「いや、この時期って普段は風呂でたら少し涼んでるからよ。風呂場を上を用意してないんだ。ちよっと前通るぞ」

コウキはシグナムの横を通り過ぎると、タンスの前に進んでいく。後ろを向いたことにより、逆に彼の裸体とシグナムは直面してしまっただ。

(い、以外に鍛えてるんだな)

元よりプログラム畑の人間だ。もつとだらしない体かと思っていた。だが整備員として鍛えられた成果だろう。細マツチヨというのは、彼のような体のことをいうのかもしれない。

(——っ！ わ、私はなにをじろじろ見ているんだ)

シグナムは改めて視線をはずすと、コウキに背を向ける。何も音がないからか、ごそごそと服を着る音だけが嫌に耳に入ってきた。

そして着替えが終わったのだろう。部屋が静かになると、シグナムはどうしていいかわからなくなる。

(ど、どうしてコウキは何も言ってくれないんだ。これではどうしていいかわからないではないか)

座るタイミングも、話すタイミングも全て失ってしまったシグナムは、ただ彼の言葉を待つことしかできなかった。

——ゴクリッ。

その時だ。静かな部屋の中で、唾を飲み込む音が聞こえた。その音はシグナムのものではない。ということは必然的に彼がたてた音ということになる。

「——シグナムッ！」

鬼気迫る声と共に、左肩に手が置かれる。

コウキはそのまま力を込めると、彼女をベッドの上を座らす。再び喉を鳴らし、その見開いた目にはどこか鬼気迫るようなものが見て取れた。

こうならないことを予測してなかったわけではない。だがいざ目の前にすると、やはり未知への恐怖のほうにシグナムには大きかった。

彼女は弱々しく目を細めると、それに応える。

「ど、どうしたんだいきなり」

「……………」

「だ、黙っていても、わ、わからないぞ」

「……本当はいつうちに誘おうかと思ってずっと考えてた。だから雨が降ってきて、思わずうちに誘ったんだ。正直ずっと我慢してた。あんまり欲丸だしにして、お前に嫌われたくなかったから。……だけでもういいよな。シグナムもこの二ヶ月で俺のことわかってくれたよな」

「……ああ」

小さくそう答えると、彼女は覚悟を決める。こういうのは状況だと言われたばかりだが、正直どこまでのことをされるのかはわからない。

(だが、コウキだったら)

そう心に決めると、体に緊張が走るのがわかる。コウキはよしと手を叩くと喜びを露わにした。

「やっぱりさすがは俺の彼女だよな。……ちよつと待ってろ。いま準備するから」

「じゅ、準備!？」

準備するということは、明らかにキス以上のことをするということだ。男性経験が皆無の彼女でも、それくらいの知識はあった。

コウキはシグナムの隣から離れると、何か柵を漁り始める。

「確かあれどこにあったかな。結構大きなもんだから、なくなるはずないんだけどな」

「お、大きいものって道具を使うのか!」

「そりやそうだ。いやー、こういう機会今までなかったし、ほんとシグナムが初めてなんだぜ。お、あつたあつた」

そう言つてコウキが掘り出したものは、広辞苑ほどの分厚い機械だった。彼はそれを床の上に置くと、ケーブルを接続する。そしてテレビにそれを繋げると、小さなカセットを取り出した。

「フウフウー、お、よかつたよかつた。まだ生きてるみたいだな」

「………何が生きてるといふんだ」

シグナムは若干冷めた目を見ると、コウキとその機械、そしてテレビの画面を見た。

そこにはいかにもビット数の低そうな画面が表示されており、コウ

キは右側のコントローラーをシグナムに投げる。

「いやー、このゲーム小さい頃に買ったはよかつたんだけどほんとクソゲーでさ」

「……………どういうことだ？」

「このゲームってどうやら二人用を前提としたゲームらしくてさ。二人で協力しないと手に入らない強化アイテムがたくさんあるんだよ。いくら容量が少ないからって、ちゃんと一人用は一人用で調整しろって感じだよな」

「コウキが誘おうとしたことはこれなのか？」

「おう、そうだな。…………俺って昔から全然友達がいなくてさ。ずっと一人でしかゲームやったことなかったんだ。だからこんな日が来るのをずっと待ってたんだぜ！ よし、始めようぜ!!」

やたらテンションを高くすると、コウキはIPのコントローラーを持つ。そしてタイトル画面の二人用を選択するとゲームを始めた。

操作説明などはいっさい受けていないシグナムは、見よう見まねでコントローラーを構える。

心の中ではどこかほっとしている部分があったのも確かだ。コウキは学生時代友達がいなかった話しもよく聞いている。だからこそ、本当に人とゲームができるのが嬉しいのもわかる。

(……………だとしても、正直これは女としてくるものがあるな)

シグナムは表情こそ笑って見せたが、内心は複雑な気持ちでゲームに望むのだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ないEX4 誓う言葉

例えその日が来ようとも

大変だったこと、辛かったこと、そして……

お昼も過ぎた3時過ぎ。今日一番の大仕事を終えたヴィータは、喫茶店でアイスコーヒーを飲んでいた。

今日は大事な家族のために一日歩き回っていたからか、随分と喉が乾いていたと今更になって気づいた。

それは目の前のコバルトブルーの髪色の女性も同じようだ。注文したアイスコーヒーを、一気に半分ほど飲むと、落ち着いたように一息ついた。

「助かったよ、サクヤさん。正直、あたし一人じゃ自信がなくて」

「いえいえ、私でお役に立てたなら光栄です。……それにしてもシグナムさん、初々しかったですね。服一つであんなに顔を赤くしちゃって」

その時のシグナムはよく覚えている。無難な服を選ぼうとしていたシグナムを制止し、二人で女性らしい服を全力で選ばせた。

あの武士や騎士をそのまま形にしたシグナムが、顔を赤らめ「可愛いと言ってくれるだろうか」と。まさかそんな姿を拝める日が来るとは思いもしなかった。

シグナムは明日の準備のために、すでに帰宅している。なので、この場にはヴィータとサクヤしかいなかった。

ヴィータはストローに口を付けると、いつの間にか中身が空なこと気づく。サクヤもそれは同じようで、二人して苦い顔をして見せた。

「ケーキセットでも頼みましょうか、ヴィータさん」

「そうするかー。今日はあたしに奢らせてくれよ。随分と歩かせちゃまったし」

「それではお言葉に甘えますね。……でも、これからじゃ結構時間が

かかりそうですね」

サクヤのその言葉に店内を見渡す。さすがの休日だからか、お昼の時間を外しても店内には多くの客がいた。

二人はケーキセットを注文すると、何となく手持ちぶさたになる。それではと思うと、サクヤは口を開いた。

「私たちもあんな時代があったんですね。といいまして、まだまだ新婚ホヤホヤですけどね」

「まあお互いにそうだよな。……でも結婚したおかげで、イチヤイチャするのにはだいぶ慣れてきたけどな」

「それは同感ですね。まあ私の場合は、羞恥心よりも自分に惚れさせたいって思いが大きかったですけど」

「そうなのか？」

「そうなんですよ。私って見ての通り結構プライドが高い方で。絶対に自分のほうが惚れてるだなんて、相手に思わせたくないんですね。まあ、旦那と出会ったときはベロンベロンに酔ってましたし、愚痴や不満も何度となく聞いてもらってましたから。……正直こつちが一方的に好きになってましたから、初めから勝ち目なんてなかったんですけどね」

サクヤはどこか悔しそうに、それでいて楽しそうに口にする。

「だけどそれでもいろいろしたんですよ。何度もお店に足を運んだり、偶然を装って帰りが一緒になるように待ち伏せしたり。……酔った振りして、色仕掛けなんかもしたりしましたね」

「そ、それは結構頑張ったんだな」

「でも全部空振りだったんですよ。まあ色仕掛けなんかはあと一歩って感じだったんですけど、その時の状況が悪かったと言いますか」

「状況が悪かったって、サクヤさんのか？」

「いいえ、旦那のほうですね。その時旦那は貸し店舗でなく、自分のお店を持つようになって考えたって考えている時だったんですよ。自分の店を持つことになったら、もちろん生活も苦しくなる。そんななか、色恋沙汰を考えてる余裕なんてなかったんですよ」

「それでサクヤさんはどうやって結婚まで持ち込んだんだ？」

ヴィータがそう聞くと、サクヤは少し居心地の悪い顔をする。だが話を振ったのは、サクヤのほうだ。彼女は大きなため息とともに、続きを話す。

「旦那がその話をしたのは、私がお酒を勧めて少し酔ってたときなんです。普段は店員と客という立場もありましたけど、愚痴なんてほとんど吐かない人で。で、店の話になったときに私が酔った勢いで言っちゃったんですよ。……店だったら私が出資してあげる。だから貴方は私のものになりなさいって」

その時のことを思い出しているのだろう。サクヤは頭を抱えると、そのまま机に額を当てる。

その口上もさることながら、前の話と統合すると、その後旦那を押し倒したということになる。

もし自分にそんな勢いがあれば、カイズとの結婚ももつと早かったのだろう。

ヴィータは苦笑いを浮かべる。だがそんなヴィータを見て、サクヤは恨めしそうに声を上げた。

「……ヴィータさんは何かなかったですか。いえ、いろいろあったのは知ってますけど、これじゃあ不公平ですよ」

「うーん。そう言われてもなー」

カイズと結婚するまでは、まさに嵐の中の大航海だった。

一番大変だったのは、シスンとの出来事だろう。あの時は自分の罪と罰を改めて思い知らされ、それに呼応するように闇の書に復讐をするシスンが現れた。

一番辛かったのは、カイズの記憶がなくなったときだ。自分のことを覚えていなく、悪意のない言葉に随分と傷ついた記憶がある。

だが記憶喪失のことをサクヤは知っている。そしてシスンのことは、仕事の立場上口外することはできない。

（サクヤさんはなかなか好意に気づいてもらえなくて。それで随分しんどい思いをしたんだよね）

「……………あつ」

「何ですか、何ですか。何か思いつきましたよね今っ！」

「いや、これは。でもいいのかな、話しても」

確かにこれは管理局で秘匿にはなっていないし、カイズと付き合ったことのあるサクヤになら話してもいいことかもしれない。

ヴィータはしばし頭を悩ませる。だがまだケーキセットが届く心配がないとわかると、探るように口にした。

「えつとな。一番しんどかったっていうのが、カイズのお父さんについてのことなんだ」

「えつ、そんなに大変だったんですか。でもカイズ君のお父さんって、寡黙すぎるぐらい寡黙で。といいますか、息子の恋人になんていいも悪いも興味を持たない人に見えましたけど」

「……まあサクヤさんがカイズと付き合って、もしそのまま結婚したら、そうだったかもしれないねえな。だけどまあ、あたしだったかこそいろいろと話がこじれちゃってよ」

ヴィータがそう前置きをすると、サクヤは興味津々に身を乗り出す。

どちらにしても、まだまだ時間はかかりそうだ。

ヴィータは少し過去を思い出すと、あの時のことを語り始めるのだった。



「……………（ゴクツ）緊張してきた」

黒のスーツとタイトスカートに身を包んだヴィータは、緊張のあまり足取りが遅くなる。そんな彼女を励ますように、カイズは明るい声をあげた。

「大丈夫ですってヴィータさん。うちの親父はどがつくほど放任主義ですし、きつとろくな会話をする前に頷いてくれますって」

「そ、そうは言っても緊張するものはするんだよ」

ヴィータは一度足を止めると、大きく深呼吸をする。そして自らを奮い立たせるように、両頬を叩いた。

カイズのプロポーズがあり、ノーナンバーズ事件が終わりしばらく経った頃だ。

仲間内ですでに結婚式の段取りは始まっており、カイズの体も完治したところ。ヴィータは最大のイベントを終えていないことに気づいたので。

それがカイズの父親に挨拶をしに行くことだ。

そうなのだ。プロポーズをされ、結婚式の予定まで決まっているのにヴィータはまだ一度もカイズの父親に挨拶をしに行っていないのだ。

これはさすがに失礼を通り越して、怒られるのではないのだろうか。その思いが、ヴィータの足かせになっていたので。

「仕方ないですってヴィータさん。俺だってようやく怪我が治ったわけですし、そんな暇ありませんでしたから」

「まあそれはそうなんだけどよ。……それにしても、カイズの父親って一度も見舞いにこなかったよな」

「だから放任主義なんですって。一応問い合わせにはきたみたいですが、俺の命に別状がないって知ったら『それではよろしくお願いします』ってそれだけで通話切ったみたいですし」

「……………もしかして、仲わりいのか？」

「仲が悪い云々の前の話ですね。でも俺は親父のこと嫌いじゃないですよ。頑固者ですけど、俺と違って芯は通ってますし、正義感も強いし。でもまあ口数が少ないので、勘違いされることだけは多いんですけどね」

そう言葉にするカイズに嘘偽りは見られない。きつと言葉通り、カイズは父親を尊敬しているのだろう。

だがそこまで話すと、ヴィータはあることに気づいた。

「えっと、カイズのお母さんって」

「ああ、母親はいませんね。といますか、顔や名前すら知らないと言ったほうが正しいかもしれません」

「どういうことだ？」

「いやー、俺にもよくわからないんですよ。でも母親のことに関して

は、親父は絶対に話してくれないですよ。まあ俺も記憶の欠片もない母親のことはあまり気になりませんでしたし、別段どうでもいいかなと思ってます」

「……知りたいとか、会いたいとかって思わないのか」

「うーん。まあそんなには。親父にはずっと『最悪の妻』だったと言われてましたし、それ以上のことは何も教えてくれなかったので」

「そ、そうか……」

「そんなに落ち込まないでくださいよヴィータさん。俺は気にしてないですよ、本当に。ほら、そろそろ着きますよ」

カイズは手を引かれると、少し駆け足で目的地に向かう。そしてその時が迫っていることに、ヴィータは息をのんだ。

カイズはいろいろと励ましてくれたが、ヴィータはどんな罵声を浴びせられようが、それを受け止める覚悟をしていた。

だって、それは。

「……………ここか。やっぱり大きいな」

ヴィータの目の前には、ミッドでも上位に入る巨大な建物だ。

目の前の総合病院。

ここは、カイズの父親が経営する知る人ぞ知る大病院なのだから。

二人なら、二人だけなら

学生時代カイズが医者を目指していたことはヴィータも知っている。そしてその夢を曲げて、局員になった理由もだ。

だがカイズの実家のことを知ったのは、つい最近のことであった。まさかカイズがミッドでも五本指に入る大病院の息子だとは今まで知りもしなかったのだ。

エレベーターでの移動中、ヴィータは内心冷や汗まみれだった。

いろいろな思いや葛藤があったが、カイズが教導官になったことは間違っていないと思う。きっかけは自分に命を助けられたこと。

だがきつかけはあくまできつかけ。本人が本気でその夢を目指しているのなら、それが正しいのだとはやてにも教えられた。

そして自分はそんな彼の背中を押すためにデバイスを制作し、そして今や彼は教導官の資格を手に入れたのだ。

だがそのことを病院の院長であるカイズの父親はどう思うだろうか。自分の息子は学生時代まで自分と同じ道を目指してくれた。

だが言ってしまうえば女にうつつを抜かし、その夢を変えてしまったのだ。

カイズが言うには「別に反対も賛成もされませんでしたよ」とのことだ。

だがそれはあくまで息子に対してのものだろう。

ことの張本人を目の前にして、カイズの父親がなんとというか。少なくとも歓迎はしてくれないだろうとヴィータは思っていた。

やがて指定の階にエレベーターが止まる。ヴィータはゴクリと唾を飲むと、重い足を一步一步進めていった。

「そんなに緊張しなくて大丈夫ですって。ほら、早く行きましょう
ヴィータさん」

「お、おお……」

カイズの様子は相変わらず不安の色が見えない。ヴィータはその表情に少し安堵する。そして木製の重厚な扉の前に立った。

「親父、来たぞー」

心の準備ができていないなか、カイズはノックをすることなく扉を開ける。ヴィータはそのすぐ後に続く、思い切り頭を下げた。

「は、初めまして。大変挨拶が遅れました。や、八神ヴィータと言います」

深々と下げていた頭を上げると、まず部屋を見渡した。

中央にガラスのテーブルがあり、その両脇には黒いソファアが置かれている。

奥には木製の高級感あふれる机があり、その後ろに目的の人物は立っていた。

「……ああ、二人ともご苦労だったな」

筋肉質な体に、オールバックの黒髪。そんな彼に不釣り合いなほど釣り合っている白衣姿。カイズの父親、ジュウゾウは、まるで部下に言葉をかけるとこちらに向かってくる。

瞬間、ジュウゾウと目が合った気がする。彼は睨みつけるようにヴィータを見るが、もともとそういう顔なのだろう。それを隠すことなく、その表情のままカイズの前に立った。

「それではカイズ、早速だがこの表を持って一階まで戻れ」

「……………はあ？　って、これ人間ドックの紙だよな??」

クリアファイルに挟まれてそれを見る。それは健康診断などの時に渡されるそれそのものだった。

五つの項目が終わった後には、脳の検査の予定もあるようだ。カイズはそれを見ると、困ったように頭を掻く。

「すまん。親父の言葉が足りないのはいつものことだけど、これじゃあ本当に何がなんだかわからない」

「見ての通りだ。うちで診断を受けていけ」

「どうして?」

「……数日前まで、大怪我を負って記憶まで失っていたのだろう。うちでも検査をしていけと言っているんだ」

「いや、怪我は治ったし脳も異常はないって」

「それでも受けていけ。……お前には子供を心配する親の気持ちかわ

からないのか」

「……………えっ?」

ジュウゾウの言葉を聞くと、カイズはあつげにとられたような顔をする。だが次の瞬間、信じられないものを見るように驚きを見せた。

「し、心配してるのか。親父が、俺を?」

「何かおかしいか」

「いや、おかしくなんてないけど。…………でも珍しいな、親父が直接言葉にして伝えるなんて」

「今までとは事態が違いすぎる。お前が診察を受けている間に、そこのご婦人とも今後についていろいろ話しておく。…………行ってこい」

「え、ええっと」

カイズはそう言われると、困ったようにヴィータを見る。だがその顔はどこか緩んで見えた。

きっと先ほどの言葉通り、声に出して心配してもらったことが初めてだったのだろう。

だったら彼女の答えは決まっていた。

「行ってこいよ。せっかくお父さんが心配してくれてるんだしよ」

「——はっ、はい! それじゃあちよつと行っていきますね」

カイズはギュツと診断書を握りしめると、鼻歌交じりに院長室からでていく。

ボタンと扉が閉められると、ゆっくりとヴィータの表情が笑顔のまま固まっていく。

(……………ど、どうしよう)

流れのままに見送ってしまったが、ようするにこれから3時間近くカイズの父親と二人きりということだ。

果たしてそんなに間が持つのだろうか。ヴィータは油の切れたブリキのように、ギチギチと向き直る。

ジュウゾウはそんな彼女を見ると、中央の黒のソファアに腰を下ろした。

「……………ようやくこれで話ができるな。さっ、座ってくれ。ああ、いま飲み物を用意させよう。好みはあるか」

「で、ではコーヒーで」

ヴィータはそう告げると、その数秒後すぐに飲み物を持ったナースが部屋に入ってくる。

机にそれらが置かれると、ヴィータはジュウゾウの対面のソファアに座る。

そして再び扉が閉められると、静寂が部屋を覆った。

ヴィータはとにかく居心地の悪さを顔に出さないように、ピシリと構えていた。

（大丈夫だ。もう怖いことなんて何もない。……たとえ何を言われたとしても）

見た目のことで散々悩み倒した。

教導官を指す彼の背中を押してあげると決めた。

過去に犯した罪も認め立ち向かうこともできた。

人間でないことで、カイズに迷惑をかけるかもしれない。それでも二人で同じ時間を歩んでいこうと決めた。

そして二人の愛は疑いのないものだ、すでに何度も理解している。

どんな罵声も困難も覚悟している。だからこそ、今日はここにきたのだ。

来るならこい。ヴィータは気持ちを切り替えると、真っ直ぐにジュウゾウと向かい合う。

彼はそんなヴィータを見ても顔色一つ変えることなく、ポケットから黒色のカードを取り出すと、それを机の上に置いた。

「このカードはなんですか？」

「それは使用限度額のないクレジットカードだ。そこには君たち公務員が定年まで働いてようやく手にする金額が入っている。……受け取ってほしい」

「ど、どうしてですか」

ヴィータがそういうと、ジュウゾウは初めから言葉を用意していたのだろう。彼はためることなく、それを言い放った。

「これを手切れ金として、息子と別れてほしい」

「——えっ」

「君には。……いや、君という存在に息子を任すわけにはいかない」

その表情、声色は変わることもなく。

だからこそそれが冗談ではない。本気の言葉だとヴィータは理解することができた。

カイズの態度を見て、少し安心していたところはあったかもしれない。カイズの父親ならきつと悪い人ではない。自分のこともわかってくれるはずだと。

そしてある程度の反対は初めから覚悟をしていた。していたが、これは反対ではなく拒絶だ。

ヴィータは右手を握り込むと、毅然とした態度を崩すことなく対応した。

「このカードは受け取れません」

「どうしてだ」

「私は。……あたしはカイズと別れる気がないからです」

「どうしてだ」

「ど、どうしてって。ならジュウゾウさんはどうしてあたしとカイズの結婚を反対するんですか」

理由ならいくらでも考えられる。だがまずその答えを聞かないことには、先には進めない。

ジュウゾウは顔色一つ変えずに、さも当たり前のように口を開く。

「人間である息子が、人間でない魔力の固まりと結婚をする。これを反対しない親はいないと思うがな」

「——ッ」

人間ではない。その言葉は、容赦なくヴィータの心に傷を付ける。しかしそれだけだ。人間でないこと。そして昔に大罪起こしたこと。これらのことは、シスンの時に二人で乗り越えてきたことだ。

感情的になつてはいけない。ヴィータは小さく深呼吸をする。

「そのことについては、もうカイズとも話し合っています。カイズは人間でない自分を受けれてくれると言ってくれました」

「それは君のことを好いている息子なら当たり前のことだろう。だが

君に対して、何の感情も持たない私は違う。人間と魔力の固まりが結婚したことでもろくなことにはならない。……難しいことは言っていない。あくまで一般論だと私は思うのだが？」

「そ、それは……」

「これから先の未来。人間として息子はゆつくりと老いていくだろう。だが君はどうだ。そんな幼い容姿のまま、ずっと息子の側にいて。そんな君を見て、息子は本当に今の気持ちを持ち続けていられると思うか？」

「でもカイズだつたらきつと」

「子供も作れない魔力の固まりが、あいつに何を残してやれる。何も残らない。最後には間違っていたと気づくだけだ」

「ち、違う。それは、それは。……違うと思います」

カイズと自分の乗り越えてきたことは。互いを愛し合う気持ちはそんなものではない。

だがジュウゾウの言う言葉も確かなのだ。カイズとヴィータはお互い苦難を越え、それでも一緒にいると心に決めた。だからこそ、そうではないジュウゾウにその気持ちを理解してもらうことは不可能に近かった。

ジュウゾウはコーヒールを一度口に運ぶと、ずっと顔色を変えることなく。さらなる現実を叩きつけた。

「……それに君は古代ベルカ時代のロストロギアから生み出されたらしいな」

「——た、確かにあたしは昔に大罪を犯しました。だけど、その罪は二人で乗り越えたと決めました。その件についてジュウゾウさんに迷惑をかけることは絶対に」

「大罪？ 別にそんなことは気にも止めていない」

「えっ!？」

「私が危惧しているのはただ一つだ。——古代ベルカのロストロギアから生み出された君が、残される悲しみを想像できるか」

「残される、悲しみ……?」

「君という存在は常に不安定な場所にいるということだ。君を生み出

したロストロギアの本体はもうこの世界に存在しない。そんななか、もし君の体が崩壊したらどうする？ 人間の体なら長年に渡って培ってきた知識と技術で救うこともできるかもしれない。だが君という存在は。さらにロストロギアに関わっている君がどうにかなたとき。それを救うことができるのか？」

「救うこと。それは……」

——ドクンッ！

心臓が強く高鳴ると、あの時の彼女の顔が蘇る。

家族を救うため、雪のあの日自分たちの目の前から消えていったもう一人の大切な家族の姿を。

どうにもできなかった。どうすることもできなかった。悲しみはあった。無力感に心だつて蝕まれた。

だけど、だとしても、結果として自分たちはアインスを助けることができなかったのだ。

明らかに変わるヴィータの顔色を見て、ジュウゾウもまた眉をひそめた。

「ここは病院だ。手を尽くして、それでも救えない命は多く存在する。だが手を尽くすことと、何も出来ずに見ているだけは違う。無力と絶望とは君の思っている以上に、大きな溝が存在するということだ。……そろそろ検診の時間だ。すぐに答えを出せとは言わない。だが息子のことを思うなら、よく考えて答えを出してくれ」

ジュウゾウはクレジットカードを机の上に置いたまま、ソファアーカー立ち上がる。

ヴィータは俯いたまま何も言えずにいた。

パタン。怒りの色も、悲しみの色も見えない。ただ当たり前というように、部屋のドアが閉められる。

自分が消えてしまうということ。それを考えなかったわけではない。そうであっても、二人なら乗り越えていけると信じていた。

いや、きつとカイズなら自分と同じことを言ってくれるはずだ。だがその想いを父親とは言え、赤の他人に理解しろと言う方がやはり無理な話なのだ。

「ぐっ、くそっ」

ヴィータは奥歯を強く噛みしめると、出されたコーヒーを煽るように飲む。

そしてその場から立ち上がると、院長室からでていくのだった。

変わらぬ答え 見えない式

病院の二階。ヴィータはソファアに座ると、ガラス越しに一階のロビーを見渡す。

そして肩を落とすと、大きなため息を漏らした。

「ハアアアアア……。…ある程度の予想はしてた。してたんだけどな」

まさかあそこまで拒絶反応を見せられるとは思っていなかった。だが言っていることが、あまりにも一般論であるが故に、ヴィータは今後の対応に悩んでいた。

結論から言えば、正直今更だった。

もしジュウゾウとの出会いがもう少し早かったら、ヴィータは心の底から落ち込んでいたかもしれない。

それこそカイズのことを思って、身を引いていた未来も考えられた。

だが言葉通り今更なのだ。今更自分が人間でないこと、容姿のこと、ロストロギアから生み出されたということ。

それらを突かれたところで、カイズと別れる気は一切ない。

それはきつと彼も同じのはずだ。だからこそ、すでに別れるという選択肢はヴィータのなかには存在していなかった。

だがそうなる、今後カイズの父親とは一生険悪な仲になることは目に見えている。

それはヴィータにとっても、カイズにとっても。そして形式上親戚になるはやてたちにとっても、あまり居心地のいいものではないだろう。

きつと周りのみんなは、自分たちの味方をしてくれる。それがわかっているからこそ、ジュウゾウにはしっかりと祝福される形で結婚をしたかったのだ。

「うあああ、どうすればいいんだ。やっぱりカイズの検査が終わるまで、待つしかないのか」

二人がかりでジュウゾウが認めるまで想いをぶつけ続ける。もし

かしたら、それでジウウゾウは認めてくれるかもしれない。だがそれは諦めでという意味でだ。

この問題にカイズの手を借りてはいけない気がした。あくまでこれはヴィータとジウウゾウの問題なのだから。

「って言っても、ジウウゾウさんは診察中でどこにいるかもわからないし、どうしたら。………ん、何かあったのか?」

俯いていたヴィータは、一階のロビーの喧騒が強くなるのを聞くと下に目を向ける。

先ほどまでロビーには、多くの人がごった返していた。だがその一点を避けるように、男の周りから人が離れていたのだ。

「だしやがれー。あのくそ医者をごの場に呼んでこい!!」

三十代前後の男は、そうがなり立るとオブジエクトの木を倒す。その音に近くにいた老人はおびえ、女性達は逃げるようにその場から離れる。

しかし男はそんな周りの様子は一切気にしていないようだ。赤く充血した目を見開くと、まるで仇を捜すようにあたりを睨みつける。

「どうして見捨てた! 俺のお袋が一番重傷だったのに、なのにどうして見捨てたんだよ!!」

そうわめき散らすと、再び男は鑑賞用の木に手をかける。その瞬間、ヴィータはハツと身を乗り出す。

(まずい、あのままじゃベンチに座ってるばあちゃんに当たるぞ!)

車いすが近くにある老婆はきつと足を悪くしているのだろう。暴れ回る男におびえながらも、その場から逃げ出せずにはいた。

「——間に合うか!」

ヴィータはデバイスを手に取ると、乗り越え防止ようのガラスの乗り越えようとする。

だが男の行動は、それより遙かに早かった。

怒りのままに手を振ると、鑑賞用の木が左側に倒れる。

——ドッ!

先ほどとは違い、人間にぶつかる鈍い音が小さいながらロビーに響きわたる。

誰しもが間に合わない。そう思った瞬間だ。

白衣を着たガタイのいい男は、その木を軽々と左手で受け止めて見せた。

黒髪のオールバックの男性。ジユウゾウはその木を、誰もいない場所に投げ捨てる時、男の前に立った。男は、その瞬間ジユウゾウを睨みつけていった。

「お前、お前だ！ どうしてあの時、お袋を見捨てやがったんだ!! どうしてお袋を見捨てて、あの成金ババアから助けたんだよ!」

「……………」

「うちに金がないからか? あいつが金持ちだったからか? こんな大病院様じゃ、俺みたいな貧乏人は世話しないっていうのかよ!!」

「……違う」

「違うならどうしてお袋を見捨てたんだよ! 言い訳があるなら、今ここで言ってみろよ!!」

男の言葉を聞くと、ロビーに再び喧騒があがる。だがそれは先ほどの男に対する恐れによるものではない。

周りの人間は、ジユウゾウに白い目を向けていたのだ。

だがジユウゾウに堪えた様子は一切見られない。そして無表情のままゆっくりと片手をあげた。

「警備員なにをしてる。さっさとこの男をつまみ出せ」

『……はっ、はい!!』

周りと一緒に呆気にとられていた制服姿の男達は、その場から走り出すと男を押さえつける。

男は必死になってそれを振り払おうとするが、やがて三人、四人と数が増えるともう抵抗すら空しく見えた。

「ぐっ、くそ、ふざけんよ! この金の亡者が、冷徹やろうが!! 大切な人を失う気持ちが変わらなくて、医者なんてやってるんじゃねえよ!!」

「警備員、早くつまみ出せ」

「ぐぞ、ちくしよが!!」

罵声をはけたのもここまでだ。男は完全に押さえ込まれると、その

ままズルズルと外につまみ出されていく。

男の姿が消えると、先ほどの喧騒が容赦なくジユウゾウに向けられた。

(これじゃあ悪者がどっちかわからないじゃねえか)

不安と不信を向けられるが、ジユウゾウは何も言い訳はしなかった。その代わりにベンチに座っている老婆に手を伸ばすと、低い声でこういった。

「お騒がせしてすみませんタバタさん。病室に戻りましょうか」

老婆は少し驚いた顔をするが、その手を拒むことはなく。ゆっくりと車いすに導かれると、ジユウゾウはその後ろにつく。

そして二人は喧騒を引き裂くように、真っ直ぐエレベーターに向かっていくのだった。



先ほどの騒ぎの後、どうにもロビー付近には居づらくヴィータは病院の中庭に移動していた。

大病院の名前に違わぬ広大な庭は、病人のリハビリや心のケアに役立っているのだろう。色とりどりの花は、下手な行楽施設より色鮮やかだった。

「ジユウゾウさん。……いったいどういう人間なんだろうな」

ここにきてヴィータはジユウゾウのことが余計にわからなくなっていた。

魔力の固まりである自分の存在を頭ごなしに否定している。

だが息子のことを考えてのことだ。

誰もが言葉を失ったなか、男に立ち向かい結果として老婆を助けた。

しかしあの男が叫んでいたことが、嘘だとは思えない。

ここまでの大病院だ。何とかして評判を落としたいという人間はいるかもしれないが、これではあまりにも直接的すぎる。

だとしたら、ジユウゾウは彼の母親を見捨てたということになって

しまう。

出会ってまだ一時間ほどしか立っていない。それで一人の人間の全てがわかるとは思っていない。

だがここまで様々な面を見せられては、考えをまとめることすらできなかつた。

「うああああ、わからねえ、全然わからねえよ。……って、あれ、どこだここ？」

ずっと考えごとをしていたからだろう。ヴィータは気がつく、庭の随分と奥の方に進んできてしまったようだ。

「はあー、でもまあ悩んでばかりいても仕方ねえよなー。でもジウウゾウさんはどうしたら納得してくれるんだろうな」

くああーつと体を伸ばす。とにかく気分を変えようと思い起こした行動だが、その瞬間強烈な立ちくらみを覚える。

「なっ、お、おっと」

ヴィータは頭を押さえると、おぼつかない足のまま数歩先へ進む。

「うわ、やばいな。どうしたんだろう……」

脳が揺らされるような。そんな目の回る感覚に襲われると、ヴィータはその場に膝を突く。

だがそれも一瞬のことだ。まるで憑き物が落ちたかのように、気持ち悪さはすぐに消えていった。

「いったいなんなんだ。体調って言うよりも、何かに頭の中を無理矢理揺らされたような。……あれ？　こんなのあったっけ?」

膝を突いたヴィータの目の前には、ヴィータの半分ほどの大きさながらも、しっかりとした作りのお墓が立っていた。

どうしてこんなものが、花壇のど真ん中に。しかも病院などに立っているのだろうか。

ヴィータはそこに掘られた名前を見ると、そつとそれを読み上げた。

「……………最愛の妻、ユウヒ。ここに眠る」

ヴィータは導かれるように、そのお墓に手を伸ばす。

そして文字盤に指が触れた瞬間だ。

「ぐっ、っ、また」

脳を揺らぐ感覚に、再び襲われていくのだった。

私が消えるその時まで

いつも私はあの人の側にいた。

あの人が仕事に行くときも。家に帰るときも。ご飯の時だつてずっと、ずっとに。

いつもあの人は私に話しかけてくれた。笑いかけたくれた。だからいつでもあの人の近くににいるのがわかった。

だからこそ、本当に遠く。絶対に手が届かない場所にあの人がいることも理解できた。

私が出来るとは、あの人と話し、見ることだけ。

それ以外では、仕事の助けをすることしかできなかつた。

どれだけ近くにいても、私はあの人に触れることすらできないのだ。

そんな私にあの人はいつも楽しそうに語りかけてくれた。その日にあつた楽しいこと。その日にあつた辛いこと。その日にあつた悲しいこと。

私はずっと彼の側にいたが、それでも語りかけてくれるのが嬉しかった。私にはその事柄と一緒に体験することはできても、あの人の気持ちはわからないのだから。

時折私は思った。どうして私は今の私としての考えを持ってしまったのだろうか。

もし私が、もう片側の私だったらこんな考えを持つことはなかつただろう

合理的で最適な判断をする。彼らはそう作られ、必要以上の考えを持たない。

そうすれば、私はこんな叶わない気持ちを持つこともなかつたのだろう。

あの人はとても寡黙な人だつた。必要以上のことは話さず、よく他人から誤解を受けることがある。

だけど私と話すときは口数が多かつた。

それは私が周りとは違うからか。それとも……？

私は、私の気持ちを口にすることができなかった。

それは拒絶される怖さからではない。むしろこの気持ちを否定してくれるのなら、私は昔の私に戻ることができただけだから。

だけでもし、あの人が私の気持ちを受け止めてしまったら。彼はどれだけの批判と罵声を受けることになるのだろうか。

彼をそんな目にあわせたくなかった。私の想いを受け止めると言うことは。彼と一緒にいると言うことは。

彼を孤独にしてしまうのだから。

どうして私はこんな形で生まれてしまったのだろうか。

どうして私はこんな感情を持ってしまったのだろうか。

私、私は……………。

急遽召集のかかったあの人は、私を手に取り現場まで向かった。探索中のロストログアの回収班が、守護獣に襲われ大怪我を負ったようだ。

あの人は私を振りかざすと次々と治療を始めていった。

まだ多くの局員が戦闘を継続している。

その奥にある宝玉は柔らかな光を放っていた。

同じ無機物でありながら、私にはない温かさを持ったそれを見ると、私はそれを羨望のままざしで覗いていた。

私はその光に手を伸ばす。伸ばす手などあるはずもないのに、それでも必死にその手を伸ばした。

そしてその光もまた、私の想いに応えたのだ。

一際大きな光が奥からあがる。その瞬間、私の体は地面に落とされた。

いったい何があったのだろうか。あの人が私をこんなに乱雑に扱ったのは初めてだった。

だがそれも仕方がなかったのだ。あの光があがった瞬間、私は片手で持ち上げられる大きさではなくなってしまったのだから。

あの人と周りにいた局員が驚いたような目で私を見た。

あの人は目を見開いたまま、その手を伸ばす。私は差し出された手

に、自身の手を重ねた。

手を重ねる。そんな人間同士では当たり前前の行動に、私は驚きを隠せなかった。

だって私に手が伸ばせるはずがないのだ。

私は。私はただの『インテリジェンスデバイス』なのだから。

診断の結果、私の体は人間のものと全く変わらないものに変質していた。

いつもの整備とは違う。外から見ているだけだった、人間の検査が終わると私とあの人は呼び出しを受けた。

だが今回のことであの人が怒られることはなかった。ロストログアの暴走。それ故の事故としてこの件は片づけられた。

歩くという行為を知らなかった私は、なかなかうまく立ち回る事ができなかった。

けどあの人はそんな私を気遣ってくれた。私にはそれが心の底から嬉しかった。

心の底から。そうなのだ。この胸に宿る温かな想いは、プログラムではない。私は、私はあの人と同じ人間になったのだ。

人間になってからは、覚えることがたくさんあった。

人間は食事をしなければいけない。

人間は睡眠をとらなければいけない。

人間は排泄をしなければいけない。

今まで情報として理解していたことを、なかなか行動に起こすことができず、あの人にはたくさん迷惑をかけた。

だけど私が謝る度にあの人は嬉しそうに笑みを浮かべてくれた。そんなあの人の顔を見ると、私も自然と笑いかけていた。

私たちは二人で生活をするために、独身寮から出てアパートを借りた。

部屋は狭かったけど、私は幸せだった。むしろあの人を近くに感じられるこの部屋のほうが嬉しかったくらいだ。

もう私はあの人と一緒に現場に向かうことは出来ない。

いつも一緒にいた私たちは、私が人間となることで離れることが多くなってしまった。

だけど寂しくはなかった。私がデバイスだったとき、あの人はいつもすぐ側にいた。だけど今よりずっと遠くに感じていたから。

でも今は違う。たとえ体が離れていようとも、心はいつもあの人の側にいたから。

そんな生活が一年ほど続いただろうか。あの人は私を食事に連れ出すと、指輪とともにプロポーズをしてくれた。

嬉しかった。あの人と一緒になれることが。

神に感謝した。私に指輪をはめることの出来る指を与えてくれたことに。

結婚式は誰にも祝福されることもなく二人だけで行われた。

あの人に友達が少ないこともあったが、私が元デバイスということが一番の原因だろう。

人間同士でない婚約に世間はあまり寛容ではなかった。

だけど私は幸せだった。そして彼もまた幸せだったと思う。

私はその日のことを決して忘れなかった。

私が消えてしまうその日まで。

私が体調を崩し始めたのは結婚して半年後のことだ。

突然体が重くなるのを感じると、呼吸をするのが苦痛となっていた。

その時はあの人にすぐに病院につれていってもらい、事なきを得た。だが同時に私は、私の体で起きている異変に気づかされたのだ。

『体の一部の臓器が機械に変質している』

そんな病状は聞いたことがない。だが抜き出された部品を見ると、

私はその症状の理由に気づいてしまった。

それは私がデバイスだったとき、駆動系として使われていた部品の一部だった。

まるで、止まっていた時が動き出したかのように、私の体はデバイスへと戻り始めていたのだ。

その事実には私は膝を崩した。

私は。あの人は。そしてお腹の中にいるこの子はいったいどうなってしまうのか。

私はその場で泣き崩れる。そして、あの人が管理局をやめたのはそのすぐ後のことだった。

あの人の実家は、大病院だった。あの人はあまり家族のことは話してくれず、病院の息子だったこともここに来るまで知らなかった。

朦朧とする意識の中、あの人が父親に怒られている姿だけはよく覚えていた。

『今更よくのこのこうちの敷居をまたげたな』

『だからそんな化け物との結婚は反対だったんだ』

そんな罵声を浴びても、あの人は怒ることはなかった。私を救うには、今は大きな施設が必要だったから。

だからいくら私が貶されても、あの人は下唇を噛みしめ耐え抜いたのだ。

多くの人を救いたく、時空管理局の前線医療をしたいとあの人は家を飛び出した。だからこそ、あの人の医療知識は元から高水準だった。

あの人が名医と呼ばれるまで時間はそこまでかからなかったと思う。

あの人の父親もまた、そんな息子の姿が嬉しかったのだろう。私のことは毛嫌いしていたが、息子の姿に誇りに思っていたようだ。

だけど私は何も変わらなかった。変われなかったのだ。

あの人は医術、魔術各方面から様々な治療法を試してくれた。だが私の機械化は収まることはなく。

不意にやってくるその現象に、私はいつも怯えていた。もし次の瞬間、私の脳が機械と化したら。

もし次の瞬間、私の心臓が機械と化したら。

私はもう私でいられなくなるだろう。

ただ唯一安心だったことは、体の機械化にお腹の子は一切干渉されてないことだ。

だから私は神に願った。この子が生まれるまで。どうかその時まで。

そしてその時がやってきた。私はもう自分で歩くことも、自分で考えることもほとんど出来なくなってしまうていた。

あの人は何度も何度も私のことを気にかけてくれた。もし私が頷いてくれるなら、あの人は私のお腹の中の子供を……。

だけど私はそれに頷かなかった。

でも、だからこそ、私はあの人に確かなものを残してあげたかったから。

だからこのままでいいと。

恐怖に怯え、絶望に押し潰されそうになりそうながら、私はようやくその日を迎えることができた。

その頃にはもう私は何も考えられずにいた。ただそれでも脳裏にはあの人の顔がしっかりと焼き付いていた。

出産が始まると、いくつもの機械が床に散らばる音がする。

もう私の中にはこんなにも元の私に戻りつつあったのだ。

そして手術室から産声があがった。

元気な男の子だ。よく頑張ったな。

我が子を抱き上げると、あの人は赤ちゃんの顔を私に見せてくれた。

それだけで私は満足だった。だからもう大丈夫だった。私はあの人に大切なものをたくさんもらったから。だからもう。

あの人は涙を流しながら、何かを叫んでいた。

そんなに悲しい顔をしないでください。私は幸せでした。

だから。だから、笑って。

私、私は……………。



「はっ!？」

弾かれるようにヴィータはその場から立ち上がる。

今みた映像はいつたいなんなのか。突然のことに、頭の理解が追いつかなかった。

「な、何だいまの。何なんだ、あの悲しい記憶は……………」

少なくともこれは自分のものではない。ならこの記憶は。

ヴィータは足下にある小さなお墓を見る。だがどうしたことだろうか。目の前にはお墓が、霧がかかったように薄らいでいく。

「あれ、どうしたんだらう。目が疲れてるのか」

何度か目をこすると、もう一度足元を見る。目を大きく見開いたからか、今度はハッキリとお墓が見えた。

「これは、あんたの記憶なのか。…………ユウヒさん?」

だがそう問いかけたところで、墓石が何かを語ることはない。ヴィータはあたりを見渡すと、近くにいた老婆の元へと駆け寄った。

「す、すみません。少し聞きたいことがあるんですけど」

「どうしたんだいお嬢ちゃん?」

「あそこにある、小さなお墓って何なんですか?」

「お墓?…んん?」

老婆は目を細めると、ヴィータの指さした方を見る。だが老婆はゆっくりと首を横に振った。

「ごめんね。もう年だからか、私にやあ花しか見えないよ」

「えっ、あつ、す、すみませんでした」

ヴィータは頭を下げると、その場から離れていく。さすがに老婆をむやみに歩かせるわけには行かないし、老眼を指摘するのもどうかと思っただ。

ヴィータは反対方向まで歩いていくと、花に水をあげているナースに話しかけた。

「すみません。ちょっとお聞きしたいんですけど」

「どうしたのかな。お母さんとはぐれちゃったの?」

「そ、そうじゃなくて。えっと、あそこにあるお墓っていつ頃からあるんですか。あと、どうしてこんなところにあるんでしょうか」

「お墓。お墓って?」

「えっ、あの花の中にある小さなお墓です。ほら、ユウヒって書かれてるすぐ足下の」

ヴィータがそう言って指を指すと、ナースはその方向に目を向ける。指さしたわずか10cm先にそれはあった。

だがナースは首を傾げると、申し訳なきように口を開く。

「ごめんね。もう私は大人だから、そういうのは見えなくなっただけなの」

「大人になると見えなくなるんですか!」

いや、それだとしたら自分にも見えないのではないだろうか。ヴィータはそう思うと、ナースはくすりと笑みを浮かべた。

「私も昔は憧れてたなー。妖精とかそういうのが見えるのに」

「……………えっ?」

「君のそういう純粋な気持ちが無くなるなら私を私も祈ってるね。それじゃあお姉ちゃんは仕事に戻るね」

「あつ、はい……………」

どうやら不思議ちゃんとは勘違いされてしまったようだ。いつそ免許証をだして、『貴方より年上ですよ』と言いたい気分だったが、そんなことをしている場合ではなかった。

「ん、あれ……………」

ヴィータは再び足下のお墓に目を向ける。だがどうしたことだろうか。そのお墓はうつすらとし、消えかかっているように見えた。

「ぐっ、この」

ヴィータは魔力を目元に集中する。すると、そのお墓は再び姿を現した。

(これは、めちやくちや高度な幻術がかけられてるんだ。だからあたし以外に誰も見えてないんだ)

知つての通りヴィータは魔力値が高い方だ。だがその彼女においても、これだけ魔力を集中し、そこにお墓があるということを實際見て確信していなければ再び見ることが叶わなかっただろう。

細かい魔力操作に慣れていないヴィータは、一度力を抜く。そしてそのまま木陰にあるベンチへと移動した。

ちょうど花畑から死角になっているこの場所は、その場所を忘れないようにしつつ、目を休めるにはぴったりの休憩所だった。

「……………どうしてあたしにはあれを見ることができたんだ。あの頭痛がなかったら、きつと気づくことすらできなかったはずだ」

だが結果として、自分はお墓に気づいた。そしてある女性の悲しい記憶を見せられた。

彼女の悲痛を想うと胸が痛かった。もともとデバイスだった彼女は、人間に恋をし、そして人間と結ばれた。

だがその代償に待っていたものは、変えようのない未来だった。生まれ方は違えど、ロストログアから生み出された存在。彼女はどこか自分に似ているような気がした。

ヴィータはベンチの背もたれ越しに、後ろの花壇をみる。相変わらず存在自体が希薄だが、それは確かにそこにあった。

「いったい、彼女はあたしに何を……………って、やばっ!」

ヴィータはすぐに頭をひっこめると、全力でベンチに身を隠す。こんな頭が混乱した状態で、会話などできるはずがない。

(ど、どうしてこんなところにジユウゾウさんがいるんだよ)

ジユウゾウは相変わらず無表情な顔で、中庭を歩いている。その足はまっすぐにこちらに向かってくるのだった。

間違えた道の先に

ピタリと足音が止まる。正確な位置はわからないが、ほぼ間違いなくベンチの後方にいるはずだ。

今度は何を言われるのだろうか。もしまた同じことを言われたら、どうすればいいのか。答えはまだ決まっていなかった。

ドクン、ドクン。

鼓動が早くなるのがわかる。しかも今はこんな格好だ。どんな罵倒をされても、言い訳ができなかった。

だがジユウゾウから放たれたのは、ヴィータの思いも寄らない言葉だった。

「……悪かったと思っっている」

(——えっ!?)

「息子の選んだ女性だ。きつと間違いはないと、それはわかっているんだ。だが、しかし、君と重ねてしまっているんだろうな。……ユウヒ」

その名前が放たれ、先ほどの言葉がヴィータにかけられたものではないと理解できた。

距離として、花壇とベンチは3メートルほど離れてる。確かに自分に声をかけるにしては、少し距離がおかしかった。

(いや、そうじゃねえ。ジユウゾウさんはいま確かに『ユウヒ』って名前を口にした。誰にも見えなかった墓の主の名前を口にしたんだ)

だが院長であるジユウゾウなら十分に考えられる話だ。ほかの人間には見えず、自分にだけ可視できるようにお墓を作ることは可能であろう。

しかしそんな手の込んだことをした理由はわからなかった。

(いや、わからないわけじゃない。もしあの記憶が本当にあったものだとしたら。……あの記憶の男の人が、もし、もしも)

確信はある。それならば、どうしてジユウゾウが自分を認めたくないのかも、当たりがつくからだ。

(でも、だとしたらあたしは……)

もしそうだとしたら、答えは見つかった。ヴィータはギュツと手を握り込むと、ベンチから起きあがろうとする。

だがそれよりも早く。

「……ここにいやがったか、この人殺しがっ!!」

ヴィータとジユウゾウの視線が同時に同じ方向に向く。

そこにいたのは、先ほどロビーで暴れていた男だ。

男は充血した目を見開くと、ジユウゾウを睨みつける。そしてその手に持っているナイフを目の前にチラツかせていった。

「……………君か」

「どうしてお袋を助けなかった! どうして見捨てたんだよ!!」

「……………」

もういつ飛びかかってきてもおかしくはない。男はナイフを構えると、ジユウゾウを睨みつける。

だがそんな状態になっても、彼が慌てる様子は見られない。今まで見せていたような無表情で、ただじつと男を見つめていた。

しかしそれもそうなのかもしれないと、ヴィータは思っていた。もしユウヒの記憶の中の間人がジユウゾウなら、彼は戦闘を関与していないながらも、ずっと前線で戦ってきた局員ということになる。

そんな彼が生身のナイフ一つに怯える理由などなかった。

ジユウゾウの無言の圧力に、ナイフを持つ男の手が震える。だが男はそれをもう片方の手で押さえ込むと、無理矢理震えを押さええた。

「何か言えよ! 何か言い訳してみろよ! どうしてお袋を助けてくれなかった。どうして、どうしてだよ!!」

「全ては私の力不足だ。……悪いのは全て私だ」

「……………ぐっ、がああああああっ!!」

男はナイフを構えると、そのまま走り出す。だがナイフの持ち方も、走り方も素人そのものそれは、避けるのはたやすいだろう。それはヴィータの目から見ても明らかだった。だから、だからこそ。

ドッ! 人と人が力強く衝突する鈍い音が耳に届く。次に聞こえたのは、地面に落ちる金属音だ。

その銀色の刃は赤く塗れていた。だがその赤色は、ジユウゾウのわ

き腹から止めどなく広がっていった。

「——ジュウゾウさんっ!?!」

ヴィータはその姿を見ると、隠れていたベンチから飛び出していく。そして自分の見通しの甘さに、唇を噛みしめた。

だが見通しが甘かったのは、ヴィータではない。それは刺した本人が一番痛感していた。

「あ、あああ、ああああああああっ!」

男は頭をかきむしるように抱えると、声をあげ背を向ける。

「逃がすかよっ!!」

これは立派な現行犯。犯罪だ。ヴィータは地面を蹴ると、その場から駆け出そうとする。だがその動きは、何かに押さえつけられ止められてしまう。

「——なっ、誰が!?!」

足がいつさい動かない。どうしてだと足下を見るが何も変化は見られなかった。

だが足がまるで地面に縫いつけられたように動かなかつた。そこまできて、これが相当高度なロックバインドだと気づかされた。

「あの男が。——いや、これは」

ヴィータは信じられないと膝を突いているジュウゾウを見る。彼はヴィータの視線に気づくと、立てていた左人差し指をゆつくりと曲げる。

その瞬間、足が解放される。ヴィータは行くタイミングを失った力で、そのまま前のめりに転んでいくのだった。



言葉はなかったが、きつと追うなということなのだろう。ヴィータとジュウゾウはすぐ近くのベンチに肩を並べて座る。

ヴィータは彼の白衣を見ると、おずおずと声を上げた。

「えっと、傷はいいんですか」

「ああ、もう治療魔術で止血もすませてある」

「……どうしてあの男に刺されたんですか。ジュウゾウさんなら、どうとでもできましたよね」

「……それが彼にとって一番だと思ったからだ」

「彼にとつて一番つて、あの男は実際にジュウゾウさんを刺したんですよ。これは立派な犯罪ですー」

「私は被害届けを出すつもりはない。それに明日にでも、彼の家に顔を出すつもりだ」

「顔を出すつもりつて、何なんですか。どうしてジュウゾウさんは彼に刺されようと思つたんですか。それはあの男が言つてたことが、その、関係してるんですか」

ロビーと中庭で彼が叫んでいたこと。どうして母親を見殺しにしたのか。その真意がわからないことには、話の進めようがなかった。

ジュウゾウは無表情のままヴィータを見る。だがヴィータは視線を逸らすことはなかった。じつと互いの視線がぶつかりあうと、ジュウゾウは少しだけ肩を落とした。

「……二日前だ。この近くで火災が起きた。その時だ。私は運ばれてきた彼の母親を見捨てて、ほかの患者を優先した」

「どうしてですか」

「すでに彼の母親は手の施しようがなかったからだ。だから私は懇願する彼を突き飛ばし、ほかの患者を治療した」

「……えっ?」

その話が本当だとすれば、ジュウゾウには何一つ過失はないはずだ。向けられた罵声は正しいものではなかった。

「だ、だったら何でそれを言わないんですか! きつと真実を話したらあの男だつてわかってくれるはずです」

「……本当は彼自身わかっているさ。だが事実を認めたくないんだ。だから誰かのせいにすることで、心の均衡を保とうとしている」

「心の均衡を?」

「火災があつたとき、同時に天井も崩れ落ちた。そのとき、とつさに彼の母親は彼を庇つてしまったんだ。そして彼の命は助かり、母親は亡きものになつてしまった」

「だ、だとしてもそれをジユウゾウさんが背負う必要なんてないじゃないですか。どうしてそこまで彼に肩入れをするんですか……」

ヴィータがそういうと、ジユウゾウはベンチの後ろに視線を向ける。だがすぐに前に向き直ると話を続けた。

「彼は母子家庭でな。それに結婚もしていなく、もう誰も周りに人がいないんだ。……もし一人でも大切な人がいるなら、バカなマネは起こさないかもしれない。だが今の彼はあまりにも不安定だ。——
——彼にはああ言われたが、私も大切な人間を失う気持ちはわかってい
るつもりだ。だから彼の力になりたいと思った」

ジユウゾウの気持ちは分かる。だがその想いはあまりにも、あまりにも不器用すぎるものだった。

誰にいい顔をするわけでなく。

誰に言い訳するわけでもなく。

身を削り、誰かのために力になる。

確かに彼はカイズの父親だ。だが口べたで無表情なだけで、ここま
で印象が違うものかとヴィータは驚いていた。

いや、だけどその想いはもしかしたら。

多分、いや間違いなくとヴィータの考えがまとまった。

「……ジユウゾウさんがそこまでするのは。……ユウヒさんのことがあつたからですか？」

「……調べたのか。なら話は早い。私がどうして君と息子との結婚を反対するか理由はわかるはずだ」

「……それでもあたしはカイズと別れる気はありません」

「その先にどうしようもない悲しみが待ち受けてるかもしれないのにか？」

「それでもです」

「……そうか。それならそれでも構わない。だがそうだとすると、一
つだけ約束してほしい。それが息子との結婚の条件だ」

きつとジユウゾウは初めから結婚を許すつもりがあつたのだろう。
だからこそ、これから話す条件を飲ませるために初めはヴィータを拒
絶したのだ。

ジユウゾウは額にシワを寄せると、今までで一番感情を露わにして続けた。

「もしこれから先、様々な偶然や必然があったとしても身の丈に合わない幸せに手を伸ばさないでほしい」

「ユウヒさんが、ロストログアに願ったようにですか」

「ああ、そうだ。今ある幸せがいかにかけがえのないものか。それを忘れないでいてくれれば、私は二人を祝福しよう」

もうそれ以上伝えることはない。ジユウゾウはベンチから立ち上がると、ヴィータに背を向ける。

だがヴィータは違った。たとえそれで自分たち二人が認められようとも、ジユウゾウとユウヒのために領けるわけがないのだ。

ヴィータもまたベンチから立ち上がると、その背中に声をかけた。

「それは、約束できません。あたしは今より大きな幸せに出会ってしまったら。きつと手を伸ばしてしまうと思います」

「……君は、私の話を聞いていたのか。もし私の条件が飲めないのなら、私は二人を祝福するつもりはないぞ」

「それでも構いません。だってジユウゾウさんだって、そうだったじゃないですか。誰から祝福されることなく、それでも幸せだって信じられたからユウヒさんと結婚をしたんですよね」

「……こんな短時間で、よくそこまで調べあげられたな」

嫌悪感のこもった言葉をぶつけられると、ヴィータは首を横に振る。そしてベンチから見える、ユウヒのお墓に目を向けた。

「本当を言うとジユウゾウさんの過去を調べたりなんてしてないんです。……だけどユウヒさんが伝えてくれたんです」

「ユウヒが伝えた？——見えるのか、あれが！」

「初めは全然見えませんでした。今だってちよつと気を抜いたら見えなくなるくらいです。……あたしが人間じゃないから、その想いが伝わったのかはわかりません。だけどユウヒさんが語りかけてくれたときは、ハッキリとこの目に見えました。……そして、二人の間に何があったかもあたしに教えてくれました」

「だとしたらどうして私の要望を受け入れられない。彼女の悲しみを

わかっていてるなら。私たちの間違った結末を知っているというのなら。……幸せなど望んでいいはずがないんだ」

「それは違います。確かにジユウゾウさんとユウヒさんの道は間違っていたかもしれない。だけど、間違った道だとしても。………ジユウゾウさんは後悔しましたか」

「後悔、だと……」

「ユウヒさんが人間になったこと。一緒に暮らしたこと。互いの肌に触れあえたこと。周りの反対を押し切って結婚したこと。そして二人の子供を授かったこと。それは後悔するべきことでしたか」

「後悔、私、いや、だが……」

「思い出してください。ユウヒさんはカイズを産んだときに、どんな顔をしてましたか。どんな言葉を残しましたか。それでもジユウゾウさんは二人の生活を後悔しますか」

「私、私は……」

ジユウゾウは狼狽したように辺りを見渡す。だがユウヒの墓を見た瞬間、思い出したように口にした。

その顔に、先ほどの怒りや嫌悪感はみられない。ただ、何かを悟ったように言葉を紡いだ。

「後悔した。………などと言えるはずもないな。たとえ短い時間であつても、周りに祝福されなかりうとも。私たちは確かに幸せだった。だがユウヒは」

「ユウヒさんも幸せだったと思いますよ。少なくとも、思い出のなかの彼女はいつも幸せに満ちてました」

「そうか。……そうだったな」

そう言うと、ジユウゾウはゆっくりとユウヒの墓に近づいていく。そしてあの日の彼女に触れるように、優しく、優しく石を撫でていくのだった。

きっとジユウゾウもあの男と同じだったのだろう。

どうにもできなかった。どうしようもなかった。だけど自分で自分を許すことができず、そしてジユウゾウの場合許す人間が現れることもなく。ずっと一人で悩み続けていたのだろう。

ジユウゾウと接点を持つ人間でない存在。本当に僅かで微かな想いを受け止めることができた。この巡り合わせに立ち会えたことにヴィータは心の底から感謝した。

ジユウゾウは墓から離れると、ゆっくりとその頭を下げていく。

「……数々の無礼すまなかつた。だが君のおかげですつと忘れていたことを思い出させてもらった」

「い、いえ、あたしのほうこそ差し出がまし——」

「息子のこと、よろしく頼む」

「——は、はい。こ、こちらこそよろしくお願ひします!!」

ヴィータもまた頭を下げると、二人の顔が同時に表を向く。そして二人は、初めて笑みを向けあつていった。

世界で一番大切な人

院長室につくと、カイズはドアを勢いよく開ける。

「ヴィータさん、ただいま戻りました！ あれ、親父は？」

「ジユウゾウさんはちよつと前に検診にいったぞ。健康診断はどうだったんだ？」

「健康そのものですよ。まあ二回も精密検査したんですから、これでも安心ですね。——それでヴィータさんのほうはどうでした？」

「大丈夫だ。ジユウゾウさんもあたしたちの結婚許してくれるって」

「ほらー、言ったとおりでしたでしょう。あの親父だったら、すぐに了承してくれるって」

「あ、あははは〜」

カイズはそう無邪気な笑みを浮かべるが、そんな彼を見てヴィータは少し苦笑いをする。

そんな二人のタイミングに合わせたように、再び院長室の扉が開いた。

「客人を一人待たせてすまなかった。……戻っていたのか」

「ああ、健康そのもの問題なしだ」

「……そうか」

そう言葉にするジユウゾウの顔はどこか安心の色が見られた気がした。だがそれに気づいたのはヴィータだけのようだ。カイズはいつもの調子で、特にジユウゾウの変化を感じていないようだ。

ヴィータはそんな二人を見ると、その場から立ち上がる。

「それじゃああたしは帰るとするかな」

「……………あまりおもてなしもできなくて申し訳ない。また私が休みの時にでも改めて」

「じゃあ帰りましょうかヴィータさん」

ヴィータの後を追って、カイズも院長室から出ようとする。だがそんな彼を、ヴィータは押し戻した。

「帰るのはあたしだけだ。カイズはもう少しお父さんと話していけよ」

「えっ、で、ですけど」

「いいから、いいから。ジユウゾウさんも話したいことがあるみたいだぞ。じゃあまた家でな」

ヴィータにそう無理矢理押し切られてしまうと、パタンと部屋の扉が閉まる。

こんな密室で、寡黙な父親となにを話せばいいのだろうか。カイズはジユウゾウのほうに向き直る。

「……………まあ座れ」

「お、おお。それじゃあ」

カイズはジユウゾウの対面の席に座る。すると、ジユウゾウはほんの少しだけ口元をゆるめた。

「いい人を見つけたな。……………必ず幸せにしてやるんだぞ」

「……………!! お、おう、当たり前だ。ヴィータさんは俺の世界で一番大切な人だからな!!」

あの親父が人を誉めるなんて。

あまりの出来事に、勢い余って恋人自慢をしてしまった。

世界で一番大切な人。自ら放ったその言葉を聞くと、カイズの脳裏にあの言葉が蘇る。

『その、知りたいとか会ってみたいとか思わないのか』

面影すら覚えていないからか。最悪な妻だったと言われ続けているからか。今までカイズは自身の母親について本当に知りたいとは思っていないかった。

だがいざ自分の結婚が迫ってきているからか、ヴィータの言葉が頭から離れなくなっていた。

しかし今更になってどう切り出せばいいのだろうか。カイズは検査中ずっとそのことについて考えていたが、うまい言葉が見つからなかった。

だがジユウゾウは違った。ヴィータと会話をし、そしてここに来るまでにしっかりと言葉を用意していたのだ。

「……………せっかくの機会だ。話しておこうと思う。お前の母親、ユウヒのことを」

「——えっ!? ど、どうしたんだ急に」

「間違いではあったが、後悔などなかったと教えられたからな。……とりあえずまずは中庭に向かうぞ」

ジユウゾウはソファアールから立ち上がる。そんな彼の背を見て、カイズは心にこびりついていた想いを自然と声にした。

「なあ親父。俺の母親って、本当に最悪な妻だったのか」

あの口数と感情の起伏が少ない父親が、誰かの悪態をつく。自身の母親がそんな存在なのか、カイズは幼いときよりずっと思い悩んでいた。

だが振り返る父親の姿を見て、そんな疑問は一瞬にして消えていく。

こんな感情を豊かにしている父親は始めてみた。笑みを浮かべる父親の姿に、カイズは唾然としてしまう。

そんな彼に、ジユウゾウは心の底から答えた。

「そんなことあるはずがない。……ユウヒは、私にとって世界で一番大切な人だ」

カイズの言葉に習って、ジユウゾウもそう例えたのだろう。ジユウゾウは少し照れ気味にそう言うと、さっさと院長室から出てしまう。

「——そうか。そうだよなっ!!」

それだけで、十分過ぎるほどわかった。

カイズは扉を開けると、父親の後を追う。

これからなにを話してくれるかはわからない。だがわからないとしても、きつと幸せな話であると。

ジユウゾウの笑みを見て、カイズはそう確信するのだった。



「お待たせしました。ケーキセットになります」

ヴィータが話を始めようとした瞬間、それを遮るように注文品が運ばれる。ケーキはレジと冷蔵庫が一体化しているものに入っており、飲み物自体もそんなに時間がかからないのだろう。

「それで、カイズ君のお父さんがどうしたんですかっ!」

サクヤはくい気味に身を寄せるが、ヴィータは「うーん」と頬を掻くとケーキを一口運んでいった。

「いや、あんまり気軽に喋ることじゃなかった」

「そんな。それじゃあ私の恥かき損じやないですか！」

「まあ落ち着けよサクヤさん。そしたら、ここ数年であたしが人生で一番恥ずかしかったことを話すからさ」

「ここ数年で一番ですか！　ですが、私はそう簡単な話じゃ納得しませんよ！」

サクヤは何かを感じ取ってくれたのか。それとも単純にそちらの話の方が気になるのか。特に追求をせずに、ヴィータの話に乗っくれた。

さて話題を逸らすためとはいえ、ここまで言ってしまったのだ。覚悟を決めよう。

「これはカイズが教導実習に行つて一週間経った時の話なんだけだな。寂しいなーって思つてるときに、電話がかかってきたんだ」

「はいっ、はいっ！」

ヴィータは周りに聞こえないように、あの時の恥ずかしい事件をゆっくり、ゆっくり語っていくのだった。

夢の形 あの日貴方に出会えたから (あとがきに
今後の予定あり)

そういえば、いつからだろうか。

誰かを救いたいと思うようになったのは。

放課後の教室、教科書とノートを開くと明日の予習をしていた。
夕暮れまで教室に残っている生徒はいない。この時間に関して言
えば、ここは図書館より静かな場所だ。

カイズは教科書を閉じると、背筋をぐつと延ばす。

そして先ほどの疑問を口にした。

「……ほんといつからだったんだろうな」

誰かのためになりたい。誰かを救いたい。

物心ついたときから、その想いばかりが心に渦巻いていた。

初めこそそれは父親の影響かと思っていた。

大病院の院長を務める父は、日々仕事に追われている。

そんな父親を自分は少なからず尊敬している。

だが父親は極端すぎるほど口数が少なかった。そんな父親の仕事
を理解するようになったのも、ここ最近のことだ。

漠然とながら、しつかりと勉学はこなしきた。

目標がなくとも学んだ分だけ勉強は結果が出る。しつかりと努力
すれば、それだけで形には見えた。

だが高等部も二年目の後半となり、本当に自分は医者になりたいの
かと時々思うようになった。

このまま勉強を続ければ、父親の病院を継ぐのは当然の流れだろ
う。

そうすれば、心の中にある『誰かを救う』ということを達成するこ
ともできるはずだ。

「……………だけど、本当にこれでいいのか」

もうすぐ進路も決めなければいけない時期だ。

ただ点数を出しているだけでは許されない決断の時は迫っている。

カイズは勉強道具をしまうと、席から立ち上がる。そして誰もいない教室を後にした。



今日はまっすぐ帰宅する気はなれなかった。

いや、どちらにしても家には誰もいないんだ。どの時間に帰宅しても問題はなかった。

「親父は今日も泊まりか。……ほんと頭が上がらないな」

父親が家にいないこと。そして母親がいないことに、寂しさを覚える時期もあった。

だがその寂しさよりも、『誰かを救う』という想いの方が自分には強いようだった。

努力の時間は自分から考える時間を奪い、気がついたらこの歳まで成長していた。

狙っている医大は、すでにA評価をもらっている。

このまま努力をし続ければ、問題はないだろう。

だからこそだろう。人生において余裕いうものが初めて生まれたから、今自分はこんな今更なことを考えているのだ。

カイズは繁華街のほうに足を運ぶ。すると見知った顔が目についた。

「やあ、カイズ君じゃないか」

「……おう、サクヤか」

カイズは恋人であるサクヤと顔を合わせると、居心地の悪い顔をすする。サクヤは今まで付き合った年上の女性の中で一番相性がよかった。

考え方も知的で、性格も大人っぽい。

年上好きの自分としては、これ以上ない女性だと理解している。

だがそう深く理解するとともに、何か納得のいかない感情が心の中心で芽を出していた。

どうして自分は年上しか好きにならないのだろうか。

自分はいつからこうなったのだろうか。

誰かを救うという想いと同時に、ずっと心の中に住み着く感情だ。

「どうしたんだこんな時間に」

「サクヤこそどうしたんだよこんな時間に」

「私はクラスの友達とお疲れさま会だ。みんな無事に第一志望に受かったからな」

「……あの医大学だよな。よく受かったな」

「なに、そのために青春のほとんどは勉強に費やしてきたからな。

……動機こそ不純なものかもしれないが、今ではしつかりとした私の夢だよ」

「……そうか」

それはどこかキツイ物言いだった。

だが今の自分とサクヤの関係を考えれば、それも仕方のないことかもしれない。

サクヤは自分が医者を目指しているからか、近い立場にしようとするの道を目指してくれた。

元々成績は優秀ではあったが、一般の高等部から目指すのはかなり大変だったろう。

だがそんな大変さとは裏腹に、彼女が大学に合格する頃にはどこか疎遠になってしまっていた。

「………サクヤ」

そういえば自分は彼女の大学祝いを何もしていない。

きつと彼女のことだ。ここで誘いをかければ、二つ返事で付き合ってくれるだろう。

それはわかっていた。だけど……

「……あんまり友達を待たせてもあれだな。俺はもう行くな」

「………ああ、わかった」

少し寂しそうに背を向ける彼女を見て、これが本当の別れであることを心のどこかで実感した。

多分このまま二人の関係は自然消滅だろう。

カイズはそんな彼女の背中を追うことなく人混みに紛れていった。

何もすることがない。ゲームセンターなどにもほとんど足を運んだことのない自分は、結局本屋に寄ることしかできなかつた。

「おつ、そういえば今日発売か」

平台に積み重ねられているのは、『月刊 時空管理局』という雑誌だ。少しでも未来の局員を増やすため。そして管理局への印象をよくするために発行されている本だ。

昔からなぜかこの本には心引かれるものがあつた。

それは正義の心や公務員への憧れからきているものではない。

「——やっぱり俺って制服フェチなのかな」

パラパラとページをめくると、局員の特集ページを見る。前号の紹介通り、今月は『高町なのは』教導官の特集だつた。

やはり美人というものはそれだけで華があるものだ。実際年上が好きなのも多聞に漏れず彼女のファンである。

そして何よりこの制服に変な思い入れがあるのだ。これもまた理由はわからずじまいだ。

同級生にこの話をしたことがあるが、特殊な性癖とバカにされて以来相談することもなくなった。

「なんか変な感じだよな。……はあ、自分のことながらわからないことだらけだ」

パラパラとページをめくると、次々となのはのスナップショットが映し出される。

「今日も今日とて、高町なのはさんは綺麗だな。……帰るか」

そう一気に心が冷めるとカイズはページを閉じようとする。だがそのときだ。何か。赤い何かが彼の目に映り込んだ。

——ドクンツ。

まるで初恋をしたかのように、胸が高鳴る。

だからこそおかしかった。自分は初めて付き合った女性に対して、こんなに緊張はしなかつたはずだ。

いったい彼女の何が自分の心を引きつけるのか。

「だって高町なのはさんの特集なんて、今まで何度も見てきたぞ」
今度は念入りに、ページの隅から隅までのぞき込む。

だが先ほどのような胸の高鳴りはない。

気のせいなのか。そう思い最後のページを見たときだ。

彼女の写真の隅っこに写っているその少女を発見した。

その初等部くらいの赤い髪の少女は、写真に写るつもりはなかったのだろう。

全くカメラを意識することなく、真剣な眼差しで教導にあたっているようだ。

——ドクンツ、ドクンツ。

「えっ、うわあ」

その彼女の横顔を見ると、心臓の高鳴りが収まらなかつた。彼女の何が自分をここまで引きつけるのか。自分は年上好きのはずなのに。

「俺は誰かを救える人になりたかつた。……それは彼女のように。——

——ツ!?!」

まるで箱の中に閉じこめていた何かが飛び出すように、記憶にない記録が一気に飛び出す。

それはまだ自分が本当に幼いときのことだ。

あの時自分はトンネルで生き埋めになつた。

そして、そのとき、そのとき彼女が。

記録が確かな記憶として自分の中にかみ砕かれていく。

カイズはその雑誌をギュツと握ると、迷うことなくレジへ持つていった。

まるで初めてエロ本を買う中等部の学生のように高揚した。彼は店から出ると、すぐに本を取り出す。

そして彼女の名前を口にした。

「……ヴィータさん。そう、そうだ。ヴィータさん、ヴィータさんだ!!」

ずっと欠けていたパズルのピースがはまるように、記憶がドンドンと蘇っていく。

人を救いたいと思つた理由も。

年上好きになつた理由も。

管理局の制服が好きなの理由も。

全部、全部が繋がっていった。

どうしてこんな大切なことを忘れていたのだろうか。

カイズは時計を見ると、今日の日付と時間を確認する。

そうすると、今までであった余裕が一切なくなったことを確信した。

「勉強の方は問題ない。とにかくこれから体を鍛えて、魔力量を上げないとな。——1秒だって無駄にできないな」

カイズは今後のスケジュールを頭の中で構築していく。だがその前に、自分にはしなければいけないことがあった。

「サクヤの奴に言わないとな。……俺は自分が本当に好きな人を思いだしたって」

本当に自分が好きな人。そう言葉にすると、心の中にこそばゆいものが生まれる。

こんな感覚になったのはいつたいつぶりであろうか。

いや、そんなのは決まっている。初めて彼女に会ったとき以来だ。

カイズはサクヤにメールを送ると、待ち合わせ場所を決める。そして沈んでいた気持ちと視線を上に向けると、改めて目標を口にした。

「待っていてくださいね、ヴィータさん!!」

カイズはギュッと手を握りしめると、それを天へと掲げていくのだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない番外編 貴方がいない 一人の部屋で

前篇

——ピピピピピピピッ！

部屋に目覚まし代わりにアラーム音が響きわたる。

「ん。……くああく、もう朝か」

ヴィータはもそもそとベッドのなかで体を動かす。

手探りで目覚ましを手にとると、そのスイッチをオフにした。

「うくん。今日の朝ご飯なんだろう」

確か昨日は自分が朝ご飯を作ったはずだ。なら今日はカイズの順番のはずだ。ヴィータは重い瞼を擦りながら、鼻をひくつかせる。

カイズの朝ご飯レパートリーはまだあまり多くない。それにここはアパートの一室。八神家と違い、少し鼻を動かせば、料理に大体の検討はつく。

だが今日はおかしかった。どれだけ匂いを嗅ごうとも、なにもしてこないのだ。

「あれ、カイズの奴寝てるのか？ って、そんなわけないか。ベッドにいなかったんだし」

ならこれはどういうことであろうか。ヴィータは回らない頭のまま、カレンダーを見た。

「あー、そうか。カイズは教導実習に行ってるんだった。……ほんと、全然慣れないな」

カイズが教導実習にでて、これで五日目だ。

そしてこの行動をするのも、五回目だということを思い出すと深々とため息をついた。

ヴィータは冷蔵庫から牛乳を取り出すと、それをコップに注ぐ。そしてキッチンに置いてあるパンを一枚とると、それを机のトースターの中に入れた。

「一人だとなんだか料理する気にならねえんだよな。別に食べれば

それで言いわけだし」

そういえば昔はやてが言っていた気がした。みんなの食事を用意するのはもちろん大変なことだ。だけど心を込め手の込んだ分みんなが喜んでくれる。

だから自分は料理をすることが大好きで、みんなに食べてもらえるのがもっと大好きだと。

「そっかー。やっぱり誰かがいなくちゃ、腕を振るう意味ないもんなー」

ガシャン。トースターからパンが飛び出すと、それを皿に乗つける。ヴィータは無言のままそれをカジリつくと、その味気なさに複雑な気持ちになった。

「……………寂しいな」

ヴィータはさっさと食事を終わると、管理局の制服に着替えてしまうのだった。



カイズにプロポーズされて、時間は二週間ほど流れている。ヴィータに気持ちを伝えたことにより、カイズは今までも増し、早く一人前になろうと頑張っていた。

そしてヴィータもまた、日に日にたくましくなる彼を見てその想いをさらにつのらせていた。

そして卒業試験の前の、最後の課題がやってきた。

それが教導実習だ。

カイズは管理局員候補生が暮らしている寮に二週間滞在し、そこで教官として局員候補生に指導をする。

カイズはまだ若いから生徒との距離感が少し大変かもしれない。だが彼が誰よりも頑張ってきたことは、ヴィータが一番理解している。

それに教導実習まで来てしまえば、試験的なものを心配する必要はない。その前までの試験が厳しい分、ここから先はしっかりとこなせば落とされることはないからだ。

だからこそヴィータはカイズのことを心配していなかった。だがそこで予想外のこと起きたのだ。

「……………寂しいな」

それは自分自身のことだ。まさか一人でいることがこんなにも寂しいとは思っていなかった。

思えば八神はやてが主になってから、いつも近くには誰かがいた。家にははやてやヴォルケンリッターの誰かがどんな日でもいたし、機動六課解体前までの仕事ではいつも近くになのはがいた。

だがあくまで二人とも管理局に属する一職員にすぎない。いつも仲良しこよしで現場が同じなるわけもなく。

特に『ゆりかご事件』の後に起きた『ラピス事件』後には二人の職場はあまり重ならなくなってしまった。

「まあ、上のやつらの気持ちもわかるけどな」

ヴィータは事務作業をしていた手を止めると、紙パックに口を付ける。糖分で頭が回り出すと、「はあ」とため息をついた。

「あたしだってあの実験には関わってきたわけだし、公表はされなくても、同じ枠には入れたくねえよな」

まあそうでなくても、なのはいろいろ飛び越えてすでに子持ちだ。子供のことを考えれば、可能な限り近場の指導を望んでいるのかもしれない。

どちらにしても考えて答えのことではない。ヴィータは紙コップをコースターの上に戻すと、再び作業を始めるのだった。



「ただいまー」

そう言っても、家から「お帰り」の声があがることはない。一人暮らしの人はよくこの空間に耐えることができると思う。

「はあ」とため息をつくときヴィータは深く肩を落とした。

正直、はやてからは二週間家に帰ってくるかと誘われていた。だがヴィータはそれを断ってしまった。

それはもちろんはやてを避けているからではない。カイズがいな

いときだけ、はやてやほかのみんなに頼るのはどうしても気が引けてしまったのだ。

そうでなくても、カイズとは結婚を前提の付き合いとなった。これからカイズがいないたびに、はやての家に行くわけになどもちろんいかない。

それにカイズがいないからこそ、ヴィータが家を守らなければいけないとも思っていたのだ。

ヴィータは管理局の制服を脱ぐと、ハンガーにかけることなく床に投げ捨てた。さらにタイトスカートも脱ぐと、ワイシャツ一枚でベッドに寝転がる。

「はは。こんなだらしないところカイズには見せられないな」

そう言いながら、ヴィータはちらりとドアの方を見る。だがそこにはカイズがいるわけもなかった。

もし彼に会えるなら、少しぐらいのハプニングも我慢できた。だが彼は教導実習中だ。そんなことは起こるわけもないのだ。

ヴィータは最近ずっと一緒に寝ているのろいうさをギユツと抱きしめる。そして誰にも聞こえないように、小さく弱音を吐いた。

「……………カイズに会いたいな」

そこまできてようやくヴィータは気づいた。自分は人恋しいわけではない。ただ、カイズに会いたいただけなのだ。

ヴィータちゃんは男友達が少ないEX5 二人の半 休と密着映画鑑賞

レンタル期間一ヶ月

二人が結婚をしてしばらくの月日が流れる。

季節はずれの新婚旅行も終わり、二人の日常は慌ただしい。だが過去の二人とは違い、お互いすれ違うことなく歩み始めていた。

そんな二人のある休日の午後のことである。

「せっかくの休日にてかけられないってのも、どうかと思うなー」

赤い髪のおさげの少女。ヴィータは不満そうに頬を膨らませる。黒髪の青年カイズは、そんな彼女をなだめるように優しく頭をなでる。

「ヴィータさん、夕方には宿舎のほうに移動ですからね。今年も教導官候補を探しに行くんですけどっけ？」

「そうみたいだな。ここ近年、即戦力、即戦力で下が育たないって上から苦情がきてるらしくてな。全く、コストカットを指示したのは自分たちだろうって言うんだ」

「まあそういう怠慢がすぐに見直される分、時空管理局はホワイト企業だと思えますよ」

「それはそうだけどよく。でもかり出されるのはあたしとなのはばかり。ほかの教導官だって優秀な奴いっぱいるじゃねえか」

この場にカイズしかないからであろう。ヴィータは子供が駄々をこねるように、ブンブンと両手を上下させる。

そんな彼女を宥めるため、カイズは空いていた左手もちいてダブルなでなでをする。

そうやって甘やかされながらも、ヴィータには自身の忙しさの理由はわかっていた。それはひとえになのはの存在であろう。

管理局のエースオブエース。魔法が存在しない世界に生まれながら、何度も次元の危機を救った少女。

管理局の、特に若い人材ならその名を知らないものはいないだろ

う。

若い英雄はそれだけで組織の顔になる。若手も彼女に続きたいと、訓練の向上になるだろう。

そうでなくても、なのはは教導官として優れている。機動六課のメンバーを短期間であそこまで叩き上げたのだ。

機動六課は組織の鼻つまみものとされていたが、これを評価しないのは愚かを通り越して、ただの無能であろう。

さらにあの容姿だ。男性隊員は張り切り、女性隊員は接しやすい。これ以上の人材はいないだろう。

自分はそんななのはの添え物的存在だ。絵面的に敵ついおっさんを隣に置くわけにいかない。逆に若い男をおいても男性隊員の志気によろしくない。

可もなく不可もなく。それがあたし自身の自己評価だ。

(こっちは新婚なんだから、なのはの人気に巻き込んでほしくねえんだけどな)

と心の中でぼやいてみるが、もちろんなのはが悪いわけではない。ただただ、行き場のないため息をつく。

そんな疲れた様子の彼女をみて、カイズはなでなでの手を止めた。

「ヴィータさんが呼ばれるのは仕方ないですよ」

「まあなのはの付き添いつて考えると」

「だってヴィータさんすごく可愛いですから。そんなヴィータさん見てたら疲れだって吹っ飛びますからね」

「あつ、あああ〜」

カイズの真っ直ぐな瞳を見ると、プシューと顔が赤くなる。ヴィータは照れた顔を隠すように、彼の胸に顔を埋めた。

彼と初めて出会ってから、もうかなりの年月が経っている。デートして、結婚して、一緒に暮らして、様々なイベントを過ごしてきた。

だがカイズのほめ言葉には、今でも頬が赤くなってしまふ。前置きなどなく、不意をつき鋭く飛んでくるそれは予測不能回避不可能だからだ。

まだ顔が上げられない。ヴィータは胸に顔を押しつけたままもこ

もぐ」と話す。

「つ、疲れが吹き飛ぶって、そ、そんなわけねえだろう」

「そうですかね？ 少なくともヴィータさんを見て、俺は毎日元氣いっぱいでしたけど？」

「元氣いっぱいって、それはカイズだからだよ。……でもありがとう
な」

「なにがです?？」

カイズはキョトントした顔をする。きつと彼にとっては当たり前のことすぎて、何に対してそう言われているのかわからなかったのだろう。

「……なんでもねえよー!」

ようやく顔の火照りがとれた気がする。ヴィータは顔を上げると、にししと楽しいな笑みを浮かべるのだった。



「で、今日は映画を見るんですけどっけ?」

「一応なく。絶対面白いから見てくれってなのはの奴から言われたんだけど。……気が付いたら借りて一ヶ月経っちゃまったな」

そして今日から合同で教導の仕事に出るのだ。返すタイミングを考えたら、今日を除いてほかにはないであろう。

ヴィータはディスクケースを取り出す。カイズは「ああ」と声を漏らした。

「それ、かなり有名な作品ですよ。パッケージからして、子供向けかと思ったら戦闘シーンがめちゃくちゃ派手で。思ったら、かなりの感動路線らしいですね。製作費もかなりかかっているとか」

「カイズはこの映画見た事あるのか?」

「いえ、名前に聞いただけです。この映画がやってた頃って、管理局に入るために勉強漬けでしたし」

そこまで言うと、カイズは少し困ったような顔をする。

「うーん、しかし映画ですか。出かけるほどの時間がないにしても、映画はなー」

「あんまり好きじゃないのか？」

「いえ。映画って結構長い時間拘束されるじゃないですか。そうすると、ヴィータさんとあまり触れ合えないなあって。短い時間と言えど、休日が重なりましたし、それが些か不満で」

「うーん。でも今日中に見ないと返せないしな。……それにどうだったってなのはに聞かれて、一ヶ月ずつと置きっぱなしだったとも言えねえしな」

「それはそうなんですけど。……あつ、そしたらこうしましょう」

「おつ、おおつ!？」

カイズはポンと手をたたくと、ヴィータを持ち上げる。そしてカイズはベッドに座ると、その膝に彼女を乗せた。

あまりにもスムーズな動作に、思わず反応が遅れてしまう。カイズはヴィータを包み込むように、そのまま両腕で優しく拘束する。

「これなら映画を見ながら、ヴィータさんの体温を感じられますね」

「か、感じられますねじゃねえだろう！ こんな体勢、あたしは子供か!!」

「ヴィータさんは俺の嫁です!!」

「知ってるよ!!」

そういう意味で言ったわけではない。だがまるで子供にしてあげるとような姿勢は、それなりに人生経験を積んできた彼女には恥ずかしいものだった。

「べ、別に隣同士で手でも繋げばいいじゃねえか」

「それだけと片手でしかヴィータさんの体温を感じられないじゃないですか。そうでなくても、これからしばらく会えないんですから、ヴィータさん分を補充しておきたいんですよ」

「そ、そんなこと言ったってよ。昔ならいざ知らず、この歳になってこれは……」

どこか懐かしいこの体勢。まだ自分が地球で暮らしていたころ、よくはやてにしてもらっていた体勢だ。

あの頃は人に優しく扱ってもらえることが初めてで、そんなはやてに随分と甘やかしてもらったものだ。

だが歳を重ねるごとに、その回数も減っていったのも確かだ。今ではなのはやフェイトはもちろんのこと、ヴォルケンリッターやリン、アギトの前ですらこんなことはしていない。

「いや、その考えで言うならここにはあたしとカイズしかいないわけです。まあ結婚もしてるわけだしこれくらい。……えっ、顔怖っ!?!」

色々と考え込んでいるうちに、カイズの顔がものすごく不機嫌になっているのがわかる。だが何が彼の逆鱗の触れたのかヴィータにはわからなかった。

言葉の代わりに、カイズの抱きしめる力が強くなる。ヴィータは「ストップ、ストップ」と声を上げた。

「お、おい、いきなりどうしたんだよ」

「別になんでもないですよ」

「いや、なんでもあるだろう。すっげえ顔に出てるぞ」

「いえ、ほんとなんでもなく。ただこの歳になってこんな体勢って、俺以外の誰かとしてたんだって、ちよつと疑問に思っただけで」

「カイズ以外の誰かって。えっ、へっ?」

「他の誰かとして、俺とは嫌なのかなって、ちよつと思っただけですよ」

「べ、別に嫌とかそういう話じゃねえよ。それにはやてとこうしてたのだから、もうかなり昔のことだし」

はやて。その名前を出すと、不機嫌の極みだったカイズの顔が一瞬にして晴れやかになる。

何だ早く言ってくさいよ。と言わんばかりの顔になると、拘束している腕の力が少し弱くなった気がした。

「でもはやてさんとやってたってことは、俺も負けてられませんね」

「いやいや、勝ち負けとかじゃねえだろう」

「いえいえ。俺は今日からヴィータさん後ろから抱きしめ部門のレコードホルダーを狙っていきますよ!」

「そんな記録ねえだろう! ……はあ、まあいいか。それじゃあちやつちやと映画見ちまおうぜ」

こうなったカイズはてこでも動かないだろう。彼のことを一番

知っているヴィータだからこそ、これ以上の抵抗はしようとしなかった。

ヴィータは映画のディスクをレコーダーに差し込むと、再び彼の膝の上に収まる。

気分はジェットコースターの座席のようだ。安全バーという名の、カイズの腕がヴィータを抱きしめる。

ヴィータはリモコンを手にとると、映画を再生していった。

・・・すごかった。

「おっ、この主人公の女優綺麗だな」

「ヴィータさんのほうが美人ですけどね」

「このアクションシーン、かっこいいな」

「ヴィータさんが戦ってる姿の方がカッコいいですけどね」

「……あたしは率直な感想すら言えないのか」

映画が始まって数十分。初めの掴みと言わんばかりに、主人公の女優によるど派手なアクションシーンが連続して映し出される。

映画館と違い気を使わなくていいと思っていて。だがそう思っていたのは、何もヴィータだけではなかった。

カイズの言葉は弾んでるものでも、冷静なものでもない。ただ当たり前のこと当たり前に言っているというテンションだ。

いや、先に喋りだしたのは自分の方だ。それに文句を言うのは筋違いだということとはヴィータにもわかっていた。

ヴィータは一時停止のボタンを押す。そして顔だけをカイズのほうに向けた。

「よし、ここからは少し黙ってみよう」

「どういうことですか？」

「そのままの意味だよ。ちよつと集中して見たいから、カイズも少し黙っているように」

「えーっ、それじゃあヴィータさん分を補充できませんよ」

「後ろから抱きつくだけで十分だろう！ とにかくもう再開、あんまり余計なこと言ったり、あたしのこと褒めたりしないこと!!」

「えっ、俺今日一回もヴィータさんのこと褒めたりしてませんけど?」

ただ目の前の真実を言ったただけだ。カイズはキョートントした顔をする。ヴィータはそんな愛しの旦那様を無視すると、映像を再開した。



しばらく映画を見てみると、自信を持って勧めてきた理由がわか

る。

先ほど見たように掴みは完璧。そこから一気に日常パートに持っていく、説明口調に見せないように世界観の説明。子供向け作品であるからこそ、大人が見ることでその理解はかなり深くなっていった。

「……………おおっ」

その証拠がカイズのこの驚きの声だ。喋らないようにと釘を指したからか、会話や単語などをあげることはない。

だが時折口からこぼれる感嘆は、彼ののめり込み具合をよく表していた。

また主人公たちがピンチのシーンでは、自分を抱きしめる腕の力が強くなる。そのたびにカイズがどれだけ緊張しているか伝わってくるかのようだった。

しかしそんなカイズと違って、ヴィータはと言うと。

(……………ううっ、こそばゆい)

カイズが息をする度に、耳の裏のあたりに息が吹きかけられる。そんなむずむずも規則性があるのなら、まだ耐えられる。だが映画に集中しているカイズは、そのシーンごとに呼吸が荒くなったり、長く息を吐いたりする。

そんな時の首筋を走る息に、ヴィータは全身がブルルと震えそうになった。

抱きしめられると、カイズの胸板が背中に押しつけられる。随分とたくましくなったと思う。初めてであったときは、どこことなくひろつとしたイメージがあった。それが嘘のようだ。

(……………なんかやばい気がする)

そんなことを考えていると、何か変なスイッチが入った気がした。何をするわけでもなく、ただ抱きしめられるのはいったいいつぶりであろうか。

いや、そうでなくてもこんな長時間初めてのことだ。

「……………お、おお、はああああ〜」

「ひゃっ!?!」

緊張のシーンから一息、カイズが安堵の息をもらす。ヴィータはそ

のこそばゆさに思わず声を上げてしまった。

「どうしましたヴィータさん?」

「な、なんでもねえよ。ちよつとびっくりしたただけだ」

「確かにこのシーン、かなり緊迫してましたね。いや、正直子供向けで舐めてましたよ。すごいですよこれ」

「あ、あははは。そうだな」

とても映画どころではない。と言えるわけもなく、ヴィータは愛想笑いを浮かべる。

だが一度スイツチの入ってしまった体は、そう簡単には落ち着いてくれなかった。

カイズの息がかかるたび全身が震えそうになる。

カイズの抱きしめる力が強くなる度鼓動が早くなる。

極めつけはお尻に感じている感触だ。

(全然、ふにやふにやなんだけどな……)

きつと布地が薄い部屋着ということが災いしているのだろう。

抱きしめられる度に、ぐつ、ぐと押しつけられるそれ。普段エツチな雰囲気になった時の硬さとは違う。今の彼にやましい気持ちなど一切ないことはヴィータにだってわかっていた。

だがやましさが言わないからと言って、やましさを感じないかと言われれば嘘である。

普段と違い自己主張しないそれは、右へ左へとヴィータのお尻を撫で回した。

「うおおっ!!」

「わひゃっ!」

映画もクライマックスシーン。今までで一番、それこそ両手両足ではがいがいじめするように、カイズはヴィータを抱きしめる。

全身を彼に包み込まれると、心臓の高鳴りが本日最高潮になる。

エツチをするときは、それが終わればもちろん落ち着くことができ。だが三時間近い超大作のそれは、その長さだけヴィータの緊張を引き延ばしにしていた。

無論時間としては三時間だ。しかし実際どのタイミングで映画が

終わるか、初めて見るヴィータにはわからない。きっと彼女は体感三時間以上ドキドキと戦っていただろう。

だがそんな時間にももちろん終わりがある。黒のバックにスタッフロールが流れ出す。

カイズは「ふうー」と息を吐くと、ヴィータの拘束をゆつくりと解いていった。

「いやー、すごい映画でしたね。これ映画館で見れたらもつとすごかったんでしょね。って、ヴィータさん？」

「……………」

頬に熱を帯びたヴィータの顔を見て、カイズは困惑の声を上げる。

「も、もしかしてトイレとかでしたか!? す、すみません集中しちゃってて、全然気づかなくて」

「……………しよ」

「えっ?」

「もつと、その。…………いちゃいちゃしよう」

初めはその意味がよくわからなかった。

だが瞳にほんのり涙を浮かべ、頬を上気させ、さらにもじもじとふとももを擦りつけている姿は、明らかに明らかな姿だった。

なぜ子供向けの映画を見ていただけでこんなことになってしまったのか。当の本人であるカイズには訳が分からなかった。

「え、えつと、でもヴィータさんこれからお仕事、ん、うむむ」

とりあえずそのことは今はどうでもいい。と言わんばかりに、ヴィータはカイズに唇を重ねていく。

それはいつもの軽いものではなく。唇を這うような濃厚な口づけだった。

ヴィータはそのまま彼をベッドに押し倒す。そして先ほどまで自分のお尻に押しつけられていたそれに、そつと手を伸ばした。

「え、ええ、ヴィータさん? あれ、ええ?」

「まだ仕事まで時間あるから。…………大丈夫だ」

「大丈夫って、あ、あああつー!?!」

嫁の始めてみる攻めの姿勢に、カイズはただただ流されるしかない

かった。

◆ その日の晩、合宿上についたヴィータは、なのはに映画のディスク返す。

なのは興味津々に目を輝かせた。

「ねっ、ねっ、この映画どうだったヴィータちゃん!!」

「……………すごかった」

「ねー、ほんと子供向けとは思えないよね。私も初めはヴィヴィオに教えてもらったんだけど」

なのはは興奮気味に映画の感想を話し出す。

だがなのはとヴィータの『すごかった』は全く違う意味で。楽しく話すなのはに申し訳ないと思う。

今日のことを思い出すと、ヴィータの顔は茹でダコのように真っ赤になるのだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編1

新たな可能性と短すぎるスカート

ねえ、ミニスカート履いてみない？



アパートの一室。1DKの狭い間取りのそこでヴィータは一人立ちすくんでいた。それはなぜか。小さな鏡に映る自身のバリアジャケット姿に言葉がでなかったからだ。

ただのバリアジャケットなら何の問題はないだろう。原因はそのスカートの丈にあった。

「さ、流石にこれは短すぎるう」

カイズの家には姿見の鏡が存在しない。そのため全体像を把握することはできない。それでも膝上のスカートには羞恥を覚えざるを得なかった。ぴよんと飛び上がるとふわっと浮かび上がる心許ない丈。ヴィータはちらりと下着が映るのを見るとブンブンと首を横に振った。

「いやいや！ 流石にこれで戦闘はねえって！」

言葉ではそう口にしても心のどこかで小さな引っかけかりを覚える。それはこのバリアジャケットを提供した高町なのはとの会話のせいであろう。



「ねえヴィータちゃん、ミニスカート履いてみない？」

「……………はあああ?？」

管理局のエースオブエース、高町なのはの突然提案にヴィータは心底怪訝な声をあげる。

二人は今日の仕事を終えている。更衣室で管理局の制服に着替えあとは家に帰るだけというところだった。だがなのはの言葉にヴィータは足を止めざるを得なかった。

「何だよ藪から棒に。それにミニスカートならいま履いてるじゃねえか」

ヴィータは自身の制服を指さす。教導官特有の白を基調とした制服、そのスカートは膝上のタイトスカートだ。

はいこれで話は終わり。ヴィータは話を区切ってさっさとその場を去ろうとする。だがなのは彼女の肩を掴むと

「ちよつと待ってー」とその場に留まらせた。

「私が言ってるのはバリアジャケットのことだよ」

「バリアジャケットだあ？ 何でバリアジャケットをミニスカートにしなくちゃけないんだよ」

「……えつとね。逆にヴィータちゃんはスカートが長くて邪魔じゃないのかなって思っ」

「えっ??」

特に不便を感じたことはない。だがなのはの言葉に一考の余地が生まれてしまう。ヴィータは帰宅へと力を込めていた脚を緩めるとなのはのほうに向き直った。

「あたしは特に邪魔とか思っ」

「正直機動六課の時からずっと思っ」

「出ず。フェイトやはやて、それになのはもエクシードモードでない限りは基本的にはミニスカートを着用している。それはティアナも同じであり、そうでないメンバーは半ズボンやシグナムのような特殊な服装を着ていた。キャロはロングのスカートであるがそれは彼女のポジション上例外であろう。」

「……確かにロングスカートはあたしだけだな」

「そうなんだよねー。ヴィータちゃんは出会った頃からずつとそのスタイルだけど。……もしかしたらバリアジャケット次第ではもつと戦闘の幅を広げられるんじゃないかっ」

「お、おとおっ！」

流星は上司であり、凄腕の教導官であり、管理局エースオブエース

だと素直に感嘆する。ヴィータは顎に手を添えて頷いていった。

「確かに一考の余地があるかもしれないねえな。可能性はいくらあったっていいんだしな」

「でしよでしよー、それでシャーリーに特注でデザインしてもらったんだー」

真面目に返事をしたヴィータとは真逆になのははははテンション爆上げで詰め寄ってくる。なのははヴィータの頬ずりしながらデバイスを動かすとバリアジャケットのデータを送る。

ヴィータはそのデータを展開するとそこにはあまりにも丈の短いバリアジャケットが映し出される。

「こ、これは流石に短すぎねえか」

「そんなことないよヴィータちゃん。機動六課時代の私と同じくらいだし、はやてちゃんやフェイトちゃんはいまでもこれくらいでしょう！ ほらほら、みんな一緒でなら怖くないからさ、だからいますぐこのバリアジャケット着てみよう、ほらほら〜」

となのはは鼻息を荒くしまくし立てるように話しかけてくる。そんなのはを見てヴィータは目を閉じたまま鼻筋をつまむ。

「（あ、あたしがバカだった……………！）」

ミニスカートの話はやはりミニスカートの話でしかなかった。ヴィータはニコツと極上の作り笑いを浮かべる。そして鞆を手に取りるとその笑みのままスタスタと更衣室の出入り口へと走り去っていった。

「ヴィ、ヴィータちゃん！」

「お疲れさまでした高町一等空尉」

「ああー、そんな他人行儀な言い方やめて！ ……あつ、でもちよつとその感じ癖になるかも」

—————
バタンツ！

これ以上構っていても時間の無駄と扉を閉める。追いつがるなのはの声に耳を貸すことなく、ヴィータは今の彼女の帰る家へと歩みを進めるのだった。

駄目です、駄目です！

◇

「ふふーん、ふふふふーん♪」

白い紙箱を片手にカイズは上機嫌で帰路に就いていた。

「今日は自分でもびっくりするくらい教導がうまくいって、おかげで残業もなし。何気なく寄ったケーキ屋さんでは限定のアイスケーキをゲット。そして家に帰ればヴィータさんがいる。俺はミッド一の幸せものだ〜」

ホップ、ステップ、ジャンプと軽快に階段を上っていく。そんな中、ケーキが崩れていないのは彼の体幹が鍛え上げられた証拠であろう。家の前につくとできる限り静かにロックを解除する。

「くつくつつ、ヴィータさんきつと驚くぞ〜」

そんな確信を持って部屋の中に入る。そしてその背中を見ると彼女に声をかけた。

「ヴィータさんただ……い……ま??」

「あつ」

視線が合うとピシリと時間が止まるような感覚に陥る。それからゆっくり十秒ほど経つとヴィータは気まずそうに顔を伏せる。そして恥ずかしそうにスカート裾をギュツと握りしめた。

「……………ちよつと待ってください」

カイズはガタガタと手を震わせながら台所に向かう。そして紙箱のケーキを些か崩しながらも冷蔵庫に閉まった。その後再びヴィータの前に戻ってくると床の座布団を自身の顔に押しつけた。

「何ですかその魅惑的な格好は……!!」

近隣住民に配慮された魂の叫びはこもりながらも部屋中に響きわたる。ヴィータは頬を赤く染めると困ったように太股を擦りあわせた。

「こ、これはその、なのはが戦術の幅が広がるからって、その」

「なんの戦術の幅が広がるんですか！ あれですかヴィータさんの魅力で相手を誘惑してその隙に攻撃するとかそういうのですか！ 駄

目です、駄目です、駄目です！」

暴走したカイズはそこまで言うとはツとした顔でヴィータを見る。

「ま、まさかもう誰かにその姿を見せたんですか」

「ふえ？」

「そうですね。ヴィータさんがそんなバリヤジャケット制作する訳ないですし、高町教導官ですか、シャーリーさんですか、それとも、それとも」

カイズは座布団を投げ捨てる。ヴィータの前でひざまずく。そしてそのまま彼女の太股の間に顔を埋めていった。

「にや、にやにするんだ！」

「駄目です、駄目です。この魅惑的な太股を見ていいのは俺だけです。ほかの誰かに見られたなんてあまりにも辛すぎます！」

「あつ、やつ、ちがつ、あたしは誰にも」

「うわああああ、ヴィータさん！」

カイズが声を出すたびに太股に吐息がかかる。さらに一日の終わりだからだろう。目では見えないほどの本当にうつすらと生えた無精髭の感触がヴィータの快感を刺激した。

「やんつ、カイズ、やつ、やつ」

「ヴィータさん、ヴィータさん、ヴィータさん！」

「カイズ、やつ、あつ、あつ、やつ……めねえかー!!」

瞬間に握られたグラーファイゼンがカイズの頭に振り下ろされる。それは一際鈍い音を立てながらカイズの頭にめり込んでいくのだった。

◆ 「つまりヴィータさんのその姿を見たのは俺だけと」

「だから何度もそう言ってるだろ。……だけどな、なのはの言うことも全く見当違いってわけでもねえから家に帰って着替えてたんだよ。……カイズが連絡もなしにこんな早く帰ってくるとは思ってなかったけどな」

「それは……すみません！ こちら貢ぎ物の限定アイスクーキとなります!!」

「ふんっ！」

ヴィータは頬を膨らませながらテーブルに置かれたアイスケーキを頬張る。すると目を大きく見開き正座で反省しているカイズの方を見た。

口の中で溶けるアイスとケーキの生地具合が絶妙と有名な店だ。その限定品にヴィータはご満悦のようだ。二つ目のケーキに手を伸ばすと膨れていた頬は徐々に萎んでいった。

「……………んっ！」

ヴィータは大きくケーキをとるとカイズの前に突き出す。カイズは目を輝かせながらそれを一口で飲み込んでいった。これでお互い手打ちだとヴィータは改めて状況を説明した。

「まあ何度か説明した通りなのはの考えもあながち間違つてねえなーって話なんだよな」

「まあそれは確かにそうですね。実際ヴィータさん以外は皆さん動きやすそうな格好ですし。それにいくつかのモードチェンジもありますしね」

なのははエクシード、フェイトはソニック、はやてに関してはリインとのユニゾンが存在する。だがその状態もただただ強化されたかと言われればそう言えないのが現状だ。

能力底上げのエクシードは体に負荷が増え、ソニックは防御力をほぼ0にする。そしてユニゾンに関して言えばそもそもリインがいなければ選択に入れることすらできない。どれも一長一短、しかしその決断が事件結果を最良の導いたことは少なくはないだろう。ヴィータはあとため息をつく。

「なのはの奴も出来るだけ深刻にならないようにってあんな感じだったんだろな。……いや結構楽しんだなやっぱり」

「うーん、可能性が広がるのはいいですけど。それはヴィータさんのスタイルに合いますかね？」

「だよなー。まあだからこそ今まで誰も口出しせず、言う必要もないと思っただんじやねえかな」

そしてそれがわかっていても口出し出来るのはきつとなのは以外

存在しないだろう。ヴィータは内心感謝しつつ、きつとそれを言葉にすることはないだろうと思った。

「カイズはどう思う?」

「大きな事件がないうちに可能性を模索するのは、俺としてはいいとは思いますがよ。……………ただえつとその、うーん」

「うん? 何か言いたいことがあるならばつきり言えよな」

「いやほんと個人的なことで。こんなくだらないこと口にするのものはかられるというか、俺がゴミクズなだけなんで気にしないでください」

「余計に気になるだろ! あたしとお前の仲だぞ、今更何を気にすることがあるんだよ!!」

ヴィータはカイズの肩に掴みかかるとガクガクと揺らしていく。カイズはスンとした目で天井を見つめる。そして本当に申し訳なさそうに小さな声を上げた。

「……………新妻の肌をあまり他人に見せたくないです」

「……………へっ?」

「……………すみません忘れてください。ヴィータさんは真面目な話をしているのにこんなものばかりで。ほんと自分が嫌になります」

カイズは自己嫌悪を覚えながら頭を抱える。

結局初めからカイズの意見は変わっていなかった。ギャグでも冗談でもなくヴィータの肌を晒したくない。その一点だったのだ。

「(ああ、こいつは本当に……………)」

ヴィータは心の中でそう思うとスツと立ち上がる。そして正座で俯いたままのカイズの前に立った。

「カイズ、こっち向けよ」

「ヴィータさん?」

カイズが顔を上げたのがわかると、丈の短いスカートをキュツと掴む。

「……………んっ」

そのまま少しずつ少しずつスカートをつまみ上げる。するとその短さからすぐに彼女の下着がチラリと顔をのぞかせた。

「ヴィ、ヴィータさん?!」

カイズの声が上ずる。だが声では困惑していてもその熱い視線が下着に向けられている。その事実にはヴィータにビシビシ伝わってきた。

自分の痴態を見てカイズが興奮している。息を荒くしている彼の姿を見ているだけで、体の奥が熱くなるのを感じた。

「も、もうおしまいだ!」

このままではカイズの視線で感じていることがバレてしまう。ヴィータはギョツとスカートを下に抑えつけた。

「そ、そんなー」

「終わりましたら終わりだ。明日も仕事早いんだからな!」

「そ、それはそうですけど」

「それに………ただだから安心しろ」

「えっ?」

スカートを抑えながらもじもじとカイズを見る。そして絞り出すように声を上げた。

「こうやってあたしの恥ずかしいところを自分から見せるのはカイズだけだから安心しろって………そう言ってるんだよ!」

「でもそれじゃあヴィータさんの可能性が……」

「それだってすぐにどうこうって話じゃねえしよ。………それにあたしだってあたしの恥ずかしいところはカイズにしか見せたくねえしな」

「ヴィータさん!」

カイズは弾かれるようにその場から飛び出す。だがその行動を予測していたヴィータはサッと横に避けた。

ガンツと机に頭をぶつけるとカイズは目に涙を浮かべた。

「ヴィータさくん」

「明日早いって言ってるだろ。それにまだ夕飯も風呂もすませてねえんだぞ。ほら解散解散」

シッシとカイズを追い払う。そんなヴィータを見てカイズはびしっと人差し指を立てた。

「でしたら一つだけ叶えてください。絶対に指一本触れないので」

「ほんとかく？」

「はい、一瞬で終わりますから！」

カイズにそう言われるとヴィータはやれやれと彼の前に立つ。カイズはその前で正座をすると上目遣いに彼女を見た。

にや、にやにが可愛い行動だ！

「もしよろしかったら、その場で何回かぐるっと回ってもらえませんか」

「ぐるっと回るって、えっ、普通に横回転でいいんだよな??」

「はいっ!」

物凄くいい返事がくる。何を要求されるのかと思ったがまあそれだけならと気軽に了承する。

「そ、それじゃあ回るぞ」

「はいっ!」

クルツ、クルツ、クルツ。

一回、二回、三回と何度かその場で回転する。そのたびに短いスカートは遠心力でふわっと浮かび上がり、ピンク色の下着をチラつかせた。そんな光景にカイズの目が血走っていくのがわかる。

初めは何が嬉しいのだろうかと疑問に思った。だが男のカイズにとってはこの行動が蠱惑的なのだろう。

「(う、うわあ、おち○ちん凄いことになってる)」

座っていてもわかるほど下腹部が盛り上がっているのが伺える。それだけ今のヴィータに興奮しているのだろう。そう理解するとこの行動が物凄く恥ずかしいことのように感じた。

「も、もうおしまい、おしまいだ! 見るな見るな!!」

回転をやめるとヴィータはスカートを片手で抑える。そしてもう片方の手でカイズの目を覆おうとした。だが逆にその手はバシツと握りしめられてしまう。

「ヴィータさん、それはズルいですよ」

「ふえっ?」

「俺は見るだけで我慢しようとしたのに、最後の最後にそんな可愛い行動とって!」

「にや、にやにが可愛い行動だ!」

突然の物言いに思わず噛んでしまう。そんな彼女の姿はさらにカイズの劣情を刺激した。

「そういうことを天然でやってしまうからヴィータさんはズルいんですよ！ ヴィータさんの、ヴィータさんのせいですからね!!」

カイズはヴィータを引き寄せるとそのまま唇を奪っていく。そしてあれよあれよとベッドに押し倒していった。

「だからいったい何なんだよー!!」

彼女の叫びに答えるものは誰もいない。ヴィータはそのまま勢いに押し流されると「今日はピザでも注文するか」と最後に正常な思考を浮かべるのだった。

◆
「ヴィータちゃん何だかツヤツヤしてるね。昨日はぐっすり寝れたのかな?」

「……いやまあそういうところだな」

就寝は遅くなってしまったが深く熟睡はできた。だがその理由を話すわけにもいかず、ヴィータは曖昧な返事をする。

そんなヴィータの心中など知る由もなく、なのはは思い出したように声を上げる。

「それでね、昨日のバリアジャケットの件だけ。……どうだったかな?」

なのはの口調からやはり自分のことを真剣に考えてくれていたことが伝わってくる。

「すっげえ白熱した」

「えっ、白熱?」

「あつ、えつと、すっげえ議論が白熱したぞ！ 可能性として新しいフォームは考えてもいいかもしれないねー」

そう伝えるとなのはは目を輝かせてヴィータに迫る。

「そうだねよ、そうだよね、そうだよね！ ヴィータちゃんならそう言ってくれると思ってたよー!!」

なのははズイズイとヴィータに詰め寄る。そしてデバイスを用意すると様々なフォームの映像を映しだしていった。

「ヴィータちゃんならきつとこれも似合うと思うんだよね。あとこれも、これも、これもー!!」

ハイテンションで衣装を勧めるのはを見てヴィータは「あははは」と頬をかく。

「(露出の高さをどうにかしねえと、なのはの前じゃ着ねえぞーって言ったらどんな顔になるんだろうな)」

管理局のエースオブエースの落胆顔を思うと少し心が痛む。だがそれが旦那様との約束だ。ヴィータは心を鬼にしてなのはに真実を告げていくのだった。

そんなふうにはヴィータは楽しくも平和な日常を今もカイズと過ごしている。

そんなヴィータにとある任務が下されるのは、それから数日後のことであった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編2 噛み合わない意見と時空を超えた大出張 変わらない日常とすきま風

◆
——ピピピピピピ、ピッ!!

ベッドから片手を伸し朝を告げる電子音を止める。ヴィータは寝ぼけ眼を擦ると上半身を起こした。

「う、うくん」

毎日のことながら起床の瞬間はどうにも頭が回らない。今日の朝ご飯は何だろうか？ そう思うと同時に隣で寝ている男性の存在に気づく。

実年齢よりも童顔の黒髪の男性。事実ヴィータよりも年下の彼は静かに寝息を立てていた。そんな幸せそうな彼の表情を見ると、ヴィータは「ああっ」と思考が回り始めた。

「そうか。……あたし、結婚したんだっただな」

結婚。その単語は自分には一番無縁だと思っていた。

海鳴市ではやと出会い、様々な事件を乗り越え、時期を見て家族でミッドチルダに移住した。仕事の都合上、家族毎日一緒とはもちろん行かなかった。だとしても自分の帰る場所は未来永劫変わることないとあの頃は思っていた。

そんなヴィータの前にカイズは現れた。初めはただの教導対象の一人としか思っていなかった。だが彼に猛アタックされ、付き合ひ、様々な感情を経験し、そして結婚まで至った。

何だかんだ結婚生活も三ヶ月が経とうとしている。しかしこの生活に慣れるのはまだまだ時間がかかりそうだ。ヴィータはカイズを起こさないように、ゆっくりゆっくりベッドから抜け出すとする。

「……う、うくん」

だが隙間風のせい、カイズは瞼を擦るとベッドから抜け出したヴィータを見た。

「……おはようございますヴィータさん」

「まだ起きなくていいぞー。今日の朝ごはんはあたし担当だからな」

「でもせっかくヴィータさんが起きているんですから俺も——」

「ゆっくり寝てろって。教導の予習で昨日も遅かったんだろ」

ヴィータが仕事から帰ってきた後もしばらく机から離れなかったのを覚えている。

二人は暮らし始めの時に、どちらかが夜更かしをしても気にせず寝ることを約束していた。昨晚夜更かしで予習をしたのも、今日の朝食担当がヴィータであることを鑑みてだろう。

ヴィータの見透かした目を見てカイズは「はい」と毛布をかけなおす。だが思い出したようにヴィータの後ろ姿に声をかけた。

「そうだヴィータさん！」

「おお、どうした？」

「今日も最高に可愛いですよ！……ではあと三十分ほど失礼します」

言うだけ言うとカイズは眠りについてしまう。寝ていいぞと言った手前ヴィータは反応を返すことが出来なかった。

「……はあ、変わんねえなー」

ヴィータはポリポリと頬を搔くと、朝ご飯の準備を始めるのだった。



お昼休み。午前の教導を終えたヴィータは相方のなのはと共に食堂に出向いていた。二人はそれぞれ定食を注文する。そしていつの間にか暗黙の了解で決まっていた教導官専用の窓際の席に座った。ヴィータはパスタをクルクルと巻き取るが、それを口に運ぶことなくため息をついた。

「どうしたのヴィータちゃん？ 見るからに元気がないみたいだけど」

「元気がないってのとは違うんだけど。……新しい生活がなかなか難しいなーと」

「新婚だもんね。カイズ君とうまくいってない……ってことはない

か」

ヴィータにベタ惚れのカイズに限ってそれはないかとなのはは「あははは」と笑みを浮かべる。そんな反応をされることに少しの恥ずかしさを感じながらヴィータは話を続ける。

「なのはのところは今でもチビと一緒に寝てるのか？」

「うーん、初等部の低学年のときほどじゃないかなー。たまに家族交流でフェイトちゃんも含めて一緒に寝ることはあるけど。……もしかして寝相の話？」

「いや、そうじゃねえんだけどよ。朝ベッドから抜け出すときに毎回カイズのこと起こしちゃまって、なんかそのコツか何かあるのかなって思っただけ。そういえばはやてもあたしに気づかれずに毎朝起きてたっけ」

もしかして自分は物凄い不器用なのでは。シヨツクのあまり巻いていたパスタがぼろっと皿に落ちる。なのはは「にゃはは」と少しいたずらめいた笑みを浮かべた。

「もちろんコツはあると思うけど、私とヴィータちゃんだと前提が違うと思うよ」

「前提が違うってなんだ？」

「ヴィヴィオとカイズ君だと体の大きさが違うからね。布団がかかっている面積がまず違うよ。子供時代のはやてちゃんとヴィータちゃんならさらに違うと思うしね」

「あー、確かに言われてみればそうか」

「それに今暮らしているところって、カイズ君が元から住んでいたアパートだよな？　あまり広くないからベッドを二つ置けないって言うっていたし、起きちゃうのは仕方ないと思うよ」

「それは。……そうなんだよな」

海鳴市の頃やミッドチルダ、起動六課の宿泊施設を思うと確かにカイズのアパートは狭かった。だが新婚のヴィータ達は正直部屋の広さに関係なく肩身を寄せ合うぐらい熱々だった。

しかし不自由がないと言われれば嘘になる。教導官のヴィータは元起動六課の他のメンバーと比べれば緊急の出勤が少ないほうだ。

だとしても毎日同じ時間に帰宅できるかと言われればそうではない。不慮の事故もあれば、遅くまで事務処理をすることもある。

それが仕事先で済めばいい、問題はその仕事を家庭に持ち帰った時だ。一人暮らしが前提だったカイズのアパートは机が一つしかない。いや正確には結婚を境にガラス机を一つ増やしてもらった。しかし快適とは程遠いそれは作業効率を明らかに落としていた。

「あゝ、そうだな。改めて考えるとうちは狭いんだよな」

「同棲を始めたのってデスクイーターの一件でカイズ君が毎晩悪夢を見るようになってからだよね。その後カイズ君が記憶を失くして、ノーナンバーズ事件があつて。それからあれよあれよと一気に結婚まで行っちゃったからね。ヴィータちゃんはそのなりに高給取りだし、カイズ君も教導が軌道に乗ってきたし。……そろそろ新居を考えてもいいのかもね」

「新居、新居か。……新居ね」

「私もすっかり相談に乗るし、はやてちゃんにも話してみるといいと思うよ。——さつて」

なのははそこで話を切ると、手のひらをぱんと合わせフォークを手に取る。

「とりあえず話は一旦ここまで、冷めちゃう前にご飯食べちゃおうか」

「あつ、すまねえなのは」

「いいってことだよ。その代わりいい家が見つかったらちゃんとご招待してよね」

「おうつ、任せておけ！」

とにかく今は午後の教導に向けて体力をつけよう。フォークでパスタを巻き取ると黙々と口に運んでいくのだった。

信用ゆえのチグハグ

家での夕食後、カイズはヴィータの言葉を聞いてテーブル越しに身を乗り出した。

「もしかして一緒の部屋にいたくないってことですか!」

「絶対言うと思った! だから前置きとしてそうじゃないって言っただろう!!」

「でも狭い部屋で俺と一緒になのが嫌ってことですよね!」

「それも初めに説明しただろ。お互い朝が早くなることも夜が遅くなることもある。だからこそもっと広い家を探したほうがいいって言うてるんだ!」

「そ、それはそう思いますけど。……うくくん」

ヴィータの提案にカイズはあまり乗り気ではないようだ。だが彼との付き合いももうそれなりに長い。ヴィータは慌てることなく話を続けた。

「カイズの考えてることはわかるぞ。本当にいろんな事件があつて、あたしたちは最短で結婚式挙げて、新婚旅行して。……あたしの体調のこと心配してるんだろう」

「——ギクッ!!」

カイズが口ごもる姿に考えが的中していることがわかる。ヴィータは呆れたように頭を掻く。

「確かに本格的にこっちに引越してくるのは大変だったぞ。仕事をそんなに休めない中で荷物まとめたり住所や免許書の書き換えがあつたりで確かに忙しかった」

「そ、そうですね! それなのに俺はヴィータさんと早く暮らしたいあまりにいろいろ急いじやって」

「う・ぬ・ぼ・れ・る・なっ!」

「いたっ!!」

俯いているカイズの額に渾身のデコピンが放たれる。カイズはじんじんする額を抑えながらヴィータを見た。ヴィータはそんな彼の両頬に手を添えていく。そしてゆっくり諭すように言葉を繋げた。

「はやてと別れる寂しきは確かにあった。だけどその寂しさよりも、もつとずつと本格的にしつかりとカイズと一緒に早く暮らしたいって思ってたんだ。最短の結婚式も引つ越しも全部二人で決めたことだろ。だからあんまり一人で抱え込むなよ」

「……ヴィータさん」

「それに今度は二人で新居に引つ越すんだろ。二人だったら新居探しだって引つ越し作業だってきつと楽しくなるからさ。……一緒に頑張っ行ってこうぜ、旦那さま」

「——ヴィータさん!!」

カイズはその場から立ち上がるとヴィータを抱きかかえる。そしてそのままベッドへと押し倒していった。

「ま、まだお風呂に入ってたな——」

「大丈夫です。ヴィータさんに汚いところなんてありませんから!!」

「いや、それはあくまでお前の主観で、いつ、ひゃ!!」

首筋にキスをされると体がびくりと浮かび上がってしまった。ヴィータは体中の力が抜けていくのを感じながらもなんとか抵抗をしようとする。

(今日は教導が激しかったから本当に汗臭いんだよー!)

だがその言葉はここ近年で芽生えた乙女心のせいで逆にそれを言葉にすることが出来なかった。ヴィータは何とかカイズを引きはがそうとする。

そんなヴィータを見るとカイズは彼女の耳元で呟いた。

「——愛してるよヴィータ」

「ひゃ、ひゃう! こんな時だけさん付けしないのずる、あっ、ああ——」

完全にカイズのスイッチが入ってしまった。こうなってはもうカイズは止まらないとヴィータは抵抗をやめた。

結婚を機にカイズはヴィータを『さん』付けすることをやめた。しかし数週間もしないうちに「何かしつくりこない」と再びさん付けに戻っていた。それ自体にはあまり問題はない。問題があるとすればさん付けをする時よりも、さん付けをしないときのほうだ。

「ん、あつ、んん、んっ」

「本当に可愛いよヴィータ」

「んっ、こ、このドSが——!!」

カイズはこういう雰囲気になるとさん付けをやめるようになった。普段の従順な性格のギャップもありヴィータはほとほと参っていた。しかし参っていないながらも耳元でささやかれる呼び捨てにメロメロになっていたのも事実だった。

寝不足の相談から始まった今回の話だが、どうやら今日も寝不足になりそうだ。手慣れた手つきで制服を脱がされながら、ヴィータはそう思うのだった。



引越騒動から早数日、ヴィータとカイズは時間を見つけては物件を覗いていた。だが、覗いているだけでまだ探す段階には至っていなかった。

どうしてそんなことになっているか。それは二人の今までの生活環境が大いに影響していた。これまでヴィータははやてやヴォルケンリッターの面々と大家族として暮らしてきた。カイズは逆に医者で忙しい父親と二人で暮らしており、その父親も仕事で家を空けることが多かった。新婚の二人暮らしとしてのビジョンが二人は大きくかけ離れていたのだ。

ヴィータとしてはのびのびと出来るリビングが欲しいと思う。だがカイズは造りさえしっかりしていれば狭くても、それこそ住めれば問題ないといった考えだ。

また物件探しがさらに混乱を極めているのは、カイズ自身の意見があまりにも少ないことだった。

「ヴィータさんがいいと思ったのがいいと思いますよ！」

彼との付き合いは長い。その言葉が心の底からの真意であることはわかっている。だがそう肯定されても、何から何まで自分の思い通りというのはそれはそれで気乗りがしないものだ。せっかくの二人の新居なのだから二人で話を進めていきたい。それがヴィータの思いだった。

もしこれが昔住んでいた地球ならもう少し話も違っていただろう。文明がゆったり進み、魔法の存在もほぼ認識されていないその場所は、良い意味でも悪い意味でも常に不自由と隣り合わせだった。

あの頃ははやての病院までの距離、学校はどこにあるか、スーパーは、コンビニは、駅は、バス停は、家賃はなどなど、何かを取れば何かを失う。それがあからこそ今の生活と照らし合わせる事が出来た。

だがこのミッドチルダでは移動はそこまで大変ではない。さらに緊急時なら空を飛ぶことも許可される。地球なら急いでいるときに限って電車が止まったり、渋滞につかまったりということがあってもしれない。だがこの世界はそんなイレギュラーが存在しないのだ。(もちろん魔導士であることが前提であるが)

「ただいまって迎えてくれる家の温かみ。それをカイズにもわかってほしいんだけどな」

だがこればかりは今更どうにかできるものではないだろう。ヴィータは物件のページを閉じると小さくため息をついた。このままでは悪戯に時が流れていくだけだろう。そう思っていた彼女の元に特殊な仕事の話が舞い込んできたのはそのすぐ後のことであった。

時空を超えて大出張

とある日の仕事終了後。ヴィータはなのはに呼び止められ、今後の仕事内容について話を受けた。ヴィータは徐々にしかめ面になると話を断ち切つて声を上げた。

「はあっ?! あたしが二ヶ月の出張だっ!!」

「うん。ちよつと上からお達しがあつてね。でもうちはまだ子供が小さいし、フエイトちゃんも家に帰つてこない日も多いから」

「——ろすぞ」

「ふえっ?」

「ぶっ〇ろすぞテメエ!! 新婚だつてわかつて言つてるんだろっうな!

ああっ!!」

ヴィータは強烈なメンチを切ると首元のグラーフアイゼンに手を伸ばす。もちろん力尽くで仕事を断ろうとは思っていない。だが一発、二発はぶち抜いてやるとヤル気満々だった。

なのはは全力で両手を振ると「ストップストップ」と早口で話を続ける。

「最後まで話を聞いて。今回の話は私たち教導官に下つてきた命令ではあるんだけど、その他にももう一つ条件があるの」

「条件? 条件つてなんだ?」

「落ち着いてー、落ち着いてーヴィータちゃん。ヴィータちゃんにとつても決して悪い話じゃないから。……うっ、おほん。それでもう一つの条件なんだけどね。その出張先が海鳴市なんだよ」

「海鳴つてあたしたちの故郷じゃねえか。今では平和そのものだしわざわざ視察するほどか?」

「うん、私もそう思うよ。——でもまああまりにも平和過ぎるんだよね。何度もロストロギア事件に巻き込まれたのが嘘みたいだね」

「——ッッ!」

なのはの言葉に過去に自分が起こした過ちが蘇る。いや忘れたことなど一度もない。あの街では世界を巻き込むほどの大事件『闇の書事件』が起きたのだから。

その顔を見ればヴィータが何を考えているは手に取るようにわかる。なのはは「ごめんね」と一言謝罪をする。

「闇の書事件、それにフェイトちゃんのお母さんが起こしたジュエルシード事件。ううん、それ以外にもあの街ではあまりにも多くの事件が起き過ぎた。ただこの何年かは本当に平和そのもので、何か起きる予兆はなにもない。それはヴィータちゃんも知つての通りだよ」

「じゃあどうして視察に行かなくちゃいけないんだよ」

「それはもうお役所仕事としか言いようがないかな。次元を揺るがす大事件が起きた街を定期で視察する。その役目に今回教導官が選ばれたんだよ」

「まあその二つの条件があるならあたしに白羽の矢が立つのはしかたねえけど。……はあ、二ヶ月か」

結婚してから三ヶ月強で別れ離れになるとは。ヴィータは本当に嫌だと深いため息をつく。だがなのはの話はそれだけでは終わらない。ニッコニコの笑顔で話を続ける。

「それ・で、ここからが本筋なんだけどね。海鳴市出張に関して一人だけ教導官を補佐として連れて行けるの」

「———!!? なのはそれって!!」

「せっかくの新婚なんだからさ。たまには教導を忘れてゆったり過ごしてもいいんじゃないかなって思っつて。それに最近新居探しも悩んでいるようだったし、海鳴の街並みを見て何かヒントになったらっと思っつたの」

「なのは——!! さっすがあたしの上司だ。あたしは初めから信じてたぞ——!!」

「にやはは、ヴィータちゃんのジュエルから低い声でぶっ〇ろすぞっつて言われたときはどうしようかと思っつたよ」

「まあそこは気にするなっつて」

「まあそんなに気にしてないけどね。正直ヴィータちゃんと二人出張もいいなーとも思っつていたんだけど、ヴィヴィオもそうだけどフェイトちゃんが特に寂しがっちゃっつてね。あのままだと時間ができるたびに遊びに来ちゃいそうっつて困っつてたんだよ」

「あー、チビよりもそつちかー。確かに想像つくな」

なのは出来るだけ軽口で話しているが、心の底では本当に困っていたのだろう。

ヴィータは出張の話を聞いて不機嫌にはなった。だが断る素振りがなかったのは、なのはの本心を見抜いてのことだ。お互いの状況を理解すると、ヴィータは次の疑問が浮かんだ。

「あたしたちはどのへんで暮らすんだ？」

「ふっふふー、いいところだよー」

「フェイト達が住んでた高層アパートか？」

「ノンノン、ヴィータちゃんたちが住むのは庭付き一戸建て。足の悪い人のためにバリアフリーも完備した住み慣れた我が家のような家だよー」

「住み慣れた我が家って。——もしかして!?!」

「そのもしかしてだよ。ヴィータちゃん達には二ヶ月間、はやてちゃん達が元住んでいた家で暮らしてもらいます!」

ヴィータの予想となのはの答えが重なり合う。ヴィータは放心したようにほんの少し口を開けると、呟くように言葉にした。

「またあの家に住めるのか」

◆
そうしてヴィータとカイズの出張視察が決まるのだった。

それから海鳴市視察の準備はとんとん拍子に進んでいく。普通の引っ越しとは違い、必要なものはある程度管理局が用意してくれることも要因だった。

そして一ヶ月後。二人はなのははやての生まれ故郷、地球の海鳴市に足を踏み入れた。ヴィータは赤いキャリーバッグを転がしながら馴染み深い道を歩いていく。そして一切迷うことなくその家までたどり着いた。

二階建ての見慣れた色の屋根、入り口は車いすが通りやすく段差ではなく緩いスロープになっている。ヴィータはもう戻ることはないだろうと思っていた、あの頃の帰る場所を見上げた。

「この土地に帰ってきた瞬間、急に何かがこみ上げてきたけど。……」

家を前にしたらその比じゃねえな」

もう何年振りにもなる始まりの我が家を見てヴィータは目に涙を浮かべる。さらに胸の中にポカポカと熱い何かが沸き上がるのを感じた。

ヴィータの感情変化にまだ気づいていないのだろう。カイズは和やかな笑みで八神家を見る。

「いやー、あの時のままで全然変わらないですね」

「へっ?」

「えっ?」

まるで修学旅行帰りの学生が我が家を見たような反応を見て、ヴィータの出かかっていた涙が引っ込む。カイズはヴィータの反応を見て目を丸くする。だがすぐに「ああっ!」と手のひらを叩いた。「そ、そうですね。ヴィータさんにとっては数年ぶりの我が家ですもんね。なんかつい数か月前にヴィータさんやはやてさん達と一緒に暮らしていたからあまり懐かしく感じなくて」

「い、一緒に暮らしてたってどういうことだ?」

「あれですよ、デスイーターの件でヴィータさんの夢の中に入ったじゃないですか。クリスマスまでの数か月間ずっとこの家で暮らしていたんですよ。その時にヴィータさんも居たから何だか変な感じといえますか、何とも言えない感じといえますか」

デスイーター。その名前を聞いてヴィータは理解に及ぶ。カイズは数か月前、ロストログアにより睡眠状態にあったヴィータの記憶の中に入ったことがある。その時に現実世界ではほんの数時間、だがカイズにとっては何か月もの時間をこの家で過ごしていたのだ。

クリスマスイブ、カイズはデスイーターとの死闘を繰り広げた。そしてその日までカイズの衣食住を支えたのが夢の中のヴィータなのだ。

資料としてヴィータはそのことを理解している。だが自分の記憶にない、間違いなく『本物の自分』が体験した出来事は到底納得の域に行きつくことはなかった。

そんなヴィータの反応を見てカイズは慌てふためいたように言葉

を続けた。

「前にも話しましたが夢の中のヴィータさんとは何もなかったですからね！ 俺はいつだっていま目の前にいるヴィータさん一筋ですから信じてください!!」

「……………なんで急にそんなこと言ってるんだよ」

「いや、だってヴィータさん顔が」

「顔？」

顔と言われてヴィータは八神家の窓ガラスを見る。そこには頬を少し膨らましジト目をした自分自身が映し出されていた。自分の姿を実感した瞬間、ヴィータの頬はぼつと赤く染まっていく。

「(だあああああ、あたしはまた夢の中の自分に嫉妬してるのかー！ カイズは相手があたしでもしっかり断ってるし、今はもう結婚だってしてるんだぞー!!)」

負けるどころかもともと勝負にすらなっていない夢の中の自分にいつまで嫉妬心を持っているのだろうか。ヴィータは恥ずかしさのあまり髪で顔を覆い隠してしまう。

そんなヴィータの反応を見るとカイズは背中越しに彼女を抱きしめた。

「大丈夫、大丈夫ですから。俺は本当の心の底からヴィータさんを一番愛していますからね！」

カイズが叫ぶようにそう伝えると、周りからクスクスと声が聞こえる。周りにいる奥様方は「若いっていいわね」や「幸せなそう夫婦ね」など思い思いの感想を述べていた。

周知から羞恥的になっていくことに気づくと、ヴィータはカイズを跳ね除ける。

「分かってる、分かってるからな！ と、とにかく家の中に入るぞ!!」

「待ってくださいヴィータさん。俺の想いはまだこんなものでは——
——!!」

「とにかく家の中に入るぞ！」

ポケットから鍵を取り出すとズカズカと玄関へと向かう。その途中ヴィータはもう一度窓ガラスに映る自分の姿を見た。

そこには頬が燃えるように赤くなった自身の顔。そして見慣れない長い手足と胸に大きな膨らみが映っていた。そう、これこそがヴィータを抱きしめたカイズが通報されない理由だ。

「(変身魔法はあまり得意じゃねえけど。とりあえずは大丈夫みてえだな)」

ヴィータの服装は上は黒の七分袖のタートルネック、下は薄ピンク色の膝下のフレアスカートだ。さらに普段は二つに分けている三つ編みは一つにまとめられ、彼女の腰のあたりでたなびいていた。

「待つてくださいいヴィータさーん！」

彼女に置いて行かれないように、カイズもまた家の中に入っていくのだった。

大好きな貴方の隣で

ヴィータはキャリアカートを置くと、備え付けのソファアームに体を預ける。懐かしの我が家で埃が舞うかと思われたが、必要最低限の掃除は管理局のほうでしてくれたようだ。

「まあそうじゃないと電気やら電話やらの契約からしないといけなし、当然と言えば当然なんだけどな〜」

海鳴市までの道のりはミッドチルダの技術を持つてすればそこまでするでもない。だが短い旅路と問われればそうでもない。ヴィータは移動の疲れを癒すようにぐうーっと体を伸ばす。するとその動きに呼応して彼女の胸がぶるんと揺れた。

そんなヴィータの体つきを見てカイズは不服そうな表情を見せる。

「その変身やつぱり必要なんですかね〜」

「必要に決まってるだろ。あたしが大人モードじゃなかったら、速攻で警察に通報されて視察終了だぞ〜」

「いや、ですが俺は俺のままのヴィータさんを愛してますし」

「それは痛いほどよ〜〜〜っくわかってるよ。けどな、魔法が認識されてるミッドチルダだって誤解されることがあるんだぞ。なら魔法が認識されてないこの世界で、元の姿のあたしとカイズが一緒に暮らしてたら周りにどう思われるかくらいわかるだろ〜」

「……………全次元一のお似合いのカップルですかね?」

「誘拐された子供とロリコンくそ野郎だよ! とにかくこの海鳴じゃ顔見知りだっているんだ。あたしが大人モードになるのは絶対条件だからな!」

「……………うーん。ヴィータさんは元の姿でも年上の立派な美しい大人の女性なんですけどね〜」

カイズの目に自分はどうか映っているのか。ということは今更問いかけてもしかたないだろう。ヴィータはこめかみを抑えると聞こえないように小さくため息をつく。そして海鳴市に向かう一週間前からずっと考えていた言葉を口にした。

「姿が変わったら、カイズのあたしへの愛は薄れるのか」

「えっ!？」

「そうなんだな。結局好きだ何だ言つてカイズはあたしの見た目が好きだけなんだな。ああそうか、見た目が大人になっただけでそんなにあたしのが嫌になつちまうんだな」

ヴィータはわざとらしくソファアに顔を埋める。しばらくしてその隙間からのぞき込むと、気の毒なほどカイズの顔が青ざめていることがわかった。

「ち、ちちち、違いますよヴィータさん。お、おおお、おお、俺はいま目の前にいるヴィータさんが大好きなだけで」

「だけど大人なあたしに魅力感じねえんだろ」

「そ、そんなことありませんよ! ヴィータさんはどんな姿でも魅力的です! それが大人の姿だつて精神年齢が八歳になつたつて変わらないです!!」

大人の姿はまだしも精神年齢が八歳とはどういうことだろうか。そんな疑問が浮かぶが、カイズの取り乱しようにその考えはすぐに頭から抜け落ちていく。流星にこれ以上は気の毒かもしれない顔を上げた。

「じゃああたしが大人モードでいても大丈夫だよな?」

「はい、もちろんです! ヴィータさんはどんな姿でも全次元一かわいいですから!」

カイズは「すみませんでした」とヴィータを後ろから抱きしめる。そんな彼の熱を背中を感じながら、これで当面の問題は解決できたと、ヴィータはちろつと舌を出すのだった。

◆ 「よし、今日はこんなところだろう」

ヴィータは最後の衣類をタンスに詰め込むと額の汗を拭う。カイズのほうも家の点検が終わったようだ。二人はお疲れさまと寄り添うようにソファアに座った。

「ガスも電気も調子の悪そうなところはないですね。そこは流星管理局様々ですね」

「あとは今日の夕飯か。……今日は大変だったし、どこかで出来て

るもの買ってくるかー。あー、でもどこに何があったかあんまり覚えてねえんだよなー」

過去に海鳴市に在住していた頃は、はやてが「皆の衣食住を世話するのは主の役目や」と言って毎日おいしい料理を振る舞ってくれていた。

そのためコンビニや外食に行くことなどほとんどなかった。それははやての体調が悪化し入院してからも変わらない。はやてに代わりシャマルが食事の用意をしてくれるようになったからだ。それに正直あの頃は食べる間、寝る間を惜しんで魔力の収集をしていた。なので記憶に薄いのは当然と言えば当然であった。

ヴィータはソファアールから立ち上がると財布を手に取る。

「こつちにはあんまり帰ってないし、地理も変わってるかも知れないしな。夕飯の買い出しがてらぐるつと回ってみるか」

「了解ですヴィータさん」

カイズも立ち上がると用意しておいた空のマイバッグを掴む。玄関の鍵を閉めると二人は久しぶりの街中へと進んでいった。



買い物を終えスーパーから出るとヴィータはこめかみにしわを寄せる。

「つてか、何でカイズのほうが海鳴に詳しいんだよ」

「それは仕方ないですつて。俺がこの海鳴市に暮らしてたのは結構最近ですし。まあヴィータさんの夢の中での情報ですから、俺が言わなくてもヴィータさんもすぐに思い出せましたつて」

「いやー、自信ねえぞ。現に特売の存在すら忘れてたしな」

「今日がこの世界で言う木曜日だったのでもしかしたらって思ったんですよ。いやー、時間もぴったりでよかったですね」

カイズはそう言うと言いつつと上げる。そこには格安で手に入れた戦利品の数々が入っていた。海鳴市で頼りになりすぎるカイズの姿にヴィータは少し不満顔になる。だがふるふると顔を左右に振るとすぐにその考えを改めた。

「(初めての地だからあたしがしっかりしなきゃって、意気込みすぎて

たのかもな。どっちかに負担がかかるくらいならこれくらいがちょうどよかつたのかもな)」

そう思うと自分が先導しなくちゃいけないという責任感から解放される。それと同時に懐かしの地で頼りになるカイズの横顔がとてつもなくかつこよく見えてきた。

「(いやいや、カイズは元からかつこいいけど、あ、あれ何だろう。この感じ……)」

ミッドチルダで二人暮らしをしてから随分と時間は経っている。だがそれでも仕事先にはなのはを含む知り合いが多くいた。それに困ったことがあればすぐにはやて達が駆けつけてくれたはずだ。

ミッドチルダとは次元の違うこの海鳴市に来て、ヴィータは知らず知らず生まれて初めてののホームシックを体験していたのだ。

そんな自分の心を今のヴィータは理屈で理解できていない。自分でも実感していない寂しいという思いは、彼女のそばにいるカイズを何倍にも魅力的に感じさせていたのだ。

——ドキドキドキドキ。

安心感とは違う。恋心の高鳴りのままにヴィータはカイズの腕に抱きついた。

「ヴィ、ヴィータさん?!」

「大人モードもいいもんだな。こうやってカイズの腕にそのまま抱きつけるしな」

「えっ、あの、そ、そうなんですけど。えっと胸がもの凄く腕に……」「なんだなんだ。初めはあんなに興味がないようなこと言ってたくせに」

「そ、そうなんですけど。でもどんな姿でもヴィータさんはヴィータさんであり最高だなんて思ったら、その……」

「その、何だよ? ほれ、うりうり」

カイズの腕をさらに強く抱きしめ胸を押し当てていく。普段のヴィータなら街中でこんな積極的にはならないだろう。だがここは海鳴市。普段の彼女を知るものなどいるはずもなく、そんな状況が彼女を積極的にさせたのだろう。カイズは頬を赤くしながら困ったよ

うに声を上げる。

「ヴィ、ヴィータさん、ほんとやばいですって」

「うくん、何がやばいかちゃんと言って見ろよ」

次は背中に胸に押し当ててやろう。そんないたずら心か浮かんだ瞬間だ。

「あれ、もしかしてヴィータちゃん？」

馴染みのある懐かしい声。後ろを振り向くとそこには見慣れた顔があった。

その時まで貴方と一緒に

「ふひゃっ?!」

予想外の出来事に思わず声がうわずってしまふ。ヴィータは導かれるように後ろを見るとそこには懐かしい顔があつた。

青いショートカットと柔らかい表情の女性。白衣を着ていなくともわかる。その人は誰よりも八神はやてのことを、そして家族であるヴィータ達を気にかけてくれた恩人なのだから。

「い、石田先生!」

「やっぱりヴィータちゃんなの。しばらく会っていないうちに随分と大人びちゃったわね」

「石田先生は昔のまままで全然お変わりないようですね」

「あらあら昔みたいにもっと砕けた話し方でいいのよ。その方が私も嬉しいから」

「そ、それじゃあ。……久しぶりです石田先生!」

「うん、お久しぶりねヴィータちゃん。え、えっとそれで」

石田先生の視線を追うとカイズにぶつかる。ヴィータは二人を交互に見る。そしてようやく現状を理解した。

「ぴゃ、こ、これはその!」

抱きしめていたカイズの腕を離すと弾かれるように距離をとる。だが彼の腕に胸を押しつけている現場はぼつちり見られてしまっただろう。

ヴィータは頭の先まで赤くなると、左右の指を絡めてもじもじした。

「そ、そのこれは、えっと、変な開放感があつたというか、少し困らせてやろうかというか、その、あう」

「もしかしてこの人がはやてちゃんの手紙に書いてあつた旦那さん?」

そう問われるとカイズはぺこりと頭を下げる。

「はい。不肖の身ながらヴィータさんと結婚させていただきましたカイズです。石田先生、お噂はかねがね聞いています」

「あらあら悪い噂じゃないといいけど」

「そんなことありませんよ！ はやてさんが病氣と闘ってこられたのは、何よりもずっと側にいてくれた石田先生のおかげだと思っす」

「手紙にあつたように本当に真面目な人なのね。ヴィータちゃん、本当にいい人見つけたみたいね」

話を振られると二人の視線が集まる。ヴィータは恥ずかしそうに俯くとつぶやくように「……はい」と言葉にした。

石田先生はそれだけ聞くと満足そうな笑みを浮かべる。そしてカイズの荷物を見て思い出したように声を上げた。

「さって私もご飯を買って病院に戻るわね。でもヴィータちゃんの幸せそうな顔を見て本当によかったわ」

「——！！ 今度ははやてと皆で遊びに来るから、だからその時は」
「ええ、その時はまたゆっくりお話ししましょう。……カイズ君、ヴィータちゃんのことすっかりよろしくね」

「はいっ！ この命に代えても！！」

ビシッと敬礼する姿を見て石田先生は「あはは」と頬を掻く。だがカイズのノータイムの反応を見て心底安心したようだ。

「また時間が出来たときにはやてちゃんたちの話も聞かせね。じゃあ今日はこんなところで」

「石田先生も仕事しすぎて体壊さないでくれよ！」
「そうね、体調管理はしっかりするわ。それじゃあお二人さんまたね」

石田先生は手を振るとスパーの中に入っていく。カイズはその後ろ姿を見届けると「いい先生ですね」と口にする。

ヴィータは「そうだな」と短いながらも力強い肯定の言葉を口にす。そしてカイズの空いているほうの手を握りしめた。

「それじゃあ帰るか、あたしたちの家に！」

「……………はいっ！」

◇ 二人は手を繋ぐと真っ直ぐ帰路につくのだった。

「(ヴィータさんの夢の中で何度か手伝いをしたんだけどな)」

慣れない文明での料理やその他の家事は彼が思っているよりも疲れが溜まったようだ。先にお風呂から出たカイズはベッドの上で横になっていた。

「しかしまあ。……怒られはしないだろうけど、何かちよつと背徳感があるよな」

背徳感。その単語を口にする理由は今横になっているベッドにある。八神家は二階建ての広い家であり、ヴォルケンリッターに割り当てられるほど多くの部屋数が存在していた。

だがいくら部屋があろうともカイズとヴィータは新婚ほやほやだ。今までがそうであったように八神家でも当然二人で寝る予定だ。そして二人で寝るなら一番広いベッドを使うのは道理であろう。

「……昔はここでヴィータさんとはやてさんが一緒に寝てたんだよな」

あの頃はやてはヴィータのことを、時には友達、時には妹、そして時には娘のよう慈しむように節していた。

そんな二人はこのツインベッドで毎晩共に就寝しており、大それた言い方をすれば一種の聖域といっても過言ではないかも知れない。

「果たしてそんなベッドで俺が寝てしまってもいいものなのだろうか」

もしかしたら自分の気にしすぎなのかもしれない。いや初めはカイズ自身そこまで考えてはいなかった。だがヴィータを待つ空白の時間が余計な思考をかき立ててしまったのだ。

——コンコン！

「おーい、入るぞー」

部屋の扉がノックされるとヴィータが寝室に入ってくる。その姿を見てカイズはほんの少しだけ落ち着きを取り戻せた気がした。

「寝るときは流石にいつも通りなんですな」

「まあ魔力消費は大したことはねえけど、休めるときには休んでおかねえとな」

そこには大人の姿でなく見慣れた少女の見た目をしたヴィータがいた。海鳴市についてからずっと大人モードのヴィータと接してい

たからか、見慣れていたその姿に体の緊張が解けた気がする。

だが普段のヴィータを見てそんな態度をとっては変な誤解をされるかもしれない。カイズは心境を気取られないうちに話を続けた。

「休める時って言えば、家に帰ってきたら変身を解いてもいいんじゃないですか？」

「いや、それは駄目だ。道路越しに見られるかもしれないねえし、急な訪問で変身し忘れることもあるかもしれない。とにかく細心の注意を払って常に大人モードでいる気でいねえとな」

「そういうものですか」

こと今回の任務においてヴィータは慎重すぎるほど慎重だ。魔法の概念がないこの時空において、ほんの少しぐらい普段のヴィータを見られてもリカバリは利くと正直思っていた。そんなカイズの考えがほんの少しだけ顔にでてしまったのだろう。ヴィータは少しだけむっとした顔をする。

「とにかく今回の任務中はそれくらい警戒してていいんだよ。だってよ……………」

そこで言葉を切るとヴィータはズンズンとベッドの方に進んでくる。そしてその勢いのままにカイズに口づけする。唇と唇がくっつくだけのソフトなキス。それを終わるとヴィータはうらめしそうにカイズを見た。

「カイズと一緒に暮らせるこの二ヶ月を最後まで楽しみたいんだ。――おやすみ!!」

ヴィータは毛布を掛けるとそのままベッドに入ってしまった。だがチラリと見える耳が真っ赤になっていることがすぐに理解できた。

「……………そうですね。俺だって、俺だってこの二ヶ月全力で楽しみたいです!!」

自分との時間を楽しむために最善をとってくれていた。カイズはその想いを胸一杯に受け取ると、ヴィータを後ろから抱きしめた。

「ありがとうございますございますヴィータさん。でも、いや、だからこそヴィータさんも気を張りすぎないでくださいね。…………俺も全力でヴィータさんの支えになりますから」

「……………おうっ」

ヴィータは小さな声で肯定するとカイズの方に向き直り、そのままもう一度ソフトな口づけを重ねた。そして互いに目を合わせると二人してはにかむように笑みを浮かべた。

「おやすみなさいヴィータさん」

「おやすみカイズ」

そう挨拶を交わすとドツと疲労がのし掛かってくるのが分かる。久しぶりの異世界で疲れた二人はそのままぐっすりと眠りにつくのだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編3
焦る気持ちと空回りしない想い
全くうちの旦那様は



カイズとヴィータが海鳴市に来てすでに一週間ほどの時間が経っていた。引越しの荷解きも家のチェックも終えて、今日も今日とて二人は海鳴の町並みを視察していた。

「くうくう、それにしても平和だなくく」

教導の仕事もなく、事務の仕事も最低限しかないとためか、海鳴市に来てからヴィータはやたら体調が良かった。さらに懐かしの場所にいるからか、心は不思議な幸福感にいつも包まれていた。

ぽかぽかの日溜まりを浴びながらヴィータはぐううーと体を伸ばす。すると彼女の胸の起伏は重力に逆らうようにグイッと上を向いた。

シグナムやフェイト以下、なのはやはやて以上に盛ったその胸は今日も変わらず大きく揺れていた。

そんなヴィータの行動を見ると、カイズはあたりにくまなく視線を向ける。

「どうしたんだカイズ？」

「駄目ですよヴィータさん、そんな挑発するような行動をしては！どこで誰が見てるかわからないですよ！」

「なんだよそりや？」

「今のヴィータさんは一般人でも理解しやすい魅力を振りまいています！こんな美女が海鳴に住んでるってわかったら、市の全員が求婚しにきますよ！」

カイズはヴィータの両肩を掴むと「わかってるですか！」とガクガク揺らしてくる。冗談のような言い分だが、その声のトーンがあまり真剣すぎてヴィータは反応に困ってしまった。

「べ、別にあたしは普通にしてるだけだけどなあ」

「それだけヴィータさんが魅力的だったことですよ！ 昨日の買い物中だつてみんなチラチラとヴィータさんのこと見ていたの気づいてなかったんですか!？」

「…………いや、全然」

カイズは至つてまじめな顔をしているが本当に覚えがなかった。流石にそれは気にしすぎだろうとヴィータは口にする。だがカイズは聞き耳をもたず周囲に警戒をし続けていった。

「…………はあ、全くうちに旦那様は」

ヴィータは心の中で小さなため息をつく。だがそんなちよつと非常識な彼のこと可愛く見えてしまうのは、きっと彼にズブズブという証拠なのだろう。

ヴィータはきよろきよろと周りを見る。そして誰もいなことを確認すると彼の腕に抱きついていった。

ムギユと擬音が聞こえそうなほどふくよかな胸がカイズの腕に押しつけられる。カイズはその胸の柔らかさに自然と口角があがつてしまう。

「あ、あのヴィータさん」

「誰が見てたつて関係ねえよ。あたしの心と体はカイズのものなんだから。だからちゃんとあたしのことだけ見てろよな」

「……………ヴィータさん!!」

カイズはヴィータの手から離れると彼女を力強く抱きしめる。先ほどの一言で完全に機嫌が治ったようだ。

そんなカイズのことをたまにチョロいと思うこともある。だがこんな関係になるまでに二人には多くの試練と気持ちの行き違いがあった。

だからこそ今がある。とヴィータは驕ることも気を張ることもなく良好な夫婦関係を築けていると核心していた。

「……………んっ」

空気にほだされてヴィータはくいつと唇を突き出す。

——カサッ。

「んっ!!」

本当に小さな音がヴィータの耳に届くとバツと後ろに振り返る。

「あいた！」

カイズは物音に気づかなかつたろう。ヴィータの側頭部と激突すると困惑し目を白黒させた。だがそんなカイズに今は意識を向けられない。ヴィータは緊張の面もちのまま茂みの先を見る。

「（確かにあたしは周りを確認したぞ）」

石田先生と出会ったあの時とは違う。ヴィータは確かに一度あたりを配ってからキスの体勢に入ったのだ。

主な仕事が教導とは言え、彼女は多くの実戦に身を置いてきた。そんな彼女に今の今まで気配を悟らせなかった人物がすぐそこにいる。ヴィータの体に緊張が走る。そして気配に気づけなかったカイズは未だに状況についてこれずにいた。

——ガサガサガサ！

今度は二人に気づいてもらうかのように大きな音をあげる。そしてその人物は茂みの中から出てきた。

「す、すまない。覗き見をするつもりはなくて、本当はそのまま気づかれないように出て行くつもりだったんだが。……逆に気を使わせてしまったみたいだな」

そう言葉にするのは黒のジャージに身を包んだ見た目三十代前後の黒髪の男性だった。運動でもしていたのか額からは汗を流しており見た目はどことなくカイズに似ていた。

「——ツツ！」

「ヴィータさん!!」

同時に気づくとカイズはヴィータをかばうように前にでる。だがそれも仕方のないことだろう。二人の視線の先には二振りの日本刀が握られていたのだから。たとえそれが模擬刀だろうとたちの悪い冗談だ。二人は拳を握り込むと臨戦態勢をとる。

黒髪の男は困ったように目を細める。そして迷わず二振りの刀、小太刀二刀を茂みに投げ捨てた。さらに両手をあげると落ち着き払った声をあげる。

「……俺の名前は高町恭也、この海鳴市で翠屋という喫茶店を営んで

いるものの家族です」

その名前と店名を聞いて二人は目を丸くした。

「あれ、ヴィータさん高町って」

「あつ、ああっー！ もしかしてなのはの兄ちゃんか!？」

「なのはのって、君は?。」

三人共々頭に疑問符を浮かべるとしばらくの間困惑し続ける。だが彼に敵意がないことがわかると、とりあえずはと肩の荷をおろしていくのだった。

高町恭也



海鳴商店街に店を構える喫茶店翠屋。カイズは足を踏み入れると店内を見渡した。

「ヴィータさんの夢の中でこのデザートは食べたことあるけど、店内に来たのは初めてだな」

長年経営している店らしい年季具合が所々に見られる。しかしそれはマイナス要素でなく、店内の雰囲気作りに一役かっていた。そう見せられるのは絶え間ない経営努力の賜物だろう。

その一つのテーブルにヴィータとカイズは案内される。そして案内した高町恭也は深々と頭を下げた。

「この度は大変ご迷惑をお掛けしました」

「いえいえ、あたしが勝手に勘違いしただけでそんな頭を下げてもらうことじゃないですよ」

「いえ。あんなものを持って姿を現せば警戒しますよ。……完全に気配を消していたつもりでしたけどよく気づけましたね」

「そんなたまたまですって」

ヴィータと恭也は互いにペコペコと頭を下げる。そんな無限謝罪が続く中、喫茶みどりやの店長兼パティシエである高町桃子が顔を出した。見た目三十代にしか見えない彼女は、あの高町なのは、そして目の前にいる恭也の母親である。

桃子は銀のトレイに載せたショートケーキとコーヒーをカイズとヴィータの座るテーブルに置いた。

「うちの恭也がごめんなさいね。これよかったですら二人で食べてね」

「そ、そんなちゃんとお代は払いますよ」

「これは迷惑料みたいなものだから気にしないで、お金はちゃんと恭也からもらっておくから」

「はい。そういうわけで遠慮なくいただきます」

と言って二人に促す。今の会話の流れのどこに遠慮なくいただけの要素があるのだろうか。だが恭也と桃子のにこやかな笑みに充て

られると「ありがとうございます」と二人はフォークを持ちケーキを口に運んだ。

「——ッ!?!」

食べた瞬間ふんわりとした生地が口の中で溶けていく。さらにトッピングの生クリームは濃厚、いやそれを飛び越え特濃と言っていないだろう。そのバラバラな個性が組み合わせることによりとんでもない深みのある味わいを作り出していた。

「ヴィータさん、これ物凄くおいし——」

「んんっ——!!」

カイズより大きな一口を食べたヴィータは悶えるように空いている手足をジタバタさせる。男のカイズですら思わず声に出すほどだ。もともと甘いものが好きなヴィータが喜ばないはずがなかった。

ヴィータはキラキラと目を輝かせると桃子のほうを見た。

「桃子さんすっごくおいしいです!」

「あらあらありがとうねヴィータちゃん」

「それに恭也さんもありがとうございます。もともとどちらが悪いってわけでもないのに……」

「それはもう言いつこなしと言うことで。……そうだ、こちらにはまだ滞在しているんですか?」

「はい、まだ当分海鳴にはいる予定です」

「そしたら今度なのは話でも聞かせてください。あつちでの仕事が忙しいのか、やりがいがあるのかあまり帰ってくるのがないので」

「——はいっ!」

ヴィータの快諾を得ると恭也は薄っすらと微笑んで見せる。と同時に店の入り口から来店を告げる鈴の音が鳴り響いた。どうやら団体のお客のようだ。

桃子は「いらっしやいませー」と小走りで厨房に向かう。恭也はその後姿を目で追いながら、もう一度今度は浅く頭を下げた。

「それではゆっくりしていつてください。俺も少し厨房のほうを手伝ってきます」

「はい、ではまた近いうちに」

「はい、よろしく願います」

恭也はそのまま厨房の奥に入っていく。そんな二人のやり取りを見終えると、カイズは再びケーキを口に運ぶ。今まで味わったなかでこのケーキは最上位に入るものだ。そんなケーキを心の底から美味しいと思いつつも、彼の中では小さなモヤモヤが渦巻いていた。

別段ヴィータと恭也が仲睦まじく話していたからではない。ヴィータは終始敬語だったし、恭也の薬指には銀色の指輪が見えたからそこは全く心配ではない。

表面ではヴィータにバレないように笑みを作る。だが心の中で深いため息をついた。

「この数年、経験と訓練を重ねて強くなったつもりだけど。……俺は恭也さんに全く気づけなかった」

海鳴市にやってきた平和ボケしていたから仕方がない。そう思えばどれだけ楽であろうか。だが現実としてヴィータは恭也の存在に気づきいち早く反応していた。

ヴィータを守る男になりたい。だが今回のことで残酷なほどの差が浮き彫りになってしまった。

「(ヴィータさんと楽しく過ごす、海鳴市の視察もする。……そして自己鍛錬もしっかりしていかないとない)」

表情には決して出さないように心の中で気持ちを新たにす。カイズはケーキを口に運ぶ。そして失礼のないようにしっかりと味わい楽しんでいくのだった。

その時俺に出来ること

「おら、行くぞカイズ！」

廃墟の市街地にヴィータの声がこだまする。地上を走っていたカイズはそれが聞こえると同時に三方壁に囲まれた狭い路地裏へと飛び込む。そしてベルカ式ミッド式の二振一对のデバイスを構えた。

「イノセントハート、対空中防御」

『すでに構築中です。2、1、アクション！』

イノセントハートはベルカ式の魔法弾を空中に設置。そして視認できない形でミッド式のバインドを設置する。

「ヴィータさんは直線的な動きが多い。ここで待ちかまえてれば後の先が狙えるはずだ」

来るならいつでも来い。一周の瞬きもしないぞと空を仰ぎ見る。

ドン、ドン、ドン！

「……んっ？」

何かが碎かれる音がカイズの耳に届く。

ドンッ、ドンッ！ ドドンッ！

その破碎音はほんの数秒で耳をつんざくほどに変わる。そしてコンマ数秒遅れてカイズは自分の失態に気づいた。

「おっせえっ！」

最後の壁抜きをするとラケーテンハンマーを構えたヴィータが一気に迫る。カイズはベルカ式の黒刀を咄嗟に構える。

「(この一撃を捌いて罫がある空中にすぐに逃げて)」

「あめえっ！」

そんな考えなどお見通しだ。そう言わんばかりにグラーファイゼンのブースターがグイッと横に向く。罅迫り合いなどするまでもない。ヴィータは地面スレスレまで体を傾けると、流れるようにカイズの背後をとる。

「終わりだー!!」

ラケーテンハンマーのドリル部分がカイズの後頭部に振り下ろされる。その一撃はカイズの魔力障壁を物ともせず一瞬で打ち砕いて

いった。

——ピタッ!!

「お、おおおお!」

攻撃は寸止めされる。だがその衝撃は強烈な風を起こし、カイズは体勢を維持できずそのまま尻餅をついてしまう。ヴィータはカイズの鼻先にグラーフアイゼンを突きつける。そしてニツと誇らしげな笑みを浮かべた。

「これであたしの五戦五勝、今日はこんなところだろ」

「い、いえ、まだまだ、あ、つつ」

無理矢理立ち上がろうとするが、その場で足がもつれてしまう。ヴィータはまるでそれが分かっていたかのように綺麗に抱き寄せた。「もう魔力もからつからだろ。詰め込めばいいもんじゃないつてのは、今までの訓練でよくわかってるだろ」

「……………はい、今日はここまでですね」

「おう、分かればいいんだよ」

カイズはヴィータの腕から離れるとデバイスを収納する。そしてきちつと踵を揃えたとその場で姿勢を正した。

「ありがとうございます。ヴィータ教官!」

「おう、お疲れさま」

周りに他の訓練生がいなくてメリハリはしっかりとつけておく。カイズは最後に綺麗な敬礼をする。……………そしてそのまま倒れるように座り込んでしまった。

「あつ、す、すみませんヴィータさん」

「そんな気にすんなよ。正直終わりの挨拶が出来ただけでも上出来だと思っぞ」

「そ、そうでしょうか」

「昔のカイズなら模擬戦二回だってもってねえよ。ほんと随分と成長したな」

「そうなら……………嬉しいです」

何もカイズに気を使っている訳ではない。ヴィータは順調に成長しているカイズに素直に喜んでいた。彼女とのつき合いは長い。嘘

偽りないその言葉は、そうであるが故にカイズの心に重くのし掛かった。

「す、すみませんヴィータさん。ちょっとしばらく動けそうになくて」「どっちにしても今日はあたしが夕飯当番だしな。自分のペースでゆっくり戻ってこいよなー」

「……………はい、わかりました」

「お、おう？」

カイズの態度にヴィータは疑問符を浮かべる。だがそれ以上突っ込むことはなく、八神家の一室から出入りできる模擬戦場から離れていった。

ヴィータが完全にいなくなったと分かるとカイズは大の字に寝ころんだ。

「イノセントハート、この模擬戦の率直な感想を聞かせてくれ」

『レベルも経験も何もかもが足りません。相手になると思うほうがおこがましいと思います』

「……………OK、最高の評価だよ」

人工的に作られた雲一つない青空を見つめる。カイズはギュツと拳を握りこむと本当に小さくため息をついた。

『ただしマイクリエイターの言うようにマスターの実力は確実についています。落ち込むほどのことではないと思いますが？』

「まあ二人がそう言うんだからそうなんだろうな。……………うん」

『さてマスターに答えたところで、今度はこちらの疑問に答えてください。……………マスターはどうしてこの模擬戦にマイクリエイターのデータを使用しなかったのですか？ 私の中にはマイクリエイターのデータが膨大に入っています。最後の一撃も教科書通りの対応を要求されていなければ、予測可能でありましたが？』

淡々とした電子音のはずだが、どことなく怒っているよう聞こえる。それはイノセントハートの思いか、カイズ自身がそう思い込んでいるのか、もしくはその両方であろう。

「……………公園で恭也さんに会ったときに思ったんだ。実戦は模擬戦のように何度もチャレンジできるわけじゃない。ほんの少しの判断ミス

が最悪の結果を招くことがあるって」

『それは当然です。だからこそ私とマスターは基礎と知識を学び、多くの模擬戦を繰り返す。それが最善の道だと思われます』

「……分かってる、分かってるんだ。今俺が求めるものは一足飛びの向こう見ず、そんなことをしても自力には繋がらないし、大きな事故を招く結果にだってなるかもしれない」

カイズは足に力を籠めるとその場から立ち上がる。まだ少し体は怠いが歩けないほどではないようだ。

「俺は絶対に死ねない。俺の命は俺だけのものじゃない。ヴィータさんの管理者権限だってこの命に重なっているんだ」

それは結婚式の前にはやて達に示した答え。ヴィータに悲しい顔など絶対にして欲しくない。敵わないと分かれば何が何でも絶対に逃げる。その想いは今でも変わることはない。

「でもたまに思うんだ。もしその絶体絶命の時にヴィータさんが一緒に居たら……その時俺は逃げることでしか出来ないのかなって」

ヴィータとの実力差を考えれば逃げるのが最善だろう。自分がいては確実に足枷になってしまう。

「だが、だとしても俺が逃げてしまつて、その後にヴィータさんが大怪我をすることがあつたら。……その時俺は逃げたことを後悔しないでいられるだろうか。いや危険な相手を目の前にしてヴィータさんを置いて逃げ出すことができるかだつて正直怪しいと思う」

『だから個人のデータで対策をせず、自身の知識と経験のみで模擬戦を行ったんですね』

「そうだ。……まあ結果は散々だったけどな」

『それに関してはマスター一人が落ち込むことはありません。私の情報処理と知識と対応力不足も顕著ですからね』

「イ、イノセントハート?」

『……共に強くなる道を模索しましょう。お互いがマイクリエイターに応えるため』

「——ああ、そうだな!」

カイズは両頬をパンツと叩くと自身に活を入れる。出たところ勝

負では駄目。確実に堅実に、そうであっても着実にヴィータに追いつくために様々な道を模索する。

カイズは気持ちを新たにしシユミレーションルームから退出していくのだった。



「ありがとうございましたー」

店員の声に見送られるとヴィータはコンビニから出る。

「マイバックを忘れて卵だけなのにビニール袋買うことになっちゃまったけど。……まあビニールはビニールで生ゴミの処理に使うからいいか」

そんな家庭的なことを考えているとヴィータは自然と頬を緩ませる。

「なんか新婚みたいだな」

いや自分たちは間違いなく新婚なのだが、改めて口にする顔が赤くなってしまう。ヴィータは両頬に自分の手を添えると恥ずかしそうに顔を左右に振った。

その時ヴィータの目には今自分が歩いている海鳴市の町並みが映った。夕暮れに照らされた我が故郷。都市開発が進みながらもどこか懐かしさを覚える町並みは変わることなく。きつとこの町は古きと新しきが共存してこれから発展していくのだろう。

「発展していくか。……カイズのやつ大丈夫かな」

本人は隠しているつもりであろうが、彼の様子はどこかおかしかった。本格的に気づいたのは模擬戦をしていた時だが、よくよく考えればみどりやでもどこか余所余所しい気がした。

「まあカイズはまだ発展途中だしな。昔の六課のメンバーみたいに悩むこともあるよな」

だが、だとしても彼は大きな過ちを起こすことはないだろう。それはヴィータが誰よりも理解していた。

「あいつはあたしを悲しませるようなことはしない。それでも、もし何かの弾みであいつが間違えることがあったら。……ふふ、その時はあたしがしっかり正してやらねえとな」

どちらにしてもまずは栄養補給だ。レパートリーは少ないが花嫁修業としてはやてから教わった親子丼を振る舞おう。ヴィータは卵の入ったビニール袋を握りしめると、料理手順を頭の中で復唱していくのだった。

◆ 夕飯とお風呂をすませ二人同じ床につく。やはりカイズは何か考えているようだ。だが考えているだけで悩んでいるようではないとわかると、ヴィータは安心して眠る準備が出来た。

明日はどこに行こうか、何をしようか。いや仕事でこの海鳴市に来ているのであまりのんきなことばかり言っていられない。だがそう思ってしまうほど、この街は平和で何かが起こる予兆すらなかった。

「すうー、すうー」

隣から旦那様の規則正しい寝息が聞こえる。普段なら寝る間にしばらく話をしているが、模擬戦の連続で疲れてしまったのだろう。そんな彼の寝顔を見ながらヴィータは頬を緩ませた。

「……本当に幸せだな」

心の奥底から自然と出た嘘偽りない言葉。はやて達と海鳴市に住んでいたときも、ミッドチルダに行き機動六課で皆と過ごしていたときも、新しい実家でたまの休みに子供達にストライクアーツの指南をしていたときも確かに幸せだった。

もちろん幸せの価値など比べるものではない。だがカイズがずっと隣にいてくれる今この時この瞬間が一番幸せだ。それはこの海鳴市に帰って来てから、何かに後押しされるかのように、強く大きな想いに膨らんでいた。

「……………んっ」

溢れ出る想いを抑えきれず彼の頬に軽く口づけをする。そして「おやすみカイズ」と小さく伝え瞼を閉じていくのだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編4

ここは湯の町海鳴市リターンズ

温泉への誘い

八神家のリビング。カイズはソファにだらしなく体を預ける。

するとパタパタと階段を下りてくる音が耳に届いた。その音の主は大きな胸を揺らしリビングまで来ると、カイズの隣に飛び込むように座り込んだ。

「あー、やつと終わったー」

「お疲れさまですヴィータさん。どうでした定期連絡は？」

「特に異常なし。半分くらいはなのはどの世間話みたいになってたなー。特になのはの兄ちゃんに会ったって言ったら話が盛り上がってよ」

ヴィータはそこまで話すとうーんと体を伸ばす。そしてこりをほぐすように肩を回した。

「兄ちゃんがたまには帰ってこいって言ったのを伝えたら、お兄ちゃんのほうが家に帰ってないのにーってぶんすかしてっただけ」

「……恭也さん、明らかにただ者じゃなかったですもんね」

公園で見た恭也のことを思い出す。自分と同じ二刀流の黒髪、だが自分とは比べものにならないほど死線と経験を重ねたのだろう。魔法がないこの世界の住人とは思えないほどの存在感が彼にはあった。そんなことを考え出すと、カイズの額にコツンと軽い衝撃が走る。ハツとして意識を戻すと、目の前のヴィータはふくれっ面をしていた。

「まーた難しいこと考えてるだろう。あんまり根詰めすぎるなよ。あたしがきつちりメニューを組んで、カイズはそれを毎日欠かさずそれをこなしてる。カイズはちゃんと強くなってるんだから」

「はい、ありがとうございますー！」

上を見てばかりではいつか大切な場面で足下をすくわれてしまう。それだけは絶対に駄目だ。カイズは落ち込む気持ちに整理をつける

と深々と頭を下げた。

「これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします」

「おお、任しとけ！」

ヴィータはふくれっ面を直すと自身の胸の中に手を突っ込む。慣れない胸のふくよかさに苦戦しながら、しばらくまさぐるとグラーフアイゼンを取り出した。

「えっと、次の指令はな。街の方は結構回ってから、郊外の方も少し視察して欲しいらしいな」

「郊外だと地理は疎いので少し大変そうですね」

「あたしもそうだな。はやての脚も昔は悪かったし、郊外にはあまりいかなかったからなー。そこでだ」

グラーフアイゼンを軽く握ると液晶画面が表示される。ヴィータはそこに映る『露天風呂』という文字を指さした。

「なのはがいろいろ手回ししてくれたみたいだよ。……明日は二人で温泉に行くぞー！」

◇ ヴィータはそう言うとニツと笑みを浮かべた。

次の日の朝。カイズとヴィータはリビングで持ち物を確認する。そしてお互いにデバイスを握りしめると、まばゆい光が体を包み込む。そして二人は専用のバリアジャケットに身を包んだ。

「いよっし、準備万端。あとは周りから見えないようにするだけだな」
「……はい、そうですね」

「お、おいどうした？　なんか元気ねえみたいけど??」

「い、いえ、どちらかというど元氣になりそうで困って、いやいや何でもないです。行きましようヴィータさん！」

「お、おう、体調が悪くなったらちやんと言えよな」

ヴィータはそう言うど魔石を一つ取り出す。カイズも慌てたようにそれを取り出した。

「それじゃあ飛行許可も出てるし、姿を透明にしてひとつ飛びするか。あたしが先行するから何かあったらすぐに言えよ」

「はい、ヴィータさん」

お互い魔石を起動するとそれに込められた透明の呪文が発動される。

「(これで周りからしたら透明にはなっているはずだ)」

だが透明同士視認できないと事故の元であり、二人の間では目視することが可能である。

「(でも正直見えない方が目に毒じゃなかったんだよな)」

カイズはバリアジャケット姿のヴィータを見る。それは普段彼が知っているものとは些か違っていた。

大人モードの姿に合わせてヴィータのバリアジャケットは少し改良されている。まず第一に胸部だ。平和な海鳴市だからか、それとも以前話されたバリアジャケットの可能性を模索するためだろうか。理由はわからないが胸の谷間部分に装甲はなく、気を抜くと指を突っ込んでしまいそうなほど見事な光景が出来上がっていた。

さらにスカートは丈も違う。いつもは脚をすっぽり覆い隠しているそれは、膝上のタイトスカートだ。それらの何が困るかと言うと、今まさに目のやり場に困っていた。

郊外に向かうための二人はすでに飛行移動している。普段はその長いスカートから後ろを飛んでいても下着が見えることはなかった。だが腰マントがあるとはいえ、短くなったそのスカートからは現在進行形でチラチラとピンク色のそれが顔を覗かせていた。

ずっとロングスカートで慣れているヴィータはそんなことなどつゆ知らずなのだろう。

「(これは言うべきなのだろうか。……いやこんな状態今だけだし、俺が耐えてればいいだけか)」

ヴィータに悪いと思いい視線を逸らしたくなる。だが魔法がないこの世界で何かに激突してしまつてはそれこそ大問題だ。

カイズはバリアジャケットの下腹部がギチギチとキツくなるのを感じながら、天国と地獄を交互に味わっていくのだった。

◇

現地に着いてからは滞りなく視察が行われる。しかし特に問題はなくものの二時間ほどで今日の仕事を終えてしまった。カイズは

木々から差し込む光を浴びると欠伸をかみ殺した。

「まあもともと街の方でも何一つ問題は起きてないしな。……ほん」と今回の仕事を回してくれた高町教導官には感謝しないとな)」

ここは文明こそ遅れているが、だからこそ居心地がよかった。過去この街で次元を揺るがすほどの事件が次々起こったなど微塵も感じさせないほどにだ。

「俺はこの次元の出身じゃないけど。……もしかしたらこんなのにびりした人生もあったのかな」

そんなことを想いながら探索記録を書き込む。それと同時に林の奥からヴィータが姿を現した。

「そっちの様子はどうか？」

「問題なしです。ヴィータさんのほうはどうでしたか？」

「魔力の痕跡も他の時空から干渉を受けたような様子も一切なし。

……平和そのもの、良いことだよな」

「はい、良いことですね」

二人は目を合わせるとどちらからかでもなく手を握りあう。そして小さく笑みを浮かべるとバリアジャケットを解除した。

「それじゃあ仕事も終わったし、露天風呂に向かうか」

「俺、露天風呂って全然馴染みないんですけど。……ようは外でお風呂に入るってことですよ。ルーテシアさんの施設でそういうのがあるとは話だけは聞いていますけど。……大丈夫なんですか？」

「まあそれはこの世界の暗黙の了解というか概ね大丈夫なはずだぞー。もちろん犯罪者がいないとは言いい切れねえけどな」

「ヴィータさん！」

カイズが何かを言おうとした瞬間、ヴィータは彼の顔の前にバツと掌をだし言葉を制止する。

「入浴中は周囲の警戒をグラーフアイゼンに任せるから問題ねえよ。……それに何かあったらカイズがあたしを守ってくれるんだろ？」

「何かあったらって、えっ、でも今回は公共の施設ですよね？」

カイズがそう言うのとヴィータが「あつ！」と思いついたように声を漏らす。

「いやそれがよ。あたしの大人モードの方が一の不備を気にしてか、もしくは単に変に気を回したのか。……なのはのやつが家族風呂で予約してたんだよな」

そう言っつてヴェータは「あはははは」と申し訳なさそうに頬を掻いた。

二人で幸せになる場所

「やっぱ改めて見ると、浮くのって意味わかんねえよな」

ヴィータはお湯で浮かぶ自分の胸を見て感想を漏らす。八神家の面々でもその様子は見ているが、広いお風呂で見るとまた格別であった。ヴィータは自身の胸を突きながら、今更になって少しやりすぎたかなと思いはじめ。

「初めは平均くらいかなーって思ってたんだけどな。あたしの周りがおっぱい魔神ばかりなのがいけねえよな、うん」

これはあくまで周辺で平均を取った結果だ。だから自分は悪くないとその場で納得していった。

「あー、それにしてもいい景色だよな。紅葉の季節ならそれこそ絶景なんだろうな」

またその季節になったらカイズと遊びに来てもいいかもしれない。そんなことを思いながらも未だにこないカイズが少し心配になる。

ガラガラガラ。

『男』の暖簾がついたガラス戸が開く音が聞こえる。ヴィータが視線を向けると当然ながらカイズの姿があった。彼はあたりをキョロキョロ見渡すと「おおおー」と声を漏らす。

「ほ、本当に外なんですな。……凄文化ですね」

「まあ困いはちゃんとしてるし、周りの斜面はかなり厳しいからなー。それよりカイズも早く来いよ、風邪引いちまうぞー」

「そ、それもそうですね。では」

何度もかけ湯をして汚れを落とすとそのままヴィータの隣に座る。普段使っている八神家のお風呂は一般的な家庭より大きいだろう。だがもちろん成人男性のカイズがいて横並び出来るほどの大きさではない。

不自由なく隣合わせになれる湯船に浸かると、ヴィータはぼすんとカイズの肩に頭を預けた。

「こういうのも結構いいもんだろう」

「そうですね。……いえ、この露天風呂もそうですね、やっぱり広

「いいいいいものですね」

「カイズ？」

きよとんとした顔でカイズの横顔をのぞき込む。カイズは申し訳なそうに首の後ろをこすった。

「家の話ですよ。正直俺、家の広さにこだわりがないどころか、最低限住めればそれでいいって思っていました。でも違うんですね。不都合を感じないのと快適って言うのは真逆のようでそうでもないと言いますか。あー、ちよつと待ってください。少し考えをまとめます」

カイズは前髪に手をおくとオールバックにするように後ろへ流す。彼にとつての思考のポーズが、ヴィータには色っぽく見えてしまい少しドキドキしてしまう。

「八神家で暮らして。大きなソファアールで二人より沿ったり、ベッドで何も気にせず寝返りを打てたり、二人でゆっくり湯船に浸かったり。……この海鳴市に来てようやく実感できたんです。ヴィータさんが家という存在に拘っている理由が。家具は、家は、そこに住む人を幸せにしてくれる存在だったんですね」

「……カイズ」

「今まで本当に他意なく、ヴィータさんが望む家ならそれでいいと思っていました。でもそれじゃあ二人で幸せになれる家じゃないですもんね。……これからは俺もすっかり考えていきます。これまでもみませんでした」

カイズは反省したように頭を下げる。そんな彼を見て、どんな声をかけるべきか困惑してしまう。

「(真剣過ぎてもあれだし、茶化し過ぎてもあれだし。……おっ、そうだ!)」

ヴィータは俯いている彼の正面につくと、お湯に浮いている二つの固まりでその顔をぐいと押し上げていった。

「ぶっ、ぶっは、ヴィ、ヴィータさん!」

谷間に突然包まれたカイズは目を白黒させる。ヴィータはいたずらっ子のようにちろつと舌を出した。

「そんなに深刻に謝る必要なんてねえよ。カイズなら遅かれ早かれ気

づいてくれるって信じてたからな。……って、おおおっ！」

お湯の中で先ほどまで平常サイズだったそれが、物凄い勢いで膨張していく。今度はヴィータが目を白黒させる番だった。

「い、いきなりどうしたんだよー！」

「いきなりどうしたはないでしょう！ 真面目な話をしてたと思ったらいきなり胸でそんな。……ヴィータさん！」

カイズはガバツと両手を広げるとヴィータを抱きしめようとする。だがその両手をヴィータはがっしりと抑えつけた。

——グツ、ググググツ！

その力は拮抗する。だがヴィータが本気で抑えつけていることがわかるとカイズはすぐに力を抜いた。

「……………ヴィータさん？」

「す、すまねえ。カイズが落ち込んだから、ちよつとしたイタズラくらいに思ってたんだけど。……ごめん、そのここは公共の場だし、その」

「そ、そそそ、そうですよね。す、すみません、変な勘違いしてガッツいてしまつて。……………えつと、ちよつと頭冷やしてきますね！」

耳を赤くしながらその場から立ち上がる。同時にヴィータの目の前に立ち上がったカイズが顔を見せた。

「……………」

「……………」

お互い無言になる。その後一呼吸おいて、ヴィータはソレに右手を近づけた。

「また今晚な♡」

そう言葉にしながら息を吹きかける。そして角度をつけ反り上がったソレをピンと人差し指で弾いていった。

——ビク、ビクビクビク!!

デコピン一発でカイズのソレは大きく上下する。だが公共場でこれ以上求めることは出来ない。カイズは「はいっ！」と力強い返事をする。すると洗い場に向かっていく。

ヴィータは腰を引きながら移動する彼の背中を見届けると、ぐ

いーつと体を伸ばしていった。

「ほんと海鳴に来てよかったな〜」

グイータは嬉しそうに鼻歌を口ずさむ。そして自分達夫婦の未来は明るいなと考えていた。

ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編5

無垢なる世界

何一つ変わりのない違和感



流れるような美しい銀髪。その後ろ姿をあたしはよく覚えている。彼女とは悠久の時を共に過ごした。それなのに今は彼女だけが側にいない。

「……………」

その後ろ姿に言葉をかけようとするが声が出ない。

「……………」

待って、待ってくれよ。声にならない声を上げながらあたしはその後ろ姿を追う。だがいくら走ってもその背中に追いつけない。すがりつくように必死になって手を伸ばす。だがその手が届くことはなかった。

やがて銀色の髪の女性は姿を消していく。消えゆく彼女を止める方法はなかったのだろうか。本当に彼女を救う方法はなかったのだろうか。

あたしは虚空に向かって彼女の名前を叫んだ。

「……………」アインスツ！」

叫び声を上げると同時に上半身をガバツと起こす。ヴィータは額にべっとりとした汗を拭いながらあたりを見渡す。

今自分は八神家のはやての部屋で寝ている。もしかしてこれまでのことは全て夢で、本当の自分は。

頭の中が混乱する。だが隣で寝ている彼の姿を見て、今が現実であることをようやく実感できた。

「さっきのは夢？ ……はは、そりやそうだよな」

「……………」う、ん？ 大丈夫ですかヴィータさん」

ヴィータの声と起きあがった振動で、一緒のベッドのカイズも目覚めたようだ。カイズは寝ぼけ眼を擦りながらも、心配そうにヴィータ

の顔をのぞき込んだ。

「起こして悪かったな。久しぶりに懐かしい夢を見てよ」

「夢、ですか？　ちなみに何の夢か聞いても大丈夫ですか」

そう訪ねながらヴィータの手をギュツと握り込む。そこまで来てヴィータは自分の手が震えていることに気づいた。

高鳴る心音を数回の深呼吸で落ち着けていく。額の汗と震えが止まるとその名前を口にした。

「アインスが。……リインフォースアインスが出てくる夢を見たんだ」

「アインスさんって確か闇の書事件の時に……」

「ああ、空に還っちゃった」

そう言いカイズの手を力強く握り返す。ヴィータは一呼吸置くとさらに続ける。

「久しぶりに海鳴に帰ってきたからか。それともはやての家ですつと暮らしてるからか。……普段なら夢の中であいつに会えて嬉しかったんだけどな。……今日見た夢はちよつと辛かったな」

どれだけ叫んでも、手を伸ばしても、彼女には届かない。まるで全てを背負い還る姿を見届けることしか出来なかったあの時のようだ。

「いや、違う。あの時と同じなもんか。……アインスは本当に幸せだって笑顔で還ったんだ」

夢というのは見たいものを見ようとして見られるわけではない。たかが夢でこんなに落ち込むことはないのだ。

ヴィータは気持ち落ち着けようとする。するとその体をカイズはギュツと抱きしめていった。

「たかが夢なんて俺は絶対に言いません。……辛いときは辛いつて言ってくださいね。俺にはこれくらいことしか出来ませんけど」

抱きしめられると、彼の熱を全身に感じる。その温かさは確かに自分がこの場所に存在する。そう伝えてくれているようであった。

ヴィータは手を回すとカイズを強く抱きしめる。

「……ごめん、もう少しこのままでもいいさせてくれ」

「はい、ヴィータさん」

ヴィータは自身の存在を確認するように、しばらくの間カイズの熱を感じ続けていくのだった。

◆ 夕暮れ、いつもの倍ほどの時間をかけて変わりに平穏な視察を終える。だが今日だけは『平穏』であることに眉をひそめ、お互いのデータをリビングで参照しあっていた。

「カイズ、そっちのほうはどうだった？」

「魔力の痕跡も別次元からの干渉もありません。ヴィータさんに言われたとおり一応目視でも何かの残っていないか見ましたけど。……何も変なところはありませんでした」

「こっちもだ。気になって郊外のほうにも行ってみたけどデータの何もおかしいところはない」

「イノセントハートも同じですね。………何でしょう、この違和感」

違和感。それを覚えたのはつい数日前のことだ。買い物途中、二人は少し道に迷ってしまった。それ自体は可能性としてはいくらでもあるだろう。だが道に迷っただけではない。二人が目指していたスーパーそのものがなくなってしまうていたのだ。

海鳴市視察の初日、迷わず足を運んだその場所には建物が存在せず二人は目を白黒させた。結局そのスーパーはほんの少し離れた場所にあったのだが、果たしてただの覚え違いだったのだろうか。

それから取るに足らない小さな違和感に二人は苛まれた。公園の遊具の位置、建物の屋根の色、町中の人通り。全てが『気のせい』で済ませられるほど記憶に薄いものばかりだ。

さらにデータと照らし合わせても海鳴市に特に異変はなく、各デバイスにも故障は見られない。何も問題がないことに異様な違和感を覚え、二人は頭を悩ませていた。

それに加えて、ヴィータは心の奥底に途轍もない『ズレ』を覚えていた。

「海鳴市に帰って来てから、あたしは異様なほどの『幸福感』に包まれてた。始めは懐かしの故郷に帰ってきたからと思ってた。だけど

今は、いや正確にはアインスの夢を見てから何かが弱まった。そんな感じがする)」

だがアインスの夢を見て、現状の異変を理解したせいで、そんな気分でないだけでも十分言い切れる。今は感情の分析よりも、実際に体を動かすほうが先であろう。

「……明日は定時連絡だし、なのはに相談してみるか」

「それがいいかもしれませんね。何か言いようのない不安がありますし。……それにこの感じなんか」

カイズはフルフルと顔を横に振ると言葉を続ける。

「とにかく管理局に伝えてちゃんと調査してもらいましょう。俺たちの勘違いならそれはそれでいいですしね。それじゃあ夕食の準備しちゃいますね」

「おう。あたしはちよつと報告書まとめてメールだけでも先に送っておくなー」

台所に向かうカイズとは逆にリビングのソファアに腰掛ける。ヴィータはデバイスを起動すると液晶画面とキーボードを展開した。そして現状を簡潔にまとめるとメールをなのはのもとに送る。

データに異常はなく、小さな違和感があるだけ。あまり気にしすぎても仕方がない。二人は気持ち切り替えると食卓に着く。夕飯はカイズ特製チャーハンと玉子スープだ。カイズの一人暮らし飯として十八番のチャーハンは。パラパラではなく、少しべとつとしているのが売りだ。初めて食べたときは少し味が濃く感じたが、玉子スープがいい形で調和してくれる。

ヴィータはそれを頬張ると「美味しい」と笑みを浮かべた。

「もうすぐ海鳴での仕事も終わりで少し寂しい気持ちはあったけどよ。でもあつちに戻ったら戻ったで、新居探して引っ越しの準備して。……大変なこともあるかもしれないけど二人ならきつと楽しいよな」

「はいっ！ しっかり内見していい家探しましょうね!!」

「おうっ！」

ヴィータはカイズと出会えた今が本当に幸せだと、お日様のような

にっこにこの笑みを浮かべ食事を続けていく。そしてこれが、この夜が、二人にとって本当に長い時間の始まりだった。

本当に大切な他人

夕飯を食べ、お風呂を済ませ、床につく。そしていつものようにベッドで目覚めたヴィータは強烈な違和感に襲われた。

「……………あれ、もう朝か？」

窓から射し込む光は確かに朝を伝えている。しかし自分たちは先ほど眠ったばかりではなかっただろうか。

備え付けの時計を見ると時刻は八時。ちょうど二人が起床する時間だった。

「別に眠気もないし、いやむしろ好調なくらい頭がスッキリしてるんだよな。……………おいカイズ起きろー」

隣にいる彼を揺るとほどなくして目を覚ます。カイズは頭に疑問符を浮かべたままヴィータを見た。

「あれ、どうしましたヴィータさん？ 寝る前に何かし忘れたことでもあったんですか??」

「いや、そうじゃなくてよ。……………実はもう朝なんだよ」
「……………えっ?」

カイズは目を大きく見開くと、先ほどのヴィータのように時計を見る。そして「あ、あれえ？」と声を漏らした。

「何だかさつき寝たばかりな気がするんですけど。でも時間ならデバイスのアラームが鳴るはず。……………って、あれ、ええっ!!」

カイズは自身の体をまさぐり顔面蒼白になる。その行動でヴィータもあることに気づき、そのふくよかな胸に手をつ込んでいった。

そう今の彼女は大人モードなのだ。寝るときだけは普段の姿に戻っているはずなのにだ。さらに大人モードでいる疑問がもう一つあった。

「グラーフアイゼンが……………ない……………」

胸が邪魔で見つかり辛いなどの話ではない。首回りにはチェーンがついてらず、確かにデバイスがなくなっていたのだ。

「ならどうして大人モードを維持できてるんだ。……………何だこれ。何が起きてるんだ」

「ヴィータさん！」

カイズが声を上げるとはやて部屋の机を指さす。そこには四角い物体とカートリッジのようなものが各二つずつ存在してた。黒色のケースに白い羽のようなものが装飾されているそれに見覚えがのない、カートリッジも同様だ。何かのヒントになるかもしれない。二人はそれを手に取るとリビングへ向かう。そしてその内装を見てお互いに目を合わせた。

「ヴィータさん、はやてさんの家ってこんな感じでしたっけ？」

「……いや、違う。家具の配置とかは似てるけど、はやての家にこんな家具はなかった。あつ！」

ヴィータはハツと目を向けベランダへの窓を開ける。そして玄関口を見ると信じられないと目を見開いた。

「車いす用のスロープがなくなってる。家の中もそうだ。こんなに家具があったらはやてが自由に移動できないはずなのに。……ここは、どこなんだ？」

ヴィータがそう口にしたと同時に、家の奥からカイズの声が響く。「俺たちの私物はあるみたいです！ ……魔法関係を除いてですけど」

デバイスも通信機器も行方知らず。これではミッドチルダに連絡を取る方法もない。ヴィータは両手で頭を抱え家の中に戻った。

「とにかく着替えて外を見に行くぞ。もしかしたらこの海鳴市でとてもねえことが起きてるのかもしれないねえ！」

「りよ、了解です！」

二人は寝間着から普段着に着替えると、見えない何か急かされるように外へ向かうのだった。

◆ 町中に出るとその差異に不安がさらに高まる。今までは思い違いで済ませていた景色が、注意して見れば様変わりしていることに気づく。

もちろん正確なデータと照らし合わせたわけではないのでハツキリとは断定できないが。

ヴィータは分かれ道の前に立つと左の方を指さす。

「あたしは左から、カイズは右からだ」

「……この状況で別れても大丈夫ですかね」

「よくねえかもな。ただどうやら今のあたし達はデバイスがなければ自力での魔法も使えねえみたいだ。……相手がやる気ならとつくに二人ともやられてると思う」

「確かに、そうですね」

「今は少しでも情報が欲しい。集合場所はこの先にある石田先生が働いてる病院。お互い何かがあつたら病院から迂回して相手のルートへ、いいな」

「はいっ！」

「——カイズ！」

ヴィータはカイズの顔を引き寄せると短い口づけを交わす。

「絶対無事に視察を終わらせるからな」

「了解です！」

二人は左右に別れて駆け出す。



「あたしが知ってる海鳴とは随分と違ってるみてえだな」

ヴィータはこの二か月弱で通い慣れたはずの、見覚えの薄い商店街を走る。

「ところどころ同じ店があつてもやっぱり違う。ここはいったい——

!!

どこなんだ。という言葉を思わず飲み込んでしまう。そしてその後ろ姿を見てヴィータは足を止める。

「えっ、ええ……」

その腰まで届きめ細かな銀髪に覚えがある。動揺のあまり動けずにいると、女性は道の角を曲がり姿を消す。

「待て、待ってくれ！」

夢の時とは違う。声は出るし脚も前に進む。ヴィータは角を曲がると銀髪の彼女に向かい叫び声を上げた。

「待ってくれよアインス！」

「……………はいっ?」

銀髪の女性がゆっくりこちらに振り返る。その顔、その赤い瞳、忘れるわけがない。彼女はずっとヴィータ達と共にあり、一心同体の存在と言っても過言ではないのだから。歩みを止めた彼女にヴィータは駆け寄る。

「ア、アインス、本当にアインスなのか!」

「えっ、はい、私は八神リインフォースアインスですけど。……どこかでお会いしましたっけ?」

「ぐっ!」

無垢で真っ直ぐな疑問に心が引きちぎられそうになる。だがヴィータは叫ぶことをやめなかった。

「あたしだよ、ヴィータだよ!」

「えっと、ヴィータはもちろん知っているのだが、えっとその」

「あつ、そうか、この姿は初めてだよな。元の姿に戻れば」

　　と思いデバイスに手を伸ばそうとする。だがグラーフアイゼンを持っていないこと。そして大人化が解けないことを改めて痛感する。

ヴィータはどうしたらいいのかと狼狽する。だがヴィータと同じくらいアインスも困惑していた。その時、二人の均衡を破るように柔らかな声がかけられた。

「お帰りアインス」

「——我が主!」

「もうその主っていうのはやめてって言ってるやろ」

「しかし主は主ですから」

　　主と呼ばれた少女にヴィータは目を向ける。その姿を見間違おうわけがない。だがそうであってもそれはあまりにも懐かしい姿だった。

大人モードのヴィータの鳩尾ほど身長しかない。だが確かに八神はやての姿がそこにあつたのだ。

　　立て続けに事が起こりすぎて頭の中がぐちゃぐちゃになる。そんなヴィータにはやては声をかけた。

「アインスの専門学校のお友達ですか?　初めまして、私はこの商店街の古書店の店長を務めてます八神はやてと言います。お姉さんの

お名前は？」

優しい声色と共に崖から突き落とされた気分だった。ヴィータは頭をガシガシとむしるように掻いた。

「がつ、ああつ、ああ……………」

地面の設置感がなくなる。いま自分が立っているのか倒れているのかわからなくなる。

「ど、どうしたんですかお姉さん」

「主はやて、どうしました」

「はやてちゃんどうかしたの！」

なかなか戻ってこないはやてを心配したのだろう。店内からピンクのポニーテールの女性と金髪の女性、そして青い毛並みの狼が現れた。

「(シグナム、シャマル、ザフィーラ)」

アインスとはやてとの僅かな会話。そしてそこにいる皆の顔を見る。それだけで長きに渡る付き合いのヴィータにはその差異がすぐにわかってしまった。

ここにいる彼女たちはきつと辛い事件も、悲しい別れも体験していないのだろう。無垢で純粹で心の中に憤りや陰りが見えないその表情を見てヴィータはうめき声をあげた。

「あつ、ああつ、ああ、アアアアアアアツ！」

締め付けるように顔を両手で覆う。見たくはない、感じたくはない、考えたくない。そう思いながらも脳裏からある考えが離れなかった。

「(あたし達は皆ずっと頑張ってきた。悲しいこともあったけど、それでも全力を尽くして結果を出してきた。…………でもあたし達のそれは『最良』の結果であるだけで『最高』の結果じゃない)」

カイズと出会い結婚し、この海鳴市に来てヴィータは今が一番幸せであると思っていた。だがそれとは違うと。誰も傷つかず誰もが笑顔であるこの空間は、彼女の思いが間違いであると否定しているようだった。

「あ、あの大丈夫ですかそこのお姉さん！」

はやてが他人行儀に心配の声をかける。だが彼女の言葉でももう
ヴィータの耳には届かなかった。ヴィータは目に涙を浮かべながら
膝から崩れ落ちていくのだった。

ずっと見てきた違う貴方

◇

ヴィータと別れカイズは車通りの多い道を走っていた。

「駄目だな。こっちだと違いがほとんどわからない」

何か変化がつきそうな場所はないか。カイズは右へ左へと視線を動かしていく。すると公園のほうで目が止まった。それは公園に何か変化があったからではない。一つの木の上に見覚えのある後ろ姿が見えたからだ。

「——えっ、ヴィータさん!?!」

その木の上に愛する女性の姿があった。自分とは逆方向に行ったはずなのにどういことだろうか。木の上のヴィータは洋服で汗を拭くとフウと一息ついていた。

「よっしこれで、あ、ああ、わわっ!?!」

その時だ。油断をして体勢を崩したのがすぐにわかった。今の自分たちは魔法を使えない。このまま落ちたら大惨事だ。

「間に合え!」

考えるよりも先にその場から駆けだす。公園前の芝生を一足飛びし、全力で走りながらも綺麗に木々を避けていく。そしてヘッドスライディングで彼女の元に飛び込んでいった。

「イツ、ツツ!!」

落ちるヴィータを抱きしめるが、勢いを殺せずそのまま木に激突する。背中かなりの痛みを覚えるが、何とかギリギリセーフのようであった。

抱きしめられたヴィータはシュンとした目でカイズを見る。

「ご、ごめんなさい。それと、えと、ありがとうございます」

「何のこれしき。次元一可愛いヴィータさんを守れたなら軽いものですよ」

「か、可愛い! あたしのこと?! そ、それにどうしてあたしの——」

「それはもちろんヴィータさんのことですよ! ヴィータさんは俺に

前につくとヴィータの姿を探す。

「ヴィータさんはまだ来てないか。……………あつ！」

青い髪の白衣の女性、石田先生がロビーにいるのを見つけるとすぐに駆け寄っていく。

「石田先生！ ヴィータさん見ませんでしたか！」

「えっ、ヴィータちゃん？ ここ最近ヴィータちゃんは見てないけど。

……………貴方誰ですか？」

「俺です、カイズですよ。ちょうど月頭に近くのコンビニで会いましたよね」

カイズがそう言うと石田は怪訝そうな顔した。

「いえ、会っていませんが。貴方八神さんちとどんな関係なんですか」

「……………えっ」

何だろうこの違和感は。いや朝起きた瞬間から違和感などいくらでもあった。カイズはそうあってほしくないと願いを込めながらも質問をした。

「すみません。……………今ヴィータさんって何歳でしたっけ」

「ヴィータちゃんは『小学三年生』でまだ八歳のはずよ。……………ねえ貴方」

「……………すみません失礼します！」

「貴方、ちょっと待ちなさいよ！」

背後で石田先生が怒りの混じった叫び声をあげる。だが今は説明できる状況でなければ時間もない。静止の声を振り切り病院を後にする。

「何だこの感じ。やばい、やばい、やばい。何か凄くやばい予感がする！」

こういう時の直感をあまり外しが事がない。それが外れて欲しいと思いつつも走る速度を落とせなかった。

カイズはヴィータに言われたとおり病院から迂回して商店街通りに入る。町並みの変化など見ている場合ではない。カイズは人の波をかき分けながら必死にその姿を探した。

そして予感は的中した。

「あつ、ああつ、ああ、アアアアアアアツ！」

最近ずっと側にいた大人姿のヴィータが悲鳴を上げている。近くにいる少女の心配の声も届いていないようだ。

だが、だとしても、関係ない。カイズは膝から崩れ落ちる彼女を見ると叫び声を上げた。

「ヴィータさん!!」

無垢なる世界

「ヴィータさん!!」

崩れ落ちそうな心と体がその一言で現実引つ張られる。ヴィータはカイズに抱きしめられると、周りに涙を見せないように胸元に顔を埋めた。端から見れば二人のそれは奇行の他ないだろう。八神家の面々は奇異の眼差しで二人を見た。だがそんな空気を一変させる無邪気な声が二人の後ろから聞こえてきた。

「あつ、さつきのお兄さんじゃん。はやて、はやて、さつき木から落ちそうなところを、そこのお兄さんに助けてもらったんだ。さつきは大丈夫でしたか、結構凄い勢いで背中ぶつけたと思いましたけど」
「えっ。……………あつ」

背中に触れてみるとじわつとした感触がする。ランドセルを背負ったヴィータはその背中を見ると青ざめたように声を上げた。

「そ、その怪我。あ、あたしのせいで、シヤマルお願いだ！ お兄さんの怪我を見てやつてくれよ！」

小さなヴィータにそう言われるとシヤマルは困ったように頬に手を当てる。

「ヴィータちゃんの恩人ならと思うけど。……………はやてちゃん」

シヤマルがアイコンタクトを送ると、はやては少し考えるような顔をする。だがすぐに柔らかい笑みを浮かべると店内の方に手をかざした。

「とりあえず立ち話もなんです。一度うちの方に上がっていきってください」

はやての言葉にランドセルを背負ったヴィータはぽあつと晴れたような笑みを見せる。だがそんな彼女とは対照的にシグナムとザフィーラは警戒心を怠つてないようだ。

どうするべきなのだろうか。カイズは困ったように胸元のヴィータを見る。彼女はカイズの服で涙を拭うとキリツとした顔つきを無理矢理つくつて見せた。

「申し遅れました。『私』の名前は『ヴィーラ』です。ここにはまだ引つ

越して来たばかりで右も左もわからない状態だったのですが、ついあの方を後ろ姿で昔の友人と勘違いしてしまいして。……お見苦しいところを見せてしまい本当に申し訳ありませんでした」

自身をヴィーラと名乗ったヴィータは深々と頭を下げる。その誠意が本物であることがすぐに伝わったのだろう。はやては慌てたように声を上げる。

「そ、そんな気にしないでください。こっちもうちの子を助けてもらったみたいですし。……先ほども言ったように一度うちに上がってください。怪我の様子もみたいですしね」

「はい、お言葉に甘えさせていただきます」

そう言葉を交わすと八神家の面々は古書店の中に入って行く。その背中を見ながらヴィータはカイズに手を伸ばす。その手は今までのどんな時よりも力強く握られ、そして悲しみに震えているのだった。



古書店の店番をするためにシグナムとザフィーラはレジにつく。カイズは怪我の様子を見るためにシヤマル、そして小ヴィータと共に居住スペースへと向かったようだ。

「ここがはやて達が住んでる場所。……駄目だ、全然覚えがねえ」
古書店と言われるだけあって多くの本が綺麗に並べられている。そのほかにも子供向けの玩具なども取り扱っているようだ。

先ほど見せた失態のせいで何となく会話が辛い。ヴィータが目泳がせているとはやてが声をかけてくれた。

「改めて、うちの子を助けてもらってありがとうございます。えっと、ヴィーラさんでいいんですよね？」

「は、はい、そうです」

「名前がヴィータと似ているから驚きましたー。そう言えば髪の色も同じですし。……でも体つきは全然違いますね」

はやては感心するようにヴィータの体を視姦し「ぐへへ」と口元を緩める。その行動の意味がヴィータにわからないわけがなかった。

「（あたしが落ち込んでるから空気を和ませようとしてるんだよな。

「……はやてはやっぱり優しいな」

落ち込んだままでは気を使わせるばかりだ。それに今は少しでも情報が必要だと頭の中で活を入れた。

「お褒めいただきありがとうございます。それとアインスさん、先ほどはすみませんでした。昔なじみにそっくりな貴方に『私』のことを知らないと言われて……少し気が動転してしまいました」

「いえ、気にしないでください。そんなにその知り合いとそっくりだったのでしょうか？」

「はい。……でもそんなはずないんです。絶対に」

アインスはもう自分たちの側にはいない。そんなことを思うのはあの時の彼女の決意に背く行為だ。ヴィータははやてとアインスを視界に入れるとそのまま話を続ける。

「私と先ほどの男性、カイズとは夫婦同士なんです。今は外国に住んでいるのですが、十年以上前にこの街で暮らしていたということもあり、海鳴市での仕事を一ヶ月ほど任されたんです。ですが街の方も細々と変わってしまったので少し困っていました」

ヴィータの言葉にはやてはうんうんと頷いた。

「……最近で一気に都市開発も進みましたしね。私が経営する古書店もほとんど最近できたばかりなんですよ」

「私が？……ってはやて、ん、んん、はやてさんがこの店のオーナーなんですか。えっ、学校は?？」

「えーっと、いろいろありまして飛び級でもう大学を卒業しているんですよ。今は社会人一年目、ヴィーラさんもこの街にいる間は臍原にしていただけたら幸いです」

「は、はあ……」

そういう制度があることはもちろん知っている。だがはやてが既に社会人であることは流石に度肝を抜かれる。はやては「あははは」と笑みを浮かべるとポケットに手を入れた。

「ヴィーラさんはずっと外国にいたから知らないと思いますけど、今この八神堂では大人から子供まで楽しめる最新ゲームを提供しているんですよ」

はやてはポケットから黒いカード型のものを取り出す。その機械には見覚えがある。ヴィータはポケットに手を入れると同じ物を取り出した。

「ありや、もうブレイブデュエルについて知ってはるんですか？」

「ブレイブデュエル？ いえ知らないです。これは今住んでる家に置いてあったもので、どういうものか分からないんですよね」

「家に置いてあった？ ちょっと見せてもらってもええですか」

「はい、どうぞ」

はやてはそれを受け取るとアインスに渡す。アインスは黒いカードを何かの端末に差し込むと液晶画面に目を向けた。

「確かに対戦経歴、店舗登録経歴がありませんね。でもユーザー登録だけはされています。……お返しします」

カタカタと何度かキーボードを鳴らす。そしてアインスから黒いカードを返してもらおうとヴィータは再びそれを見る。

「えーつと結局ブレイブデュエルって何なんでしょうか」

ヴィータが聞き返すと、はやては「ふっふっふ」と分かりやすい笑みを浮かべた。

「それはきつと直接見てもらった方がいいと思いますよ。もしお時間ありましたら八神堂の特設ステージに行きませんか！ きつとヴィーラさんにも気に入ってもらえると思うんです!!」

目をキラキラさせてはやてが詰め寄る。ヴィータはよくわからなのままこくこくと頷いてしまった。

「新規お客さんご案内やー」

ハイテンションのままはやてが歩き始める。だがその後ろ姿をシグナムが止めた。

「主はやて。確かこの後は絶版本の持ち込みの買い取りの予定では」

「——あっ?!」

完全に忘れていたようだ。はやてはギクリとした顔をすると申し訳なさそうにヴィータの方に振り返った。

「す、すみません、テンションを上げるだけ上げてこの体たらくで。

……あつ、そうや。アインス、お願いできるかな？」

「もちろん大丈夫ですよ我が主。夜間の学校までまだ時間は十分にありますから」

「ありがとうなー。でも人様の目があるところで我が主はやめてゆうとるやろー」

「ですが、主は主ですから」

先ほどと同じ、きつと何度も交わされたやり取りなのだろう。ヴィータから見ても微笑ましい空気が感じられた。少し間を置いて『今日はよろしくお願いしまーす』と店の入り口から声が聞こえる。どうやら話にあつた買い取り客のようだ。

はやては「ゆっくりしていつてくださいね〜」と言葉を残すと、そのまま姿を消してしまふ。はやてという潤滑油を失いヴィータとアインスの間に静寂が走る。

「そ、それではよろしくお願いします」

「はい、こちらこそ楽しんでもらえたら光栄です」

お互い小さく頭を下げると備え付けられたエレベーターへと向かっていくのだった。

将来有望株ですから



八神堂の居住エリアに案内されたカイズはシャマルと小学生ヴィータ（小ヴィータ）と共にリビングにいる。シャマルは引き出しから取ってきた救急セットを机の上に置いた。

「それじゃあ傷の具合を見ますので服を脱いでもらえますか」

「えっ、その、これくらい大丈夫ですって」

ヴィータ以外の人に肌を見せるのは少し羞恥心がある。それにカイズ自身この程度の怪我どうということはないと思っていた。

だがそんな思いとは裏腹に小ヴィータは彼の上着を脱がせようと手をかける。

「ヴィ、ヴィータさん何を!?!」

「何をじゃないですよ。あたしのせいでお兄さんが怪我をしたのに放っておけないですって。あとお兄さんの方がずっと年上なんですから、さん付けは変だと思えますよ」

存在自体のせいで思わずさん付けをしているが至極全うな意見だ。

カイズは「ん、ん」と喉の調子を整えた。

「えっつとヴィータちゃん。洋服は自分で脱ぐから大丈夫だよ。ごめんね心配してくれてるのに無碍にするようなこと言っちゃって」

ぽんぽんと頭を撫でる。小ヴィータはその手の感触を楽しむように頭を押しつける。そしてしばらくそれを楽しむと離れていった。

カイズが上着を脱ぐと小ヴィータは「きやつ」と手で顔を抑える。そして指の隙間からしっかりカイズの体を眺めていた。

「服の上からだとかわからなかったですけど、お兄さんすっごく筋肉質ですね」

「こらヴィータちゃん、あんまりジロジロ見ないの。……でも本当に鍛えてますね。あつ、少し染みます、ごめんなさい」

背中に綿のような感触がするとピリリとした刺激が走る。だがこの程度なんのその、小ヴィータの手前情けない顔は出来ないと笑顔で強がって見せた。

「出血はしていますけど傷は深くないみたいですね。触ってみた感じ骨にも異常ないと思います。ですが少しでも違和感があるようならすぐに病院にいつてくださいね。もちろんその時の治療費は全てこちらで負担しますから」

「いや、大丈夫で——」

「大丈夫じゃないよお兄さん！ 治療費はあたしのお小遣いでちゃんと出すし、お兄さんが傷物になったら。………あたしがしっかり責任とるから!!」

「ブフツ!!」

小ヴィータの突然の発言に思わず吹き出してしまう。だが動揺したのはカイズだけではないようだ。背中を消毒する綿が先ほどよりグリグリと強く押しつけられている気がした。

背後にいるシャマルの顔は見えない。だが何ともいえない圧と共にシャマルは小ヴィータに訪ねた。

「ヴィータちゃん、それはどうということなのかなー」

「公園でさ、木から落ちた雛鳥を戻したまではよかったんだけど、その後木から落ちちゃって。その時颯爽と助けてくれたお兄さんが言ってくれたんだよ。『ヴィータさんは銀河一、次元一可愛い俺の奥さん』だって」

「カイズさくくくんくく」

綿がギチギチと悲鳴を上げるほど押しつけられる。消毒液云々でなくこれはもう物理的に痛かった。カイズは激痛に耐えながらも、一言一言考え抜いて、絞り出すように言葉にした。

「……………ソ、ソレハ。ソレハ。ソレハ、オクサンのヴィーラサンとカンチガイシタンデス」

緊張のあまり片言になってしまう。そしてその片言にシャマルは眉をひそめた。

「うちのヴィータちゃんとヴィーラさん、似ても似つかないと思いますけど」

「あ、あの時は俺も急いで。で、赤い髪がチラツと見えたと思ったら木から落ちそうになってまして。赤い髪なんてここらへんじゃあま

り見たことありませんし。えつと……抱きしめたヴィータちゃん
の姿が、初めて出会った時の奥さんの姿とそっくりで、慌ててたせいも
あってか、よく確認もせず口走ってしまっただけです」

苦しい。あまりにも苦しい。だがいま話したことにはいつぺんの
嘘もないことは確かだ。しばしの静寂がリビングを支配する。そし
てその均衡を破ったのはヴィータだった。

「なーんだ。何か話が噛み合わないと思ってたんですね。でも仕方
ないですよ。あの状況じゃ混乱しちゃっても、うん、あの状況じゃ
勘違いしちゃいますよね！」

小ヴィータがそう言うのと部屋の空気が少し軽くなった気がする。
実際に大人のヴィータと目の前の小ヴィータを見間違えることなど
あり得ないことだろう。だがそれは当の本人であるカイズの感想だ。
現場にいなかったシャマルにはヴィータの言葉以外に判断する材料
はなかった。

「まあどういふ状況かわからないですけど。……それにカイズさんは
悪い人には見えませんしね」

押しつけられていた綿が離れていく。最後に絆創膏が優しくつけ
られたのを感じると、何とか危機は脱せたと小さく息をもらした。
シャマルは応急箱を戻すため引き出しへと向かう。シャマルが離れ
たのを見ると小さなヴィータはいたずらっぽい笑みを浮かべた。

「あれで、よかったですか」
「えっ?」

「何だかお兄さん困ってるみたいだから。ああ言った方がよかつ
たのかなって」

「ヴィータちゃん。……ありがとう」
「いえいえ、こちらこそ本当にありがとうございました」

小ヴィータは赤いお下げを揺らしながらぺこりと頭を下げる。そ
して誰にも聞こえないようにカイズの耳元で言葉を続けた。

「もし奥さんに愛想尽きたらあたしのところに来てくださいね。あた
し勉強もしっかりやっていますし、家事も手伝っています。それに、ブ
レイブデュエルだっていつか全国一位になる将来有望株ですから」

「えっ、ブレイブデュエルって、えっ、それより、えっ、ええっ!?!」
「そうだ、せつかくだから地下で見えていってください。服の血抜きにも少し時間がかかると思いますし」

そう言うとき再び書店スペースへの歩いていってしまおう。カイズは着替えように渡された大きめのジャージを手を持ちながら「あ、あははは」と乾いた声をあげるのだった。

ブレイブデュエル



エレベーターに乗せられヴィータはアインスと共に地下の施設に到着する。

そこに設置された巨大モニターと大勢の人を見て、そのままの感想を口にした。

「ここは訓練場ですか？」

「訓練場？ うーん、もちろん訓練をしている子もいるとは思いますが、ここにいる人は皆は本気でゲームをしている子ばかりだと思います」

「ゲーム？ ……これが」

モニターにはバリアジャケットに身を包んだ大勢の人がいる。そしてそのエリアの端から端までで熱戦を繰り広げていた。それはヴィータ達がよく行っている模擬戦、いやその熱量は実戦と言ってもおかしくない。

「これが主はやてが言っていたブレイブデュエル。プレイヤー自身が身体を動かして3D立体映像のキャラクターを操作する、次世代体感シミュレーションゲームです」

「……こんな凄いものがこの街に」

当たり前だが自分たちの知っている海鳴市に、こんなハイテクな機械は存在していない。ヴィータは画面に映るプレイヤーを見て既視感を覚えた。

「(あの制服は時空管理局のものだ。あつちは別次元で着ているのを見たことあるし、デバイスだって)」

この世界は魔法というものが存在しない。だが根っこの部分がすり替わっているだけで、鏡写しのような事が多い。

何か、何か他に気になるところはないか。ヴィータがあたりを見ると、突然『自分の声』がステージ中にこだまし、そこでハッと息をのんだ。

「いくぞアイゼン！ モードチェンジ!!」

巨大画面いっぱい自分の顔が映し出される。だがそれは今の大人モードのヴィータではない。本当の意味であどけなさが残る小ヴィータの姿だった。赤いゴシックロリータのバリアジャケツトを着た彼女はグラーフアイゼンを構える。

「ラケーテンハンマー！　ぶつつぶせええええつ!!」

点火したブースターの勢いのままに相手に接近する。途中相手の砲撃を何発かもらうがその勢いは止まることを知らない。相手はシールドを展開するがその時点でもう遅い。グラーフアイゼンの先端部はシールドに突き刺さると火柱を上げる。そしてそのままシールドを砕くと相手を吹き飛ばしていった。

『WINNER　八神ヴィータ』

モニターに表示されると辺り一帯から歓声上がる。そのあまりの人気ぶりにぽかんと立ち尽くしてしまった。

「凄いですよね。ヴィータは小学生から商店街の大人達、みんなから人気があるんです」

「よ、よくできた子なんです」

「ああ、そうとも。友達もたくさんいるし、愛嬌もある。塾での勉強をしっかりこなしながら、ブレイブデュエルのロケテストでは堂々の五位。……将来有望な我が家の末っ子だよ」

そう誇らしげに語るアインスを見て、その言葉に嘘偽りはないとわかる。

「(あたしがこの海鳴にいたころとは大違いだな。じいちゃんばあちゃんはともかく、人付き合いは最低限だったし、家族以外どうでもいいって思ってた時期もあったしな)」

成長した自分は人付き合いが悪いと言うほどではない。だが様々な人からこんな惜しみない拍手をもらえる人間かと言われたら決してそうではなかった。もしも自分が争いや別れを経験せず、ただの子供として育てていたらこんなふうになれたのだろうか。ありえもしない可能性を感じるとヴィータは小さくため息をついた。

そんな彼女とは全く逆、モニターの小ヴィータは天真爛漫な笑顔でブイサインを作る。

「この勝利は愛しのお兄さんに捧げます！ お兄さん見てくれましたかー!!」

愛くるしい彼女のラブコールに会場中がざわめく。「誰だよお兄さんって」「商店街のアイドルをたぶらかしたやつがいるのか」「許せねえ、許せねえよ」とその言葉は様々だった。

恨み辛みが木霊するなか、ヴィータは服は違えど見慣れた後ろ姿を見つけた。

「カイズ！」

「アツ、ヴィー、ヴィーラサンジヤナイデスカ」

「どうしてそんな片言なんだ？ 何かあったのか?！」

「イエイエ、ナニモナイデスヨ」

明らかに何かあるようだが、その態度が聞かないでくれと訴えかけていた。アインスは二人が揃ったのを見るとちよいどいいと声をかけた。

「今見てもらったのがブレイブデュエルです。えっと、カイズさんもブレイブホルダーとデータカートリッジはお持ちですか?」

「えっ、あ、えっとこれのことでしたっけ?」

カイズはポケットから四角いケースとカートリッジを取り出す。アインスは「少々いいですか?」と了承を得てからそれを近くの端末に差異込む。そしてヴィータの時のようにデータを確認した。

「カイズさんもヴィーラさんと同じですね。デッキにはすでにカードが複数枚存在していますが、店舗登録や対戦記録が存在してないようです。あつ、もちろんプライバシーのためにデッキの中身は確認していませんから」

「いやー、この端末のこともデッキのこともよく分かってないから全然問題ないんですけどね」

「もしよかったら店舗登録だけでも済ましていきませんか。T&Hのように我が主も八神堂にも期待の新星がこないかとずっと口にしてましたので」

「なんだかよくわからないですけど、えーっと、どうしましょうヴィーラさん」

そういうとカイズは困ったようにヴィータを見る。ゲームの登録自体別段問題はない。ただ八神家を前に苦しんでいるヴィータを見ているからこそ、ここで繋がりを作るのを良しとするか悩んでいたのだ。

優しいカイズの想いは言葉にされなくとも受け止めている。だがそれでもヴィータはデツキケースとカートリッジを取り出す。そしてアインズを訪ねた。

「私たちこの手のゲームにはほとんど触れたことなくて。もし八神堂さんでいろいろ教えてくれるのなら、頑張ってみようと思うのですが。……どうでしょうか？」

その言葉はこの世界、そしてヴィータの知らない八神家に向き合っていくという、大きな決意だった。だがそんなことを知る由もないアインズはただ嬉しそうに両手を合わせた。

「それはもちろん。私たちにできることなら何でも手伝いますよ。……えっと、それでですね」

アインズは少しだけ表情を曇らせると、控えめに手を差し出した。「私はヴィーラさんの知り合いではありませんでした。……ですがそれでもヴィーラさんとはこれから仲良くしていけたらと思っと思っています。だから、その、友達になってもらえないだろうか！」

「それは……もちろんです！」

差し出された手をヴィータはしっかりと握りしめる。その確かな感触を感じながらアインズは笑みを浮かべた。

「ヴィーラさんの方が年上だと思えますし、敬語も大丈夫ですからね」「そしたら。……よろしくなアインズ、私のことも呼び捨てでいいからな」

「ええ……よろしくお願いしますヴィーラ」

ヴィータがしっかりと握りしめた手を、アインズもまた力強く握り返した。そうしてヴィータとカイズの八神堂での一日目が終わっていくのだった。

たった一つの居場所

◇

八神堂から切り上げると、カイズとヴィータは二人で海鳴市を散策した。魔法が使えない今、移動距離には限界があり、日常生活エリアを歩き回るだけです。夕暮れ時になってしまった。カイズは途中で買ったメモ帳を開く。

「とりあえず今わかってることは——ぶはっ!」

リビングで現状を再確認しようとした瞬間、ヴィータが抱きついてきた。彼女はそのままカイズをソファーまで押しやっていく。

「ど、どうしたんですかヴィータさん、えっ、ちよっ」

腹部のあたりからカチャカチャとベルトが外される音が聞こえる。

カイズは「えっ、えっ?」と驚きの声を上げながら、メモ帳をポイと机に投げ捨てた。

「いきなりどうしたんですか。あっ、もしかして俺汗くさいですか、それなら今日は先にお風呂にしますか」

「……………」

ヴィータは無言のままカイズの上着に手をかける。結局血抜きが終わらず、八神堂から借りっぱなしのジャージのジッパーがジーツと降ろされる。

「あ、ああ、わかりました。借り物の洋服を着てるからちよっと嫉妬してるんですね。それとも八神堂のヴィータちゃんのことですか。いやいや心配する必要はありませんって。どんなことがあっても俺はヴィータひと、す、じ……ヴィータさん?」

握りしめたヴィータの手首が小さく震えているのがわかる。そしてその背中は大人モードとは思えないほど、小さく、本当に小さくカイズには映って見えた。

ヴィータはカイズの上着を脱がせると彼の頬に手を添える。そしてそのまま口づけを交わした。そのまま唇を取り込まれてしまおうではないかと思うほど強烈なキス。ヴィータはさらに舌を侵入させるとそれが絡まり合う音が広い室内にこだました。

だがその行動や音に性の高まりは感じない。寂しく辛い何かを埋めるように、ただ、ただ、切ない水音が鳴り続けるだけだ。口の中が唾液でいっぱいになる頃、ヴィータは口を離す。そして自身の上着を脱ぎ捨てた。

「頼むカイズ。明日からはちゃんと切り替えるから、だから今日だけは、今だけは……………全部忘れるくらい思いつきり抱いてくれ」

「…………ヴィータさん」

「今のままじゃ頭ぐちゃぐちゃで何も考えられそうにないんだ」

そう言葉にする彼女自身気づいていないのだろう。その頬を涙がスツと伝う。きつとヴィータにとって、この世界はあり得るはずのない、あり得てはならない理想郷なのだろう。

大切な家族が全員いて、戦いで傷つくどころか争いの辛さも知らず生活できている。そしてただ平和で平坦で本当に幸せなこの世界に自分だけがいないこと。それはヴィータにとってあまりにも酷く生き辛い世界だろう。

だが全てを救えずともヴィータ達は今まで懸命に足掻いてきた。だからこそ救われた街があり、世界があり、次元があるのだ。そしてそれはカイズも同じだ。カイズは人差し指でそつと彼女の涙をすくいあげた。

「もしヴィータさんが俺の知っているヴィータさんじゃなかったら、俺は生きていたかもわかりません。あの電車の落盤事故で窒息死していたか、トチ狂った大人に殺されてたか、そのまま瓦礫に潰された可能性もあります」

「…………カイズ」

「ここにはヴィータさんが望んだ幸せが全て揃っているかもしれない。俺一人なんかじゃその幸せには到底足りないかもしれないけど……………だけど、だとしても今のヴィータさんは最高に幸せだって俺に証明させてください。もしかしたらこの世界にヴィータさんの居場所はないのかもしれませんが。だけど俺がずっと側にいます。俺が側にいてずっとヴィータさんの居場所になります。だから、今は何もかも忘れてください」

今度はカイズから口づけを交わす。そして先ほどのヴィータのよ
うに舌を入れ絡み合わせる。さらに激しきだけに身を任せず、彼女を
労るように、愛を伝えるように優しく触れていった。

長い、長いキスが終わるとカイズはヴィータを真っ直ぐ見つめる。
そして互いに無言のままソファアールの上で体を重ねていった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編6
胸に宿るそれぞれの願い
差異と可能性



リビングのテーブルでカイズとヴィータはお互いにメモ帳を取り出す。まず口を開いたのはヴィータの方だ。

「街の様子が違うのはもう言うまでもねえよな。この二週間、行ける範囲は確認してみたけど、明らかに違う点がいくつもあった」

「俺たちの知ってる海鳴市はここまで近未来的な場所ではなかったですしね。ましてやブレイブデュエルなんて技術、あの世界で実現化されるのは相当先だと思えますし」

「ここまででは間違いないと、ヴィータはさらに話を続ける。

「次にこの街で『あたし達が行ける範囲』の話だ。この家や商店街、石田先生が働いてる病院が大体の範囲か？」

「あと車の通りが多い表通りと、公園なんかもそうですね。この二つの場所は元の世界とほとんど変わっていないと思います」

「……しかし移動範囲が限られてるって、もう完全に異質な世界なんだよな」

腕組みをするヴィータはハアとため息をつく。

二人がその異質に気づいたのは八神堂のことから三日目も経ったことだ。あらかた調べたヴィータ達は、満を持してそれを広げようとした。だがある一定のところまでいくと世界が途切れてしまっていたのだ。

反射する水面のような壁がそこにはあり、何をどうしても二人には通ることができなかった。この現象が魔法によるものなのか、ほかの何かによるものなのか。それを調べる術は今の二人にはない。だが私見を述べることだけは可能だ。カイズは軽く手を挙げた。

「この感じ少し覚えがあるんですよ。ヴィータさんがロストロギア『デスイーター』に取り込まれた時がありましたよね。俺がヴィータ

さんの夢の中に入ったその時に似てる気がするんですよ。さらに世界が区切られてるって言うのも」

「あの世界にもあたしでないあたしがいたんだもんな」

「けどあの世界はヴィータさんの記憶にないものは存在しませんでした。それに俺が何かしても結局のところヴィータさんの記憶通り出来事は進んでいったんですよ」

「その点は全然違うよな。……八神堂の面々とはしつかり交流できてるし、アインスの夢が建築家なんてあたしの記憶じゃ欠片だって思えないだろうしな」

この二週間、八神堂には何度も足を運んでいる。その中で八神家のメンバーと交流を深め、その際にアインスの夢の話聞いた。空に還ったアインスがそんな夢を持つなど意識、無意識関係なくヴィータは絶対に思わない。それは彼女と会ったことのないカイズも同様だ。「俺からはこんなところですよ」とカイズがメモ帳を閉じると、今度はヴィータが話し始める。

「覚えがあるのは闇の書事件の時のフェイトの資料だ。闇の書が覚醒を初めた時に、なのはとフェイトがアインスを止めてた。けどその戦闘中にフェイトが闇の書の中に閉じこめられちゃったんだよ」

「あー、確かにそうですね。でもその時のことってあまり詳しく知らないんですよ。俺はヴィータさんの記憶の映像を見ていただけですし、事件の資料自体おいそれとみれる訳じゃないので」

そうは言っても俯瞰的に事件を見ている分話が早い。ヴィータは昨日のうちにまとめておいた資料に目を向けた。

「闇の書の中では夢を見せられていたらしい。ジュエルシード事件を起こしたプレシア・テスタロッサや姉のアリシア、アルフやリニスに囲まれた何不自由ない生活。何もかもがうまくいった幸せがそこにあったみたいだな」

「何もかもがうまくいく。……それって今の世界と似ていますよね」

「言葉だけならな。けどその世界は主観的な幸せだからこそ抗い難いものだったらしい。……今あたしたちが見ている自身が存在しない俯瞰的なものとは違うんだよね」

そう言葉にするとヴィータの胸がズキリと痛む。だがその感情もこの二週間で些か慣らすことができた。ヴィータは一呼吸置くと話を続ける。

「今まで現実で起きていたことが実は嘘で、夢の中で起きていることが現実であると思わせるほど幸せな夢。それが闇の書で見せられたものらしい」

「そう考えるとやはり違いますよね。この世界には全く別のヴィータさんが存在します。それに………ヴィータさんの心情を考えたらとても幸せな夢とは言えませんし」

「まあ、そうなんだよな」

二人は意見をまとめるが、それによって多くの疑問が溢れていく。まずこの世界は誰かの記憶ではないこと。次にこの世界は夢と現物をすり替えようと企んでいるわけでもない。それが狙いなら同一人物の存在や世界に区切りなどを用意する意味がないからだ。最後に自分たちが誰かの罠かかっているという考え。しかし罠にかかった時点で今の二人には対抗手段がない。デスイーターのように夢の中で殺そうとするものがあるならすでに現れているだろう。

どれだけ考えてもこの世界に二人を閉じこめる理由がわからなかった。ヴィータもメモ帳をパタンと閉じる。そしてわざとらしくため息をついた。

「正直、手詰まり感が強いんだよな。これ以上調べられる場所がないしな」

「明日はどうしましょうか。また八神堂に出向きますか?」

「正直今はそれくらいしか考えられないよな。カイズは他に何かあるか?」

そう質問されると、カイズは少し考えるように顎に手を添える。

「もし自由時間をいただけるのでしたら、少し出向きたい場所があるんですが大丈夫でしょうか」

「そしたら明日は別行動にするか」

ヴィータは理由も聞かずにあっさり承諾した。その代わりにジーンと彼の方を見つめると立て続けに言葉にする。

「……ただし絶対に変な無茶をするなよ」

「それは大丈夫です。俺が無茶をしてどうにかなるなら、もうとつくに解決していると思いますし」

「……………信じてるからな」

「はいっ！ ヴィータさんこそ俺いないところで絶対無茶なことしないでくださいね！」

「わかってるよ〜」

今日の会議はこれでおしまい。二人はテーブルから筆記用具を片づけると夕飯の用意に取りかかった。

カイズはまな板と包丁を取り出すと気持ちのいい音を立てて野菜を切り刻ぎんでいく。次に深めのフライパンを用意するとそれに熱を通し始めた。

「ヴィータさん、中華鍋つてどう思います？」

「またその話かよ。普通のコンロじゃ絶対熱が足りないと思うぞ。あと鍋だけで洗い場がいっぱいになるから面倒だぞー」

「うーん、まあそうですね。……そうですねー」

海鳴市にやってきて約一ヶ月、さらにこの正体不明の場所に来て二週間。その間にカイズは料理に、特に中華にはまり始めていた。元々男飯としてチャーハンは嗜んでいたが、ヴィータがおいしく食べる姿を見て火がつき始めたようだ。

カイズは下味をすませた牛の引きもも肉の入ったボールを取り出す。深めのフライパンに油を引きもも肉を油通し、さらに先ほど切ったたけのこ、最後にピーマンを加え炒める。

「でも新居の時に業者にいろいろ提案してみれば……」

小さな声でボソボソ言いながら、フライパンの中身を別の皿に移す。その後余分な油を切り、ねぎとしょうがとオイスターソースを入れて軽く炒め、再び強火で皿の中身と共に手早く炒めていった。

「押忍！ チンジャオロースーの完成です!!」

フライパンから耳心地のいい油のはねる音が聞こえると、深めのお皿にドンと盛られていく。包丁使いもかなり慣れたのか具材はほぼ均等に揃えられているようだ。ご飯が何杯でも進みそうな香ばしい

匂いがヴィータの食欲をかき立てる。

「（これはあたしもうかうかしてられないな……）」

味噌汁とご飯をよそいながら、嫁という自分の立ち位置に一抹の不安を覚え始める。だが悩んだところで急激に料理がうまくなるわけではない。今は素直に出された食事を楽しもう。

「いただきます！」

合わせていた手を離し箸を取る。腹が減っては何とやら、二人は夕飯をかきこんでいくのだった。

八神堂へようこそ

◆ side ヴィータ

八神堂に行くときには常にカイズと一緒にだった。そのため今ヴィータの足取りは少し重めだ。

「いや、これもいい機会だな。……よし、頑張ろう！」

この世界の八神家に関わっていくと決めたのは自分自身だ。太股を軽く叩くと自身に活を入れた。

「(この世界から抜け出す突破口が見つからないまま、人間関係の構築は何よりも優先するべきことだ。特にこの狭いエリアで、八神堂の存在は一際大きな存在だからな)」

この二週間で通い慣れた道を進んでいく。そして迷うことなく八神堂へ入店した。

「あつ、ヴィーラさんいらっしやーい！」

はやては髪を前から後ろにかきながすような謎のポーズで出迎えてくる。毎度のことながら元ネタが分からないが、「また来ましたー」と小さく手を振って応える。

「ヴィーラさん、今日もブレイブデュエルやっていきますかー！」

「はい、そのつもりです」

「いやー、連日ありがとうございますー。ヴィーラさんみたいなボンキュボンな女性がブレイブするだけで、八神堂は今日も大盛り上がりですー」

「あ、あははは、それなら、ええと、よかったです」

ヴィータは少し乾いた笑いをあげる。開幕セクハラももう慣れたものだ。だが「よかったです」という言葉に偽りはなかった。

この二週間で分かったことなのだが、ブレイブデュエルをできる施設は大きく分けて三つ存在するらしい。

一つはなのはやフェイトが所属する(らしい?) ショップT&H。二つ目にブレイブデュエル総本山と言われるグランツ研究所。最後にこの八神堂だ。

T&Hは期待の新星であるのは、さすが、アリサの存在。そして

観客を取り込む見事な実況をするアリシアと男女問わずファンが多いフエイトの存在がシヨップを盛り上げている。

グランツ研究所は総本山と言うこともあり、腕に覚えがあるメンバーが出向いているようだ。ブレイブデュエルのロケテスト第一位がいるのも看板としてはかなり大きいようである。

そんななか商店街や子供たちには圧倒的人気を誇るが、八神堂はどこかパンチが欠けているようである。小ヴィータの気持ちは以前に感じたが、その他の八神堂のメンバーが大学や専門学校の都合もあり、なかなかブレイブデュエルに参加出来ないことも要因らしい。

「(さらにはやては古書店もやってるんだもんな。……そりゃ手が回らねえよ)」

ヴィータの考えなどつゆ知らず、はやては楽しそうに話を続ける。

「本当に感謝してるんですよ。ヴィータがお子さまや商店街に人気を取り、ヴィーラさんがお兄さんお姉さんの人気を得る。ふっふっふ、八神堂は安泰やー」

「わ、私自身あまり感じてませんが、それなら何よりです」

「あー、それはそれとして、私の方がずっと年下ですから、敬語でなくて大丈夫ですよ」

「……いえ、年は関係ありませんよ。はやてさんは立派な社会人ですし、このままでいさせてください」

「うーん、いけずやなー」

ブーブーと抗議されるがその境目を崩す気はない。見た目こそ昔のように幼いが、今日の前にいる人物は自分の知っている『八神はやて』という存在にあまりにも近すぎる。

もし一人称を戻してしまったら。もしいつも通りの話し方をしてしまったら。きつとどこかでボロが出てしまう気がした。この世界ががよくわからない状態で、自分がヴィーラではなくヴィータであるとバレるのはできれば避けたかった。はやては頬を膨らませたまま言葉を続ける。

「でもアインスにはタメ語なんですよねー」

「あー、それはその。……昔の友人にそっくりだったので、その流れ

で」

「ブーブー、私もヴィーラさんの友達にそっくりだったらよかったですー」

本当はそっくりどころか、違いを見つかるほうが難しいくらいだ。ヴィータはどうしたものかと思いつながら、もう一つの用事を口にした。

「そつ、そうだ。実はカイ、ん、んんつ、夫が最近料理にはまっています。それで何か料理本を見繕っていたけると助かるんですけど」

無理矢理話の梶を切る。はやてのほうもこれ以上冗談混じりでもふてくされは失礼だとわかつているようで、すぐにレジから身を乗り出してきた。

「カイズさんにプレゼントですか？」

「いえ。……………旦那に負けられないように私が勉強しようと思ひまして」

「あー、なるほどです。お嫁さんとしてはそれはちよつとプレツシャーですもんねー。ちなみにどういった料理がいいですか？」

「……………和食がいいですかね。昔、大切な家族によく作ってもらったので」

「あつ、和食なら私も得意ですよー。私が参考にしてるレシピ本があつたと思いますから、ブレイブデュエル後にもお渡ししますねー」

「ありがとうございますー」

「いえいえ、こちらこそ毎度ありがとうございますー。あつ、お客さんが来たみたいですので、こちらへんで。楽しんでいってくださいねー」

はやてはにこにこ声を上げヴィータに手を振る。そして「いらっしやませー、八神堂へようこそー」とお客さんに対応していくのだった。

その小さくも頼もしい背中を見送ると、ヴィータは地下のブレイブデュエル施設へと向かうのだった。

紅き台風の目

◆ 「リライズアップ！」

その言葉とともに着慣れたバリアジャケットとグラーフアイゼンが装備される。

ブレイブデュエル。この世界で流行の兆しを見せている体験型VRゲーム、それを今ヴィータはプレイしていた。

初めは八神堂メンバーとの会話の切っ掛けくらいと思っていた。だが実際にゲームを始めると、なかなかどうして侮れないものだった。

「(デバイスや魔法の力がなくなって、イメトレぐらいしか出来ないって困ってたけど。……これはかなりの練習になるな)」

管理局での訓練に負けずとも劣らないそれは、実戦勘を養うには最適だった。唯一の難点をあげるとすれば、技やデバイスのモードチェンジをするときに専用のカードが必要になるということだろう。

通常、デバイスはゲーム開始時にランダムに割り振られるらしい。そしてゲームを楽しむ行程で多くのスキルカードを手に入れられるようだ。

しかしヴィータとカイズはこの世界迷い込んだ時からデツキホルダーとカートリッジを持っており、すでにデバイスとスキルカードを数枚所持していたのだ。

「おっと、ちゃんとゲームには集中しねえとな。スキルカードスラッシュ『ラケーテンハンマー』」

相手プレイヤーの接近を感じるとカードを取り出しそれを読み込ませる。グラーフアイゼンはその形を鋭利なものに変えていく。

『ラケーテンハンマー』はヴィータが初めから所持していたスキルカードだ。この他にも数枚のカードを所持してはいた。

「(でもやっぱり、手数が少なすぎるよな)」

馴染みのあるスキルがあるとは言え、歴戦のヴィータにとってスキル数に限りがあるのは少し辛いところだ。また幾度と続けた訓練に

よって、対応するカードがないのに考える前に反射的に体が動いてしまふところも今だけは足枷となっていた。

スキルを増やすためにはゲームを遊びポイントを貯める。またはローダーと言われるガチャを回さなければいけない。

ヴィータ達の懐具合は元の世界と通貨が同じなこともあり十二分なものだった。だがいつまでこの世界に滞在しなければいけないか予想がつかないこと。

さらにガチャというのは言ってしまうえば運だ。商売として行っているのだから仕方がないことだが、出来ればはまりたくないと言うのが二人の考えだ。

「それに——なっ！」

ラケーテンハンマーのブーストをうまく使い敵プレイヤーの攻撃をかいくぐる。ヴィータはそのまま無傷で接敵しとバリアを避け、そのまま相手プレイヤーをぶち抜いていった。

相手のHPが0になったことを確認すると、グラーフアイゼンをトントンと肩に当てる。

「それくらいのハンデで負ける気はねえんだよ」

ブレイブデュエルにおける戦闘に慣れておらず、ワンテンポタイムングがずれることはある。だがそれで後れをとるほどヴィータが潜ってきた修羅場は甘いものではない。

『WINNER ヴィーラー!!』

ヴィータの顔が大画面に映し出されると大きな歓声があがる。その声は小ヴィータの時とは違い、些か大人びたものが多かった。

『破竹の三十連勝』『紅き台風の目』『大人のお姉さんなら八神堂にお任せ』など様々な言葉が客席で交わされる。きつと最後のははやてが流行了らせたものだろう。

正直普段の自分の姿を噂されるなら羞恥心もあつただらうが、今の自分は偽りの姿だ。その仕込みに逆に申し訳ない気分になつてしまふ。

「少しでも店の役に立ってるならそれでいいけどな」

今日はこれくらいにしておこう。VRルームから退出すると見慣

れた銀髪の女性と目があった。

「お疲れ様ヴィーラ」

「おつ、アインス。今日はまだ学校はいいのカー？」

「まだ少し時間に余裕があつて、少し顔を覗いておこうと思つたんだ。あつ、そうだ。我が主がこれを渡しておいてくれと言つていたんだ」

アインスに渡されたのは『和食大全』と書かれた専門書だ。先ほどはやてが言つていたおすすめの本だろう。ヴィータはそれを受け取る。

「これいくらだ」

「お金はいいみたいだぞ」

「いや、流石にそう言うわけにもいかないだろう。道楽で店をやつてゐるわけじゃないんだし」

「それは我が主から個人的なプレゼントのようだよ。ほら、付箋がいくつも張り付けてあるだろ」

アインスにそう言われ改めて専門書を見る。使い込まれているのか表紙はかなり折れ曲がつている。さらに張られていた付箋には『おすすめレシピ』などのメモも書かれていた。これは確かに私物のようだ。だとしてもヴィータは貰いあぐねてしまう。

「うーん、そうは言つてもただでもらうのは」

「我が主はその本の料理を全てマスターしているから問題ないと言つていたよ。それに誰彼かまわずこういうことをしているわけではない。今店を盛り上げてくれている。そして私の友達であるヴィーラだからこそ気にかけてくれているんだと思うよ」

「うーん、そう言われると貰わないつてわけにはいかねえんだよなー。じゃあありがたくもらつて、今度お裾分けでも持つてくるつてことで」

「ああ、私も楽しみにしているよ」

本当に楽しみにしていると表情でも伝えてくる。するとアラームの電子音がアインスのポケットから聞こえてきた。

「もうこんな時間か。さて本も渡せたところで私はそろそろ学校に向かおうと思うがヴィーラはどうする？」

「私も今日はこれくらいにしておこうと思ってたんだ。じゃあ途中まで一緒に行くか」

「ああ、そうしよう。あれカイズさんは？」

「今日は別行動。何をしているやら」

ヴィータがそう言った瞬間、物陰からスツと青い毛並みの狼、ザフィーラが姿を見せた。

『そういうことなら俺がついて行こう』

「おっ、ありがとうなザフィーラ……さんっ！」

呼び捨てにしそうなところを何とか持ちこたえる。ザフィーラは特に気にしていないようだ。彼は歩き出す二人に対しつかず離れずの距離を保ち始めた。そんなザフィーラをチラリと見ながらヴィータは「うーん」と首を傾げた。

「（この世界って魔法とかないのに、動物が普通に喋ってるんだよな。ほんとなんかよくわからない世界だよな）」

そんな世界で出来るだけボロを出さないように、ヴィータは細心の注意を払いながらアインスの隣を歩いてくのだった。

彼女の本当に帰りたかった場所



いつもはカイズが気を利かせて話題を振ってくれるが、ザファイラは逆に気を使って会話には入ってくる気がないようだ。

だが現状のことを正直に話すわけにもいかず、そうだとヴィータは疑問をぶつけた。

「この街での仕事を終えたら、地元で家を買おうと思ってるんだけど。何かアドバイスとかないかな？」

夜間学校でアインスが建築関係を学んでいると言うのは少し前に聞いた話だ。ヴィータの質問にアインスは少し口ごもる。

「アドバイスといつてもまだ勉強中の身、ありきたりなことしか話せないぞ」

「こっちはそのありきたりもわからないんだ。教えてくれよアインス」

ヴィータがそう言うのとアインスは片眉を撫でしばらく考える。

「まず意外かもしれないけどお風呂やトイレの水回りかな。お風呂の広さはもちろんのこと、湿気対策や日用品を置けるスペースがあるかは必ず見ておいた方がいい。あとは通勤や子供が出来たときの通学の便も考えておいた方がいい。あとエアコンが備え付けられているならその年代を——」

などなど。ありきたりなことと言っただけだが、ヴィータが考えもしなかった注意点を次々とあげてくれた。これだけ熱心に話してくれるのだからと、ヴィータはポケットからメモ帳を取り出ししっかり記入していく。

「それとあと共働きなら室内洗濯置き場なども………つとすまない。何だか思いつきり喋ってしまった」

「いやいや、すっげえ参考になったよ。ありがとうなアインス！」

満面の笑みで応えるとアインスもまた笑顔で応える。ヴィータは彼女の建築への情熱を聞くと、本当に単純な疑問が思い浮かんだ。

「どうしてアインスは建築関係の仕事に就こうと思ったんだ？」

シグナムが剣道の師範代をしているのも、シャマルが医学生なのもイメージ通りで予想がつく。だが彼女がどうしてそのような夢にたどり着いたのかヴィータは単純に気になったのだ。

アインスは少し気恥ずかしそうな顔をしながらも、正直に答えてくれた。

「自分でも何でかあまりわからないんだ。だがなぜか家、というか皆が帰る場所を昔から大切に思っていたんだ。家に帰ると誰かが迎えてくれる。そして温かな気持ちで誰かを迎えてあげれる。そんな家族が安心して暮らしていける仕事に携わりたい。それが私の始まりの願いなんだ。……おかしいんだ。私は何不自由なく今まで暮らしてきたはずなのに、こんな感情がわき上がるなんて」

アインス自身、本当にどうしてと思っっているのだろう。だが彼女に分からないことがこの世界でただ一人、ヴィータにだけはわかってしまったのだ。

ここはきつと全てが救われ望まれた幸せな世界。プレシア・テストアロツサは二人の娘に囲まれ、ハラオウン家は闇の書事件に巻き込まれていない。

あの雪の日。アインスはしつかり覚悟を決めていた。はやてを、ヴォルケンリッターを、そして全ての幸せのために彼女は空に還ったのだ。

だが思わないわけがない。願わないわけがない。もしそれが叶うのなら、きつと彼女は帰ってきたのだ。はやてが待つあの暖かい家へ。

「ど、どうしたんだヴィーラ！」

「……………えっ?」

アインスこそ血相を変えてどうしたのだろうか。ヴィータはそう言おうとするが、なぜか言葉が出しにくい。ヴィータは困惑しながら頬に触れると、大粒の涙がいくつも流れているのがわかった。

「あれ、あれれ?」

涙声でうまく言葉に出来ない。このままではまた怪しまれてしまう。そう思いながらもアインスの心の底の本心に気づいてしまった

ヴィータは泣くことを止めることが出来なかった。

「ご、ごめん、今日は帰、あつ」

その言葉は最後まで声にならなかつた。ヴィータはアインスに引き寄せられるとそのまま力強く抱きしめられる。

「ヴィーラがどうして泣いているか私にはわからない。だから私にはこうすることしかできない。……不甲斐ない私をどうか許してほしい」

「そんな、許すも何もアインスが、アインスは………うつ、あああつ、うああああああつ！」

今わかつた。この世界は夢でも幻でもない。アインスは確かにここにいる。彼女の声、彼女の鼓動、彼女の熱、そして彼女の願いを知りたい、ヴィータにはもうこの世界がただの異質なものとは思えなくなってしまうていた。

自分はこれかどうしたらいいのか、どうすることが正しいのか。何も分からず、何も答えられず、ただ、ただヴィータはアインスの胸で泣き続けることしかできなかつた。

本気の遊び

◇side カイズ

「ヴィータさんは大丈夫だろうか」

少し後ろ髪引かれる気持ちはある。だが自分が緩和材になり続けるのはヴィータは前に進めない。さらに自身もこのままではいけないという想いが彼に一つの決意をさせた。

目的地に向かう途中、メモ帳を取り出す。そしてそこに書かれた『対戦成績』の項目の○を数えた。

「個人戦は三十戦十九勝十一敗。やっぱりここ最近負けが込んできているな」

デバイスがない今、ブレイブデュエルは二人にとって頼れる練習施設となっている。そのなかでヴィータは連勝を重ねてメキメキと頭角を現していた。

だがカイズの成績はあまり振るわなかった。いや、勝率で言えば六割越え、そこまで悲観するほどではないだろう。しかしそうであつても最近では頭打ちを感じていた。

もちろんカイズ自身の実力もあるだろう。だがそれとは別に、ここぞというところで決めきれないことがここ最近多かった。

「ブレイブデュエルはあくまで体験型ゲーム、プレイヤーはそれぞれ本気で遊びに来てるんだ。……一切危害のない安全なゲーム、だからこそ皆必死の全力で向かってくるんだよな」

普段のカイズは管理局の訓練とヴィータによる扱きを受けている身だ。普通ならそう易々と他に遅れを取ることはない。だがその二つの訓練は強くなることと同時に、『生きて帰る』ということが常にセットになっている。カイズ自身、結婚式前にはやて達に宣言したように絶対に無理をしないと心に誓っている。

「だからこそ俺は土壇場で逃げ腰になる。最近はそのを突かれて負けることが多いんだよな」

ブレイブデュエルのプレイヤーは当然ながら死を恐れていない。ゲーム内でどんなにダメージを受けようが、脳にも体にも心にも問題

はないからだ。それ故、一か八かの捨て身の特攻を仕掛けてくるプレイヤーが多くみられた。

「特に俺くらいのランクだとそれが顕著なんだよな。まあそれもそうだよな。どれだけ被弾したって最終的に勝ったものがゲームを征するんだから」

ランキング上位の小ヴィータであっても、勝てると思ったときは多少の被弾も辞さない。それは初めてブレイブデュエルを見たあの日から変わりなかった。

そう、負ける理由がわかっているならカイズ自身もそうするべきなのだ。だがそれではわざわざブレイブデュエルをする意味がない。目先の勝ちにこだわりスタイルを変えてしまつては、本当に大切な時にきつと迷いが生まれてしまう。

「俺が俺のままでも強くなる方法。……本当は直接向かえればよかったけど、街の境目からは抜け出せない。けどあの時と同じ曜日ならもしかしたら」

カイズは小ヴィータと初めて出会つた、大きい公園へと足を運ぶ。「やっぱり俺の知っている海鳴市とは少しだけ違う。……確かあの時はあの辺から出てきたよな」

微かな記憶をたぐり寄せて歩みを進める。カイズは木々が重なり合い表通りから死角になつている場所をしらみつぶしに探す。そしてようやく目的の人物を見つけることができた。相手に気づいてもらえるようにわざとらしく物音を立てると、その人物がカイズを見た。

「……………誰ですかこんなところで」
年齢は高等部くらいだろう。まだ幼さの残るその顔から射抜くようなまなざしが向けられる。

「(高町教導官が初等部ならまだそうでもないかと思つたけど……………これは)」

それは余計な考えだった。いや今の彼は若いからこそ熟練した大人にはない鋭さが見えるくらいだ。

カイズは背負っていたリュックに手を突っ込む。そして四角いそ

れを取り出すと男の前に構えた。その瞬間男が臨戦態勢を取る。だが関係ない。カイズはそれをズズイと前に出すと。――その場で仰々しく土下座をしていった。

「高町恭也さん！　どうか俺に剣の使い方を教えてください!!」

カイズは敵意はないと頭を垂れる。そして老舗の高級煎餅の包みを恭也に差し出した。

「……………うん?！」

臨戦態勢の恭也もさすがに毒気を抜かれましたよ。彼は小太刀を持ちながらではあるが、「まずは頭を上げてください」とカイズに駆け寄ってあげるのだった。

御神の剣



公園のベンチでカイズと恭也は肩を並べて座る。カイズは買ったきた煎餅を開けると恭也に勧める。恭也もまた自販機で買ったお茶を勧めた。

「恭也さんどうぞ遠慮せずに食べてください。あつ、もし毒が入っているとさえば恭也さんが選んだものを俺が先に」

「いえ、それはもう大丈夫です。貴方という人柄は何となく見えてきましたからだ。それにカイズさんなら八神堂さんを經由して妹から聞いたことがあります。お兄ちゃんみたいな小太刀二刀流を武器に戦っている人がいるって。……それで俺の話はどこから?」

「こちらもはやてさん經由ですね。高町教導、じゃなくて

高町なのはさんは実家が剣術をやっているって話を耳にして。えつと、なのはさんが固定してない紙コップをスプーンで貫通させたって話はどこでも有名みたいで」

「なのは。……危ないからあまり人前でやるなど言っておいたのに」

恭也はやれやれと頭を抱える。本当ははやてに聞いただけでそこまで有名ではない。だが話の種のために『すみません』とカイズは心の中で頭を下げた。

恭也に向けて危険はありませんよと言わんばかりにカイズはお煎餅を口に運ぶ。だが恭也はそれに手を伸ばすことなく申し訳なさそうな顔をした。

「剣の使い方ですが。……正直俺には教えることが出来ません」

「いやーそうですかー。……やっぱり駄目でしょうか」

「俺自身がまだ未熟な身ですし、この剣術は血筋でないものに伝える気はありませんので」

「いえいえいえいえ、門外不出の技を盗み出すとか、そんなつもりは全くなくて。とにかく俺の可能性とか見聞を広げたいといえますか」

カイズは仰々しく拝み倒すように頭を下げる。だがその間に恭也から声をかけられることはなかった。カイズは「(流石に駄目か)」と

顔を上げると恭也の真っ直ぐな目とぶつかる。まるで心の底まで見透かすような視線が数秒に渡りカイズをのぞき込むと、恭也は申し訳なさそうに頬を掻く。

「御神の剣を教えられないのは本心です。ですがそれは貴方に剣を教えられない理由の半分でしかありません」

「その他に何か理由が？」

「服の上からの体つきでもわかります。貴方は自己流で鍛えているわけではなく、ちゃんとした師の指導の元に研鑽を積んできてますよね。そんな人がいるのに俺が口を挟むのは違う気がしまして。……あとこれはただの直感なんですけど、少しご無礼をよろしいでしょうか？」

「えっ、はい？——！！」

返事をした瞬間、喉元に突き刺さるような殺気を感じる。カイズは手から煎餅をこぼしながら勢いよく後ろに下がった。すると先ほどまでカイズの首があった場所には恭也の手がある。その手には忍者が持つクナイに似たような暗器が握られていた。

カイズは臨戦態勢のままチラリと背後に目を向ける。そして何があってもいいように逃走ルートを組み立てた。そんな彼の反応を見て恭也は暗器を服の中に滑らせる。そして深々と頭を下げた。

「ご無礼、大変申し訳ありませんでした」

「これは、えっと、ということなんでしょうか？」

恭也から殺気が消えたことがわかると、おっかなびっくりベンチに戻る。だがカイズは先ほどよりも距離を開けており、軸足には力を込めていた。恭也はその軸足を指さす。

「貴方の師は貴方に死なないための訓練をほどこしてますよね。そして貴方自身絶対に死ねないという強迫観念めいたものをお持ちのはずです」

「……………凄い、そんなにわかるものなんですか」

「これでも結構いろいろありましたので」

そこで一度話を止める。そして信用の証と言わんばかりに、カイズの手からこぼれた煎餅を口に運ぶ。それを早口で食べ終えるとさら

に話を続けた。

「貴方が小太刀二刀流を使うのなら、俺の教えは経験になるかもしれませんが。ですが御神の剣は暗殺を主とします。きっと俺から得た知識は、大切な場面で貴方の判断を鈍らせることになると思います。……これが貴方に剣を教えられないもう半分の理由です」

「それは確かに、そうですね。……って、えっと、俺から押し掛けてあれですけど、暗殺剣とか聞いちゃってもよかったですよ」

もしかしてこのまま口封じをされるのでは。そんなこと方が一にもないだろうが、その一を無視できず体に緊張が走る。

恭也はサツと体を動かすと両手から先ほどの暗器を取り出す。それをベンチの上に置き、さらに両手を上げた。それはまるで降伏するポーズのようであった。

「もし貴方の覚悟が半端なものならここまで話すことはありませんでした。しかし貴方は碎けたように話しながらも、その目には藁にもすがるとような必死さが見られました。だからこそ俺も本気で伝えようと思ったんです」

その真摯な思いを聞いてカイズの体から緊張が解ける。恭也は両手を降ろすと言葉を続けた。

「貴方はどうして力を求めているんですか」

また全てを見透かすような目でカイズの瞳をのぞき込む。だが真摯に向き合ってくれた恭也に隠す思いなど何もない。カイズもまた真っ直ぐな視線を彼に向けた。

「一生を賭けて愛したい女性がいます。でも今の俺は彼女を守るどころか守られるばかりで、足手まといにしかなくなってません」

カイズは悔しそうに手のひらに爪を食い込ませる。

「それが恥ずかしいとは思ってません。それだけの実力の差があるのは確かなんですから。でも、だけど、本当に逃げられない戦いがあったときに、俺は足手まといになりたくない。せめて、ほんのひと欠片でも、一握りでもいいから彼女の力になりたいんです。そのために可能性のあるのなら俺は何だって掴みたいと思っています」

自分の弱さは自分が一番よく知っている。カイズは下唇を噛みし

めると叫びだしたい気持ち在必死に抑えつけた。そんなカイズを見て恭也は小さく肩をすくめた。

「愛した女性のために力が欲しい。……強いですね。俺にはまだそこまでハツキリ言っただけられる覚悟がありませんから」

「恭也さん？」

「ですが話したとおり貴方に剣を教えることはできません。きっと御神の剣を習うことは貴方にとってマイナスになると思っていますから」

「……そうですね」

カイズはがつくり肩を落とす。だが恭也の言葉はそこで終わりではなかった。

「なので俺は俺として、カイズさんはカイズさんとして、一緒に鍛えていきましよう。暗殺剣の俺だからこそ、もしかしたらカイズさんが気づけないことに気づけるかもしれないませしね」

「えっ、そ、それじゃあ!!」

「俺も付きつきりというわけにはいきませんが、しばらくの間一緒に頑張っけていきましよう」

「——ありがとうございます!!」

何度も何度も頭を下げる。恭也は「頭を上げてください」とカイズの上体を起こした。その時目にした彼の顔はうつすらとした笑みを浮かべているように見えた。



特に待ち合わせをしたわけではない。だがヴィータが家の前に着くと反対方向からカイズが歩いてくるのが見えた。

「……あれ、おかしいな？」

いつもなら自分の姿を見た途端「ヴィータさーん!」と駆け寄ってくるはずだ。だが今のカイズは駆け寄ってくるどころか、いつもより歩みが遅いくらいだった。

「って、ええっ!!」

いつもとは逆にヴィータが急いで彼に駆け寄る。そしてすぐに肩

を貸した。

「ど、どうしたんだよ！ 全身ボロボロじゃねえか！」

「いやー、あははは。魔法がない世界は世界でめちやくちやハードな
んですねー」

そう言葉にするカイズは服が泥だらけだ。さらに打ち身をしているのかいつもより体を縮込ませているようにも見えた。普段ならある程度はやせ我慢するカイズが、素直に貸した肩に体重を預けている。それは限界である証拠だろう。ヴィータは眉をひそめると不機嫌そうに声を上げる。

「言ったよな、無理なことはしないって」

「いやー無理なことしているつもりなかったんですよ。少なくともあちらは今日は軽い準備運動くらいの気持ちでしたし。……………それに無理をしたのはお互い様ですよね」

「……………えっ」

その言葉にヴィータはギクリとしてみまう。カイズは彼女の目元に触れるとやっぱりと言う。

「何度も顔を洗ったみたいですけど、目が凄く腫れていますよ。すみません、やっぱり今日も一緒に行けば……………」

「それは違うぞ！ アインスと二人だからこそ話そうって、聞いてみようって、そしてこの世界を認めようって決心できたんだ！ だから……………変に責任感じるなよな」

「本当にですか？」

「ああ、本当だ。今更カイズに嘘なんてつくかよ」

「……………ですね」

そう言うとお互いに笑みを浮かべる。

ヴィータはカイズの全身が思った以上にボロボロだったので慌ててしまった。だがこの態度からするにカイズはカイズでヴィータとの約束をしっかりと守っているのだろう。二人は文字通り肩を並べ家へと向かっていく。

今日のことをどこから話していけばいいだろうか。互いにそんなことを考えていると、カイズは思い出したように声を上げた。

「今日は結構動いたのでお腹ペコペコで。夕飯は何の予定なんですか？」

その言葉を聞くとヴィータは左手に持った『和食大全』をキュツと握りしめる。

「それは出来てからのお楽しみだ」

「えーっ、凄い意味深ですね。教えてくださいよヴィータさん」

「ふふーん、内緒は内緒だよ」

と悪戯っぽい笑みを浮かべながら玄関の鍵を開けていくのだった。

この日、二人は確かな一歩を踏み出した。そして久しぶりに心の底からの笑みを見せあったのだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編7 雪解けの想いと火花散る覚悟

外世界の日常



二人がこの世界で過ごし始めてはや二ヶ月。ここは夢でも幻でもないと思われてから気持ちはかなり軽くなっていた。さらにその期間、この世界の住人との交流も深めていった。

八神堂の台所。はやてとヴィータは肩を並べ料理に励んでいる。

「今ですヴィーラさん、ここで火力を落としてください」

「は、はい、わかりました！」

ヴィータははやてに言われると強火から一気に弱火に切り替える。ここまでくればあとは煮込むだけ。ヴィータはほっと一息着く。そんなヴィータを称賛するようにはやてはグツと親指を立てた。

「完璧ですヴィーラさん。これにて八神はやておすすめレシピ中級の伝授は全て完了です。ここまで本当にお疲れさまです」

「こちらこそここまで付き合ってもらって本当にありがとうございました」

ヴィータが軽く頭を下げると、はやては「いえいえ」と手を振る。

「私も改めて基礎を学び直せたからお互い様ですよ。それにここからはいいよいよ上級編、最後までできっちり頑張っていきましょう！」

「お、押忍！」

ヴィータは両手で×の字を切ると頭を下げていく。そんな下げた頭をはやてはポンポンと撫でていった。

「もおー、ヴィーラさん本当に素直で可愛いらしい人です。人妻じゃなかったら是非とも八神一家に加わって欲しいくらいですよー」

はやてにとってそれはただの冗談混じりの日常会話であろう。本気でヴィータを八神家に引き込もうとしてないことはもちろんわかる。

だがそれでもヴィータは嬉しかった。初めてこの世界に来たとき、自分とはやては赤の他人だった。さらに自分のいるべき場所にはすでもう一人のヴィータがいたのだ。

そうであつても、はやては自分のことを認め家族になつて欲しいと言つてくれた。それがどんな感情のものであつても、ヴィータには涙がでるほど嬉しかった。だがここで感情的になつてしまつては、初対面の時と同じだ。ヴィータもはやてのように冗談混じりのトーンで答えた。

「もしその時は温かく迎え入れてくださいね」

「はい、もちろんです」

ここで泣いてしまうわけにはいかない。ヴィータはにじみ出そうな涙を無理矢理押さえ込むと笑顔を向けていった。

◆ 今日には訓練もブレイブデュエルもお休みで公園でデートをしていた。だがヴィータが自販機で飲み物を買っているうちにその予定は狂わされ始めていた。

「お兄さーん、お兄さーん、ごろにや〜」

普段絶対に出さないであろう自身の猫撫で声に寒気が走る。ヴィータは眉をぴくぴくさせると、カイズに体をすり寄せている小ヴィータに目を向けた。

「おい、小娘何してるんだ」

「げっ、出たな無駄おっぱい！ あたしはいまお兄さんと愛を育んでるんだからじゃまするんじゃねえよ！ ねー、お兄さーん。あつ、これ今日の調理自習で作つたクッキーです。食べてくださいーい」

リボンの包装を解くとクッキーを取り出す。小ヴィータはカイズの返事を聞くことなく口元にぐいぐいと押し当てていく。カイズは困つたようにヴィータの方を見た。ヴィータからすれば他の恋敵が作つたものなど食べて欲しくないだろう。だが見た目通り小ヴィータは初等部三年だ。断つたりしたらそれこそあとがどうなるかわかつたものでない。

ヴィータはため息混じりに「いいぞ〜」と言う。カイズは口周りが

クッキーのカスだらけになる前にそれを口に運んでいった。

「きやつ、お兄さん。あたしの指は食べ物じゃないですよ」

——ゾゾゾゾゾゾゾゾツ!!

声も見た目も何もかも同じ存在の行動で全身にさぶいぼが出てくる。

「(あ、あたしは大丈夫だよな。……………だよな?!)」

もしかしたら日頃の行いを改めないといけないかもしれない。そんなことを思いながらも、きっちりカイズと小ヴィータの間に割って座る。

小ヴィータは見るからに不満そうな顔をする。しかしそんなことなど意に介さず、ヴィータはスツと左手を構える。そして薬指の結婚指輪をこれでもかと言うほど見せつけた。

「ぐつ、ぐぐぐぐぐ!!」

悔しがっている自分と全く同じ顔を、ヴィータは勝ち誇ったように見つめていった。

「むつか! お兄さんと結婚してるからっていい気になってるなよ! ブレイブデュエルで勝負しろ! どっちがお兄さんに相応しいか証明してやるからな!!」

小ヴィータは一方的に因縁をつけるとそのままズンズンと歩いていく。こうなってしまうってはもう何を言っても聞かないし、行かなかったら行かなかったで後が怖い。

「これで今日のデートはお終いか〜」

ヴィータは大きいため息をつくときイズを見る。カイズは困ったような顔をしながらも、ヴィータに手を差し伸べる。二人は小ヴィータに気づかれなないように手を握りながらその後についていくのだった。

◇

「(恭也さんどうしたんだろう?)」

カイズがそんなことを思ったのは今日の訓練を終えた頃だ。訓練中はそれどころでなく気づかなかった。だがハンドタオルで汗を拭く恭也は心そこにあらずに見えた。

聞いてみるべきだろうか、それとも触れない方がいいのか。カイズが悩んでいると、恭也が意を決したように口を開いた。

「いきなりこんなことを聞いて申し訳ないと思うのですが。……女性は何をプレゼントされたら喜びますかね」

「女性ですか。……おおっ」

恭也の口から女性の話が出てきたことに、疑問や驚きよりも感嘆の声があがってしまう。だがこのルックスに性格だ。ガールフレンドがいてもおかしくはないだろう。

「恭也さんは行き詰った俺に手を差し伸べてくれた。いま役に立たなくていつ役に立つんだ！」

カイズは思考をフル回転させる。

「学生同士ならそこまで変なものでなければ、いや、変なものだったとして結構笑って受け入れてくれるとは思いますが。ちなみに趣味は何わかったりしますか？」

「趣味というか、その領分を越えて本気で機械弄りをしていますね。あとゲームもかなり得意みたいです。ただ俺はアナログな人間なのでどちらもあまり詳しくはないですよ」

「恭也さんの趣味は盆栽とか囲碁ですもんね。……えっ、凄いですね。かなり真逆に見えますけど」

「確かにそうですね。……正直俺は感情を表に出すのがあまりうまくありません。逆に彼女は元気で笑顔を絶やささない女性で。その明るさにはいつも助けられています」

「おおっ……！」

再び感嘆の声を上げてしまう。きっと恭也にはその気はないのだろうが、彼が惚気を言うとは思わなかったからだ。普段無表情な分、照れ笑いが何とも愛らしい。男のカイズがそう思うのだから、きつと甘いマスクにその女性も落とされてしまったのだろう。

カイズが言葉を出せないでいると、恭也が言葉を続ける。

「それに彼女、かなりの資産家で大体のものは手に入られると思うんですよね。だから俺自身どうしていいのかわかりわからなくて」

「あー、うーん、なるほど、そういう感じですか。いやー、それは男に

とって結構プレッシャーですよ。……えーつと、まず言えるのが、機械関係やゲーム関係のプレゼントはやめたほうがいいと言うことです」

「えっ、そうなんですか？」

「普通の学生なら相手の趣味に合わせたもので全然いいと思うんですよ。ですが剣術をここまで鍛え上げた恭也さんが、『趣味の領分を越えて本気で』って言っているってことは、それこそ学生レベルを越えていると判断します」

「そうですね。疎い俺でも分かるレベルです」

「そこまで本気だとそれに見合った道具やアイテムをすでに持っていると思うんですよ。例えば恭也さんが剣術をしているからって、プレゼントにサーベルを渡されても困りますよねえ。でも彼女からのプレゼントだから何とか使ってあげたい。しかしそれではパフォーマンスが落ちることになり、お互いにギクシャクしちゃうと思うんです」

「……………なるほど、凄く分かりやすい例えです」

恭也がここまでの話を飲み込んだことが分かったと、さらに話を続ける。

「ちなみに恭也さんの彼女はブレイブデュエルをしたことはありますか？」

「いえ、彼女の妹はもう常連らしいですけど、彼女自身はまだ行ったことないと思います」

「だったら彼女を誘って二人でブレイブデュエルを初めて見てもいいかもしれないですね。体を動かすことが得意な恭也さん。そして機械弄りとゲームが好きで彼女さんしてみれば、最新技術の集合体みたいな存在は凄く刺激になると思うんですよ」

「それは……………そうですね、喜んでくれそうですね」

その姿を想像したのだろう。恭也は納得のいったような顔をした。最後にカイズは自身の左薬指の指輪を見せた。

「二人とも学生だから指輪って訳にはいけませんけど。デートの終わり際に普段使いでも邪魔にならないプレゼントしてあげるといい

と思います。ネックレスでもキーホルダーでもストラップでも、あつ、でも腕時計とか髪飾り、バック、財布とかは好みがでるからNGで。……まあここまで話しましたが恭也さんからのプレゼントなら何だって喜んでくれそうな気がしますけどね」

恭也が選んだ女性なら実際にそうなのかもしれない。だがそれで納得できるなら彼自身相談することはなかっただろう。自分に言えることは全て伝えた。カイズは何うように恭也の顔を見る。

「——ありがとうございます！」

霧が晴れたように表情が明るくなる。恭也はスツと手を差し出した。カイズも手を差し出すと、ガツシリと力強く手を握られる。役に立てたのなら幸いだ。カイズもまた力強く手を握り返してくのだった。

二人はこちらでの生活が段々と日常に染まりつつ過ぎしていく。そんな生活に光明が指したのはさらに一ヶ月後だった。

信じるべき人



初めからこの街で過ごしていたように滞りなく日々を送っていく。だがそう思いながらも、元の世界のことは片時も忘れなかった。

ヴィータは家のソファアークに体を預けるとぐぐーっと体を伸ばす。

「あーもー、あたしたちはどうしてこの世界に落ち込んだんだー。無力化して襲ってくるわけでもない。徐々に記憶を改竄して取り込んで行くわけでもない。理由が全くわからねえ！」

「もう三ヶ月を超えましたしね。でも正直どうしようもないことに変わりないんですねー」

ソファアークに座っているヴィータの頭にカイズはボスンと顎を乗せる。決して楽観視しているわけではない。だがするべき努力をしてどうにもならないのだ。これ以上何をどうしていいかわからない。それが正直なところだ。

今日も今日とて当たり障りのない日常を過ごしてくのだろう。そう思っていた二人にその日は確かな変化が訪れたのだ。

——コトン。

テーブルの上に固い何かが落ちる音が聞こえる。そちらに目を向けると、先に声を上げたのはカイズだった。

「イ、イノセントハート!?!」

ヴィータも声こそ上げなかったが見間違えることはない。このチェーンに通された二振りの待機モードデバイスはヴィータ達八神家が作り上げ、プレゼントしたものなのだから。

ここはブレイブデュエル内ではない。ちゃんと実体のあるそれを手に取るとすぐに画面が表示された。

『どこまで世界に干渉されずに済むか分からないため、演算に優れるカイズ君のインテリジェンスデバイスを勝手に使ったこと。そして足跡を辿るのに三日もかかってごめんなさい。時間がないため、取捨選択し出来るだけ手短かに話していきます』

映像に映し出されたのは高町なのはの姿だ。その後ろでは見知っ

た顔が何やら慌ただしく作業をしており、それだけで今が緊急事態であることが見て取れた。世界の干渉とは？ と二人は思うがこれはあくまで映像だ。ヴィータは口を挟むことなく、食い入るように映像を見た。

『二つ目、二人と連絡が取れないようになってから海鳴市でロストロギアの反応が見られました。でもそれはロストロギアと言うにはあまりにも微弱でロストロギアの欠片、もしくは種と言っていいレベルでした。搜索チームの間ではこの存在をシードと呼称しています。……今までの視察でこのような反応は一切見られなかった。なのにどうして二人が巻き込まれたかは目下解析中です』

映像のなのは人差し指と中指をあげ画面に見せる。

『二つ目、二人がいる場所がどのようなところかはこちらではわかりません。ですがそこは幻覚や記憶改変などではなく、確実に存在する世界、そうであつても私たちの存在しない場所。平行世界だと思われれます』

カイズはその言葉に覚えがあるのだろう。息を飲むのがわかる。

『その世界は存在しており、そこにいる人々はその生活があります。なのでこちらの世界からの介入や実力行使は出来るだけ避けたいと言るのがこちらの考えです』

避けたいと言うことはその気になれば介入行動は可能なのだろうか？ いや、この世界にカイズのデバイスを送れたのだ。どちらにしても時間の問題ではあるだろう。だがなのはの考えにヴィータは心の底から感謝した。

「あたしだってこの人たちに迷惑かけたくねえもんな」

ヴィータの言葉など聞こえているはずもなく、なのははさらに薬指を立てる。だがその瞬間じわじわと映像が乱れ始めた。

『三つ目、ヴィータちゃんたちが平行世界に行つた際にロストロギアの欠片、シードもそちらの世界に渡っているはずですが。シードは元々はこちらの世界で観測されたもの。それをそちらの世界で何とか解析し座標を確認して、何とかこちらにコンタクトをシ、シシ、テテテテテ』

——ザアアアアアアアアア！

灰色の砂嵐が流れると映し出された画面が消える。カイズは手を震わせながらイノセントハートを握りしめた。

「だ、大丈夫なのかイノセントハート!?」

『問題ありません。ですがこの世界に私はテクノロジーとして存在していないため、起動するには不備があるようです。……しばらくの休養をお許しください』

「……ああ、また元の世界だな」

『サンキュー、マスター』

最後のそう電子音をあげると光がゆっくりと消える。物言わぬイノセントハートをカイズは力強く握りしめた。だがカイズは意気消沈しているわけではない。その目はまるで逆巻く炎のように力強かった。

「ヴィータさん！」

「ああ、わかっているよ。あたし達のためにも。この世界の優しい人たちに迷惑をかけないためにも。……絶対シードを探し出すぞ！」

「——はいっ！」

やるべきこと、やらなければいけないこと、やらせてはいけないこと、全てを理解する。二人は気合いを入れ直すと外に出かけて行くのだった。



二人は足を棒にしながらも移動可能エリアを探し続ける。だがその意気込みをあざ笑うかのように、二人は何の成果も得ることはできなかった。

シード捜索から二週間。今日も今日とて走り回っていたヴィータは、休憩のためベンチに座る。そしてパンパンに張った太股をほぐす。遅れてきたカイズはミネラルウォーターをヴィータに渡しその隣に座った。

「いやー、見つかりませんねヴィータさん」

「まあ正直どんな姿形してるかわからないわけだし。……そう簡単に

「見つからねえよな」

「例えそれらしい物を見つけても魔力がない俺たちには、それをロス
トログアだと判別すること事態難しいですしね。……それにシード
が人の家や地中深くにあった場合それこそお手上げですよね」

このままなのは達からの第二報を待つべきなのだろうか。だが前
回の通信を見る限り、こちらでの一ヶ月はあちらでの一日。連絡待ち
で無為に過ごすという考えは、どこことなく危ない予感がしていた。

そんな中一つの可能性が浮かび上がっていた。だがそれをして本
当にいいのだろうかという思いもある。だがここまでどうしよもな
ければ、ある程度手段を選んでいる場合ではないのかもしれない。

ヴィータはハンカチで額の汗を拭くと、ペットボトルの中身を三分
の一ほど飲み干す。そして決意を固めた。

「一つ提案があ、えっ!!」

二人は戸惑いの声まで被ってしまう。互いに目をぱちくりさせる
と、カイズが「どうぞ、どうぞ」とヴィータ言葉を促した。

「あつ、えーつとな。……もういつそ信用における現地人に力を借り
るしかねえと思うんだ。説明はぼかしぼかしにはなると思うけど、そ
れでもあたしたち二人じゃ限界があると思うしな」

「俺もちょうどそう思っていました。俺たちだけじゃ探せる場所も限ら
れてますし。……それに方が一シードが俺たちの移動可能エリア外
にあつたらお手上げなんですよね」

この世界の作りからしてそれはあまり考えたくない。だが最悪は
想定しておくべきであろう。

「あたしはアインスに当たってみようと思う。八神堂の皆に伝えるか
はその時次第だな」

「活動エリア内で八神堂さんが味方になってくれれば、かなり顔が利
きますしね。……俺は恭也さんに事情を話してみようと思っていま
す」

「なのはの兄ちゃんにか?」

「はい。恭也さんは紳士で口が堅い人です。それに寡黙な方ですけど
かなり交友関係が広い人みたいで。機械弄りが得意な彼女さんもい

るみたいなので、八神堂さんとは違った意味で顔が広いと思うんですよね」

「……よし、じゃあ決まりだな！」

ヴィータは残りの水を一気に飲み干す。そして疲労困憊の脚に活を入れた。

「善は急げですね！」

「おうっ！」

ペットボトルをゴミ箱に捨てると二人は背を向ける。そして信用に足るべき人の元へと足を運んでいくのだった。

あの日のあの場所で

◆ side ヴィータ

八神堂に来るのは習慣と化していた。だがここまでの緊張感は初めてだった。ヴィータは店の前で何度も何度も深呼吸をする。そして頭の中で会話をシミュレートした。

「はあー、いきなりこんな話して変に思われるだろうなー」

この数ヶ月で信頼と信用を重ねた。それ故に突拍子のないことを話すのは少しはばかられた。

「まあそれも今更かもな。こっちは初対面で思いつき醜態さらしてるわけだし。……悩んでてもしょうがねえ、行くかー」

気合いを入れて八神堂に足を踏み入れる。そしてヴィータの覚悟を試すかのように、すぐにアインスと対面した。

「こんにちはヴィーラ、今日もブレイブデュエルかい?」

「いや、今日は個人的なことを相談に来ただけだ。いま大丈夫か?」
そう言われるとアインスはレジのはやてをチラリと見る。はやてはそれに気づくと「ごゆつくり」と笑顔で手を振ってくれた。

「そしたらどこで話そうか? 相談だったらうちのリビングの方がいいかな?」

「いや、出来れば誰もいないか、あまり人が立ち寄らない場所が都合いいんだけど。どこかそんな場所あるか?」

声のトーンとその表情から何かを感じ取ってくれたのだろう。アインスは真剣な眼差しを向ける。

「そうか、それなら。……ちよつと一緒に来てくれないか」

「……わかった」

アインスに連れられ地下へのエレベーターに乗る。そのままブレイブデュエルの会場に着くと、いつもとは逆方向に歩いて行った。

『スタッフオンリー』の札が付けられた扉を開けると、そこにあるブレイブデュエルの筐体を指さした。

「ここにあるのは緊急時に私たちスタッフが使う専用筐体なんだ。ちよつと待ってくれ、今設定を弄るから」

アインスは近くの端末に手を添えると、慣れた手つきでキーボードを叩いていく。そして『プライベートルック』のアイコンをクリックする。その作業を終えると『1』と『2』の筐体の扉が解放された。「今オフライン状態でこの二つだけを繋いだ。これで外部から盗み聞きされることもないだろう」

「……ありがとうなアインス」

「なに、誰でもないヴィーラの頼みだからな。……それに何となくこんな日が来るとは思っていたんだ」

「えっ、アインスそれって……？」

ヴィータの言葉に返答せず、アインスは『1』の筐体に入る。ヴィータは何となく歯切れの悪さを感じながらも『2』の筐体に入っていくのだった。



雪が降りしきり、木々が街頭に照らされる夜の風景。アインスは黒いバリアジャケットに身を包みながら、その空を儚げに眺めていた。その景色は、その光景は、ヴィータの心の中に色濃く残っている。いや忘れるはずがないのだ。それはアインスが空に還っていったあの時とまるで同じ状況だったのだから。

見せつけられた光景に息が詰まりそうになる。だがそれでも踏み出さなければいけない。ただの偶然なわけがない。きつとアインスは何かを知っているのだろう。ヴィータは一步一步踏みしめるように進んでいく。そしてアインスの隣に並び立った。

「ヴィーラ、君はこの景色に覚えがあるんだな」

「アインス、もしかしてお前……」

ヴィータがそう問いかけるとアインスは首を横に振る。

「私には覚えがないんだ。なんて言えばいいんだろうな。……私、八神リインフォースアインスとしてこの場所は『記憶』にない。だがどうしてか覚えはないのに『記録』としてこの景色が鮮明に残っているんだ」

「……………どうしてこのフィールドを私に」

「ヴィーラならこの景色のことを知っているという予感があった。私

がこの景色を浮かべるようになったのは、あの日八神堂の前でヴィーラに……」

そこで言葉を止める。アインスは少し迷いながらも、どこか確信を持って言葉を続けた。

「八神堂の前で『ヴィータ』に会ったときだったからな」

聞き間違えないように力強くハッキリとその名前が口にされる。ヴィータは驚いたように目を見開く。

「……いつから気づいてたんだ？」

「確信を持てたのはこの場所を見た時のヴィータの反応だ。だけどそれらしいことはいくつかあったかな」

アインスはポケットからブレイブデュエルのデッキホルダーを取り出す。

「ヴィータが初めてブレイブデュエルの施設に来たときだ。二人のデッキホルダーとカートリッジを見せてもらっただろ」

「あ、そんなこともあったような？」

「その時に対戦成績や店舗登録はしてないが、プレイヤー登録だけはされていると話したのを覚えているだろうか」

「確かに言ってたような、そうでもないような」

「カートリッジに記載された名前はヴィータだったんだ。見た目からしても赤の他人で済ませるほうが難しかったからな」

「えっ、だけど私。……あたしの名前はヴィーラで登録されてたはずじゃ」

「そうだな。ヴィータがなぜヴィーラと名乗るのかわからなかった。だがヴィータが偽名を使うのだから深い理由があると思っただ。だからカートリッジを受け取ったときにプレイヤー名をヴィーラに変更しておいたんだ」

そう言えばあの時、カイズのカートリッジを見たときと違って、何やらキーボードを叩いている気はしていた。今になってみれば、アインスは不測の事態を先回りし解決してくれていたのだろう。

開いた唇に指で触れアインスを見つめる。だがそんなヴィータに対し、アインスは年頃の少女のようにクスクスと笑って見せた。

「それになヴィータ。ヴィータは気を付けているつもりだったのだろうが、私との会話中、何度も一人称が『あたし』になっていたぞ」
「げっ、本当かよ」

「本当も本当だ。だがそれらのうっかりは今になってみれば後付け程度のレベルの話だな」

「後付けって。えっ、あたしもしかして、とんでもないうっかりしてたってことか」

うまく擬態をしていたつもりなので、それはそれでショックだ。ヴィータはそう表情に出すが、そうではないとアインスは答える。

「初めてヴィータと出会った時、失った自分の一部、自分になくてはならない者と巡り会えた気がしたんだ。それにヴィータと過ごした三ヶ月、まるで八神堂にもう一人家族が増えたようで本当に温かい気持ちになっていったんだよ」

「あたしが……家族……?」

「ああそうだ。一緒に過ごせば嫌でもわかる。ああ、この女性は私にとって大切な人なんだろうなと」

その言葉に迷いや憂いは何一つ見られない。真っ直ぐに向けられた本心を受け取ると、ヴィータは目に涙を浮かべた。

だがそれは今まで流してきた悲しみや辛さから来るものではない。認められたことが。そしてあの雪の日に見送ることしか出来なかった彼女の本心がようやく聞けた気がして、それが本当に嬉しくて、ヴィータは頬から涙がこぼした。

「泣かないで欲しい。ヴィータが悲しむと私も悲しくなってしまう」

「……ああ、そうだな。泣いてばかりじゃまた迷惑かけちゃうもんな」

よしっ！ と両頬を叩く。そしてこの世界で流す涙はさっきの一滴が最後だと気合いを入れ直した。

「これから話すことはほんと突拍子もないことなだけでよ。……それでも最後まで聞いて欲しいんだ」

「ああ、ヴィータの心ゆくまで話してくれ。私はどこにも行かないよ」
アインスはベンチを指さし二人は座り込む。降りしきる雪の中、二

人は互いを気持ちや正体を隠すことなく全てを打ち明け語り合っているのだ。

純粹なる殺意

◇side カイズ

練習場でカイズは全てを恭也に伝える。自分たちが平行世界から来たこと、そして何とかして自分たちの世界に帰りたいことなどなどだ。だが話せば話すほど不安な気持ちが膨れ上がっていった。

恭也はどちらかといえばアナログよりな人間だ。こんな突拍子のないことをどこまで信じてくれるかわからない。だがここまで自分に良くしてくれた人に嘘偽りを語りたくなかったのだ。

話すことは全て話した。恭也は驚いたような顔も、馬鹿にしたような顔もすることなく、顎に手を添え「ふむ」と口にした。

「平行世界ですか、それは本当に大変でしたね」

「えっ、し、信じてくれるんですか?! 結構突拍子のないこと言ってると思うんですけど」

「ええと、実は以前にも似たようなことがあったんですよ。あの時は俺達の遠い親戚にあたる高町ヴィヴィオという少女が未来からやってきたんです」

「み、未来からですか」

「ええ……未来から血縁が来ることがあるなら、まあ平行世界から人が来ることもあるのかなと」

「へ、へえ〜」

魔法がないこの世界ではなかなか話を受け入れてもらえないと思っていた。だが改めて考えてみるとそれも違う気がした。

「いや、よくよく考えたらブレイブデュエルという技術は些かオーバーテクノロジーのように思える。それにチヴィットと言われる小型のロボが空を舞い、動物が普通に人語を喋る世界だ。自分たちの常識で当てはめること自体が些かおかしかったのかもしれない」

ともあれ、張りつめていた緊張の糸が一気に解けていくのが分かる。よき理解者を得られたことにカイズはほっと一安心する。だがそれとは逆に恭也はかなり難しそうな顔をしていた。

「親戚を未来に帰したときはかなり大がかりの装置と聞いています。

それに関しては何のはや忍あたりには当たってみようと思います。
……それよりもです」

恭也はカイズの肩をガシツと掴む。そして真剣な眼差しを向けてきた。

「平行世界に戻る方法がわかったらすぐに帰ってしまいませんか？」

「え、いや、えっと、まだどうしたら帰れるかわからないので何とも言えないんですね」

「それはそうですね。それじゃあこの後時間はありますか？」

「時間ですか？ ええ、まだまだ大丈夫ですけど」

正直恭也の説得に丸一日使うつもりでいたので、時間は有り余っている。その言葉を聞くと今度は恭也の方がほっと一息つく。恭也は木に立てかけていた木刀の小太刀を二振り手に取りカイズに渡す。そして彼もまた二刀の小太刀を構えた。

「……恭也さん？」

「本当はもっと時間かけてから、じっくりと教えたかったんですけどね」

一呼吸置くと、場の空気が重くなるのを感じる。恭也は声色を変え話を続ける。

「……暗殺剣を生業とする俺だからこそ気づけたカイズさんの才能。それを今から伝えていきたいと思えます」

「で、でもいきな——ツツ！」

反射的に上体を反らす。すると先ほどまで顔があった空間を恭也の木刀が走り抜けていった。

「(避けれてなかったらただの怪我じゃすまなかったぞ)」

殺意の込められた攻撃に冷や汗が流れる。カイズは一瞬だけ後ろを確認すると逃走ルートを計算し始めた。

「(恭也さんには悪いと思う。だけどここで大きな怪我をしてヴィータさんを悲しませる訳には)」

いかない。そう心の中でつぶやくつもりだった。だがそれを最後まで心の中で放つことが出来なかった。

「……………」

恭也の射抜くような真っ直ぐな瞳。けがれのない純粹なる殺意。そしてそれらを向ける彼の顔は今まで見たどんな時よりも真剣そのものだった。

カイズにとっては脈絡のない突然の出来事だ。だが恭也にとってこれは何よりも優先するべき大切なことなのだろう。

彼と過ごした三ヶ月があるからこそ、その覚悟は語られるまでもなかった。

「(何でだろう。ここで背を向けたら、恭也さんに二度と顔向け出来ない気がする。……すみませんヴィータさん。死にはしないと意思ですけど。……今一度無茶をします)」

逃走のために力を入れていた軸足を戦闘用に構えなおす。カイズは手にした二刀の小太刀を力強く握りしめた。

カイズの覚悟を見届けて恭也は少しだけ口を緩ませた。

「ありがとうございます。——行きます！」

「——はいっ!!」

もう言葉などいらぬ。語るべき方法はお互いの両手に握り込まれている。二人は小太刀を構えると全力で振りぬいていくのだった。

きつと何も変わらないから

◆ side ヴィータ

魔法のことを含めてこれまでの出来事をアインスに伝える。その全てを彼女は受け止めてくれた。その後、アインスの提案を聞いてヴィータは「あ〜〜」と頭を掻いた。

「確かに魔法はなくても機械技術は進んでるもんな。ってか、未来から人が来てるって。……これならうだうだ考えないでもっと早く相談すればよかったな〜」

「私はそうでもないと思うよ。早い段階で打ち明けられても、全てを受け止められたかはわからないからな。今の信頼関係があるからこそ話がうまく進んだ。私はそう思うよ」

「それはそうなんだろうけどよ〜」
「それにな」

アインスはそこで言葉を止めるとベンチから立ち上がる。そして数歩前に進むと話を続けた。

「この世界に迷い込んだヴィータには悪いと思う。だがヴィータと過ごせたこの数ヶ月間は本当に楽しかった。目の前にいるヴィータとの別世界での記憶はない。だがこの心に宿る思いが、またヴィータと過ごせて嬉しいと叫んでいるんだ。ヴィータはどうだった？」

「あたし、あたしは……………」

この世界に始めてきたときは困惑と苦しきしかなかった。自分が成し得ることが出来なかつた幸せを見せつけられ、自分でない自分がそこにいる。大切な人たちがそこにいるのに、その輪に自分がいない。それが本当に、本当に、胸が引き裂かれそうなほど辛かった。

これが幻術やマインドコントロールならどれだけよかつただろうと何度も思った。それならこんな景色を見せる奴に怒りをぶつけることができたからだ。だけどこの世界が実際に存在しているものと同じ、この街で生活し、そして八神堂の皆と触れあって気づくことができた。

ヴィータもベンチから立ち上がると、アインスの隣まで歩いてい

く。お互い顔を見ることなく、降りしきる空の雪に目を向けた。

「あたしは。……あたしも悪くなかった。いや、はやて達に囲まれて、幸せに暮らすアインスを見られて本当によかったって思ってる」

あの雪の日。全ての咎を受け入れてアインスは空へと還っていった。その時の彼女の気持ちを考えたら、どうしてもこの世界を受け入れることが出来なかった。だが今は違う。あの時はそれが最良であり、空に還ったアインスには一片の後悔もなかったはずだ。そして今日の前にいるアインスは空に還ったアインスとは違う存在だ。

八神リインフォースアインスとしてこの街に生きる彼女は、この世界に確かに存在し、その声、その瞳、その髪、全てが彼女と同じなだけで、全くの別人なのだ。

過去は決して変えることが出来ない。それは闇の書と共に多くの罪を犯してきたヴィータだからこそ深く胸に刻みつけている。

ヴィータの知っているアインスは全てを受け入れ空に還った。この世界のアインスは八神家に囲まれ幸せに過ごしている。たったそれだけのこと、それは初めから比べるべきものではなかったのだ。

「むしろ幸せに暮らしてるアインスの姿を見てラツキーつてぐらいだよな」

「ん、何か言ったかいヴィータ？」

「いいやー、何にもー」

自分の知っているアインスのことは目の前のアインスには関係ないことだ。ヴィータは晴れやかな気分で見上げる。するとその心に呼応するかのように雪が止み、朝日が登り始めた。

まばゆい日差しに照らされながら、アインスは申し訳なさそうに、そして困ったように笑みを浮かべる。

「本当は私も一っ打ち明けようと思っていたんだ。そのためにプライベート筐体とこのステージを用意していたんだ」

アインスがその場で手をかざすと一枚のカードが現れる。さらにそれは本のページの切れ端のようなものに形を変えていく。それは温かい不思議な紫色の光を放っていた。

「ヴィータの話を聞いて合点がいった。八神堂の前でヴィータと初め

て出会った日の夜、私のデツキケースにこのカードが追加されていたんだ。シードがどういふものか私には分からないが、多分これがそうなんじゃないかと思うんだ」

そこまで言うときアインスは切れ端を柔らかく握り込む。

「ヴィータと出会ってこの切れ端が現れてからだ。私でない私が、私の知らない八神家と一緒にいる映像を見るようになった。それがただの夢なのか、この切れ端が見せていたのかはわからない。ただヴィータとこれには何か関係がある。それだけは無意識でも理解していたんだ」

「アインス……？」

言葉を放ちながらアインスは目をギュツと閉じる。そしてそのまま話し続けた。

「本当はもつと早くに打ち明けるつもりだったんだ。だけどどうしてだろうな。ヴィータと過ごす毎日が楽しくて、また明日、また今度、そのうちにとドンドン先延ばしになってしまった」

アインスは力なく首を横に振る。

「……怖かったんだ。このカードを渡してしまったら、何かが終わってしまいそうで。ヴィータは本当に困っていたのにすまなかった」

アインスは目に涙を浮かべながら深々と頭を下げる。そんな縮こまってしまったアインスの体をヴィータは優しく包み込んでいった。「今までとは逆だな」

「ヴィータ？」

「泣くなよアインス。アインスが悲しんだら、あたしも悲しくなっちゃまうからよ」

「——あつ」

それはあの夜、アインスがヴィータにかけてくれた言葉だ。

誰が悪いわけではない。たまたま同じ日に全てを打ち明けようとして、ヴィータが口を開いたのがほんの少しだけ早かったただけだ。

アインスが顔を上げると、ヴィータはその涙を指で拭う。そして朝日のように目映い笑顔のアインスに向けた。彼女は笑顔に相應る言葉を見つけれない。だからこそヴィータの気持ちの応えるよ

うに、アインスもまた最高の笑顔を見せるのだった。

◆ それから少しの間、この三ヶ月間のことを話していた。ブレイブデュエルを教えてもらったこと。アインスの学校までよく一緒に歩いたこと。八神堂で料理の特訓を受けているとき、一緒にはやてに手ほどきを受けたこと。

だがこの平行世界に来てからヴィータは主に元の世界に戻る方法を探していた。アインスもアインスで、夢のため、八神堂のために懸命であった。たった三ヶ月、思い返してみると二人の思い出は数えるほどしかないのかもしれない。だけどこの海鳴市はアインスとのことを既に数えきれないほどであった。何よりももう二度と見れないと思っていたアインスの笑顔を何度も見ることができた。これ以上の幸せはないであろう。

「(本当はまだこの世界にいたいくらいなんだけどな)」

だがそれは甘えだ。今のところ元の時空との時差も相まって危険を感じていない。だがいつロストログアが暴走するかも分からない。それこそこのタイミングを逃したら最悪の事態もあるかもしれない。

「(それに、いつまでも皆に心配かけるわけにはいかねえしな)」

この時空ではない。自分の帰る場所にいる、はやてやなのは達の顔を思い浮かべる。特になのははこの海鳴市の視察を勧めたことから責任を感じているだろう。皆に幸せをくれるあの笑顔を曇らせたまままでいたくなかった。

ヴィータは手のひらを差し出す。それとほぼ同時にアインスも握っている手をヴィータに向けていた。アインスは悲しそうな目を向ける。

「このページの欠片が現れてから私は私でない記録の断片を見るようになった。もしかしたらこれを手放すことで私の中にあったものがぽっかり消えてしまうのかもしれない」

寂しそうに話ながらも小さく微笑んでみせる。そして弱々しくも確かな思いを乗せて言葉を続けた。

「だけど私とヴィータの日々は決して色あせることはないと思う。二

人で過ごした三ヶ月はただの記録でなく、確かな記憶なんだから」
「ああ、きつと何も変わらねえよ。この三ヶ月、あたしと一緒に過ごしてたのは誰でもない。目の前の八神リインフォースアインスなんだからな」

互いに見つめ合うと小さく頷きあう。アインスは握り込んでいた手をゆっくりと開く。そしてページの切れ端をゆっくりと落としていった。それは風にさらわれることなく、ヴィータの手のひらに落ちていく。そして降りしきる雪のようにその手にとけ込んでいった。

一呼吸おいてアインスは不思議そうに目をぱちくりさせる。そしてキョロキョロと辺りを見回した。

「あれ、このフィールドは、えつと。……『ヴィーラ』私はどうしてここにいるんだろうか？」

その呼び方で全てを理解する。だがそれだけだ。落ち込むことなど何もない。ヴィータは広げていた手のひらをギュット握りしめた。「私のためにアインスがプライベートルームを用意してくれたんだよ」

「そう言われてみれば、そうだったような？ えつと、何か人には聞かれない話なのか？」

「人に聞かれないと言うか、まずアインスに聞いて欲しいって感じかな。——これから話すことはちよつと信じられない話かもしれないねえんだけどよ。それでも最後まで聞いて欲しいんだ」

ヴィータは申し訳なきように頼み込む。そんな彼女を見てアインスは髪を大きく揺らしながら何度も首を横に振った。

「もちろん最後まで聞くに決まっているさ。それに悲しいこと言わないでくれ。ヴィーラの言葉なら、私はきつと信じる事が出来るはずだ」

そんなアインスの返答を聞いて、ヴィータはほほえみを浮かべた。

「ああ、やっぱり何も変わらないな」

「……ヴィーラ？」

「いや、何でもねえ。でよ、その話なんだけどさ」

例え記録を失っても記憶はアインスの中に残っている。ヴィータ

は変わらない確かなものを感じながら、ことの事情を再びアインスに説明していくのだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編 8

意味のある敗北

最高の前座

◇

八神堂の地下ブレイブデュエル施設は、冷めることない熱狂に包まれていた。多くの観客が今か今かと待ち望むなか、始まりを告げるために八神はやてが高台に立つ。

おへその見えるチアリーダーイング姿の彼女は、短いポニーテールを揺らしながらマイクを構えた。

「みんなああああ、盛りあがるとるかー！ー！！」

『おおおおおおおつ』

「血が沸き肉躍る熱い戦いを見たいかー！ー！！」

『おおおおおおおつ！！』

はやての一拳一動に会場のボルテージは上がり続ける。そんな会場の様子に、待機中カイズは少し尻込みしてしまった。

「いやー、告知から開催まで一週間しかなかったのに。……めっちゃくちゃ人が集まりましたねアインスさん」

「何と言ってもヴィーラとカイズ君のお別れ会でもあるからね。それだけ二人が人気だったことだよ」

「いやいや、ヴィーラさんはともかく俺はそうでもないと思うんですけどねー」

まあアインスなりに気を使ってくれているのだろう。あまり突っ込んでも困らせてしまうので、これ以上野暮に聞くことはなかった。

◇

アインスからシードを受け取ってから一週間。今まで問題視していたことはあっさりと解決の兆しを見せていた。

まず受け取ったページの欠片。解析の結果これはこの世界には存在し得ない物体であることが分かった。

次に解析に当たってくれたグランツ研究所、並びにこの世界のスカリエツティの協力により平行世界の座標の割り出しに成功。元の世界へ連絡と協力の取り付け、渡航がめどが立った。

以前高町ヴィヴィオを未来へ帰すときの機械がそのまま転用出来るとのことであり、準備期間は何と一週間。あまりにもトントン拍子に話が進み二人はめまいを感じるほどだ。

そして今日はその六日目。明日の時空旅行を前に、はやてに呼ばれた二人は八神堂に来ていた。そしてあれよあれよと誘導されるままに、ブレイブデュエルの二大マッチをメイキングされたのだ。

「お別れ会がしたいと言われましたけど、いやいや、はやてさんには一本取られましたよ」

「気を悪くしないで欲しい。きつと我が主なの、ここであつたことを忘れないで欲しいというメッセージだと思うんだ」

「もちろん分かっていますよ。この平行世界で二人で心細い中、八神堂さんには本当にお世話になりましたからね。むしろ最後にこんな大きな催しを開いてくれて感謝していますよ」

さらに自分たちの頑張りで八神堂が盛り上がるならこれ以上に嬉しいことはない。控え室で待っているヴィータもきつとそう思っているであろう。カイズは場の空気に飲まれないようにと深呼吸をする。

「さてそれじゃあヴィーラさんの前座として盛り上げてきますか」

「前座ではないさ。間違いなくカイズさんも今日の主役なんだから」

「いえいえ、周りの皆がそう思っていたとしても、やっぱりこの物語の主人公はヴィーラさんだと俺は思うんですよ。だから前座つて言うのは俺の中では間違つてないんです」

「そ、そうなのか……………」

キリツとした表情で前座発言をするカイズにアインスは少し困惑してしまふ。だがカイズの言葉はそこで終わらない。力強く手を握りしめると決意の眼差しで言葉を続ける。

「そして盛り上げるって気持ちにも嘘偽りはありません。……俺はここで得た全てを出し切つて観客を盛り上げて見せますよ」

カイズは反対側のスペースで待機している人物に目を向ける。そこにいるのは腰まで届く紫のポニーテールの女性、八神シグナムだ。シグナムは向けられた視線を感じ取ったのか、鋭い眼光でそれに応える。

ヴィータとカイズのためのイベント。だが勝負には一切手を抜くつもりはない。そう訴えかける表情を見て、望むところだと視線で応えた。二人が火花を散らしているのが高台のはやてからは見えただろう。準備も万端だと分かるとマイクを高く持ち上げた。

「それでは本日の第一試合選手入場や！　どんな小細工も関係ない！　全ての敵は接近からの一刀両断！　我が剣に断てぬ物なし！　赤コーナー烈火の将シグナムー!!」

『オオオオオオオオッ！』

舞台裏からシグナムが現れると施設が震えるほどの歓声があがる。男女問わずであるが、やはり男性からの人気が頭一つ抜けているようだ。

しかし熱狂的な観客にシグナムが目を向けることはない。すでに臨戦態勢、周りは目に入っていないようだ。

「対するはこの一ヶ月メキメキと頭角を現し今や上位ランカー！　力づくなどもつてのほか、計算し、戦術を立て確実に勝利を掴んでいく。青コーナーミッドベルカの二刀流カイズー!!」

はやての紹介でカイズが舞台へと顔を出す。だが先ほどの盛り上がりとは違い、場は少しクールダウンしているようだ。

「いやまあ、ここまでアウエーだと逆に清々しいよな」

観客はシグナムの勝ちを望んでいるし、予想しているのだろう。だがそんなことは関係ない。シグナムと同様に真っ直ぐ前を見る。その時だ、観客から向けられる殺気に思わず振り返ってしまう。

「……………恭也」

視線が合うと恭也は一度大きく頷いた。

「ああ、そうだ。こんなプレッシャーに圧されているようじゃ、この三ヶ月に申し訳が立たない。周りは関係ない。俺は俺の出せる全力を尽くすだけだ」

気持ちを新たにカイズが筐体に近づいていく。だがそんな緊迫した状況を崩すように、はやては「ごほん」と咳き込んで見せた。

「えーっ、皆さんにお伝えがあります。次の試合の準備のためヴィータとヴィーラさんは控え室にあります。そして試合の映像はモニターされていますが、会場の様子は二人に届くことはありません。……それでは改めて青コーナーからカイズさんの入場です!!」

『キヤアアアアアツ！ カイズさああああん！』

『もつと海鳴市にいてえええええっ！』

『デバイスの使い方手取り足取り教えてくださいー！』

先ほどとは打って変わって黄色い声援が会場をこだまする。これはいったいどういうことか。カイズは「えっ、ええっ!?」とはやての方を見る。

「知らなかったと思いますけど、カイズさん女性の方からかなり人気があるんですよー」

「そ、そうなんですか?」

「そうですよー。失礼ながら見た目は少し軽そうに見えますけど、その実愛妻家でヴィーラさん一筋。たまに見せる無垢な少年の笑顔は子供、大人問わず、射抜かれた女性が多いみたいですよー」

全くの初耳である。カイズはまだ現状を受け入れられないでいた。

「えっ、ええー、いや全く気づきませんでしたけど」

「それはそうです。だって普段はおっかない二人が常に目を光らせていましたからねー」

「……………あー、はは、なるほど」

大と小の赤髪の姿が目には浮かぶ。きっと自分の知らないところで、周りにとてつもない威圧をかけていたのだろう。

カイズは多くの歓声を受け取ると客席へと目を向ける。本当はシグナムように試合に集中するべきなのだろう。だがこの世界において、ただの異端であった自分がこんなにも多くの人に認められている。その事実がただ、ただ、嬉しかったのだ。

「(それに集中するだけが戦いじゃない。広く、深く、視野を持つんだ)」

心を新たに筐体へと近づく。扉が開き二人が入ったのを見ると、はやては解説を始めた。

「第一試合はデツキ、並びにコストを同一化したレベル統一戦！カードの選択肢が少なく、プレイヤーの力量が決定的な差になるガチバトルになっています！ さあー、二人とも準備はええかー！」

はやては天に手を挙げ。

「ブレイブデュエル、スタートや！」

その手を勢いよく降ろしていくのだった。

強くなる時



戦闘エリアは市街地C。通常の市街地Aよりもフィールドが狭く設定されている。だが今回の戦いは1on1。それを考えれば十二分に広さはあるだろう。市街地というだけあり、周りには廃ビルが多く存在していた。

「だとしても何かを準備をするにはあまりにも時間が足りないだろうな」

カイズがそう思った瞬間、前方から砂塵が巻き上がるのが見える。最短最速でシグナムがカイズを探しているのだろう。彼女の戦闘スタイルはこの世界でも変わることなく近接からの両断。納得である。「この目立ちようは居場所がバレるリスクよりも、俺に策を講じさせないことを優先している感じかな」

だとしてもすぐに全エリアを把握できるわけではない。今は少しでも勝つための努力をするだけだ。カイズはミッド式のイノセントハートを構える。だが――!!

「――やばいー」

チリツとした熱を肌を感じる。カイズは考えるよりも先にその場から飛び退いた。次の瞬間、カイズの立っていた場所ごと目の前の廃ビルが燃え盛る炎に穿たれていった。

見通しがよくなったフィールドの奥、弓を構えたシグナムの姿が見える。

「ほう、今のを避けたか。なかなかやるな」

焦りも驚きもせずシグナムは淡々と語る。そんな彼女とは逆にカイズは内心汗がダラダラだった。

「(あつぶねええええ、デツキコストがあるから近接重視のスキルで固めてくると思っていたけど。……シユツルムファルケンを選択していたのか)」

危うく一瞬で試合が終わってしまふところだった。だがこの一撃を避けられたのはカイズにとって大きなアドバンテージだ。

「(ボーゲンフォームを選択したって事は、デツキコスト的にシユランゲフォームはないはずだ。あの蛇腹剣、距離感が掴めなくて厄介だと思ってるんだよな)」

デツキの中身が見えたことでカイズは戦術を組み立て始める。そんなカイズとは違い、シグナムの思考は至ってシンプルなものだった。

「主が計画した企画とは言え、真剣勝負に手を抜くつもりはない。姿も見えた、悪いが全力で行かせてもらおうぞ！」

シグナムは剣を構える。と感じた次の瞬間には、すでに大きく距離を詰めていた。

「ぐっ、ううっ！」

速く鋭く振り下ろされる刃が襲いかかる。カイズは半歩後ろに下がると紙一重でそれを回避する。続いて小さな動作で放たれた突きが腹部を狙う。それをカイズは慌てずベルカ式の黒刀でそれをいなしていった。

連撃を打ち続けるシグナムと防戦で手一杯のカイズ。傍目から見ればそれは一方的な試合に見えただろう。だが上位プレイヤーであるはやてやアインス、そして対面しているシグナムは得体の知れない違和感を覚えていた。

その困惑は当然のことだろう。この違和感はカードやデバイスによる力ではない。ただ一人を除いて誰も知るものがない、友であり師であり大切な親友から教えられたカイズのだけが持つ才能なのだから。

◇

伝えたいことがある。恭也にそう言われた六日前、二人は時間を忘れて剣で語り合っていた。だが無限に体力が続くことはない。カイズは全身汗だらけになると大の字に倒れ込んだ。

「あーもう、ひとかけらの体力もありません」

あとは煮るなり焼くなり好きにしてくれと降参する。カイズを見下ろす恭也もまた全身汗だらけになっている。彼は余力を残しながらもしんどそうにその場に座り込んだ。

「やっぱり俺の考えは概ね当たってたみたいですね」

「そう言えば打ち込み合う前に何か言っていましたね。えつと、あれ、何でしたっけ。つかれすぎて頭から抜け落ちちゃいましたよ」

「俺だから気づけるカイズさんの才能の話ですね。ええと、俺自身カイズさんの住んでいる世界のこととはよくわからないのですが。……カイズさんがいた世界って死んでも生き返れたりしますか？」

突拍子ない言葉に思わず目を丸くする。

「えっ、いやいやいや無理ですよ。確かに医療技術はこの世界より上かもしれないませんが、それでも人間が生死をどうこう出来るってことはありませんね」

「そう、ですか。……ではやはり才能なんだと思います。その言葉だけで片づけるには不自然な物がありますけど」

そう伝える恭也は納得していない表情だ。カイズは我慢できずに先に口を出してしまう。

「それで俺の才能ってどういったものなんでしょう？ 今恭也さんと打ち合っているもほとんど避けてばかりで、いいとこなかったと思うんですけど」

「まさにそれですよ。カイズさんは俺の打ち込みのほとんどを回避しているんです。……俺は何度か本気で、それこそ殺すつもりで剣撃を打ち込んだにも関わらずです」

殺すつもりでと言う単語にカイズは少しだけ後ずさる。

「え、ええ、どういうことですか？」

「カイズさんが死なないための動きが得意なのは知っていました。さらに死に直結する事柄に対して物凄く敏感なんです。それこそ何度も死を体験し訓練しているかのように」

「死を……体験……!?」

自然に繰り返した言葉に脳が反応する。その一瞬、まるで走馬燈のように様々な死の映像が浮かんで消えていった。それは忘れもしないし、忘れられない他人の記憶。デスイーターと戦い、そしてその後遺症でカイズを苦しめた悪夢の数々だった。

喉の奥から吐き気がわき上がる。だがドンと力強く胸を叩くこと

で無理矢理押さえ込む。

恭也はカイズの豹変を見てすぐに頭を下げる。

「嫌なことを思い出させてしまいすみません。……ですが、思い当たる節があるんですね」

「……俺はとある呪いによって様々な死を体験させられました。きつとそれが恭也さんの言うものだと思います」

その説明だけで恭也は合点がいったようだ。

「カイズさんは死を何度も体験したことにより、『殺気』に物凄く敏感なんです。だからこそ俺の攻撃は一度も致命傷にならなかった」

そう言うところ恭也はカイズの背中をさすつていきハンドタオルを差し出した。カイズは顔の汗をふき取ると、少しずつ吐き気は落ち着いていくのがわかる。その様子を見届けると恭也は話を続けた。

「以前言いましたよね。愛する人を守るために絶対に引けない戦いがあるかもしれない、その時に足手まといになりたくない」と

「そうですね。そのために恭也さんには力添えを頼んだわけですし」「愛する人を守る。逃げるわけにはいかない戦いの存在。ですがそれと同等に『逃げることの出来ない』戦いもあると思うんです」

「逃げることの出来ない戦い？」

「前者は気持ちの問題です。そして後者は物理的な話になります。カイズさんは何があっても無事に逃げ延びることをもつとうにしています。ですが、室内に閉じこめられたり、足枷などを付けられた時はどうですか？ 逃げ出すことの出来ない状態では信念に関係なく戦わなければいけません」

「……確かにそうなりますよね」

「さらに絶対に戦わなければいけないときにこそ、カイズさんの才能は役に立ちます。総じて戦わなければいけない状態は、戦いが前提である以上、相手の攻撃に殺気に乗っているのがほとんどです。そしてその殺気を誰よりも敏感に察知できるカイズさんは、相手が必殺の意志を込めれば込めるほどそれを避けることができます」

「必殺を、避ける……」

「カイズさんにとってこの技能は苦しみの上に成り立っているものだ

と思います。ですが、その苦しみも糧にして欲しい。……それが俺の考えです」

静かに、それでいて力強く言葉にする。恭也はその場から立ち上がると、スツと手を差し伸べる。カイズはその手をガツシリ掴むと最後の力を振り絞り起きあがった。

「カイズさんは基本をしつかり学び、勤勉さも忘れず、戦術を組み立てる頭脳があります。それ故に初見殺しや理に叶わない行動に弱いところがありました。……ですが、相手の攻撃を反射で避けられるようになり、思考を全て戦術にだけ回すことが出来ればカイズさんは」

そこまで言うとき恭也は首を横に振る。そして柔らかな笑みを浮かべ言葉を続ける。

「カイズはきつとまだまだ強くなれるはずだ」

さん付けと敬語がなくなったその一言。この時この瞬間、初めて恭也に認められたような気がした。ようやく彼と対等になれた。それが本当に嬉しくて、カイズは目に涙を溜める。

「———ありがとうな恭也！」

片手で握り合っていた手に、さらに空いていた手も重ねていく。二人は両手でガツシリ握手を交わす。そして三ヶ月積み上げてきた確かな友情を噛みしめあつていくのだった。

◇

今日まで時間を見つけては恭也と訓練を重ねた。そしてブレイブデュエルでの本気の試合は成果を証明するには絶好の舞台だった。

カイズは脳内で思考をしながら、反射に任せてシグナムの猛攻を捌いていく。

「(でも本来のシグナムさんならこの戦いは成り立たないな。今回は全てのレベルが均一に保たれているからこそ何とかなっているけど、普通なら魔力量や剣撃の重さで強引に突破されるからな)」

それに加えて見知らぬ相手との戦いでは、その力量や攻撃手段を瞬時に見切らねばならない。でなければ『反射』だけに身を任せるなどただの自殺行為だ。

「(この戦法が出来るのはシグナムさんの手札が割れているからだ。

実戦では戦いながら考えて、考えて、相手の手札を看破しなければいけないんだよな。……道はまだまだ果てしなく長そうだな」

自分の手に余る強敵が出てき時は全力で逃げるというのは変わらない。だが絶対に逃げられない戦いへの指針を見つけることができた。その目標と研鑽がきつと自分を助けてくれる日が来るだろう。

「（本当は、そんな絶体絶命なんて来て欲しくないんだけど、なっ！）」
シグナムの横一閃に反応し、バック宙で大幅三步ほど後ろに下がる。

「——もらった！」

着地狙いのシグナムの突きが迫る。これが決まればそれでよし、当たらずとも体勢を崩せれば儲けものといったところだろう。

「（相手にとつて牽制のつもりの一撃が俺には必殺だから本当に怖いな）——————」

イノセントハートを握り込むと、ミッド式のデバイスが反応する。その挙動にシグナムも気づいているはずだ。だが速度で押し切る、とその突きを止めることはなかった。

もしカイズの反撃がシグナムの突きを見てからの行動なら、絶対に間に合っていなかったはずだ。例えば間に合ったとしても一撃の重みには差がありすぎる。

だが周りの予想に反し胴を狙ったシグナムの突きが大きく外れる。モニター越しの観客には何が起こったか理解できなかった。それは仕方ないだろう。戦っているシグナムでさえ完全に理解できていないのだから。

「（何かに脚を取られた？ バインド、あの一瞬でか?!）」

バインドは相手を捕縛、妨害にかなり有用だ。だが座標指定から設置まで時間がかかり、狙って発動できる者はかなり限られている。

「（デバイスを二つ持つカイズ君なら確かに可能だ。だが今は一対一の最中。さらに私は最短で彼を発見したはずだ）」

ならいつバインドを設置したのか。いくら考えてもその答えは一つしかない。

「（彼は私の攻撃をいなしながらバインドの設置をしていたのか！）」

くっ!!)」

現状把握はここまでだ。転倒するシグナムにイノセントハート黒刃が迫る。シグナムはあえて体勢を立て直さずそのまま倒れ込む。そして左手のひらで地面を受け止めると、手の力だけで前転していった。

「ぐっ、つつー!」

だが相手の策にまんまとハマリ無傷とはいかない。シグナムは右足のダメージに目を向ける。

『オオオオオオオ!!』

一連の攻防に観客席からは大きな歓声があがる。その声はもちろん戦闘中の二人には届いていない。だが届いていなくともカイズは確かな実感に心を震わせていた。

「(実戦でも『鋼糸』を使うことができた。……ありがとうな恭也)」

鋼糸戦術は恭也から教えられたものだ。恭也は武器として小太刀二刀流を使っている。そしてそれとは別に暗器として『鋼糸』と言うワイヤーと『飛針』というクナイのようなものを携帯していた。

御神の剣術を伝えることが出来ない。その代わりと教えてくれたのがこの二つの戦術だ。飛針はいま生かす場面はない。だが鋼糸の使い方はカイズの中で確かに生きていた。

「(今の俺には高町教導官のような空間把握能力はない。だから相手を捕縛するタイプのバインドは使いこなせない。だけど相手を引っかける『網』を張ることなら!)」

回避に思考を割かなくなつた分、カイズが重視したのは設置魔法の遠隔配置だ。フィールドに張るだけのワイヤーに必殺の威力はない。だが絶対に逃げられない戦いに直面したとき、相手のテンポを崩すことが出来れば、必ず役に立つ時が来るはずだ。

今はまだヴィータを守る力はない。だからこそヴィータの邪魔にならないよう攻撃を避け、ヴィータの助けになるように、相手を崩す方向へと戦術を広げていく。それが今のカイズの答えだ。

シグナムへのダメージを確認すると、牽制に魔弾を数発放つ。それと同時に全力で後退すると廃ビルの中へと移動していった。

「――逃がすか！」

脚へのダメージを受けながらもカイズを追う。カイズは戦闘の最中でもバインドを設置できる。このまま逃げられてしまつては、時間が経つごとにシグナムの不利になると理解していたからだ。

シユツルムファルケンで廃ビルごと破壊する方法もあるだろう。だがそれでカイズが諦めて逃げに徹してしまつては、今のシグナムの脚では追うことが出来ない。最悪タイムアップで判定負けの可能性も見えていた。

どちらにしてもシグナムは畏と分かつていながら廃ビルに入るしか選択肢が残されていなかった。

理屈ではそうだ。だが一切の躊躇なく追撃出来るのは、一握りのプレイヤーだけであろう。それは対面するカイズが一番よく理解していた。

「流石シグナムさん、だけどー！」

シグナムが廃ビルの中央になだれ込む。そして先手必勝と必殺の一撃を大きく振りかぶる。だがその行動を読んでいたカイズはイノセントハート起動させた。

「バインドー！」

「ぐっっ！」

先ほどの網とは違う。ピンポイントで設置していたバインドが剣を握るシグナムの右手首を固定する。

「いまっっ！」

ベルカ式の刃にリソースのほぼ全てをつぎ込む。この戦いはレベルとコストが同一だ。今ならどんなに防御を固められようとも理屈の上では必ず突破できるはずだ。

「(計算通り、これで決める)」

カイズの一撃がシグナムの腹部を狙う。だがその瞬間、カイズの脳内にノイズが走る。

「(バインドで固定したのは右手首だけ？ 予定では両手首を)――
――グツガッ！」

ノイズの後、並外れた衝撃に思考がシャットダウンされる。いった

い何かが。シグナムに目を向けるとその左手にはレヴァンティンの鞘が握られていた。

「(そうか、シユツルムファルケンモード前の鞘か!)」

カイズが攻撃に意識を切り替え、さらに殺傷と殺意の薄い鞘による迎撃。意識してではないだろう。だがシグナムは完璧なタイミングと方法でカイズの反射を打ち破って見せたのだ。

「(ああ、くそ。やっぱりそううまくはいかないな)」

鞘での攻撃は致命傷ではない。だが顎にクリインヒットしたそれはカイズの意識を一瞬のうちに奪っていく。シグナムは右腕に力を込め、カイズのバインドを打ち破ろうとするのが見えた。バインドにヒビが入る様子を見ると「はあ」とため息をついた。

「(まあこの世界に来て三ヶ月、得られたものはたくさんあった。今後は反射を鍛えて、魔力鋼系の戦法を詰めていかないと)」

負けはしたが、これは次に続く意味のある敗北だ。今日のところはそれでよしとしよう。バインドから完全に抜けきったシグナムを見てカイズはゆつくりと目を閉じていった。

「——!!」

その瞬間。鋭い殺気がカイズの心に突き刺さる。それはシグナムのものではない。そしてVR空間にいてもなお届く殺気の持ち主など一人しか知らなかった。

「(恭也……………ぐつううううつ!)」

ホワイトアウトする意識のなか、走馬燈のごとくこの三ヶ月間の映像が駆け巡っていく。カイズは意識を手放さないように、千切れそうなほど下唇を噛み締める。

「(違う。違う。違う。何が意味のある敗北だ。だから俺はいつまで経っても弱いんだ。恭也は何のために俺を鍛えてくれた。負けられない戦いに必ず勝つためだ!)」

先ほどほぼ全てのリソースを注ぎ込んだベルカの刃を、飛針の要領で投げつける。ターゲットはシグナム、ではなく天井に向けてだ。

「強く、強くなるのはいまだ。俺はここで貴方に勝って強くなる!」

カイズは脚を縮こませると同時に設置していたワイヤーを起動す

る。そしてそれを踏み台に廃ビルの外へ跳躍した。

「まだ、まだだ！」

二股のミッド式の刃を構えると、天井へ投げたベルカ式の刃に魔弾を連射する。カイズのリソースをほぼ全てつき込んだそれは、その衝撃で行き場のない魔力を暴走させた。

「なっ！」

耳をつんざくような破裂音と共に、天井が崩れ落ちシグナムに降り注いでいく。カイズは最後にその姿を確認すると受け身を取る余裕もなく、意識を手放していくのだった。

◇

「はっ!!」

しばらくのフェードアウトの後、意識が回復する。頭がぐらくらしながらも辺りを見渡した。

「……………」

カイズのすぐ側にはシグナムの姿がある。それを見てカイズは深くため息をついた。

「…………どれくらい意識が飛んでいましたか？」

「ほんの一分くらいだな」

「……………そうですか」

全力は尽くしたがやはり届かなかったようだ。だがやれることは全てやった。これこそが本当に意味のある敗北だろう。カイズはミッド式のイノセントハートを手放す。

「参りま——」

「それは違う。この勝負、負けたのは私の方だ」

シグナムはそう言って鞘から剣を抜く。するとその刀身が根本からボロボロに砕けているのがわかった。その姿を見せるとシグナムは剣を鞘に戻す。

「最後の倒壊は見事だった。何とか瓦礫を受け止め脱出はしたが、私の剣は砕かれてしまった」

「だとしても意識を失っている間にその鞘で殴り倒すことが出来たん

じゃ」

鞘の威力は実際味わいよく知っている。カイズはそう言うがシグナムは首を横に振る。

「騎士にとって剣とは誇りだ。その誇りは砕かれた。それは私にとつての敗北だ」

「そ、そうは言っても」

「騎士にとってはそういうものだ。もしかしたら観客はそう思わないかもしれない。だが君は確かに我が魂を砕いた。そんな相手が意識を失っているうちに、鞘で殴打して勝つ。そんな姿を私は絶対に認めたくはない。……何を勝ちとして何を負けとするか。それは個人の酌量しだいだからな。これは私にとって次へのための意味のある敗北だ」

哀れみや同情などではない。心の底から敗北を認めていることが、その声色から伝わってくる。カイズは勢いを付けてその場から立ち上がる。まだ少し頭はくらくらするが、それでももう倒れることはなかった。シグナムはスツと目を閉じると空を見上げる。

「降参、私の負けだ」

『ウオオオオオオオオッ！』

決着が付くと地下会場を揺るがすほどの大声援が上がる。試合が終わると二人は筐体から抜け出し互いに歩み寄る。そして固く握手を交わしていった。

しばらくの間、そんな二人を讃えるように賞賛の拍手の音は二人を包み込んでいった。

？

ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編9

対決 ヴィータVSヴィータ

二人のヴィータ



『ウオオオオオオツッ!』

控え室に届くほどの大歓声が聞こえる。モニター越しに試合を見ていたヴィータはグツと手を握り込んだ。

「カイズ、本当に強くなったんだな」

自分以外の師に少し焼き餅を焼いてはいた。だが恭也との訓練にかまけず、カイズはヴィータの訓練もしっかりこなしていた。

この時空に迷い込み二人に出来ることはあまりなかった。と同時に、ここでは元の世界のように事務の仕事をこなすことも、教導に赴くこともない。だからこそカイズは時間を無駄に浪費せず、その全てを自己研鑽に回したのだ。

「カイズらしい無駄のない時間の使い方だよな」

そしてその成果はしっかりと目に焼き尽くさせてもらった。次は自分の番だ。ヴィータは両頬をパシンと叩くと「よしっ!」と立ち上がる。

そして同時に控え室のドアがノックされる。

「そろそろ出番だが、どうだいヴィーラ?」

ドアの隙間からアインスが顔を覗かせる。ヴィータは左手の平に右拳をバシンと当て、ぐつと顔を引き締めた。

「いつでも大丈夫だぜアインス!」

「ふふ、準備万端みたいだな。あつ、そうだ、前に言われた物が手に入ったのだが。……もう今更かな?」

アインスはデッキホルダーから一枚のカードを取り出す。ヴィータはそれを受け取ると絵柄を見た。

「あー、頼んでたこれか。確かにこの大舞台でぶつつけ本番って訳にはいかねえかもなー」

しかしそれだけではないとヴィータはバツの悪い顔をする。

「……あとこれ使うのはカイズの了承もらってからの方がいいんだよなー。このカードは本当に危険だって口を酸っぱく言われてるし」「まあ確かにリスキーなカードではあるが、つとそろそろ移動しないと」

「とにかくありがとうなアインス。カードの入手を頑張ってもらった代わりに、この試合はしっかり盛り上げるからよ」

「楽しみにしているよ。私は立場的にも気持ち的にもどちらかに肩入れすることはできない。だからこそ二人の健闘を祈っている」

「ああ、それで十分だ」

ヴィータは受け取ったカードをデッキケースにしまう。そしてアインスの後に付いていき、決戦の舞台へと向かっていった。



司会者特設ステージに再びはやてが立つ。彼女は先ほどのチア衣装とは変わり、紺色の長袖ジャージの上着と青いブルマ姿にお色直ししていた。ボンボンの代わりに、黄色いメガホンを手に持ちはやては観客へと声を放つ。

「燃え上がるような熱い戦いをみたいかーーーーー!!」

『オオオオオオオオオオッ!』

「最強のハンマー使いが誰か知りたいかーーーーー!!」

『オオオオオオオオオオオッ!』

「あどけなさが残る可愛い少女とセクシーで大人なお姉さんが好きかーーーーー!!」

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

「私もやーーーーー!!」

カイズとシグナムの決着よりも大きな歓声が会場から巻き起こる。

はやては「うんうん」と力強く頷くと舞台端に手を差し向ける。

「それでは第二試合! 赤コーナーから来るのは八神堂の、いやこの商店街のアイドル! しかしその正体はブレイブデュエルロケテスト個人戦ランキング五位の大トップランカー! 彼女に碎けぬ物など何もない、鉄槌の騎士ヴィータの登場やーーーーー!!」

『ウオオオオオオオ！　ワアアアアアア！』

小ヴィータはぐつと握りしめた手を掲げながら中央へと歩いていく。その姿を見て老若男女、特に子供やお年寄りの声がとどまることなく上がり続けた。

「続いては青コーナー！　この八神堂に彗星の如く現れた超ド級の大型新人！　たった三ヶ月でトップランカーに名を連ねた実力は伊達ではない！　オールランド？　いや全ての技能がトップクラスで特化型！　赤い流星ヴィーラの登場やー！ー！」

『ウオオオオオオオ！　キャアアアアア！』

小ヴィータと違い太い声援や黄色い声援が濃く響き渡る。その声を聞いてヴィータは笑みを浮かべた。

「ああ、はやて達だけじゃねえ。カイズ以外誰もいないと思ってたこの場所で、あたしはこんなにも認めてもらってたんだな！」

その声援に応えるようにヴィータもまた腕を掲げる。

二人は舞台の中央に立つと固い握手を交わす。その姿に観客は大いに盛り上がった。そしてその大歓声をいいことに、小ヴィータはヴィータにだけ聞こえるように声を上げた。

「お兄さんにとってあたしは可愛い可愛い女の子なだけだ。結局その心を射止めることはできなかった。……いや、そんなお兄さんだからこそあたしは好きになったんだと思うけどな」

「ほう、あいつのことよくわかってきたじゃねえか」

「だからよっ！」

小ヴィータはギチギチとさらに固い握手を交わす。さらに今まで見たことのない本気の眼差しでヴィータを見た。

「この勝利をお兄さんに捧げる。あたしのことを絶対に忘れないように、全力で叩き潰してやるからな！」

「……………望むところだ」

ヴィータも握る手に力を込める。二人はバチバチと火花を散らすと同時に背を向けた。そして互いに筐体へと入っていった。

はやては二人の姿を確認すると、メガホンを口に添える。

「それじゃあルール説明や！　ヴィータは随分嫌がってたみたいやけ

ど、今回はイベントの主役ヴィーラさんたつての願いにより通常のレギュレーションルでバトルが行われるで！ 今までのステータスとカードがそのまま全て使える。つまりプレイヤーのレベルとデッキコスト上限、そして所持カードがそのまま戦力になるってくわけや！ キャリアの差から必然的にヴィータが有利やけど、それだけで勝てるほど甘くないのがブレイブデュエル！ 二人の活躍に注目や！ それじゃあカウントダウンいくでー！」

『スリイイイ！』

「ツウウウウウ！」

『ワアアアアン！』

「試合、開始や!!」

◆ 歓声が聞こえなくなると共にVRステージに転送される。ヴィータはすぐ辺りを確認し始める。

「市街地C、カイズ達と場所は一緒か。さていつちよ頑張るか」

ヴィータはグラーフアイゼンを担ぐとゆつくりと歩き始める。慌てることはない。この戦いは1 on 1、遅かれ早かれ小ヴィータとはすぐに接敵するはずだ。

「あたしがこの世界に出来る恩返し、それはきつと、今このときこの瞬間なんだろうな」

この三ヶ月間、八神堂に通い続けたヴィータだからこそ深く理解している。以前にも感じてはいた。八神堂は実力派揃いのメンバーであるが、なにぶんログイン率が低い。多くが大学や専門学校に通い、それぞれの夢のため一番大切な時間を過ごしている。そんな彼女たちだからこそ仕方のないことであろう。それははやても同じだ。社会人一年目の彼女は小さな体で古書店とブレイブデュエル運営の二枚看板を背負っている。

八神堂のこれからの繁栄を考え何が出来るかと考えた。その答えは八神ヴィータのレベルアップであるとヴィータは思った。

ランキング的に小ヴィータは間違いなく八神堂のトッププレイヤーだ。だが子供ながらの粗削りなところも多く見られた。しかし

ヴィータが戦術を教えると言っても素直に聞く玉ではないことは重々承知だ。

「だからこそハンデのある状態であたしがどう戦うかをいろいろ学んでもらえたら嬉しいんだけどな。……そろそろお出ましか」

廃ビルを派手に壊しながらこちらに近づいてくる。考えるまでもなく小ヴィータであろう。

「真つ向勝負は悪いことじゃねえ。実際シグナムもそうだしな。だけど臆さないっていうのと、無謀ってのは全然違う」

考えて戦うことを覚えれば、小ヴィータはまだまだ強くなることが出来る。それを教えるためにわざわざこのルールを選んだのだ。

目の前の廃ビルが粉碎され砂埃があがる。だがそこに紛れる赤い陰をヴィータは見逃さなかった。

「相手がどこにいるかわからないのに、無鉄砲すぎるんだよ！」
振り抜いたグラーファイゼン越しに確かな手応えを感じる。

「なっ、ぐっっ！」
だがそれはあまりにも弱い手応えだった。砂埃が晴れるとその正体に目を疑う。

「紅い魔法弾！」

確認したのもつかの間、等身大の魔法弾がその場で大きく膨らむ。ヴィータは瞬間的に手を構えるとプロテクションを展開した。

「ぐっ、ううううっ！」

巨大な魔力の爆発に吹き飛ばされそうになる。だがここで体勢を崩すわけにはいかないと、軸足に力を込めた。

「狙い通りだー!!」

そのタイミングを逃しはしない。そう言わんばかりに空から小ヴィータが急降下してくる。この状態では避けることが出来ない。ヴィータはグラーファイゼンを上部に構える。

「うおらああああああっ！」

「はああああああっ！」

二つのグラーファイゼンがぶつかり合い甲高い金属音を上げる。だが力が拮抗したのはほんの数秒だけだ。

「——ッッ！」

小ヴィータの方がデツキレベルが高い。さらに両手でしっかりと構え、急降下による勢いを乗せた完璧な攻撃だ。故に負ける道理がない。このままではまずい。そう直感的に感じ取ると、ヴィータはプロテクションを解除した。

「ぐっ、ああああああっ！」

魔力の爆風に飲み込まれると全身にダメージが入る。だがその爆発を利用し、その場から大きく離脱することが出来た。

「(結構いいのもらっちゃったな)」

そんな逃げかたをしてただで済むわけがない。魔弾の爆風、そして離脱の際、胴をかすったグラーファイゼンの一撃で、かなりのHPを持って行かれたことを確認する。

小ヴィータの一連の動きを見て、ヴィータは素直に賞賛の声を上げた。

「驚いたぞ、まさかこんな戦術を考えて来るなんてな」

ヴィータがそう言うのと小ヴィータは「ふふん」と得意げな顔をした。

「あつたりまえだろ。これはお兄さんが考えてくれたとつくべつな作戦なんだからなー！」

「……………へっ？」

思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。ヴィータは何もない空に目を向ける。そしてその視線の先でカイズが土下座をして謝っている姿を見た気がした。

「ああ、そうか。八神堂のために何かをしたいつて気持ちにはあたしも、カイズも同じ。そしてその方法も全く同じって事か」流石あたしの旦那様だよ」

小ヴィータとのステータス差は歴然。さらに相手には戦術が授けられている。これでは教えるどころか完敗の可能性も見えてきてしまった。だがそれでは駄目だ。ここでボロ負けしてしまっては、彼女に大切なことを教えられない。

ヴィータはグラーファイゼンを構え直す。そして先ほどまで心のどこかで持ち合わせていた慢心を完全に捨て去る。そしてこの場か

ら全力で離脱していくのだった。

確かな違い



慢心はしていない。だが小ヴィータの戦術に翻弄され、ヴィータは消耗し続けていた。

「ぐっ、オラアアアアツツ！」

渾身の一撃が小ヴィータを捉える。だが実像のないそれにヴィータは大きく空振りをしてしまう。

「ティアナのフェイクシルエット！　っと、あぶねえ!!」

デコイの消失に反応して二発の魔弾が向かってくる。一発は何とか避ける。だがもう一発はデバイスで受け止めるほかなかった。

「ぐっ、つつうー！」

爆発の余波とこれまでのダメージで、ヴィータもグラーフアイゼンも限界ギリギリである。ヴィータは魔弾を弾きその場から駆け出し、廃ビルの中に飛び込んでいった。

「ハア、ハア、ハア、いったいあの小娘は何枚カードを所持してるんだよ。次の手が全く見えてこねえ」

それでもギリギリで退けられてきたのは、それらがヴィータの知っている魔法と同じ動作をしていたからだ。もしこの世界オリジナルのものが来てしまえば、致命傷は避けられないだろう。

「このままじゃじり貧だよな。……だがキツイのはあたしだけじゃねえはずだ」

HPだけを見れば断然ヴィータのほうが不利だろう。だがMPはどうだろうか。これだけのスキルを連発しているのだ。ステータスの差はあれど、かなりの消耗をしているはずだ。

大きく深呼吸をして息を整える。体中ボロボロだが脚は問題ない。ヴィータは落ち着いて所持しているスキルカードを取り出した。

「あたしの手札で勝負できるのはやっぱりラケーテンハンマーだよな。ほかのカードは決定打にかけるし。……ああ、こんなことなら少しくらい課金しておくべきだったかな」

だがないものはない。取りこぼした物を数えて今を見つめられな

いのは愚か者のすることだ。ヴィータはじつとカードを見ると、見慣れないカードを抜き取った。

「これは。……ああ、さっきアインスに貰ったカードか」

他のカードと混ぜては咄嗟の時に反応が遅れる。ヴィータはそれを別の場所に仕舞うと残りのカードをチェックした。

◆
それからほんの数分後。ヴィータは小ヴィータのデコイを追跡していた。そしてデコイが廃ビルを抜け、視界の開けた場所にでた瞬間攻撃をしかけた。

——ブウン！

当然ながら攻撃はかすめられていく。そしてデコイの消失と同時に魔弾が二発ヴィータに襲いかかってきた。

「こゝこゝだ!!」

グラーフアイゼンにラケーテンハンマーのスキルを読み込ませる。デバイスは平らな表面を突起に変え、その後ろには強大なブースターを展開する。赤い火花をあげブースターが唸りを上げる。ヴィータは魔弾をその身に受けながらも弾道の先を見据えた。

「——見えたー」

廃ビルの屋上でデバイスを構え、遠隔操作いる小ヴィータの姿が目に入る。ブースターを全開放すると、急激なGに体がバラバラになりそうになる。だがそれだけの価値は確かにあった。

急速に近づくヴィータに今気づいたのだろう。ほんの僅かな隙。だが小ヴィータに近づくには、その僅かな隙で十分だった。

デバイスを構える隙すら与えない。ラケーテンハンマーの勢いのままに小ヴィータの体をぶち抜いていった。

「これであたしの——なにっ!?!」

クリインヒットしたそれに手応えがない。それはまるで先ほどまでのデコイそのものだった。

「しまっ、ぐっっ!!」

気づいたときには後の祭りだ。後方の安全圏にいたそれはフェイクシルエツトだった。砕かれたシルエツトの残滓はヴィータの体に

まどわりつく。そしてその姿を鎖に変えると、ヴィータの両手両足を縛りあげていった。

「あーはっはっはっは、どうだどうだー！　これがお兄さんの戦術プラスさっきのお兄さんの試合要素を取り込んだバインド戦法だー！」

高笑いをあげながら、小ヴィータが雲の切れ間からゆっくり降りてくる。手足を縛られたヴィータはその姿に目を向けることしか出来なかった。小ヴィータは勝ち誇った顔でにやにやとヴィータを眺める。

「ステータスに差があったからって言い訳するなよな。あたしが何度も何度もガチで戦うって言ったのに、そうさせなかったのはお前だからな、この無駄乳女ー！」

「言い訳なんてする気はねえよ。ハンデなしを望んだのは私だ。それにそれがなくなったらって私は何度もお前の戦術にハメられた。……その事實は覆せないからな」

「ふん、往生際だけはいいみたいだな。じゃあ負けを認めてもらったところで、そろそろ止めだ」

小ヴィータは一枚のカードを取り出す。それは実在枚数も所有者も少ない激レアカード。小ヴィータの最大攻撃力『ギガントシユラーク』のカードだった。小ヴィータがカードをスラツシユすると、グラーファイゼンはその鉄槌部を何倍、何十倍にも巨大化させていった。廃ビルを覆うほどのそれを天に構えると小ヴィータは口を開く。「さあこれで終わりだ無駄乳女。最後に言い残したことはあるか」

これは油断？　いや余裕であろう。小ヴィータはヴィータの体力とバインド解除までの時間を計算しきっている。どのようなルートでもちゃんと詰みが見えているのだろう。

そこまで理解するとヴィータは大きなため息をつく。

「正直お前は私の予想の何倍も上をいってたよ。初めは猪突猛進だけが取り柄の小娘かと思ってたけど、子供の成長は早いな。たった三ヶ月でこんなにも見違えちゃった」

「それはお兄さんが手取り足取り教えてくれたからだ。そしてその成果を勝利としてあたしはお兄さんに掲げる」

そんな小ヴィータをヴィータは鼻で笑う。

「……口を開けばお兄さん、お兄さん。それがお前の駄目なところだ」
「……………はあ？」

疑問の声を上げながらも小ヴィータの目はすわっていた。きつとギガントシユラクを構えていなければ、今すぐにもつかみかかって来ただろう。ヴィータは挑発するわけではない。ただ淡々とヴィータは言葉を述べた。

「確かにお前はカイズの戦法を上手く再現できてる。だがそれだけだ。自身の上手くいった姿を見せたいだけで、勝ちに貪欲じゃない」
「な、なに言ってるんだよ！ 現にテメエはあたしの戦術を引つかかりまくってるじゃねえかよ！」

「ああ、そうだ。だけどな。等身大の魔弾を囮にした初手の一撃、あれが決まった時点で本当はお前の勝ちだったんだよ」

「なっ、何を！」

小ヴィータは口では何だと言葉にする。だが思い当たることがあるのか、その口調はどこか弱々しさが伺えた。

「お前がさつき言ったように、この戦いはハンデなしの試合だ。当然ブレイブデュエル歴が長いお前の方がステータスはずっと高い」

ここからが本題だ。ヴィータは淡々としてた口調を徐々に強めていく。

「だからこそあの初手の一撃の後、ステータスにモノをいわして攻め続ければよかったんだ。それで私は何の成す術なく負けていたんだからな」

先ほどのカイズの試合を見ているならなおのことだ。

だがそれをしなかったのは、新しい戦術を試したい気持ち。そして何よりカイズの教えを本人に見て貰い、認められ、忘れないで欲しかったのだろう。

「お前の気持ちはわかるぞ。だけどよ、そんな戦い方じゃあいつは苦笑いしかしてくれねえぞ」

「うっ……………うるせええええええええええっ!!」

ヴィータの言葉に感情が爆発する。見た目こそ普段のヴィータと

同じだが、中身はまごうことなき小学三年生だ。その正論に怒りで応えることしかできなかつた。

「テメエがどれだけ言おうが両手両足縛られて何が出来る！ カードも取り出せねえテメエに勝ち目はねえだろう！ これで終わりだあああああつ！」

ヴィータを丸ごと押しつぶすようにギガントシユラークが振り下ろされる。小ヴィータの言うように、両手両足を縛られたこの状態では何も行動に起こすことが出来ない。だがそれは本来のヴィータならの話だ。ヴィータはニツと笑みを浮かべる。

「なあ小娘。バリアジャケットもデバイスも所持カードも私たちはほぼ同系統だ。だけど私たちには決定的に違うところがある。……なんだか分かるか？」

「はあ？ 知らねえよ！」

「今もお前の視界には見えてるはずだぞ」

そう言うのとヴィータは両手両足を縛られたまま、何度も全身を上下に動かしていく。そのたびにヴィータは胸は大きく揺れていった。

「はあ、何だよ？ 何もかもわかんねえよ！」

「そうか、そうか。答えはな。——胸だよ！」

ヴィータの巨乳が一段と大きく揺れると、その空いた胸元から一枚のカードがこぼれ落ちていく。それは先ほど別の場所にと仕舞っておいた、アインスから受け取ったカードだ。

ヴィータは手首から上を器用に動かすと、グラーフアイゼンにそのカードを読み込ませていった。

「カードリリース バリアジャケットページ」

カードを読み込みヴィータの命令が下った瞬間、彼女の周りで大きな爆発が起きる。それが砂塵を巻き上げると小ヴィータは一瞬目を覆いそうになる。だがその手は目元に行かず、しっかりとデバイスを握り込んでいた。

「(こけおどしだ。この状態で逃げきれぬ速度は相手にはねえ)」

例えラケーテンハンマーを使おうとも、ブースターの展開前にぶち抜くことが出来る。小ヴィータは考えるよりも早く、グラーフアイゼ

ンを振り抜いていった。圧倒的圧力でビルがひび割れてく。だがそれよりも速く、赤い閃光が走り抜けていく。

「——ソニックドライブ！」

目にも留まらぬとはまさにこのことだ。ギガントシユラクに全リソースを回した彼女に防御壁はない。小ヴィータは腹部に神速の一撃を受けると、全てのHPを根こそぎ奪われていった。

倒れる小ヴィータをヴィータは優しく抱きしめていく。そんなヴィータの姿は普段のものとは違い、肌の露出が多い薄手のバリアジャケットだった。肌に張り付くような素材は、ヴィータの豊満な胸や艶めかしいヒップラインをさらに強調しているかのようにも思えてしまう。

極めつけはその形だ。競泳水着のようなそれに前垂れがついたそれは全男性にとって刺激があまりにも強すぎた。

「真ソニックフォーム。視察前のなのはの言葉を思い出してやってみたけど……やっぱりあたしには速すぎるな」

小ヴィータを抱き抱えたままゆっくりと地面へと降りる。そして気を失っている小ヴィータに優しく声をかけた。

「バインドで捕まえた時点でさっさとラケーテンハンマーで決めればよかつたんだよ。大技で決めようとしなければ、防御にだって魔力を割けた。この試合、どのタイミングでもあたしの負けは濃厚だったんだよ」

だがこの敗北できっと彼女は何倍にも大きく成長するだろう。時空が違い、境遇も違い、年齢が違っても、やはり彼女はヴィータだ。だからこそヴィータには誰よりもそう感じ確信することができた。

『WINNER ヴィーラ!!』

勝利を告げる電子音がある。ヴィータはぐつとガッツポーズを取る。そして観客席からは今日一番の大歓声があがっていくのだった。

ヴィータちゃんは男友達が少ない海鳴市視察編

最終話 たった一つの小さな願い

たとえば どこにいたとしても



昨日の大盛況がまるで嘘のようだ。八神堂のブレイブデュエル施設は本日貸し切りとなっており、そこには様々な精密機械が運び込まれていた。

機械のセッティングについて話し合っているはやてとグランツに、ヴィータはぺこりと頭を下げた。

「今日は本当にありがとうございます。店もそうですし、機器の運搬も何から何まで」

「気にせんといてくださいヴィーラさん。一日くらい休んでも八神堂の人気は落ちたりしません。それに昨日の二人の試合、あ後に新規プレイヤーさんがものすっごく増えたんですよ。感謝することはあれど、不満に思う事なんてないです」

はやてがそう言う隣と隣のグランツも言葉をかけてくる。

「こちらも全く気にしないでくれ。ブレイブデュエルなどの精密機械搬入は慣れているしね。……それに未来の次は平行世界か。ふっふっ、ブレイブデュエルの可能性は本当に果てしないよ」

グランツはグランツで今回の試みを本当に楽しみにしているのだろう。迷惑がっている雰囲気は全く感じられなかった。

「おっと、スカリエッティ君がまたスタッフを困らせているみたいだ。あの時のように、変な機能を付け足されてもやっかいだ。私はあつちに向かうとするよ」

シユタつと手を挙げると、グランツはスカリエッティの方へと駆け足で向かう。残されたヴィータとはやては、「あはは」と笑みを浮かべ合った。

「ヴィーラさんがこの街に来て三ヶ月とちよつと、何だかあつという間の出来事に感じますー」

「私もそう思います。はやてさんには本当にお世話になりました。あつ、そうだこれ」

そう言う肩に掛けていた鞆から一冊の本を取り出す。

「このレシピ本大変参考になりました。何とか妻の面目躍如です」

ありがとうございますと首を横に振ると、それを押し返した。しかしはやては首を横に振ると、それを押し返した。

「その本はヴィーラさんが持って行ってください。……まあこちらの物を持ち込める可能性は半々くらいらしいですけど」

「えっ、ですけど」

「まだヴィーラさんには上級編を伝えきれていませんからね。だから、その本だけは持って帰ってください。ヴィーラさんが。……ヴィーラがここでも私たち八神家の一員だったって証として」

「——はやて!!」

その名前に思わずさん付けが抜けてしまう。はやては周りをキョロキョロ見る。そして鼻に人差し指を当て「しいー」と言った。

「何の確証もなかったけどな。ざーっと会ってるうちに何となくそう思ったんや。他の子達も何となく気づいていたとは思うけどな。まあこつちのヴィータだけはチンプンカンプンだったと思うけどな」

「……はやて、あたし」

ヴィータが声を上げようとする。だがその前にはやてがヴィータを抱きしめた。

「大丈夫や。未来からヴィイヴィオが来たときもそうやったけど、話せることと話せないことがある。ヴィータはヴィータの考えがあるのは分かってたし、そのことをこれ以上聞こうとも思ったらん」

そこで一度言葉を止める。はやては慈しむような眼差しを向け言葉が続ける。

「ただどんな世界に来てても、私八神はやてはヴィータと家族である。それを伝えたかっただけなんや。……なっ、『ヴィーラ』さん」

だからこの話はこれでお終い。ヴィータは軽く目をこすると、料理本をギョツと握りしめた。

「ありがとうございます。おすすめ料理、絶対にマスターしてみせませね『はやてさん』」

「はいっ、『ヴィーラ』さん」

『八神さーん、この機械の置き場所なんですがー』

スタッフの一人に声をかけられると、はやてはパチリとウインクスる。

「それじゃあ私はそろそろ行きますね。二人のことは絶対に元の世界に戻しますから、どうか安心してください」

はやてはトンと自分の胸を叩くと奥へと行ってしまふ。その小さくも頼もしい背中を見届けながら、ヴィータは料理本を鞆の中に閉まっけていくのだった。

◇

ヴィータとはやてが話していた三十分前。人目に付きづらい公園の練習スペースでは、平日の朝早くから木刀のぶつかり合う音が鳴り響いていた。

「——フッ！」

まるで演武でも見ているかのように、美しい軌道の剣戟がカイズに迫る。その技は薙旋（なぎつむじ）。恭也が始めて見せる御神の技の一つである。回転を加えることでの四連撃はまさに必殺と言えるであろう。

「ぐっー！」

だがその殺気をカイズは見逃さなかった。反射に身を任せ、不格好に倒れながらも見事に回避して見せたのだ。

——ピピピピピピッ！

その瞬間、時間を知らせるアラームが鳴り響く。恭也は手を差し出すと、倒れているカイズはそれを握りしめた。

「カイズの反射と思考、かなり形になってきたな」

「いやいや、まだまだ。あの体勢じゃそのまま追い打ちをかけられてやられてたしな」

「謙遜はしないでくれ。カイズのことだ、アラームの時間はちゃんと

把握してただろ」

「そ、それはその。まあ……………」

もうすぐ模擬戦が終わる。そして終わるからこそ、カイズは最後の攻撃を避けられた。継続して戦うことを考えたら、あの避けかたは出来ない。逆にあの避けかたでなければ、初見ではきつと直撃していただろう。お互いがお互い、相手の行動を読んだ行動に自然と笑みがこぼれた。

二人は汗でびっしょりの上着を着替える。そんな中、恭也はため息混じりに声を上げた。

「ここまで一緒にやってきてカイズの完成系を見られないのが少し口惜しいよ」

「それは正直俺も思うよ。……本当はこんな戦い方にならないよう立ち回るのが一番いいんだけどな。でも恭也のおかげで絶対に逃げられない戦いへの覚悟を決めることができたよ」

カイズはそう言ってミネラルウォーターを渡す。このやりとりもこれで最後だと思うと、涙がこみ上げてくる。恭也はそれを一気に半分飲み干し真剣な眼差しを向けた。

「反射と思考による戦い。この注意点はちゃんと覚えているな？」

「もちろん。使うときは逃げられない、または戦わなければいけない時。出来るだけ相手の手札を看破してから使う。それと今の俺では一対一が絶対条件だったよな」

「ああ、そうだ。……そしてこれが最後のアドバイスだ」

恭也がそう口にした瞬間、首もとにひやりとした何かを感じる。カイズは恐る恐る目を向けると、そこには飛針が突き立てられていた。

「えっ、あっ、いつの間に?！」

「ブレイブデュエルはあくまで戦い合うことが前提だ。だからあえて口にしなかった。……カイズの反射にはもう一つ大きな弱点がある」

恭也は飛針を手首にスット納め話を続ける。

「カイズは誰よりも殺気に敏感だ。だが俺のような暗殺術を生業としている連中は、殺意を隠し通す術に長けている。だから今のようにな

意をつかれて反応できないこともあるんだ」

「そ、その場合どうしたらいいんだ？」

「鍛え続けるしかないさ。あくまで殺気を隠すことが得意なだけで、殺気が完全にゼロには出来ない。……反射による回避の対象を、一人から二人、二人から三人。近距離から中距離、そして遠距離。さらに隠された殺気すら敏感に感じ取ること。今回俺が伝えられたのは、カイズの可能性のあくまで入り口でしかないってことだよ」

「……………いやー、道は長いなー」

口ではそう言うがカイズの気持ちは晴れやかだった。道が長いと分かっているということは、その道を歩き進んで行けるということだ。果てしはないがたどり着けないわけではない。

カイズは上着で汗を拭うとスツと手を差し出した。

「もう何度目になるかわからないけどさ。……本当にここまでありがたいかな恭也。俺、絶対恭也のこと忘れないからな」

「俺もだよ。お互い精進していこうカイズ」

「ああつー」

たった三ヶ月。だがこの世界、この場所で過ごし学んだことは生涯決して忘れたりほしくない。そう誓いをたてるように二人は固く、固く、握手を交わしていくのだった。



そしてその時がやってきた。ブレイブデュエル施設の中央には二つの特設筐体が用意されている。カイズとヴィータはそれぞれの前に立つ。そしてその前には見送りに二人の人物が来ていた。アインスはヴィータに申し訳なさそうに声をかける。

「本当は全員でお見送り出来ればよかったのだがな」

「いやいや、今日は平日だし夜間学校に通ってるアインスしかいねえのは仕方ねえよ」

その言葉に恭也はグクリと肩を浮かせる。カイズは仮病で学校を休んでくれた戦友に恍惚の笑みを浮かべる。アインスは少し苦笑いをしながら、一枚のカードを差し出した。

「これは二人と八神堂、そしてたくさんのギャラリーを映した写真を

もとにした特別仕様のカードだ。ここで過ごした三ヶ月、どうかこれからもずつと忘れないでほしい」

「もっちゃんだよ。私からはこれだ。アインズと違ってかなりアナログなものだけど、全員分あるんだ」

ヴィータが渡したのは『学行成就』や『商売繁盛』などの様々な種類のお守りだ。

「一応誰のかわかるように、色も揃えてあるんだ。……建築士の夢、絶対叶えろよなアインズ」

「……ああ、ありがとうヴィーラ」

二人は互いのプレゼントを交換する。次は自分たちの番だと恭也は手に持っている袋を渡す。受け取った瞬間、ズシンとした重みが両腕に伝わってきた。

「俺からはカイズ用に調整した飛針と鋼糸だ。これがそちらの世界でどう役に立つかはわからないが受け取ってほしい」。

「ありがとうな！ そしたら俺からはこれだ」

恭也とは逆にカイズはポケットから軽々としたカードを取り出す。それはカイズが使っていたブレイブデュエルのカードだった。

「小太刀二刀流のカードって強さはともかく、結構希少武器らしくてさ。……忍さんとブレイブデュエルをするときに役立ててほしいんだ」

「ああ、ありがとう。これで十全に戦えそうだ」

お互いに実用性重視。そんなプレゼントを渡しあって二人はクスクスと笑みを浮かべた。

カードの譲渡はプレイヤー間でよく行われているようなので、安心して全てのカードを恭也に明け渡す。四人は各々気持ちを伝え終える。それを見計らってフロア全体にはやての声が響いた。

『それじゃあそろそろ本番や。二人が筐体に入ったら例のシードを起動させてください。特設転送用プライベートエリアに飛ばします。確認次第、あちら側の世界と同時に転送プログラムを起動させます』

はやての声に促され、二人は筐体の中に入る。

「それじゃあ行くなアインズ」

「恭也、本当にありがとうな」

扉を閉める直前、目の前の人物の顔を見た。その表情には悲しみや辛さは見られず、真つ直ぐで暖かい慈愛の笑みに満たされていた。

涙はここに来るまで全て流し尽くした。ヴィータとカイズは言葉ではなく、その表情に笑みで答えていくのだった。

『どうか二人ともよい旅を』

はやての声が聞こえると筐体の扉が完全に閉まる。ヴィータはデッキケースからシードのカードを取り出した。

「これが最後のブレイブデュエルだ。カードスラッシュ！ カードリリース!!」

そのカードが発動すると共に視界は深い闇に埋め尽くされていくのだった。

たった一つの小さな願い（海鳴市視察編 完）

「うっ、うん……？」

意識を取り戻すと、ヴィータは周りを見る。だがそこには何も無い。底知れぬ闇が支配する黒い世界だった。

「カイズ？ カイズ！」

大切な人の名を叫ぶが、その声に応える者はいない。これはいったいどういうことだろうか。ヴィータはその場から動き出すと、その歩幅に違和感を覚えた。

「これは？ 大人化が解けてる？」

いつも足下を覆い隠していた胸がない。髪の毛を触ってみると懐かしの二つ分かれの三つ編みになっている。鏡こそないが自身が本来の姿に戻っていることが理解できた。

「ここは……転移が失敗したのか」

『そうではありません。時空を越えるほんの僅かな時間、私が語りかけているだけです』

「……誰だ!？」

声のしたほうに向き直ると、そこには赤い目の銀髪の少女がいた。

「アインス……？ いや違う、背格好はあたしと同じくらいだから、ツヴァイとも違うな」

『私に正式な名前はありません。私は海鳴市で生まれたロストロギア欠片、貴方たちの言うシードという存在です』

自らをシードと呼称した少女は、無表情のまま深々と頭を下げた。

『今回の事は全て私が原因です。二人には本当にご迷惑をおかけしました』

「迷惑をかけたって、順を追って説明してくれねえか」

『確かにそうですね。ですが、私がこうして話しかけられるのは転移が終了するほんの短い間です。なので、手短かに説明させていただきま
す』

シードは顔を上げると、その無表情を変えることなく淡々と言葉を

続ける。

『通常ロストロギアとは発展しすぎた技術や魔術が行き着いた故に崩壊した世界、その古代遺産のことを指します。ですが私の生まれは少し違います』

「そうだよな。海鳴市は、というか地球はまだまだ発展途上の世界だし」

『そうです。ですがそんな海鳴市ではいくつもの大きな事件が起きました。ジュエルシードを巡るプレシア・テスタロッサ事件。古代ベルカの遺産が起こした闇の書事件。その他にもいくつもの事件が海鳴市で起こったことを貴方は知っているはずですよ』

「……ああ、そうだな。あの街では本当にいろんなことがあったからな」

『ロストロギアを巡る戦いはいつも苛烈でした。そして時にはロストロギアを奪い合いそれを傷つけること、またロストロギアその物と戦うこともあったはずですよ。その時傷つきこぼれ落ちた小さいながらも力強い欠片、その集合体が私という存在ですよ』

シードは自身の顔を指差す。

『その中でも闇の書が一番強い意志もつ欠片でした。そのため私の姿は貴方たちの知るそれと近い姿になっています』

突然そう言われてもなかなか納得には至らない。だがその顔は嘘偽りを言っているようには思えなかった。ヴィータは両肘を抱えながら話を続ける。

「……話はわかった。だけどどうしてあたし達をあの世界に閉じこめたんだ。お前の狙いはいったい何なんだ」

その答え次第では容赦はしない。ヴィータはシードを牽制するように睨みつけた。シードは表情を動かすことはない。だがその声はどこか悲しげに聞こえてきたのは果たして気のせいだろうか。

『私の願いはただ一つ。……全ての人に幸せを与えることです』

「幸せを与える……?」

『この海鳴市では多くの事件が起きました。それは貴方が知っているもの、そして平行世界で起きた『貴方でない貴方』が体験したものの、数

多く存在します。ですがその全ての事件はただ一つの純粋な想い。幸せになりたいという願いから起こったものばかりです。幸せになりたい。幸せにしたい。そして全てを救い出したい。ロストロギアの欠片、そして海鳴市で戦った魔導師の無垢なる想いが重なり私は生まれました。……全ての人を幸せにするために』

話しながらもシードは瞬き一つせず無表情のままだった。

『私は今はまだ本当に小さな存在です。私が人に干渉するためには、まだ何千、何万という時が必要です』

『だけどあたしは現にあの世界に飛ばされた。それはどうしてだ？』

『理由はいろいろ考えられます。私を人格する闇の書の一部だったことが原因か。それとも闇の書の一部でありながらも、他のロストロギアに浸食されたこと。私のように混ぜ物のロストロギアになったことにより、知らず知らず惹かれあつてしまったのか』

『混ぜ物のロストロギア。……デスイーターか！』

その話を聞いてヴィータはようやく合点がいく。ヴィータは海鳴市に来てからいつも以上に幸福感を覚えていた。それはきつと知らず知らずのうちにシードと惹かれあつた結果なのだろう。

ヴィータの考えをシードも理解しているのだろう。肯定するように小さく頷いた。

『それに加え貴方だけでなくあの男の人が一緒に来れたのは、彼が貴方の精神世界に入ることが出来るバリアジャケットを着ていたからかもしれません。いえ、本当のところは私にもわかりません。それを調べる術を私は持っていませんから』

シードはその無表情をほんの少しだけ崩す。そして目から大粒の涙を流していった。

『貴方を巻き込んだことに私の意志は介入していません。ですがそうであつたとしても、貴方を巻き込んでしまい、そして貴方を悲しませてしまい。本当に申し訳ありませんでした』

その涙は止まることなく、嗚咽を交えながらシードは語り続ける。

『私は全ての人を幸せにするという想いから生まれました。ですがその幸せは私という存在の尺度でしか測ることが出来ない。それを貴

方の件で思い知ることが出来ました。貴方にとって一番幸せな世界。それは誰もが傷つかず、失うことのない、全てが救われた世界だと想っていました。しかし貴方にとってそれは違いました。貴方がある世界のアインスと出会ったときの顔と叫びを見て、私は自身という存在を本当に心の奥底から嫌悪しました』

その言葉、後悔、嘆きは止まることはない。シードはその場で崩れ落ち地面にひびきを付けた。

『人の幸せの在処はその人の中にしか存在しない。それを私は理解していませんでした。私は人を幸せにするために生まれたのに、私は貴方に本当に辛い思いを……』

人を幸せにするために生まれた願望機はその存在矛盾に気づいてしまったのだろう。

確かに初めてヴィータがあの世界に来たとき、彼女は深く傷ついた。こんな物を見たくなかった。こんな世界を知りたくなかった。もっと自分が頑張れば、もっと自分がしっかりしていれば。そんなことばかり考えていた。

だが今は違う。あのかげかえのない三ヶ月でヴィータはようやく知ることができた。

ヴィータもまたその場でひびきをつく。そしてシードを優しく抱きしめてあげた。

「あたしは幸せだったぞ。アインスが笑顔で暮らしている姿が見れて、夢に向かって頑張ってる姿が見れて、本当に、本当に」

『……ヴィータ』

「でもどれだけ幸せでもあれは現実なだけのただの夢なんだ。どれだけ満たされてもあそこはあたしの居場所じゃない。もしあそこを居場所だとして認めちまったら、あたしはこの手に残ってる大切な物を取りこぼしちまうことになる」

悲しい別れは存在した。だがその覚悟により救われた者は確かに存在する。そんな者達の決意を引き継ぐために、それだけは絶対に見誤ってはいけない。

ヴィータはまるで子供をあやすようにシードの頭をポンポンと撫

でてあげる。シードはまだ少し涙を流しながら、ヴィータの顔をのぞき込んだ。

『私は誰も不幸にしたくない。だけどこの力はいずれ大きな間違いを起す。だから……』

シードはそう言葉にし始めると同時に、体の一部から淡く小さな光の粒子が零れる。それはまるで体が崩壊していくかのようであった。『だからどうか私を貴方の中で眠らせてください。願望機の欠片ではない今の私には大きなことは出来ません。ですが、私は貴方の中にとけ込み貴方の感情を感じ取り、そして自分勝手ではない。小さいながらも貴方の幸せを叶える力になりたい。それが貴方に迷惑をかけた罪滅ぼし。そして幸せの願望器である私の最初で最後の願いです』そう話しながらもシードの体はどんどんと崩れ落ちていく。それは彼女の限界か、もしくは夢から覚める時間が迫っているのだろうか。

だがそんなことは関係ない。ヴィータは心そのままにシードの体を深く、強く、抱きしめていった。

「それがお前の願いなら、あたしはそれを受け止めるよ。だから今は眠っててくれ。それでいつか、あたしの幸せを叶えてくれよな」

『——ありがとうヴィータ』

散り散りになった光は吸い込まれるようにヴィータの元に集まっていく。ヴィータは体の中に確かな暖かさを覚える。そして深く重い闇は徐々にその姿を淡く白い光へと変えていった。

それは転送が終わるからだろうか。いや違う。きつとその光は今彼女の気持ちそのものだろう。確証などどこにもない。

だがきつとそうである。そうであってほしい。ヴィータはそう想い、その光を受け入れていくのだった。



——ヴィータ、ヴィータ!!

——ヴィータちゃん!!

ずっと、ずっと聞いていたはずの声なのに、本当に懐かしい声色な気がした。

ヴィータはゆっくりと目を開けると二人の女性の姿が映る。はやてとなのはだ。その姿はこの三ヶ月ヴィータが見ていた者とは違う。共に過ごし見届けた大人の姿の彼女たちだった。

どうやらはやてのベッドで寝かされていたようだ。ヴィータは目をこすると二人を見つめる。

「大丈夫ヴィータちゃん！」

「よかった、ほんまによかったヴィータ」

涙ながらに二人は身を寄せてくる。また心配をかけてしまった。ヴィータは申し訳なく思う。と同時に、隣にいたカイズも目を覚ましたようだ。

「ん、あれ、転送上手く行ったみたいですね」

「……ああ、そうだな」

そう答えるカイズはシードとのやり取りを知らないのだろう。二人はベッドから起きあがる。と同時にお腹が鳴るのがわかった。

点滴で栄養は補給されていたのだろう。だが固形物を食べなければお腹は満たされないものだ。はやてとなのははそんな二人を見て、勢いよく立ち上がる。

「とにかくまずはご飯やな！ 私に任しときヴィータ！」

「ここは私に任せてよはやてちゃん！ 監督兼リーダーでもうへ口へ口でしょう」

「そんなこと言ったらなのはちゃんやってあっちこっち飛び回って限界ギリギリやろー！」

よく見ると二人の目元にはくつきりと大きな隈が出来ている。きつと自分たちのために昼夜問わず駆けまわってくれたのだろう。

今にも倒れそうな二人を見て、自分たちのために昼夜問わず動き続けてくれたがわかる。ヴィータはそんな二人の間に割って入った。

「そしたら二人とも休んでくれよ。とっておきの料理を用意するからよ」

「で、でもヴィータちゃん目覚めたばかりだし」

「大丈夫、大丈夫。三日間寝てたからか、頭はスッキリで、体調もすこぶる快調だからよ。むしろ鈍ってた体を少し動かしたいくらいな

んだ」

ヴィータはいつの間に手に持っていたかわからない。そうであってもなくすはずないと分かっていた『和食大全』の本を掲げる。

「待ってるよー。最高に美味しい和食を用意するからなー」

事件の話は皆が一息入れてからでいいだろう。ヴィータは腕まくりをすると満面の笑みで台所へと向かっていくのだった。

ポーナスステージ 力の代償と最後の一日（前編）

◆ ヴィータとカイズが巻き込まれた『シード事故』

真実としてシードはヴィータの体に取り込まれている。だがどれだけ精密検査を重ねてもヴィータの体に異常がないこと。また事の真相を知るものがヴィータしかおらず、彼女の報告によりシードは自己矛盾を起こし消滅したということで決着がついている。

シードは本当に大切な小さな願いを叶えてくれると言っていた。その言葉通り、あちらの世界の物を無事持ち運ぶことができた。きつと彼女はその願いを叶えそのままとけ込むように消えてしまったのだろう。

そんな二人の本来の海鳴市視察期間はもう終わっている。だが寝込んでいた期間の分しつかり視察をしたい。それがヴィータとカイズの願いだった。

二人はロストログリア事故を未然に防いだことも評価され視察の再開を許された。その間にヴィータとカイズは、はやとなのはを加えて様々な場所へと向かった。石田先生との会食、翠屋に行きなのはの里帰り、その他にも行ける限りいろんな場所のだ。

二人が目覚めてから今日で三日目。明日には八神家からミッドチルダへと帰る予定になっている。なのはとはやては上への報告も兼ねて先に戻っている。そしてすでに帰りの身支度は完璧に終わっていた。

あとは寝て明日を迎えるだけ。だけなのだがヴィータは両腕を組み「うーうー」と唸り声を上げていた。

「……カイズの奴、ずっと怒ってるよな」

いや怒っていると言うよりは、拗ねているという方が正しいかもしれない。この三日間、傍目から見れば彼は終始笑顔で機嫌が良さそうに見えただろう。

だがヴィータにははつきりわかってしまった。

それは結婚して誰よりも彼のことを知っていると言うことはもち

ろんあるだろう。しかしそうなってしまった原因に心当たりがあるのだ。

「勝手に真ソニックになったのがまずかったよなー」

そう言葉にするとベッドに大の字で倒れる。このベッドとも今日でお別れかと思うと少し寂しいが、今はそれどころではなかった。

海鳴市に視察に来る前に、新しいバリアジャケットの話があがった。その時はミニスカジャケット姿をカイズに見られ、いろいろとあった。

結局カイズの新妻の肌をあまり他人に見せたくないと言う願いをくみ、バリアジャケットの話はいったん保留となっていた。だがお別れ会での小ヴィータとの戦い。そこでヴィータは一方的にその約束を破ってしまったのだ。

スカートではないので下着などを見せたわけではない。しかしある意味それ以上に性的な姿を大観衆の前にさらしてしまったのだ。

ヴィータは「はああく〜」と小さくも長いため息を漏らす。

「いやあの時はしかたねえよな。たまたまアインスがカードを手に入れてくれて、それしか勝ち筋がなかった訳だし。それにあの戦いの姿はあくまでVRが作り出した姿、さらに大人バージョン自体魔法で作りに出した姿だしな〜」

そしてそれがわかっていいるからこそ、カイズは何も言ってこないのだろう。そんな彼は今、ヴィータと交代でお風呂に入っている。あとには本当に眠りにつくだけでこの海鳴市ともお別れだ。

ヴィータは寝るために大人化の魔法を解いた自身の体を見る。そこにはこの数ヶ月間ずっと視界にあつたたわわな胸も、くびれた腰も、張りのあるお尻も存在しない。嘘偽りのない子供体型の自分の姿があつた。真逆の姿、だがこれが本当の自分の姿だ。

「……………よしっ！」

ヴィータはベッドから飛び起きると机に置いておいたそれに手を伸ばした。



八神家の浴室。カイズは壁に頭の側面を当て自己嫌悪に陥っていた。

「はああああ、絶対バレてるよな〜。うまく隠せてると思ってただけどな〜」

なのはとはやと一緒に行動している時は隠し通せている自信があった。しかしいざヴィータと二人きりになると、彼女が時々申し訳なさそうな顔をしていることにすぐ気づいた。

自分のつまらない独占欲がそうさせてしまっているのだろう。カイズはヴィータと小ヴィータとの戦いを思い出すと、さらに深いため息をつく。

「まあぶっちゃけ俺が悪いんだよな。ヴィータさんはヴィータさんで八神堂のためにヴィータちゃんを鍛えようとした。それを俺が先回りしていろいろと戦術を授けちゃったんだからな」

そのせいでヴィータは思いも寄らぬ劣勢を強いられた。そしてその劣性を覆すには、イレギュラーな力に頼るしかなかったのだ。その時のヴィータの姿、さらにボンキュボンと突き出たボディーラインを思い出すと、頭の中がモヤモヤする。

「テストロッサさんには悪いけど、あの格好は正直目に毒だよな。あの戦闘で目覚めた人もきつと少なくないんだろな」

そしてその目覚めた人たちは何度もヴィータのことを思い出すのだろう。そう思うと頭の中のもやもやがさらに色濃くなっていく。カイズは両目をつぶり後頭部を搔いた。

「はあ〜、本当に俺は器の小さな男だな。いろんなことがあったけど、この海鳴市の視察は本当に楽しいことばかりだった。その最後にこんな感情を持ち込んでしまうなんて。……………あー、駄目だ駄目だ！」

カイズは冷水のシャワーで頭を冷やしていく。そして心のぐちゃぐちゃを無理矢理抑え込んでいった。

「とにかくお風呂から出たらヴィータさんに謝ろう。そして明日は明るい気持ちで海鳴市に別れを告げるんだ！」

冷水でシャツキリするとお風呂から出る。そして寝巻きに着替え、

彼女の待ちはやての部屋に向かっていた。